永昌寺の谷遺跡　高倉遺跡

広域営農団地農道整備事業（安能地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成20（2008）年３月

島根県松江県土整備事務所

安 来 市 教 育 委 員 会

永昌寺の谷遺跡　Ⅰ区遠景（南西から）

図版２

永昌寺の谷遺跡　Ⅰ区遠景（東から）

永昌寺の谷遺跡　Ⅱ区（上空から）

図版４

永昌寺の谷遺跡　Ⅲ区（上空から）

永昌寺の谷遺跡　**III**区・**IV**区遠景（北から）

図版６

永昌寺の谷遺跡　**Ⅳ**区遠景（南から）

高倉遺跡　遠景（南から）

例　　言

1．本書は、安能地区広域営農団地農道整備事業に伴い、島根県松江農林振興センター及び組織改編後の島根県松江県土整備事務所の委託を受けて、伯太町教育委員会及び市町村合併後の安来市教育委員会が平成14～19年度にかけて実施した永昌寺の谷遺跡・高倉遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．調査組織は次のとおりである。

［調査主体］伯太町教育委員会（平成14～16年度）
安来市教育委員会（平成16～19年度）

［事 務 局］

平成15～16年度	伯太町教育委員会教育次長	花田明巳（市町村合併前）
平成16～17年度	安来市教育委員会教育総務課副参事	伊藤耕治（市町村合併後）
平成17～18年度	安来市教育委員会教育総務課副参事	中嶋　登
平成18年度	安来市教育委員会教育総務課長	石田行生
平成19年度	安来市教育委員会文化課長	原田　誠

［調査員］

平成14年度（分布調査、試掘調査、高倉遺跡）
妹尾秀樹（伯太町教育委員会文化財保護係長）、清水初美（同臨時職員）

平成15年度（試掘調査、高倉遺跡、永昌寺の谷遺跡Ⅰ区）
妹尾秀樹（伯太町教育委員会文化財保護係長）、清水初美（同臨時職員）、
景山和雅（同臨時職員）

平成16年度（永昌寺の谷遺跡Ⅰ区）
妹尾秀樹（伯太町教育委員会文化財保護係長、安来市教育委員会主幹）、
舟木　聡（安来市教育委員会主任主事）、清水初美（同臨時職員）、
田中強志（同臨時職員）、今岡利江（同臨時職員）

平成17年度（永昌寺の谷遺跡Ⅰ区・Ⅲ区・Ⅳ区）
大塚　充（安来市教育委員会主任）、舟木　聡（同主任）、水口晶郎（同主任）、
田中強志（同臨時職員）、泉あかね（同臨時職員）、今岡利江（同臨時職員）

平成18年度（永昌寺の谷遺跡Ⅱ区・Ⅳ区）
大塚　充（安来市教育委員会主任）、舟木　聡（同主任）、田中強志（同臨時職員）、
泉あかね（同臨時職員）、是田和美（同臨時職員）

平成19年度（整理作業）
大塚　充（同主幹）、舟木　聡（同主任）、水口晶郎（同主任）、吉田　博（臨時職員）、
泉あかね（同臨時職員）、山尾志保（同臨時職員）

［調査指導］
田中義昭（島根県文化財保護審議委員）、大橋泰夫（島根大学法文学部教授）、

大谷晃二（島根県立松江北高等学校教諭）、丹羽野　裕（島根県教育庁文化財課）、
原田敏照（同）、勝部智明（同）、東森　晋（同）

［調査協力］

勝部　衛（松江市立玉作資料館館長）、岩橋孝典（島根県埋蔵文化財調査センター）

［遺物整理］

稲田安恵

3．各遺跡の現地調査の担当者は以下のとおりである。

永昌寺の谷遺跡	Ⅰ区：平成15～17年度	妹尾秀樹・清水初美・大塚　充・舟木　聡
	Ⅱ区：平成18年度	大塚　充・舟木　聡
	Ⅲ区：平成17年度	［古墳群］大塚　充［横穴墓群］水口晶郎
	Ⅳ区：平成17～18年度	舟木　聡
高倉遺跡	平成14～15年度	妹尾秀樹・清水初美

4．本書で使用した遺構略記号は次のとおりである。

SI（竪穴住居跡）　SB（掘立柱建物跡）　P（ピット）　SK（土壙）　SD（溝状遺構）

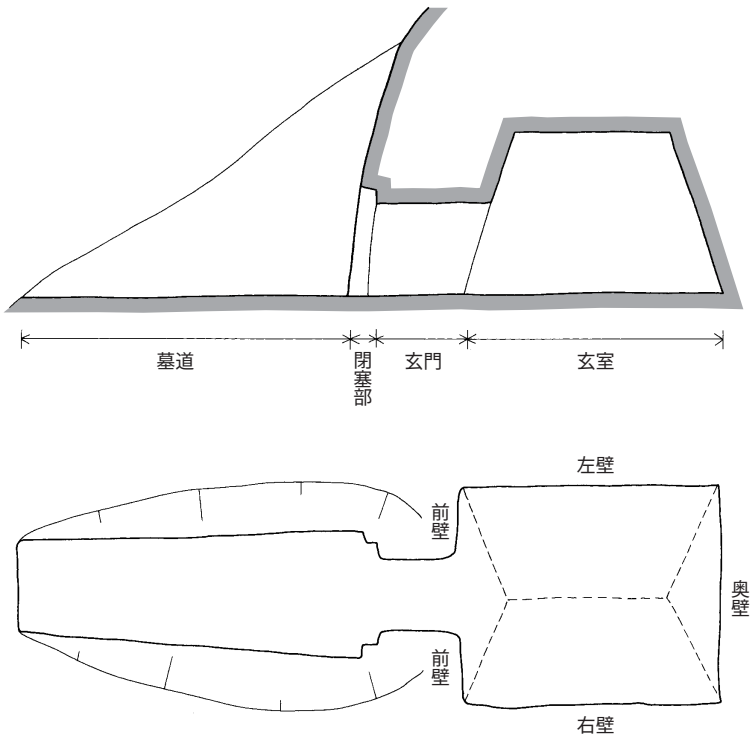
5．本書で使用した測地系は世界測地系であり、方位は座標北である。

6．本書に掲載した「第２図　永昌寺の谷遺跡・高倉遺跡の位置と周辺の遺跡」は国土地理院発行の地形図を使用した。

7．出土遺物及び実測図、写真は安来市教育委員会で保管している。

8．本書の編集・執筆は、大塚、舟木、水口が協議して行い、文責は目次に明示した。

9．本書では、検出した横穴墓の各部については下記のようにしている。



横穴墓各部名称図

目　次

図版

例言

第１章　調査に至る経緯と経過 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（水口）　1

第２章　遺跡の位置と歴史的環境 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（水口）　2

第３章　永昌寺の谷遺跡の調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　8

第１節　Ⅰ区の調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（舟木）　12

第２節　Ⅱ区の調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（大塚）　40

第３節　Ⅲ区の調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（水口）　117

第４節　Ⅳ区の調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（舟木）　154

第５節　まとめ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　200

（１）弥生時代の遺構 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（舟木）　200

（２）古墳・横穴墓 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（水口）　204

（３）律令期以降の遺構 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（大塚）　211

第４章　高倉遺跡の調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（舟木）　214

第５章　自然科学分析

永昌寺の谷遺跡（Ⅱ区）鉄関連出土品の分析調査 ・・・・・・（和鋼博物館）　220

写真図版

挿図目次

第１図　遺跡の位置 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
第２図　遺跡の位置と周辺の遺跡（S=1/50,000）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
第３図　永昌寺の谷遺跡調査区配置図（S=1/1,000）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9～11
第４図　Ⅰ区遺構平面図（S=1/500）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13
第５図　Ⅰ区１号墳実測図（S=1/100）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14
第６図　Ⅰ区SI01-1実測図（S=1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 15
第７図　Ⅰ区SI01-2実測図（S=1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 16
第８図　Ⅰ区SI01-1・SI01-2土層図（S=1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 17
第９図　Ⅰ区SI02、SK02実測図（S=1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20
第10図　Ⅰ区SI02実測図（S=1/60） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 21
第11図　Ⅰ区SI03実測図（1）（S=1/60） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 22
第12図　Ⅰ区SI03実測図（2）（S=1/60） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 23
第13図　Ⅰ区SI04-1、SI04-2実測図（S=1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 25
第14図　Ⅰ区SI05実測図（S=1/60） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 26
第15図　Ⅰ区SI06実測図（1）（S=1/60） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 28
第16図　Ⅰ区SI06実測図（2）（S=1/60） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 29
第17図　Ⅰ区SI07実測図（S=1/60） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 30
第18図　Ⅰ区SI08実測図（S=1/60） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 31
第19図　Ⅰ区SB01実測図（S=1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 32
第20図　Ⅰ区SB02実測図（S=1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 32
第21図　Ⅰ区SB03実測図（S=1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 33
第22図　Ⅰ区SB04、柵列ピット実測図（S=1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 33
第23図　Ⅰ区加工段１実測図（S=1/60） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 34
第24図　Ⅰ区加工段２実測図（S=1/60） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 34
第25図　Ⅰ区１号横穴墓実測図（1）（S=1/60） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 35
第26図　Ⅰ区１号横穴墓実測図（2）（S=1/60） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 36
第27図　Ⅰ区土橋状遺構実測図（S=1/60） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 37
第28図　Ⅰ区出土遺物実測図（1）（S=1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 38
第29図　Ⅰ区出土遺物実測図（2）（S=1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 39
第30図　永昌寺の谷遺跡Ⅱ区調査区配置図（S=1/800）・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 41
第31図　永昌寺の谷遺跡Ⅱ区上遺構配置図（S=1/300）・・・・・・・・・・・・・・・・ 42～43
第32図　Ⅱ区上セクション実測図（S=1/80） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 44
第33図　Ⅱ区上SI01実測図（S=1/60） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 45
第34図　Ⅱ区上SI01出土遺物実測図（S=1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 46
第35図　Ⅱ区上SI01内土壙実測図（S=1/40） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 46
第36図　Ⅱ区上SI02実測図（S=1/60） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 47

第37図　Ⅱ区上SI02出土遺物実測図（S=1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　48
第38図　Ⅱ区上SI03、04実測図（1）（S=1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　49
第39図　Ⅱ区上SI03、04実測図（2）（S=1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　50
第40図　Ⅱ区上SI03出土遺物実測図（S=1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　51
第41図　Ⅱ区上SI04出土遺物実測図（S=1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　52
第42図　Ⅱ区上SI05、SB01実測図（S=1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　53
第43図　Ⅱ区上SI05出土遺物実測図（S=1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　54
第44図　Ⅱ区上SI06実測図（1）（S=1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　55
第45図　Ⅱ区上SI06実測図（2）（S=1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　56
第46図　Ⅱ区上SI06出土遺物実測図（S=1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　56
第47図　Ⅱ区上SI07実測図（S=1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　57
第48図　Ⅱ区上加工段４実測図（S=1/80）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　58
第49図　Ⅱ区上加工段４出土遺物実測図（S=1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　59
第50図　Ⅱ区上加工段３実測図（S=1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　60
第51図　Ⅱ区上SK01実測図（S=1/30）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　60
第52図　Ⅱ区上SK02実測図（S=1/30）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　61
第53図　Ⅱ区上SK03実測図（S=1/30）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　61
第54図　Ⅱ区上１号墳実測図（S=1/80）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　62
第55図　Ⅱ区上遺構外遺物実測図（S=1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　63
第56図　永昌寺の谷遺跡Ⅱ区下遺構配置図（S=1/300）・・・・・・・・・・・・・・・・・　64〜65
第57図　Ⅱ区下セクション実測図（1）（S=1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　66
第58図　Ⅱ区下SI08・09実測図（1）（S=1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　67
第59図　Ⅱ区下SI08・09実測図（2）（S=1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　68
第60図　Ⅱ区下SI08出土遺物実測図（S=1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　69
第61図　Ⅱ区下SI08・09周辺出土遺物実測図（S=1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　70
第62図　Ⅱ区下SB01・03実測図（S=1/80）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　71
第63図　Ⅱ区下SB02実測図（S=1/80）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　72
第64図　Ⅱ区下SB04実測図（S=1/80）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　73
第65図　Ⅱ区下SB05・06実測図（1）（S=1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　75
第66図　Ⅱ区下SB05・06実測図（2）（S=1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　76
第67図　Ⅱ区下SB07・08実測図（S=1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　77
第68図　Ⅱ区下SB09実測図（S=1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　78
第69図　Ⅱ区下SB10実測図（S=1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　79
第70図　Ⅱ区下SB10内鍛冶炉実測図（S=1/40）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　80
第71図　Ⅱ区下SB11実測図（S=1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　81
第72図　Ⅱ区下SB12実測図（S=1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　82
第73図　Ⅱ区下SB13・14実測図（S=1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　83
第74図　Ⅱ区下SB15実測図（S=1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　84

第75図　Ⅱ区下第１平坦面出土遺物実測図（1）（S=1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 85
第76図　Ⅱ区下第１平坦面出土遺物実測図（2）（S=1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 86
第77図　Ⅱ区下第２平坦面～第４平坦面実測図（S=1/300）・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 87
第78図　Ⅱ区下セクション実測図（2）（S=1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 88
第79図　Ⅱ区下2-1加工段実測図（S=1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 90
第80図　Ⅱ区下2-2加工段実測図（S=1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 91
第81図　Ⅱ区下2-3加工段実測図（S=1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 92
第82図　Ⅱ区下第２平坦面出土遺物実測図（S=1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 93
第83図　Ⅱ区下3-1加工段実測図（S=1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 94
第84図　Ⅱ区下3-2加工段実測図（S=1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 95
第85図　Ⅱ区下3-3加工段実測図（S=1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 96
第86図　Ⅱ区下3-4加工段実測図（S=1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 97
第87図　Ⅱ区下3-5加工段実測図（S=1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 98
第88図　Ⅱ区下第３平坦面出土遺物実測図（1）（S=1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 100
第89図　Ⅱ区下第３平坦面出土遺物実測図（2）（S=1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 101
第90図　Ⅱ区下第３平坦面出土遺物実測図（3）（S=1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 103
第91図　Ⅱ区下第３平坦面出土遺物実測図（4）（S=1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 104
第92図　Ⅱ区下第３平坦面出土遺物実測図（5）（S=1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 106
第93図　Ⅱ区下第３平坦面出土遺物実測図（6）（S=1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 107
第94図　Ⅱ区下第３平坦面出土遺物実測図（7）（S=1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 108
第95図　Ⅱ区下第３平坦面出土遺物実測図（8）（S=1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 109
第96図　Ⅱ区下第３平坦面出土遺物実測図（9）（S=1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 111
第97図　Ⅱ区下第３平坦面出土遺物実測図（10）（S=1/2）・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 112
第98図　Ⅱ区下第３平坦面出土遺物実測図（11）（S=1/1）・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 112
第99図　Ⅱ区下第４平坦面実測図（S=1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 113
第100図　Ⅱ区下第４平坦面出土遺物実測図（S=1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 114
第101図　Ⅱ区下出土鉄滓実測図（S=1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 116
第102図　永昌寺の谷遺跡Ⅲ区地形測量図・調査区配置図（S=1/1,000）・・・・・・・・・・ 117
第103図　Ⅲ区横穴墓群調査後地形測量図（S=1/300）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 118
第104図　Ⅲ区１号横穴墓遺構実測図（S=1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 120～121
第105図　Ⅲ区１号横穴墓人骨・遺物出土状況（S=1/30）・・・・・・・・・・・・・・・・・ 122
第106図　Ⅲ区１号横穴墓玄室出土遺物実測図（1）（S=1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・ 123
第107図　Ⅲ区１号横穴墓玄室出土遺物実測図（2）（S=1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・ 124
第108図　Ⅲ区１号横穴墓玄室出土遺物実測図（3）（S=1/2）・・・・・・・・・・・・・・・・ 125
第109図　Ⅲ区１号横穴墓玄室出土遺物実測図（4）（S=1/2）・・・・・・・・・・・・・・・・ 126
第110図　Ⅲ区１号横穴墓玄室出土遺物実測図（5）（S=1/1）・・・・・・・・・・・・・・・・ 127
第111図　Ⅲ区１号横穴墓　墓道出土遺物実測図（S=1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・ 127
第112図　Ⅲ区２号横穴墓遺構実測図（S=1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 130

第113図　Ⅲ区３号・４号横穴墓遺構実測図（1）（S=1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・ 131
第114図　Ⅲ区３号・４号横穴墓遺構実測図（2）（S=1/60）・・・・・・・・・・・・・ 132～133
第115図　Ⅲ区３号・４号横穴墓　墓道内掘立柱建物跡実測図（S=1/60）・・・・・・ 134～135
第116図　Ⅲ区３号・４号横穴墓　墓道遺物出土状況（S=1/30）・・・・・・・・・・・・・ 136
第117図　Ⅲ区３号・４号横穴墓　墓道出土遺物実測図（S=1/3）・・・・・・・・・・・・・ 138
第118図　Ⅲ区３号横穴墓玄室人骨・遺物出土状況（S=1/30）・・・・・・・・・・・・・・ 139
第119図　Ⅲ区３号横穴墓玄室出土遺物実測図（S=1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・ 139
第120図　Ⅲ区４号横穴墓玄室遺物出土状況（S=1/30）・・・・・・・・・・・・・・・・・ 140
第121図　Ⅲ区４号横穴墓玄室出土遺物実測図（S=1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・ 141
第122図　Ⅲ区５号横穴墓遺構実測図（S=1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 144～145
第123図　Ⅲ区５号横穴墓遺物出土状況（S=1/30）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 146
第124図　Ⅲ区５号横穴墓玄室出土遺物実測図（S=1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・ 147
第125図　Ⅲ区SK01・SK02遺構実測図（S=1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 147
第126図　Ⅲ区古墳群調査後地形測量図（S=1/300）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 148
第127図　Ⅲ区１号墳土層断面図（S=1/120）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 149
第128図　Ⅲ区SD01遺構実測図（S=1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 149
第129図　Ⅲ区２号墳遺構実測図（S=1/80）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 150
第130図　Ⅲ区２号墳主体部実測図（S=1/30）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 151
第131図　Ⅲ区SK03遺構実測図（S=1/30）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 151
第132図　Ⅲ区SK04遺構実測図（S=1/30）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 151
第133図　Ⅲ区古墳群出土遺物実測図（S=1/3、但し、7のみS=1/1）・・・・・・・・・・ 152
第134図　Ⅳ区遺構全体図（S=1/500）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 156～157
第135図　Ⅳ区１号墳調査後地形測量図（S=1/100）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 158
第136図　Ⅳ区１号墳東西ベルト土層断面図（S=1/80）・・・・・・・・・・・・・・・・・ 159
第137図　Ⅳ区１号墳第１主体部実測図（S=1/30）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 160
第138図　Ⅳ区１号墳第１主体部出土遺物実測図（S=1/2）・・・・・・・・・・・・・・・ 160
第139図　Ⅳ区１号墳第３主体部実測図（S=1/30）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 161
第140図　Ⅳ区１号墳第３主体部出土遺物実測図（S=1/3）・・・・・・・・・・・・・・・ 162
第141図　Ⅳ区１号墳第２、第４、第５、第６主体部実測図（S=1/30）・・・・・・・・・・ 163
第142図　Ⅳ区２号墳実測図（S=1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 164
第143図　Ⅳ区２号墳土層断面図（S=1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 165
第144図　Ⅳ区３号墳実測図（S=1/90）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 166
第145図　Ⅳ区４号墳実測図（S=1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 167
第146図　Ⅳ区５号墳実測図（S=1/30）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 168
第147図　Ⅳ区５号墳主体部実測図（S=1/20）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 169
第148図　Ⅳ区７号墳実測図（S=1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 170
第149図　Ⅳ区５号墳出土鉄器（S=1/2）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 171
第150図　Ⅳ区５号墳・７号墳出土土器（S=1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 171

第151図　Ⅳ区６号墳調査後地形測量図（S=1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 172
第152図　Ⅳ区SI01実測図（1）（S=1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 174
第153図　Ⅳ区SI01実測図（2）（S=1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 176
第154図　Ⅳ区SI02、SI04実測図（S=1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 178
第155図　Ⅳ区SI03実測図（S=1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 180
第156図　Ⅳ区竪穴住居跡出土遺物実測図（1）（S=1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 181
第157図　Ⅳ区竪穴住居跡出土遺物実測図（2）（S=1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 182
第158図　Ⅳ区第１加工段SB01実測図（S=1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 183
第159図　Ⅳ区第１加工段方形溝状遺構実測図（S=1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 184
第160図　Ⅳ区加工段２実測図（S=1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 185
第161図　Ⅳ区加工段３実測図（S=1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 186
第162図　Ⅳ区加工段４、５、６、７実測図（S=1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 187
第163図　Ⅳ区加工段８実測図（S=1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 188
第164図　Ⅳ区加工段出土遺物実測図（1）（S=1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 189
第165図　Ⅳ区加工段出土遺物実測図（2）（S=1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 190
第166図　Ⅳ区SK03実測図（S=1/20）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 191
第167図　Ⅳ区SK04実測図（S=1/30）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 192
第168図　Ⅳ区SK07実測図（S=1/30）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 192
第169図　Ⅳ区SK03、SK07出土遺物実測図（1）（S=1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・ 193
第170図　Ⅳ区SK03、SK07出土遺物実測図（2）（S=1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・ 194
第171図　Ⅳ区土壙墓群全体図（S=1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 195
第172図　Ⅳ区６号墳、土壙墓群土層断面図（S=1/80）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 196
第173図　Ⅳ区土壙墓群墓壙実測図（S=1/30）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 197
第174図　Ⅳ区土壙墓群出土遺物実測図（S=1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 198
第175図　Ⅳ区出土遺物実測図（S=1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 199
第176図　永昌寺の谷遺跡弥生時代集落変遷図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 202
第177図　永昌寺の谷遺跡古墳時代遺構配置図（S=1/2,000）・・・・・・・・・・・・・・・・ 205
第178図　高倉遺跡遺構全体図（S=1/300）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 215
第179図　高倉遺跡間歩状遺構実測図（S=1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 216
第180図　高倉遺跡検出土壙実測図（S=1/30）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 218
第181図　高倉遺跡出土遺物実測図（S=1/3、3はS=1/1）・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 219

第１章　調査に至る経緯と経過

広域営農団地農道整備事業（安能地区）が行われる安来市は、島根県の最東部に位置し、西に県都松江市、東は鳥取県の商都米子市と隣接している。農産物は水稲を中心として、野菜・畜産・茶などの複合経営地帯である。しかしながら、地域を包括するJAやすぎの農業施設が散在しており、基幹流通網の整備が重要な課題となっていた。とりわけ、南部の安来市広瀬町と安来市伯太町については、東西を結ぶ基幹連絡道が無いため、農産物等の集出荷、原料輸送に多大な時間と労力を費やしている状況であった。このため、輸送の合理化と農業経営の近代化を図り、地域農業の振興と活性化を図る目的で、基幹農道の整備が計画された。

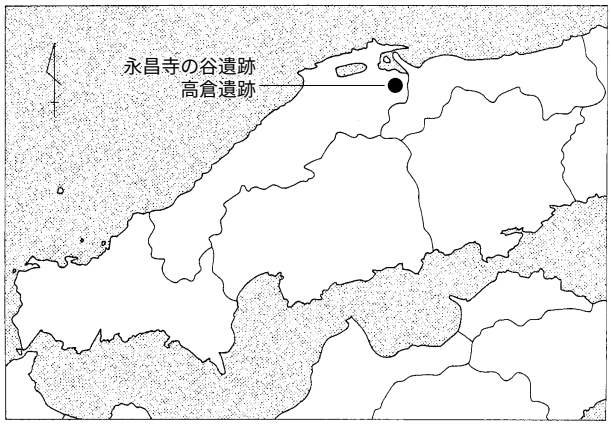
この農道整備事業に係る埋蔵文化財の取り扱いについて、平成14年７月に伯太町教育委員会が島根県松江農林振興センターから計画路線内の分布調査依頼を受け踏査を行なった結果、数箇所で埋蔵文化財が所在する可能性が高いことから、同年11月から12月にかけて計画路線の一部地区の試掘調査を行った。その結果、間歩状遺構・焼土壙が検出された（高倉遺跡）。この遺跡発見を受けて、平成15年２月から高倉遺跡の本調査を実施し、同年７月に現地調査を終了した。

高倉遺跡の調査と並行して、上記以外の地区の遺跡の有無を確認するため平成15年６月から７月にかけて試掘調査を実施した結果、弥生時代から奈良時代にかけての集落跡を発見した（永昌寺の谷遺跡）。この遺跡の発見を受けて、同年８月から永昌寺の谷遺跡Ⅰ区の本調査を開始した。平成16年度も引き続き調査を実施したが、同時期に行われた主要地方道安来伯太日南線新世紀道路（改良）工事に伴う経塚鼻遺跡の発掘調査が急がれたため、当初は永昌寺の谷遺跡は十分な体制での調査はできなかった。経塚鼻遺跡の調査終了後の平成17年１月より調査体制を整え本格的に調査が進められ、同年７月に同遺跡Ⅰ区の調査を終了し、同年10月に現地説明会にて公開した。

当初、永昌寺の谷遺跡Ⅰ区の調査終了後、調査区西側から順次調査を実施する予定であったが、中海干拓事業安来工区島田ため池建設工事に伴い、その堤防に使用する土砂を同遺跡Ⅲ区およびⅣ区の一部から採土することとなり、同調査区の調査が急がれることとなった。平成17年11月より同遺跡Ⅲ区・Ⅳ区の調査を開始し、平成18年３月に同遺跡Ⅲ区古墳群・横穴墓群、Ⅳ区古墳群の調査を終了し、その成果を同年６月に現地説明会にて公開した。

平成18年度は、平成17年度に引き続きⅣ区の弥生集落及び同遺跡Ⅱ区の調査を実施した。Ⅱ区については、農道整備工事の兼ね合いから、丘陵頂部と加工段部分に分けて遺跡の取り扱いを行った。Ⅳ区及びⅡ区丘陵頂部の弥生時代集落の調査を同年11月に終了し、同月に現地説明会を実施した。その後、Ⅱ区の加工段部分の調査を実施した。調査の結果、奈良時代の掘立柱建物や鍛冶遺構等を検出し、平成19年３月に現地調査を終了し、その成果を同月に現地説明会を行い公開した。

平成19年度は、報告書刊行に向けての整理作業を実施した。



第１図　遺跡の位置

第２章　遺跡の位置と歴史的環境

［遺跡の位置］

永昌寺の谷遺跡・高倉遺跡は、島根県安来市伯太町西母里に所在する。安来市は島根県東端部に位置し、北は中海を望み、その中海に向かって伯太川・吉田川・飯梨川の沖積作用によって形成された安来平野が広がっている。安来平野は東西約13㎞、南北約13㎞の広がりを持つ県内有数の穀倉地帯である。本遺跡群は、中海の海岸から約11㎞南に入った安来平野南東部の伯太川中流域の、現在の安来市伯太町母里の街の南側の丘陵上に位置している。

［歴史的環境］

【弥生時代】

弥生時代の前期末に経塚鼻遺跡に環壕が掘削される。眼下には安来平野が一望できる眺望良好な丘陵突端部の八合目付近に、断面Ｖ字形に掘り込まれている。これは隣接する鳥取県西部に集中して見られるもので、当遺跡は戦闘防御を目的としたものと考えられている。その他、この時期の遺物として、九重町の水田地下約５ｍから胴部に木葉文が施されている土笛が出土している。

中期になると集落数も増加し、丘陵中腹から丹部落合遺跡・八脇谷遺跡等で検出されている。いずれも、中期までに沖積平野を開発した集団の中から、谷水田の開発のために分村した家族集団の住居であると推定される。その他、この時期の遺物として、十善遺跡から分銅形土製品が出土している。

後期になると、九重土壙墓群・鍵尾土壙墓群などの土壙墓群・墳墓群が平野各地の丘陵上に見られるようになる。いずれも、埋葬施設の構造や副葬品に顕著な差はなく、続く尾根や隣接する丘陵上に同様な墳墓が見られることから、地域の首長墓ではなく、中期からの谷水田を開発した家族集団の墓地であると考えられる。

後期の集落は青垣神社横遺跡や経塚鼻遺跡等のように丘陵頂部に集落が築かれるようになる。この時期は、鉄器の急速な普及や古墳時代にむけて列島の大部分の統合が急速に進む時期であり、必要物資の獲得や地域統合の波が押し寄せてきたことによって緊張関係が生じたためと考えられる。また、これらの緊張関係に対処するため、地域集団を束ねる有力者が出現する。カウカツE-1号墓は、安来平野北西部の荒島地区で集中的に築かれている弥生王墓と同様の四隅突出型弥生墳丘墓で、墳丘中央部から吉備地方から運ばれた埋葬儀式専用の特殊土器が出土している。このことは、この時期の緊張関係を乗り切るため、当地域の有力者が吉備地方の首長と政治的な結びつきを強めたものと推定される。なお、この吉備産の特殊土器は、遺構に伴っていないが臼コクリ遺跡からも出土している。

【古墳時代】

古墳時代に入ると、安来平野の低丘陵に多数の古墳が築造される。特に、飯梨川右岸から伯太川流域にかけては、県内でも有数の前方後円墳の一大集中地帯となっている。このうち両遺跡が所在する安来平野南東部には、清瀬２号墳（全長45.6m）、安田清瀬１号墳（44.4m）、釜谷１号墳

（38.6m）、清瀬４号墳（32.7m）の他、30m以下の小型の前方後円墳が37基所在する。

その他、安来平野以南の伯太川上流域では井尻地区・赤屋地区に古墳が集中して築かれ、特に赤屋地区上ノ台古墳群は標高200～330mの高地でありながら、前方後円墳を含む40基近くの後期古墳が群集している。

古墳時代後期後半には、母里・井尻地区を境に古墳の様相が異なる。井尻地区以南では横穴式石室を埋葬施設にもつ古墳が、丘陵頂部や河岸段丘上に多数築かれる。調査が行われた古墳として、径13mの円墳で花崗岩の割石を積上げた全長約5.4mの片袖式横穴式石室をもつ蔵王７号墳、径14～15mの円墳で全長約8m・玄室長約5mの両袖式横穴式石室をもつ塚田古墳、玄室が2.1m残存していた矢原古墳などが挙げられる。

これに対して、母里地区以北の安来平野（飯梨川以東）では、横穴式石室は築かれず横穴墓がほぼ全域で多数築造される。安来平野は出雲地方の中でも特に横穴墓が集中する地域である。中には横口式家型石棺を持つ横穴墓や、金銅装大刀や馬具を副葬する横穴墓が集中する地域として知られている。両遺跡が所在する平野南東部では、金銅装圭頭大刀が出土した中山横穴墓、横口式石棺に銀装圭頭大刀と銀装馬具を出土した鳥木横穴墓が挙げられる。また、今回調査を行った遺跡周辺では、後背墳丘を持つ青垣神社横遺跡１号横穴墓の調査が行われている。

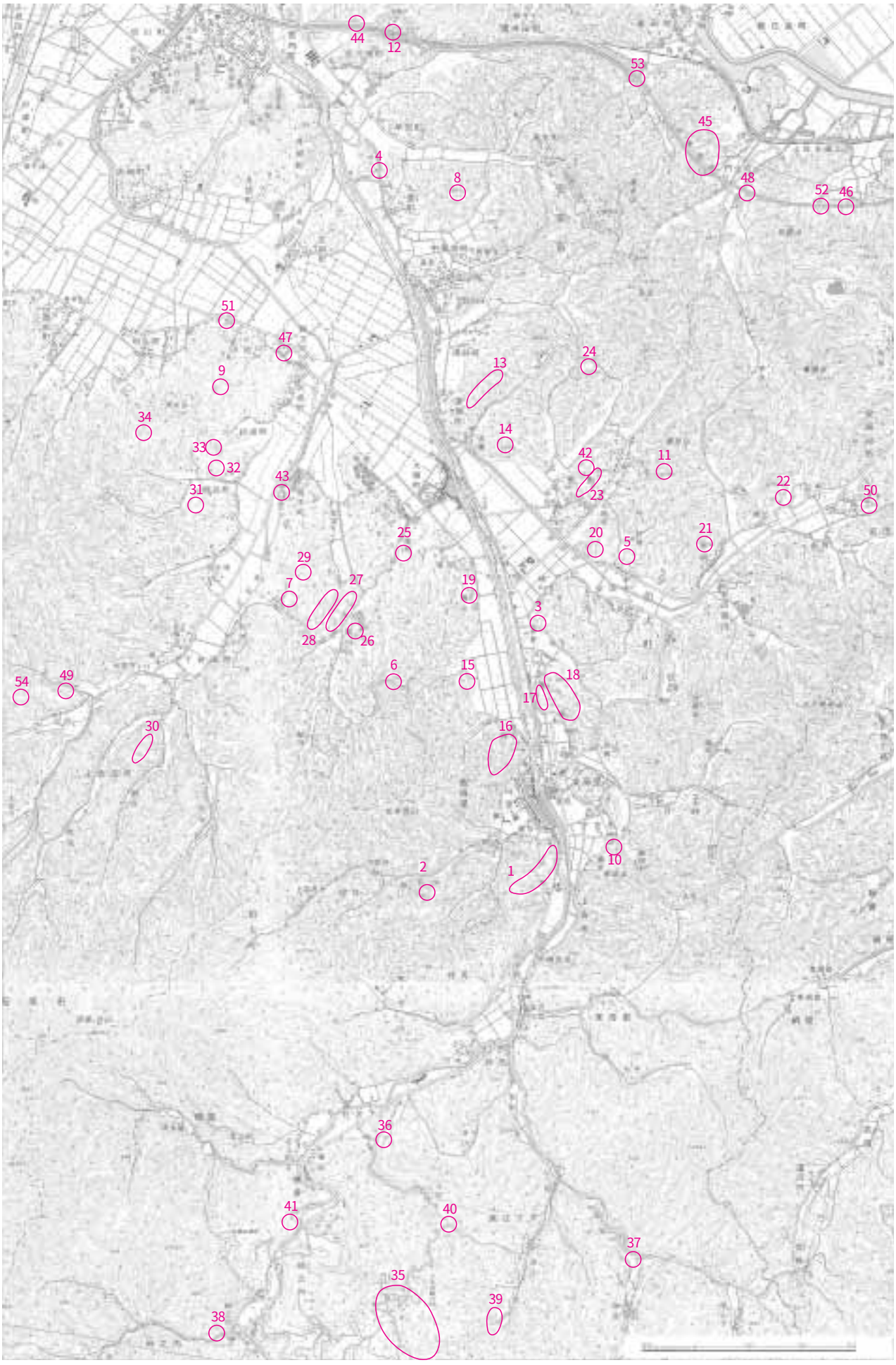
古墳時代前期～中期にかけての集落の検出例は少なく様相は判然としないが、おそらく調査が十分行われていない平野部に所在するものと考えられる。中期以降の集落の検出は、丘陵斜面部を中心に一気に増加する。

また、この時期に生産遺跡が多数確認されている。玉作り遺跡では、大原遺跡で通常の竪穴住居ではなく専業工房と考えられる大型建物において大規模な玉作りが行われている。青垣神社横遺跡の丘陵斜面部から古墳時代後期から終末期にかけての住居跡が見つかっていが、このうちの加工段の一つからは水晶や碧玉の剥片が出土しており、小規模な玉作工房であったと推測されている。その他、安来平野南東部の北東側の低い峠を越えると中海沿岸部に出るが、この地域は先進的な工業地帯としての性格を持っている。門生古窯跡群では、５世紀末から６世紀初頭にかけて陶邑古窯跡群から地方への須恵器製作技術が拡散し、山陰において初めて須恵器生産が導入された時期の窯跡（山根支群１号窯跡、高畑支群）や工房跡（高畑支群）の調査が行われている。徳見津遺跡では、島根県内でも最古の部類に入る鍛冶遺構が検出され、遺構や出土遺物の様相から７世紀以降の鍛冶遺跡と異なる専業的に鍛冶生産に従事していたと推定される工房跡が見つかっている。

【飛鳥・奈良・平安時代】

両遺跡周辺は、733年に編纂された『出雲国風土記』（以下、風土記とする）による意宇郡母里郷に位置している。

両遺跡周辺で、風土記に記載された寺院が２箇所所在する。まず、７世紀後葉に安来平野南部に教昊寺が建立される。風土記意宇郡の条に「教昊寺五重の塔を建つ。〔僧あり。〕」とあり、野方町に教昊寺のものと考えられる塔の心礎が残されている。周辺からは布目瓦が多数出土しているが、この瓦と同氾の可能性が高い軒丸瓦が門生古窯跡群に程近い陽徳寺遺跡からも出土している。陽徳寺遺跡から出土した瓦は非常に硬質に焼成され、焼き歪みが見られるものが多いことから、当遺跡付近に教昊寺の瓦を焼いた窯跡が存在した可能性が高い。その他に野方町と折坂町に同寺院に関連



第２図　遺跡の位置と周辺の遺跡（Ｓ＝１／50,000）

	遺跡名	時　期	主な遺構・遺物
1	永昌寺の谷遺跡	弥生～奈良	弥生中～後期・奈良住居跡、弥生墳墓、古墳、横穴墓
2	高倉遺跡		間歩状遺構、焼土壙
3	経塚鼻遺跡	弥生～古墳	弥生環壕、弥生後期住居跡・古墳
4	土笛出土地	弥生前期	水田地下約5mから土笛出土
5	丹部落合遺跡	弥生中期・平安	弥生・平安時代集落跡
6	八脇谷遺跡	弥生中期～後期	竪穴住居跡3棟
7	十善遺跡	弥生中期	分銅形土製品
8	九重土壙墓群	弥生後期	弥生墳墓
9	鍵尾土壙墓群	弥生後期	弥生墳墓
10	青垣神社横遺跡	弥生後期・古墳後期	弥生後期・古墳後期住居跡・横穴墓・玉作跡
11	カウカツE-1号墓	弥生後期	四隅突出形弥生墳丘墓・特殊土器
12	臼コクリ遺跡	弥生後期・古墳後期	弥生墳墓、古墳、横穴墓
13	清瀬古墳群	古墳	前方後円墳2基　2号墳・46m、4号墳・33m
14	安田清瀬1号墳	古墳	前方後円墳　44m
15	釜谷1号墳	古墳	前方後円墳　39m
16	極楽寺古墳群	古墳	前方後円墳4基　9号墳・18m、10号墳・26m、17号墳・18m、22号墳・11m
17	井戸西古墳群	古墳	前方後円墳2基　1号墳・23m、2号墳・18m
18	井戸古墳群	古墳	前方後円墳6基　3号墳・18m、8号墳・20m、10号墳・13m、23号墳・13m、26号墳・22m、28号墳・12m
19	城山1号墳	古墳	前方後円墳　20m
20	石堂14号墳	古墳	前方後円墳　19m
21	家の上17号墳	古墳	前方後円墳　20m
22	御戸古墳群	古墳	前方後円墳2基　1号墳・15m、2号墳・17m
23	中山古墳群	古墳	前方後円墳3基　5号墳・12m、、8号墳・20m、9号墳・14m
24	大人原1号墳	古墳	前方後円墳　20m
25	上丸山1号墳	古墳	前方後円墳　18m
26	善福寺古墳	古墳	前方後円墳　21m
27	殿河内古墳群	古墳	前方後円墳3基　9号墳・21m、10号墳・19m、14号墳・13m
28	恋の奥古墳群	古墳	前方後円墳3基　14号墳・15m、15号墳・17m、18号墳・23m
29	家の奥15号墳	古墳	前方後円墳　25m
30	バクヤシキ古墳群	古墳	前方後円墳3基　1号墳・23m、2号墳・19m、4号墳・18m
31	かなら1号墳	古墳	前方後円墳　17m
32	片ひら山古墳	古墳	前方後円墳　26m
	御崎さん1号墳	古墳	前方後円墳　24m
33	奥山田1号墳	古墳	前方後円墳　25m
34	鳥越1号墳	古墳	前方後円墳　30m
35	上の台古墳群	古墳	前方後円墳1基（森木ヶ峰1号墳・20m、横穴式石室）、円墳35基
36	蔵王7号墳	古墳後期	円墳・径13m、片袖式横穴式石室（全長約5.4m）
37	塚田古墳	古墳後期	円墳・径14～15m、両袖式横穴式石室（全長約8m・玄室長約5m）
38	矢原古墳	古墳後期	横穴式石室
39	岩屋谷古墳群	古墳後期	1号墳（円墳・径12～14m、玄室2/3現存）、2号墳（横穴式石室）
40	上塚田古墳	古墳後期	横穴式石室
	垣ノ内古墳	古墳後期	横穴式石室
41	横屋丸山古墳	古墳後期	横穴式石室
42	中山横穴墓	古墳後期	金銅装圭頭大刀
43	鳥木横穴墓	古墳後期	横口式石棺、銀装圭頭大刀、銀装馬具
44	大原遺跡	古墳中期～後期	玉作工房跡2棟、横穴墓
45	門生古窯跡群	古墳・平安	5C・9C須恵器窯跡、5C須恵器工房跡
46	徳見津遺跡	古墳～奈良	古墳時代後期～奈良時代集落・鍛冶遺構
47	教昊寺跡	飛鳥～奈良	塔心礎、布目瓦（軒丸瓦、軒平瓦、平瓦、丸瓦）
48	陽徳寺遺跡	奈良～平安	遺物包含層、布目瓦
49	山国郷新造院瓦窯跡	奈良	瓦窯跡、平瓦
50	長台寺付近寺跡	古代	別名：岡の原廃寺、塔の心礎、礎石、瓦
51	沢遺跡	奈良～平安	舎人正倉跡推定地、大型掘立柱建物跡、炭化米
52	五反田遺跡	飛鳥～奈良	古墳後期～奈良時代集落跡、飛鳥～奈良時代鍛冶遺構
53	島田南遺跡	奈良～平安	8世紀から9世紀にかけての遺物包含層より製鉄炉壁、砂鉄精錬滓出土
54	廻谷古窯跡	奈良～平安	8C後半～9C須恵器窯跡

する窯跡が所在するが詳細は不明である。次に、風土記記載の寺院として三重の塔が建てられていた山国郷新造院が挙げられる。この吉田地区に所在すると考えられる新造院の詳細は不明であるが、この新造院に瓦を供給していたと考えられる瓦窯跡（山国郷新造院瓦窯跡）が上吉田町に所在している。その他、風土記に記載されていない初期造寺として考えられている寺院跡として、塔心礎・瓦が出土した長台寺付近寺跡が挙げられる。

寺院関連以外の風土記関係遺跡として、沢遺跡が挙げられる。当遺跡は教昊寺跡から西方約400mの丘陵端部に所在し、柱穴や周辺に炭化米を伴う大型の柱列を持つ掘立柱建物跡が見つかっており、風土記記載の舎人郷正倉跡との関連が考慮されている。

生産遺跡として、安来平野東部から中海沿岸にかけて鍛冶生産が行われる。これらは集落単位で営まれたと考えられている。徳見津遺跡・五反田遺跡では、７世紀初頭から８世紀末にかけて、加工段上の平坦面に掘立柱建物を建て、その内側で操業している。また、徳見津遺跡・五反田遺跡・島田南遺跡等では精錬滓や製鉄炉の炉壁が出土していることから、製鉄も行われていたものと考えられている。隣接する鳥取県米子市西部地域でも、同様な遺跡が見つかっており、その関係が注目される。

須恵器窯跡として、門生古窯跡黒谷１号窯・廻谷古窯跡が挙げられる。いずれも、奈良時代後半から平安時代前半（９世紀）にかけて操業していたと考えられ、奈良時代において松江市大井古窯跡群の独占的であった須恵器生産が崩れ、生産が各地に拡散していった時期のものと考えられる。

奈良・平安時代の集落跡は、古墳時代と同様に丘陵斜面に展開している。中海沿岸部の遺跡の他に、平安期の集落として丹部落合遺跡で加工段上に建てられた掘立柱建物跡が検出されている。

当該期の遺物で特に注目されるのは墨書土器・ヘラ描土器などの文字資料である。島田南遺跡ではヘラ書き土器・墨書土器、宮内遺跡では墨書土器が出土しているが、いずれも遺構に伴わず遺物包含層中の出土である。

（参考文献）

・加藤義成『出雲国風土記参究』今井書店　1957
・内田才「原始・古代」『安来市誌』1970
・伯太町教育委員会『岩屋谷古墳群他発掘調査』1981
・山本清「横穴被葬者の地位をめぐって」『島根考古学会誌　第１集』島根考古学会　1984
・安来市教育委員会『教昊寺』1985
・柳浦俊一「出雲地方の須恵器生産」『山本清先生喜寿記念論集　山陰考古学の諸問題』山本清先生喜寿記念論集刊行会　1986
・伯太町教育委員会『矢原古墳発掘調査報告書』1989
・内田律夫・曳野律夫・松本岩雄・渡辺貞幸「島根県」『前方後円墳集成　中国・四国編』山川出版社1991
・田中義昭編『山陰地方における弥生墳丘墓の研究』島根大学法文学部考古学研究室　1992
・島根県教育委員会『一般国道９号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ（島田南遺跡）』1992
・伯太町教育委員会『伯太町安田地内試掘調査報告書』1992
・島根県教育委員会『臼コクリ遺跡　大原遺跡　一般国道９号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ』1994
・池田満雄・宍道年弘「郡衙と正倉跡」『風土記の考古学３　出雲国風土記の巻』同成社　1995
・島根県教育委員会『徳見津遺跡・目廻遺跡・陽徳寺遺跡　一般国道９号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書12』1996
・島根県教育委員会『山ノ神遺跡　五反田遺跡　一般国道９号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書16』1998
・島根県教育委員会『門生黒谷Ⅰ遺跡・門生黒谷Ⅱ遺跡・門生黒谷Ⅲ遺跡　一般国道９号（安来道路）建設予定地内発掘調査報告書14』1998
・内田律夫・曳野律夫・松本岩雄・渡辺貞幸「島根県」『前方後円墳集成　補遺編』山川出版社2000
・島根県古代文化センター　島根県埋蔵文化財調査センター『かわらけ谷横穴墓の研究　島根県古代文化センター調査研究報告書10』2001
・妹尾秀樹・池淵俊一「伯太町青垣神社横遺跡の発掘調査」『季刊文化財　第102号』島根県文化財愛護協会誌　2002
・伯太町教育委員会『安田深田遺跡発掘調査報告書　町営住宅安田団地敷地整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』2002
・伯太町教育委員会『丹部落合遺跡発掘調査報告書　町道北谷学校道路改良工事に伴う附帯工事（校庭整備）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』2004
・安来市教育委員会『経塚鼻遺跡発掘調査報告書　主要地方道安来伯太日南線新世紀道路（改良）工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』2006
・松江市教育委員会　財団法人松江市教育文化振興財団『大井窯跡群　山津窯跡・山津遺跡発掘調査報告書　一般県道本庄福富松江線（大海崎工区）新世紀道路ネットワーク整備事業（改良）に伴う発掘調査』2006

第３章　永昌寺の谷遺跡の調査

永昌寺の谷遺跡は、羽根ヶ谷山（標高360.9m）から北東方向に伸びる丘陵の先端部に位置する。調査は便宜上、発掘調査区を４区に分け、それぞれⅠ区～Ⅳ区と呼んだ。Ⅰ区は平成15～17年度、Ⅱ区は平成18年度、Ⅲ区は平成17年度、Ⅳ区は平成17～18年度に現地調査を行った。各調査区の概要は以下のとおりである。

［Ⅰ区］

Ⅰ区は平野部から一番奥まった場所に位置し、南西端のＬ字状に伸びる標高約88～93mの尾根筋とその西側斜面に立地している。調査面積は1,818㎡で、遺構は調査区外の平野部に向かって南側に伸びる丘陵尾根筋に広がっていると考えられる。

調査の結果、弥生時代と古墳時代の遺構を確認している。弥生時代の遺構は、竪穴住居跡８棟・掘立柱建物跡４棟・柵列等の集落跡を検出した。時期は中期後半から後期にかけてである。古墳時代の遺構は、古墳１基・横穴墓１基で、いずれも出土遺物が無く、時期等は不明である。

［Ⅱ区］

Ⅰ区から続く標高約80～90mの丘陵尾根部と南東方向に伸びる尾根を「U」字形に囲む丘陵斜面に広がっている。調査面積は5,344㎡で、遺構は調査区外の南側斜面に広がっていると推定される。

調査の結果、弥生時代から奈良時代にかけての遺構を確認している。弥生時代の遺構は、竪穴住居跡９棟・加工段４基等の集落跡を検出した。時期は中期後半から後期にかけてである。古墳時代の遺構は小型の円墳１基であるが、出土遺物はなく時期等は不明である。奈良時代の遺構は丘陵斜面の大規模な加工段から検出されており、掘立柱建物17棟、鍛冶遺構等を検出している。出土遺物として形象硯等の陶硯や分銅形土製品、ヘラ描き文字を伴う須恵器などが出土している。

［Ⅲ区］

Ⅱ区から北東方向に伸びる標高約77～80m丘陵尾根筋と南東斜面に相当する。調査面積は1,475㎡で、地表観察からⅢ区横穴墓群は北東側の調査区外の斜面に続いていると推定される。

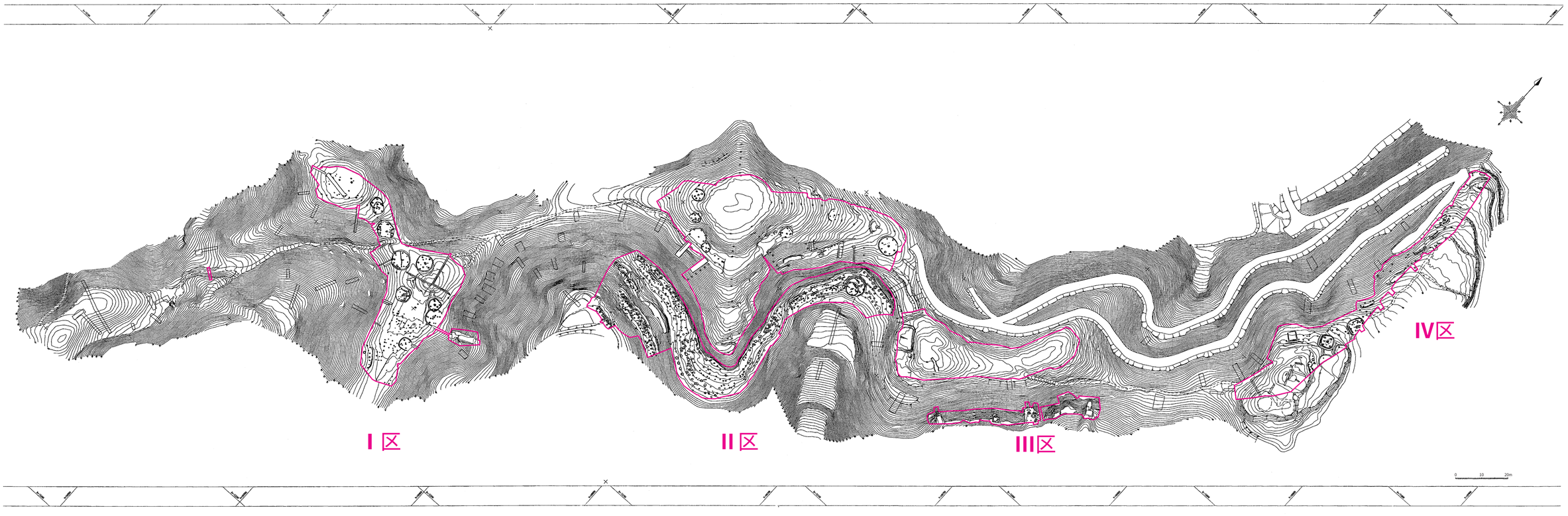
調査の結果、古墳２基・横穴墓５基を検出した。このうち、Ⅲ区３号・４号横穴墓の共有墓道内から島根県初確認となる横穴墓に伴う２間×１間の掘立柱建物跡が検出されている。

なお、丘陵上から遺構に伴わないが、石製紡錘車が出土している。

［Ⅳ区］

遺跡の北東端にあたり、北側の母里の街に向かって伸びる標高約62～74m丘陵尾根筋の西側約1/2～1/4の調査を行った。調査面積は1,263㎡で、遺構は調査区外の丘陵尾根筋の東側に続いている。

調査の結果、弥生時代と古墳時代の遺構を確認している。弥生時代の遺構は、竪穴住居跡４棟・掘立柱建物跡２棟・布堀建物跡・加工段等の集落跡と墳丘墓・土壙墓の埋葬施設を検出した。これらの時期は弥生時代後期後半～末である。古墳時代の遺構として、古墳７基を検出した。Ⅳ区丘陵部のピークに築かれた方墳であるⅣ区１号墳は古墳時代中期後半～後期にかけてと推定され、その他の時期が特定される古墳は、いずれも古墳時代後期に築造である。



第３図　永昌寺の谷遺跡調査区配置図（Ｓ＝１／1,000）

第１節　Ｉ区の調査

［１号墳］

遺　構（第５図）

調査区のほぼ中央には直径約11mの塚状の高まりが存在し、形状からみて古墳である可能性を考え調査を行った。

表土を除去したところ、地山である橙褐色土の層がすぐに現れ、盛土は存在しなかった。主体部も検出されず、遺物も出土しなかったため、古墳と断定することはできなかった。

［ＳＩ０１－１］

遺　構（第６図、第８図）

隅丸方形の竪穴住居跡である。一辺は約4.5m、地表面から床面までの深さは西側部分で約60㎝を測る。東側の壁面は遺存状態が悪く不明瞭である。ＳＩ０１－２が廃絶してからさほど時間を開けず建てられたものとみられ、ＳＩ０１－２と重複する部分の床面には、ＳＩ０１－２の床面直上から粘土を張って床を構築している。床面上には四隅に直径約60㎝、深さ約60～70㎝程度の柱穴を配し、床面中央やや東よりには直径約75㎝、深さ約35㎝の中央ピットが掘られている。壁面に沿って幅約10㎝、深さ約５㎝程度の壁体溝が廻るが、東壁沿いの部分は消滅しており不明瞭である。

ＳＩ０１－１出土遺物（第28図１～３）

本遺構からは弥生土器とみられる破片が数点出土したが、風化がひどく時期を特定できるものは少ない。１は低脚坏の脚部とみられ、底径は8.4㎝を測る。Ｖ－３様式以降のものと思われる。２・３は砥石、２は青灰色の色調を呈し、表面には擦痕が残る。３は淡茶褐色の色調で、断面は三角形を呈する。一面に擦痕が残る。

［ＳＩ０１－２］

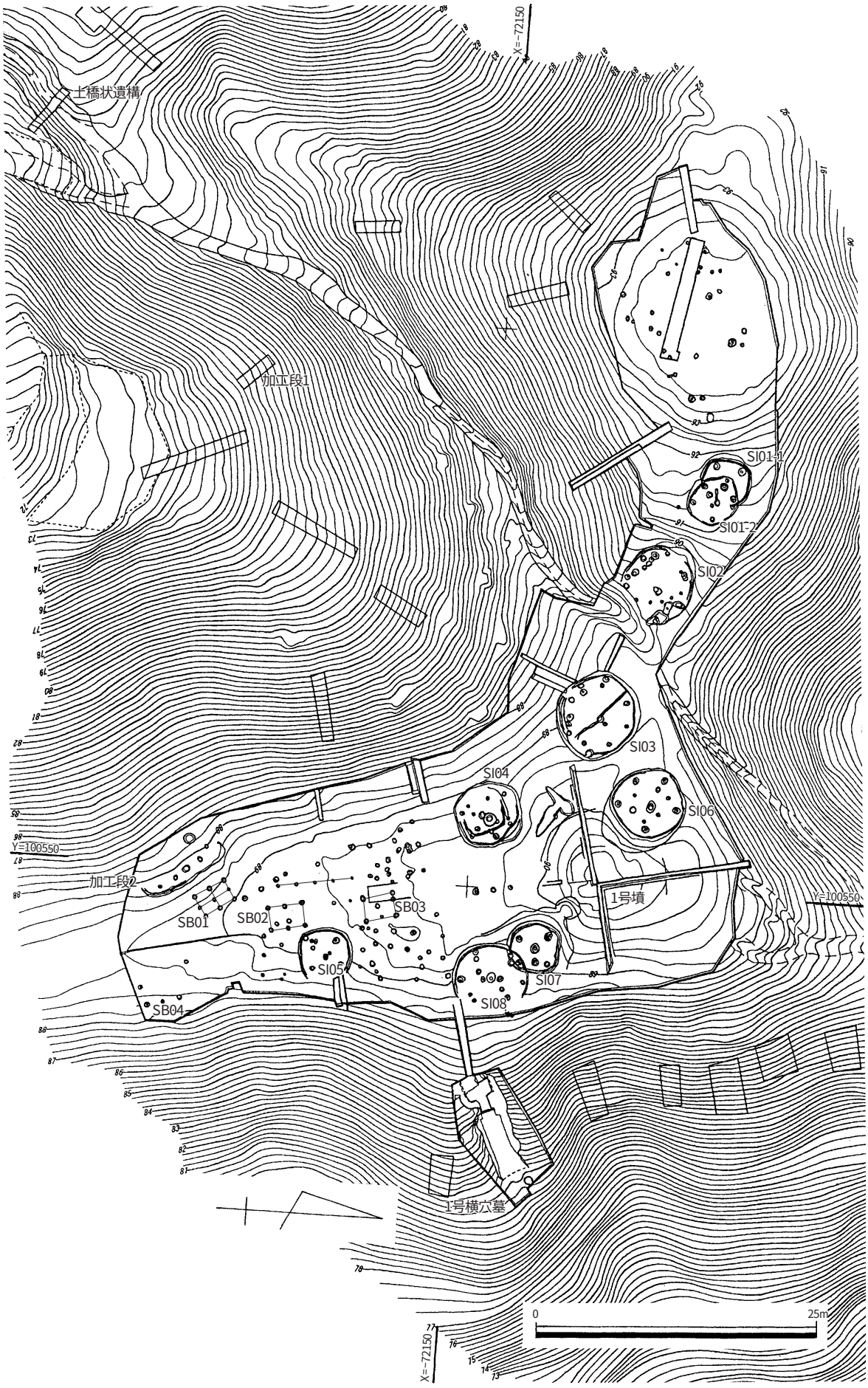
遺　構（第７図、第８図）

一辺が約2.7mを測る五角形の竪穴住居跡である。柱穴は直径約30～45㎝、深さ約45～60㎝のものが壁面のコーナーに沿うように５箇所掘られている。床面中央やや北寄りに直径約60㎝、深さ約15㎝の中央ピットがあり、ここから西壁に向かって浅い溝が延びているが、途中で消滅している。また中央ピットの南に隣接して、直径約30㎝、深さ約14㎝の小ピット一基が存在する。

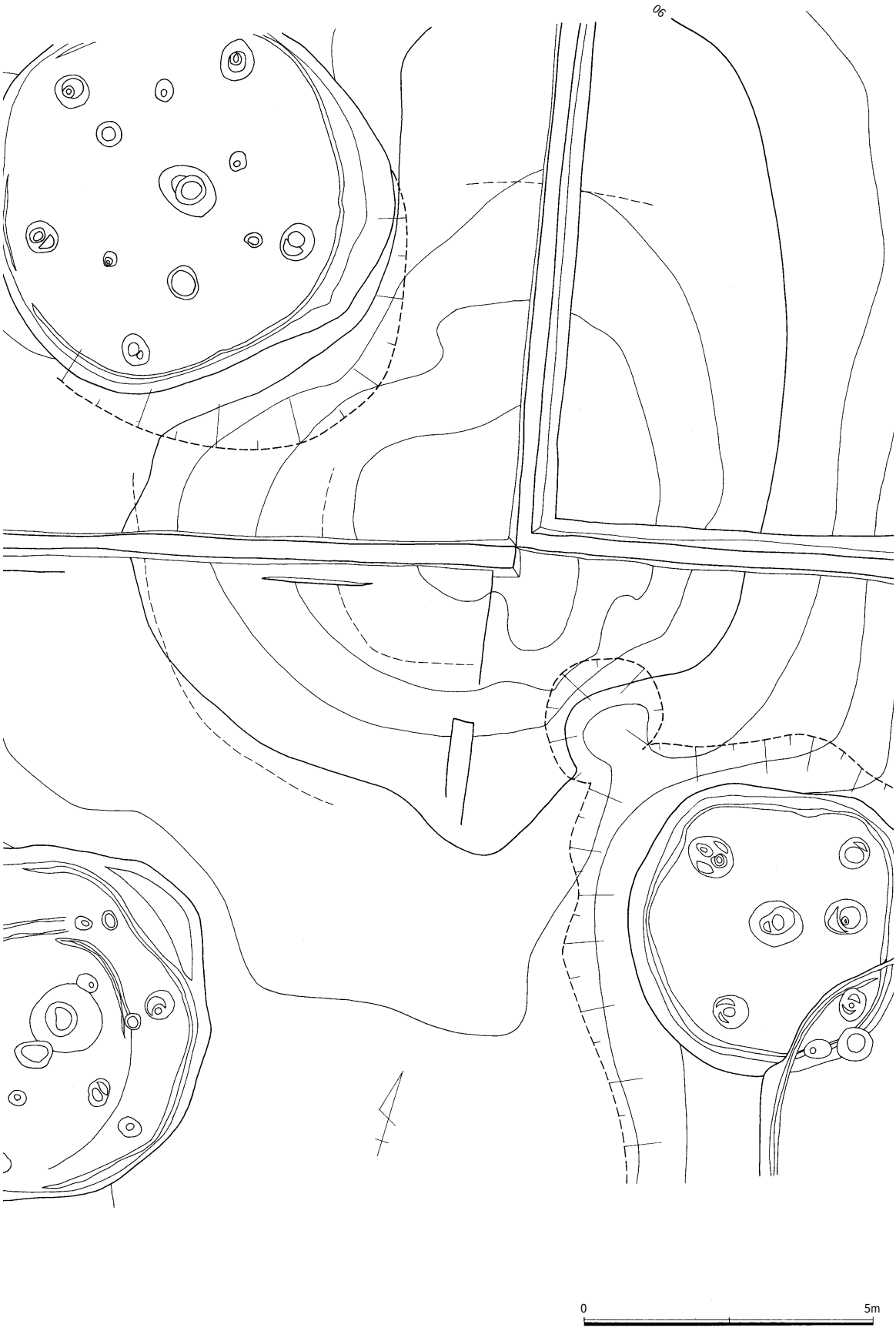
住居跡壁面に沿って、幅約15㎝、深さ約５㎝程度の壁体溝が存在しているが、西端コーナー付近と北壁面及び東側壁面でははっきりと確認できない部分もあった。

この住居の廃絶後間もない時期に、上部にＳＩ０１－１が造られたとみられる。

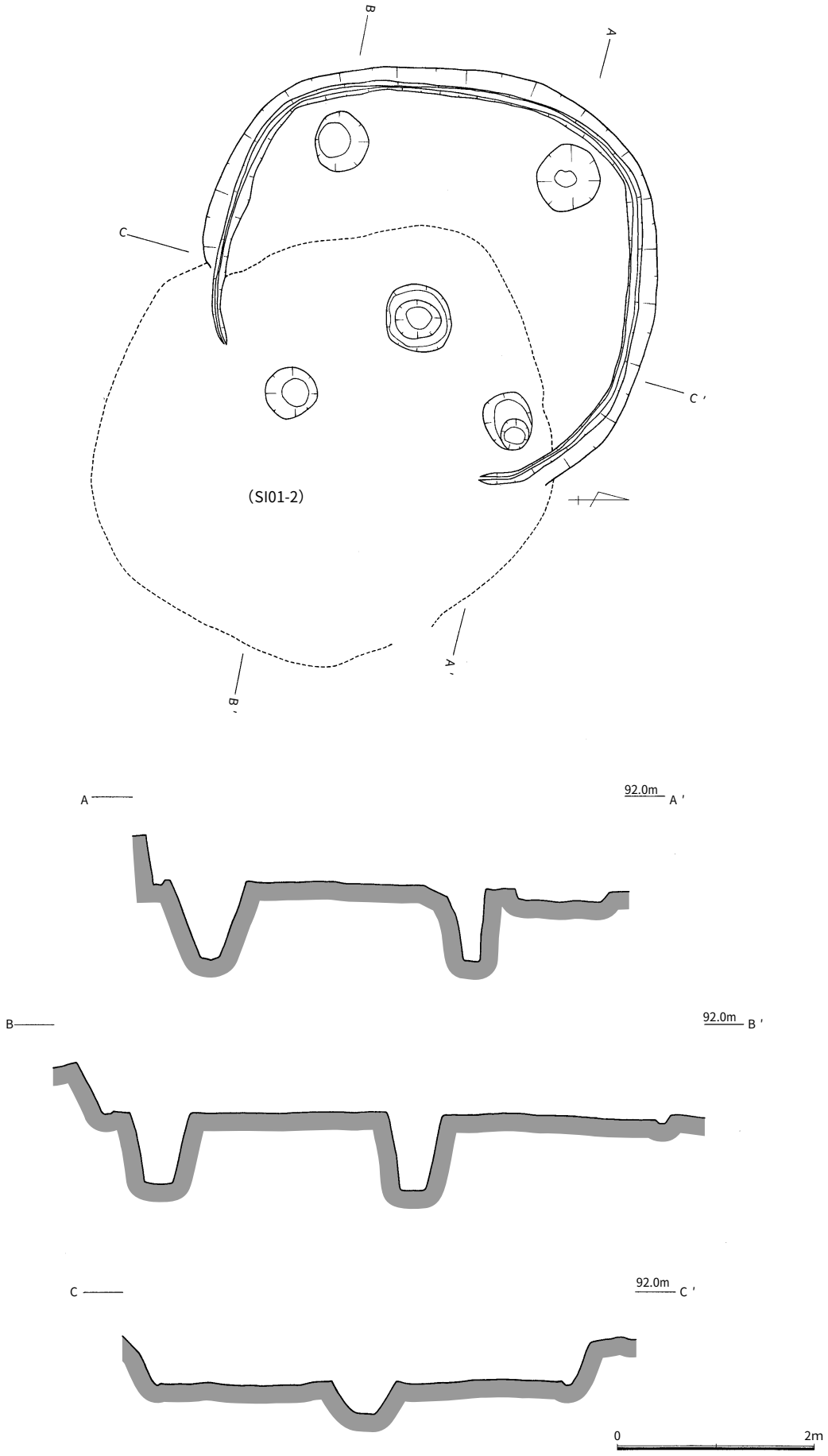
床面から弥生時代後期の土器片が出土しているが、いずれも小片であるため、図化できるものはなく、時期も特定できなかった。しかし、後述するＳＩ０１－２がＶ－３様式以降であることからみて、ここではＳＩ０１－１とほぼ同時期かそれに先行するものであるとしておく。



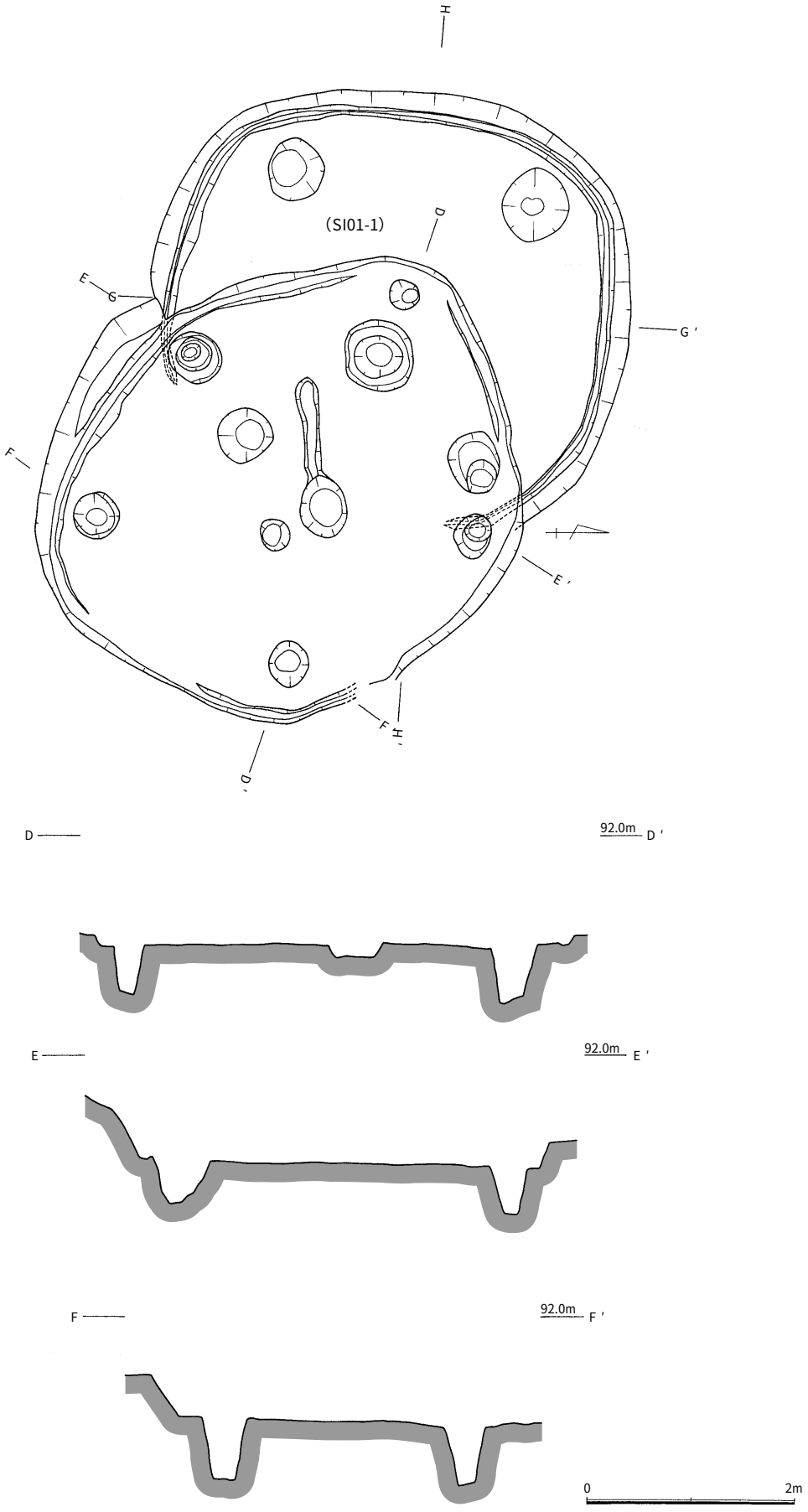
第４図　Ⅰ区遺構全体図（Ｓ＝１／500）



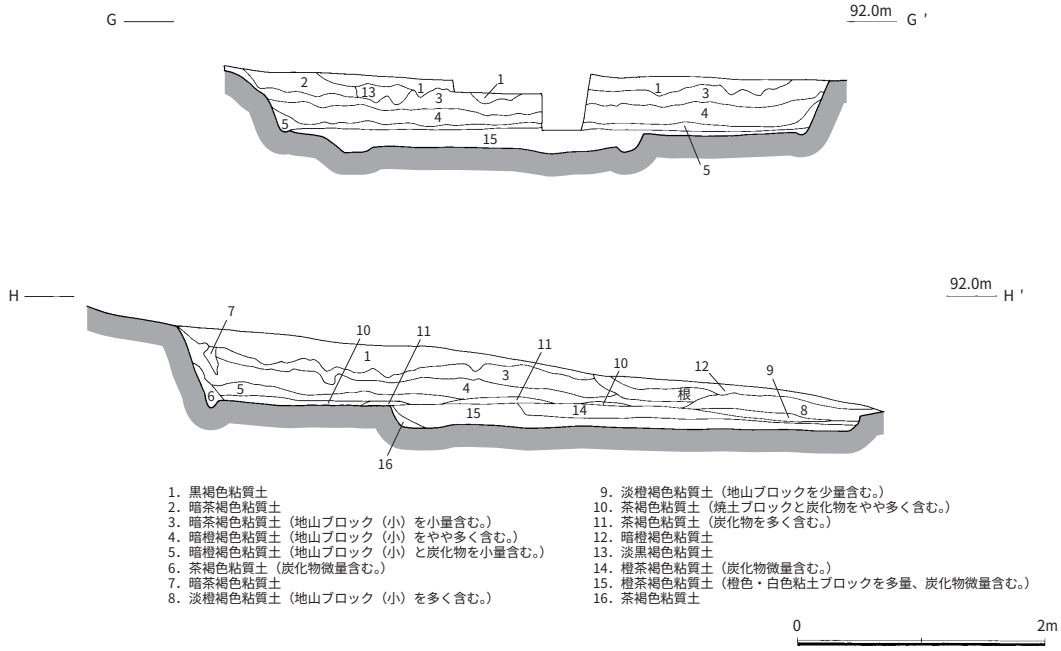
第５図　Ⅰ区１号墳実測図（Ｓ＝１／100）



第６図　Ⅰ区SI01-1実測図（Ｓ＝１／60）



第７図　Ⅰ区SI01-2実測図（Ｓ＝１／60）



第８図　Ⅰ区SI01-1・SI01-2土層図（Ｓ＝１／60）

［ＳＩ０２］

遺　構（第９図、第10図）

直径が約６～７ｍを測る多角形プランの竪穴住居跡である。東側の壁面は後世の土砂流失もしくは山道の造成に伴い失われている。建て替えが行われているらしく、床面には多数の柱穴が存在する。床面ほぼ中央には長径約80㎝、短径約40㎝、深さ約35㎝の二段掘りのピットがあり、これが中央ピットであると思われる。この中央ピットの東側には、弧を描くように直径約25㎝、深さ約15㎝～30㎝の小型のピットが約70㎝の間隔で５基掘られている。壁体溝は幅約10㎝、深さ約５㎝のものが壁に沿って検出された。

また東壁付近では1.2ｍ×60㎝、深さ50㎝の長方形プランを呈し、床面中央に直径約15㎝、深さ約25㎝の小ピット１個が掘られた土壙（ＳＫ０２）も検出している。形状から判断して、落とし穴とみられ、ＳＩ０２が造られた際に上部が削平されたものと考えられる。

ＳＩ０２出土遺物（第28図４）

４は複合口縁を持つ壺の口縁部の破片である。口縁はやや内傾し、端部のみやや外傾する。口径16.6㎝を測る。Ｖ－４様式とみられる。

［ＳＩ０３］

遺　構（第11図・第12図）

直径約８ｍを測る隅丸八角形プランの竪穴住居跡である。主柱穴は直径約35㎝～65㎝、深さ60㎝のものが各コーナー付近に８箇所ある。壁体溝は幅約10～20㎝、深さ約８㎝を測り、南東と南西部分を除いて全周する。南側壁面はある時期に拡張されたとみられ、柱穴と壁体溝が重複している部分がある。

床面の中央には直径60㎝、深さ約50㎝の中央ピットが一基あり、そこを起点にして北西と南東の壁体溝に向って幅20～14㎝、深さ５㎝程の浅い溝が掘られている。

ＳＩ０３出土遺物（第28図５）

床面からは５の口径15.0㎝の複合口縁甕の口縁部のほか、弥生土器片数点が出土している。出土土器からみて、弥生時代後期前半（Ｖ－１様式か？）の住居と考えられる。

［ＳＩ０４－１］

遺　構（第13図）

一辺約３ｍ、直径約６ｍを測る六角形プランの竪穴住居跡である。西側は土砂の流失等により、柱穴および壁体溝は検出できなかった。主柱穴は直径約40㎝程度のものが各コーナー付近に存在する。壁体溝は幅約15㎝、深さ５㎝を測る。

床面やや西寄りには、直径1.2ｍ深さ約30㎝を測る、浅い二段掘りの中央ピットが存在する。

北西辺の壁面は、壁体溝とともにやや住居内側に突出しており、壁面には長さ約2.5ｍ、幅約45㎝の三日月形のテラスが付属する。

ＳＩ０４－１出土遺物（第28図６・７）

６は覆土中からの出土で、直接本遺構に伴うものではないとみられるものである。複合口縁の甕で、Ｖ様式以降のものとみられる。全体的に風化が激しく、調整などは不明である。７は床面直上からの出土。頸部より上を欠き、また風化が激しいため、不明な部分が多いが、頸部には圧痕文帯をめぐらせている点などからみて、弥生時代中期末（Ⅳ－１またはⅣ－２様式）とみられる。

［ＳＩ０４－２］

遺　構（第13図）

ＳＩ０４－１の床面下から検出した隅丸方形プランの竪穴住居跡である。ＳＩ０４－１の構築時に削平を受けているため、壁面は基底部をわずかに残すのみでほとんど消滅していた。

一辺は約4.3ｍを測り、南西部コーナー付近の壁面は消失している。北西コーナー付近には壁体溝が残存するが、その他の部分では見受けられない。

主柱穴は直径45～30㎝のものが各コーナー付近に４基あり、床面のほぼ中央には、最大幅約65㎝の楕円形の中央ピットが存在する。出土遺物がなかったため、遺構の時期ははっきりしないが、ＳＩ０４－１を構築する際に、本遺構を貼床によって埋め込んでいることから、ＳＩ０４－１と時期的にさほど差がないものと思われる。また、床面上には焼土や炭化物が多くみられることから、本遺構が火事で焼失した後、同所に住居を建て直した可能性もあるとみられる。

［ＳＩ０５］

遺　構（第14図）

一辺約４ｍ、床面までの深さ約50㎝を測る隅丸方形の竪穴住居跡である。東壁部分は崩落により消滅している。主柱穴は４本で、東側の２基が直径約40㎝で、西側の２基は直径約20㎝～30㎝で、それぞれ各コーナー近くに掘られている。床面中央には幅約55㎝、深さ約45㎝の楕円形ピットが存在する。壁体溝は底幅約10㎝で、東側部分は消滅しているが、その他の部分ではよく残っている。

なお、住居跡の東端付近には、四角形の石材１点と、角の丸い棒状の石材７点が集中して出土した、本住居跡に伴うものかは断定できないが、四角形の石材は面が滑らかな部分もあり、砥石などの石器である可能性もある。

ＳＩ０５出土遺物（第28図８～10）

８は砥石で、色調は灰白色で、両端部は欠損している。断面は三角形で、各面には擦痕が見られる。９・10は同一個体とみられる壺の口縁部と底部である。９は口径19.4㎝を測り、口縁部が大きく外反する。外面には凹線などは施されていない。内面は頸部から下はヘラケズリを施す。10は底径6.8㎝で、底部はやや窪んでいる。内面は風化が激しく調整は明瞭でないが、ヘラケズリの痕跡の可能性がある凹凸がみられる部分もある。これらは弥生時代後期後半（Ｖ－３様式）のものとみられる。

［ＳＩ０６］

遺　構（第15・16図）

直径約７ｍを測る五角形の竪穴住居跡である。主柱穴は５基で、直径約60㎝、深さ約50㎝程度のものが各コーナー付近に存在する。床面のほぼ中央には、最大径約１ｍ、深さ約50㎝のピットが存在する。また、中央ピットを取り囲むように、直径30～40㎝、深さ10㎝程度の小型のピット６基も存在している。

壁体溝は北西コーナー付近を除く壁面沿いで検出した。幅約10㎝、深さ約５㎝を測る。

壁体溝のなかった北西部は、住居跡のある周辺の地形ではもっとも低い位置にあり、また、床面の小ピットもこの部分だけやや間隔が広くなっていることから、本住居の入り口は北西部分にあった可能性がある。

出土遺物が皆無であったため、遺構の時期等は不明である。

［ＳＩ０７］

遺　構（第17図）

一辺約4.5ｍを測る五角形の竪穴住居跡である。主柱穴は西側以外の各コーナー付近に直径約50㎝のものが４基あり、深さは北東と南東のピットが約60㎝、北西と南西のピットが約40㎝を測る。北西ピットは建て替え時によるものか、２個のピットが重複している。また、東壁付近にも直径約75㎝、深さ約45㎝のピット一基が存在する。

床面中央には、最大幅約95㎝、深さ約45㎝の中央ピットがある。

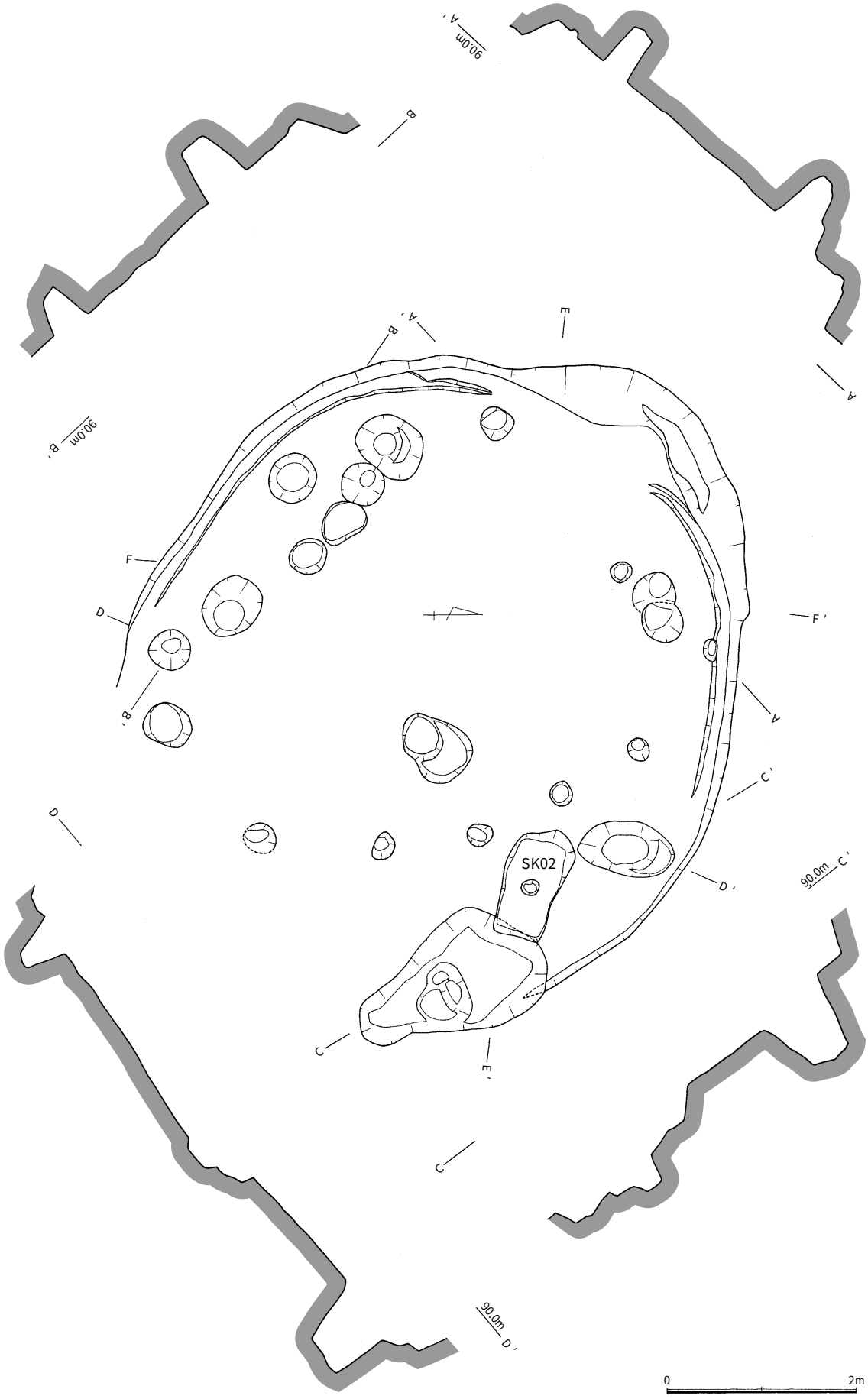
出土遺物がなかったため、遺構の時期は不明であるが、後述するＳＩ０８の埋没後に、壁面の一部を壊して構築されていることから、ＳＩ０８の時期よりやや時代が下がるものと推定される。

［ＳＩ０８］

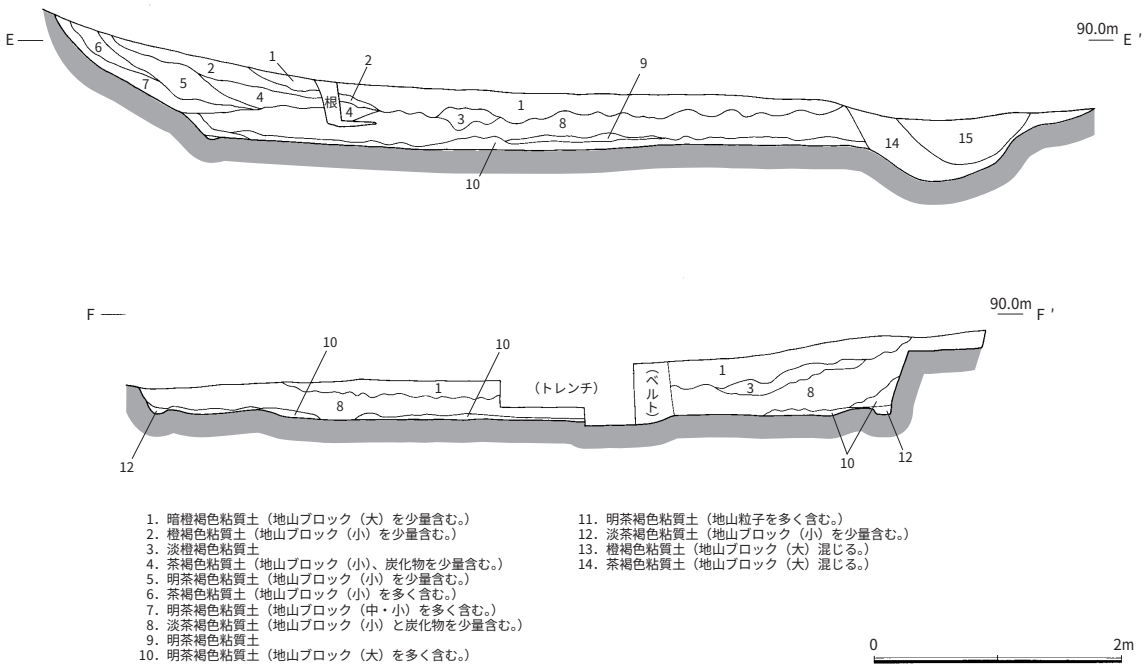
遺　構（第18図）

直径約７ｍ、一辺約2.5ｍを測る多角形の竪穴住居跡である。北西部分の壁面はＳＩ０７の構築時に破壊されている。また、東側部分は土砂の流失により消失している。

主柱穴は壁面沿いに直径約65㎝～40㎝、深さ約40㎝のピット４基が残存しており、さらにやや内



第９図　Ⅰ区SI02、SK02実測図（Ｓ＝１／60）



第10図　Ⅰ区SI02土層図（Ｓ＝１／60）

側には、直径約50㎝前後の浅いピット４基が方形に配置されている。床面のほぼ中央には、長径約90㎝、深さ約20㎝の中央ピットがあり、その両側にもピット２基が付属している。

壁体溝は遺構の遺存状況の悪い東壁部分以外で検出され、幅約15㎝前後、深さ約４㎝を測る。

床面から出土した土器の年代観からみて、本遺構は弥生時代中期末～後期初頭頃のものであると考えられる。

ＳＩ０８出土遺物（第28図11～14）

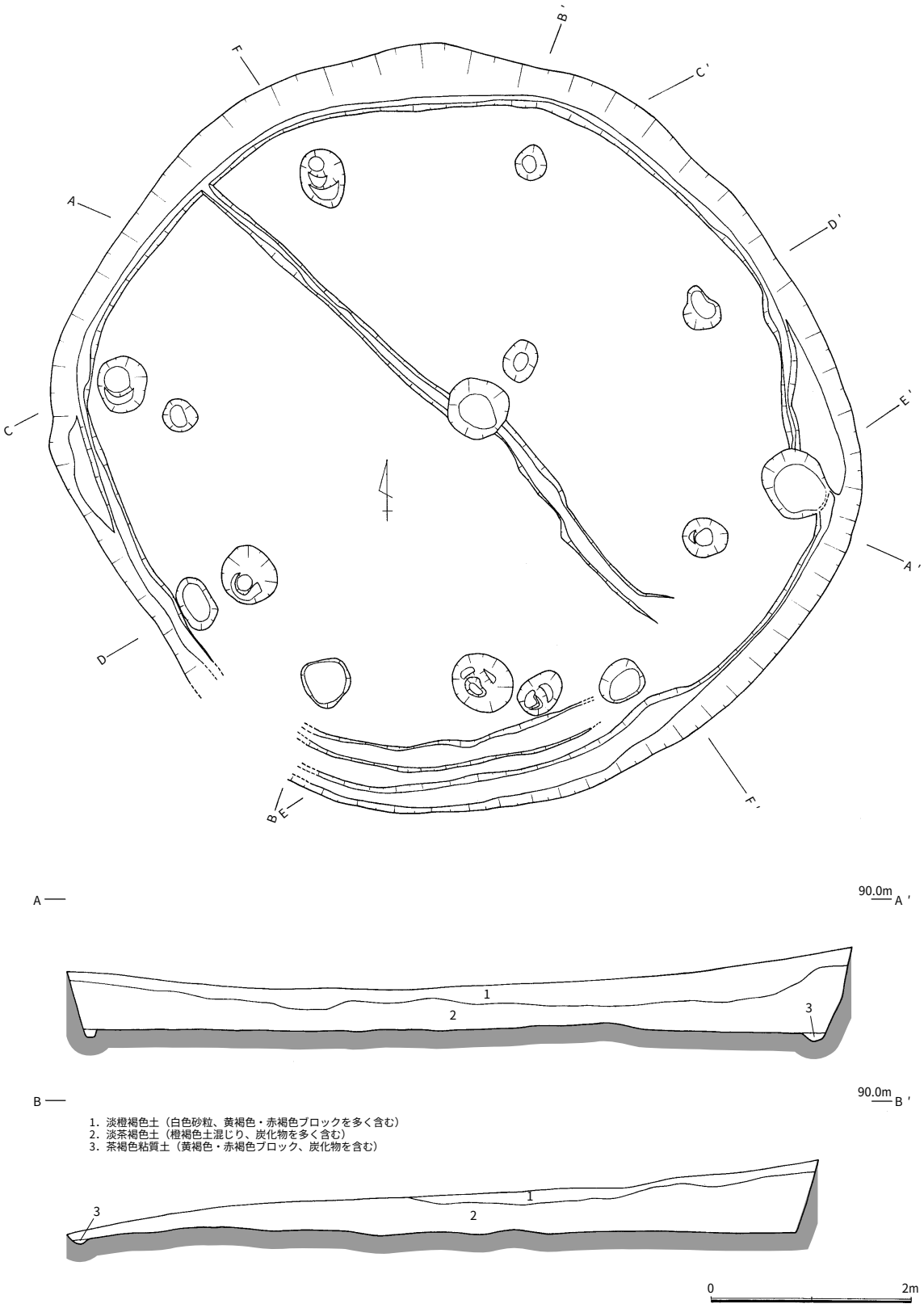
11は床面付近からの出土で、口縁端部を欠くため口径は不明であるが、概ね10㎝程度であったと思われる。風化が激しく、調整は不明瞭であるが、Ⅳ－２またはⅤ－１様式と推定される。

12～14は覆土内からの出土。12は口径15.4㎝の甕の口縁部で、風化が激しく、調整は不明瞭だが、内面は頸部以下にヘラケズリを施す。Ⅴ－２様式以降のものとみられる。13は壺または甕の底部で、底径は5.6㎝で、内面の一部に指頭圧痕が残る。14は甕の口縁部で、風化が激しく調整は不明瞭。口縁端部はやや厚みがある。口縁の形状から、Ⅴ－２様式以降のものとみられる。

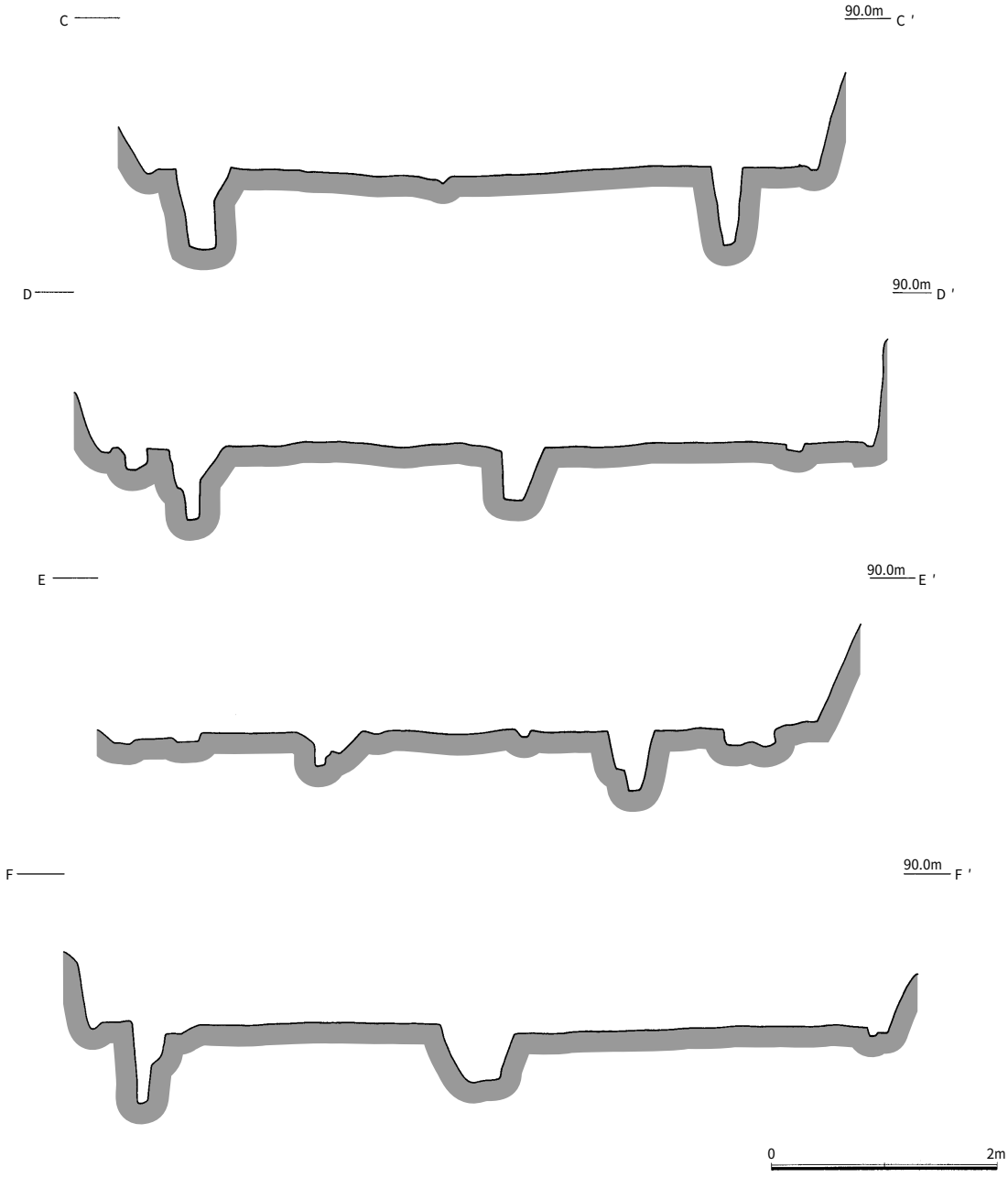
［ＳＢ０１］

遺　構（第19図）

２間×２間の９本柱の掘立柱建物跡である。主軸を北西－南東方向にとり、東西の列は径40㎝程度のピットを、中央列は径30㎝程度の小規模なピットを配する。ピットの深さはすべて15～20㎝程度で、柱間距離は北西－南東軸が約1.6m、南西－北東軸が約１mである。遺物が出土していないため、遺構の時期・性格等は不明である。



第11図　Ⅰ区SI03実測図（１）（Ｓ＝１／60）



第12図　Ⅰ区SI03実測図（２）（Ｓ＝１／60）

［ＳＢ０２］

遺　構（第20図）

１間×２間の６本柱の掘立柱建物跡である。主軸を北西－南東方向にとり、ピットの規模は直径約35㎝、深さ約30～50㎝を測る。ピット間の距離は南北が約1.1m、東西が約1.5mを測る。出土遺物がないため、遺構の時期・性格等は不明である。

［ＳＢ０３］

遺　構（第21図）

１間×１間の４本柱の掘立柱建物跡である。主軸をやや北西－南東方向にとり、ピットの規模は直径約55～45㎝、深さ約30～40㎝を測る。ピット間の距離は南北が約2.3m、東西が約1.6mを測る。出土遺物がないため、遺構の時期・性格等は不明である。

［ＳＢ０４］

遺　構（第22図）

調査区南端付近で検出した掘立柱建物跡である。現状ではＬ字型にピットが４基並んでいるが、もとは１間×２間の６本柱であったと推定される。主軸をやや北西－南東にとり、ピットの規模は直径約30～40㎝、深さ約40～50㎝を測る。ピット間の距離は、南北が約1.1～1.2m、東西が約1.2mを測る。出土遺物がないため、遺構の時期・性格等は不明である。

［加工段１］

遺　構（第23図）

Ⅰ区南側谷部斜面で検出した加工段状の遺構である。遺構の南部は消滅しているが、残存部の規模は長辺約８m、短辺約２mを測り、北側には幅約20m、深さ約７㎝壁体溝状の遺構がコの字にめぐっている。遺構面上からは柱穴等が全く検出されなかったため、建物跡とは断定できなかった。

加工段１出土遺物（第29図１）

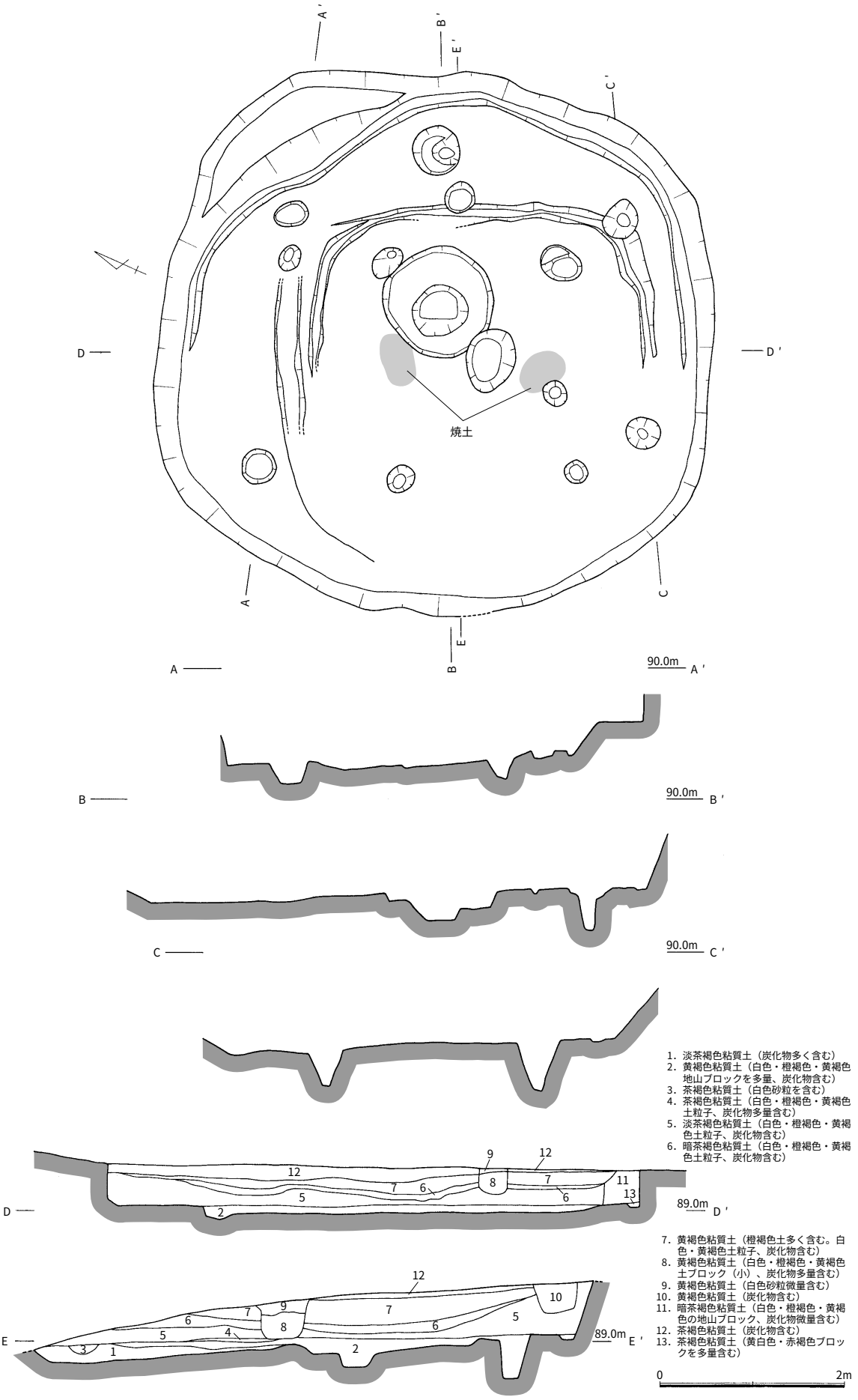
１はサヌカイト製の石鏃で、尾部を一部欠くが、長さ2.5㎝、最大幅1.7㎝、厚さ３㎜を測る。

［加工段２］

遺　構　（第24図）

段の幅は南北が約８m、東西が約２mを測る。段の壁面に沿って直径約30～70㎝、深さ約15～30㎝のピット４つが並んでおり、北端近くの斜面寄りにも直径約30㎝のピット一基が存在する。壁面沿いには底面の幅が15㎝程度の壁体溝が廻っているが、北半部分は依存状態が悪く確認できなかった。

加工段２の西隣わずかに斜面を下がったところに直径約１m、深さ25㎝を測る、底部に炭化物層のある土壙一基を検出したが、本加工段との関連は不明である。



第13図　Ⅰ区SI04-1、SI04-2実測図（Ｓ＝１／60）

［１号横穴墓］

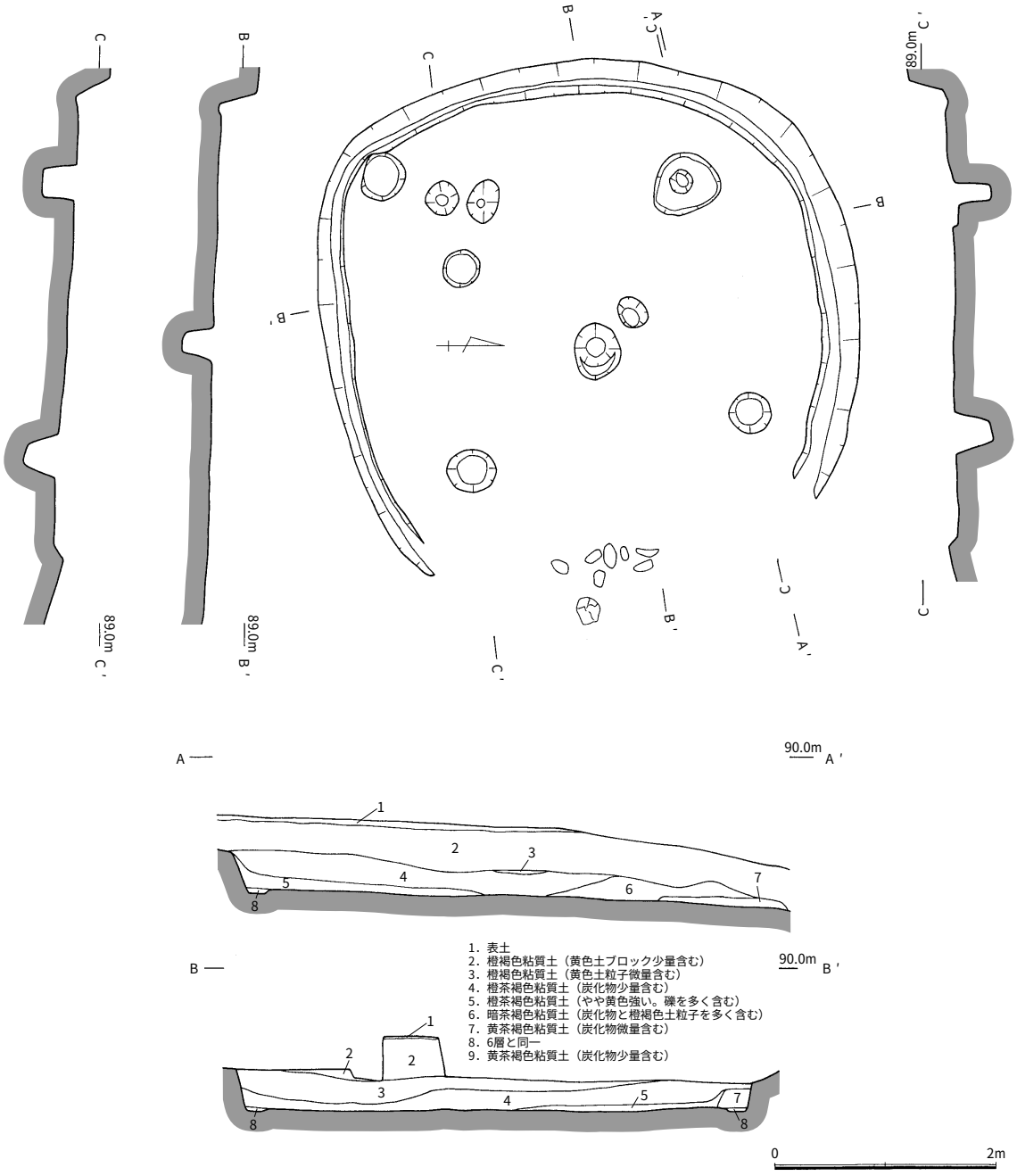
遺　構（第25・26図）

Ⅰ区西側斜面において、調査前に伐採した木を処理していた際、斜面の一部にわずかに窪んだ箇所を発見した。

横穴墓が存在する可能性を考えて、その箇所にトレンチを設定して表土を除去したところ、横穴墓の墓道と見られるプランを検出したことから、トレンチを拡張して調査を行った。

その結果、この横穴墓は開口方向を北東にとるもので、墓道の長さは約5.7m、上部幅は最大で約３m、下部幅は墓道先端付近で約2.5m、閉塞部前で約1.8mを測る。

墓道部は上端まで橙褐色や茶褐色の粘質土で埋没しており、上面には黒色土の堆積が見られた。



第14図　Ⅰ区SI05実測図（Ｓ＝１／60）

横断ベルトの土層を観察したところ、墓道埋没後に再度掘り返したような層が見受けられたため、追葬が行われたものと推定した。

閉塞部付近まで掘り進むと、閉塞部前面あたりから、それまで堆積のみられた粘質土層が途絶え、大型の地山ブロックの堆積が顕著になってきた。玄門部に達すると地山ブロックのみが堆積するようになった。

閉塞部は奥行き約60㎝、幅約1.2ｍで、玄門前の床面には長さ約１ｍ、幅約15㎝、深さ約５㎝ほどの溝状の掘り込みがあり、ここに板材などを立てて閉塞を行ったとみられる。

玄門部は長さ1.3ｍ、幅約80㎝を測るものであったが、玄室内まで掘り進めた結果、玄門と玄室は天井部が全て崩落しており、崩落した地山の土砂が床面の直上から間層を挟まず堆積していることがわかった。

玄室は前半部を完掘した結果、平入りテント型であったと推定した。玄室の奥壁沿いには、５㎝の段差をつけて幅約90㎝の屍床が設けられており、完掘して全容を明らかにしたかったが、玄室の上部は高い崖面になっており、玄室内部の土砂をすべて取り除くと、崖面が崩壊する危険性があったため、サブトレンチによって奥壁の一部を確認するにとどめ、それ以上の調査を断念した。

なお、墓道部及び玄室内から遺物は一切出土しなかった。

［土橋状遺構］

遺　構（第27図）

Ｉ区南西の尾根からＩ区へ向かって山道が通っており、この山道は細い尾根筋の部分では土橋状になっている部分があった。

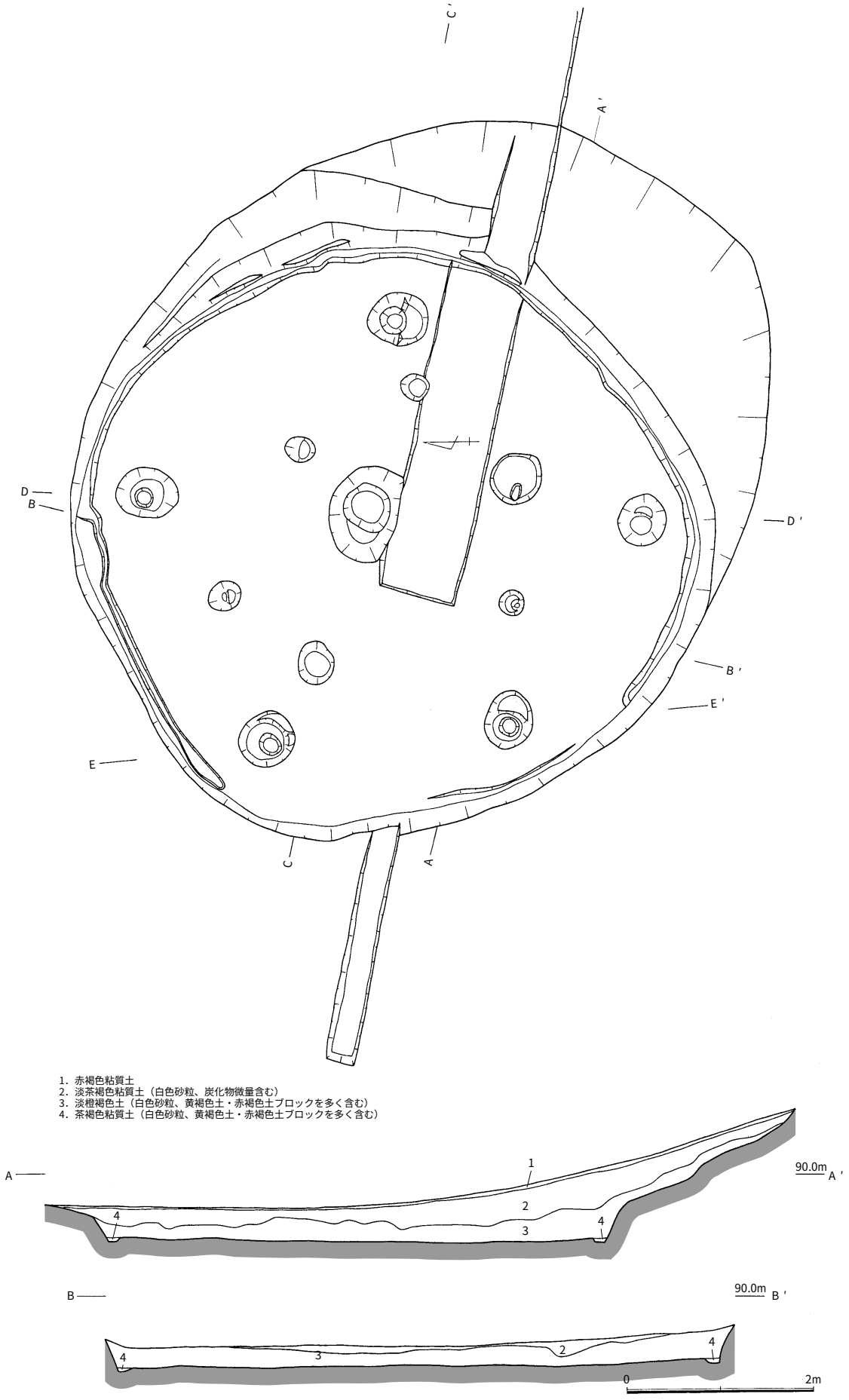
そこで部分的にトレンチを設定し、断面を確認することになった。

その結果、地山を若干削平し、その上に約1.5ｍの高さまで版築状に盛土を施して造られていることが判明した。通路面の幅は場所によって40㎝～80㎝とまちまちだが、本来は１ｍ程度であったものと考えられる。

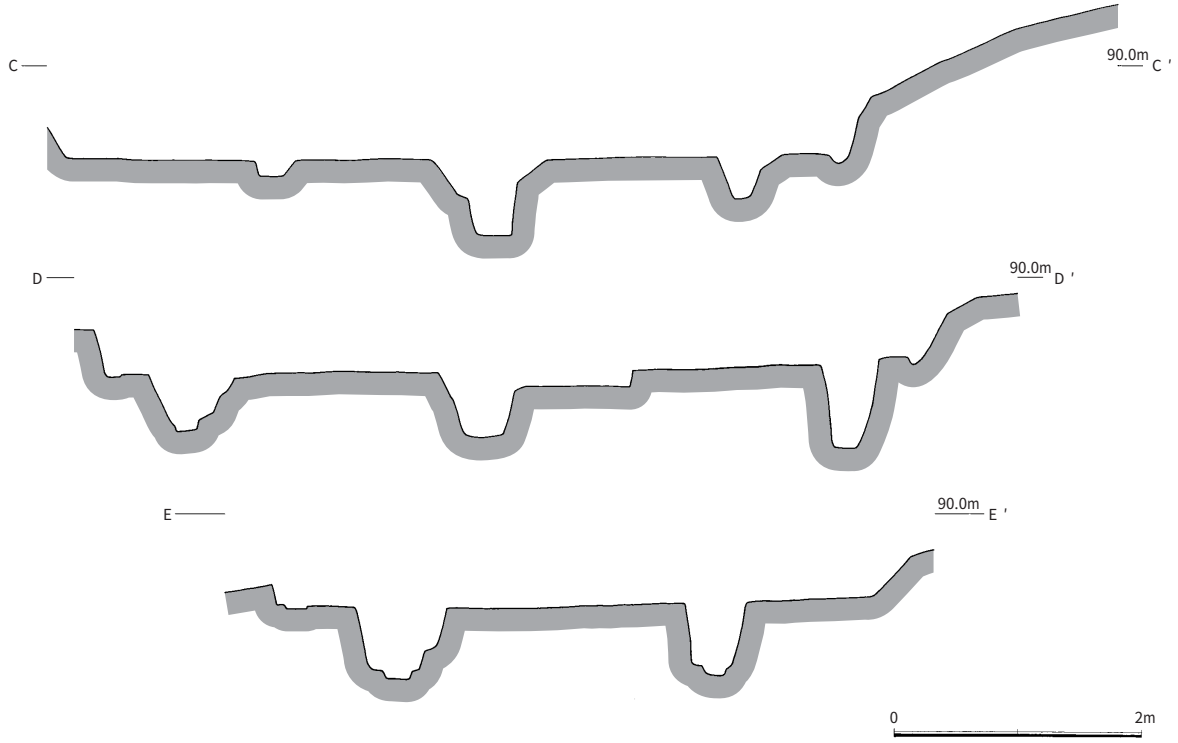
遺物が出土しなかったため、構築年代は不明である。

［遺構に伴わない遺物］（第29図２～10）

２は口径16.2㎝、器高約5.5㎝を測る須恵器坏身である。底部付近には回転ヘラケズリを施し、口縁端部をやや外に折り返し、外面には一条の沈線を施す。３は須恵器蓋坏の坏身である。口縁端部と底部を欠いているが、10㎝程度の口径のものとみられる。胴部やや下部から底部にかけて回転ヘラケズリを施す。４は弥生土器の甕の口縁部で、全体に風化が激しい。口径は16.4㎝を測る。形態からみてＶ－３様式とみられる。５は口径11.8㎝を測る須恵器壺の口縁部である。口縁端部はやや内傾し、頸部から上は内外面とも回転ナデ調整を施す。内側頸部以下には当て具痕がみられる。26は磨製の穂摘具（石包丁）とみられるものである。長さは16㎝、幅3.9㎝、厚さ８㎜を測り、平面形は長方形、断面形も角のやや丸まった長方形を呈する。両端部には紐を掛けていたとみられるＶ字状の抉りを持つ。刃部の区別は明瞭ではない。表面は4面ともよく研磨されており、部分的に擦痕が見られる。７は弥生土器の鼓形器台器受部の破片である。口径は16.6㎝で、器受部は外方に大きく反っており、筒部の太さは5.8㎝を測る。



第15図　Ⅰ区SI06実測図（１）（Ｓ＝１／60）

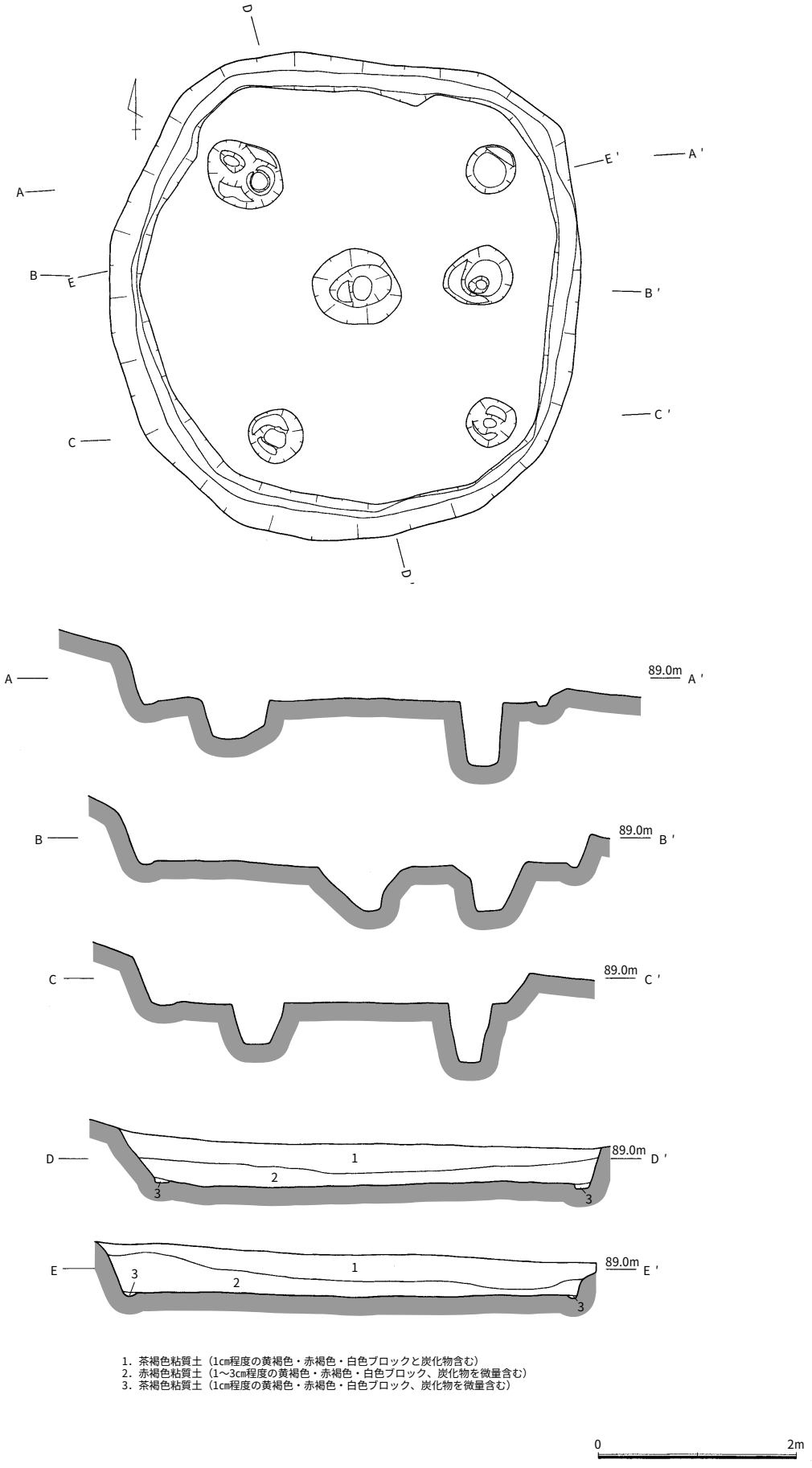


第16図　Ⅰ区SI06実測図（２）（Ｓ＝１／60）

８・９は土師器の手づくね土器である。８は口径3.4㎝、器高2.6㎝で、内外面に指頭圧痕が明瞭に残る。９は口径5.6㎝、器高5.4㎝で、内外面ともに指頭圧痕が明瞭に残る。10は弥生土器の甕の口縁部である。口径16.8㎝で、器表面は内外面ともナデ調整を施し、内面頸部以下にはヘラケズリを施す。口縁端部は外方にやや折り曲げている。草田６期のものとみられる。

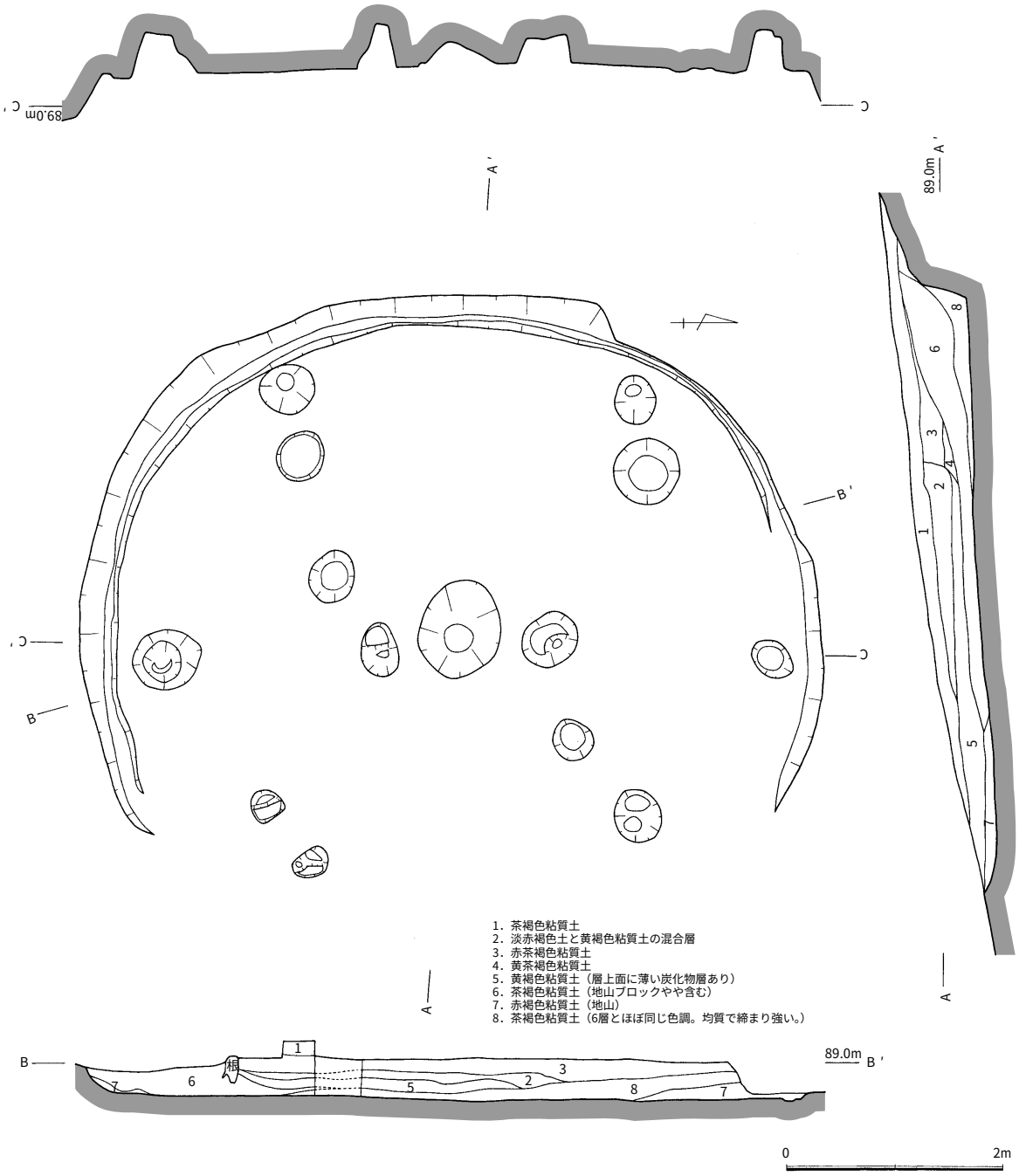
【参考文献】

・松本岩雄「出雲・隠岐地域」『弥生土器の様式と編年（山陽・山陰編）』木耳社　1992
・松山智弘「小谷式再検討－出雲平野における新資料から－」『島根考古学会誌 第17集』島根考古学会　2000
・松山智弘「出雲における古墳時代前半期の土器の様相」『島根考古学会誌 第８集』島根考古学会　1991
・鹿島町教育委員会『南講武草田遺跡』－講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書５－　1992
・平井　勝『弥生時代の石器』考古学ライブラリー64　ニューサイエンス社　1991

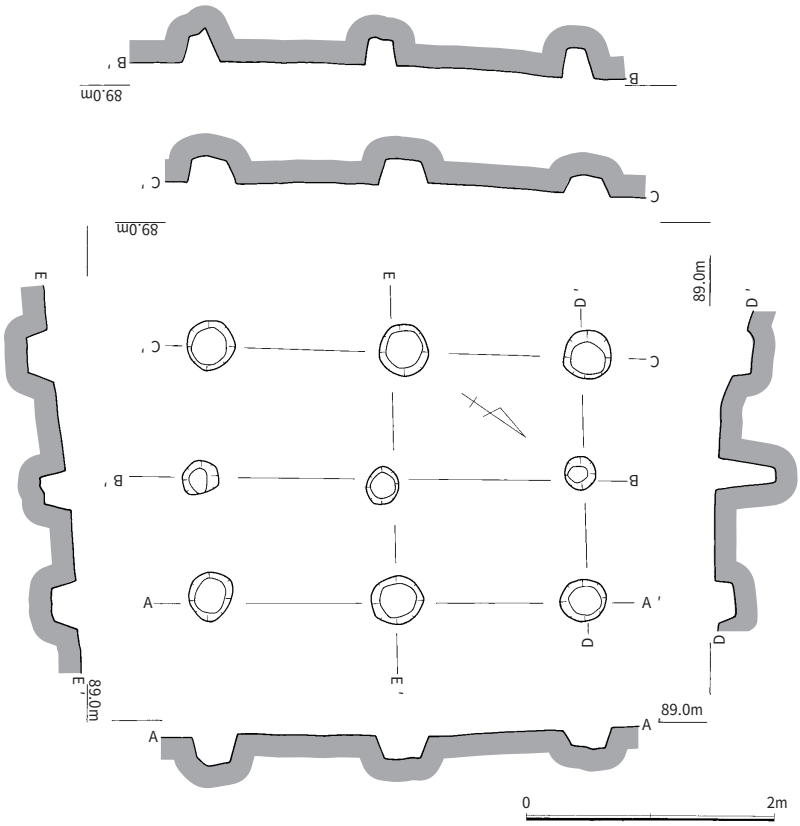


1. 茶褐色粘質土（1cm程度の黄褐色・赤褐色・白色ブロックと炭化物含む）
2. 赤褐色粘質土（1～3cm程度の黄褐色・赤褐色・白色ブロック、炭化物を微量含む）
3. 茶褐色粘質土（1cm程度の黄褐色・赤褐色・白色ブロック、炭化物を微量含む）

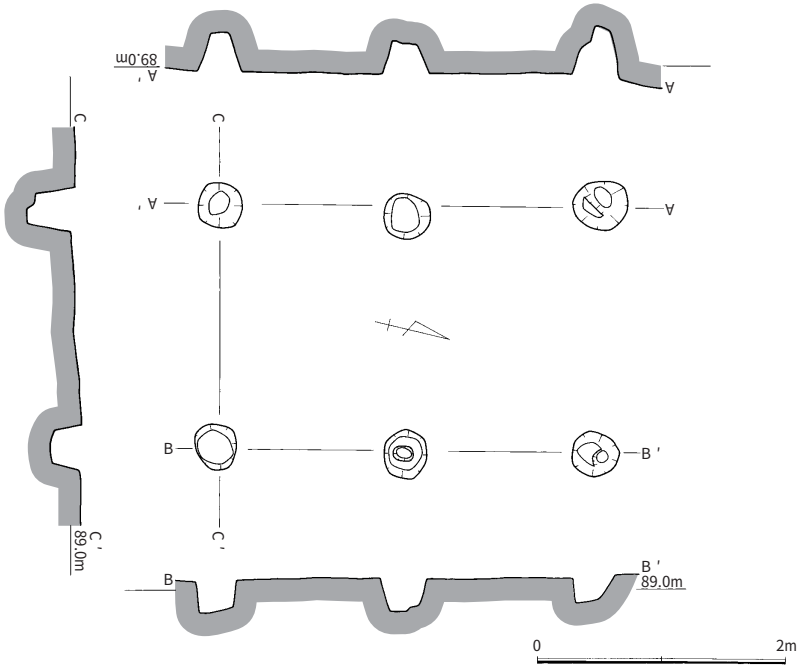
第17図　Ⅰ区SI07実測図（Ｓ＝１／60）



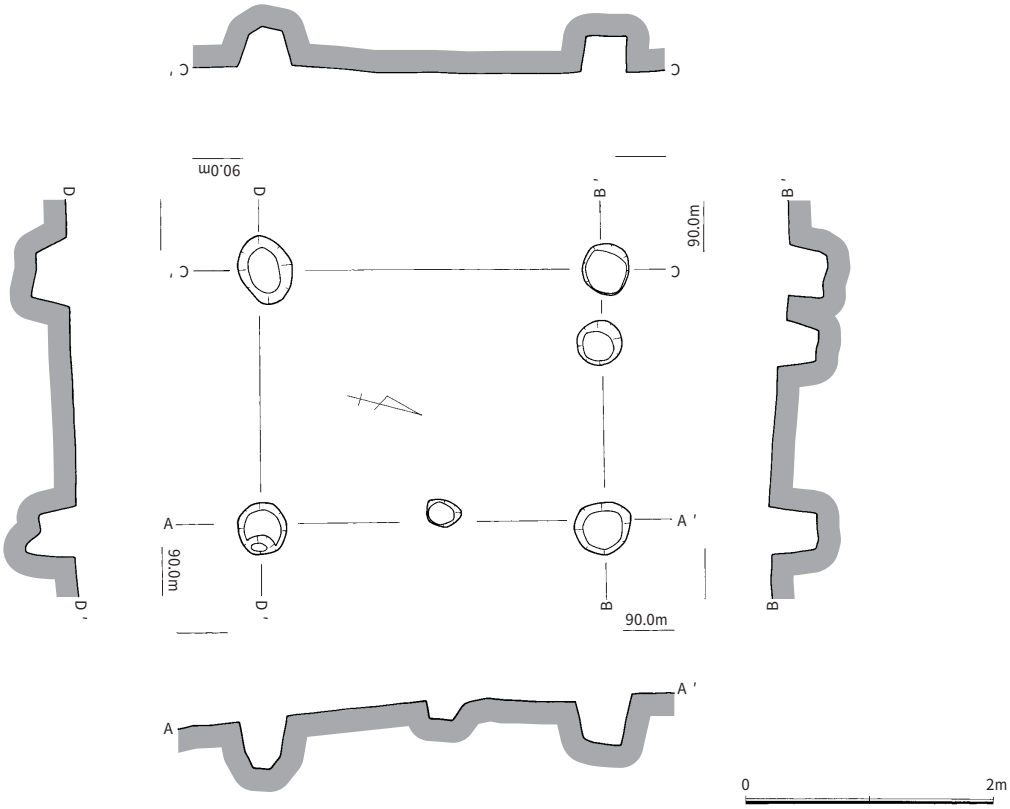
第18図　Ⅰ区SI08実測図（Ｓ＝１／60）



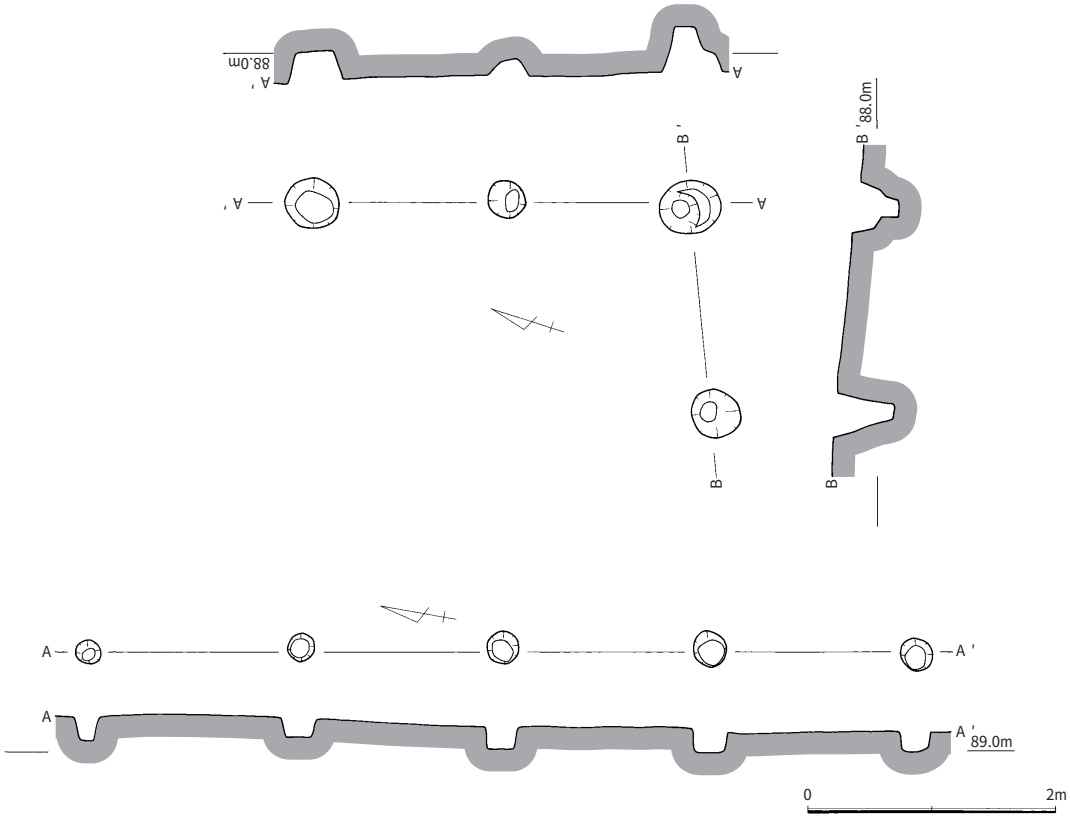
第19図　Ⅰ区SB01実測図（Ｓ＝１／60）



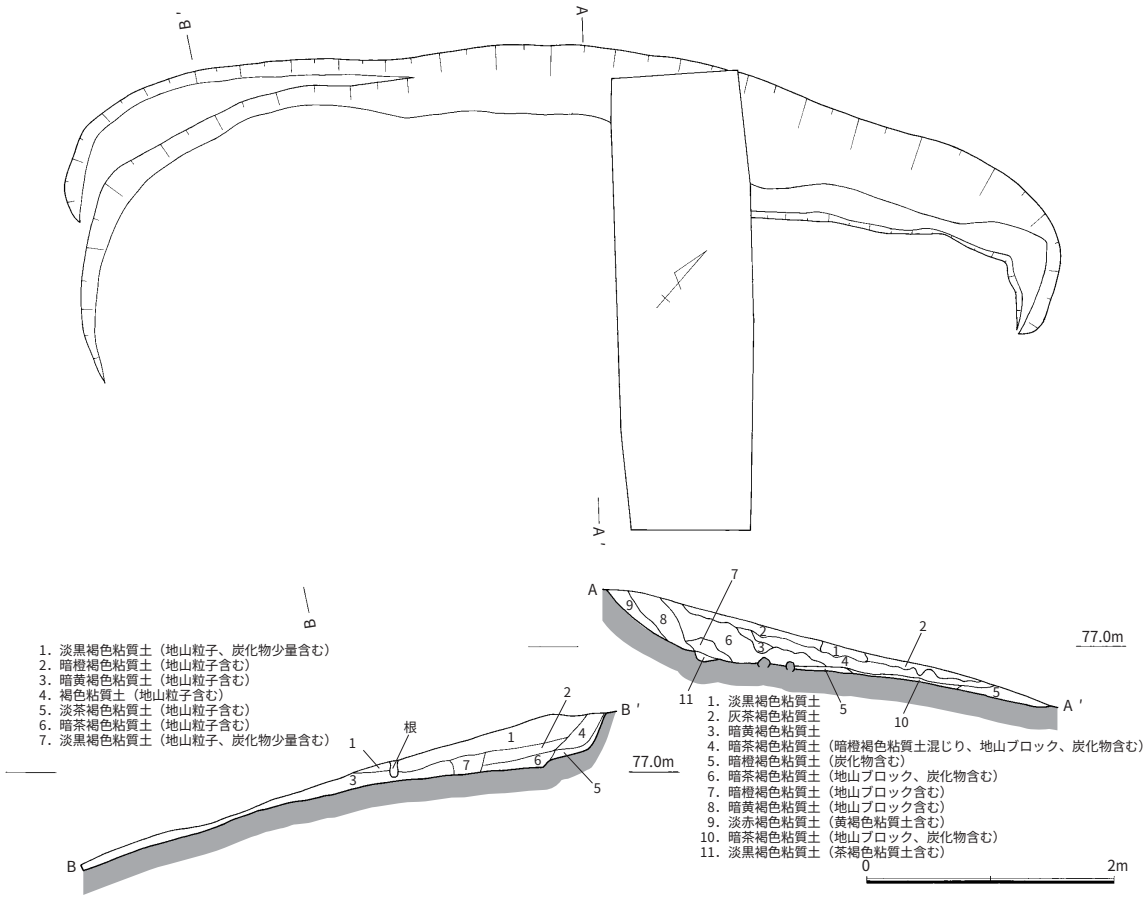
第20図　Ⅰ区SB02実測図（Ｓ＝１／60）



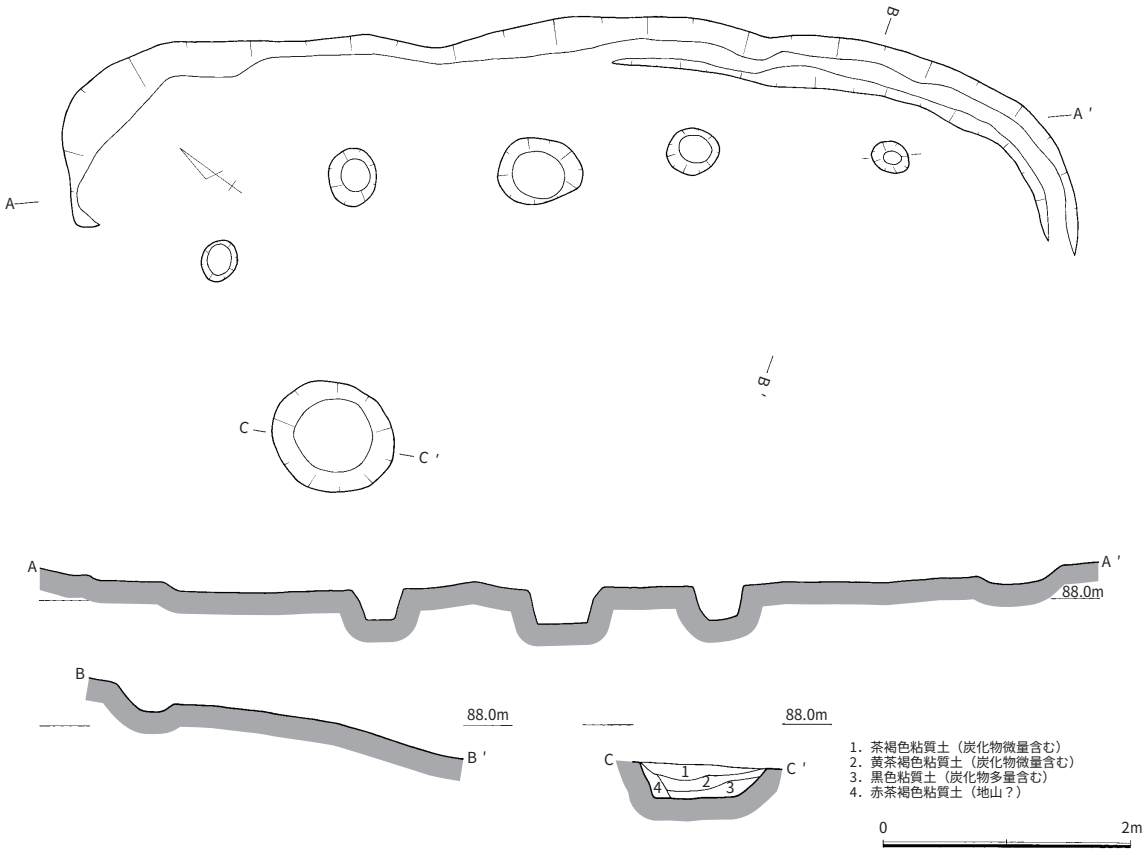
第21図　Ⅰ区SB03実測図（Ｓ＝１／60）



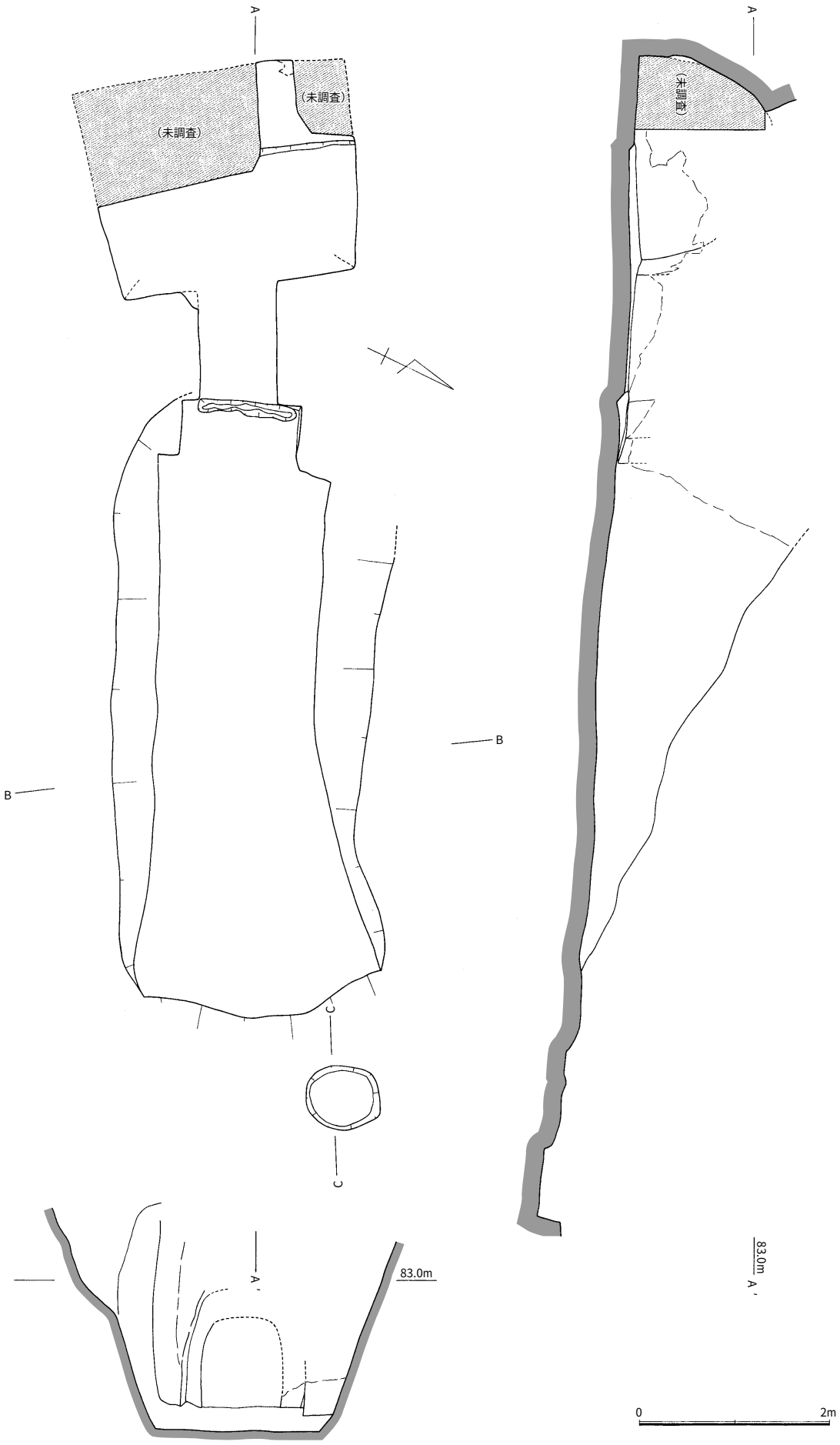
第22図　Ⅰ区SB04、柵列ピット実測図（Ｓ＝１／60）



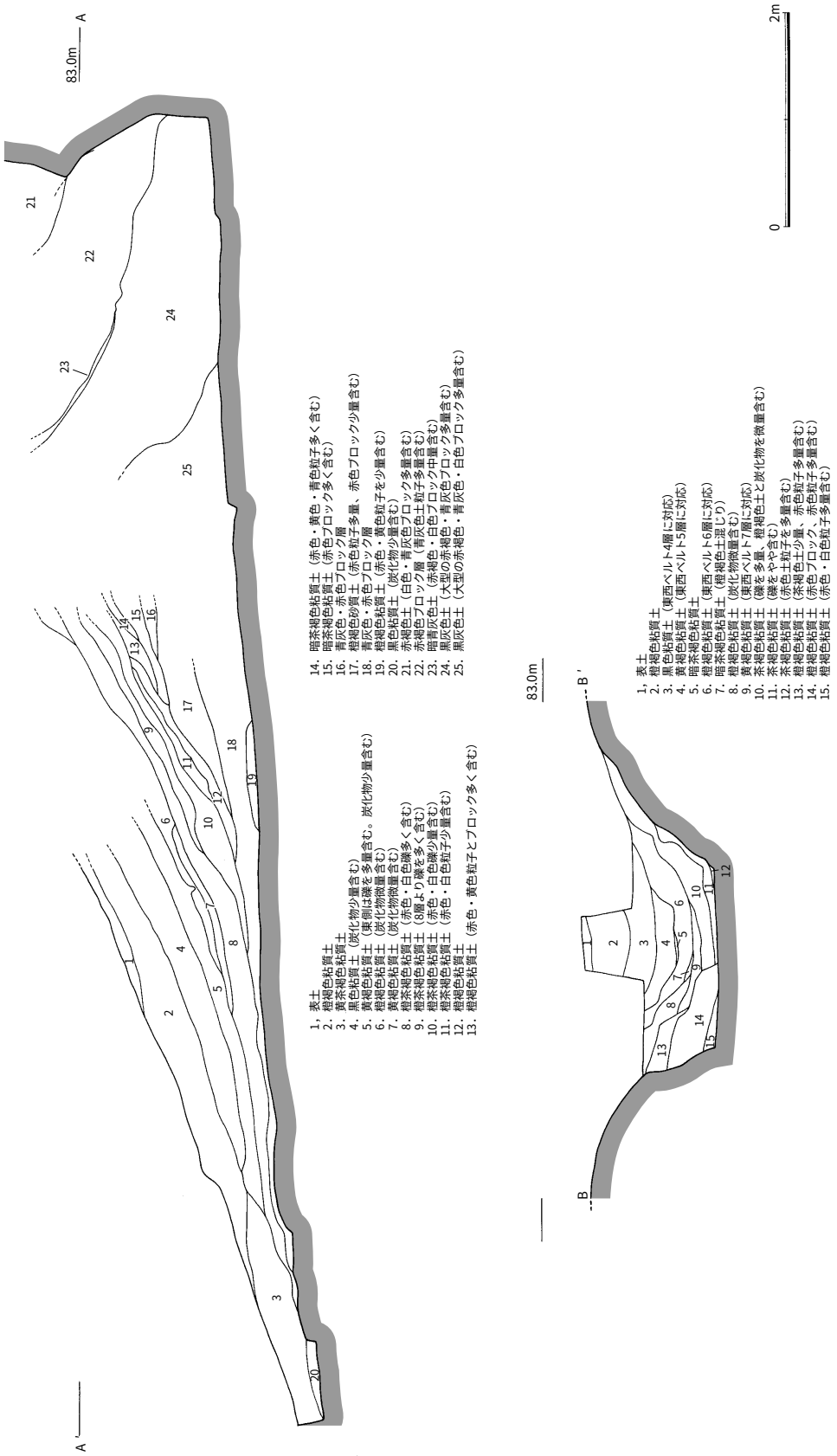
第23図　Ⅰ区加工段１実測図（Ｓ＝１／60）



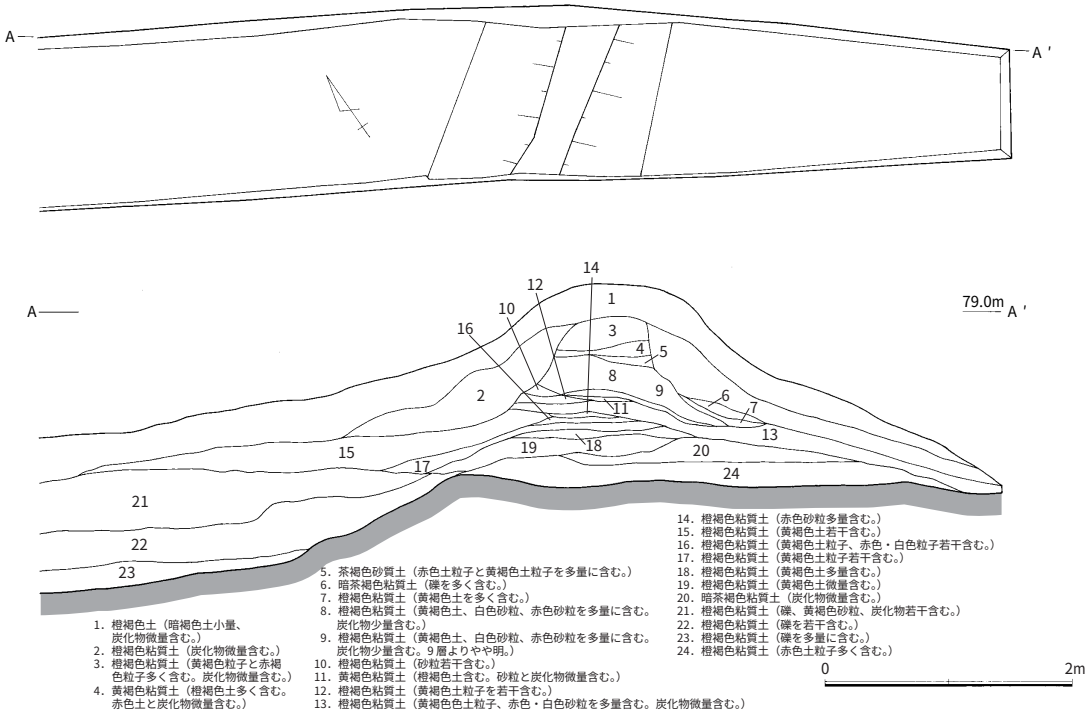
第24図　Ⅰ区加工段２実測図（Ｓ＝１／60）



第25図　Ⅰ区１号横穴墓実測図（１）（Ｓ＝１／60）

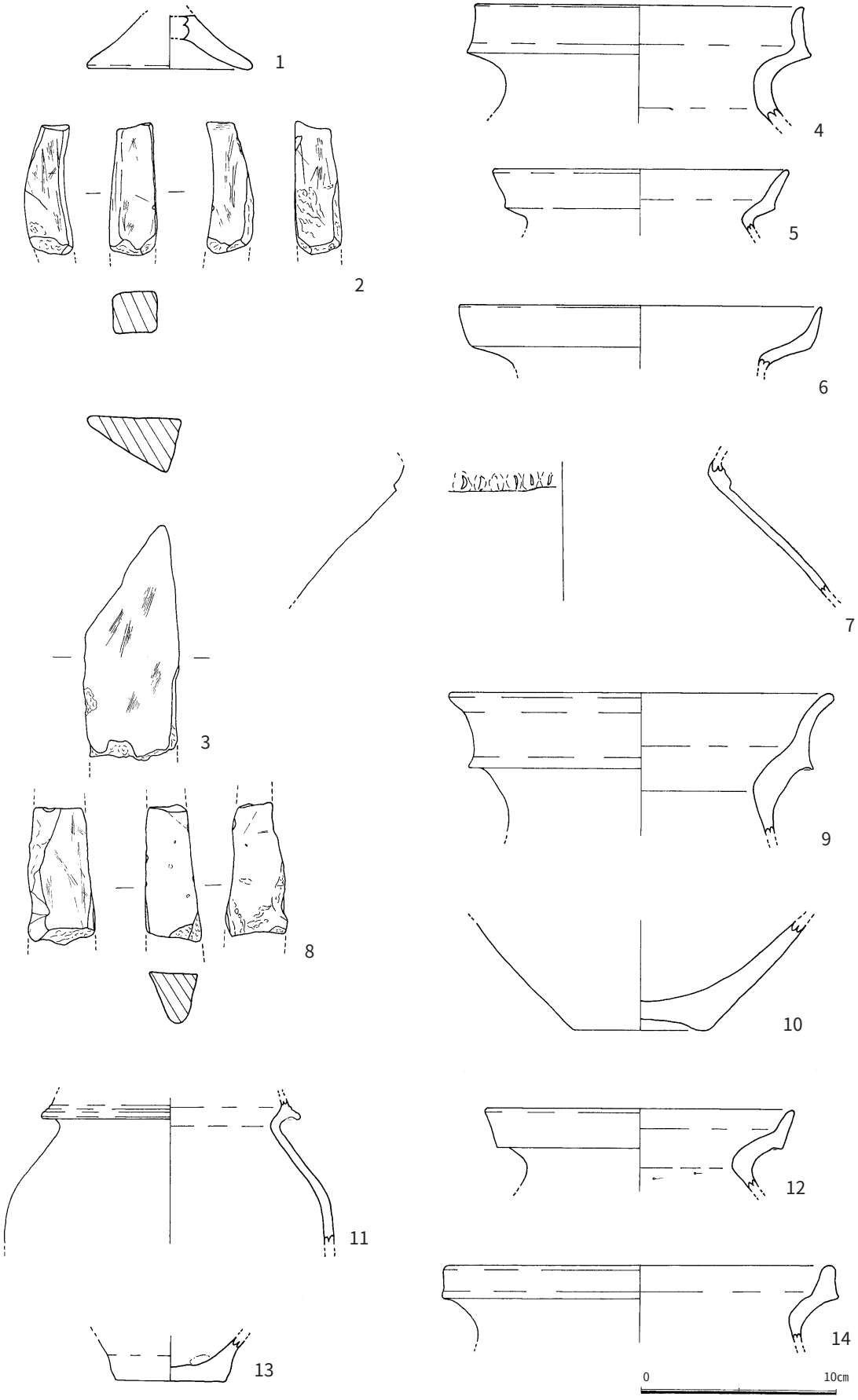


第26図　Ⅰ区１号横穴墓実測図（２）（Ｓ＝１／60）

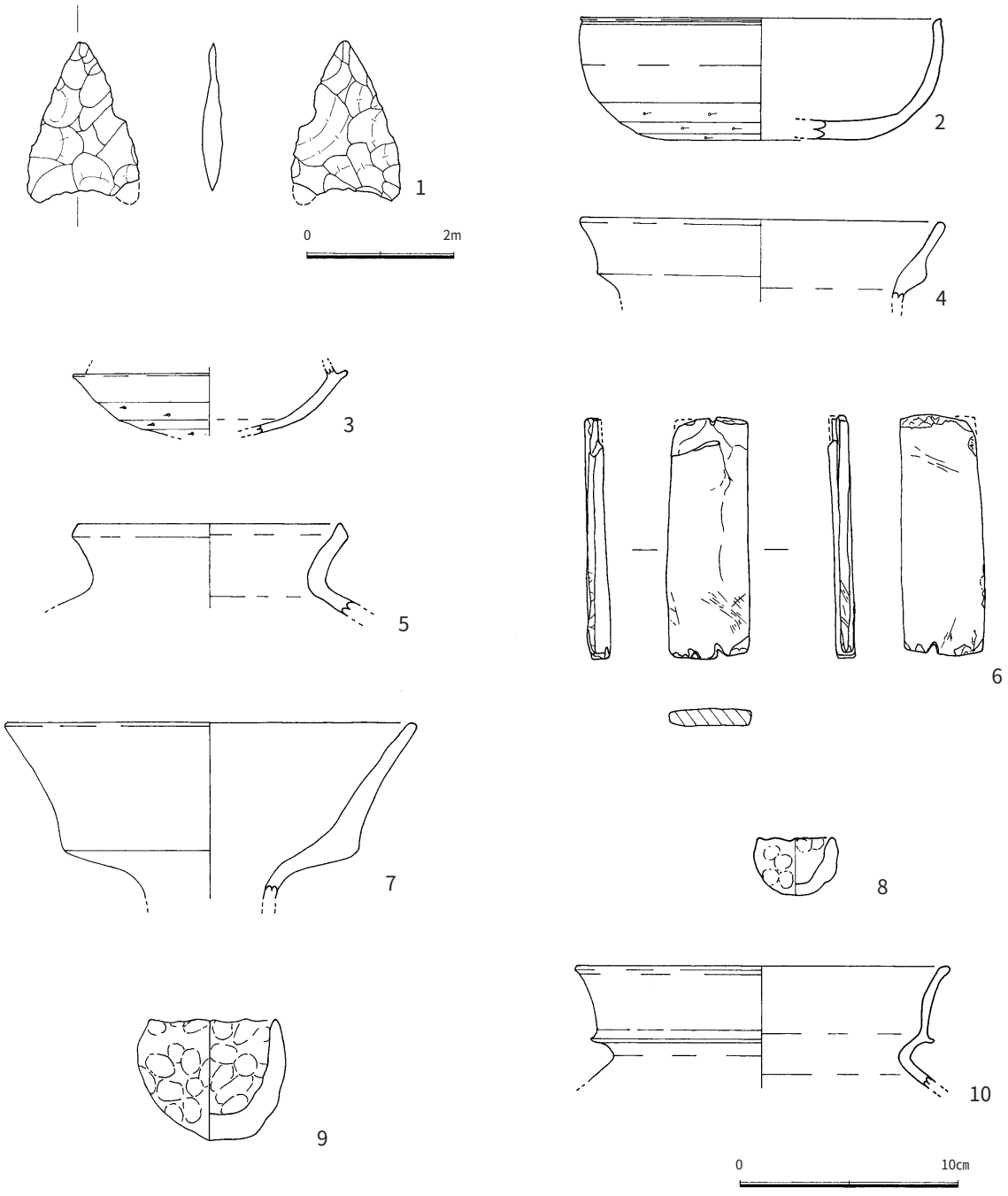


第27図　Ⅰ区土橋状遺構実測図（Ｓ＝１／60）

Ⅰ区調査指導風景



第28図　Ⅰ区出土遺物実測図（１）（Ｓ＝１／３）



第29図　Ⅰ区出土遺物実測図（２）（Ｓ＝１／３　１のみＳ＝１／１）

第２節　Ⅱ区の調査

１．Ⅱ区の調査（第30図）

Ⅱ区は遺跡全体が所在する、東西に伸びる丘陵の中央やや東よりに位置し、Ⅲ区の西側にあたる。Ⅰ区とはやせ尾根でつながっている。

試掘調査の段階で、丘陵頂部を中心に住居跡、加工段などがあることが分かった。また、丘陵中腹を帯状に大きな加工段が作り出されており、この部分にもピット等が確認できたため、丘陵上部をⅡ区上とし、帯状の加工段をⅡ区下として調査を進めた。排土処理の関係などからまずⅡ区上を調査し、終了後Ⅱ区下の調査に移行した。

Ⅱ区上の丘陵頂部は、分布調査時に40m級の方墳の可能性があったため、まずこのことについて確認調査を行った。しかし、墳頂部と思われた頂上平坦面からは遺構は確認できず、数片の須恵器片を検出したにとどまった。墳裾と思われた部分からは住居跡、加工段と考えられる遺構を検出し、弥生土器の検出もあったため弥生集落が広がると考えられた。

Ⅱ区下は、試掘調査段階で遺物のほか焼土、加工段らしき遺構の所在が確認できていたためⅡ区上に引き続き調査を行った。ある程度の堆積層が確認できており、表土層を重機で掘削後人力での調査に入った。

２．Ⅱ区上（第31・32図）

Ⅱ区上の丘陵頂部は、方墳の可能性があったため本調査に先立って十字のセクショントレンチを設定し、試掘調査を実施した。しかし、頂部平坦面は表土層を除去するとすぐに地山層が現れ遺構の検出はなかった。しかし、墳裾を想定した場所には堆積層が見え、地山層が段状に大きく落ち込んでおり、加工段もしくは住居跡が想定された。その後、本調査でそれぞれの部分に住居跡と加工段が所在していることが確認できた。

Ⅱ区上の頂上部からは南東に伸びる尾根筋と北東へⅢ区に向かって延びる尾根筋とがありこの尾根上は幅の広い緩斜面となっている。これらの尾根上に多くの遺構が所在することを想定していたが、ほとんどの遺構が丘陵頂部を取り巻く場所を中心として広がっている。特に南東に延びる尾根には、若干の平坦面は見られたものの遺物の検出はほとんどなく、遺構も検出できなかった。北東に伸びる尾根上には住居跡、当初予想しなかった古墳の検出などあったものの密度は高くなかった。７棟の住居跡、１棟の掘立柱建物、４箇所の加工段、１基の古墳の検出を持って調査を終了した。調査の詳細は以下のとおりである。

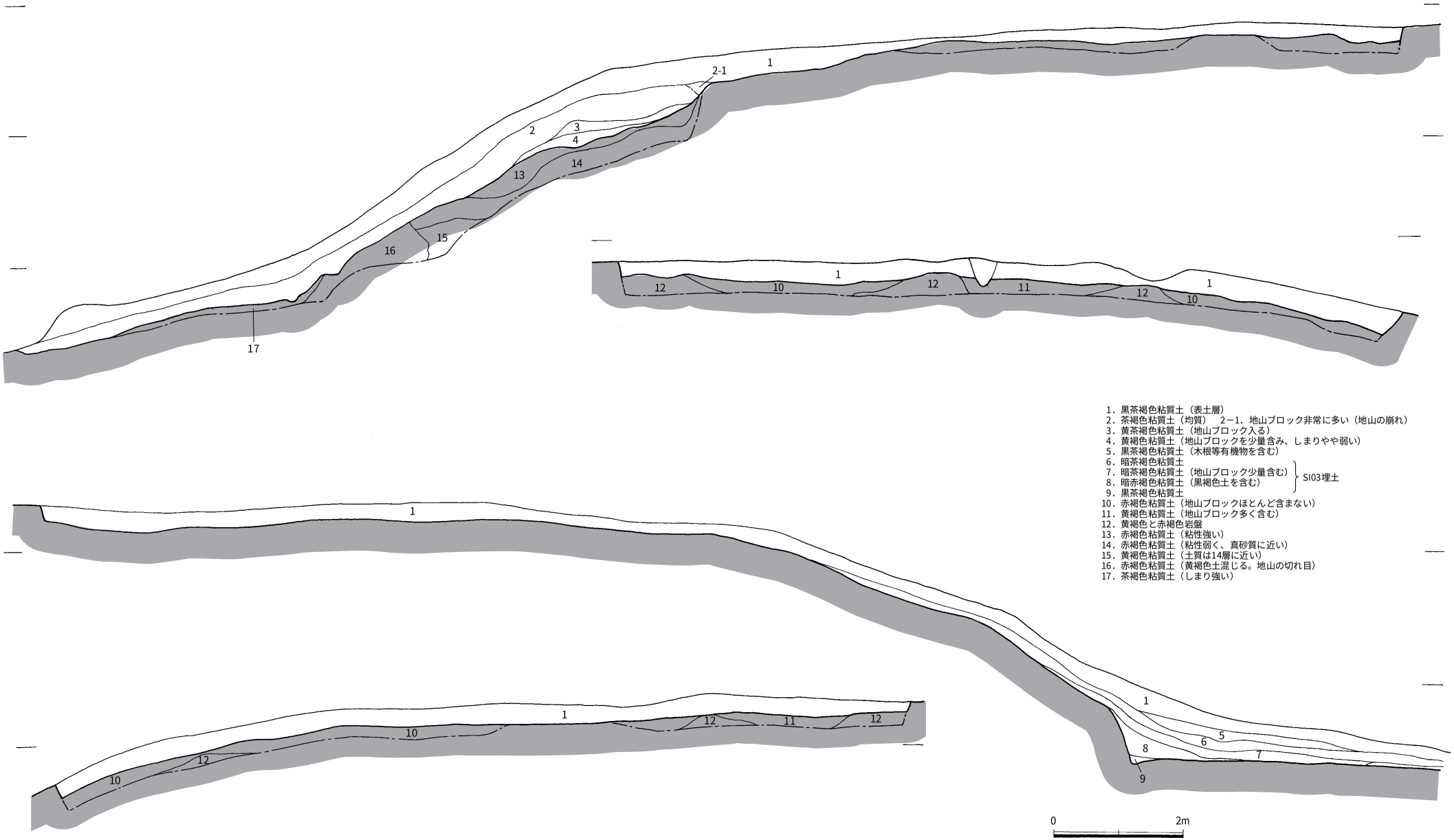
（1）ＳＩ０１

遺　構（第33図）

調査区の東端、標高89.3mに位置し隅丸方形プランを持つ。床面は地山面と考えられ、壁面の約１／２程度は残存しており、床面はほぼ完全な形で残っている。床面は南北3.2m、東西最大2.6mの規模になる。壁面の立ち上がりは最大で0.6mほどである。５箇所のピットを検出し、中央に長軸約0.8m短軸約0.6m・深さ0.3mの中央ピットがあり、周囲の４箇所のピットが主柱穴となるもの

第30図　永昌寺の谷遺跡Ⅱ区調査区配置図（Ｓ＝１／800）

第31図　永昌寺の谷遺跡Ⅱ区上遺構配置図（Ｓ＝１／300）

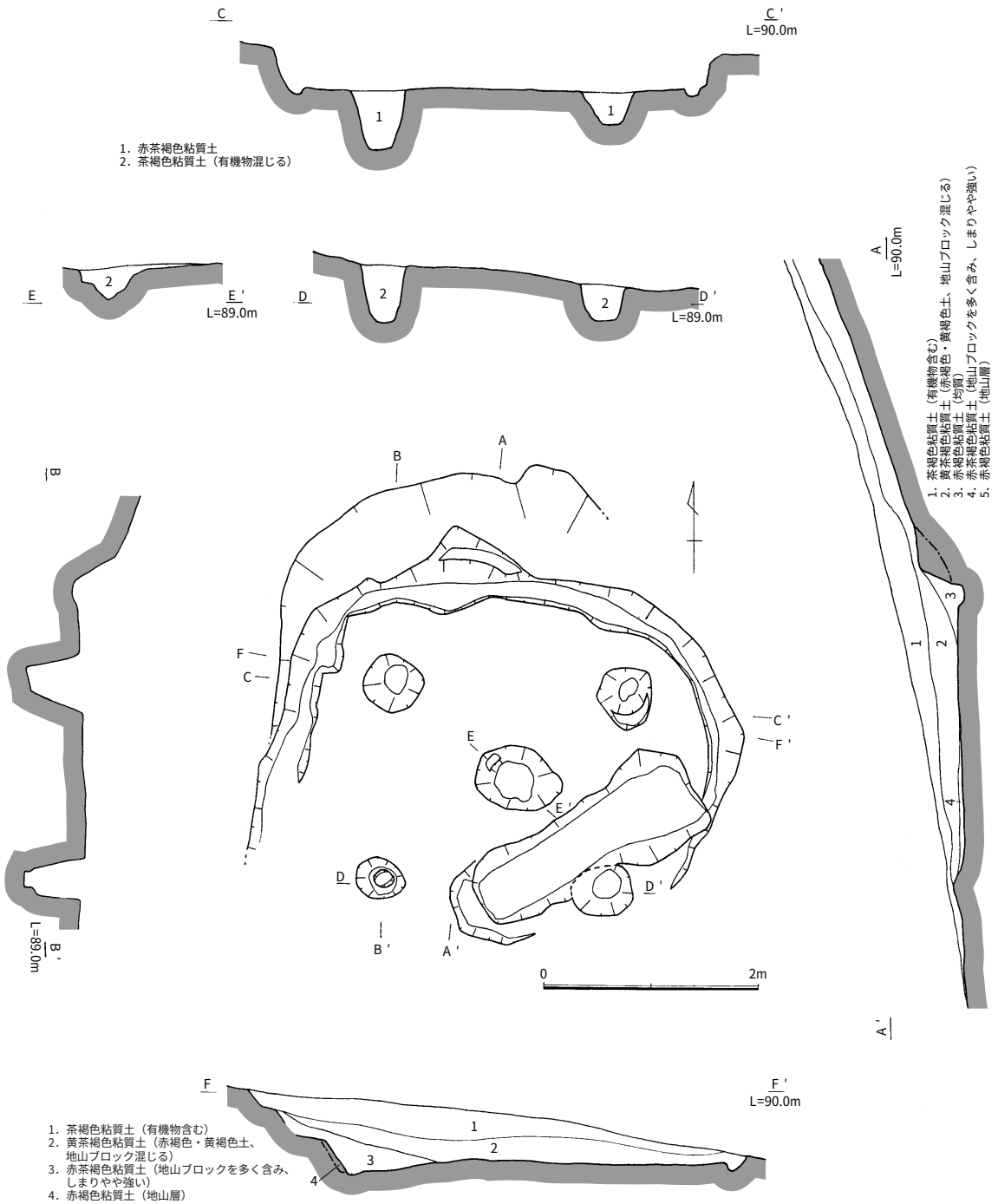


第32図　Ⅲ区上セクション実測図（S＝1／80）

と思われる。それぞれのピットは、ピット間南北約1.3m・東西約1.6mの間隔で規則的に配置されている。主軸は丘陵斜面に直交しておらずやや北に傾けた軸となっている。このため、断面軸もずれた形となった。そのほかの住居はほぼ斜面なりに主軸を持っていることを考え合わせると何らかの立地的な制約もしくは他の住居との並存関係があったのかもしれない。

出土遺物（第34図）

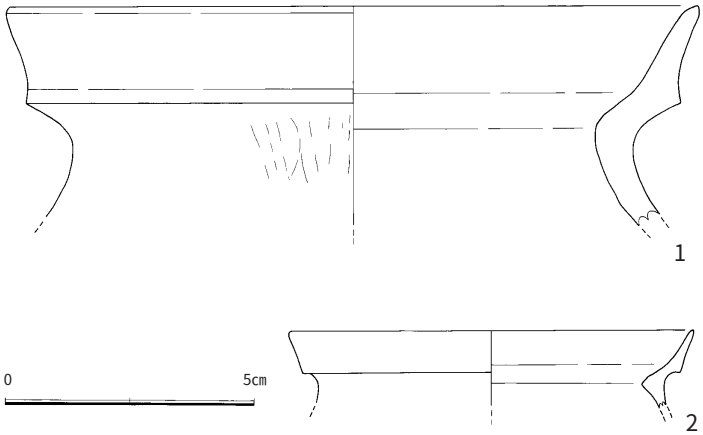
１は複合口縁を持つ弥生土器で、口縁部端部はごく一部、頸部は約１／２が残存しており復元口径27.5㎝を測る。焼成は良好であるが、風化により細部の調整は観察できなかった。肉厚の口縁を



第33図　Ⅱ区上SI01実測図（Ｓ＝１／60）

持っておりやや外傾しながらまっすぐに立ち上がる。

２も複合口縁を持つ弥生土器で口縁部の約１／８程度が残存している。口縁部はやや外傾し、まっすぐに立ち上がる。頸部内には明確な稜線が見える。復元口径は15.8㎝を測るが、１と同様に風化のため調整は不明である。



第34図　Ⅱ区上SI01出土遺物実測図（Ｓ＝１／３）

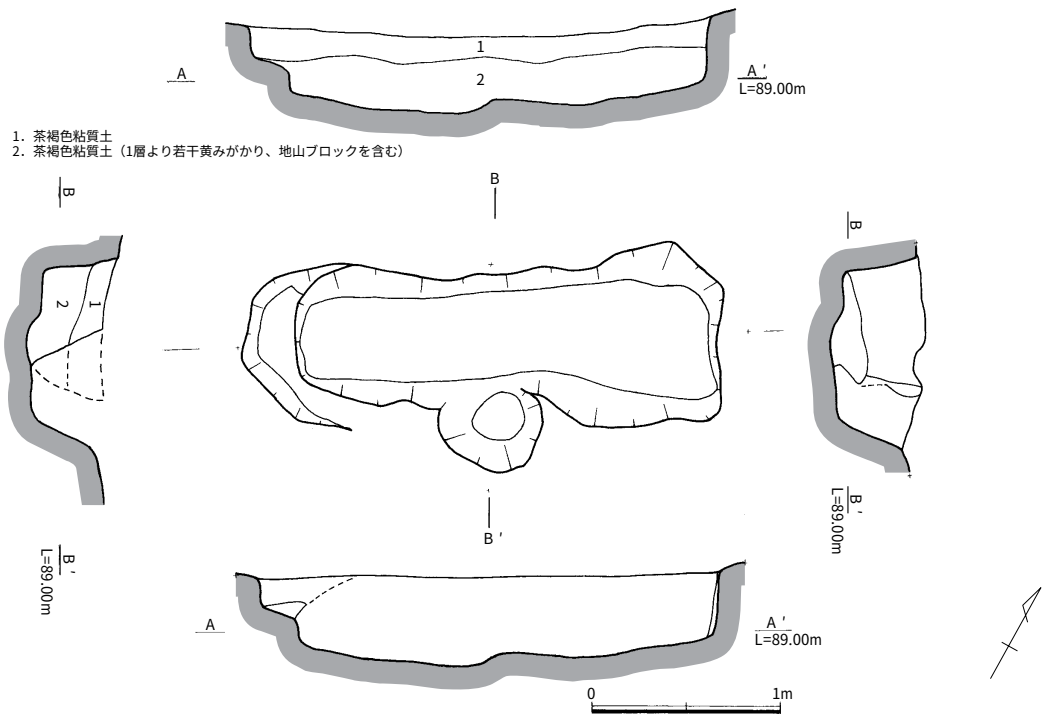
ＳＩ０１内土壙（第35図）

ＳＩ０１内に掘り込まれた土壙で、長軸約2.3m・短軸0.6m・深さ最大0.5mの規模を持つ。内部から遺物等の検出はなかったが、作りや規模から墓壙であると考えた。住居の周溝がこの土壙に切り込まれていることから、住居より後に作られたものと考えられる。土壙南側は２段掘りの様相を見せているがこの部分だけでその他の部分は一段の素堀土壙となっている。

（2）ＳＩ０２

遺　構（第36図）

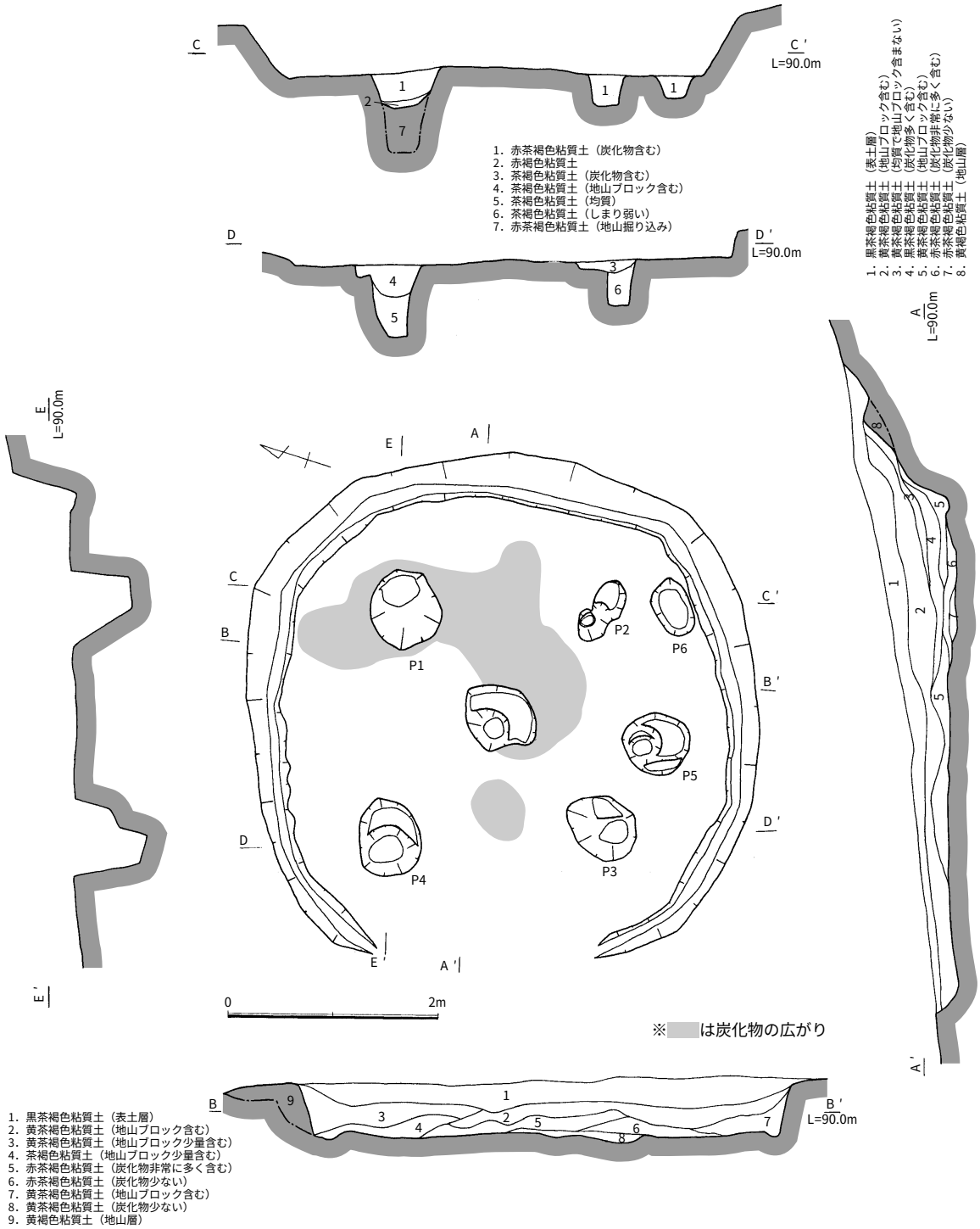
調査区の西端、ＳＩ０１の北西側に位置する。標高90.3mに位置する。東西4.7m・南北約4.9mの規模を持つ。立ち上がりは最大で約0.8mを測り、中央には直径約0.6mの不整形プランを持つ中



第35図　Ⅱ区上SI01内土壙実測図（Ｓ＝１／40）

央ピットを配置している。そのほかのピットが柱穴であると思われる。このうちＰ１～４の４本が主柱穴となるものと考えられる。南東端のピットは深さがなく柱穴でないかあるいは補助的な柱穴と考えられる。ピット間はそれぞれ1.4m内外で、ほぼ正方形の配置となる。

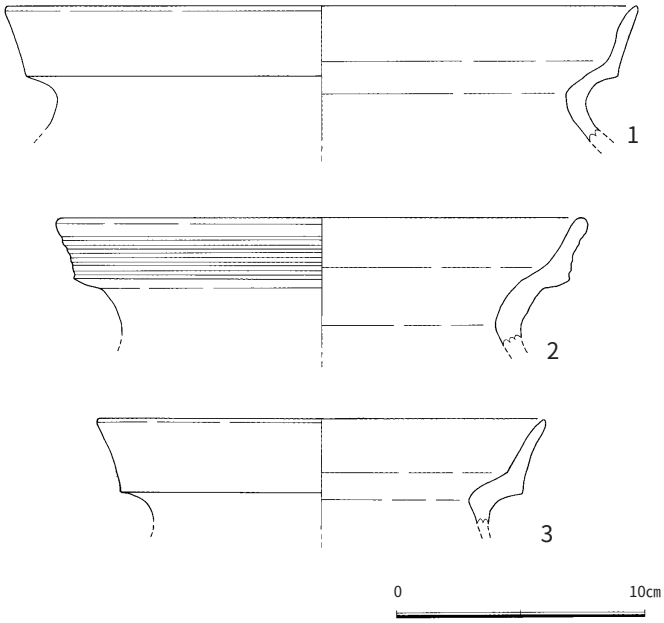
床面の中央ピット付近には炭化物及び焼土の広がりが見え焼失住居の可能性も考えたが、炭化物の堆積が少なく、こうした可能性は低いと思われる。遺物は少なく、ほとんどが埋土中からの出土である。



第36図　Ⅱ区上SI02実測図（Ｓ＝１／60）

遺　物（第37図）

１～３のいずれも複合口縁を持つ弥生土器甕である。１は、口縁部の約１／10程度が残存しており、復元口径25.3㎝を測る。焼成は良好であると思われるが、風化により細部の調整は不明である。２は口縁部の１／８程度が残存しており、復元口径20.9㎝を測る。口縁部には５条の凹線を施す。頸部の破面あたりに一部ケズリの痕跡らしきものが見えたが、風化によりはっきりとしなかった。また、全体的にも細かい調整を観察することが困難であった。３は、口縁部の約１／８が残存しており、復元口径は17.8㎝を測る。胎土には１㎜大の砂粒を含み焼成は良好である。磨滅により細部の調整は観察できなかった。



第37図　Ⅱ区上SI02出土遺物実測図（Ｓ＝１／３）

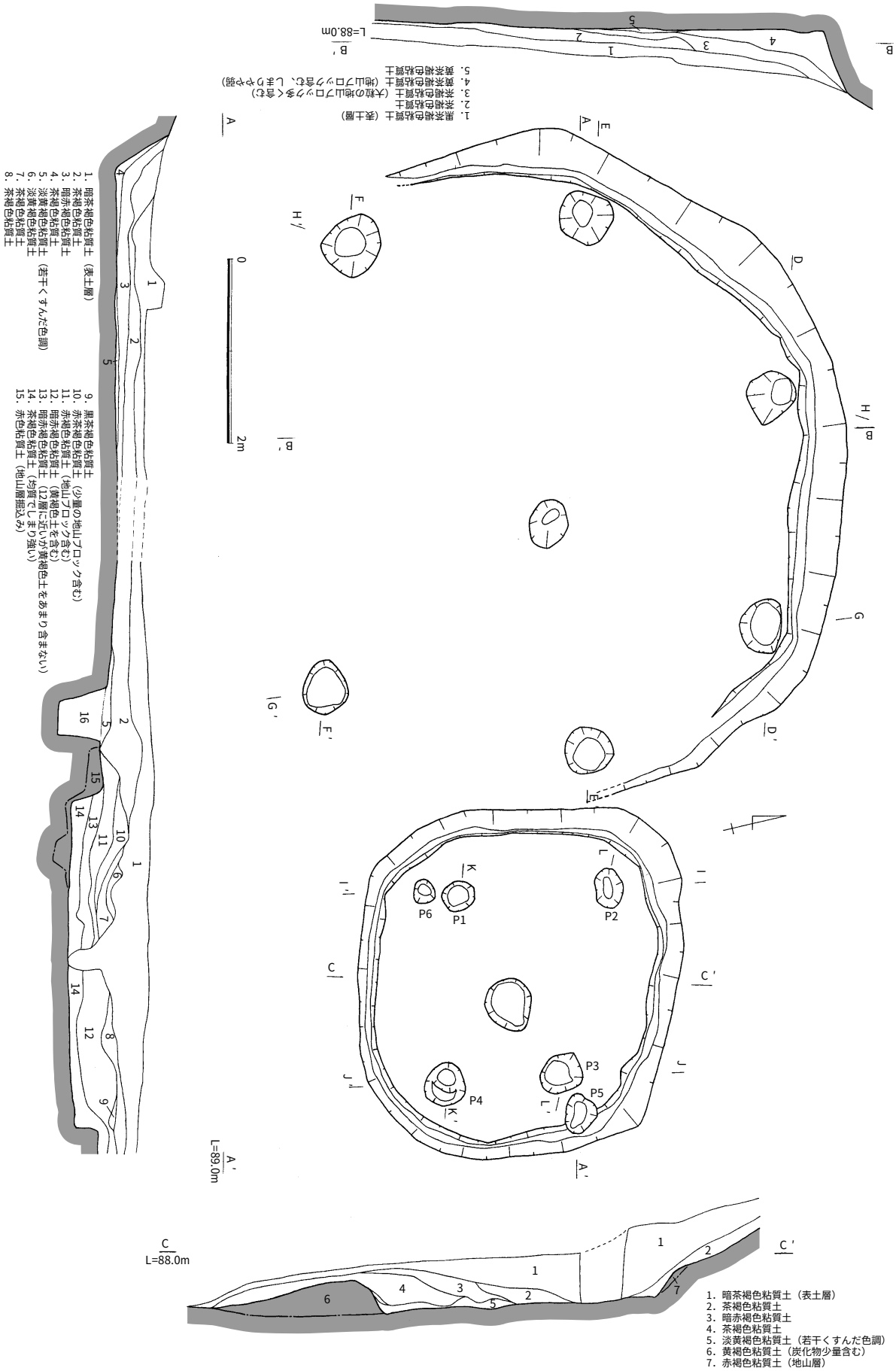
（3）ＳＩ０３・０４

遺　構（第38・39図）

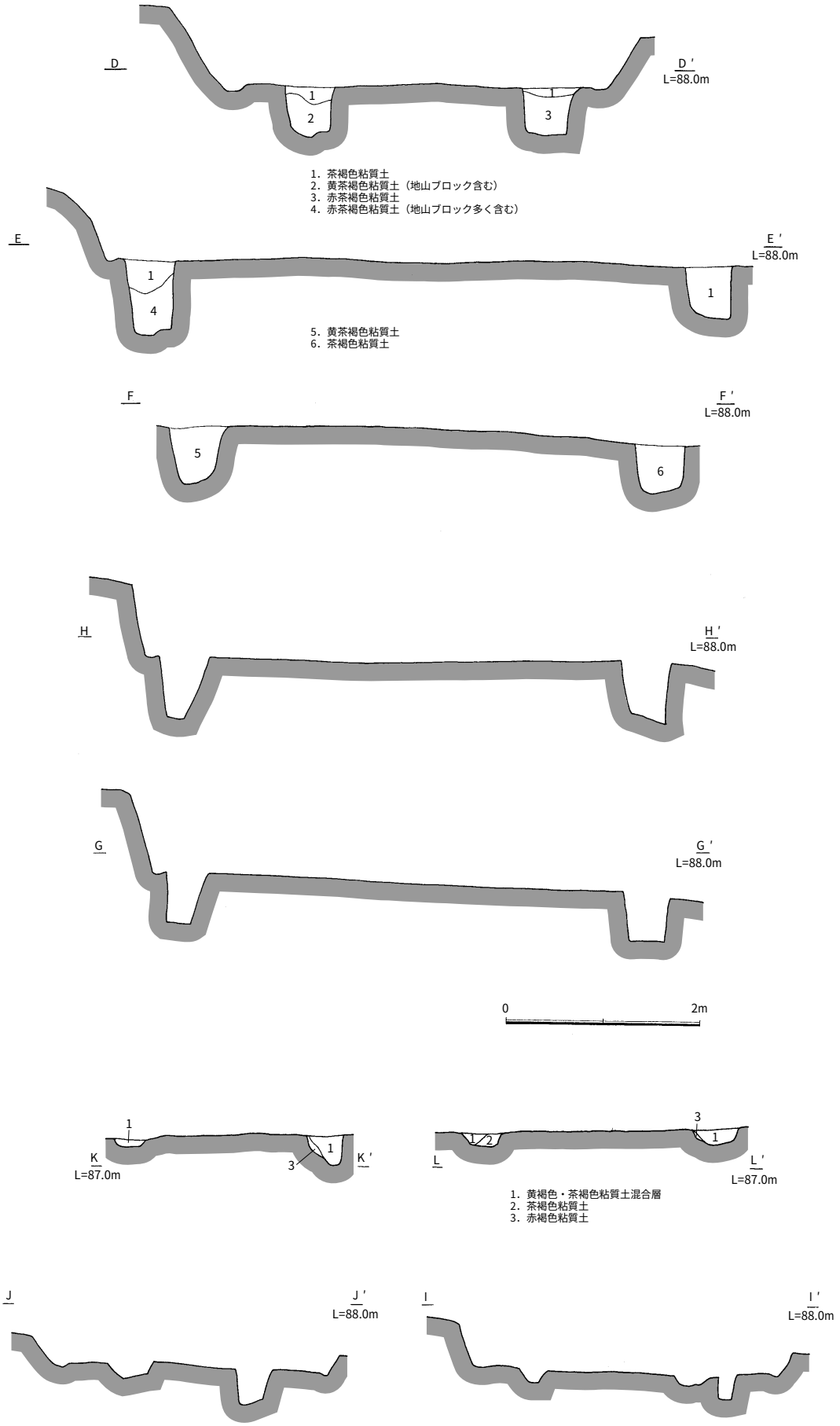
ＳＩ０１の南東側に位置し、標高88.8m付近に立地する。当初はＳＩ０３のみを想定していたが、東西セクションを掘削中にＳＩ０４が隣接することがわかった。切りあい関係を考えていたが、掘削を進めていくと直接的な切りあい関係はなく、ほぼ接する形での立地であることがわかった。ただし、出土遺物等から時期差があると考えられ、ＳＩ０４廃絶の後、ＳＩ０３が立地すると考えられる。ＳＩ０４の堆積層をＳＩ０３の堆積層が切り込んでいることからもＳＩ０４の方が先行することが確認できる。

ＳＩ０３は、87.8m付近に立地し、８角形と思われる多角形プランを持つ。残りのよい北側壁面で一辺約2.8mを測る。壁面の立ち上がりは最大で0.9m。床面は最大長東西6.6m×南北6.3mほどとなる。各コーナーに柱穴が確認でき、それぞれ径0.5～0.6m・深さ0.5～0.7mほどで地山に掘り込まれている。本来であればもう２箇所に柱穴があり８本の主柱穴からなっていた可能性もあるが、南側床面は流出しており６つの主柱穴しか検出できなかった。

ＳＩ０４は、上場で東西3.8m・南北3.3mの隅丸方形のプランを有する住居跡である。壁面の立ち上がりは0.4mほどである。Ｐ１～４の４本と見られる主柱穴を各コーナーに配している。検出時、床面にはほとんどピットらしき痕跡が確認できなかったため、慎重に精査を行ったが、なおかつ検出は困難であった。何とか検出できたピットは配列がいびつとなる感があり、深さがないものもあるが、Ｐ５、Ｐ６を補助柱とする、４本柱の建物であると考えた。



第38図　Ⅱ区上SI03、04実測図（１）（Ｓ＝１／60）



第39図　Ⅱ区上SI03、04実測図（２）（Ｓ＝１／60）

ＳＩ０３出土遺物（第40図）

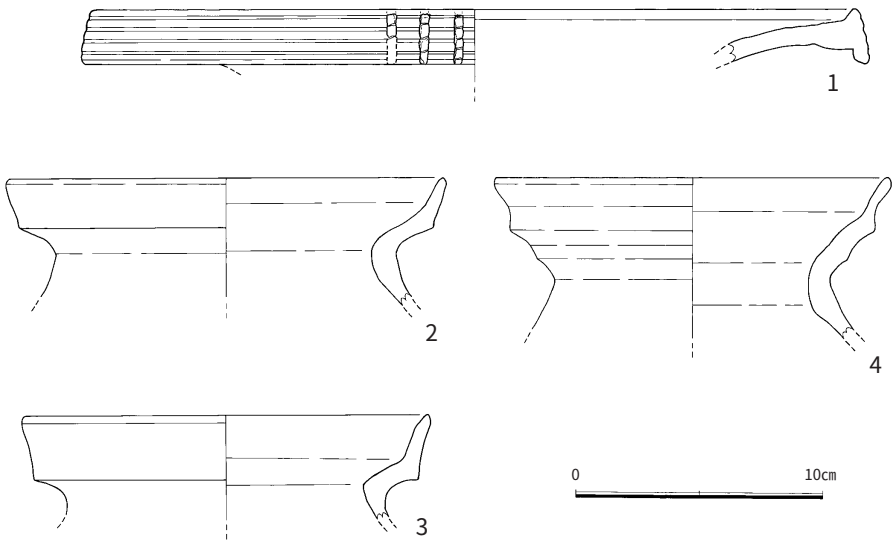
１～５までのいずれも弥生土器である。１は甕口縁部で１／10程度が残存しており、復元口径は30.8㎝を測る。大きく外反する口縁端部に４条の凹線を施し３つの突帯を持つ。２は甕口縁部で１／10程度が残存しており、復元口径は17.4㎝。外側にまっすぐ立ち上がる複合口縁を持つ。焼成は良好であるが、風化により細部の調整は観察できなかった。３は壷口縁部か。復元口径は16.0㎝を測る。焼成はやや良であるが風化により詳細な調整は観察できなかった。

４は、甕口縁部で１／10程度が残存している。外側にほぼまっすぐ立ち上がる複合口縁を持ち、復元口径は、16.2㎝を測る。この固体も全体に風化が激しく詳細な調整等は観察することができなかった。

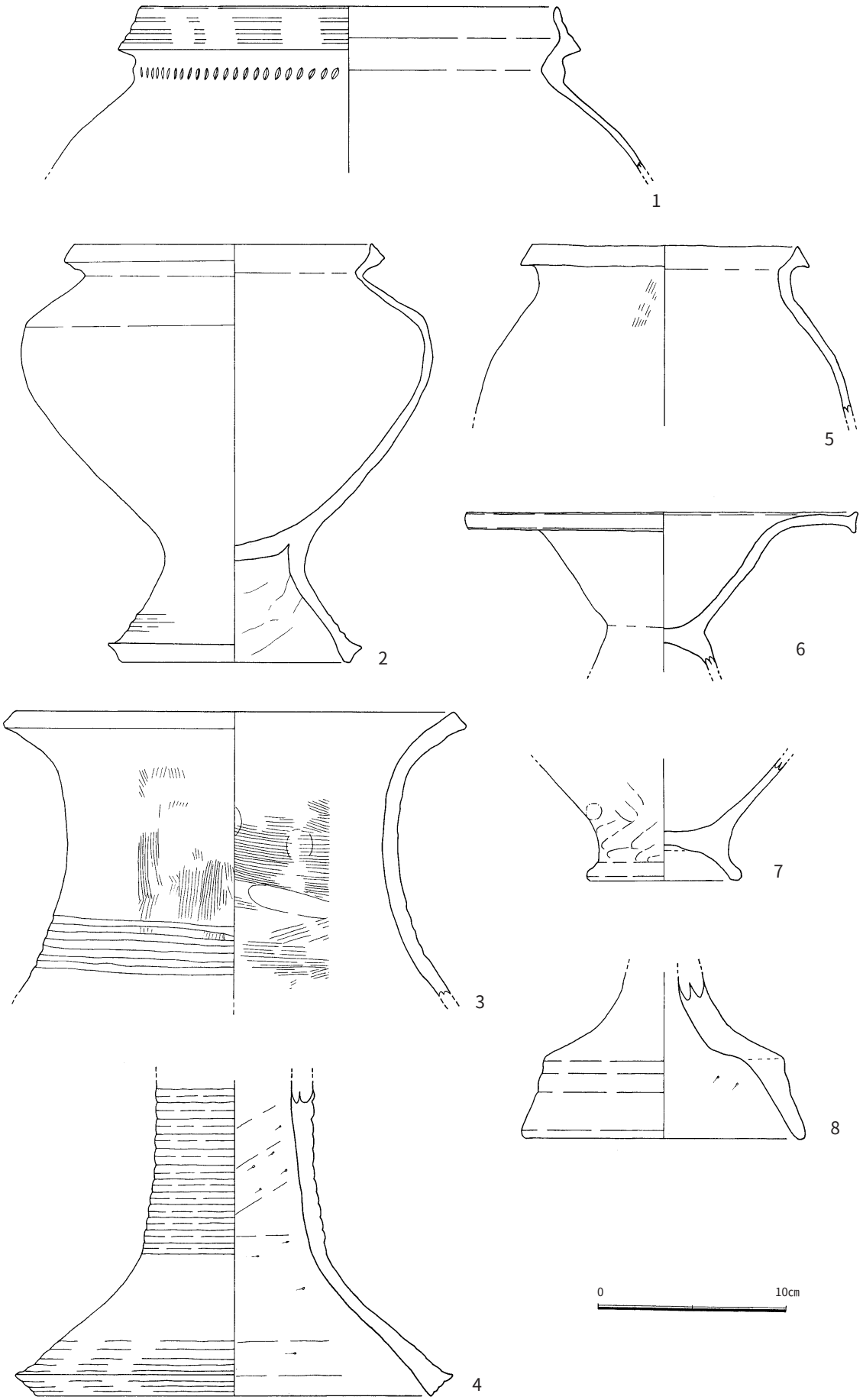
ＳＩ０４出土遺物（第41図）

１は、弥生土器甕で口縁部の１／２程度が残存している。復元口径は21.8㎝を測り内傾して立ち上がる複合口縁を持つ。外面には３条の凹線がうっすらではあるが観察できる。頸部にはヘラ状工具による刺突紋をめぐらす。全体に風化が激しく、細かな調整等は観察が難しかった。２は、脚付きの甕で、復元口径15.6㎝、底径11.9㎝、器高11.9㎝を測る。体部はほぼ完形で残るが肩部口縁部にかけては１／２程度、口縁端部についてはごく一部しか残存しない。全体に風化により調整痕等は確認できないが、脚部に凹線らしき痕跡が確認できる。口縁部・脚端部とも外面は内傾して立ち上がるように見えるが内面にくぼみは確認できずまっすぐに立ち上がる。

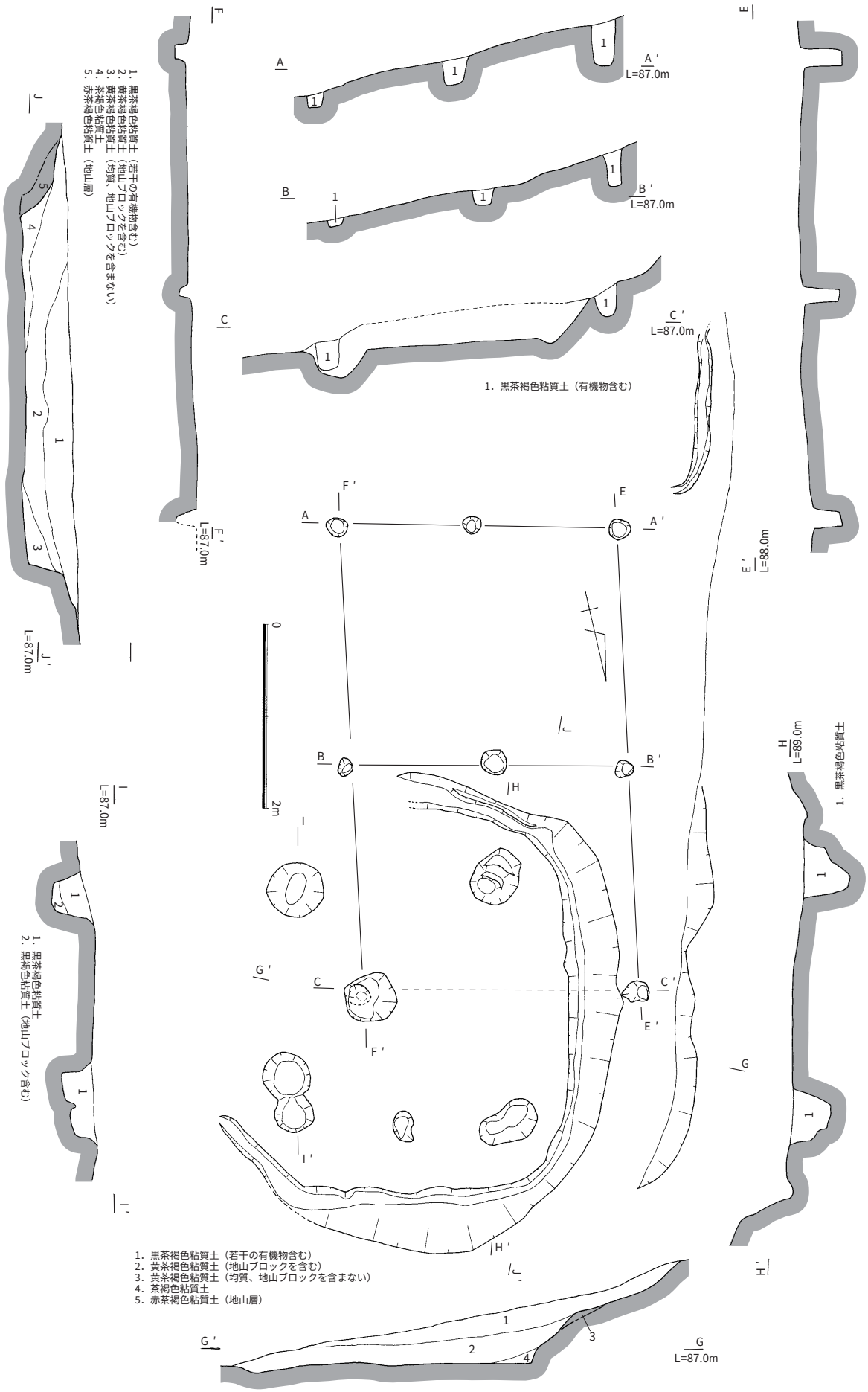
３は、弥生土器・長頸壷で、頸部から口縁部にかけて残存している。復元口径は24.3㎝を測り、外面には４条の凹線と縦方向のハケ目を確認することができる。内面は横方向のハケ目と指圧痕を確認できる。口縁端部は内外面とも、ヨコナデ調整と思われるが風化のためはっきりしない。４は、器台脚部で復元底径20.8㎝を測る。脚体部がどの程度まで残存しているか分からないが、現況では13条の凹線が確認できる。また、脚端部に３条の凹線が確認できるがこちらは摩滅が激しく、うっすらと見える程度である。５は、弥生甕で口縁部～体部が残存している。復元口径は口縁端部が摩滅しているため約14.0㎝を測る。首部周辺に一部ハケ目らしき痕跡を見ることができるが、風化の



第40図　Ⅱ区上SI03出土遺物実測図（Ｓ＝１／３）

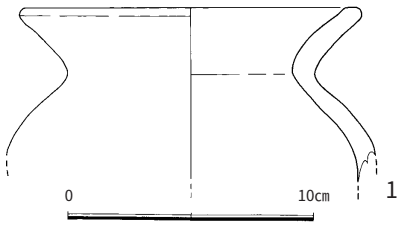


第41図　**Ⅱ**区上SI04出土遺物実測図（Ｓ＝１／３）



第42図　Ⅱ区上SI05、SB01実測図（Ｓ＝１／60）

ためそのほかの細かな調整は不明である。内面には、ヘラケズリの痕跡は見えるが、単位などは不明である。６は、高坏の坏部と思われる。口縁端部を大きく外反させており、口径は20.5㎝を測る。内外面とも細かい調整は観察できなかったが、内面は丁寧に仕上げているように見えた。このため、高坏もしくは器台の脚部とも考えられたが、坏部と判断した。７は土師器甕底部か。高台らしき部分で、底径7.8㎝を測る。外面にはナデ痕や指圧痕が見える。８は弥生器台もしくは高坏脚部であると思われる。底径14.6㎝を測る。全体的に肉厚で、内面は底部付近までケズリ痕が見えるがそのほかの調整は観察できなかった。



第43図　Ⅱ区上SI05出土遺物実測図
（Ｓ＝１／３）

（４）ＳＩ０５・ＳＢ０１

遺　構（第42図）

ＳＩ０５は、調査区のほぼ中央に位置し、標高86.8mに立地する。壁体溝の内側で南北4.2mの規模を持つ方形住居である。壁面立ち上がりは最大で0.6mほどである。南西隅が流出しており床面がこの方向に向かって緩やかに傾斜している。このため東西方向は床平坦面約3.8mが残る。北東コーナーには２箇所のピットがきりあっているが、このどちらが主柱穴としても、ピット間は南北方向2.2mと1.8～2.0m、東西方向1.6mと1.9～2.0mのややゆがんだ配列となる。それぞれ径0.5m～0.6m・深さ0.4～0.6mほどで地山に掘り込まれる。南東側の周溝はいびつな形で入り込んでいるが、地山の形状に添って掘削したためでこの部分がコーナーとならない可能性もある。中央ピットは径約0.6m・深さ約0.3mで掘り込まれており、検出中にこのピット内にＳＢ０１の柱穴を確認した。

ＳＢ０１は、ＳＩ０５廃絶後に立てられた掘立柱建物跡である。ＳＩ０５埋土除去後に検出したため、東側の柱列が不完全なものとなり、ＳＩ０５の中央ピット内にかろうじて南東端の柱穴が確認できた。このため、不完全な形ではあるが梁間２間×桁行２間の９本柱の総柱建物であろうと思われる。ピット間は桁行方向がそれぞれ2.2m内外、梁間方向が1.2m内外の規則的な配置になっており、東西約3.1m南北約5.2mの柱間距離になる。検出面は南側に傾斜しているが、ピット底面はほぼ同じレベルにあり、南側にいくに従ってピットの深さが浅くなるため、盛土等による整地の後建てられたものであると考えられる。

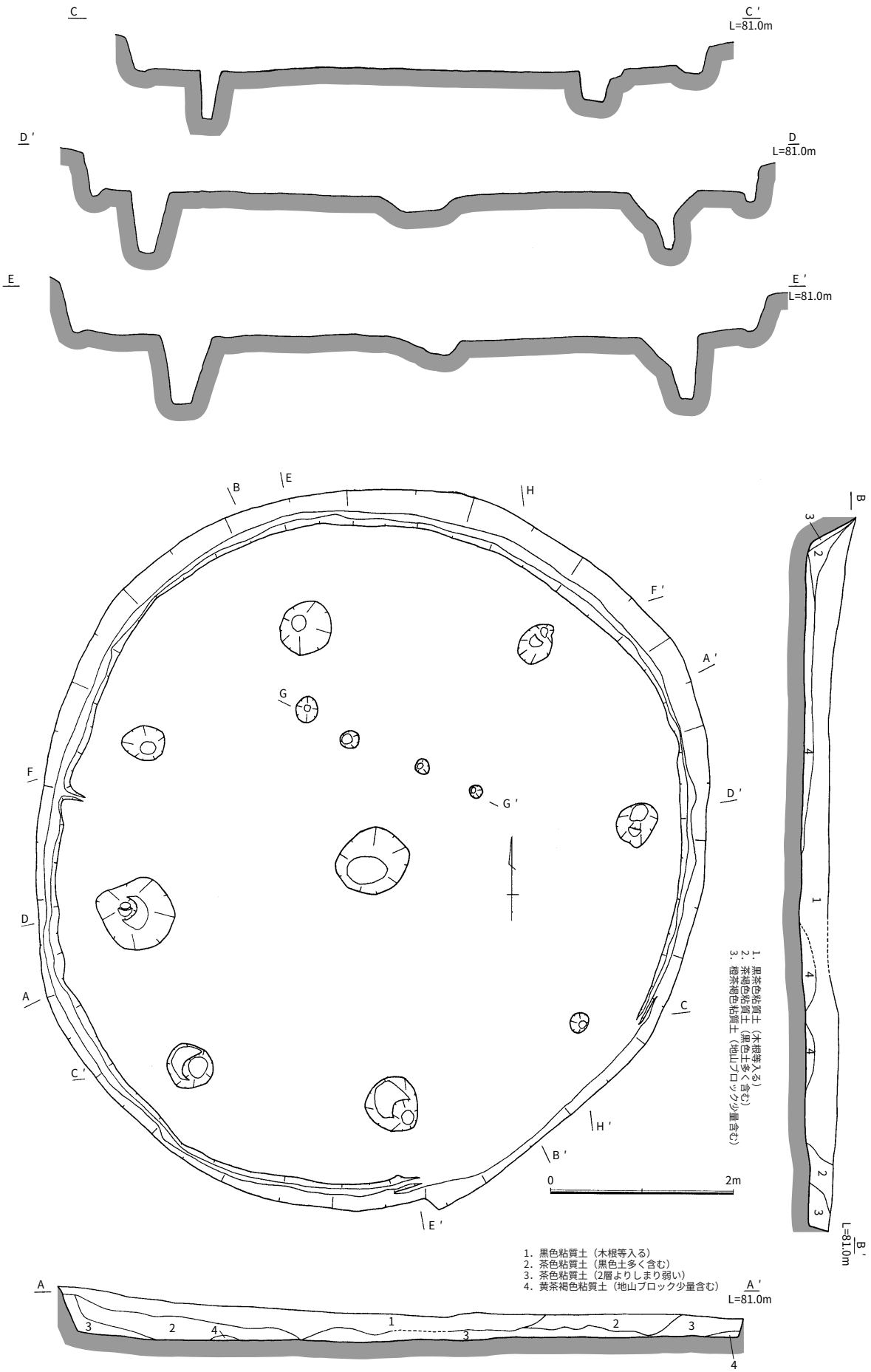
ＳＩ０５出土遺物（第43図）

単純口縁を持つ甕口縁部である。口縁部は２㎝ほどの立ち上がりがあり、若干のゆがみがある。内外面とも調整痕は確認できなかったが、外面には朱塗りらしき痕跡を見ることができる。

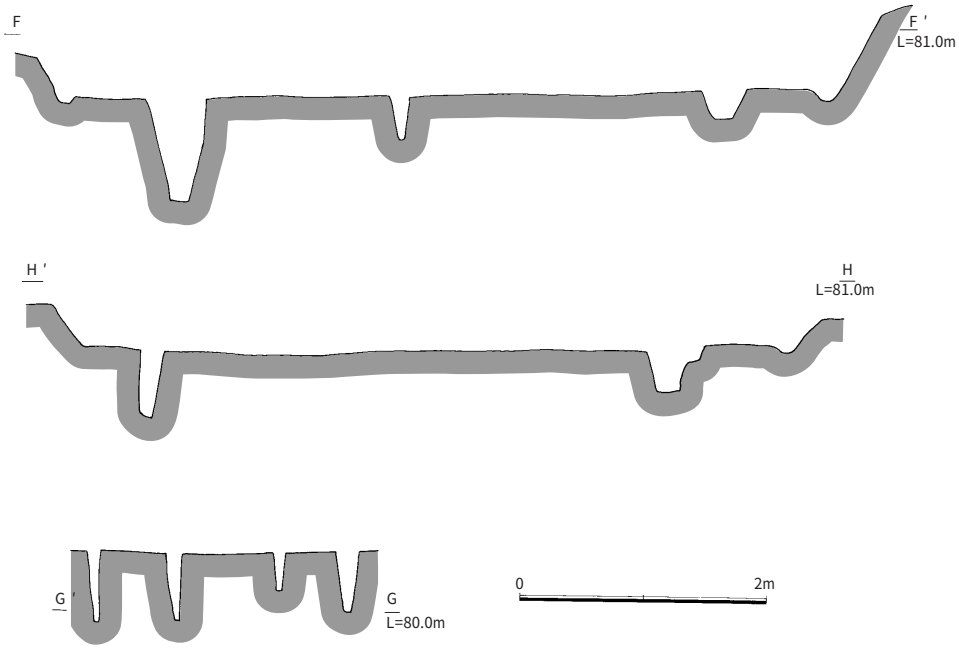
（５）ＳＩ０６

遺　構（第44・45図）

ＳＩ０６は、調査区の北端、標高約80.5mに位置する。壁体溝内側で直径7.2mの円形住居である。上場で見ると約7.8mとなる大型のものである。壁面の立ち上がりは0.3m～0.6mで全周が残る。壁体溝が北東方向で一部切れており、この部分の立ち上がりが最も低いため、この部分が出入り口と



第44図　Ⅱ区上SI06実測図（1）（S＝1／60）



第45図　Ⅱ区上SI06実測図（２）（Ｓ＝１／60）

なるか。主柱穴は床面を取り巻く８本と考えられる。南側の３本のピットはピット間が短くそれぞれ約1.2mだがその他は1.8m～2.0mで中央ピットを挟んで対角線上に配されている。主柱穴の直径は0.2～0.7mとばらつきがあるが、深さは0.5～0.7m程となる。形の小さいものは柱根のみを掘削し埋め土部分を残した可能性も否定できない。中央ピット脇に小ピットの柱列を確認できた。それぞれ0.2m内外の径を持ち、深さは0.3m～0.5m。中央ピットを挟んで対応する柱列の存在も考えられたが検出にはいたらなかった。

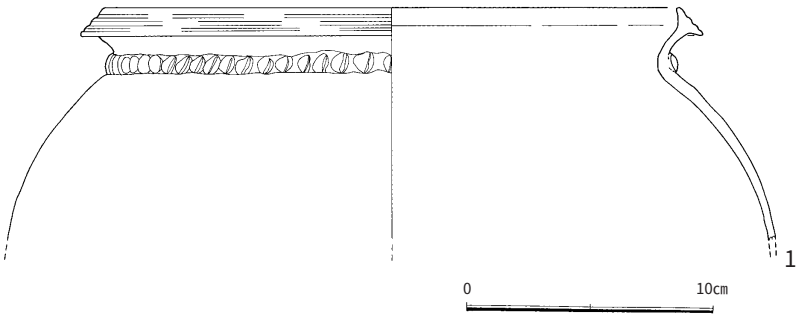
遺　物（第46図）

１は弥生土器甕で、口縁部の一部が残存しており、復元口径23.0㎝である。全体に風化が激しく調整痕は確認できなかったが、口縁外部には３条の凹線を施し、頸部には指頭圧による粘土帯を持つ。

（6）ＳＩ０７

遺　構（第47図）

調査区東側、標高84.7mに立地する隅丸方形と思われる住居跡である。床面、壁面ともに流出しており、特に壁面は北側～東側の一部しか残っておらず、立ち上がりは最大で0.4m。床面は、や

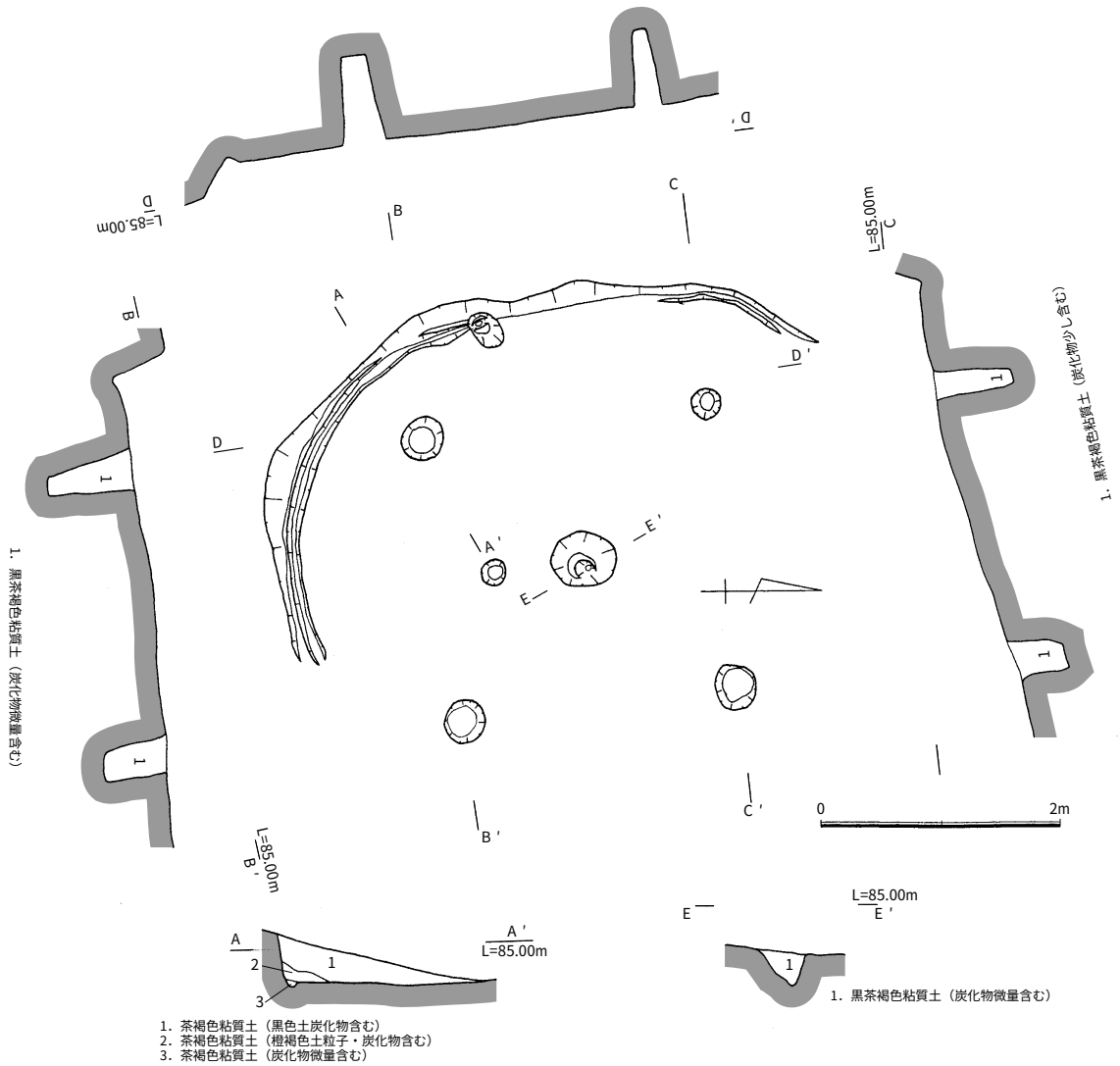


第46図　Ⅱ区上SI06出土遺物実測図（Ｓ＝１／３）

や残りがよいが、南側へ丘陵なりに傾斜している。主柱穴４本は検出することができ、ピット間約1.9m×1.9mの正方形の配置になっている。主柱穴は約0.3～0.5mの直径を持ち、0.4～0.7mの深さを持つ。中央ピットは、長軸0.6m×短軸0.4mの楕円形、深さ0.3mで掘り込まれており、脇に直径0.2mの小ピットを伴っている。対応する一対の小ピットの存在を考え対角線上を中心に精査を行ったが、検出することはできなかった。遺物は検出することはできなかった。

（７）加工段１～２

Ⅱ区上の南東に伸びる尾根上にそれぞれ、平坦面を確認したため加工段１～２とした。加工段１については、堆積土中から何点かの遺物が出土しているが、そのほかには遺物の検出はなかった。平坦面は検出したものの壁面の立ち上がりは明確でなく、隣接するＳＩ０５・ＳＢ０１に伴うものかもしれない。加工段２は遺物、溝等の遺構の検出がなく平坦面の規模も小さく遺構でない可能性が高い。いずれの加工段も検出面の地山層は、真砂質土の非常にもろいもので、地山の目に沿って掘り進めた結果、加工段の様相になったに過ぎない可能性が高く、加工段の名称はつけておくが詳細はここでは省きたいと思う。



第47図　Ⅱ区SI07実測図（Ｓ＝１／60）

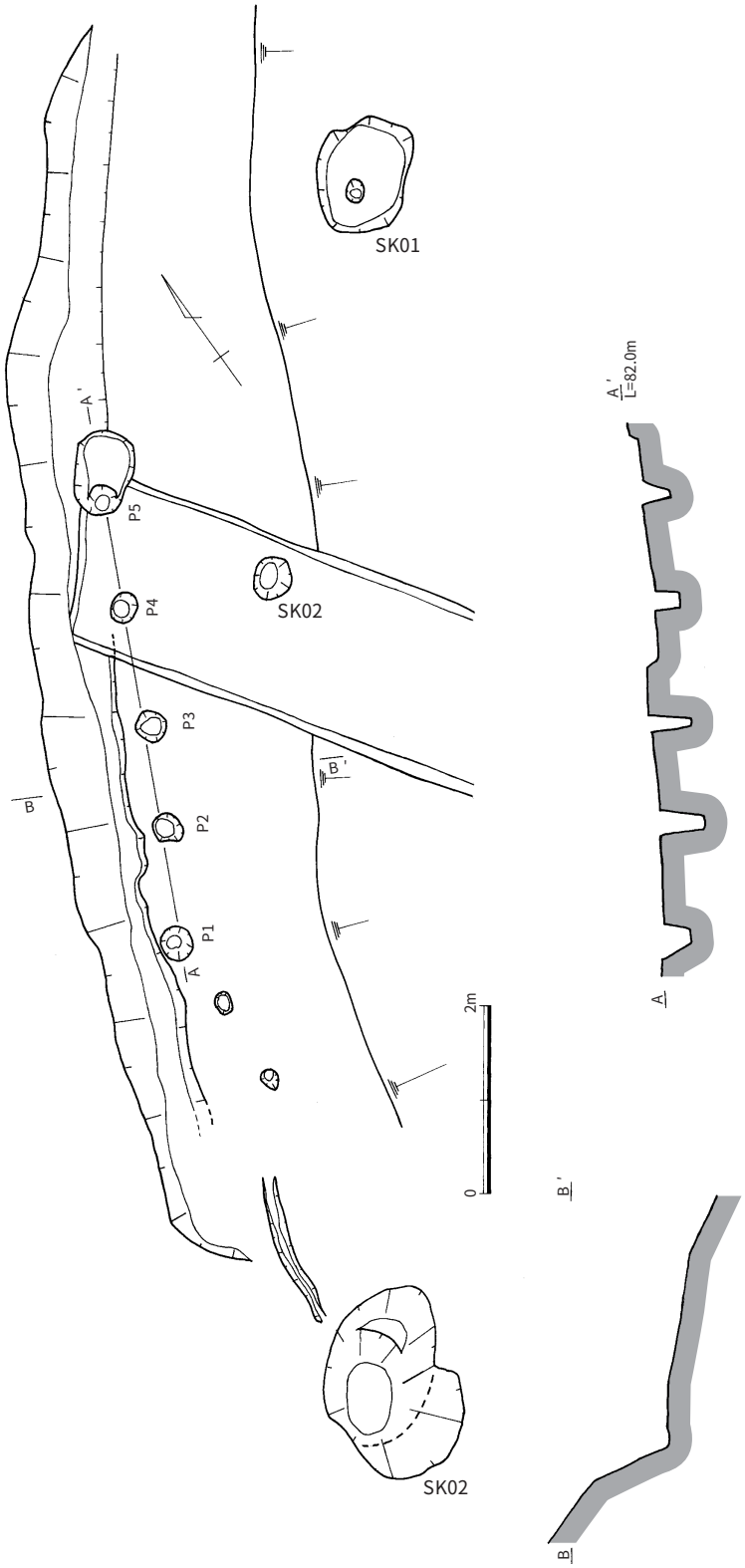
（８）加工段３（第50図）

ＳＩ０６の南側に後述する加工段４と連続する形で所在する。ピットの検出はなかったが、溝状遺構が立ち上がり部分にめぐっている。溝は幅0.2～0.4m深さは0.1mほどで、平坦面をコの字形にめぐる。平坦面は8.6m×1.3mの規模で残存しているが、東側斜面部分は流出しているものと考えられる。遺物は出土しておらず、時期、性格等は不明である。

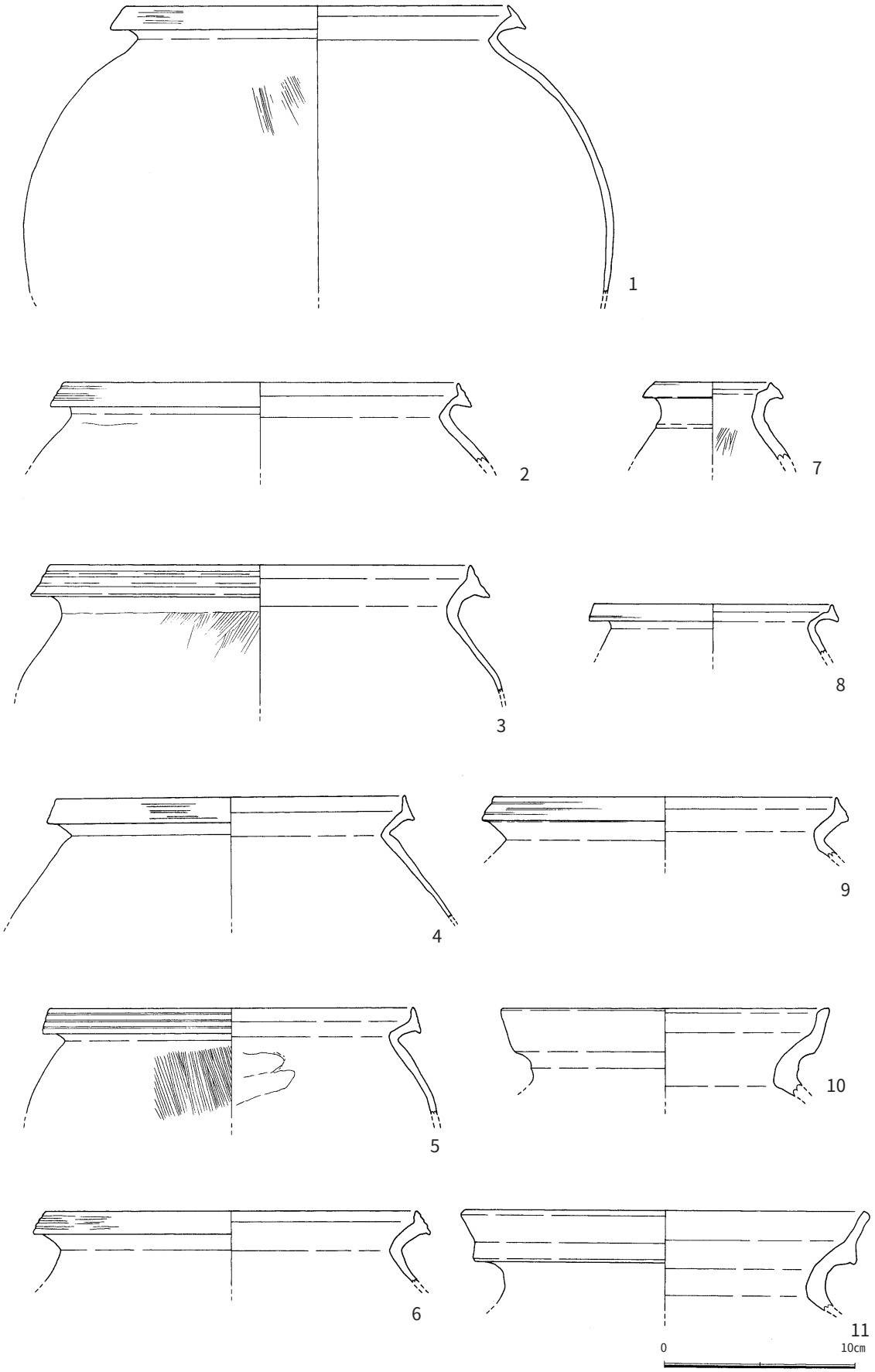
（９）加工段４

遺　構（第48図）

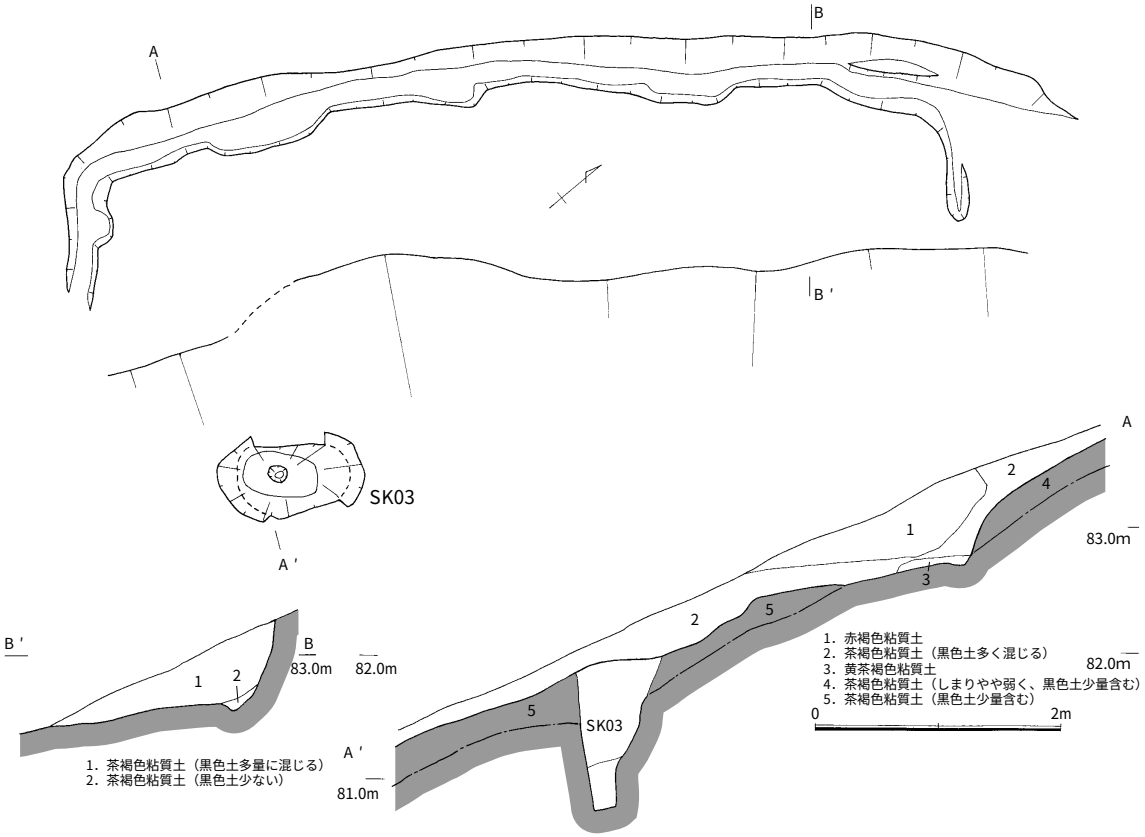
加工段３の北側に隣接しており、一連の加工段のように見える。東側斜面部分は流失していると思われ、平坦面の幅は１～1.5mほどのせまいものである。柱列および溝状遺構を検出している。この斜面部分には土壙ＳＫ０１・０３があるが、この加工段との関連性は不明である。Ｐ１～５が柱列となると思われる。この柱列を取り巻くように幅約0.2m、深さ約0.1mの溝状遺構がめぐる。東側のＰ６がＰ４に対応するようにも見えるが、流失した部分が大きくはっきり断定できない。壁の周辺からはまとまって遺物が出土しているが埋土層からであるため、直接の関連性は不明である。



第48図　Ⅱ区上加工段４実測図（Ｓ＝１／80）



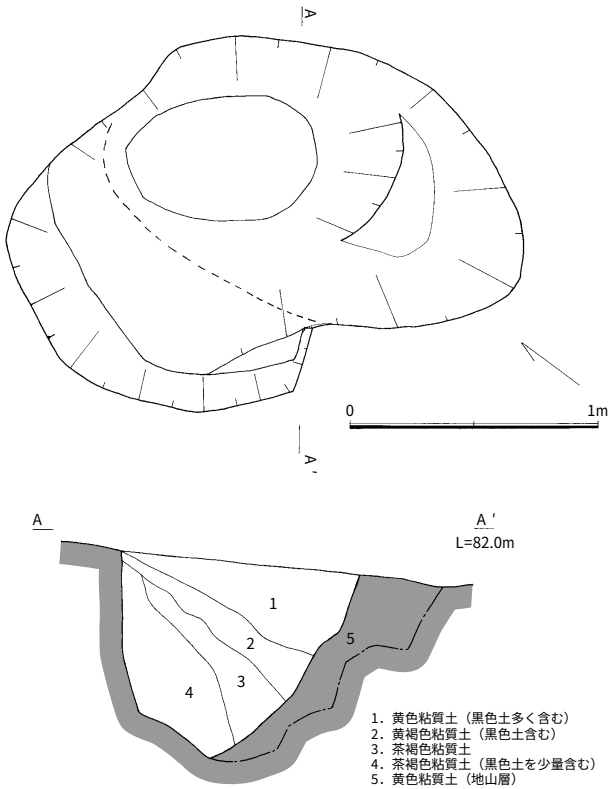
第49図　Ⅱ区上加工段４出土遺物実測図（Ｓ＝１／３）



第50図　Ⅱ区上加工段３実測図（Ｓ＝１／60）

遺　物（第49図）

加工段４の壁立ち上がり部分の流入土層からまとまって出土した遺物で、遺構との直接の関連性は不明である。１は弥生土器の甕で口縁部に３条の凹線紋を施す。復元口径は18.1㎝を測る。一部にハケ目らしき痕跡は見えるが、全体に風化が激しくはっきりしない。２は弥生甕で復元口径21.8㎝を測る。内面の調整は風化のため確認できないが、口縁部には２条と思われる凹線と頸部付近までのハケ目を見ることができる。３も風化が大きく内面の調整はかっきりしないが外面には口縁部に３条の凹線がうっすらと確認でき、体部にハケ目らしき痕跡も見ることができる。復元口径は19.8㎝で口縁部の１／４程度が残存している。４は弥生甕で復元口径18.8㎝を測る。口縁部に３条の凹線を施し、縦方向のハケ目を施す。

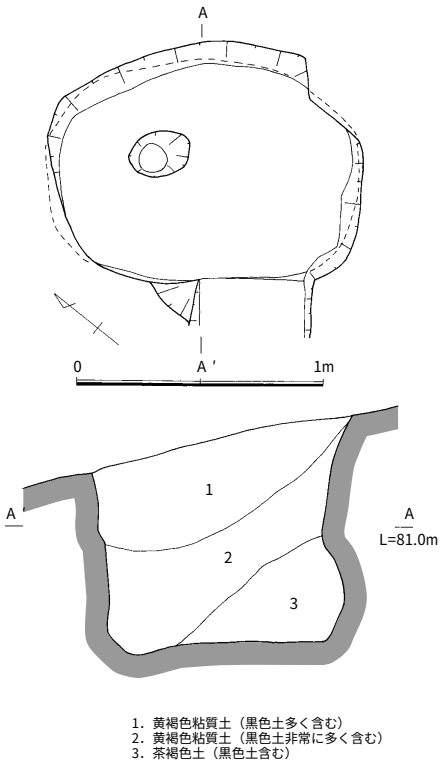


第51図　Ⅱ区上SK01実測図（Ｓ＝１／30）

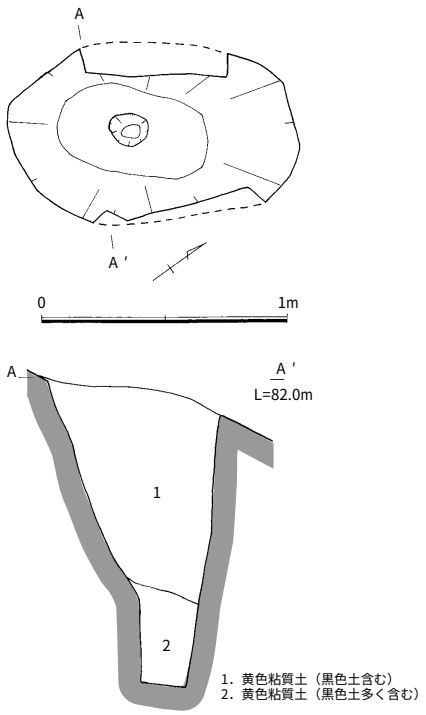
全体に風化が大きくはっきりしない部分が多いが内面には指圧による指圧痕らしき調整が見える。５は弥生甕である。復元口径は20.5㎝を測り、口縁部には３条の凹線が見える。全体に風化が大きく細かな調整痕は見ることができないが、外面の頸部にナデの痕跡は認められる。６は弥生小型の壷であろう。口縁部の約半分が残存しており、復元口径は5.8㎝を測る。全体に風化により調整痕ははっきりしないが、内面にハケ目らしき痕跡を見ることができる。７は弥生甕である。復元口径12.3㎝を測る。短く内傾して立ち上がる口縁部を持ち、外面には凹線を施しているが１条のみしか確認できなかった。そのほかの調整についても風化が大きくはっきりしない。８は弥生甕である。復元口径は17.8㎝を測り、短く内傾して立ち上がる口縁部には３条の凹線が認められるが、磨耗が大きく一部に確認できる程度である。外面はナデによる調整と思われるが内面の調整についてははっきりしなかった。９は、弥生甕口縁部で復元口径20.6㎝を測る。全体に風化が大きく内外面ともに調整は不明である。外傾しながらまっすぐに立ち上がる口縁部を持つ。10も弥生甕口縁部である。やや肉厚の口縁部である。11は弥生甕口縁部である。内傾して立ち上がる口縁部を持ち３条の凹線を施すが、全体に風化により調整痕等は確認できなかった。復元口径は19.3㎝を測る。

（10）ＳＫ０１（第51図）

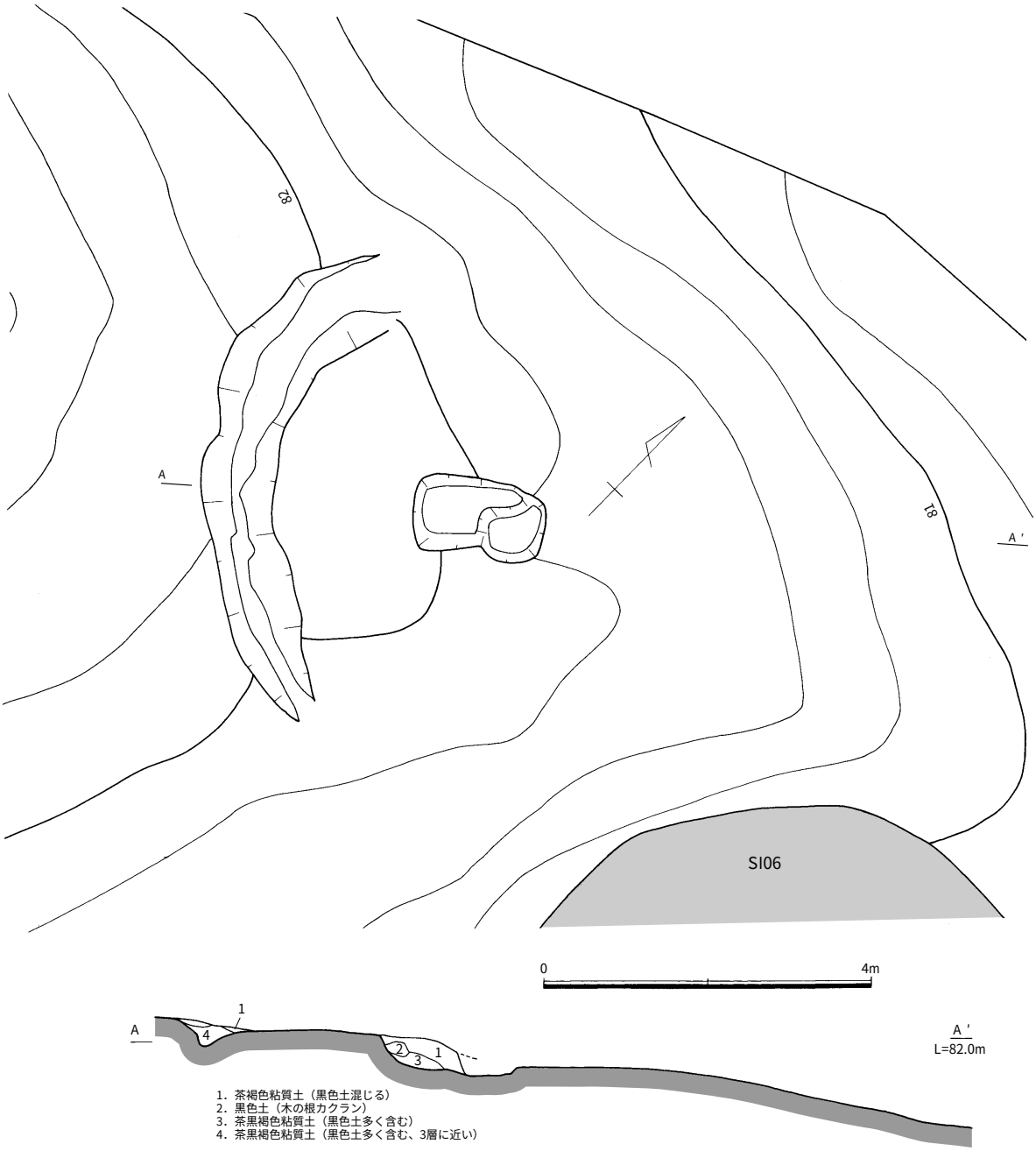
加工段４の東側斜面、上面で標高約81.9mの位置に所在する。長軸約1.3m、短軸約0.6m、深さ約0.9mの規模を持ち、底面にはピットが確認できた。ピットは直径0.2mのやや楕円形、深さ0.4mで、ほぼまっすぐ掘り込まれている。落とし穴系の遺構であると想像される。遺物は出土していない。



第52図　Ⅱ区上SK02実測図（Ｓ＝１／30）



第53図　Ⅱ区上SK03実測図（Ｓ＝１／30）



第54図　Ⅱ区上１号墳実測図（Ｓ＝１／80）

（11）ＳＫ０２（第52図）

ＳＫ０１同様に加工段４の東側斜面に設けられた土壙である。検出時に周辺のやわらかい真砂土質の地山層を掘り込んだために、大きな検出面となってしまったが長軸1.8m、短軸0.9m、深さ0.9mの楕円形の土壙となると思われる。この斜面に設けられたＳＫ０１、０３ともに底部にピットが検出できたがこの土壙はピットを伴っていない。これら２つの土壙とは性格が若干異なることも考えられるが、遺物等も含まれておらず時期等も含めて詳細な性格は不明である。

（12）ＳＫ０３（第53図）

加工段３の東側斜面に所在する。標高は上面で約82.0mを測り、サブトレンチによって上面は若干掘り飛ばしているが、長軸約1.6m、短軸0.8m、深さ約1.1mの規模を持つものと思われる。底面

にはピットを設けており、直系約0.2m深さ約0.2mである。遺物の検出はなく、時期等は不明であるが、ＳＫ０１同様に落とし穴系の遺構であると考えられる。

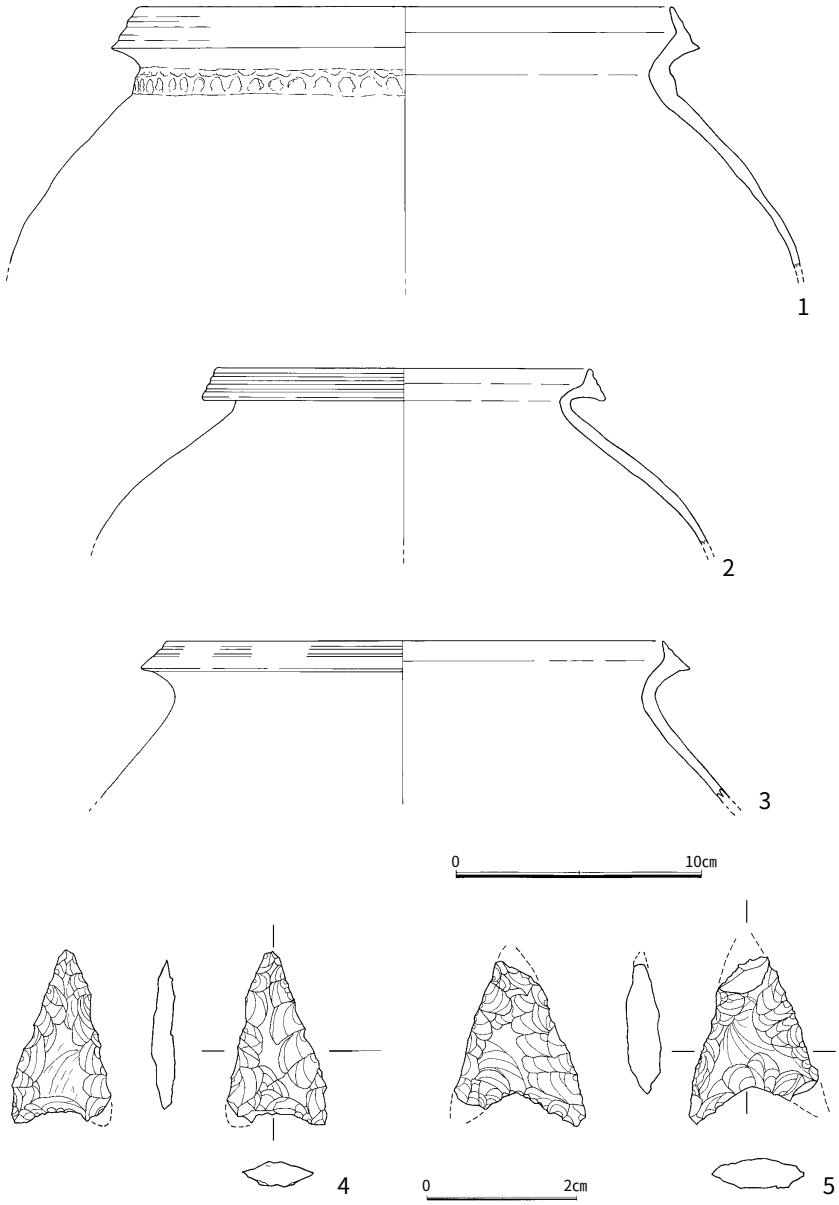
（13）１号墳（第54図）

Ⅱ区上の北端、ＳＩ０６の北側に所在する。掘削前の周囲の状況は、調査後地形とほぼ同様東側に向かって斜面が緩やかに傾斜しており住居跡の所在は想定していたが、古墳の所在は想定外であった。約0.2mの表土層を除去するとすぐに地山層が現れ、精査を行ったところ周溝が確認できた。また、周辺もあわせて精査したところ主体部の土壙が確認できこの場所が、古墳であることが分かった。

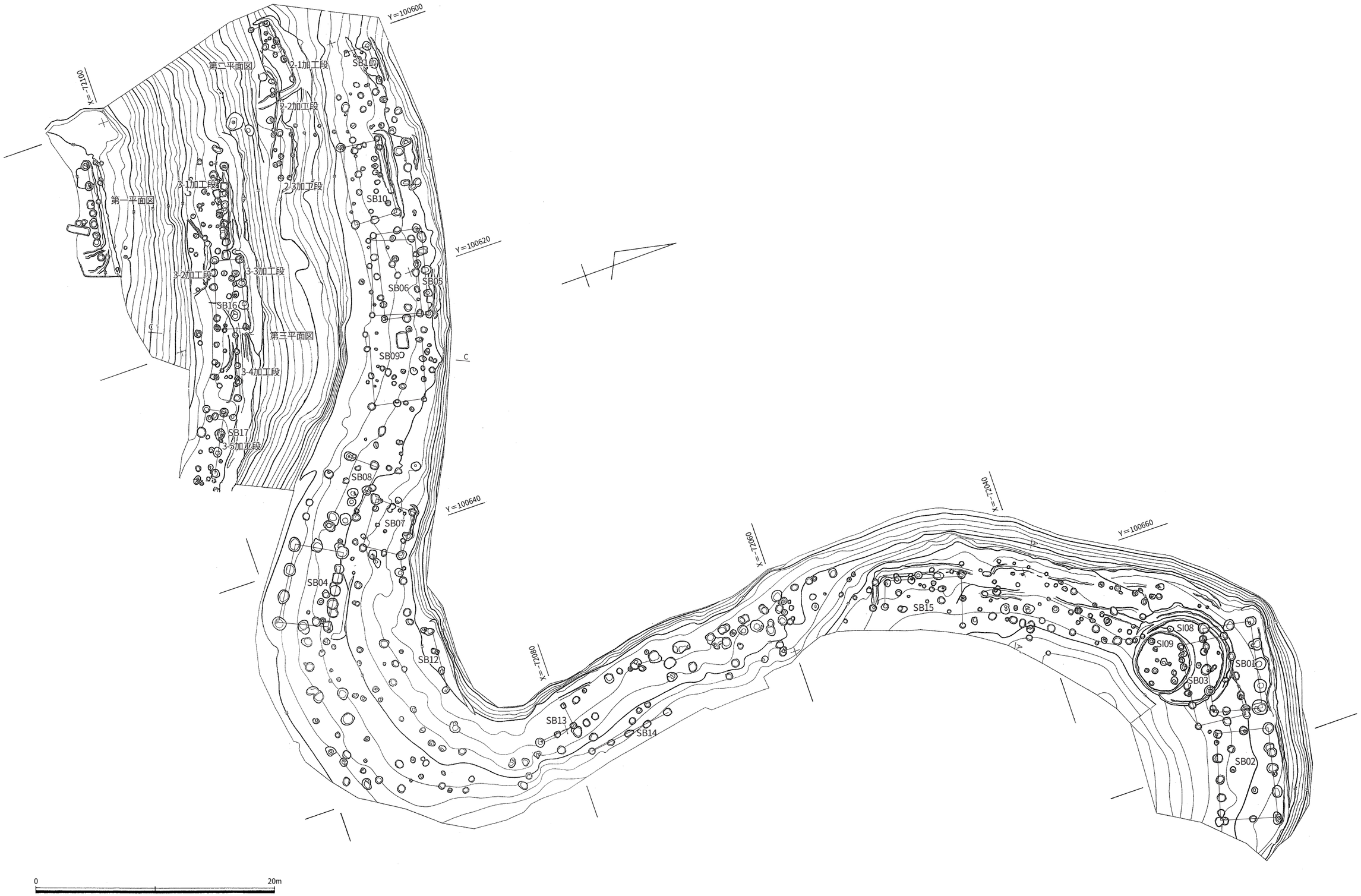
周溝は地山層に掘り込まれており、深さ最大0.3mほどである。緩やかに弧を描いており、この周溝の形状からこの古墳は円墳である可能性が高いと思われる。主体部を中心と考えると墳丘規模は約８mになると予想される。主体部は底部のごく一部が残っている状況であるが、現況で長軸1.6m短軸約0.9m深さ最大0.3mである。南側は、周溝・主体部のいずれからも遺物は出土しておらず、時期・性格ともにはっきりしない。

（14）Ⅱ区上遺構に伴わない遺物（第55図）

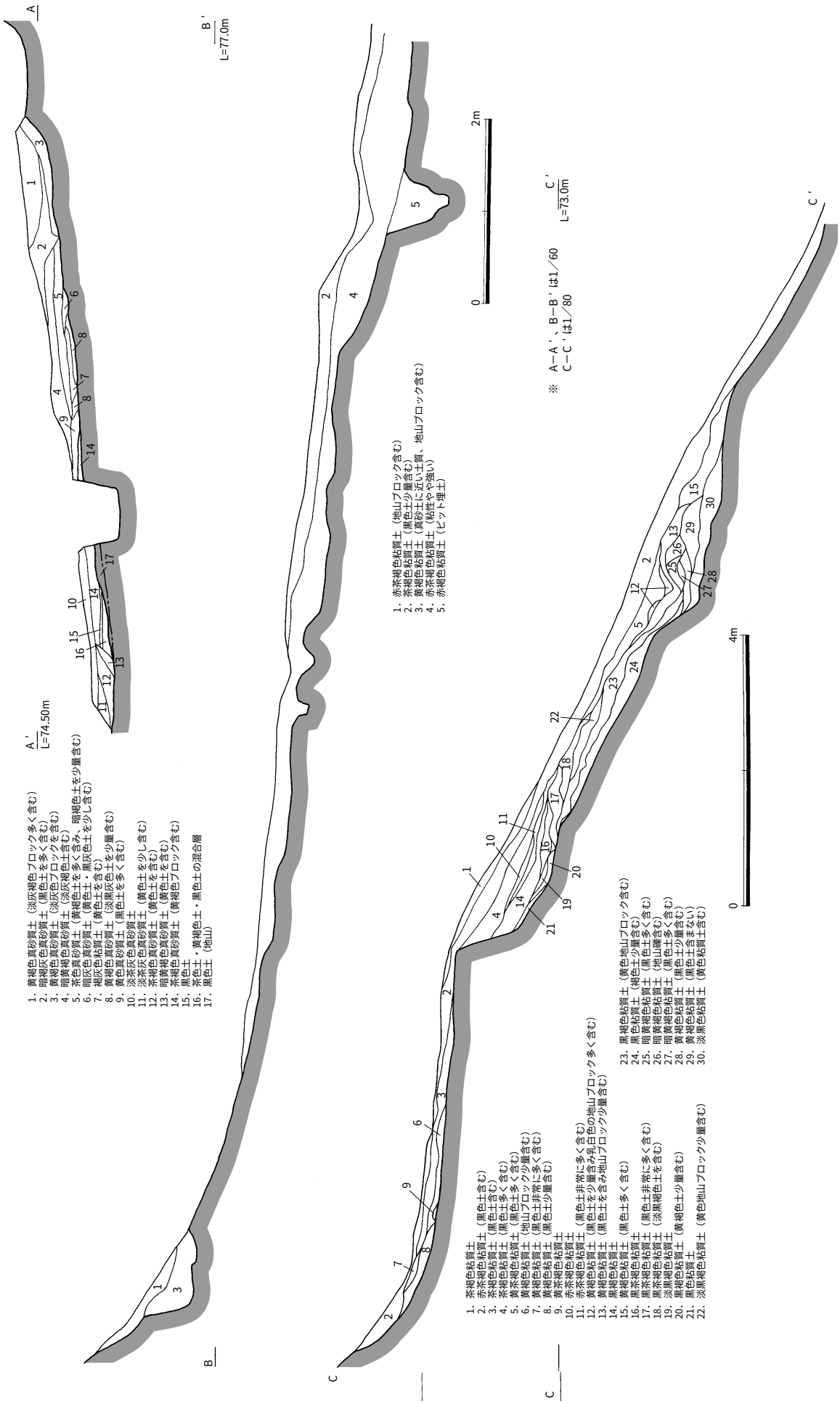
１～３は弥生土器、４・５は黒曜石製石鏃である。土器は加工段１付近の流入土、石器は丘陵斜面の流入土中から検出している。１は甕口縁部で復元口径21.4㎝を測り、内傾して立ち上がる口縁部を持ち３条の凹線を施す。頸部に指頭圧による粘土帯を持つ。全体に磨滅しており、口縁部の凹線もかすかに残る程度である。２も甕



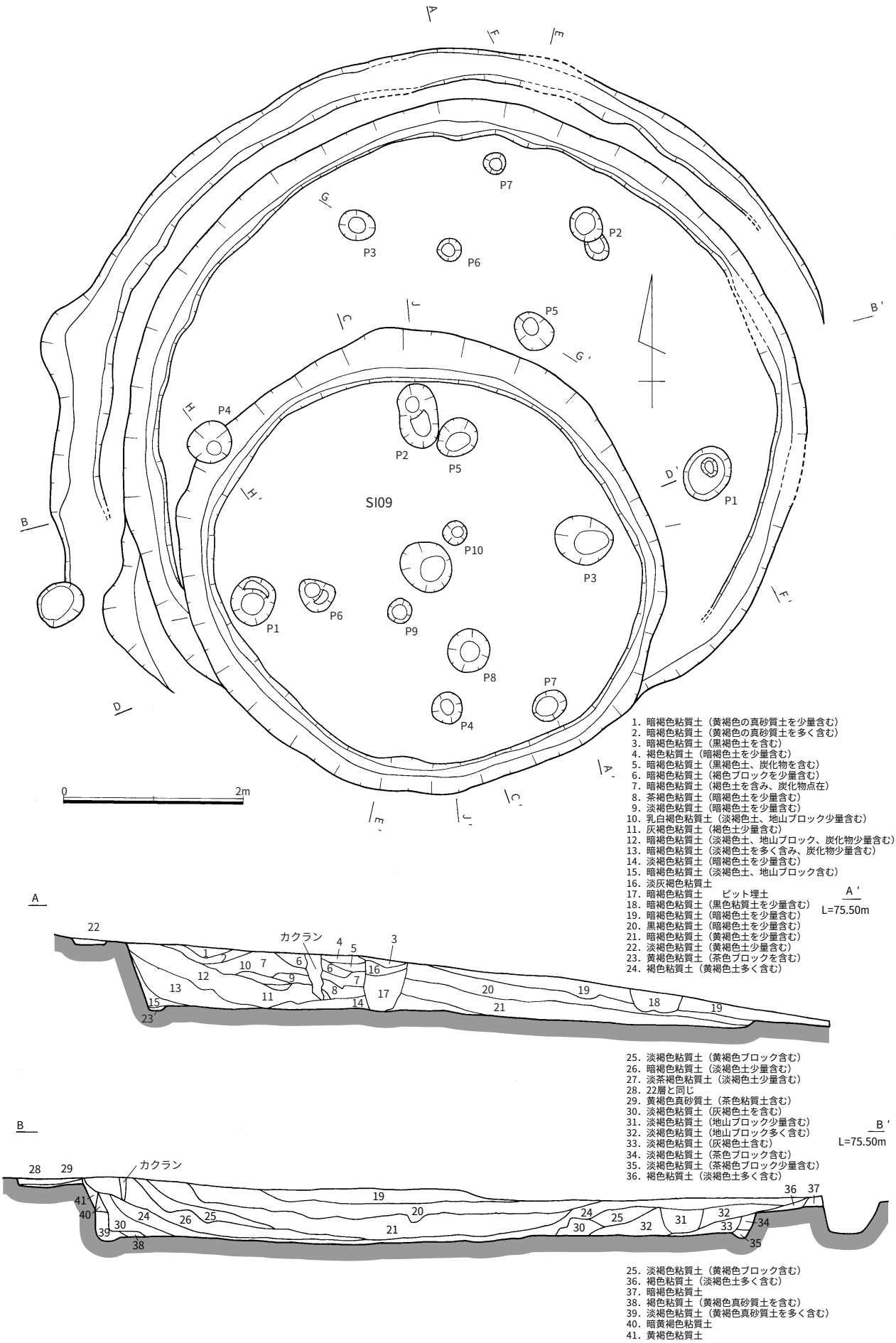
第55図　Ⅱ区上遺構外遺物実測図（Ｓ＝１／３　４・５はＳ＝１／１）



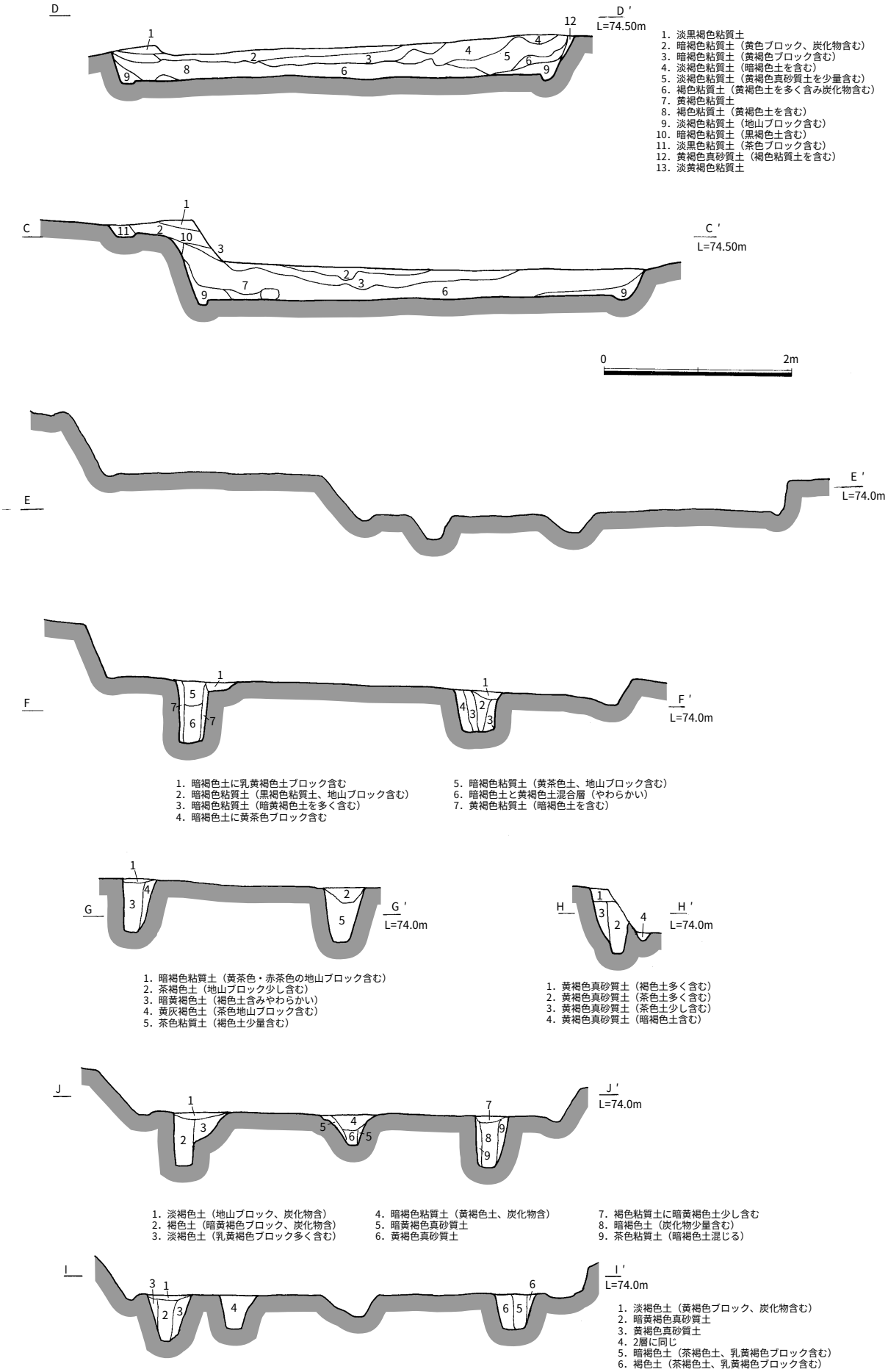
第56図　永昌寺の谷遺跡Ⅱ区下遺構配置図（Ｓ＝１／300）



第57図　Ⅱ区下セクション実測図（１）（Ｓ＝１／60）



第58図　Ⅱ区下SI08・09実測図（１）（Ｓ＝１／60）



第59図　Ⅱ区下SI08・09実測図（２）（Ｓ＝１／60）

で復元口径14.8㎝を測る。口縁部に３条の凹線を施し、体部にはハケ目らしき跡が見えるが、磨滅のためはっきりしない。３も甕で復元口径20.8㎝を測る。口縁部に２条の凹線が見えるが磨滅しており、うっすらと確認できる程度である。４は長さ4.3㎝、幅2.3㎝、ほぼ完全な形であるが返しの一部が欠損している。５は長さ4.4㎝、幅2.7㎝、先端の一部と返しの一部が欠損している。

２．Ⅱ区下

Ⅱ区は丘陵中腹を逆Ｌ字型に囲む第１平坦面を中心にそのほかの第２～４平坦面の大きな加工段で構成されている。それぞれの平坦面ごとに詳細は記述することとするがⅡ区上との関連性も考慮して検出順が逆となるが弥生住居から掲載することとする。

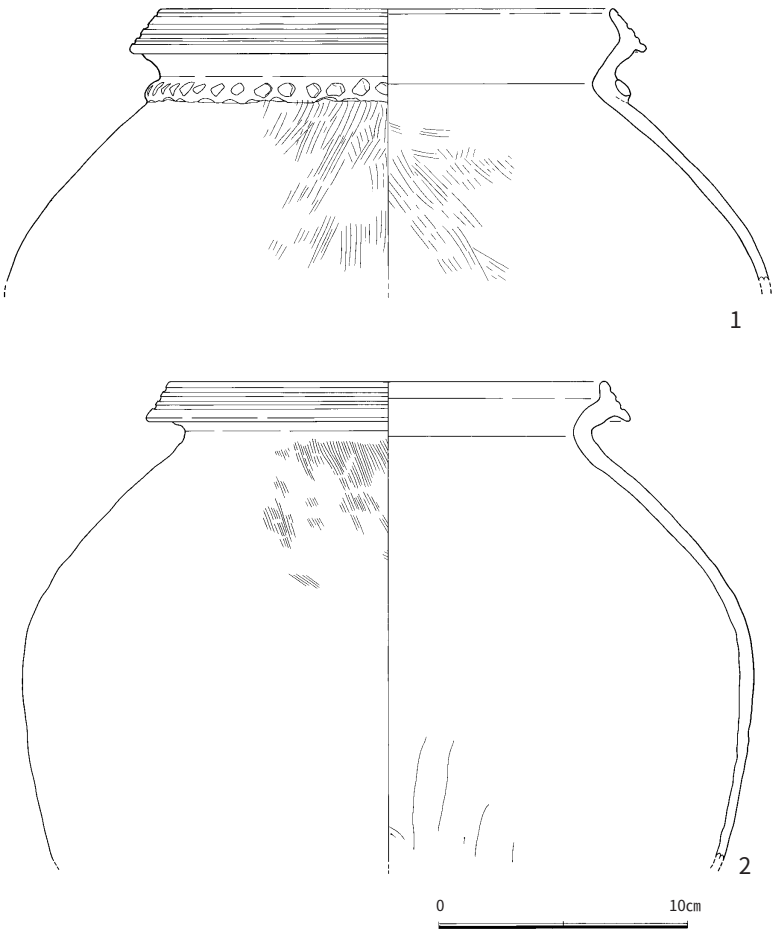
（1）ＳＩ０８・０９

遺　構（第58・59図）

ＳＩ０８は、Ⅱ区下の調査区東側端、標高約74.2mに位置し、ＳＢ０１・０３の下面から検出した。床面検出時に、南側半分はＳＩ０９により消失しており、北側約半分のみが残存していることが分かった。ＳＩ０９の埋土には、ＳＩ０８に伴うピット等が検出できず、このためＳＩ０９により削平されていることが確認できた。残存部分から壁体溝内側で直径約6.8mの円形住居となる。壁面の立ち上がりは最大で0.6mである。

配置から考えるとＰ１～Ｐ４までが残存する主柱穴であると思われ、復元すると６本柱となるか。残存する主柱穴は直径0.4～0.6m、深さはいずれも約0.6mである。ピット間は、2.3～2.5mとなる。住居を取り巻くように幅0.3～0.6m深さ0.1mほどの周溝が設けられており住居の北半分を取り囲んでいる。

ＳＩ０９は、ＳＩ０８の南側半分を掘り込んで建てられている。ＳＩ０８の床面を精査している段階で検出した。覆土にはＳＩ０８に伴うピット等は検出できなかったため、この住居跡がＳＩ０８の後に作られたものであると考えられる。



第60図　Ⅱ区下SI08出土遺物実測図（Ｓ＝１／３）

直径約5.3mの円形住居である。壁面立ち上がりは最大約0.4m。主柱穴はＰ１～４もしくはP３～６の４本になると思われる。Ｐ１～４とした場合、やや不規則な配列となり、ピット間も1.8m～2.3mとばらつきがある。Ｐ３～６の配列とした場合は約1.6m×2.0mの規則的なものとなるが、住居全体からするとやや東に偏っている。いずれにしてもややいびつな配列となると思われる。

住居中央に直径約0.6m、深さ0.3mの中央ピットを有し、一対の小ピットを伴う。これらのピットはいずれも直径0.3m内外、深さは約0.3mである。

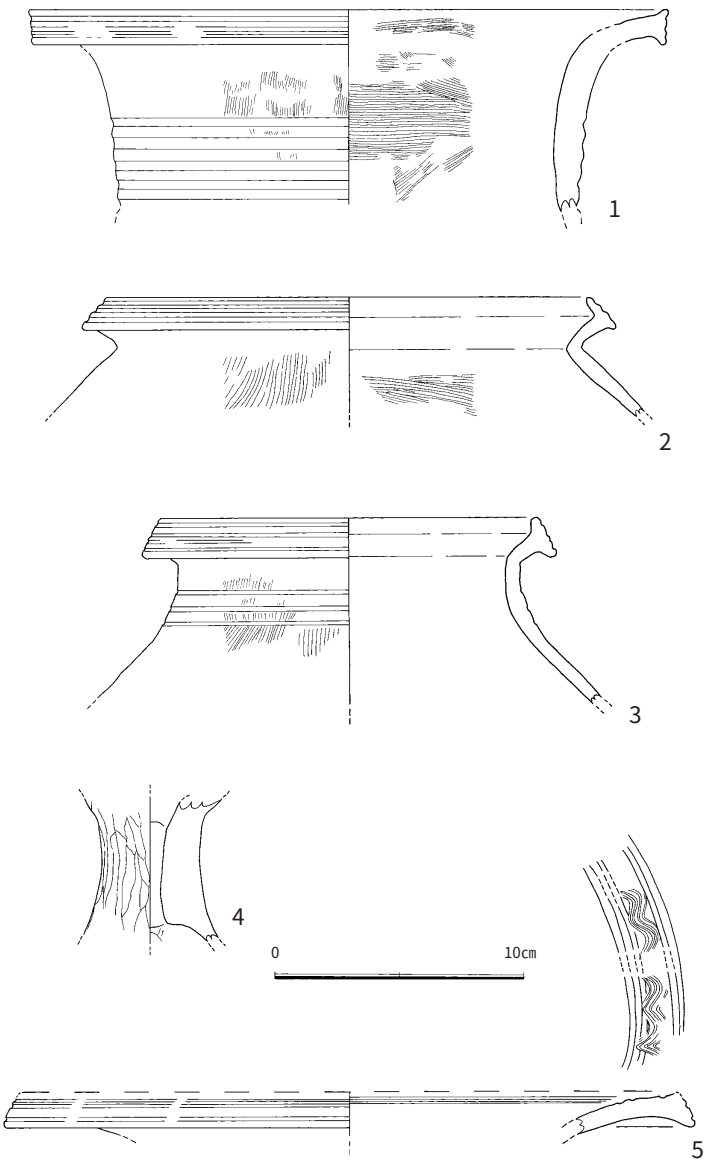
ＳＢ０９の遺構検出面は、地山面ではなく黒褐色の堆積層のような部分である。この検出面の下が地山面となっているが、地山面は谷部に向かって傾斜しており、遺構を伴っていない。自然堆積等によってテラス状になった部分に住居を構えたのかもしれない。Ⅱ区下の堀建柱建物の部分でも述べるが、この周辺はあらかじめ、ある程度の平坦な場所がありその部分に遺構を設けていると思われる。

遺　物（第60図）

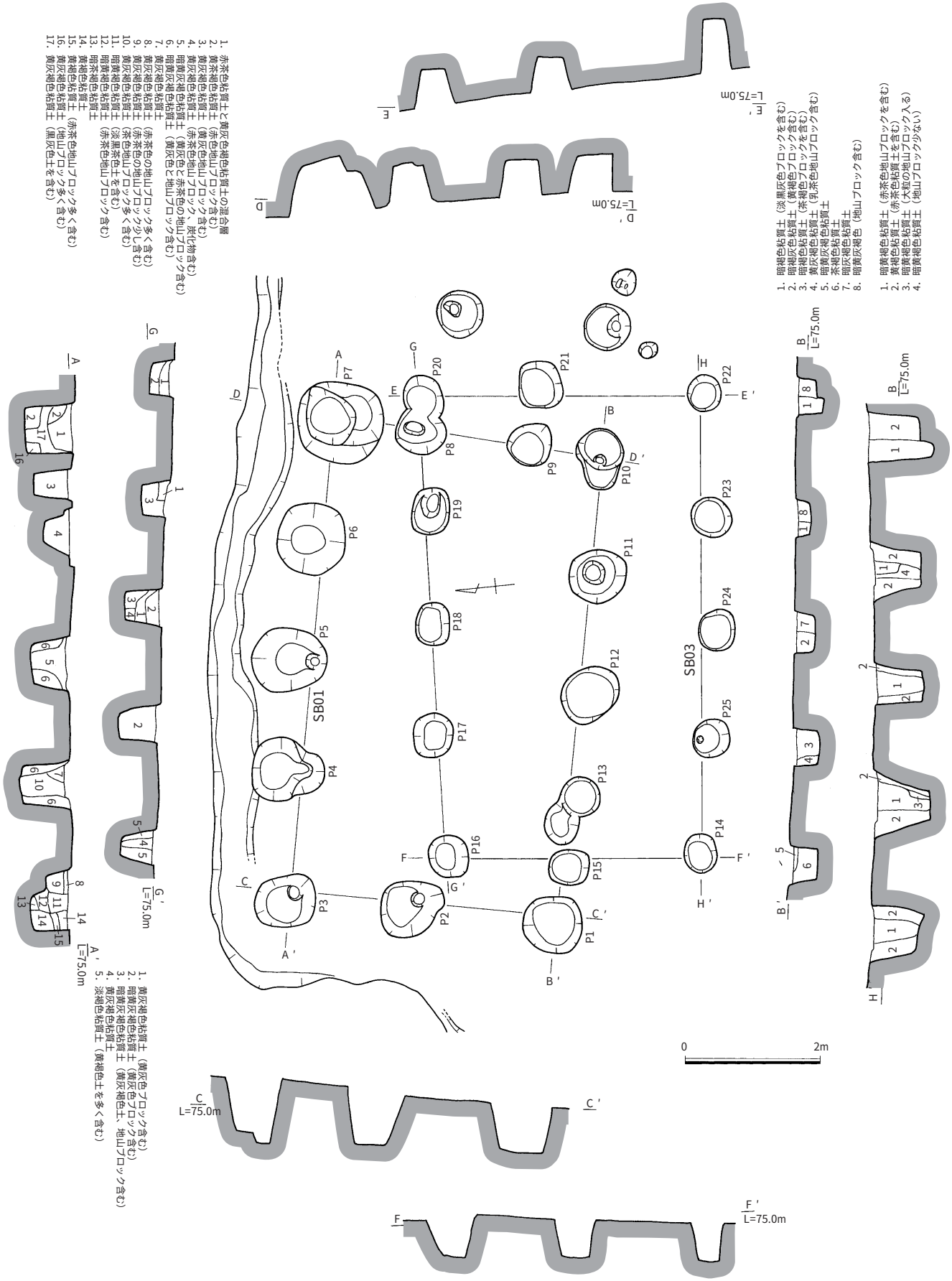
１、２ともに弥生土器甕である。１は、復元口径17.4㎝を測り全体の約１／５～１／４が残存している。口縁部には３条の凹線、頸部付近まで斜め方向のハケ目が確認できる。内面はヘラケズリを施しているようにも見えたが風化のためはっきり確認できなかった。２は、復元口径18.0㎝を測り内傾して立ち上がる複合口縁を持つ。口縁部には４条の凹線を施し、頸部には粘土帯を貼り付け、刻み目を施す。内外面とも頸部付近までハケ目調整で仕上げる。

ＳＩ０８・０９周辺出土遺物（第61図）

直接住居跡から出土したものではないが、周辺から比較的まとまった形で弥生土器が出土している。第１



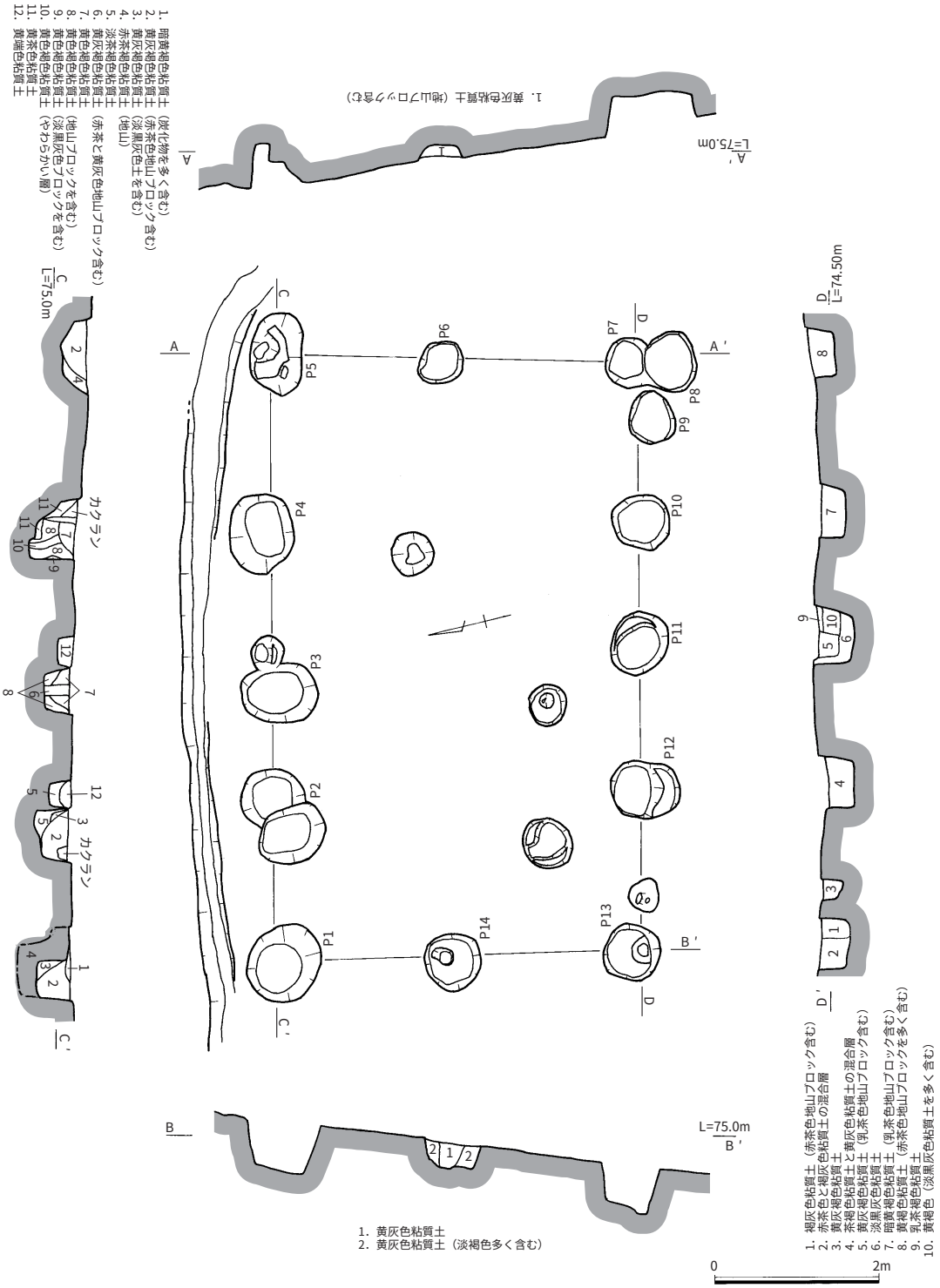
第61図　Ⅱ区下SI08・09周辺出土遺物実測図（Ｓ＝１／３）



第62図　Ⅱ区下SB01・03実測図（Ｓ＝１／80）

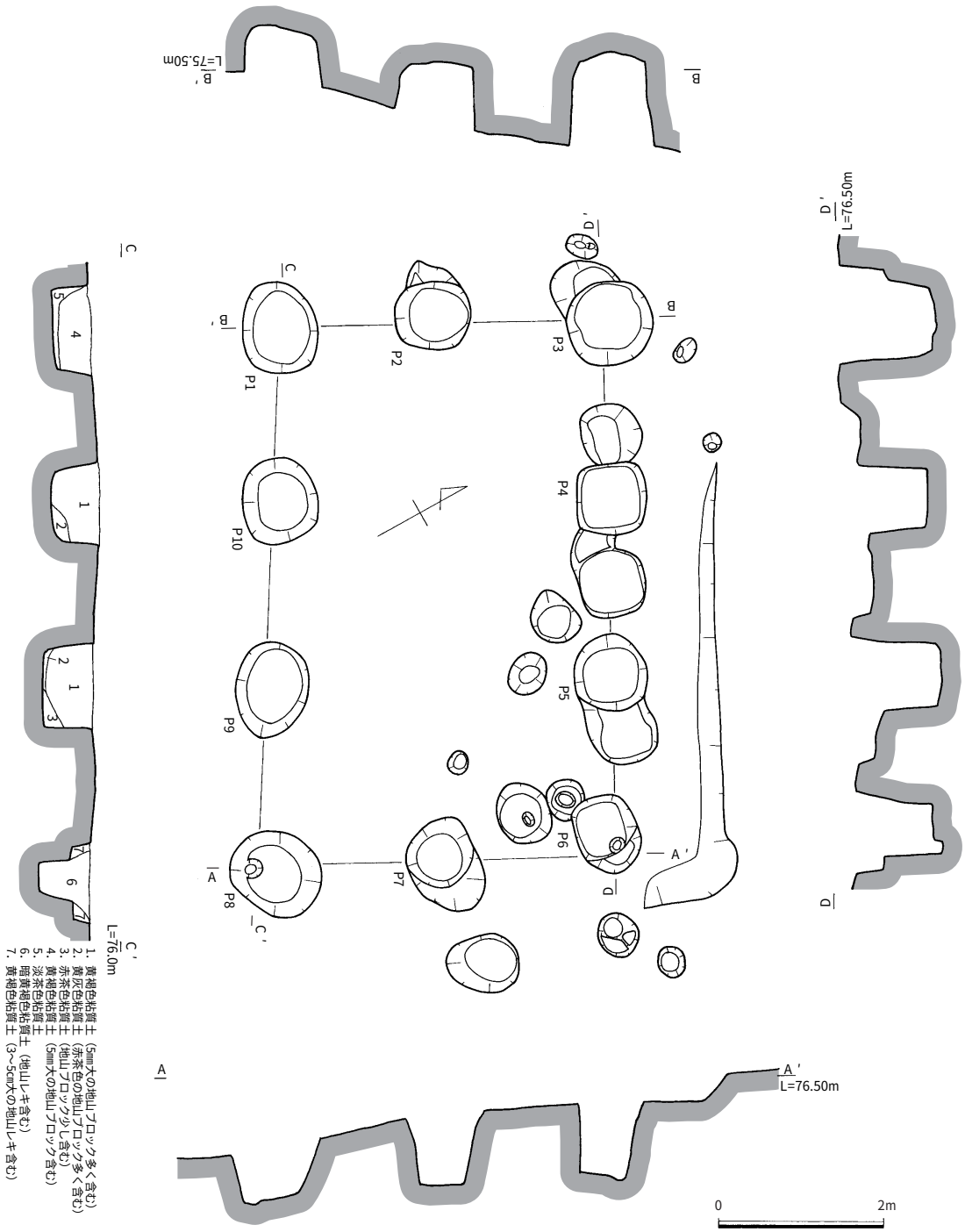
平坦面のほかの部分では弥生土器が少なく須恵器が大部分を占めたためここでまとめておきたい。

１は、弥生壷で復元口径25.3㎝を測る。口縁部は大きく外反し端部を肥厚させ３条の凹線を施す。頸部には５条以上の凹線を施していると思われるが現況では４条目と５条目の半分が確認できる。内外面ともハケによる調整を施しており、外面はタテ方向、内面はヨコ及びナナメ方向のハケ目が見える。２は弥生甕で口縁部は短く内傾して立ち上がり、３条の凹線が確認できる。復元口径は19.4㎝を測る。内外面とも頸部付近までハケによる調整が行われており、外面はタテ方向、内面は横方向のハケ目が見える。３は、弥生壷で口縁部に４条、頸部に３条の凹線が見える。また、頸部



第63図　Ⅱ区下SB02実測図（Ｓ＝１／80）

の凹線付近にかろうじてハケ目を見ることができるが全体に風化が大きくそのほかの調整については確認できなかった。復元口径は15.0㎝を測り、口縁部～頸部の１／６程度が残存する。４は弥生器台脚部と思われる。外面はヘラみがきが施されているが全体的に荒めの印象である。また、外面のほぼ全体と内面の一部に赤い塗料の付着が見られる。５は弥生壷口縁部で復元口径は27.6㎝を測るが、全体の１／10程度が残存のため若干の誤差が考えられる。上面には３条の凹線と４～５条の波状紋を見ることができる。



第64図　Ⅱ区下SB04実測図（Ｓ＝１／80）

Ⅱ区下第１平坦面

Ⅱ区下の調査区の大部分を占める大きな加工段で、丘陵中腹を帯状に取り囲む平坦面の広がりである。北側の端には前述のＳＩ０８・０９の弥生住居があり、その上にはＳＢ０１～０３の比較的大きな掘立柱建物が所在する。この場所から南側に向かって約70mの平坦面が延びており、この部分にも多くのピット群が検出できたが、流出した部分が多いのか規則的な配列のピットは多くなかった。西に向かって大きく曲がる南向きの平坦面は東西幅約60mの広がりを持ち多くのピット群は、ＳＢ０４をはじめとする比較的まとまった建物跡となった。

第１平坦面北側のＳＢ０１周辺は標高75m付近に展開するが、ＳＢ１５の南側で１mほどの段がつきそれ以南は76m付近を中心に遺構が展開する。この１mほどの段を境に堆積のしかたが変わり、南側はほぼ地山に遺構が所在するが、北側は堆積土のような黒褐色の土が遺構面となる。

（2）ＳＢ０１・０３（第62図）

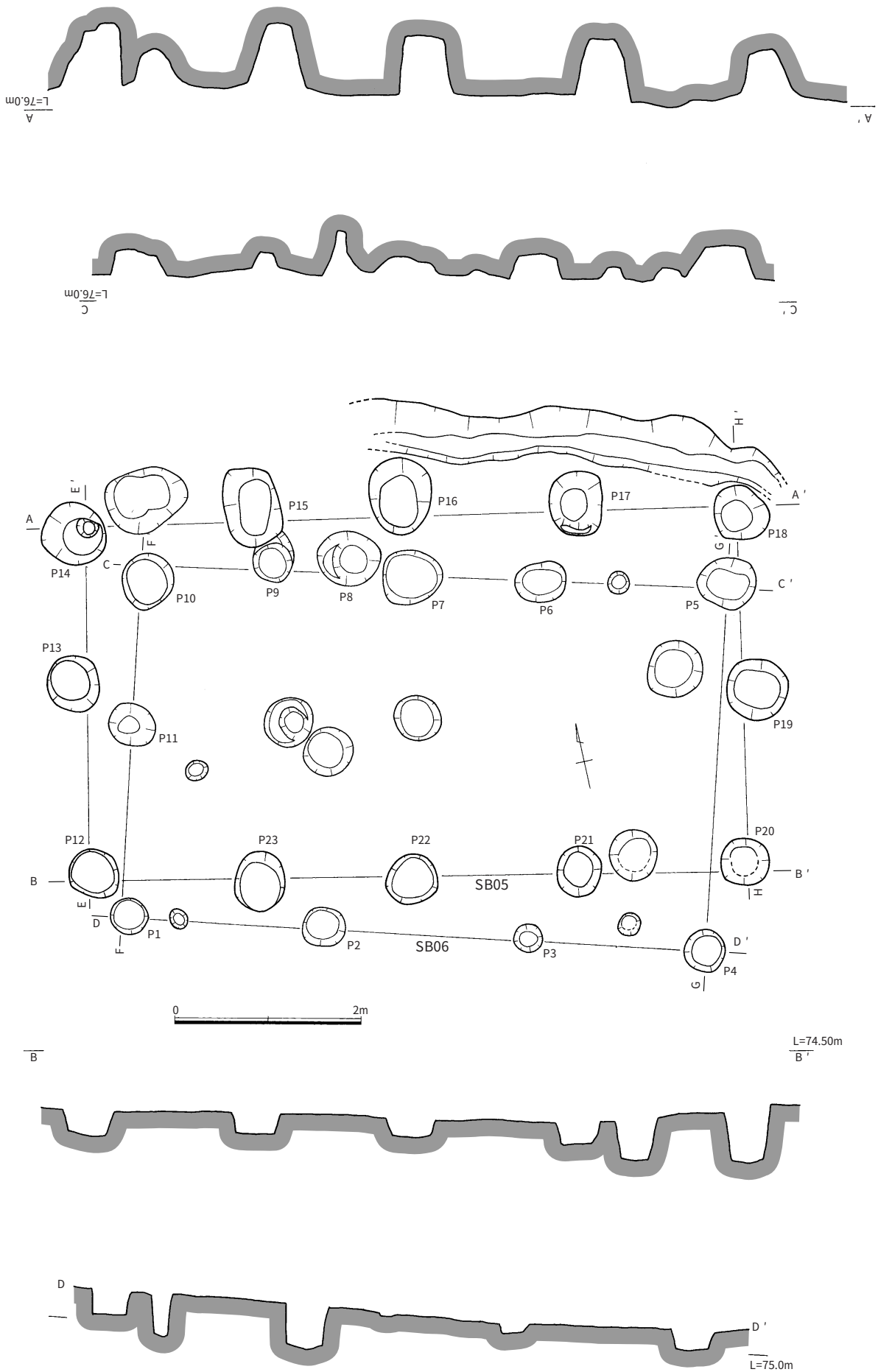
ＳＢ０１は、Ⅱ区下調査区の東端に位置する。桁行４間×梁間西側２間・東側３間と考えられる。不規則な配列となっているが、Ｐ２に対応する東側の主柱穴が検出できず、その代わりにＰ７～Ｐ10の間にＰ８・Ｐ９が検出できたためこのように判断した。ピット径は約0.7～1.2mの不整形な楕円で、一部方形のものも含む。深さは約0.6～0.9mである。ピット間は北側の柱列は0.6～0.8m、南側は1.0～1.2mで推移する。梁間西側Ｐ１～２は1.2m、Ｐ２～３は1.0mとなる。東側Ｐ７～８、Ｐ９～10はそれぞれ、約0.3m、0.4mＰ８～９間は0.9mとなる。桁行寸法7.8m×梁間寸法4.2mとなる。Ｐ１は丘陵を削り、その場所に掘り込んでいる。また、斜面との境界線に溝を設けて雨水等に対する備えを行っていると考えられる。

ＳＢ０３は、ＳＢ０１と重なり軸をやや南に傾けて立地する。桁行４間×梁間２間の柱間を持つ。ＳＢ０１に比してやや柱穴の規模は小さく、ピットは直径約0.5～0.7mの円形のものを基本とするが、北側の柱列Ｐ16～19は長軸0.6m、短軸0.5mの方形プランとなる。深さは約0.6～0.8mである。ピット間はもっとも短いＰ23～24間が1.06m、もっとも長いＰ21～22間が1.89mでその他は約1.1m～1.2mとなり、桁行寸法約6.9m×梁間寸法約4.2mの規模を持つ。

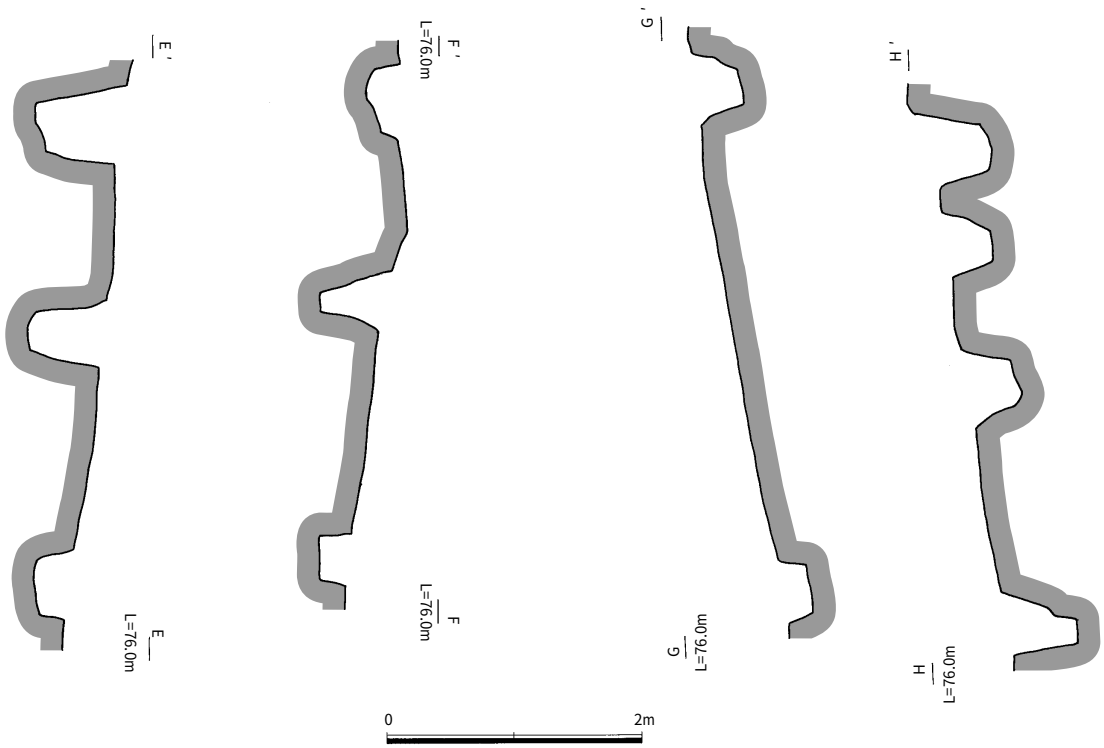
ＳＢ０１、０３のピットの多くは黒色の堆積土の中に、赤色土のプランが検出できる形で見つかった。ＳＩ０８・０９の埋土中から検出したということもあるが、弥生住居から外れた部分でもこのような形で検出できた。ＳＢ０１と後述のＳＢ０２は、北側の丘陵法面を削りこんで平坦面を広げて建物を建てているが、堆積等によってそれ以前からこの場所にある程度の平場があったことを示している。ＳＩ０８・０９が立地していたという影響も多分にあるが、すでにテラス状になっていた、この緩斜面を利用して建物を建てたということが言えると思う。

（3）ＳＢ０２（第63図）

ＳＢ０１の南側に位置し、桁行４間×梁間２間の掘立て柱建物跡。柱穴は直径約0.7m～0.9mで、深さは0.4mほどである。ピット間は桁行方向約1.2mを基本とするが、Ｐ２～３とＰ10～11間は0.8mである。梁間方向はＰ13～14間とＰ６～７間が約1.5mとなっており、その他は約1.3mとなる。このため桁行方向7.3m×梁間方向約4.4mの規模となる。ＳＢ０１と同様に、北側斜面は丘陵法面を削りこんで整地しており、溝状遺構も設けている。軸方向がＳＢ０１と同じであることや、全体



第65図　Ⅱ区下SB05・06実測図（１）（Ｓ＝１／60）



第66図　Ⅱ区下SB05・06実測図（２）（Ｓ＝１／60）

の柱間距離、規格などが似通っていることから、なんらかの関係のある建物もしくは平行して建っていた可能性も考えられる。柱根と見られるプランを一部のピットで検出している。

Ｐ３からは、土師質土器（第75図－６）が出土している。この土器は、Ⅱ区下の他の遺物と比較すると新しい様相をもつもので10～11世紀頃まで下がる可能性がある。

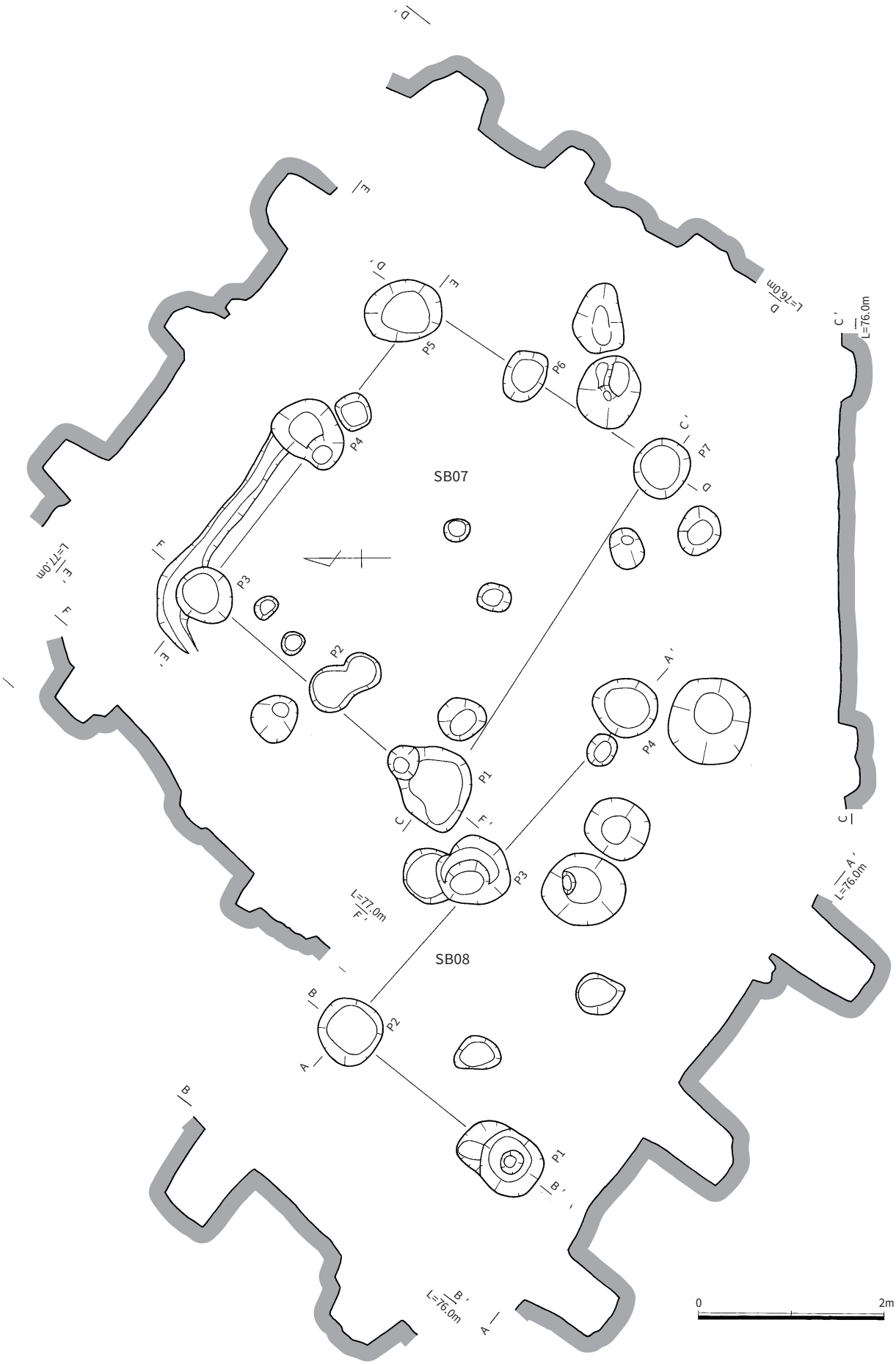
（４）ＳＢ０４（第64図）

Ⅱ区下の丘陵先端東側斜面に立地する。桁行３間×梁間２間の掘立て柱建物。柱穴の規模はこの調査区内では最も大きいものがまとまっており、方形の平面形を示すものも含まれる。最小のＰ６、４は一辺が約0.9mの正方形に近いプランを持ち、最大のＰ８は長軸1.1m短軸0.99mの楕円形プランを持つ。その他のピットも径0.9～1.1mの不整形な楕円形で、深さも１m～1.2mを測り、大きな規模の建物が建っていたことが想像できる。ピット間はＰ１～２間約0.9m、Ｐ７～８間が1.0mのほかは、1.1m～1.2m程の間隔となる。桁行寸法7.2m、梁間寸法4.92mの規模を持つ。この建物の東側からは、第76図－１の形象硯が出土している。

（５）ＳＢ０５・ＳＢ０６（第65・66図）

Ⅱ区下南向き斜面に重なり合いながら立地する。ＳＢ０５は、桁行４間×梁間２間。ＳＢ０６よりも軸をやや北に傾けている。ピットは直径0.5～0.8mの不整形な円形、深さは検出面から0.3㎝～0.7mである。ピット間はほぼ1.2m内外であるが、Ｐ12～14間はやや不規則でＰ12～13～14はそれぞれ1.46m、0.98mの長さとなる。桁行寸法約6.8m×梁間寸法約3.8mの規模となる。建物の北東側のコーナーには溝状遺構があり、この建物に伴うものであると考える。

ＳＢ０６は、Ｐ１～11が主柱穴となる建物と考えた。ただし、Ｐ８・９は北側柱列の線上から外

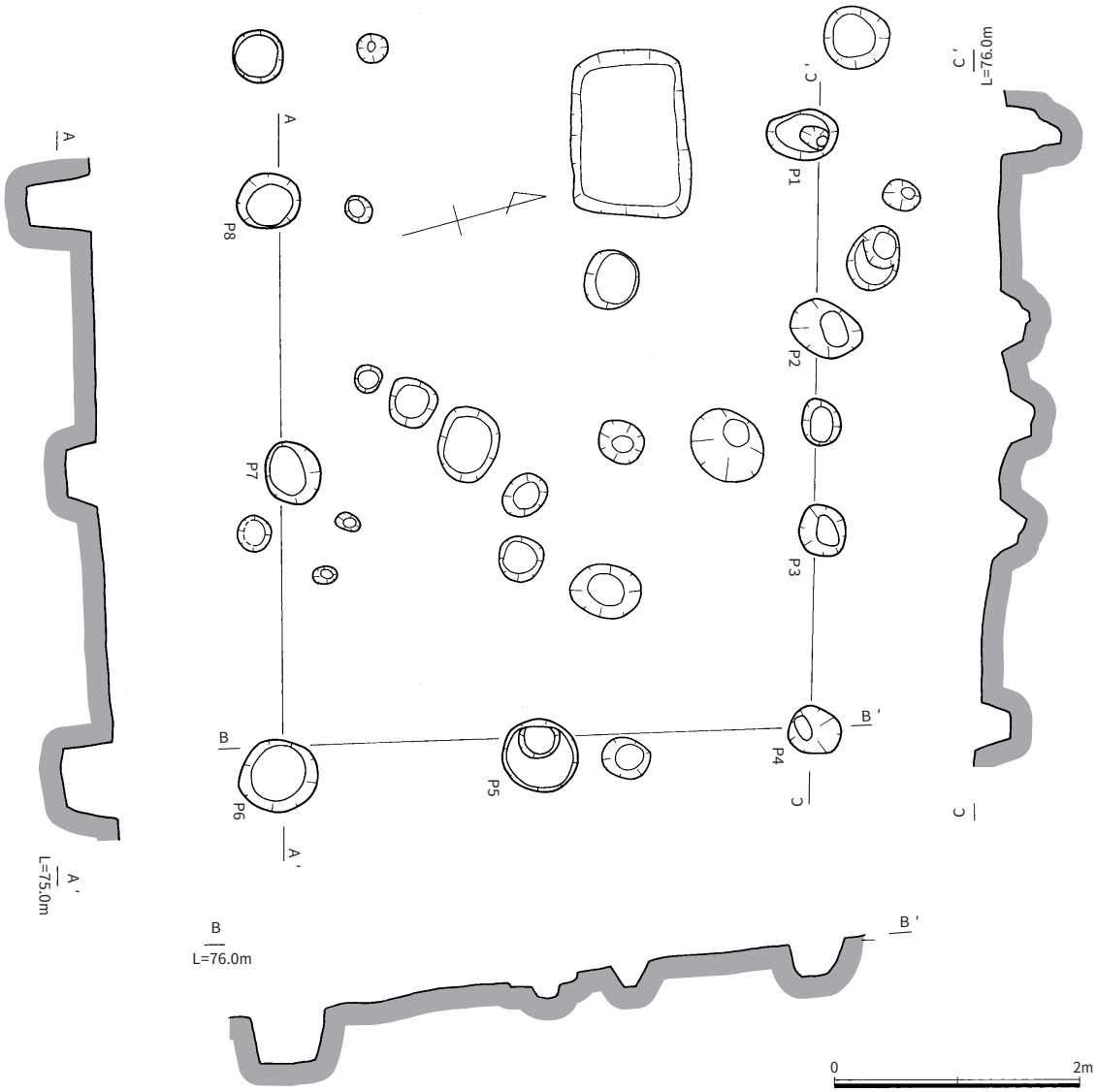


第67図　Ⅱ区下SB07・08実測図（Ｓ＝１／60）

れるため、Ｐ10－７－６－５の４本の柱列となる可能性も考えられる。いずれにしても、不規則な配列、配置となるが桁行寸法6.6m×梁間寸法3.9mの規模となる。ピット径は約0.4～0.7m深さは0.2～0.7mだが、Ｐ８は径0.3m深さ0.2mの規模の小さいものである。配列の不規則さやピットの規格があまり一定でないことなどから、簡易な建物であるような印象を受けた。
何かの覆い屋であった可能性も考えたが、建物内からその他の遺構遺物が検出できず、現況ではなんとも言えない。重なり合うＳＢ０５、隣接するＳＢ０９・１０との時期等を含めた関連性については、不明である。

（6）ＳＢ０７・０８（第67図）

ＳＢ０４の北西側に隣接する、２棟の建物。ＳＢ０７は北側２間・南側１間×東西２間の配列を持つ。２間×２間の建物であった可能性もあるがＰ４に対応する南側のピットは検出できなかった。ピット径は約0.5～0.8mの不整形な円形、深さ約0.2～0.5mである。約4.5m×2.6mの規模を持ち、ピット間はＰ１～７が4.45m。Ｐ１～３間はそれぞれ0.72m、1.13m。Ｐ３～５間が1.48m、0.97m。



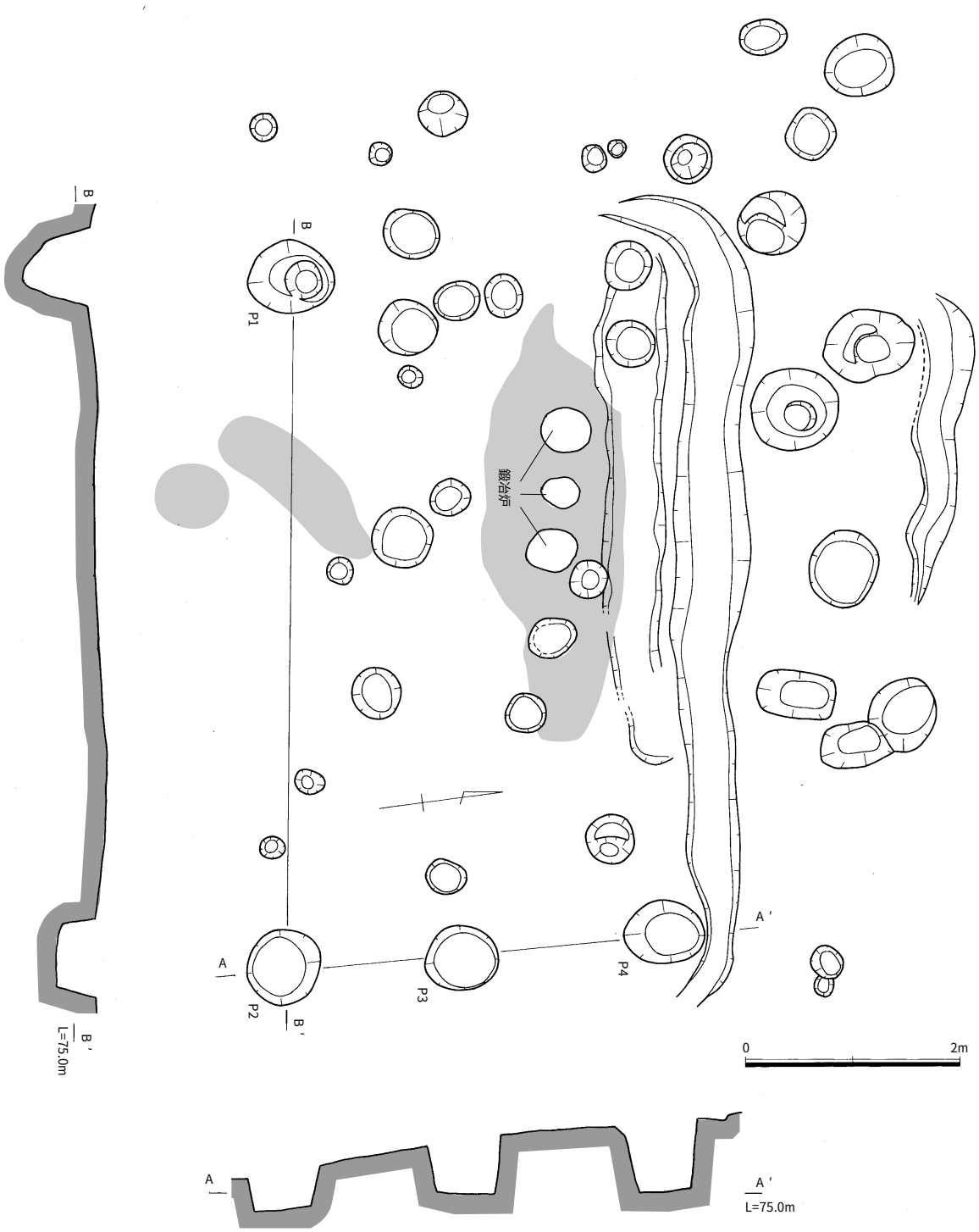
第68図　Ⅱ区下SB09実測図（Ｓ＝１／60）

Ｐ５～７間は0.86m、1.29mとなる。

ＳＢ０８は南側が欠落しており、東西２間×南北１間の４つのピットを検出した。0.7m内外の直径を持つ円形のピットで、深さは、0.6～0.8mである。遺構面が南西方向に向かって緩やかに傾斜しておりＰ１はやや浅くなっているが、その他のピットはほぼ同じ深さである。

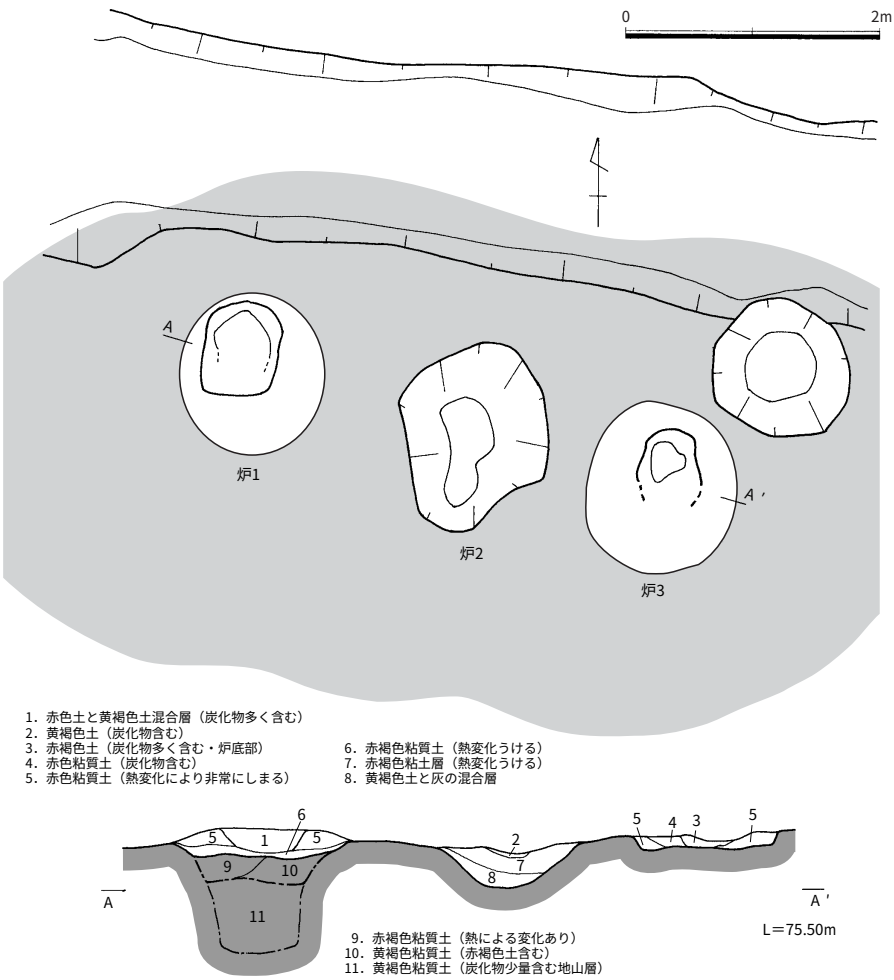
（7）ＳＢ０９（第68図）

ＳＢ０５・０６に隣接しており８本の主柱穴を確認した。現況で桁行北側３間・南側２間×梁間



第69図　Ⅱ区下SB10周辺実測図（Ｓ＝１／60）

２間で、西側が欠落していると思われる。Ｐ１～Ｐ８間にピットが所在した可能性も捨てきれないが、こうした場合台形気味のややゆがんだ建物となるため、西側に伸びると考えた方が自然だと思われる。桁行のＰ１～４間はピット間1.2m内外、Ｐ６～８間はそれぞれ約1.9mを測る。Ｐ４～６間のそれぞれのピット間は1.8m内外となる。現況で3.81m×4.47mの規模を持つ。



第70図　Ⅱ区下SB10内鍛冶炉実測図（Ｓ＝１／40）

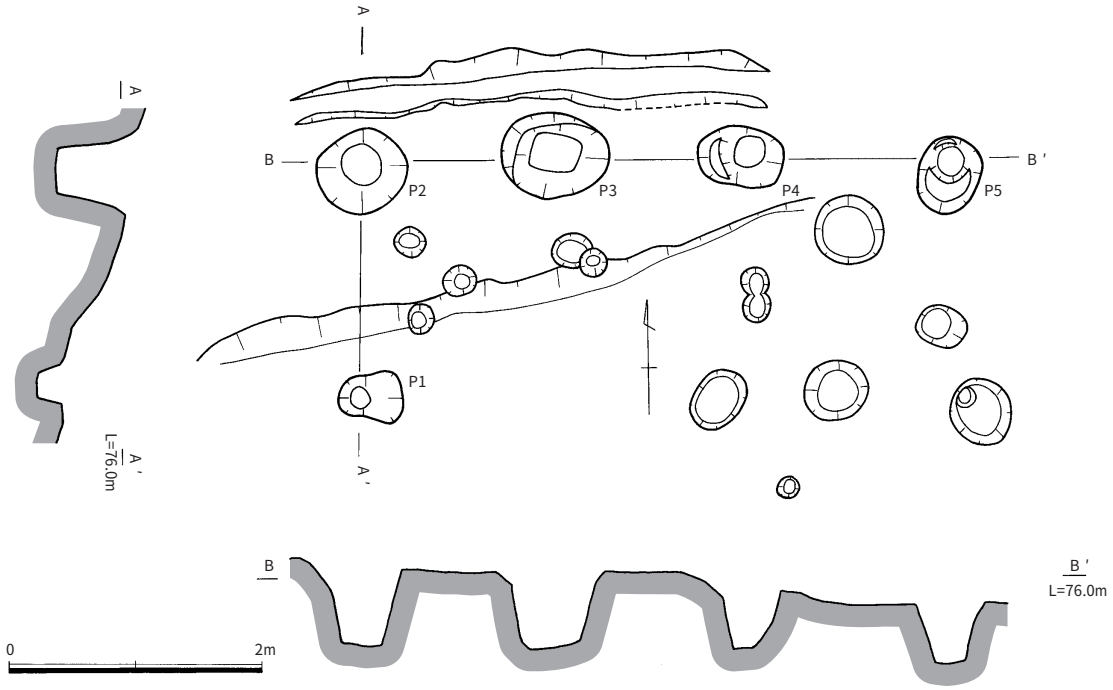
ＳＢ１０（第69図）

Ⅱ区下の西端付近に所在する。建物内には鍛冶炉がありこの覆屋的な性格の建物であることが考えられる。また、北側には幅約0.2～0.7m、深さ約0.2mの溝状遺構が巡っており、この建物と溝で区画された空間が鍛冶工房であったと考えられる。建物は、東側２間・北側１間の４つの柱穴が検出できた。それぞれのピットは直径0.6～0.7mの不整形な円形で、深さ0.4～0.7mである。ピット間は東側の柱列がそれぞれ1.18mと1.01m、北側が5.77mで、約5.8m×2.8mの規模を持つ。

この建物内には、小型のものを含む多くのピットを検出しているが、いずれもあまり規則的に見えないものばかりであった。それぞれのピットの時期差等も考慮しなければならないが、作業用の構造部材用のものなど含まれるかもしれない。しかし、現段階でなんともいい難いためここでは所見として付しておくこととする。

ＳＢ１０内鍛冶炉（第70図）

ＳＢ１０内に広がる焼土面のほぼ中心に３箇所の炉を確認した。炉１と３は中央に炉底壁面と思われる乳灰色に熱変化した粘土層が見え、その周辺を赤色に熱変化した若干の炭化物を含む粘土層がめぐる。底部は若干の丸みを帯びており、深さ0.07mほどである。双方とも長軸約0.3～0.4m短



第71図　Ⅱ区下SB11実測図（Ｓ＝１／60）

軸約0.2mの楕円形の部分が炉本体底部となる。周囲の焼土面も含めると直径約0.5mの円形を呈している。中央の炉２は非常に焼きしまった土を持つが、断面を確認すると熱変化による焼土部分の確認はできたが、１、３に見られた炉底の本体部分は見られなかった。しかし、一定期間この場所で火を用いていたことは間違いないと考えられる。図示できなかったが、上面からは厚手の土師器片が出土している。一見、移動式竈の破片のように見えるもので、これに伴う焼土と考えられなくもなく、炉２については、鍛冶炉の可能性は残すものの断定はできなかった。

ＳＢ１１（第71図）

第１平坦面の東端に位置し、Ｐ１～５を検出した。南側は欠落しており、建物規模は不明だがＰ１～２間は1.57m、Ｐ２～５間は西からそれぞれ0.78m－0.70m－1.09mである。ピット直径は0.5m～0.8mの不整形な円形で深さは0.5m～0.7mほどである。北側には0.4m内外、深さ0.05mほどの溝状遺構があり、この建物に伴うものか。南側は、次期の建物等のための整地を行ったためか、段をつけ削平されている。このため南側が欠落しているものと考えられる。

ＳＢ１２（第72図）

第１平坦面が西側に大きく曲がる部分の丘陵先端部を削り込んで加工段状にした部分から４つのピットを検出した。いずれのピットも不整形な円形で約0.5～0.7mの径を持ち、深さ約0.4m～0.7m。ピット間の長さは西からそれぞれ1.23m－1.19m－1.11mで、Ｐ１～Ｐ４の寸法は4.5mほどとなる。

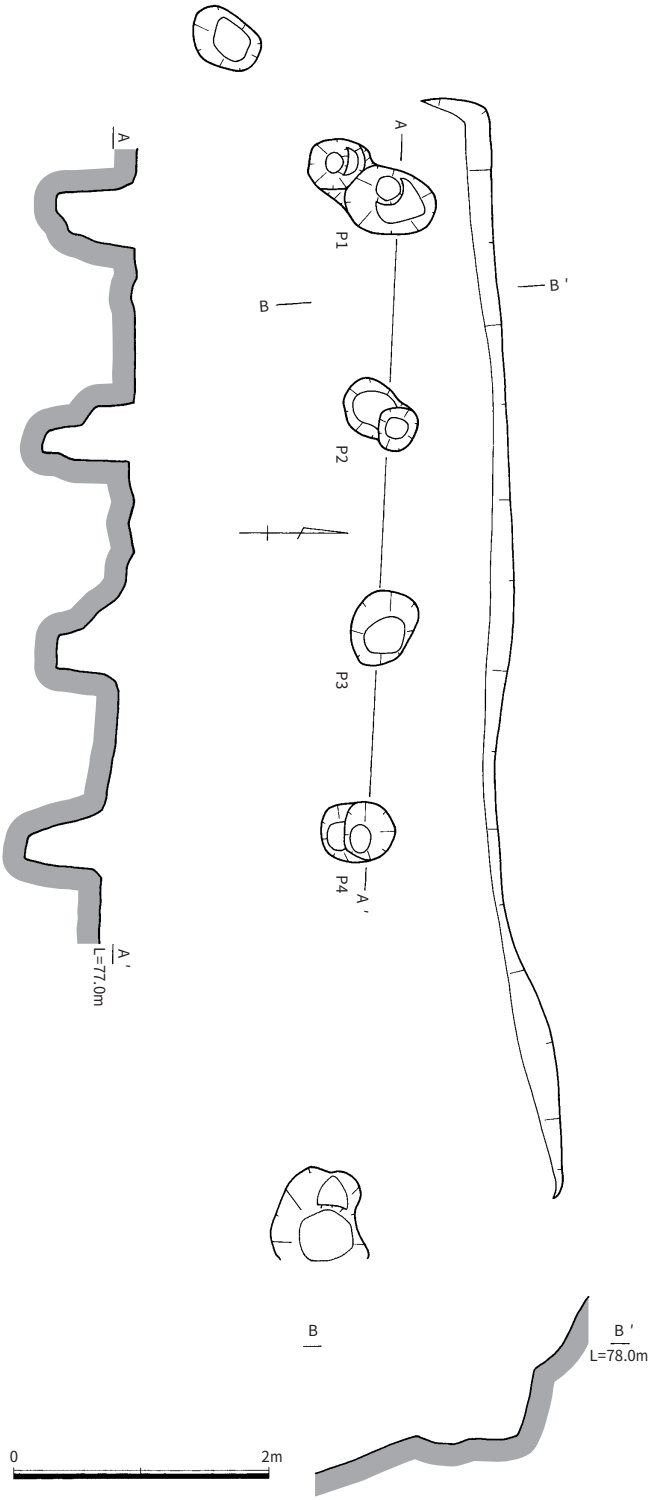
背面の丘陵削り込み部分は、壁面の立ち上がりが最大0.6mほどあり整地作業の後、建物を造っていることがうかがえるが、この柱列に対応する南側のピットは検出できなかった。

ＳＢ１３（第73図）

第１平坦面が西側に曲がる少し手前に４つのピットを検出した。西側は欠落しているが、桁行２間×梁間１間となる可能性がある。桁行のＰ１～３のピット間はそれぞれ約１m、梁間のＰ３～４のピット間は約1.3mとなる。Ｐ２・４は一辺約0.5m方形のプランを呈しており、その他のピットについても方形に近い楕円形プランを有する。深さは0.3～0.6m。ピット間は桁行方向は約１m、梁間方向約1.3mで、現況で約2.5m×1.3mの規模となる。

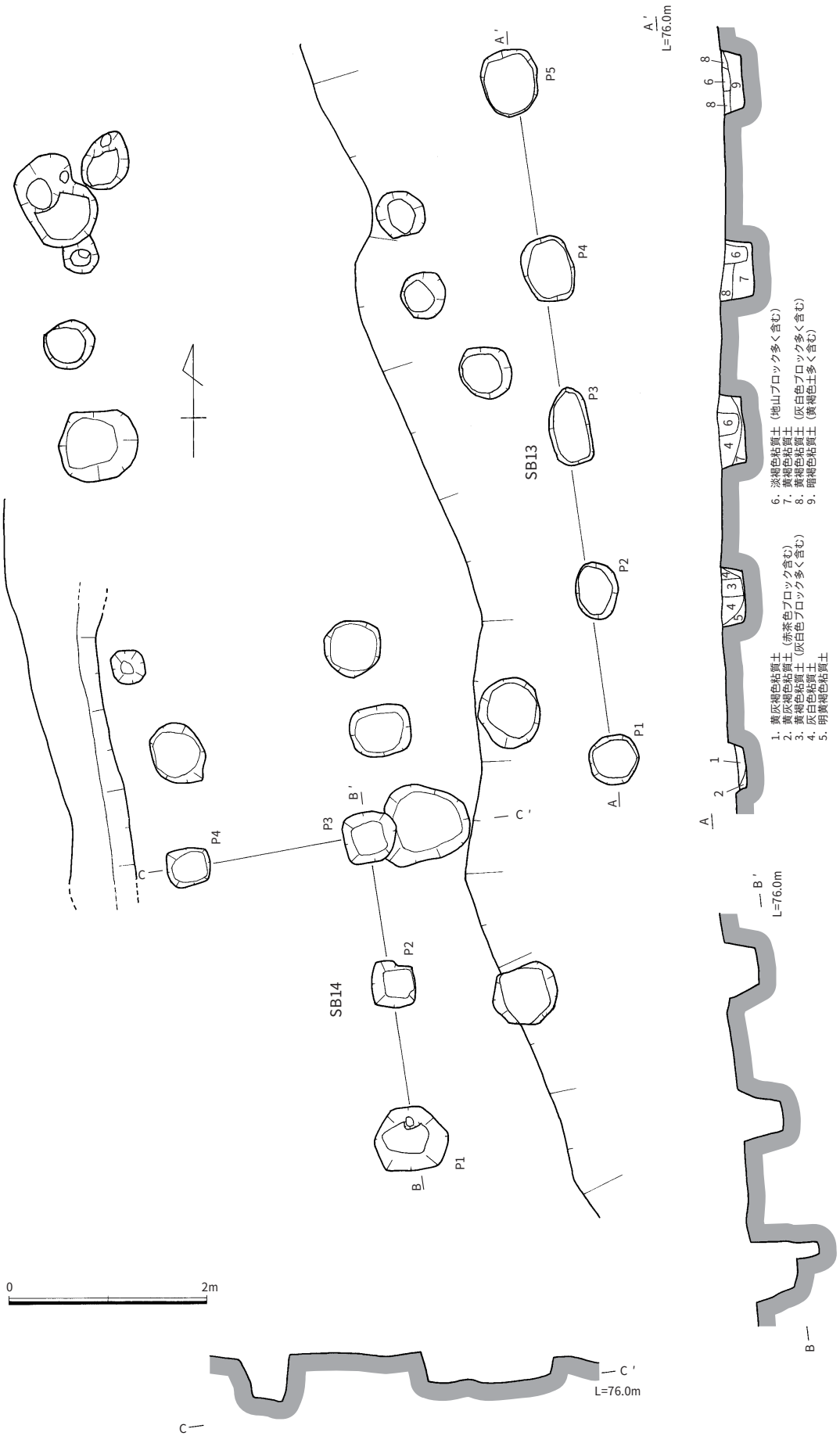
ＳＢ１４（第73図）

ＳＢ１３の北東に位置する。緩やかに傾斜した斜面上にＰ１～５を検出した。西側に対応する柱列を想定したが、検出することはできなかったため、東側に対応する柱列が欠落しているものと考えられる。ピット間はＰ１～Ｐ２間で約1.2m、Ｐ２～５間は１m内外である。Ｐ１・２は円形に近い楕円形プラン、Ｐ３は楕円形のプランを示し、Ｐ４・５は方形に近い楕円形プランを呈する。深さは0.2mほどである。Ｐ１～５間は6.39mとなる。

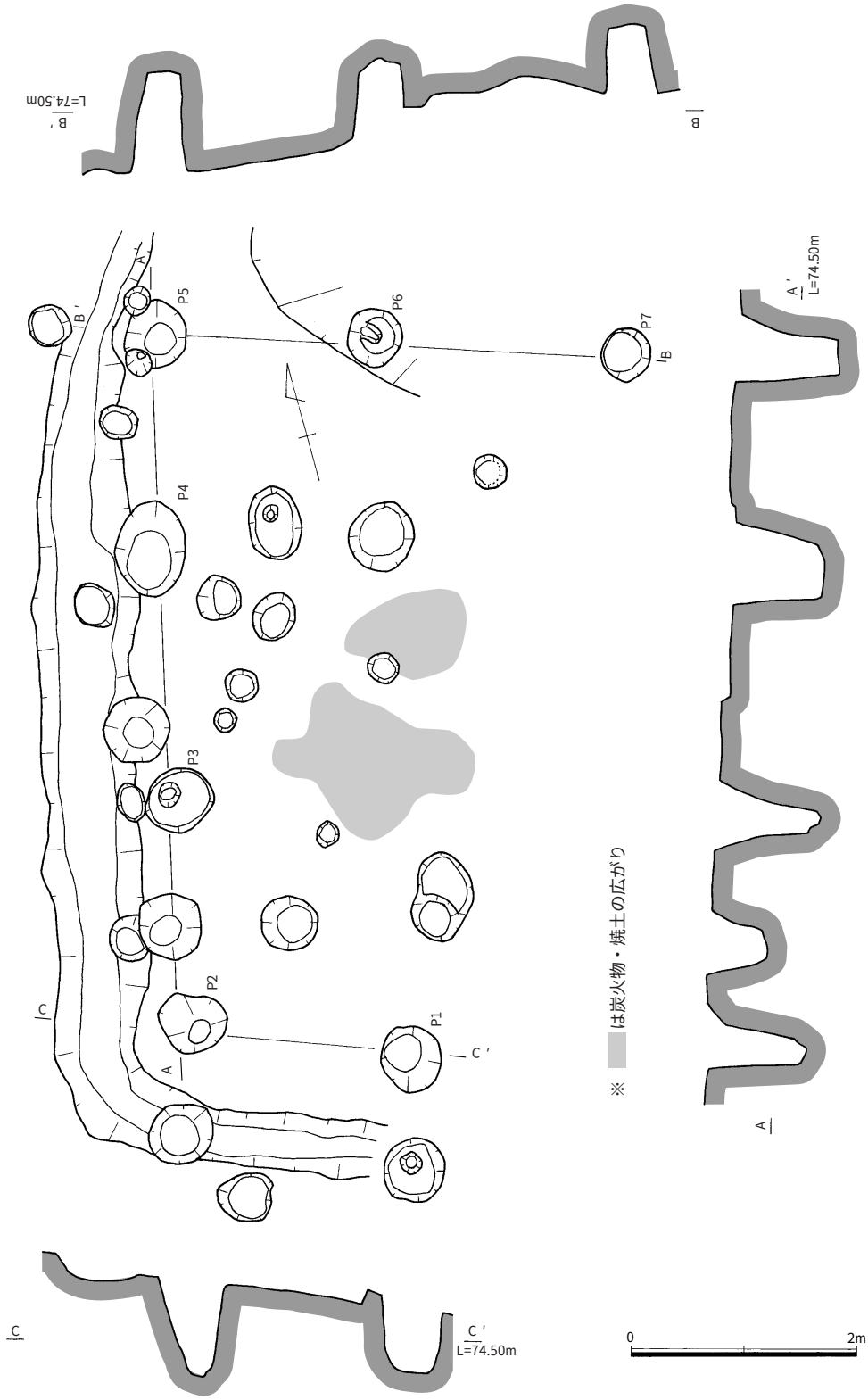


第72図　Ⅱ区下SB12実測図（Ｓ＝１／60）

この柱列は、表土掘削後すぐに検出できたがＳＢ０１などと同様に堆積土のようなくすんだ土層に明るい色調の流入土が入るという状況であった。また、この柱列は地形が西から緩やかに傾斜しすぐに谷部に向かって大きく落ち込む境界線上にある。こうしたことから、この周辺は盛土もしくは堆積土によって平坦面がもう少し張り出しており、現在よりも大きな平坦面が広がっていたことが想像できる。第１平坦面を見渡しても平坦面が一番狭くなる部分であり、もともとは北側、西側と同程度の平坦面の規模を持っていたことを示す部分である。



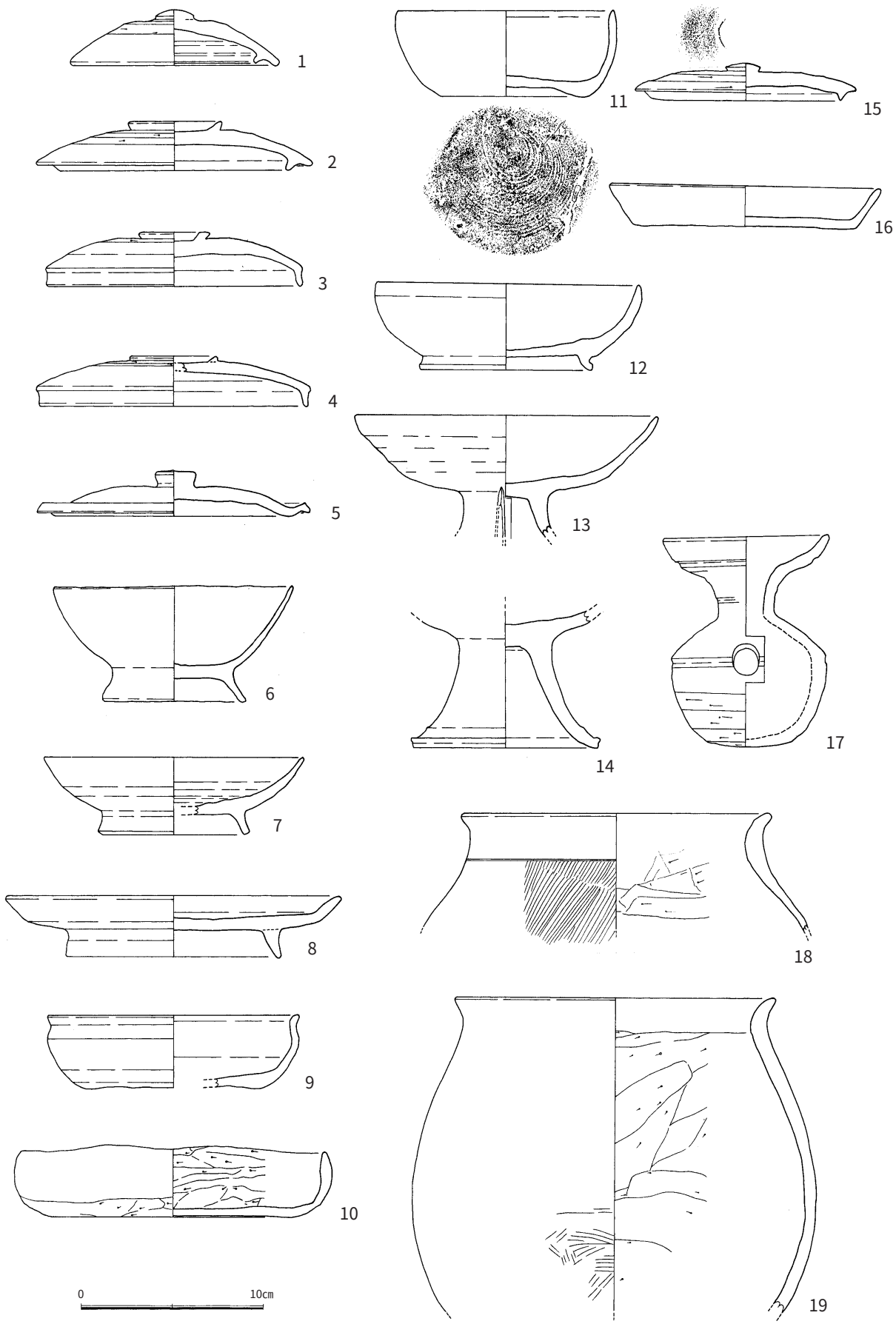
第73図　Ⅱ区下SB13・14実測図（Ｓ＝１／60）



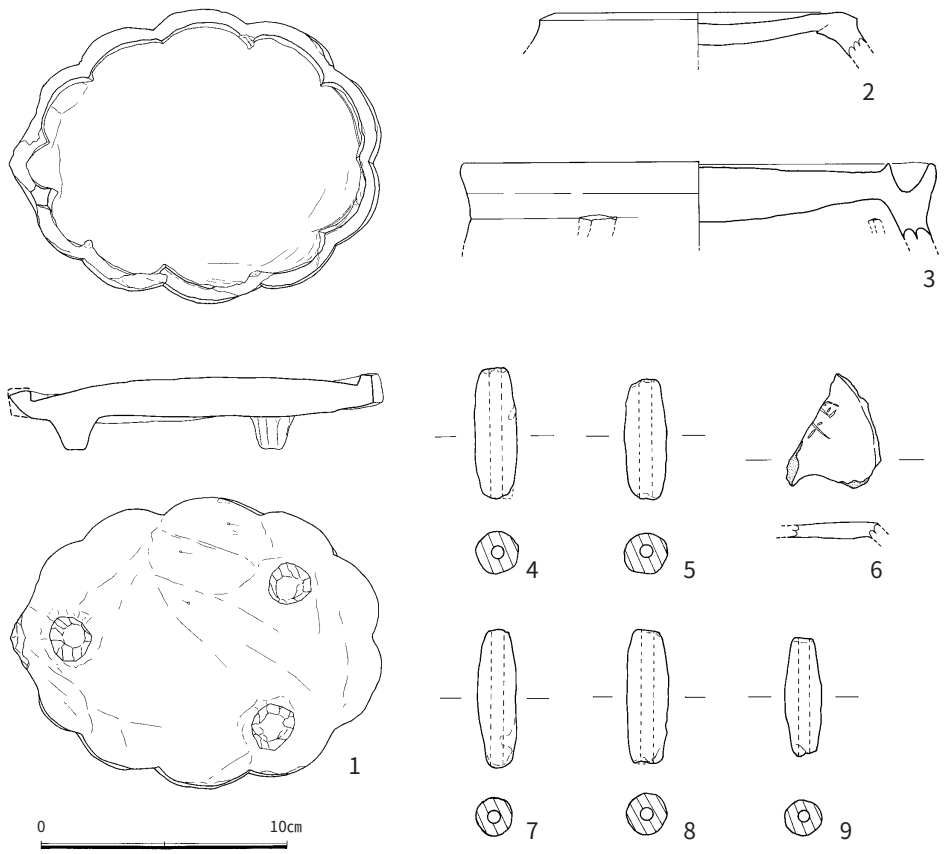
第74図　Ⅱ区下SB15実測図（Ｓ＝１／60）

ＳＢ１５（第74図）

東側は欠落しているが、Ｐ１～７までのピットを検出した。建物の西側を取り巻く幅0.2～0.5m、深さ約0.1mの溝状遺構を伴っている。西側は欠落しているが、復元すると２×３間の建物となるか。ピット間はいずれも約1.5mだが、Ｐ３～４とＰ６～７間は約1.7mとなっている。現状では5.5



第75図　Ⅱ区下第１平坦面出土遺物実測図（１）（Ｓ＝１／３）



第76図　Ⅱ区下第１平坦面出土遺物実測図（２）（Ｓ＝１／３）

ｍ×2.2ｍの建物規模となる。いずれのピットも円形もしくは楕円形のプランを示しており、径は0.4ｍ内外で深さは、中央には焼土面の広がりを確認できるが、断面は薄く、炭化物との混合も見られる。この建物との直接的な関連性はないものと思われる。

第１平坦面出土遺物（第75図・76図）

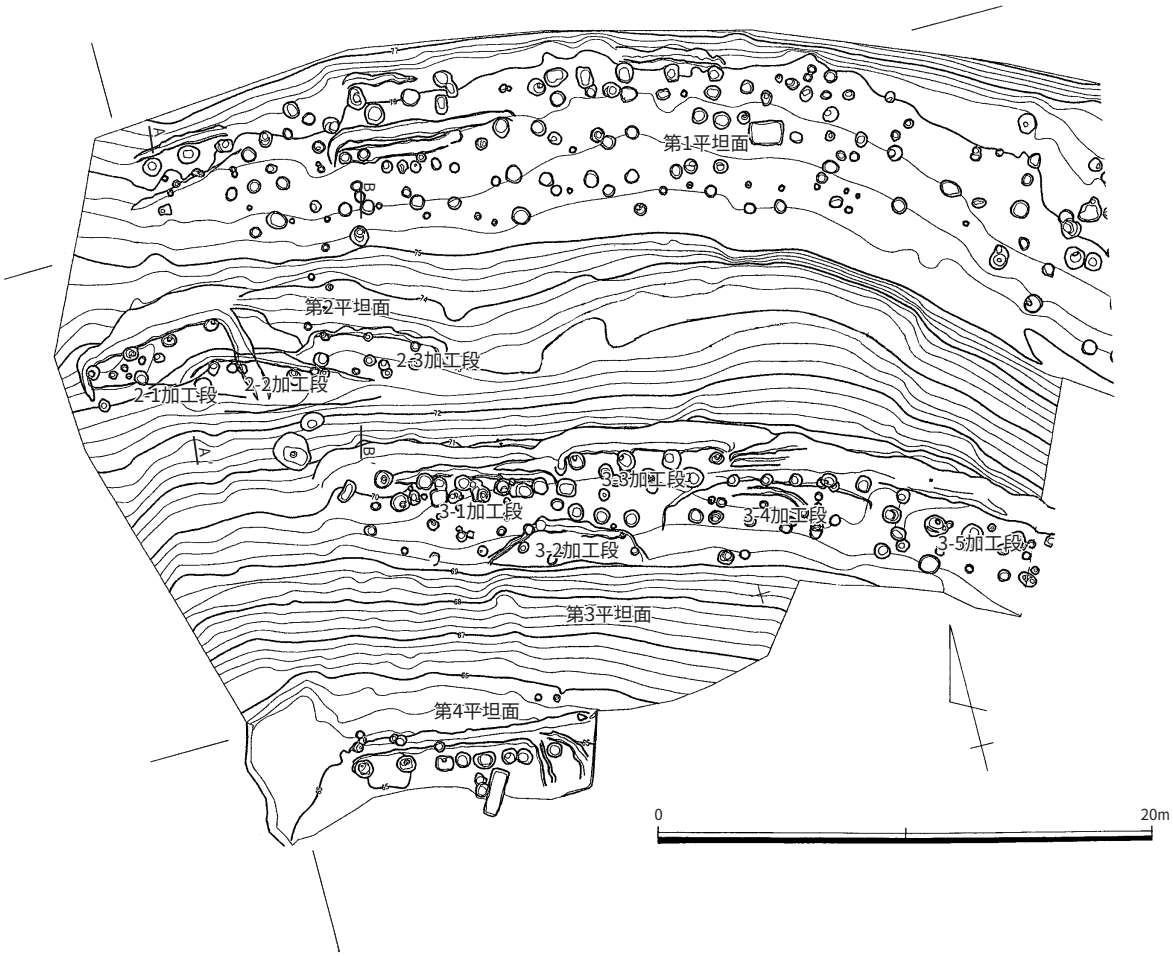
第75図１～５・15は須恵器坏蓋である。１は、若干のゆがみはあるが口径8.9㎝、器径10.9㎝、器高3.0㎝を測る。焼成があまくやや風化している。天井部外面の１／２程度は回転ヘラケズリをし、径2.1㎝の宝珠形つまみをつける。２は、口径12.5㎝、器高2.7㎝で外面の約２／３に回転ヘラケズリを施し、直径5.0㎝の輪状つまみをつける。口縁部立ち上がりは内傾し短く立ち上がる。３は口径14.0㎝、器高3.9㎝を測り外面天井部１／３程度に回転ヘラケズリを施し、直径3.8㎝の輪状つまみを取り付ける。口縁端部はやや外反しながら立ち上がり、返りは消失している。４は、口径14.5㎝を測る。外面天井部の１／３程度にヘラケズリを施し、直径4.6㎝の輪状つまみを取り付ける。口縁端部はやや外反したちあがり、返りは消失している。５は、器径14.8㎝天井部外面の１／３程度に回転ヘラケズリし、擬宝珠形と思われるつまみをつける。口縁部は大きく上方に反った後、端部を短く立ち上げる。15は口径10.2㎝、器高2.0㎝を測る。外面は２／３程度に回転ヘラケズリをしその後、擬宝珠形のつまみを付ける。つまみの脇には「＊」形のヘラ記号がある。返りは短く退化しており、ほぼまっすぐ下方に落ちる。

６は、土師器高台付き碗で口径12.7㎝、器高6.3㎝を測る。体部は丸みをもちながら立ち上がり、ハの字に開く高台を取り付ける。全体をナデによる調整で仕上げている。７は須恵器碗でハの字に

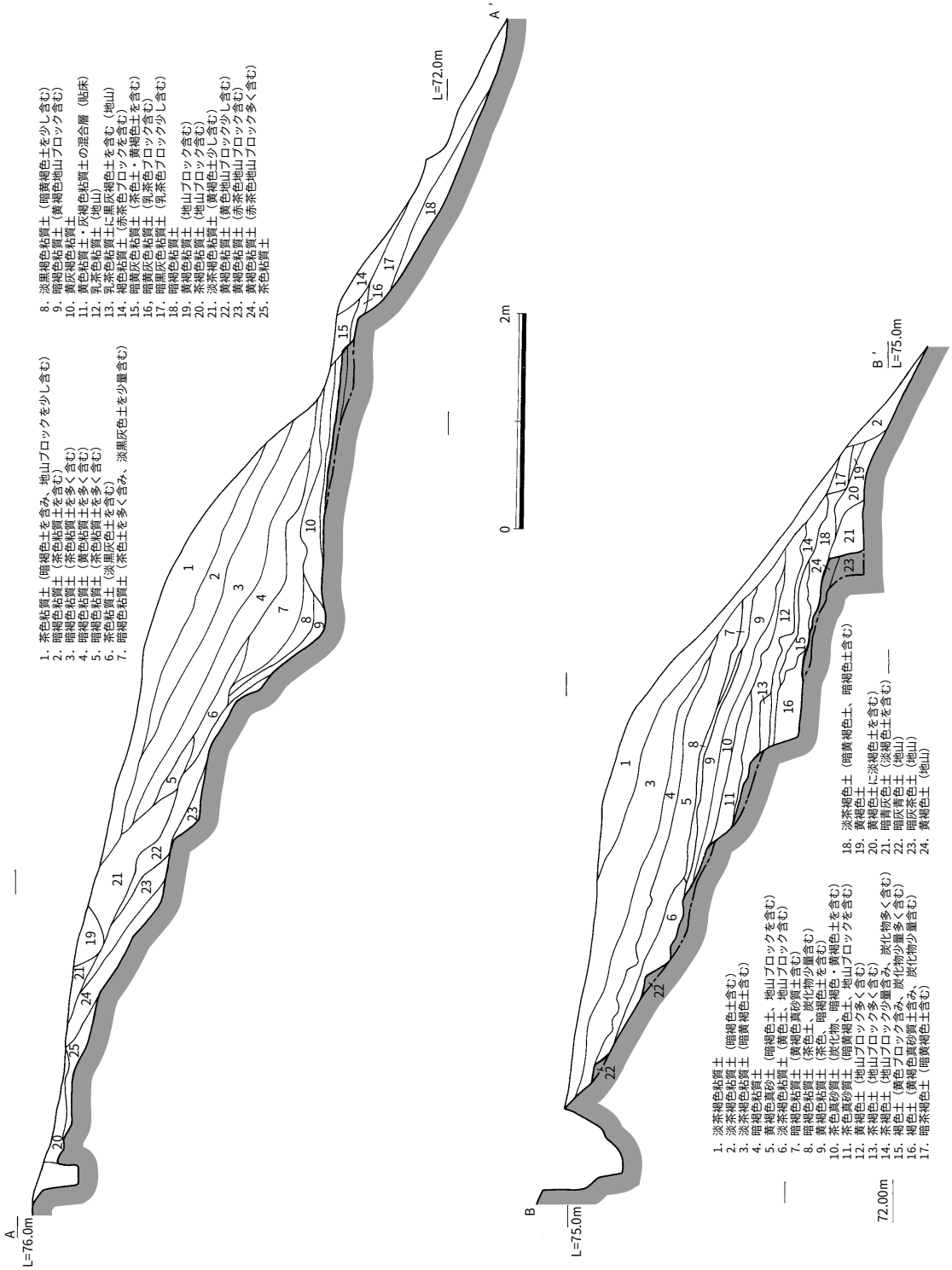
開く高台をもつ。体部は丸みをもちながら立ち上がり、口径14.0㎝、器高4.2㎝を測る。８は、高台付き皿である。焼成の良くない須恵器と思われ色調は淡橙色である。口縁部は大きめに外傾し立ち上がり、口径は18.2㎝を測る。皿の深さに比して高めの高台が付いており器高は3.3㎝を測る。高台はやや外反してハの字に広がる。風化があるが全体を回転ナデで仕上げている。９は須恵器坏身である。体部は丸みを帯びて上方に立ち上がり口縁端部は外反する。口径は13.8㎝、器高4.0㎝を測る。10は土師質土器の皿で若干のゆがみがある。内面は不規則なヘラによる調整を行い、外面底部にも同様の調整が見える。上方にほぼまっすぐ立ち上がる口縁部を持ち口径は16.5㎝を測る。11は須恵器坏身で口径11.7㎝である。焼成が良くなく磨滅があるが底部回転糸キリ痕が残る。色調は橙褐色で、体部は内湾しながらまっすぐに立ち上がる。12は須恵器高台付の坏身である。外傾しながら立ち上がり口縁端部では内湾する。口径は14.2㎝で高台は外反して外側に踏ん張る形で端部には面ができる。

13・14は須恵器高坏で13は坏部分、14は脚部～坏底部。13は口径16.4㎝で脚の付け根付近に透かし穴の一部が残存する。全体に回転ナデによる調整が行われており、内部底面は静止ナデが見える。14は底径9.8㎝でラッパ状に開く脚部となる。脚端部には面を作りナデによる陵が見える。

16は須恵器皿である。底部は回転糸キリの後ナデによって仕上げており、その他の部分は回転なでにより仕上げる。底部から外傾しまっすぐ口縁部まで立ち上がり、口径は14.8㎝、器高は2.3㎝である。17は須恵器碗である。口径は8.8㎝、器高11.3㎝を測る。底部は回転ヘラケズリを行い、肩部



第77図　Ⅱ区下第２平坦面～第４平坦面実測図（Ｓ＝１／300）



第78図　Ⅱ区下セクション実測図（２）（Ｓ＝１／60）

及び口縁部に沈線を施す。頸部にも沈線らしき痕は見えるが、強めのナデ痕か。

18・19は土師器甕である。18は復元口径16.6㎝を測る。頸部を肥厚させ外反する口縁部をもつ。内面は頸部付近までヘラケズリを行っている。凸線状の線が頸部付近にみえその線までナナメハケによる調整を行っている。19もやや外反する口縁部をもち口径17.4㎝を測る。外面は磨滅しており、調整がはっきりしないが底部付近に一部ハケ目が見える。内面は頸部付近までヘラケズリを行っている。

第76図１～３は陶硯である。１は形象硯で平面形が11の花弁状の陵を持つ。いわゆる八花硯の類例であると思われる。陸と海の明確な境はなく、硯中央部のゆるやかに盛り上がる部分が陸に相当する部分であろう。この部分は若干の磨滅が見え使用していたことをうかがわせるものである。背面には３箇所の脚をつけている。２は硯の一部と考えた須恵器片である。天井部外面は緩やかに落ち窪んでおり、肩部に明瞭な面ができる。くぼみの中央には磨滅痕らしき痕跡が見えたため硯とした。代用硯とも考えたが、硯であるとすれば当初から硯を目指して作成されたものであろう。
３は、円面硯である。硯面の１／２が残っているが、脚部はほとんど残っていない。直径は18.8㎝で陸と海の境界に堤を設ける。脚部には透かし孔の上面が２箇所確認できた。

４～５・７～９は土錘である。４は径1.7㎝長さ4.8㎝、５は径1.7㎝長さ5.2㎝、７は径1.5㎝長さ5.6㎝、８は径1.6㎝長さ5.4㎝、９は径1.5㎝長さ4.8㎝である。いずれも中央が膨らむ円柱状の形状で土師質である。

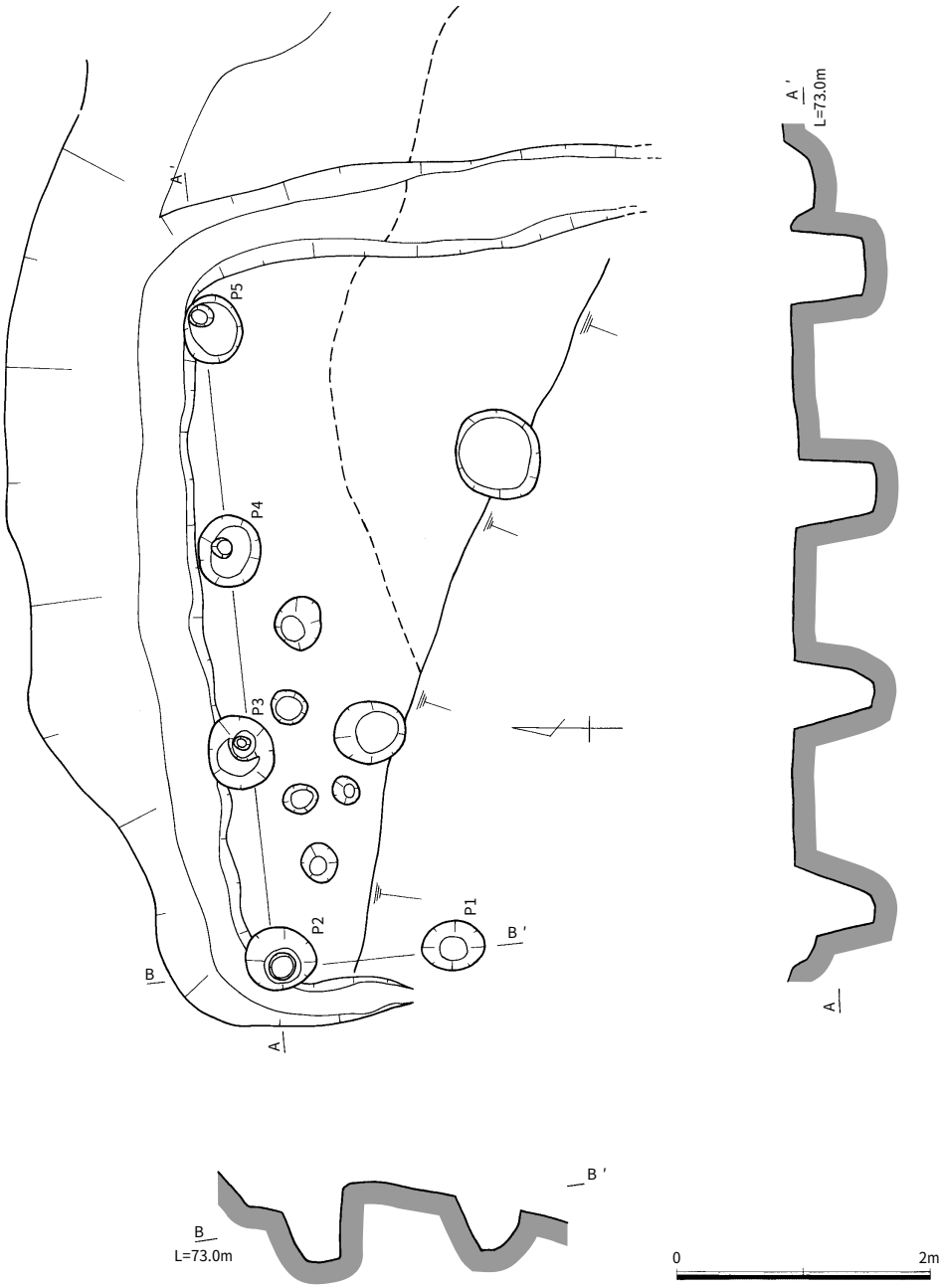
６は須恵器坏蓋の一部か。器種については断定できないが、ヘラ書き文字が書かれている。欠損している部分もあるため、文字の判読は困難だが、上の文字は「日」もしくは「田」か。

第２平坦面（第77・78図）

第２平坦面は調査区の西端体１平坦面の下に３つの加工段が切りあいながら立地している。第１平坦面との比高差は、約２ｍである。この平坦面の堆積層は最大約1.5ｍあり、堆積土中から多くの遺物が出土している。Ａセクションでは第１平坦面が地山の上に若干の整地盛土を行っている様子が伺える。第２平坦面の埋土がその上に堆積していることから、第１平坦面と平行して営まれていたことが分かる。Ｂセクションでは、第１平坦面とこの遺構面との中間に遺構面らしき堆積（８層上面）が見える。堀飛ばしてしまったため詳細は分からないが、第１平坦面の拡張改修等によるものか。遺構の切りあい関係から、順序は２－２加工段→２－３加工段→２－１加工段の順序になると思われる。

２－１加工段（第79図）

第２平坦面の西端に所在し床面の標高73.3ｍ前後である。加工段の南側は流出していると思われる。桁行３間、梁間は現況で西側１間の掘立柱建物が所在すると考えられ、加工段をめぐる溝状遺構が確認できた。下場で幅0.3～４ｍ深さは0.2～３ｍほどである。Ｐ１～２間は0.83ｍ、Ｐ４～５間は1.21ｍでＰ２～４間はそれぞれ1.1ｍ内外である。ピット径は約0.5ｍの円形で、Ｐ２～Ｐ５はいずれも0.6ｍ内外の深さをもつ。Ｐ１は斜面に検出されたため、深さは0.4ｍほどだが底面はほぼ同一レベルにある。



第79図　Ⅱ区下２－１加工段実測図（Ｓ＝１／60）

２－２加工段（第80図）

２－１加工段と切り合いながら西側に広がる加工段面である。２－１加工段との床面の比高差は約0.4mあり、南側は大きく流失している。このためこの加工段の全体の規模は不明であるが、東西方向に４m前後の広がりを持つ。数箇所のピットは検出しているが柱列もしくは建物となるようなピット群とはならなかった。

壁面の立ち上がり部分には周溝をめぐらしているが、床面との比較では0.05mほどの浅いものである。

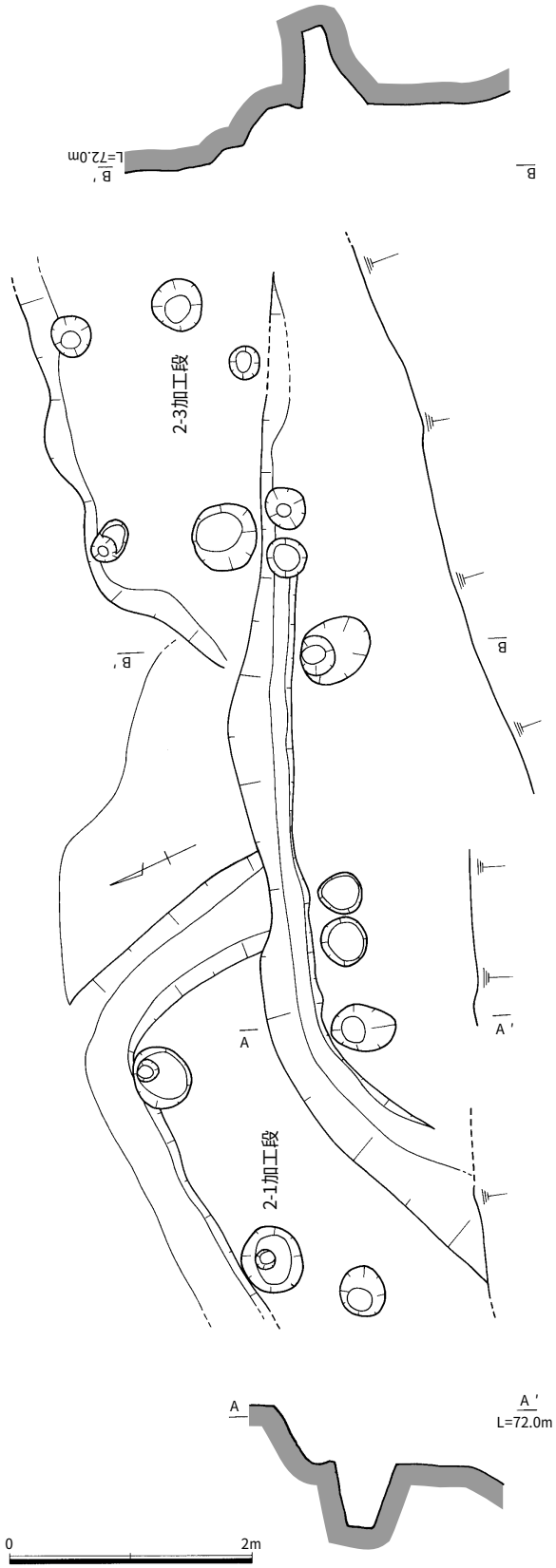
２－３加工段（第81図）

２－２加工段の西側に所在する加工段で床面標高は約72.8mで切りあい部分での比高差は約0.4mあり、この加工段の床面が高い。Ｐ１～Ｐ３とＰ４～Ｐ６の２列の柱列を検出している。

Ｐ４～６は、直径約0.3m、深さ0.3～0.5mである。ピット間はそれぞれ、1.38m－1.52mで、Ｐ４～６間は3.24mとなる。

Ｐ１～３は、ほぼ円形で直径0.5～0.6m、深さはいずれも0.5mほどである。ピット間はそれぞれ、1.50m－1.29mで、Ｐ１～３間は3.21mとなる。

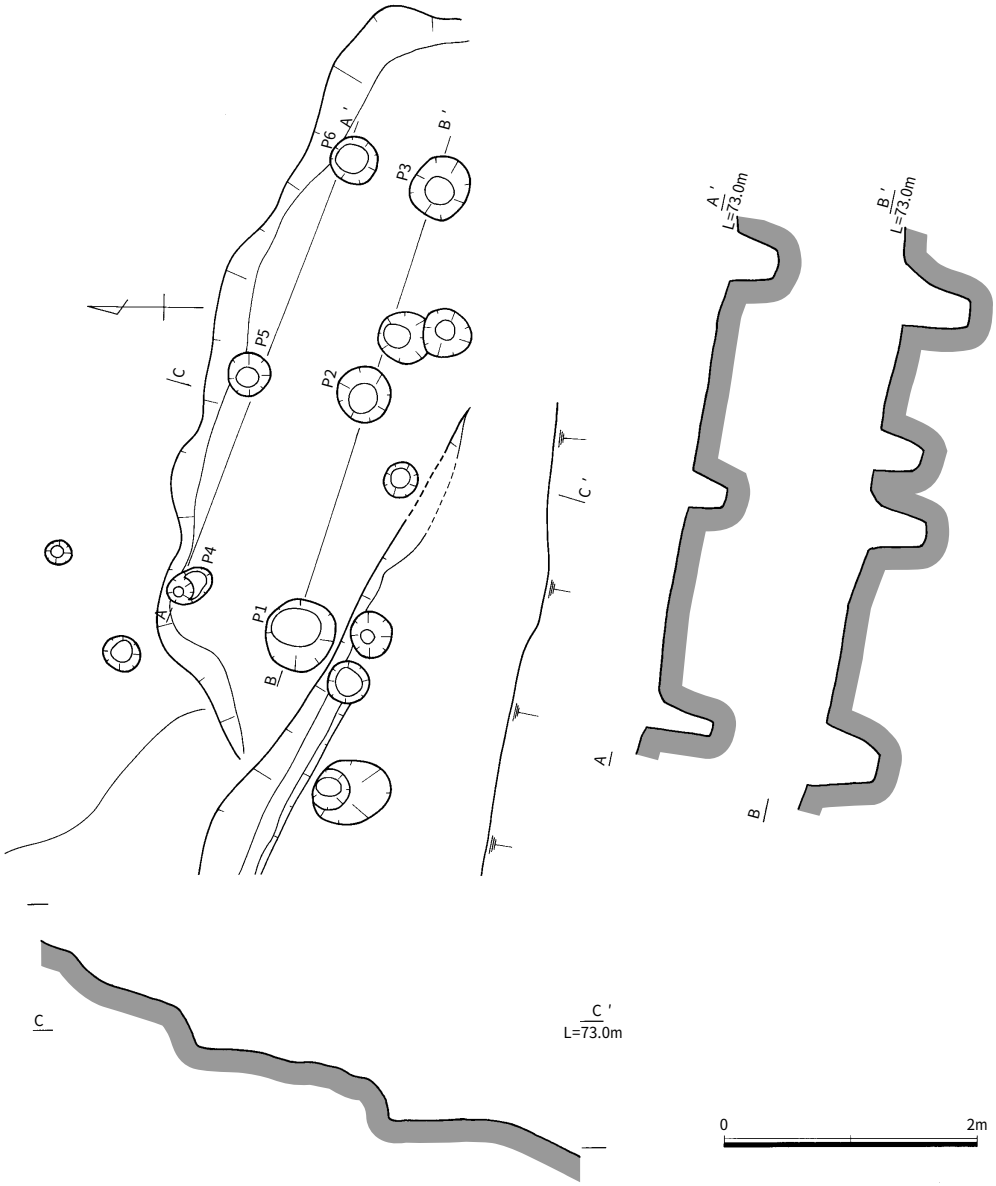
建物と考えた場合、いずれも南側が欠落しておりどの様な規模になるか不明である。また、ほぼ同様な長さを持つ２つの柱列であるが、時期等を含め関連性は不明である。



第80図　Ⅱ区下２－２加工段実測図（Ｓ＝１／60）

第２平坦面出土遺物（第82図）

１～３・６は須恵器坏蓋、４は須恵器皿、５・８は須恵器坏身、７は土師器甕である。１は、口径9.4cm器高2.5cmを測る。かえしは退化しており、断面が正三角形に近くなっている。外面の上部には回転ヘラケズリを施し、直径1.2cmの突起状つまみをつける。２は口径9.6cm、器高2.4cmで外面１／２程度を回転ヘラケズリし直径1.4cmの半球状のつまみをつける。立ち上がりはやや内傾しているが、退化しており非常に短い。３は口径10.5cm、器高2.3cm。上面はヘラケズリを施し中央に直径1.0cmの台形状のつまみを回転ナデにより取り付ける。立ち上がりは退化しており、やや内傾し短く立ち上がる。４は口径14.6cm、器高2.5cmを測る。底部はヘラきり後、ナデによって仕上げる。口縁部は逆ハの字状に直線的に立ち上がる。５は口径10.4cm、器高3.1cmを測る。内湾しながら最後は直線的に立ち上がる口縁部を持つ底部には直線のヘラ記号が認

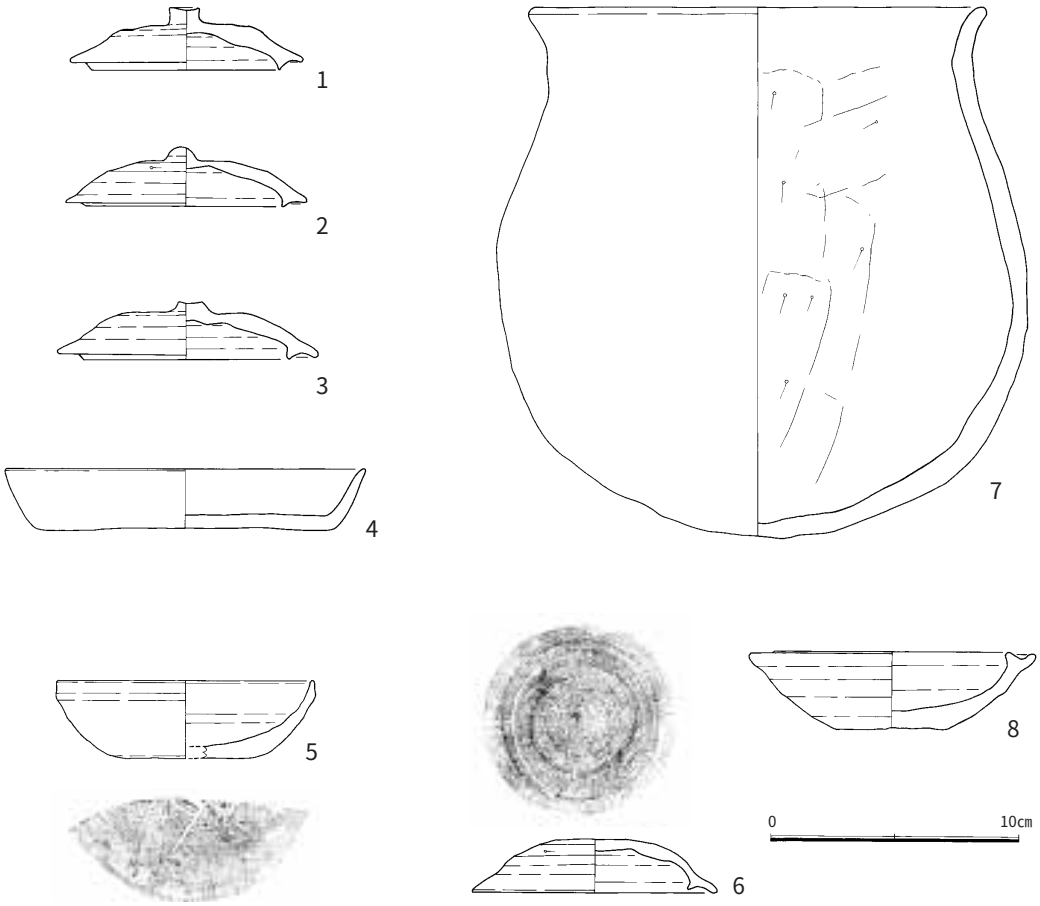


第81図　Ⅱ区下２－３加工段実測図（Ｓ＝１／60）

められる。６は口径9.8㎝、器高2.1㎝を測る。外面の１／２程度まで回転ヘラケズリを施し、頂部付近はその後回転ナデによって仕上げる。また、２本の直線と直角に交わる一本の直線からなるヘラ記号を持つ。７は口径17.9㎝、器高21.3㎝のほぼ完形の甕である。内面は頸部付近までヘラケズリを施されている。外面は風化により調整痕ははっきりしないが、全体の１／４程度にススの付着が認められた。８は口径9.6㎝、器高3.1㎝を測る。口縁部の立ち上がりは内傾する非常に短いものである。底部はヘラ切り後回転ナデにより仕上げられている。

第３平坦面

第３平坦面は５つ以上の加工段が連続する。第１平坦面との比高差は、約5.5mある。調査区外にも続いていると思われ、Ⅱ区下では第１平坦面に次ぐ規模を持つ大きな遺構群となった。この遺構面も最大で約２mの堆積層があり、この中から非常に多くの遺物が出土している。時期的にも幅



第82図　Ⅱ区下第２平坦面出土遺物実測図（Ｓ＝１／３）

を持っており、第１平坦面からの流入物も多く含まれていると思われる。セクション等からは、他の平坦面との並行関係は見て取ることができなかったが、流入遺物が堆積層の高いところから出ることを考えると、第１平坦面とは併行していた可能性が高いと思われる。

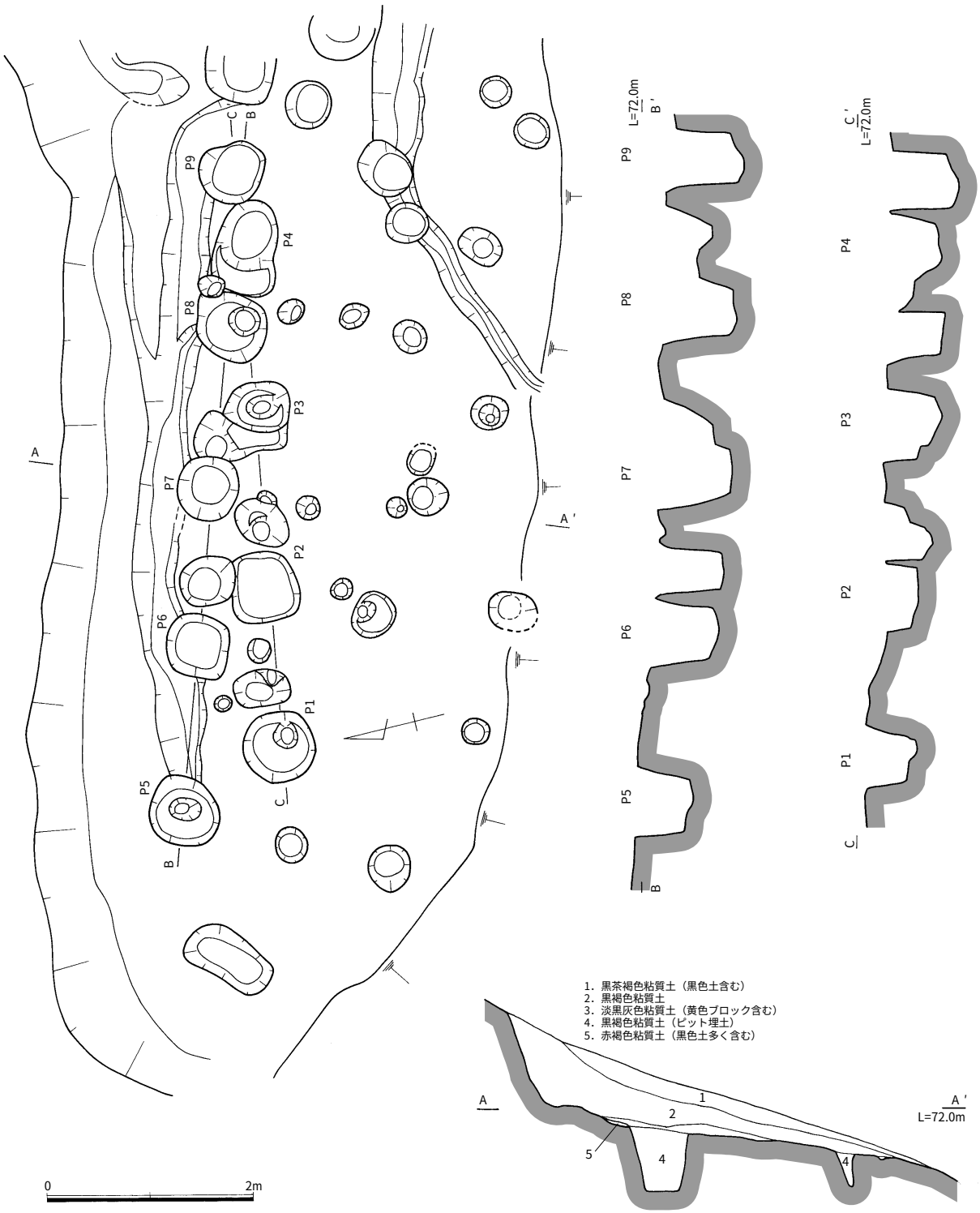
３－１加工段（第83図）

第３平坦面の東端に位置する。Ｐ１～４とＰ５～９の２つの柱列を確認した。加工段自体の南側が流出しており、建物と考えた場合の二つの柱列に対応するピットは欠落しているものと思われる。

Ｐ１～４は一辺約0.7mの方形及び直径約0.7mの円形、深さ約0.3～0.5mである。ピット間は0.9m～1.0mでほぼ等間隔で並ぶ。Ｐ１～４間は4.29mを測る。

Ｐ５～９は直径約0.7mのほぼ円形のピットで、深さ0.6～0.7mである。ピット間は、0.9～1.0mでほぼ等間隔に並び、Ｐ５～９間は5.76mを測る。

この部分だけでなく第３平坦面全体を見ても同様であるが、同じ場所で加工段自体も含めた、改修、建て替えが行われている。ただし、ほぼ同一面上で行われているため、前後関係の特定は非常に困難であった。この加工段だけを取ってみると、Ｐ１の柱列と周溝がセットなっており、その後の拡張でＰ５の柱列が作られている。ただし、前述のとおり第３平坦面全体での検討も必要となってくるためここでは、個別の前後関係を記すのみとする。

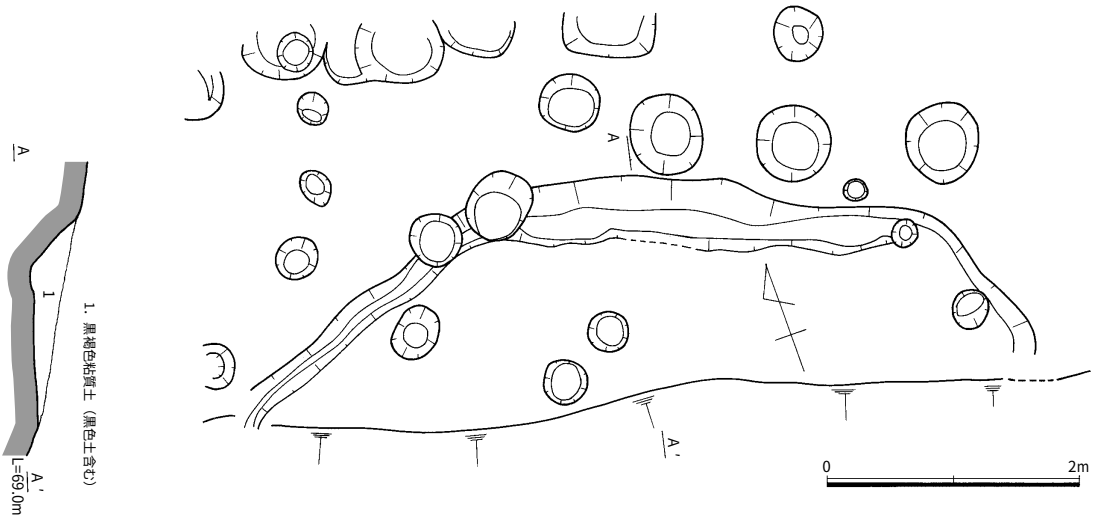


第83図　Ⅱ区下３－１加工段実測図（Ｓ＝１／60）

３－２加工段（第84図）

３－１加工段の南東側に位置する。床面は３－１加工段の床面より約0.2m下がった位置に広がる。南側の大部分が流出しており、何箇所かのピットと溝状遺構は検出したものの建物等は検出できなかった。溝状遺構は幅約0.2m深さ0.1mほどで壁面に沿って掘られる。

この加工段が第３平坦面では、切りあい関係から最古層になると考えられる。



第84図　Ⅱ区下３－２加工段実測図（Ｓ＝１／60）

３－３加工段（第85図）

第３平坦面のほぼ中央に位置する。壁面をめぐる幅約0.3m、深さ約0.1mの溝状遺構と１間×北側３間・南側２間の建物が所在する。溝状遺構及び建物の床面は３－１・３－４加工段に切られており、これらに先行する加工段と考えられる。

掘立柱建物ＳＢ１６は、現況で１間×北側３間・南側２間となり、Ｐ１－６と８の７本を主柱穴と考える。ピットは0.6m～0.7mの直径の円形で深さ0.3～0.8mである。Ｐ２～５間が4.75mを測り、それぞれのピット間は1.32m－1.12m－1.07m。Ｐ１－Ｐ８－Ｐ６間は4.75mを測りそれぞれピット間は1.58m－2.88mとなる。Ｐ１～２、Ｐ５～６間はそれぞれ1.37m、1.82mとなる。不規則な配列を持つが、Ｐ４に対応するピットが検出できなかったためであると考えられ、本来は１間×３間となる建物であろう。

３－４加工段（第86図）

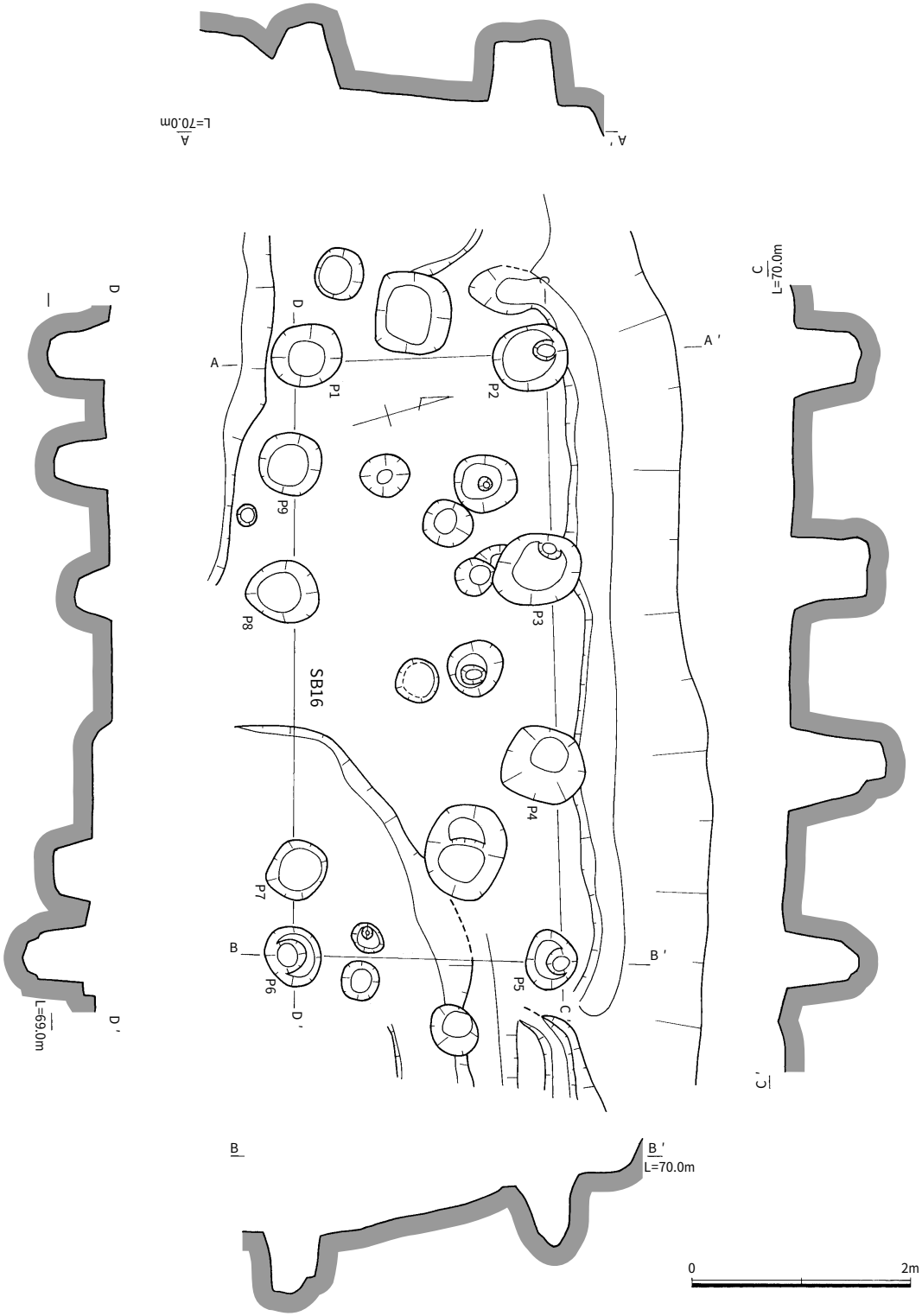
溝状遺構と２本の柱列を検出している。加工段も改修が加わっており少なくとも２回の床の張替えが行われている。Ｐ４の柱列の下に弓なりに広がる段から下が古い面となりそのうえにくすんだ堆積層に造る新しい面がくる。このためＰ１の柱列が古くＰ４の列が新しい層となる。

Ｐ１～３は3.09mの長さとなり、ピット間はそれぞれ1.64m－0.98mとなる。ピットは直径約0.5mの不整形な円形を呈し、深さは約0.4～0.5mである。

Ｐ４～８は4.62mで、ピット間は約0.7m～0.8mでほぼ等間隔に並ぶ。ピットは直径約0.5mの不整形な円形で深さは、0.3～0.6m。Ｐ８だけが浅く、平面形も方形に近いように見えるためＰ４～７の４本の柱列となる可能性もある。いずれも南側の加工段が流出しているため、性格等についてはよく分からない。

３－５加工段（第87図）

第３平坦面の東端に位置し、調査区外に続く平坦面である。便宜上３－５加工段としたが、３－４加工段と同じレベルで広がる段である。ＳＢ１７が立地していることからこの部分を分けること



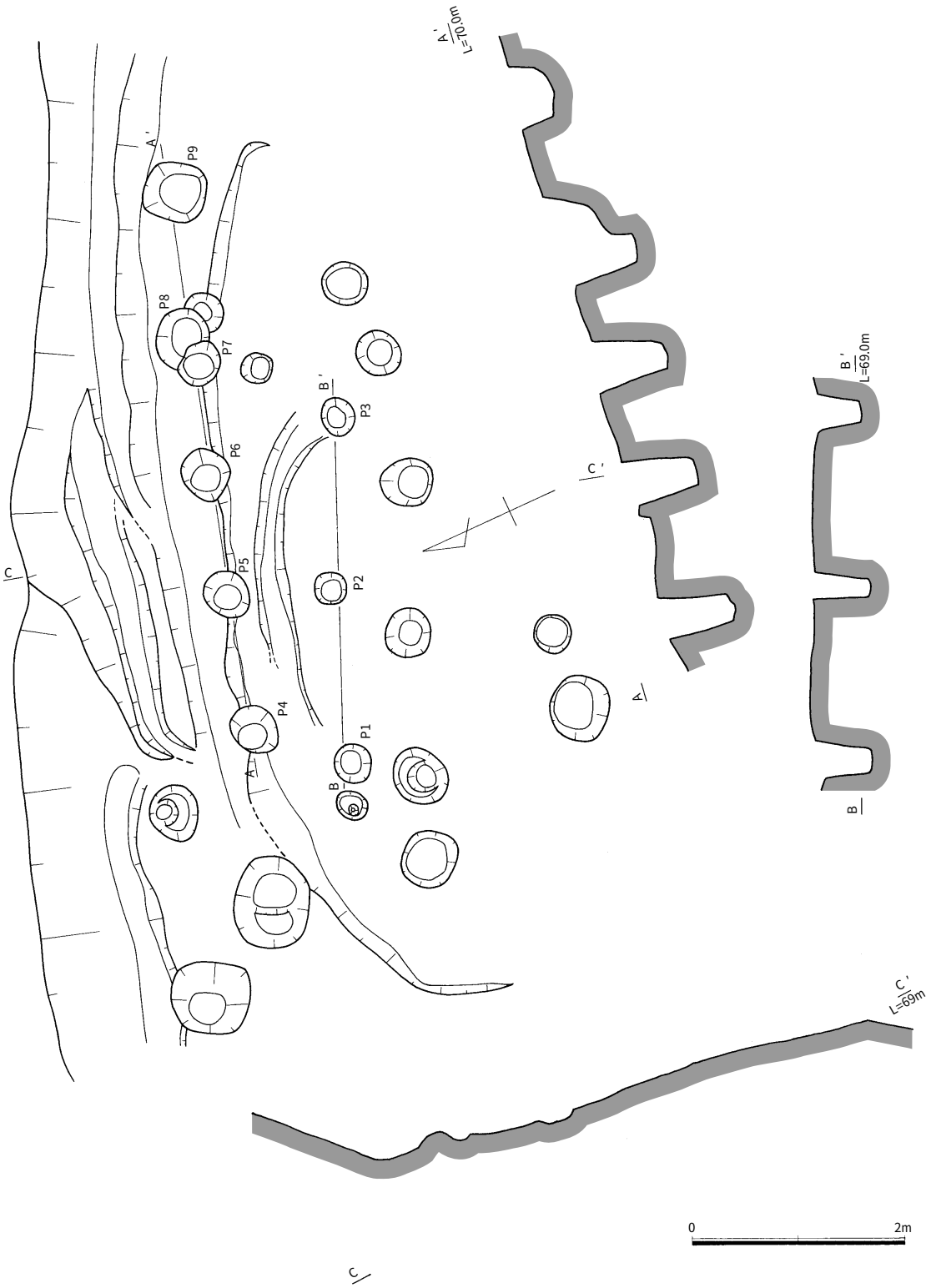
第85図　Ⅱ区下３－３加工段実測図（Ｓ＝１／60）

としたが、３－４加工段と前後関係についてははっきりしないが、壁面を段状にはしる部分が一連のものであることから拡張された部分である可能性が高いと思われる。

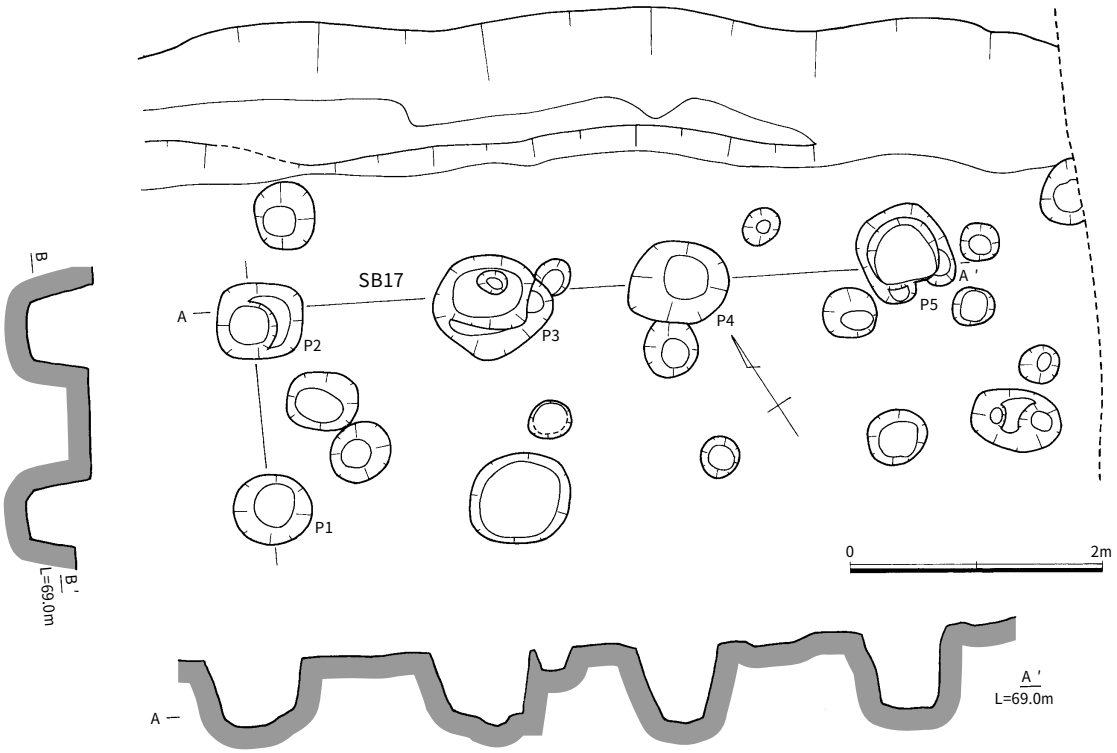
ＳＢ１５は南東側が欠落しているが残存部分で１間×３間となる。ピットは直径約0.7mの不整形の円形で、深さ0.5m～0.6mである。Ｐ１～２は0.9m、Ｐ２～５は4.41mを測る。ピット間は0.8～1.0mほどである。

第３平坦面出土遺物（第88図～98図）

（第88図）１～５は須恵器甕・壷、６・７は須恵器瑞、８・９は須恵器高坏である。１は口径20.8㎝を測り、くの字に外傾する口縁部をもつ内外面ともに器具によるタタキ、外面頸部にはカキ目調整を施す。体部は大きく肩の張り出したフォルムになることが想像できる。２もくの字状に外反させた口縁部を持つ。口径は16.1㎝を



第86図　Ⅱ区下３－４加工段実測図（Ｓ＝１／60）



第87図　Ⅱ区下３－５加工段実測図（Ｓ＝１／60）

測る。頸部には三本の直線を並べるヘラ記号が確認できる。肩部は内外面とも器具によるタタキ目、頸部にはカキ目が施され、口縁部から頸部は回転ナデによって仕上げている。３は、口縁端部が欠損しており正確な口径は分からないが16㎝前後か。口縁部は外傾しながら直線的に立ち上がる。外面は平行のタタキ目を施し、内面にも当て具痕が残る。４は外反しながら立ち上がる口縁部を持ち頸部から口縁部にかけて沈線が見える。口頸部にはヘラ記号を記す。体部はタタキを施した後回転カキ目を施す。５は、直線的に長く立ち上がる壷口縁部で、口径は15.6㎝を測る。外面に１条の沈線がみえ、回転ナデを施す。肩部にあたる部分にはごく一部にタタキ目が見える。６は口縁部のみが残るが𤭯であろう。口径は16.6㎝を測り口縁端部はやや外反気味に立ち上がる。７も口縁部のみが残る。内湾気味に立ち上がる口縁部で外面には１条の沈線を施す。口径は9.0㎝を測る。８は高坏脚部である。底径は9.7㎝で端部は下方につまみ出されており、内外面に凹面ができる。脚体部には透かし孔を意識したヘラによる切れ込みがあるが貫通している部分は一部である。９も高坏脚部である。底径は9.5㎝を測る。端部は下方につまみだすことを意識しているのか内外面に平坦面を作り出す。坏底部内面にはヘラ記号と思われる１本の筋が刻まれる。

（第89図）１～８は須恵器坏蓋である。いずれも天井部につまみの付く形のもので、８は天井部がかけておりつまみは残らないが、ヘラ書き文字が刻まれる。１は、天井部に回転ヘラケズリを施し宝珠形のつまみを付ける。返りは短く退化しておりほぼまっすぐに下方に出る。口径8.5㎝器高は2.5㎝を測る。２はヘラキリ後ナデた上に宝珠形のつまみを取り付けている。天井部外面には深い１条の沈線が施され、返しは下方に直線的に伸びる。口径は12.2㎝器高3.5㎝を測る。３は口径8.2㎝器高2.7㎝で外反気味に短く立ち上がる返しを持つ。外面の１／２程度にヘラケズリを施し宝珠形のつまみを付ける。４は、口径8.7㎝器高9.2㎝を測り、内傾ぎみに直線的に立ち上がる返しを持

つ。天井部から体部にかけてヘラケズリを施した後円柱形のつまみを付ける。内面は強めのナデにより凹面ができる。５は口径9.9㎝器高2.9㎝を測る。返しは退化しており断面は正三角形に近い形状となる。焼成が良くなく全体に磨滅が見られるが、天井部外面には回転ヘラケズリを施し半球状のつまみをつけている。つまみの陵も磨滅しておりはっきりしないが宝珠形を指向しているようにも見える。６は、口径6.7㎝器高2.8㎝を測る。天井部にヘラケズリを施し円柱状のつまみを付ける。その他は回転ナデで仕上げており、外反気味にまっすぐ立ち上がる返しを持つ。７は口径7.6㎝器高2.7㎝を測り、天井外面１／２程度を回転ヘラケズリした後半球状のつまみをつけている。この固体も焼成がよくなく若干の磨滅が見え、つまみの陵が風化しているが宝珠形を指向したものであろう。つまみの横にはヘラ記号を刻む。内傾して直線的に立ち上がる短いかえしを持つ。８は、口縁端部のごく一部が残っている。坏蓋内面にヘラ書き文字を刻む。文字部分の半分程度は欠損しており文字は判読できない。

９～12は坏身である。９は口径8.2㎝、器高3.2㎝を測り底部外面はヘラキリ後ナデを行い、そのほかの内外面とも回転ナデを行っている。やや丸みを帯びながら外傾して立ち上がり端部は丸く収める。10は底部外面をヘラキリ後ナデており、肩部は回転ヘラケズリを施す。肩部から口縁部にかけては直線的に上方に立ち上がる。口径8.8㎝を測る。11は口径9.6㎝器高4.5㎝。底部外面はヘラ切り後ナデており、内面底部は回転ナデ後静止ナデを行う。その他は回転ナデで仕上げる。体部は外傾し直線的に立ち上がる。12は底面は緩やかに丸みを帯びており、体部は外傾しながら直線的に立ち上がり、口径8.6㎝器高3.2㎝を測る。底面外部はヘラ切り後荒いナデを施し、そのほかの部分は回転ナデを施す。

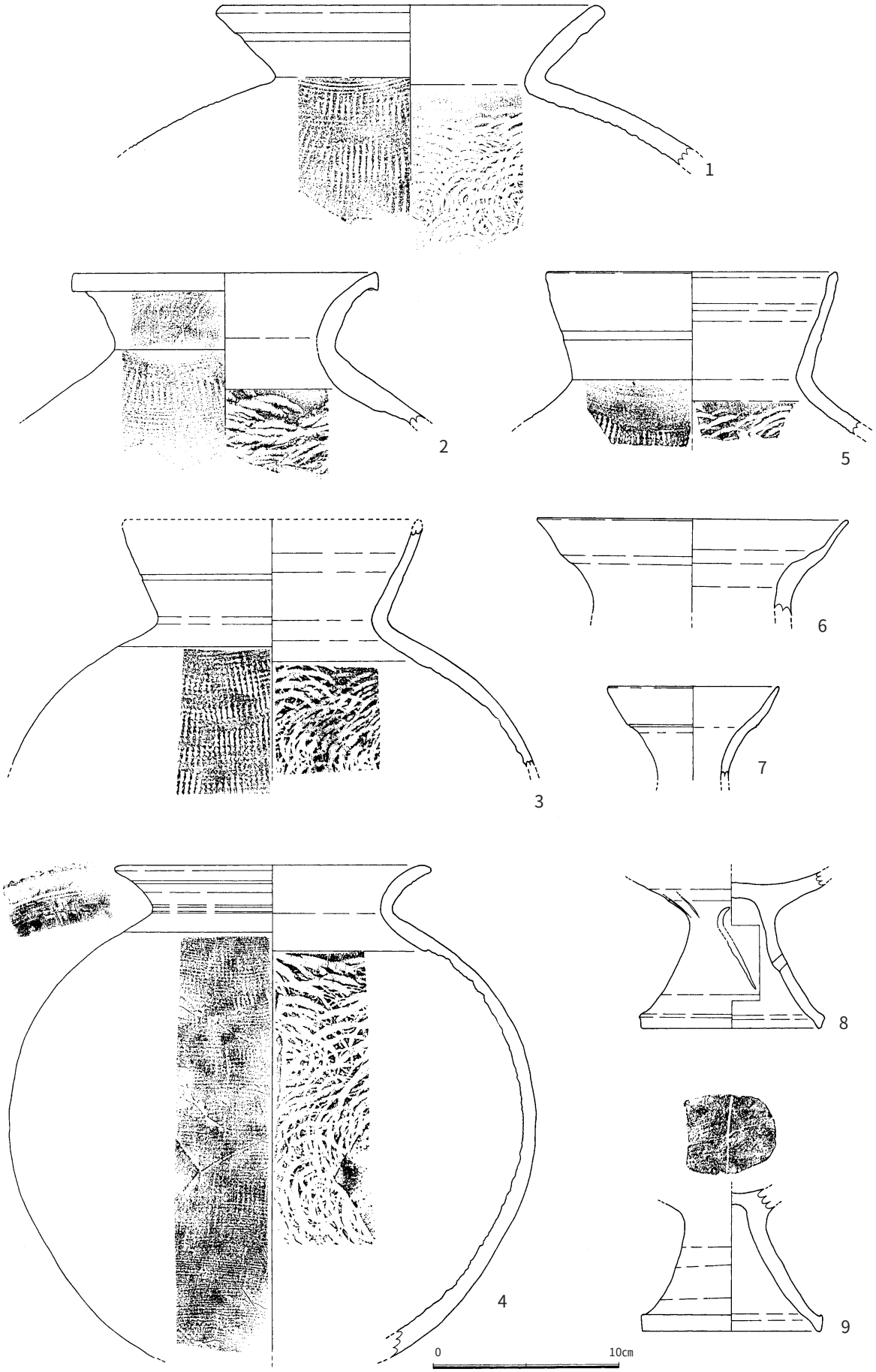
13～15は土師器の甕である。13は口径19.4㎝で、頸部から直線的に立ち上がり口縁端部は外反する。内外面とも磨滅が激しく調整は内面頸部付近にヘラケズリと思われる痕跡が認められるのみである。14は口縁部が緩やかに外反し丸く収めている。復元口径23.0㎝で全体に磨滅が激しく調整ははっきりしない部分が多いが、内面はヘラケズリを施していると思われる。15は大きく外反する口縁部をもつ。復元口径は27.6㎝を測り、内面頸部以下にヘラケズリの痕跡が見えるが磨滅がありはっきりしない部分が多い。

16は移動式竈口縁部である。口縁端部は外反し、厚み１㎝長さ４㎝ほどの庇状の突帯をややたれ下がり気味に一周させている。焚口上面にあたる整形面はこの個体では確認できなかった。ゆがみがあるものの復元口径は21.5㎝ほどとなろう。内面にヘラケズリの痕跡が見えるほか突帯の付け根のナデ調整以外は磨滅のため観察できなかった。

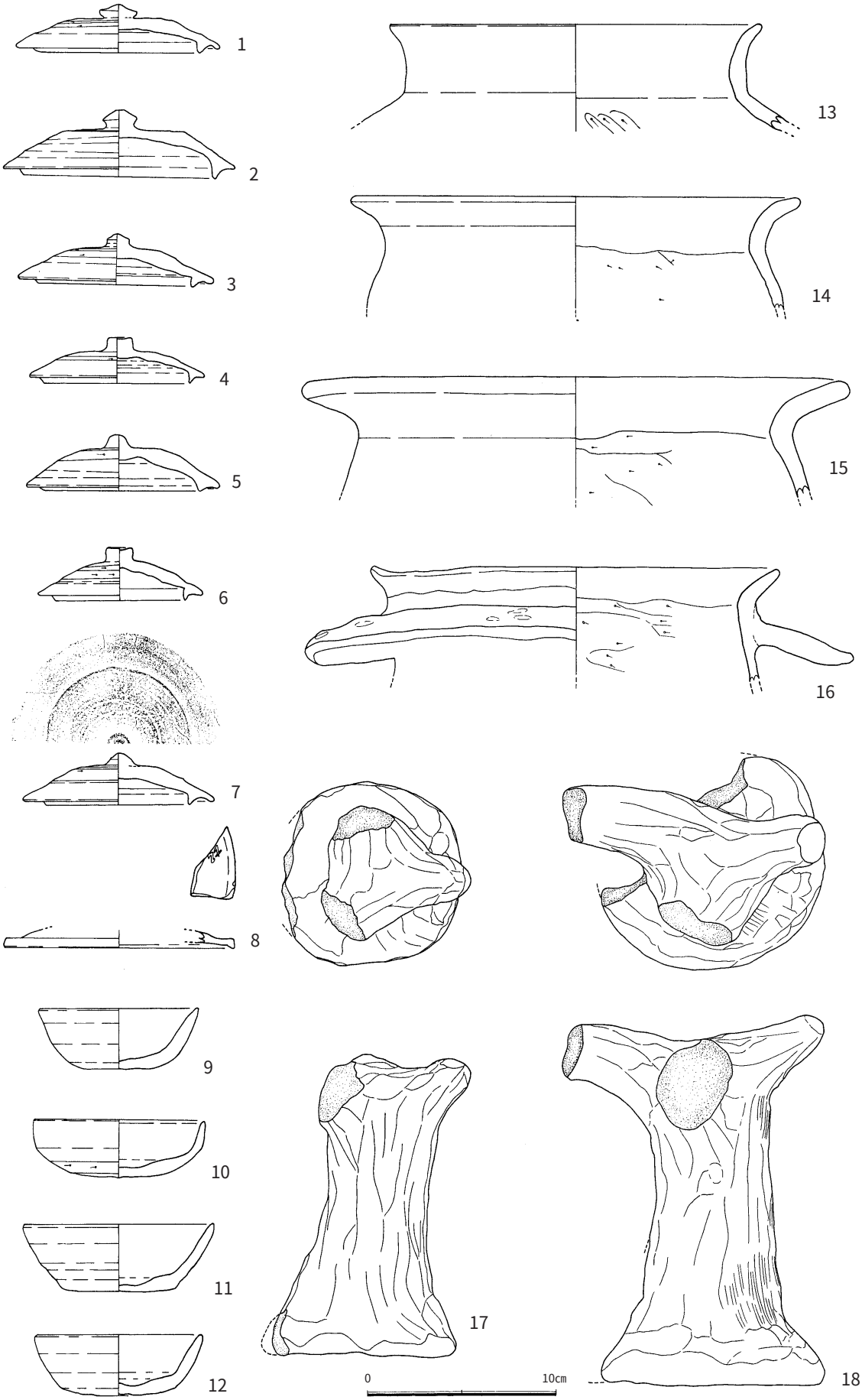
17・18は土製支脚である。いずれも三又突起でヘラケズリによって整形されていると思われるが、18は一部にハケ目が見える。残存高は17が15.7㎝、18は19.4㎝を測る。

（第90図）１～３は土師器甕である。いずれも口縁直径が25㎝を超える大振りなものである。

１は、大きく外反する口縁部をもち、体部は肩が張らず直線的に下に落ちる。内面は頸部までヘラケズリを施し、体部にはハケ目を見ることができるが磨滅が激しい。復元口径は25.4㎝を測る。２も口縁部は大きく外反し体部は直線的に落ちる。内面にはヘラケズリを施し、外面頸部より下にはタテハケによって調整を行っている。復元口径は32.6㎝を測る。３は復元口径37.6㎝を測るが、残存部分が１／10程度であるためもう少し小さくなる可能性もある。口縁部はやや肥厚し緩やかに外反する。頸部付近までヘラケズリを施す。１、２と同様体部はあまり張らないタイプの器形であ



第88図　Ⅱ区下第３平坦面出土遺物実測図（１）（Ｓ＝１／３）



第89図　Ⅱ区下第３平坦面出土遺物実測図（２）（Ｓ＝１／３）

ろう。

４は須恵器鉢である。復元口径32.8㎝を測り、全体に丸みを帯びた器形を持つ。口縁部は緩やかに内湾し、端部はナデによる平坦面を作り出す。外面はタタキ目を施し、内面は当て具痕を消すためにナデで仕上げている。

５は土製支脚である。三又突起でヘラケズリによって整形される。残存高は15.4㎝を測る。

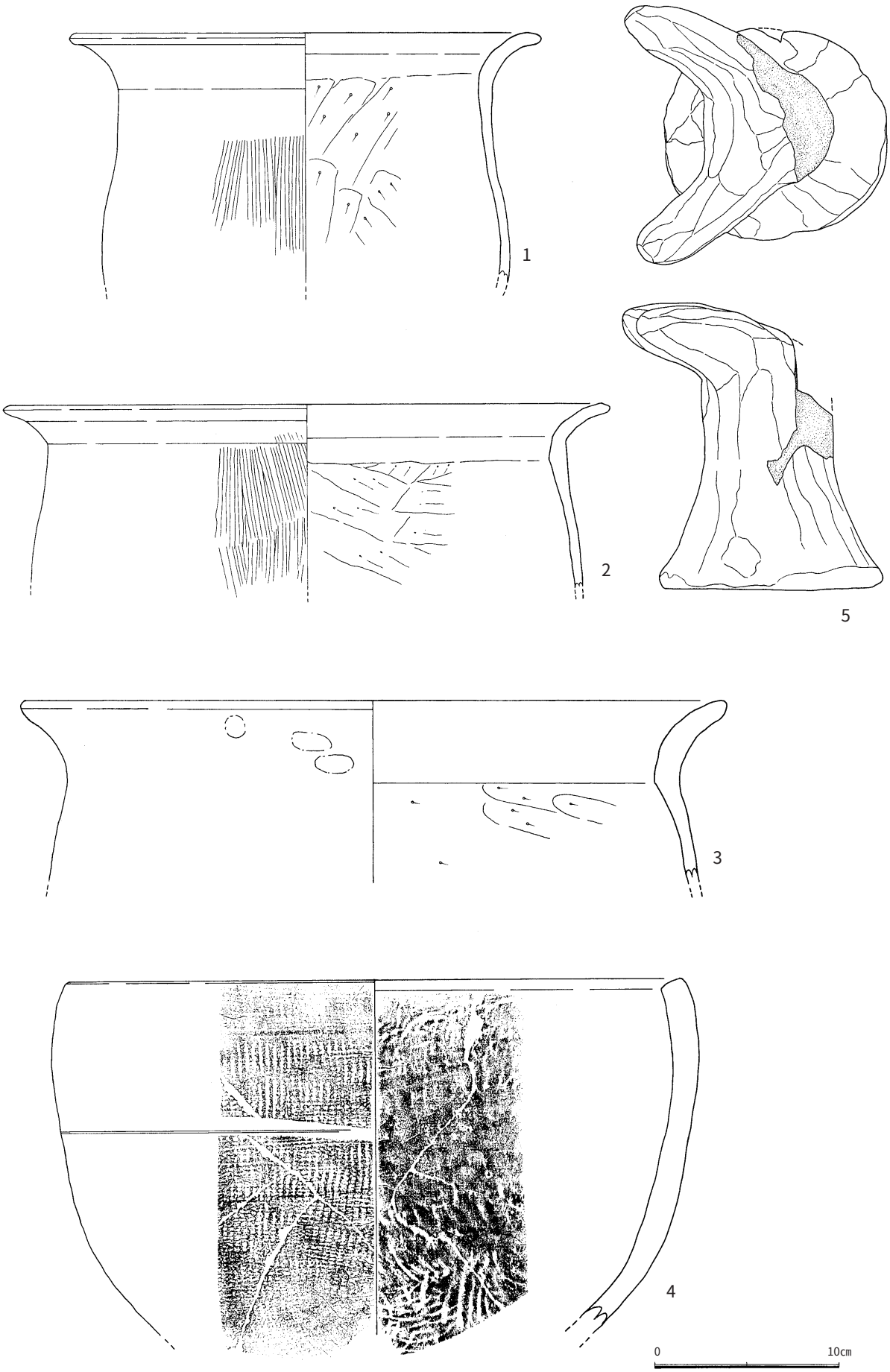
（第91図）１～５は土師器甕である。１は大きく外反する口縁部をもち口縁端部は下方向にまで反る。体部は直線的に下に落ちる。外面はタテ方向のハケにより調整しており、一部にススが付着している。内面はヘラケズリを施し、復元口径31.3㎝を測る。２は復元口径31.6㎝を測る。口縁部は外傾しながら直線的に立ち上がり端部は緩やかに外反する。３は緩やかに外反しながら立ち上がる口縁部を持ち復元口径28.6㎝を測る。磨滅が激しいためはっきりしないが、外面には斜め方向のハケ目、内面にはケズリを施している。４はあまり肩の張らないタイプの器形で体部は直線的に下方につづく。口縁部は緩やかに外反し端部は丸く収める。体部内面はヘラケズリが施されるが、磨滅が激しく細かな調整は分からない。復元口径26.6㎝を測る。５は「く」の字に外反する口縁部をもち丸みを帯びたなだらかなカーブを描く体部へつづく。口縁部はやや肥厚し端部は丸く収める。頸部よりやや下がったところに、「×」印のヘラ記号を刻む。

６・７は須恵器短頸壷か。大きさは異なるが、ほぼ同じ器形である。体部が大きく外に張り出し口縁部は非常に短くつまみ出す。６は口径6.4㎝、７は口径7.2㎝である。

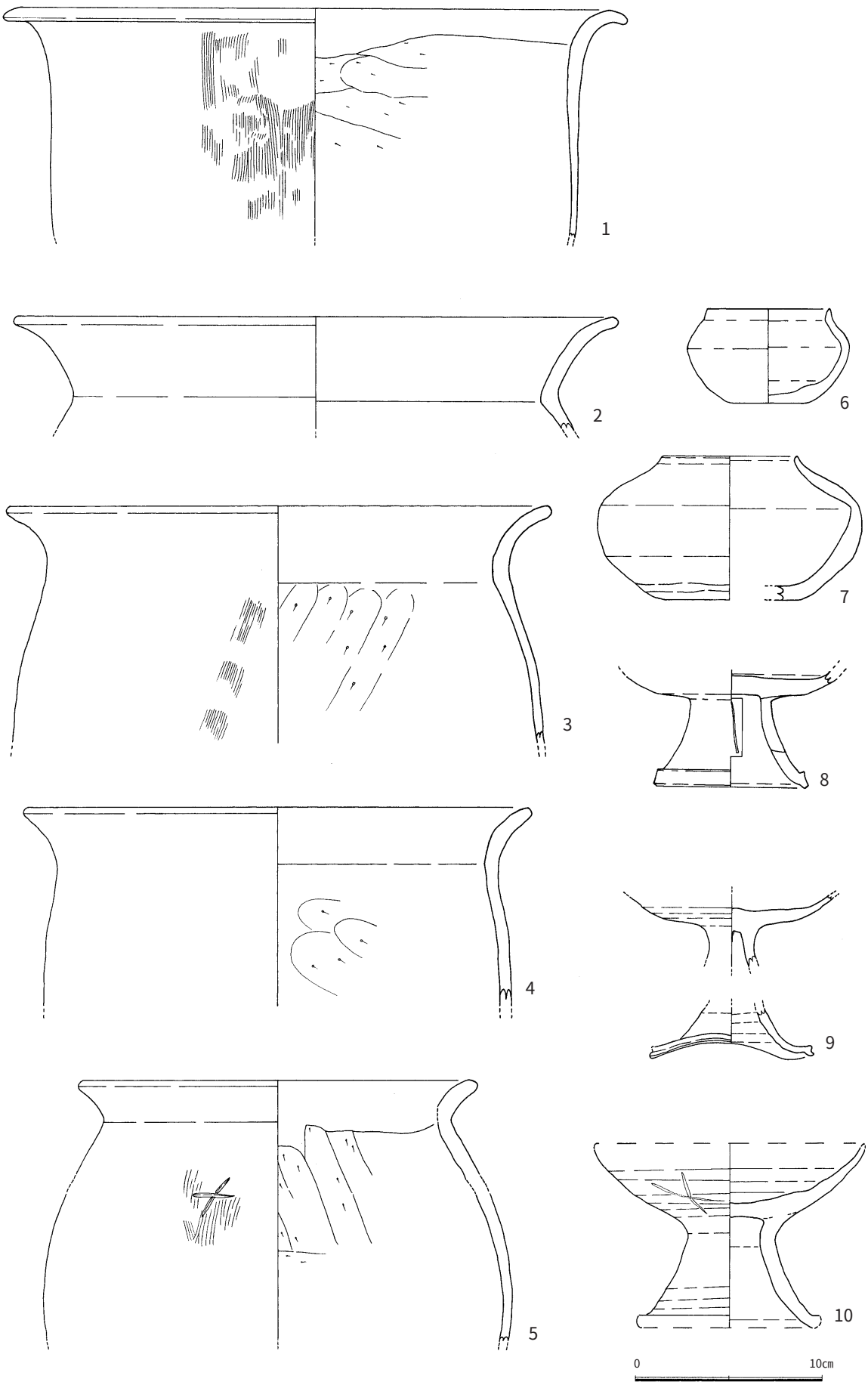
８～10は須恵器高坏である。８は、高坏脚部で緩やかに外反するハの字の脚部で端部は肥厚させて外面に面を作る。脚体部には２箇所の切れ込みを入れるが、一箇所は焼成時に閉じてしまっている。９は坏底部～脚部の付け根と脚端部が残る同一個体である。坏底部の内面には自然裕が掛かっており調整は分からなかった。脚端部を大きく外反させ、端部はやや外反気味に下方につまみ出す。脚部はゆがみが大きくはっきりしないが8.6㎝内外の底径となる。10はハの字にやや外反気味に張り出す脚部をもち脚端部は外反させる。坏部は緩やかに丸みを帯びて広がる。坏底部外面には「×」のヘラ記号を刻む。

（第92図）１～５は土師器甕である。１は復元口径18.2㎝、口縁部は緩やかに外反しながら立ち上がり丸く収める。肩は張らず体部は外側に直線的に広がるように続く。内面頸部以下にはヘラケズリを施し、外面にはタテ方向のハケ目を施す。２は肥厚しながら大きく外反する口縁部をもち口径は14.3㎝を測る。内面頸部付近までヘラケズリを行っており、外面にはハケ目が見えるが磨滅が激しくはっきりしない。３は、外反して立ち上がる口縁部を持ち端部はほぼ横方向を向く。肩は張らず緩やかに内湾しながら下方へと続く。復元口径17.0㎝を測り内面にはヘラケズリを施す。外面にハケ目が見えるが、風化及びスス付着のためはっきり見えない。４は復元口径16.0㎝、外傾しながら直線的に立ち上がる口縁部をもつ。肩は張らないが緩やかに丸みを帯びる器形である。内面頸部付近までヘラケズリを施し頸部に陵がついている。口縁内面と外面にはハケ目による調整が見える。５は復元口径22.4㎝、口縁部は外傾しながら直線的に立ち上がり端部は外反する。頸部外面には２条の沈線が施される。頸部付近まではヘラケズリを施している。

６～９は高坏である。６は、復元口径16.6㎝、器高11.0㎝を測る。坏部は横方向に広がりやや内湾しながら立ち上がる。脚部は外反しながらハの字に張り出す。脚体部にはヘラ切りによる切れ込みが入っている。一本の直線が途中で枝分かれした様相でいずれも貫通している。７は口径13.0㎝、



第90図　Ⅱ区下第３平坦面出土遺物実測図（３）（Ｓ＝１／３）



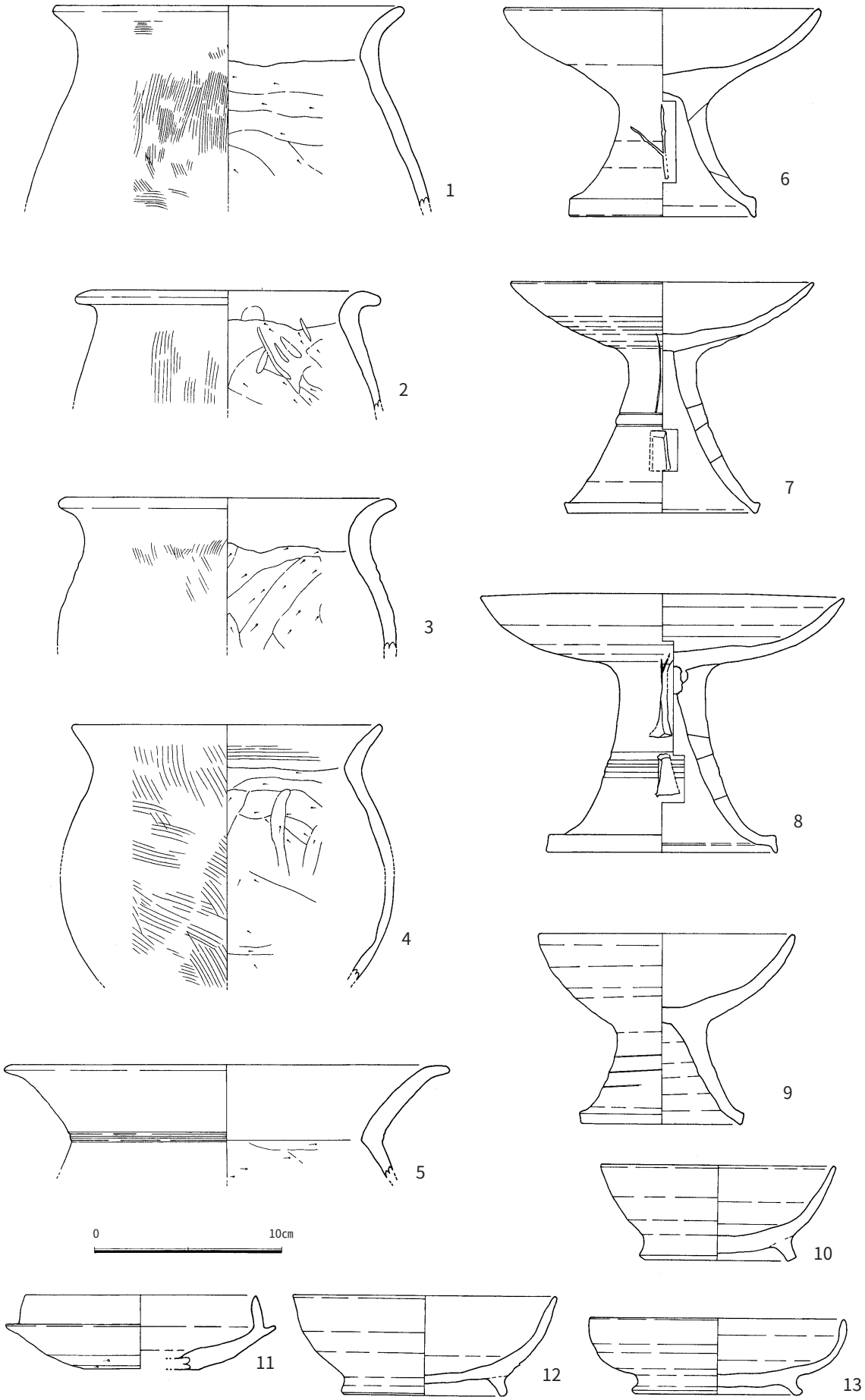
第91図　Ⅱ区下第３平坦面出土遺物実測図（４）（Ｓ＝１／３）

器高12.2㎝を測り坏部は横方向に張り出し緩やかに内湾しつつ立ち上がる。脚部は取り付け部の径が小さく外反しながら広がるスマートな印象の器形である。脚体部には２段の透かしを設けるが上段のものは切れ込みのみで、下段は方形であるが一部のみしか残っていない。透かしの間には２条の沈線が施される。８は口径19.0㎝、器高12.2㎝坏部は横方向に大きく張り出し外傾しながら緩やかに直線的に立ち上がる。脚部は外側に広がり脚端部は下方につまみ出す。脚部には２段の透かし孔があるが完全に残っておらず、上段が三角形、下段が方形か。

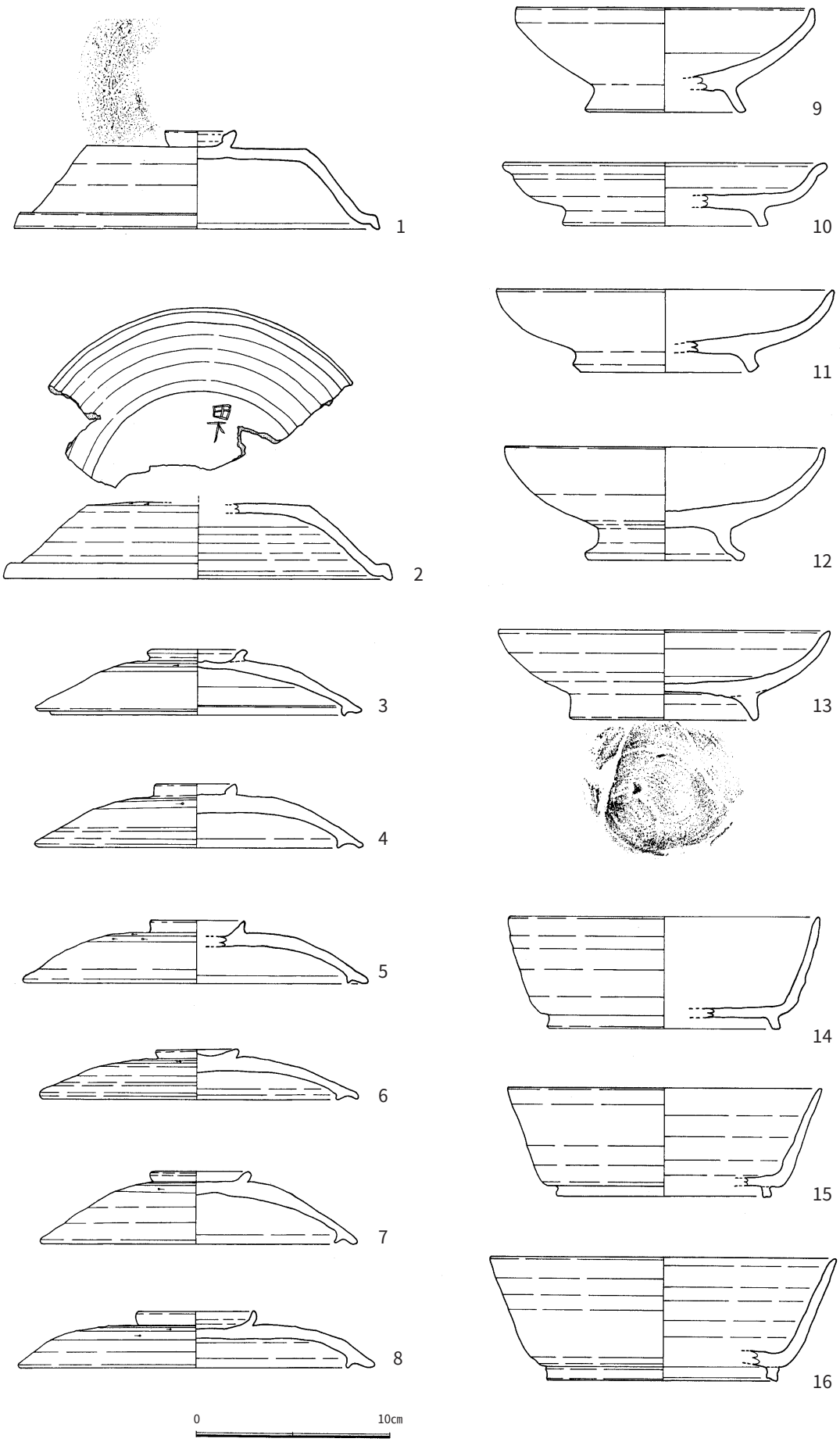
９は口径13.1㎝器高10.1㎝。坏部は底部から外傾しつつ直線的に立ち上がり、脚部はハの字に張り出し端部はやや外反する。

10～13は須恵器碗・坏身である。このうち11はやや古い様相を見せる坏身である。
10は高台付き碗で底部から直線的に立ち上がり口径は12.3㎝を測る。高台は8.3㎝の径でやや外傾して張り出し、端部には面を付ける。全体に回転ナデにより仕上げている。11は口径12.2㎝を測り、口縁部は直線的にまっすぐ立ち上がる。底部１／２程度にヘラケズリを施しその他は回転ナデにより仕上げる。12は緩やかに内湾しながら立ち上がる口縁部をもち、口径は14.0㎝で高台は外側に張り出す。全体的に回転ナデによって調整されている。13は口径13.5㎝、大きく内湾して立ち上がる口縁部をもつ。高台は外側に張り出すが端部がやや外反する。回転ナデによって調整されている。
（第93図）１～８は坏蓋である。１は台形の断面を持ち、口径18.6㎝器高5.0㎝。全体に回転ナデを施し天井部には径3.8㎝の輪状つまみを付ける。つまみの横には「木」と読めるヘラ書き文字を刻む。２も１と同様な形を持つ蓋で口径19.8㎝を測り、天井部は欠損しているが輪状つまみがつくであろう。天井部外面に「田下」と読めるヘラ書き文字を刻む。３は口径14.9㎝。天井部１／３程度にヘラケズリを施し直径4.6㎝の輪状つまみを付ける。口縁部の立ち上がりは非常に短く、外反気味にのびる。４は立ち上がり径14.6㎝器高3.3㎝で、天井外面の１／２程度に回転ヘラケズリを施し直径4.0㎝の輪状つまみを付ける。立ち上がりは退化し正三角形の断面を持つ。５は立ち上がり径13.6㎝、器高3.2㎝。天井部外面の１／３程度にヘラケズリを施し直径5.0㎝の輪状つまみを付ける立ち上がりは非常に短く直線的に立ち上がる。６は立ち上がり径16.5㎝、器高2.5㎝を測り立ち上がりは内傾して短く立ち上がる。天井部外面の１／３にヘラケズリを施し直径4.2㎝の輪状つまみを付ける。７は立ち上がり径14.4㎝器高3.7㎝。立ち上がりは内傾しており非常に短い。天井部外面の１／３程度に回転ヘラケズリを施し直径5.2㎝の輪状つまみを付ける。８は立ち上がり径15.8㎝器高2.9㎝。天井部の１／２に回転ヘラケズリを施し、直径6.0㎝の内湾ながら立ち上がる輪状つまみを付ける。

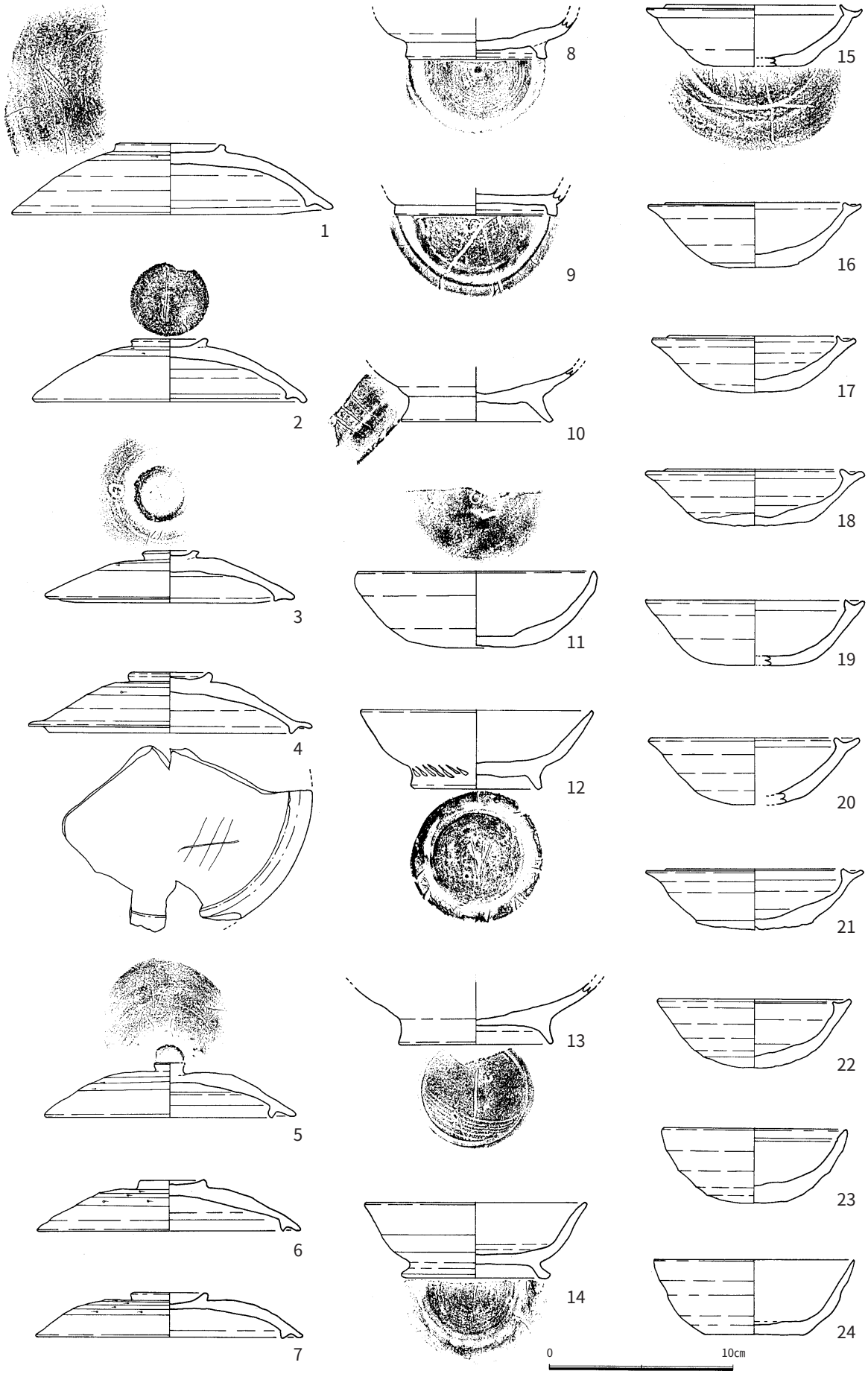
９～16は高台付の坏・皿である。９は復元口径15.1㎝。外側に立ち上がる口縁部をもち端部は内湾する。高台は外に張り出すほぼ全体を回転ナデで調整し底部内面は不定方向のナデを行っている。10は高台付き皿で、口縁部は丸みを帯びて立ち上がり端部は外反する。復元口径16.3㎝、器高3.2㎝を測る。高台はやや外側に張り出し、底部外面は糸切り後ナデを施す。11は、皿か。内湾気味に立ち上がる口縁部を持ち、高台は外側に張り出す。端部は面を作っており、全体に回転ナデで調整するが底部内面はその後静止ナデを行っている。12は口縁部が丸みを帯びて立ち上がり口径16.5㎝、器高5.8㎝を測る。高台は外反しながら外側に張り出し端部は面を作る。回転ナデ調整を行っており底部内面は静止ナデを施す。13は緩やかに丸みを帯びて立ち上がる口縁部で復元口径16.9㎝、器高は4.6㎝。高台は下方に直線的に取り付けられており、底部は糸キリ後回転ナデを施す。底部内



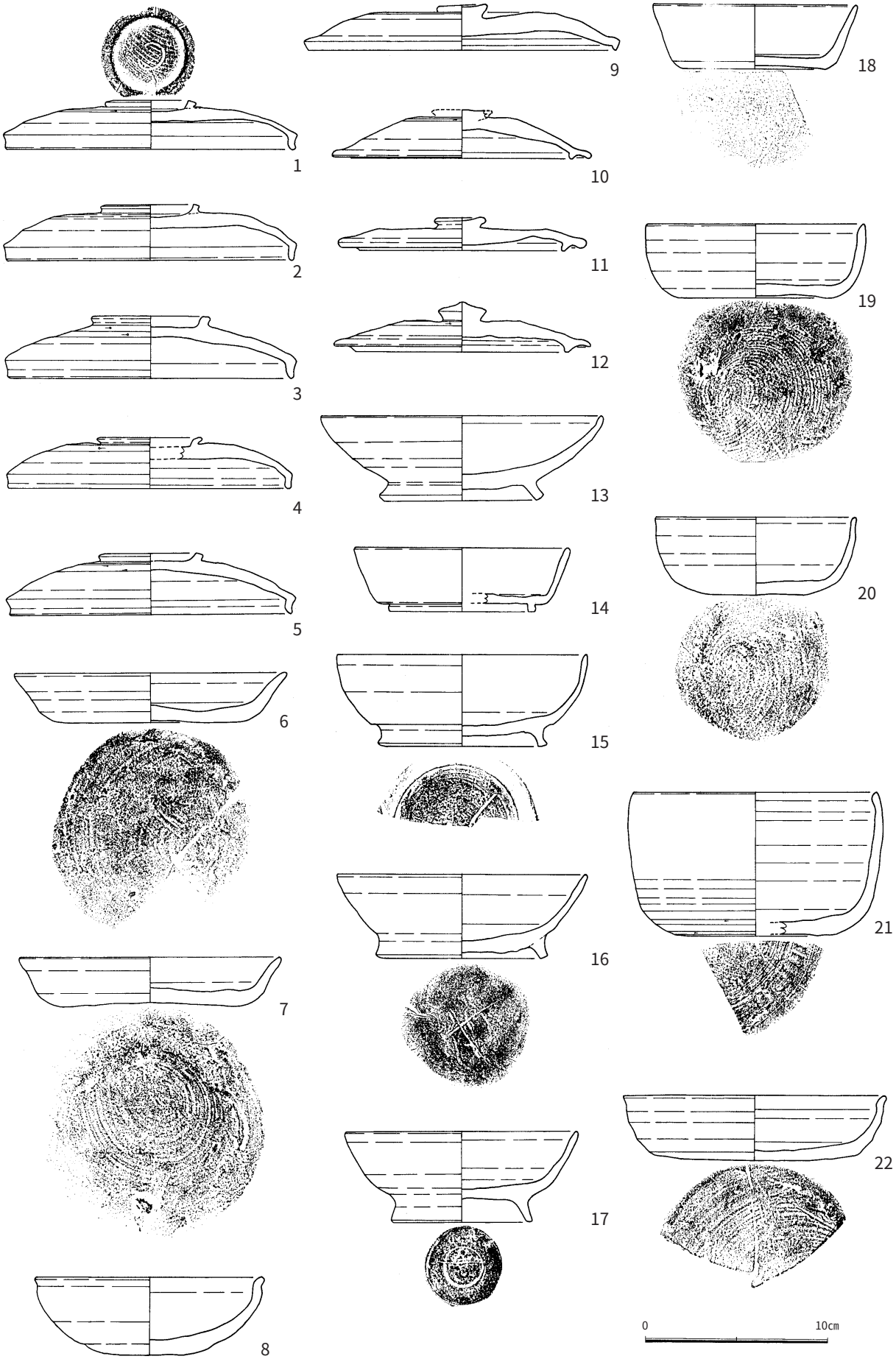
第92図　Ⅱ区下第３平坦面出土遺物実測図（５）（Ｓ＝１／３）



第93図　Ⅱ区下第３平坦面出土遺物実測図（６）（Ｓ＝１／３）



第94図　Ⅱ区下第３平坦面出土遺物実測図（７）（Ｓ＝１／３）



第95図　Ⅱ区下第３平坦面出土遺物実測図（８）（Ｓ＝１／３）

面は静止ナデでその他の部分は回転ナデを施している。14は直線的に外側に大きく立ち上がる口縁部を持ち口径15.8㎝、器高5.8㎝。高台はやや外側に張り出す。ほぼ全体を回転ナデによって仕上げる。15は直線的に外側に立ち上がる口縁部をもち口径16.1㎝、器高5.6㎝。高台は下方に向かって取り付ける。残存部は回転ナデ調整のみが見られる。16も15とよく似た様相を持ち復元口径17.7㎝、器高6.3㎝を測る。回転ナデ調整が施される。

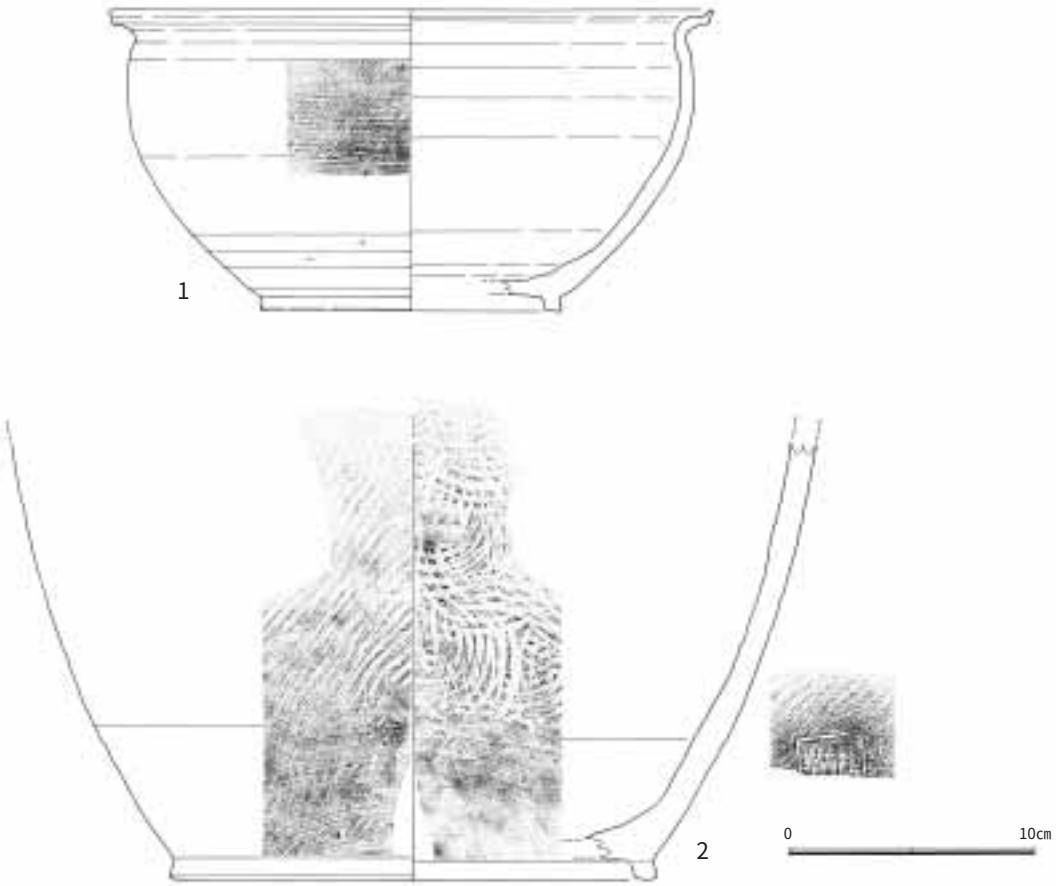
（第94図）１～７は須恵器坏蓋である。１は器径17.3㎝、立ち上がり径は14.6㎝、器高4.8㎝である。天井部外面をヘラケズリし直径5.6㎝の輪状つまみを付ける。立ち上がりは退化しており、かえしの方が長く伸びる。肩部に「Ｖ」字のヘラ記号を刻む。２も１とよく似た様相を持つ立ち上がり径12.5㎝、器高3.4㎝。天井外面に回転ヘラケズリを施し直径3.8㎝の輪状つまみを付けるつまみの中心部に直線１本のヘラ記号を刻む。３は口径11.2㎝、器高2.8㎝を測る。天井部約１／２にヘラケズリ後、直径2.7㎝の輪状つまみを付ける。つまみの横には竹管紋を施す。４は口径13.2㎝、器高3.3㎝。天井部にヘラケズリ後直径4.2㎝の輪状つまみを付ける。内面にはヘラ記号を刻む。５は口径11.0㎝器高2.9㎝。立ち上がりは内傾して直線的に立ち上がる。天井部に回転ヘラケズリ後円柱状のつまみを付ける。外面に「Ｖ」字のヘラ記号を刻む。６は口径12.2㎝、器高2.7㎝立ち上がりとかえしがほぼ同じ高さとなる。天井部ヘラケズリ後直径3.8㎝の輪状つまみを付ける。７は口径12.2㎝、器高2.9㎝立ち上がりと返しがほぼ同じ高さとなる。天井部１／２ほどをヘラケズリ後直径3.8㎝の輪状つまみを付ける。

８は須恵器高台部分のみである。底径8.6㎝を測り底部には１本直線のヘラ記号を刻む。９も須恵器高台付き坏か。高台部分のみが残る。底径は7.4㎝。底部は糸キリ後ナデ調整を行う。

10は須恵器碗か。底径8.0㎝。高台は大きく立ち上がり外側に張るタイプで、高台取り付け部分に３本のヘラ記号が見える。11は須恵器坏身全体に回転ナデ調整を施す。底部には「○」印のヘラ記号がある。口径12.6㎝器高4.1㎝。12は須恵器碗。底部高台の中心に「↑」状のヘラ記号がある。口径12.4㎝、器高4.3㎝。全体に回転ナデを施す。13は須恵器高台部分のみである。底径8.2㎝で高台の中心に一筋のヘラ記号を刻む。糸キリの痕が見え、底部は糸キリ後ナデを行っている。14は須恵器坏身。口径12.0㎝、器高4.0㎝で底部内面に「Ｖ」字のヘラ記号がある。

15～24は須恵器坏身で15～22まではかえしの付く形で立ち上がりが内傾し短いものが多い。15は口径9.4㎝、器高3.3㎝。かえしは外側に張り出し、底部外面にはヘラ記号が見える。16は口径9.6㎝、器高3.5㎝。かえしはやや外反するが立ち上がりとほぼ同じ高さに達する。17は口径9.0㎝、器高3.0㎝底部はヘラ切り後ナデ調整を行っている。18は口径9.4㎝、器高3.1㎝底部はヘラ切り後荒いナデを施す。底部内面は不定方向のナデを行っており、その他の部分は回転ナデを施す。19は口径9.6㎝、器高3.4㎝。全体に回転ナデを施し、底部内外面は静止ナデを行う。20は復元口径11.2㎝ほぼ回転ナデにより仕上げるが底部には一部ヘラ切り痕が見える。21は口径9.4㎝、器高3.3㎝。底部はヘラ切り後荒いナデを行っている。その他の部分は回転ナデ調整を行う。22は立ち上がりより返しが長くなっている。器径は10.4㎝、口径8.5㎝。底部はヘラ切り後ナデを施す。23は口径9.8㎝、器高5.0㎝口縁部に１条の沈線をめぐらす。底部はヘラ切り後ナデを行っており、その他の部分は回転ナデを施す。24は口径10.6㎝、器高5.4㎝。底部はヘラ切り後ナデを施し、全体を回転ナデで仕上げる。

（第95図）１～５は須恵器坏蓋で、かえしが消失し天井に輪状つまみの付くものである。１は口径



第96図　Ⅱ区下第３平坦面出土遺物実測図（９）（Ｓ＝１／３）

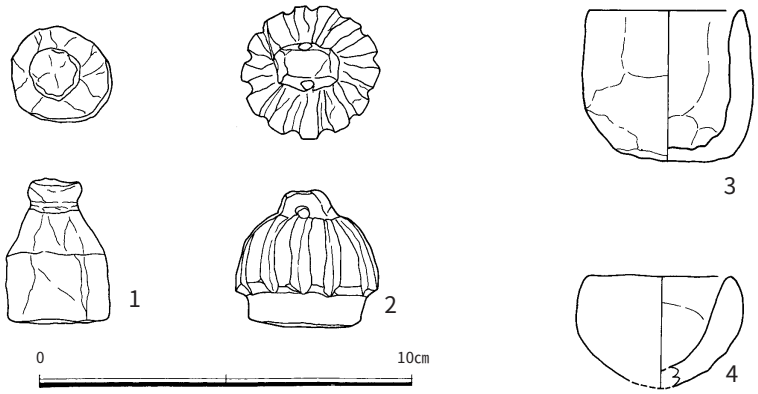
15.5㎝、器高2.7㎝。天井部にヘラケズリを施し直径4.2㎝の輪状つまみを付ける。つまみの中央には、「Ｃ」印のヘラ記号を刻む。２は口径15.6㎝、器高3.0㎝。直径4.8㎝の輪状つまみが付く。全体に強めの回転ナデ調整を行っている。３は口径15.8㎝、器高3.4㎝。天井部に回転ヘラケズリを施した後、直径5.6㎝の輪状つまみを付ける。４は口径15.4㎝、器高3.8㎝天井部約１／２を回転ヘラケズリの後直径5.4㎝の輪状つまみを付ける。５は口径15.2㎝、器高3.3㎝。天井部に回転ヘラケズリを施し、直径4.9㎝の輪状つまみを付ける。口縁端部はやや外反する。

６．７は須恵器皿である。いずれも外側に直線的に立ち上がる口縁部をもち端部はやや外反している。底部は回転糸キリ痕が残る。口径は６が14.9㎝、７が14.2㎝。器高は６・2.7㎝、７は2.6㎝である。８は須恵器坏で口縁端部は外反する。口径12.2㎝、器高4.2㎝底部はヘラ切り後荒いナデを行い、その他の部分は回転ナデを施す。

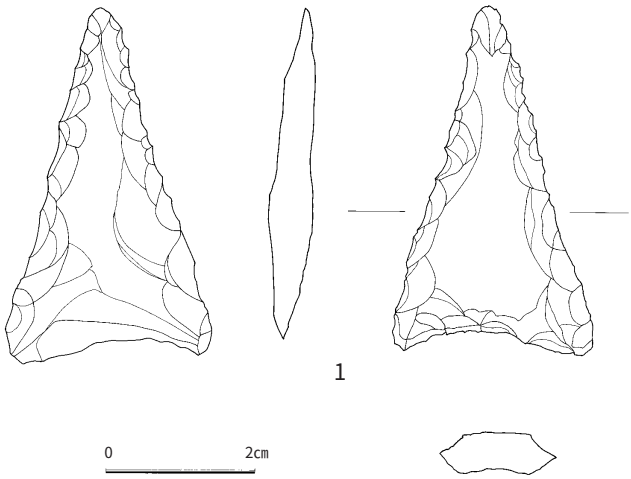
９～12は須恵器坏蓋である。いずれも天井部につまみの付くもので９のみかえしが消失している。９はゆがみがあるものの復元口径16.8㎝、器高2.5㎝。天井部はヘラケズリ後、扁平なつまみを付ける。10は口径12.0㎝、器高2.6㎝で天井部ヘラケズリ後扁平なつまみを付ける。11は口径13.5㎝、器高1.8㎝のかなり扁平な印象を受ける。天井部はヘラケズリ後回転ナデを施し、つまみを付ける。12も扁平な印象のもので、口径14.0㎝、器高2.7㎝を測る。天井部は回転ヘラケズリ後宝珠形つまみを付ける。

13～17は高台付きの坏身である。14以外は丸みを帯び高台がハの字に張り出すものである。13は、口径15.4㎝、器高4.6㎝。底部はヘラ切り後回転ナデを施している。14は直線的に立ち上がる口縁部

をもつ。口径は11.8㎝、器高3.5㎝を測る。残存部は回転ナデを施す。15は口径13.6㎝、器高5.0㎝を測り、底部は糸キリ後ナデを施す。高台の中央に直線のヘラ記号を刻む。16は口径13.5㎝、器高4.5㎝。底部は回転ヘラケズリを施し高台を取り付ける。内部底面に「×」印のヘラ記号を刻む。17は口径12.8㎝、器高5.0㎝を測り、底部はヘラ切り後回転ナデを施す。比較的大きな立ち上がりをもつ。



第97図　Ⅱ区下第３平坦面出土遺物実測図（10）（Ｓ＝１／２）



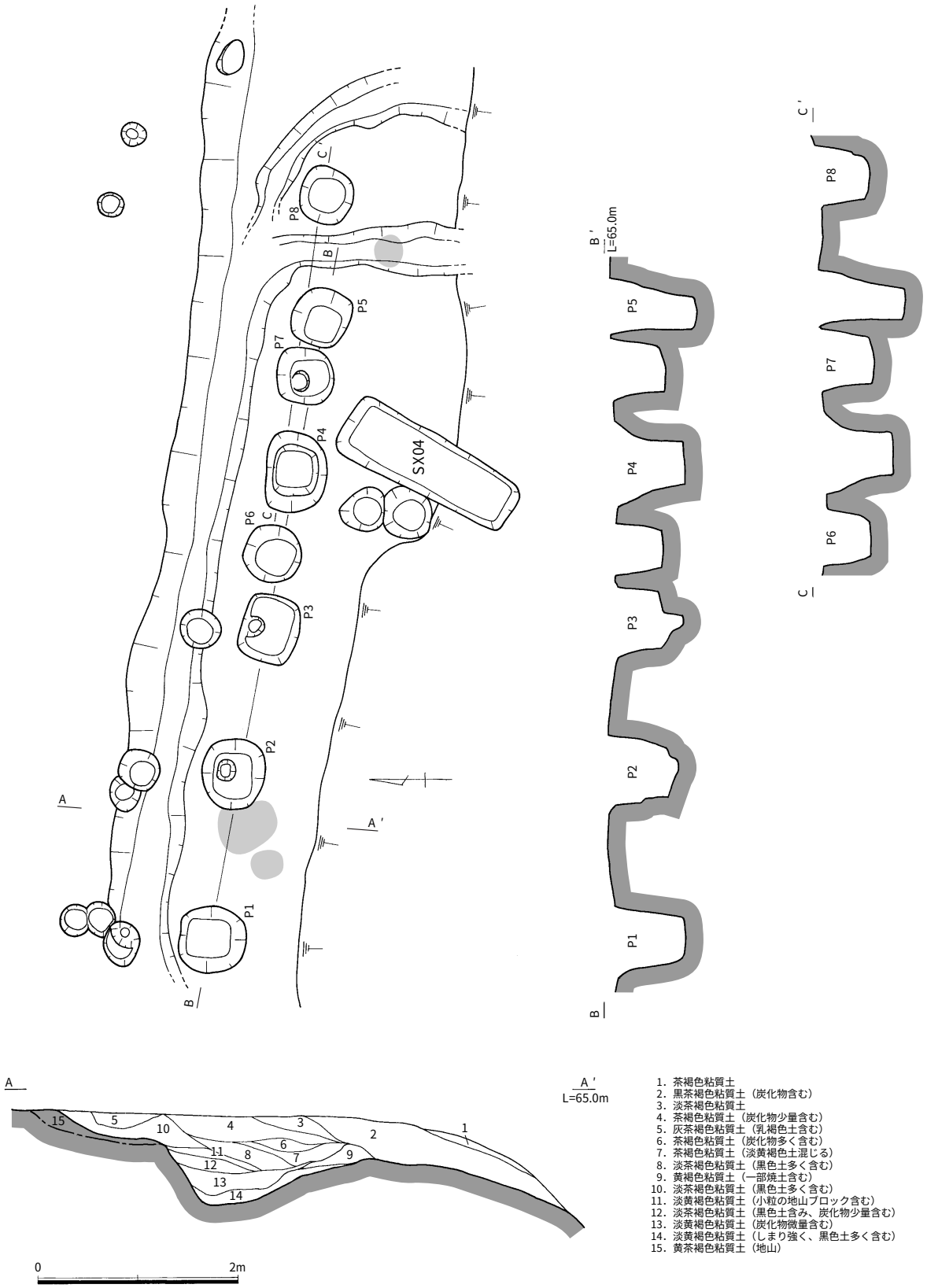
第98図　Ⅱ区下第３平坦面出土遺物実測図（11）（Ｓ＝１／１）

18～22は須恵器坏身である。いずれも底部は回転糸キリを行う。18は口径11.1㎝、器高3.5㎝。外側に直線的に立ち上がる口縁部をもつ。19は丸みをもちながら上方に立ち上がる口縁部をもち口径11.9㎝、器高4.0㎝を測る。回転ナデを施し、底部内面はその後静止ナデを行う。20も19と似た器形で口径10.8㎝、器高4.2㎝。焼成があまく全体に茶褐色を呈す。口縁部の回転ナデのほかは調整がよく分からなかった。21は口径13.1㎝、器高7.8㎝のやや深めの坏。底部は糸キリ後なでているか。22は口径14.1㎝、器高3.5㎝を測る。口縁端部はやや外反する。底部は回転糸キリ痕が残る。

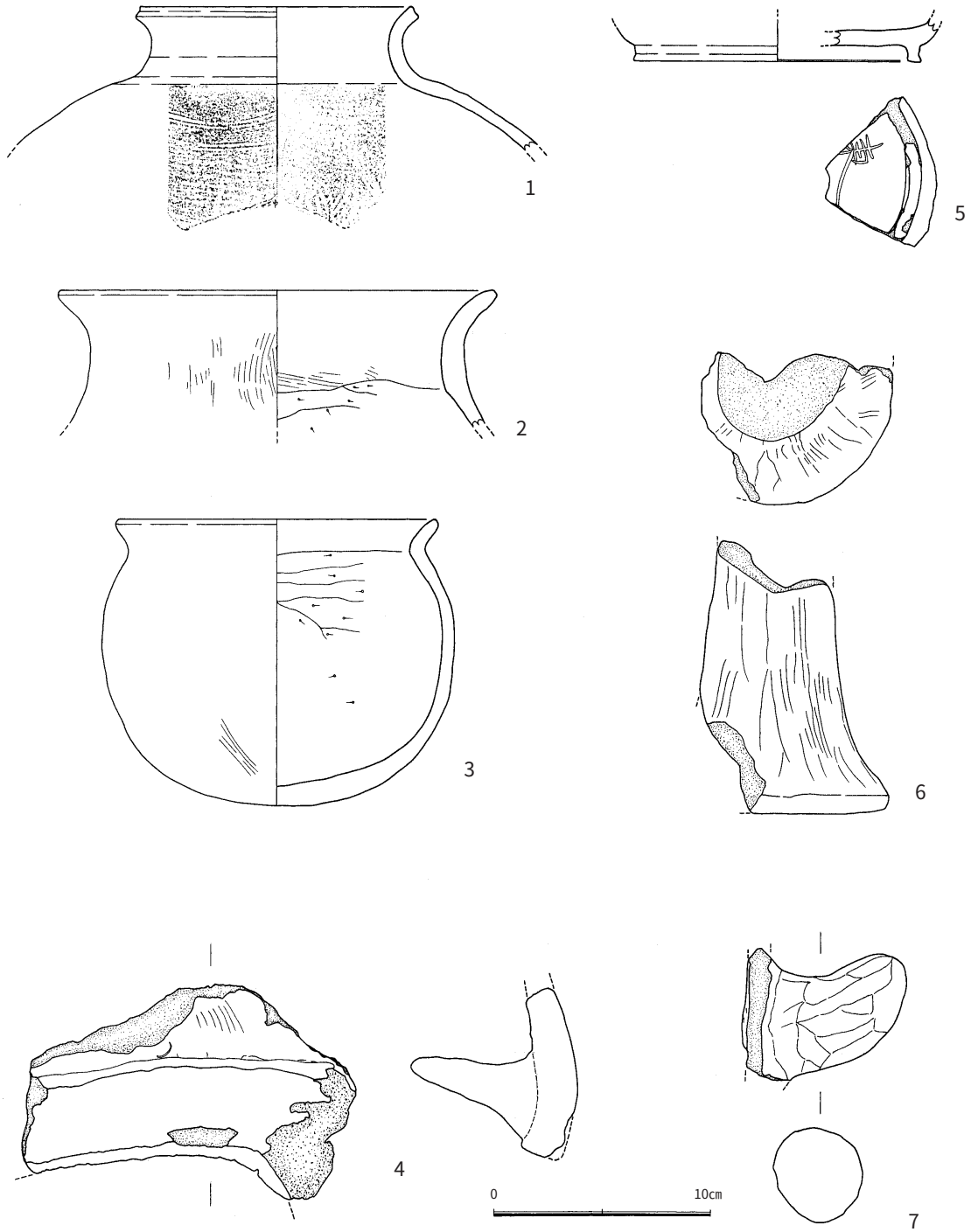
（第96図）１は須恵器鉢である。底部は回転ヘラケズリを施し直径12.0㎝の高台を付ける。体部は回転ナデの後、カキ目調整を行う。口縁端部は外反し上につまみ出す。口径24.2㎝、器高22.1㎝を測る。２は須恵器甕か。底部と高台のみが残る。底部はタタキの後かきめを施す。復元底径19.5㎝を測り胴部は緩やかに外側に立ち上がる。接合はできなかったが同一固体と思われる須恵器片には、印章状のヘラ書き文字が刻まれている。

（第97・98図）97図１・２は分銅型土製品である。１は器高3.8㎝、最大径2.7㎝重さ27ｇである。焼成は甘く乳灰色である。２は器高3.6㎝、最大径4.7㎝重さ41ｇで上部には紐を通せる穴をうがつ。13条の凸線が作り出されており自然釉がかかる、非常に焼成の良好なものである。３・４は手捏ね土器である。いずれも指ナデにより整形されていると思われるが磨滅のためはっきりしない。３は復元口径2.0㎝、４は3.8㎝である。

98図１は安山岩製石鏃である。全長5.8㎝、幅3.2㎝を測る。



第99図　Ⅱ区下第４平坦面実測図（Ｓ＝１／60）



第100図　Ⅱ区下第４平坦面出土遺物実測図（Ｓ＝１／３）

第４平坦面（第99図）

調査区の最南端に所在し、東西方向に約10m南北方向に最大2.5mの平坦部を作り出す加工段である。調査区外東側にもまだ若干の広がりがある。第１平坦面とは約10m、直上の第３平坦面とは約4.5mの比高差を持っている。２列の柱列を検出しており、併せて溝状遺構も２箇所検出している。加工段の南側はほとんど流失しており、詳しい性格等は不明な部分が多い。また、調査前は堤が眼前に所在していた。トレンチ状の遺構ＳＸ０１が所在するが、この堤に伴う後世のものと思われる。堆積土は低湿地によく見られる青灰色の粘質土や砂質土を含んでおり、この加工段に直接結びつくものではないと考えたため、ここでは詳細を省く。

Ｐ１～５は5.76mを測り、ピット間は0.8m～0.9mでほぼ等間隔である。それぞれピットは一辺約0.6mの方形もしくは方形に近い円形で、深さ0.6～0.7mである。

Ｐ６～８は3.09mを測り、ピット間はそれぞれ約1.3mである。ピットは約0.6mの方形に近い円形で深さは約0.5mである。

溝状遺構は柱列を囲むように加工段をめぐり幅0.2～0.4m、深さ0.2mほどである。それぞれ遺構との関連性はよく分からないが、Ｐ６の柱列を設けたときに溝を合わせて拡張しているようにも見える。そのほか、何箇所かの焼土面を確認しているが、いずれも床面の少し上からで、直接この遺構に結びつけるだけの積極的な理由はなかったため関連性は不明である。

第４平坦面出土遺物（第100図）

１は須恵器壷である。頸部は内傾しながら立ち上がり口縁部は外反する。口縁端部には面を作っておりナデによるくぼみが見え、口径は8.0㎝を測る。体部内面は器具によるタタキ、外面はタタキの後カキ目を施す。２は土師器甕口縁部である。口縁端部は大きく外反しており、口径20.2㎝を測る。外面にはハケ目調整、内面頸部下までヘラケズリをしているが、風化によりはっきりしない部分が大きい。３も土師器甕である。全体の１／２程度が出土しており、器高13.1㎝、口径14.5㎝で口縁部は「く」の字に外反する。内面はヘラケズリによって仕上げ、外面は底部付近にハケ目が見えるが磨滅しておりはっきりしない。

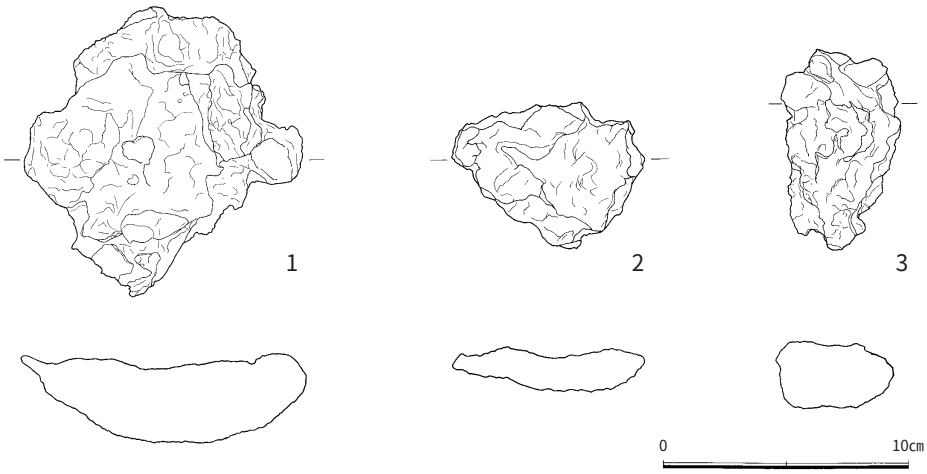
４は移動式かまどの一部である。焚口ひさし部分と思われ色調は淡橙白色である。全体を指圧、ナデによって調整しており一部にはハケ目も見える。

５は須恵器高台付坏もしくは皿の一部である。高台部分の一部が出土しており、底部外面に「東」のヘラ書き文字が読める。６は、土製支脚の基底部であるこの遺跡から出土した他の土製支脚同様のものと思われるが突起部分が欠落している。７は甑の把手部分である。

Ⅱ区下出土鉄滓（第101図）

ＳＢ１０内に鍛冶遺構が検出されており、調査区内からは大小さまざまではあるが鉄滓が出土している。そのほとんどはＳＢ０４以西の調査区南向き斜面から出土しており、ＳＢ１０の遺構との関連性をうかがわせるものである。石ころ状の鉄滓に混じって、平面的な底部がやや丸みを帯びた炉底滓状のものも出土しており、ここに図示しておく。冶金的な分析は巻末に掲載しているので参照いただきたいが、今回分析を行ったものは、鍛冶滓であるとの報告を受けている。

１はＳＢ０４の東側から出土したもので、底部に丸みをもつ炉底滓と考えたものである。長軸10.7㎝、短軸9.5㎝を測り、厚みは2.8㎝、重さは355ｇである。磁性は非常に弱い。２も同様にやや平面的な断面を呈しているがやや湾曲しているため、碗型滓の可能性を考えた。長軸7.3㎝、短軸4.5㎝を測り、厚みは1.7㎝、重さは108ｇである。磁性は強い。２－３加工段付近から出土している。３は楕円形の断面を持つもので、長軸6.8㎝、短軸4.7㎝、重量168ｇである。磁力は弱い。ＳＢ０４西側のピット埋土中から出土している。



第101図　Ⅱ区下出土鉄滓実測図（Ｓ＝１／３）

《参考文献》

本章を執筆するに当たり以下の文献を参考とした。

島根県教育委員会「一般国道９号松江道路建設予定地内発掘調査報告書11　才の峠遺跡」1993

島根県教育委員会「一般国道９号・安来道路建設予定地内発掘調査報告書12　徳見津遺跡・目廻遺跡・陽徳寺遺跡」1996

島根県教育委員会「一般国道９号・安来道路建設予定地内発掘調査報告書Ⅲ　島田南遺跡」1992

島根県教育委員会「一般国道９号・安来道路建設予定地内発掘調査報告書16　山ノ神遺跡・五反田遺跡」1998

松江市教育委員会・㈶松江市教育文化振興事業団「大井窯跡群　山津窯跡・山津遺跡発掘調査報告書」2006

玉湯町教育委員会「蛇喰遺跡」1999

㈶米子市教育文化事業団「萱原・奥陰田Ⅰ」1994

㈶米子市教育文化事業団「萱原・奥陰田Ⅱ」1998

大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集　1994

正岡睦夫・松本岩雄「弥生土器の形式と編年　山陽・山陰編」1992

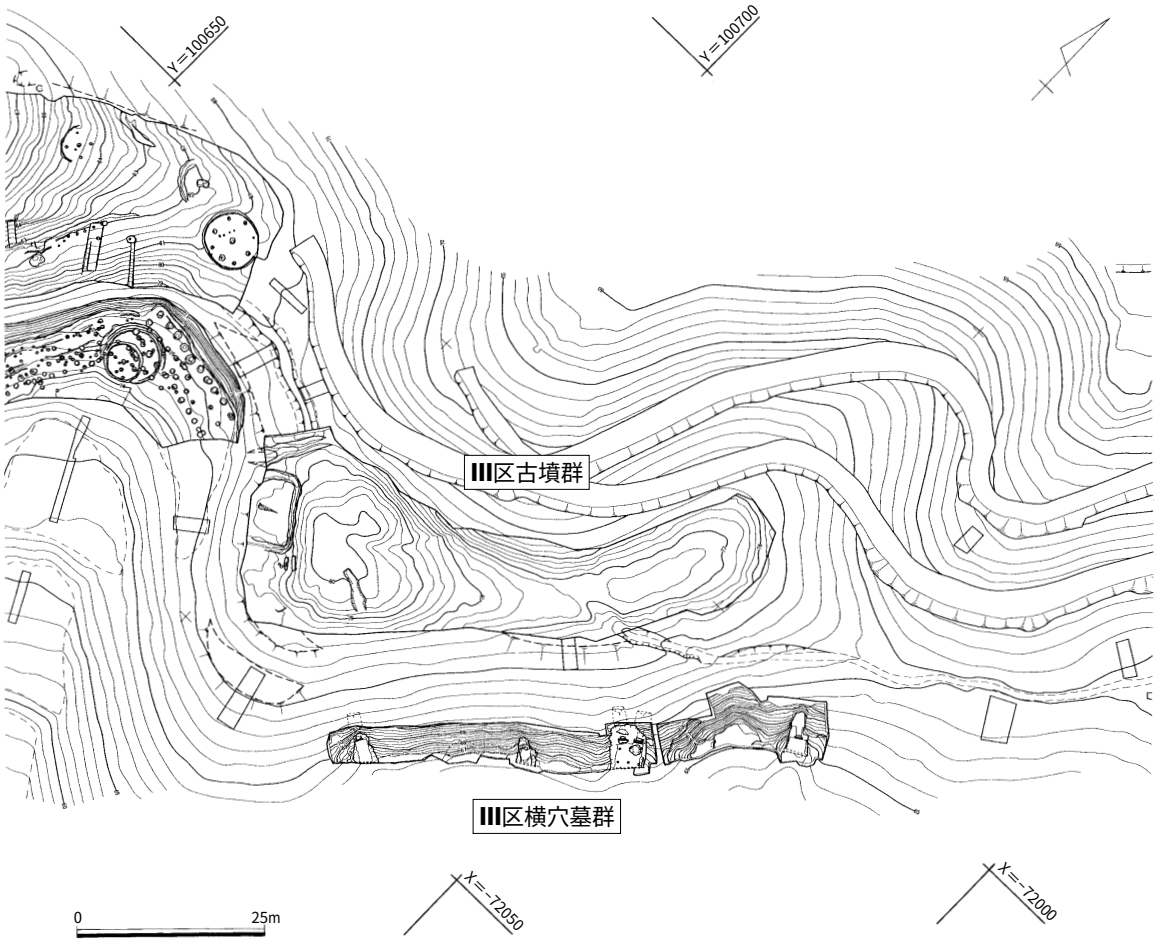
第３節　Ⅲ区の調査

永昌寺の谷遺跡Ⅲ区は、遺跡の中央部からやや北東よりの、Ⅱ区から北東－南西方向に伸びる標高約80mをピークとする丘陵尾根上と南東側斜面に位置する。丘陵尾根上に永昌寺の谷Ⅲ区古墳群、南東側斜面に永昌寺の谷遺跡Ⅲ区横穴墓群が所在する。平成17年11月から平成18年３月にかけて発掘調査を実施した。

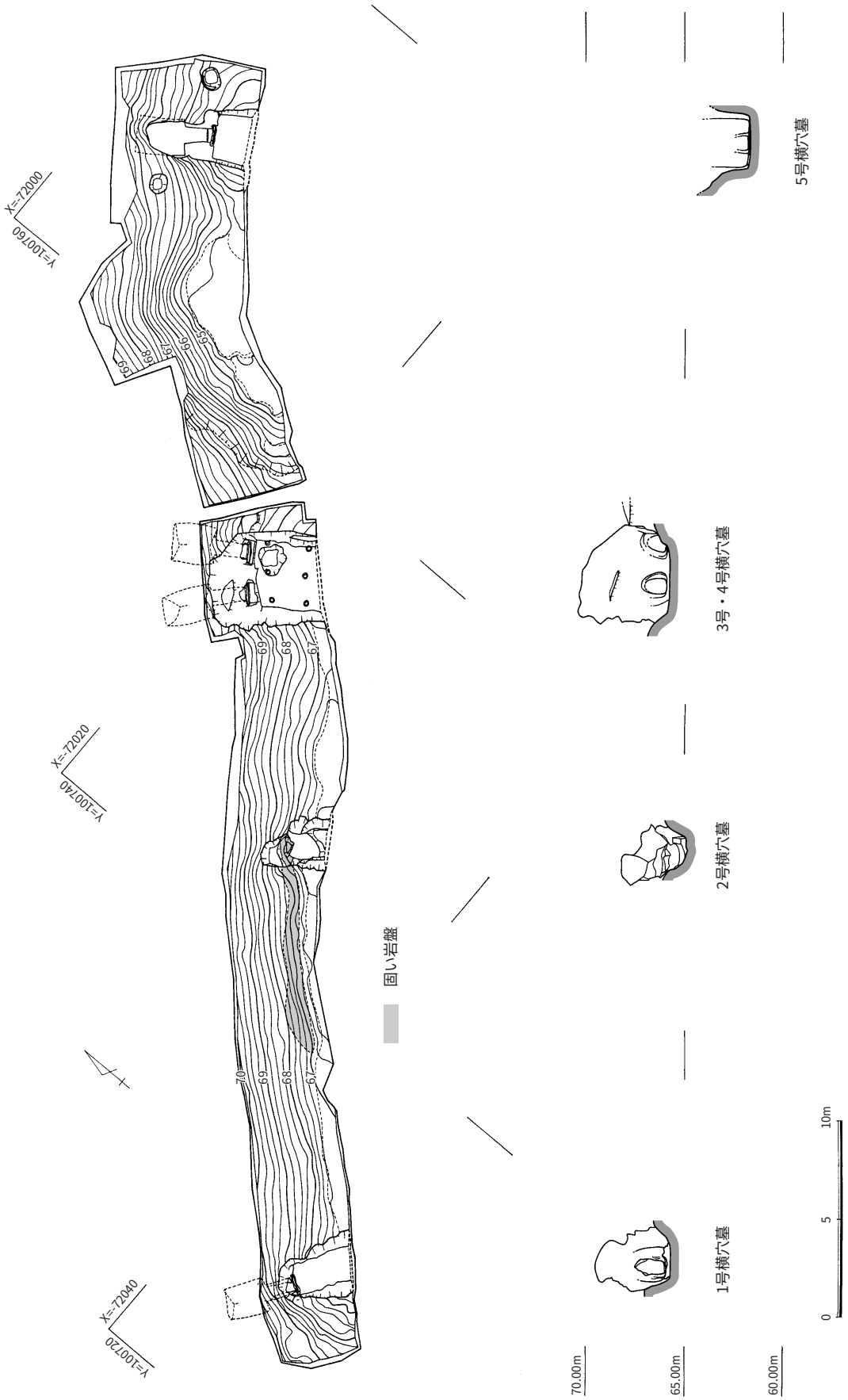
（１）Ⅲ区横穴墓群

Ⅲ区横穴墓群（第102・103図）は、丘陵の南東側斜面、丘陵尾根から約8～13m下がった標高約61～66mに位置している。調査前は植林であり、伐採以前は遺跡の存在がまったく認識されていなかった。植林伐採後、事業区域境付近の斜面にわずかにくぼんでいる部分が数箇所確認され、横穴墓群の所在が想定された。

そこで、事業区域境沿いの南東側斜面に東北－南西方向に細長い約4.5～8.5m×66mの調査区を設定し、発掘調査を実施した。調査の結果、未完成横穴墓１基を含む５基の横穴墓・２基の性格不明土壙を検出した。横穴墓はいずれも遺跡が所在する丘陵の東側に伯太川を望むことができる南東側に向けて開口し、墓道の先端は調査区外（事業区域外）に続いている。横穴墓は１号～４号横穴



第102図　永昌寺の谷遺跡Ⅲ区地形測量図・調査区配置図（Ｓ＝１／1,000）



第103図　**Ⅲ**区横穴墓群調査後地形測量図（Ｓ＝１／300）

墓は標高約65.0～65.7mとほぼ同じレベルであるが、５号横穴墓は標高約61.7mとその他の横穴墓と比べやや低いレベルで築かれている。これは、５号横穴墓の上部の丘陵尾根の高さが他の横穴墓と比べて低くなっているためと推定される。

なお、調査区南東側の事業区域外の丘陵斜面には、表面観察で斜面がわずかながらくぼんでいる部分が数箇所確認できることから、当横穴墓群が引き続き造墓されている可能性が高い。

［Ⅲ区１号横穴墓］

位　置（第103図）

Ⅲ区１号横穴墓は、調査区の南西端に位置している。開口レベルは標高約65.7mで南東方向に向けて開口する。

墓　道（第104図）

平面形は調査区内では長方形を呈し、幅1.6～1.7m・長さ3.0m以上で、南東側の墓道先端は調査区外に続いている。墓道最奥部のやや南西方向によった位置に閉塞部が造られている。床面はほぼ水平に近いが、わずかながら前方に向かって傾斜している。

土層堆積状況（第104図）

墓道は土砂により完全に埋まっていた。この土砂は大きく３群に分けることができる。Ⅰ層群は表土および流入土、Ⅱ層群は横穴墓の最終追葬時における墓道埋土、Ⅳ層群は最終追葬以前の墓道埋土である。土層観察から、最終埋葬時には床面まで掘削されず、床面からの高さが調査区端で約0.5m・閉塞部で約0.7mの厚さの埋土が残された状態で玄室に侵入した様子が伺えた。Ⅲ層は玄室内流入土で、Ⅱ層群及びⅣ層群と対応すると考えられる。Ⅳ層群はいくつかの層に分類することができるが、最終追葬以前の追葬の回数は判然としなかった。

閉塞部・閉塞石・玄門（第104図）

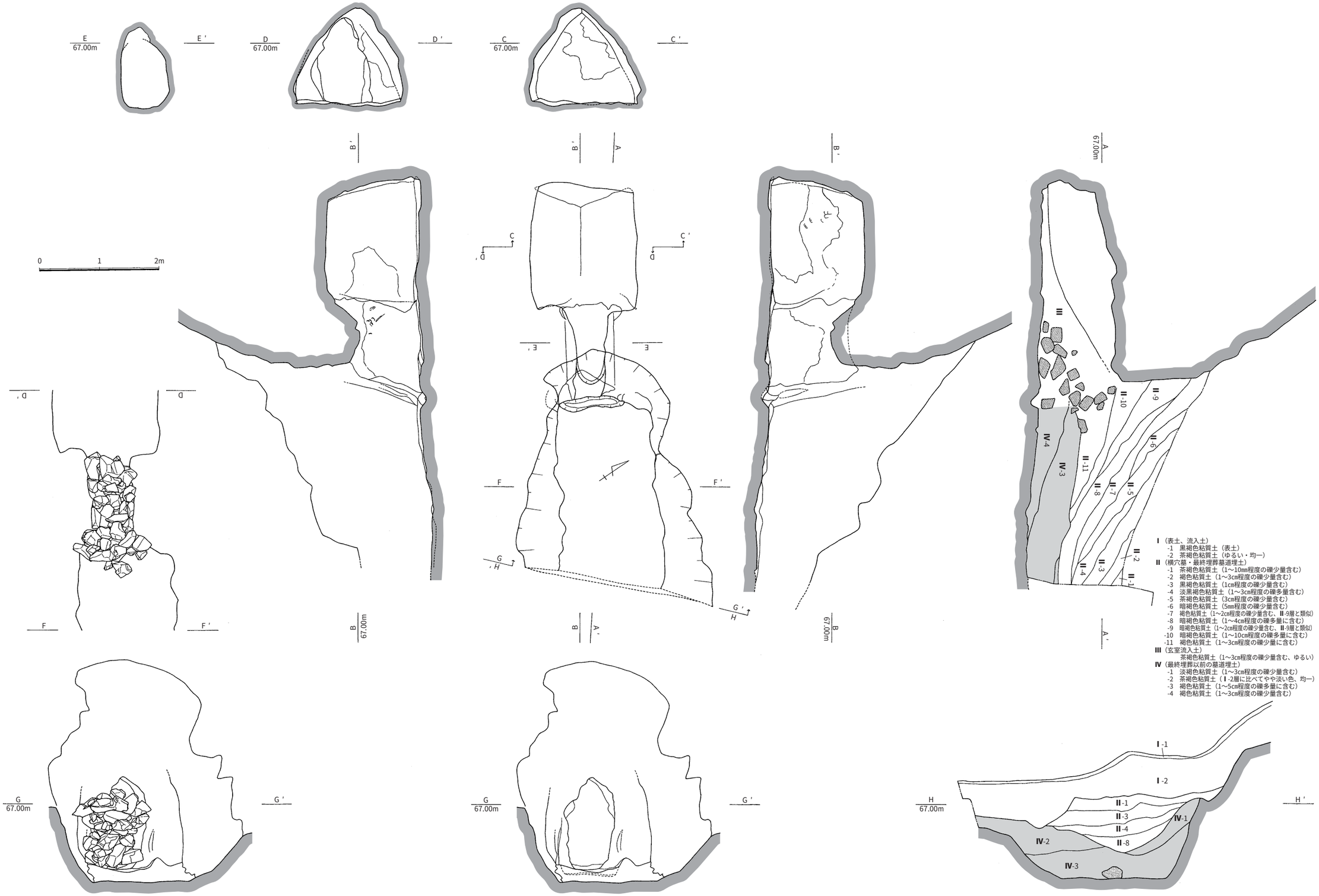
閉塞部の上部は崩落により欠損しているが、正面観は長方形を呈すると考えられる。前面には幅約10～20㎝・深さ５～10㎝程度の浅い刳り込みが認められる。床面には長さ20㎝・幅120㎝・深さ10㎝程の浅い溝が掘られている。

閉塞石は人頭大の地山角礫及び川原石で、閉塞部から玄室に到るまで玄門の床面をすべて覆うように積み上げられている。閉塞石は同時期に積み上げられたものではなく、Ⅳ-3層より上部（閉塞部で床面より高さ約70㎝以上）と下部の大きく２つに分けることができる。上部のものは最終追葬時に閉塞部付近のみ積み上げられたもので、立面図で観察すると幅約1.3mと下部の閉塞石よりも幅広く積み上げられている様子が伺えた。Ⅳ-3層より下部のものは最終追葬時以前に積み上げられたもので、最終追葬時に玄室に侵入した際、閉塞石上部のみを取り外し進入したため取り残された閉塞石である。

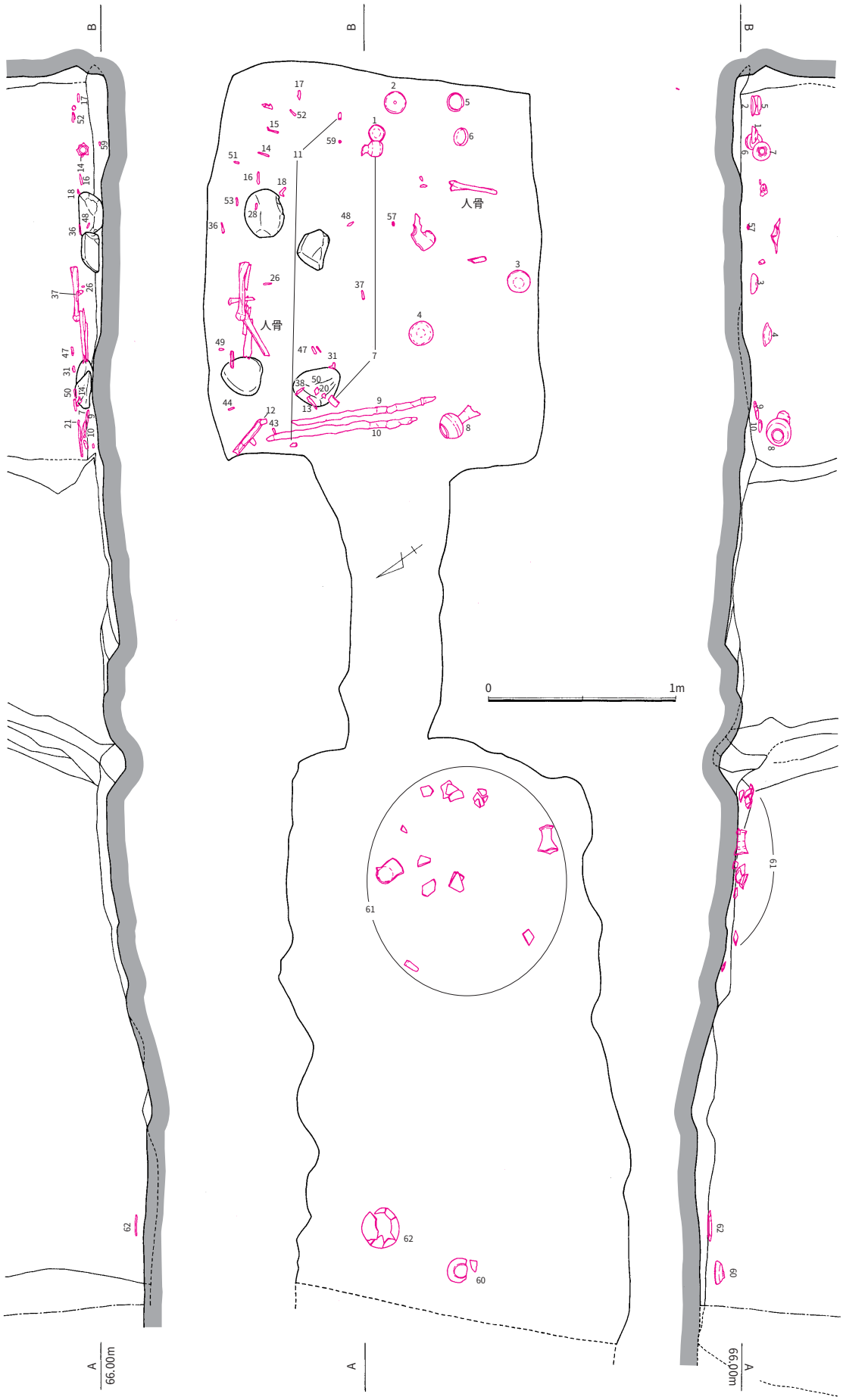
玄門は長さ1.6m、幅は墓道側0.4m、玄室側0.7mと奥に向かって広がる形である。断面は隅丸長方形を呈し、高さは天井が崩落しており正確な値は不明であるが約1.1mと推定される。左側壁面にわずかながら工具痕が認められ、いずれも左上方から右下方に向けて幅6㎝ほど平刃痕が観察された。

玄　室（第104図）

主軸をN55°Wにとり、幅が玄門側1.8m・奥壁側1.6m、奥行1.9～2.0mと奥が狭い台形に近い縦



第104図　**Ⅲ**区１号横穴墓遺構実測図（Ｓ＝１／60）



第105図　Ⅲ区１号横穴墓人骨・遺物出土状況（Ｓ＝１／30）

長の長方形を呈する。床面から天井部までの高さ約1.6mを測る。四壁が内傾しながら立ち上がり、天井部の軒を加工しない妻入テント形である。右壁にわずかながら工具痕が認められ、いずれも左上方から右下方へ向けて幅6～８㎝程度の痕跡が観察される。

玄室左壁に沿って長さ20～25㎝・幅15～20㎝程度の川原石４個が出土している。平面形がややいびつな長方形を呈するよう長軸52・64㎝・短軸12・17㎝離れて置かれ、その周辺から木質が付着している鉄釘が出土している。このような出土状況から、この川原石は棺台でその上に木棺が置かれていたと推定された。

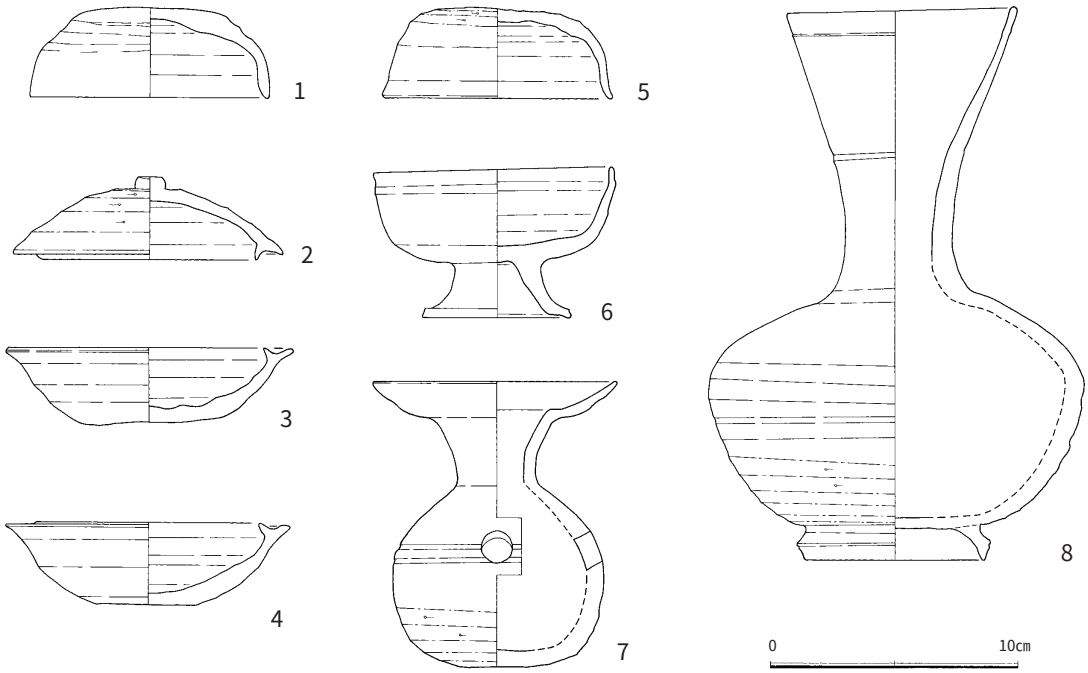
人骨・遺物出土状況（第105図）

墓道から須恵器長頸瓶・坏身、土師器皿がそれぞれ１点出土した。いずれも、最終埋葬以前の埋土層（Ⅳ層群）中から出土している。このうち、須恵器長頸瓶は、閉塞部付近で破砕されたものか１m四方に細片となって出土している。

玄室内からは、人骨、須恵器杯蓋２点・杯身２点・壺蓋１点・高杯１点・碗１点、長頸瓶１点、大刀２振、鉄釘43点、切子玉２点、耳環１点が出土した。このうち、鉄釘22点、切子玉１点は、玄室内埋土のフルイ土中より検出した。

人骨は左壁沿いのやや前壁に近い場所と右壁側のほぼ中央から出土している。いずれの人骨も埋葬時の状態から動かされているか、もしくは骨化した状態で埋葬されたと考えられ、床面からやや浮いた状態から出土している。左壁沿いの人骨は後述する鉄釘と同じ出土レベルから出土している。

須恵器はいずれも玄室右壁側からやや浮いた状態で出土している。大刀２振は玄門前に横穴墓の主軸に直交する形に並べて置かれていた。この大刀に付属すると考えられる鏃は、大刀周辺とともに奥壁側から出土している。この大刀と後述する切子玉・耳環は、その他の出土遺物と比べ床面に近いレベルから出土している。鉄釘はいずれも棺台と考えられる川原石周辺から、高さはその川原石の上部レベル付近から出土している。切子玉は玄室のほぼ中央から、耳環はやや左壁に寄った位置から、いずれも床面に近いレベルから出土している。



第106図　Ⅲ区１号横穴墓玄室出土遺物実測図（１）（Ｓ＝１／３）

出土遺物（第106～111図）

玄室内からは、須恵器、大刀、鉄釘、切子玉、耳環が出土している。

第106図１～８は須恵器である。１・２は蓋杯蓋である。１はかえりのない蓋である。天井部に回転ヘラ削りは見られない。口径9.6㎝・器高3.6㎝を測る。２は蓋のつまみは擬宝珠状のつぶれた様な形状で、口縁部にかえりを持つ蓋である。天井部は回転ヘラ削りを施し、つまみは径1.2㎝・高さ0.5㎝を測る。かえりは薄く、内径して取り付いており、外縁から出ている。口径8.5㎝・最大径10.8㎝・器高3.3㎝を測る。

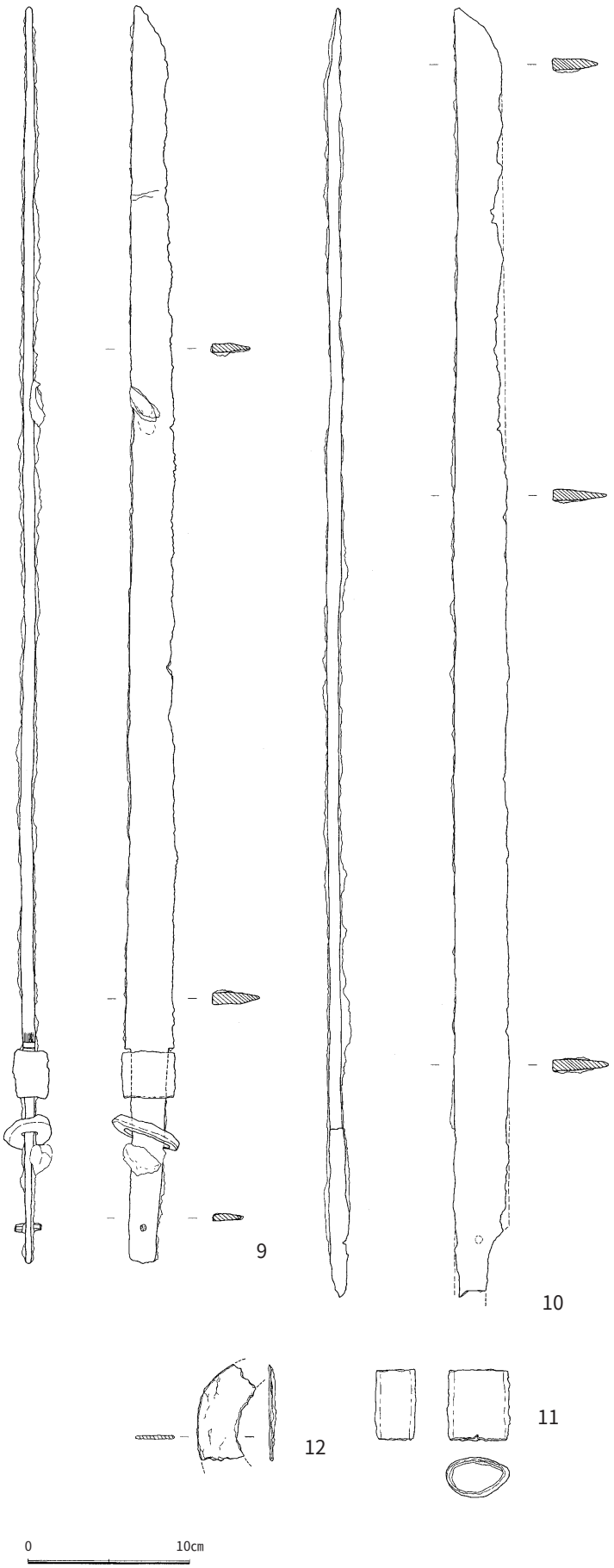
３・４はかえりのある杯身である。いずれも底部に回転ヘラ削りは見られない。かえりは概して短く、４のかえりが外縁からわずかにのぞく程度である。３は口径9.2㎝・最大径11.5㎝・器高3.0㎝、４は口径9.0㎝・最大径11.4㎝・器高3.3㎝を測る。

５は口縁短部がわずかに外反することから壺の蓋と考えられる。天井部は回転ヘラ削りが施され、口径9.3㎝、器高3.6㎝を測る。

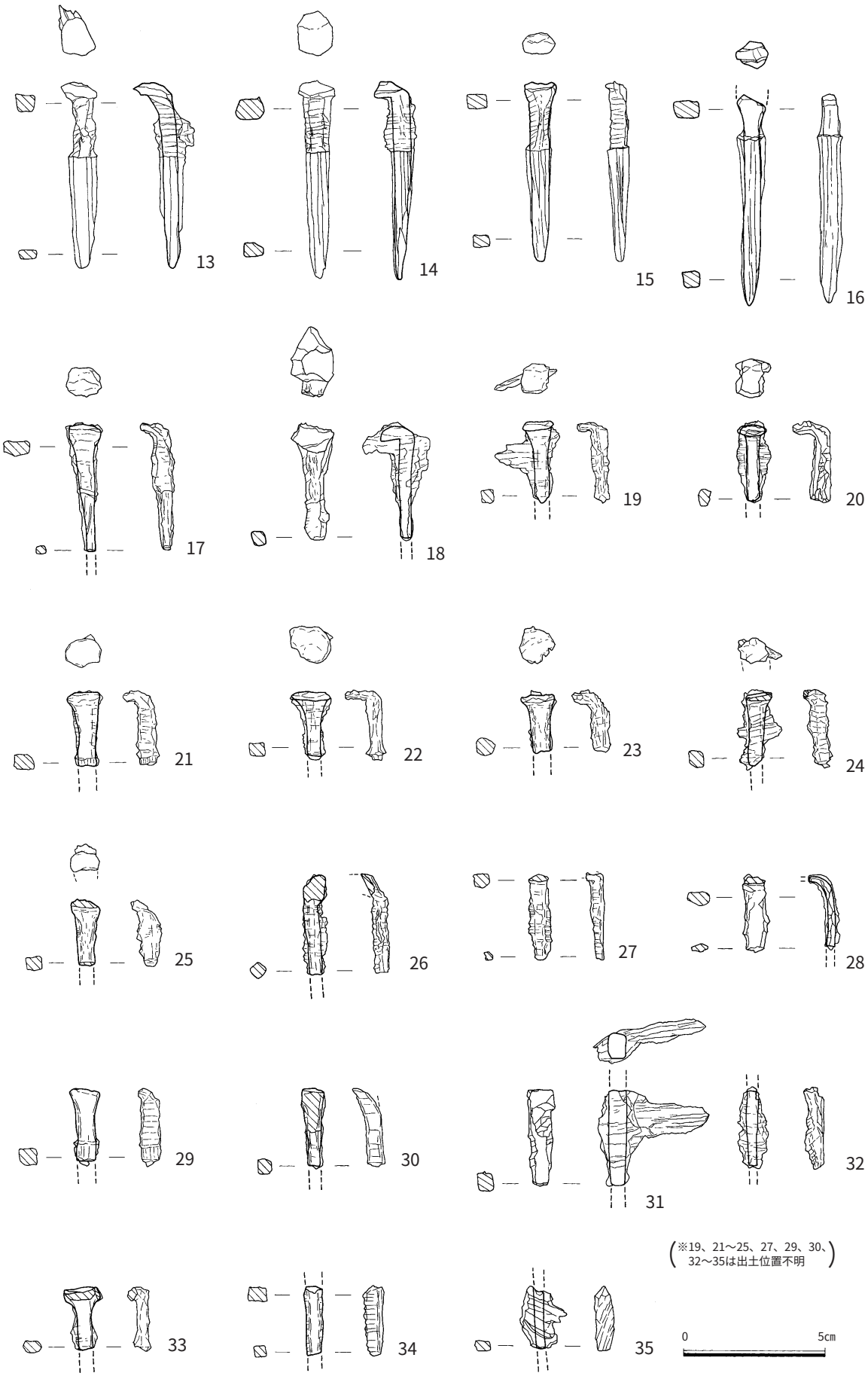
６は高杯で、口径9.7㎝・脚径6.0㎝・器高5.9㎝を測る。脚は低く、透かしは見られない。

７は𩰫で、口縁部と頚部の境の沈線は認められない。胴部の孔の周辺には２条の沈線が施され、平底の底部は回転ヘラ削りが施されている。口径9.8㎝・器高11.4㎝を測る。

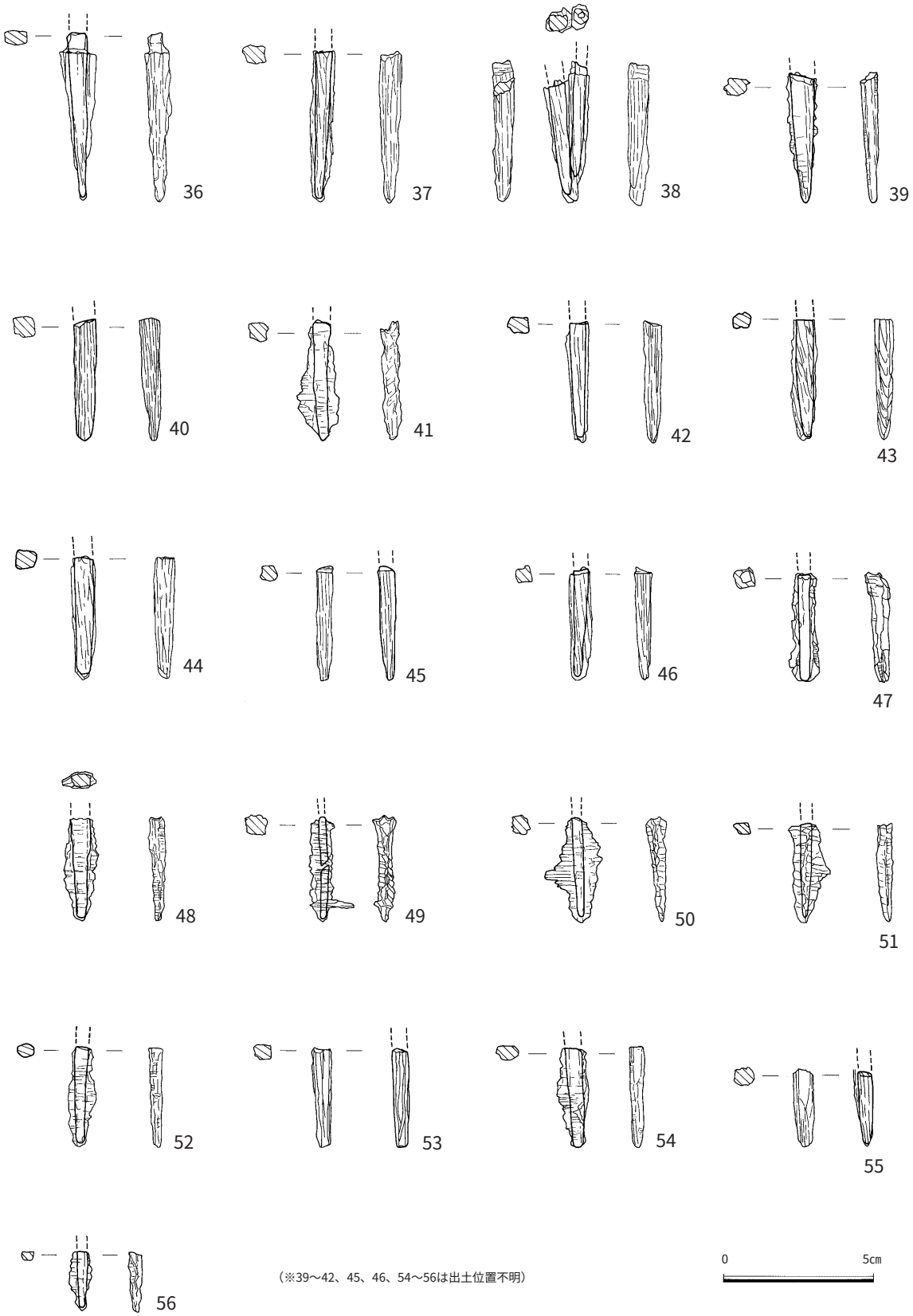
８は長頸壺である。肩の張ったやや扁平な胴部の底に高台がつく。頸部はやや内湾しながら直線的に開



第107図　Ⅲ区１号横穴墓玄室出土遺物実測図（２）（Ｓ＝１／４）



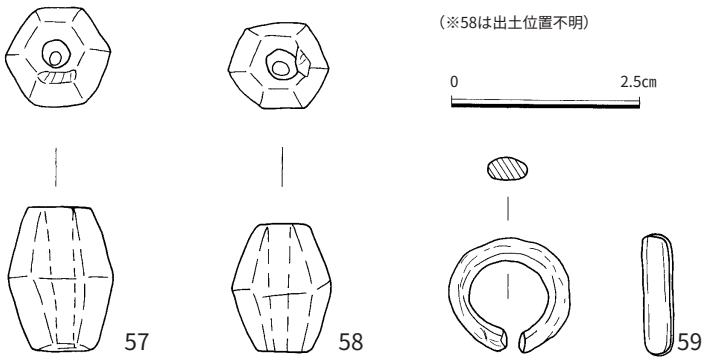
第108図　Ⅲ区１号横穴墓玄室出土遺物実測図（３）（Ｓ＝１／２）



第109図　Ⅲ区１号横穴墓玄室出土遺物実測図（４）（Ｓ＝１／２）

き、中程に１条の沈線がめぐっている。口径9.3cm・頸部最小径4.3cm・頸部長11.2cm・胴部最大径15.0cm・底径7.2cm・器高22.0cmを測る。

これらの須恵器の時期は、蓋杯蓋１・２が大谷編年出雲６期、碗７が出雲６～８期、長頸壺８は



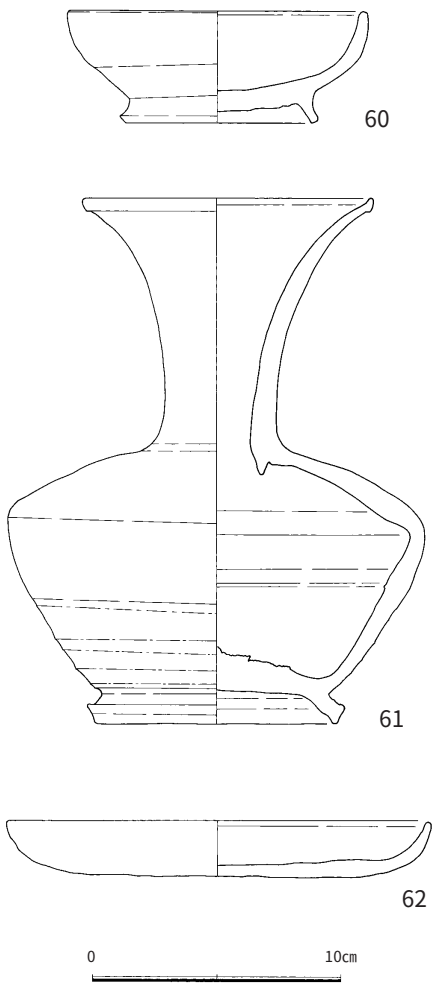
第110図　Ⅲ区１号横穴墓玄室出土遺物実測図（５）（Ｓ＝１／１）

出雲６～７期と考えられる。

第107図９～11は大刀である。９は鍔付の大刀で、茎部を含む全長77.2cm・切先の先端から関までの刀身長64.0cm・残存状態の良い関付近の元幅3.0cm・刀身の背の幅は0.7cmを測る。関の近くの背にわずかながら木目痕が認められることから、木製の鞘に納められていたと考えられる。関の作りは刃・背両側につく両関で、関付近には長さ2.8cm・直径3.2cm・短径2.1cmの鉄製の鎺が装着されている。鎺付近には、平面形が楕円形で、柄よりわずかにはみ出す直径4.3cm短径2.9cmの鉄製鍔が装着されている。茎尻の近くに目釘穴が１箇所見られ、その穴には長さ1.1cmの目釘が残存している。10は茎部先端が欠損している大刀で、残存長79.2cm・刀身長74.7cm・元幅3.3cm・刀身の背の幅0.7cmを測る。関の作りは刃側には明瞭な段が認められるが、背側は茎部先端に向かってわずかに幅を狭める形態か、段が無い形態かは判然としない。関に近い胴部に１本の目釘穴が認められる。11は鉄製の鎺で10の大刀に付属するものと考えられる。断面は長さ4.2cm・幅3.8cm・厚さ2.4cmを図る。12も10の大刀に付属すると考えられる鍔である。厚さ2mm程の薄い鉄製で、約1/３残存している。平面形が楕円形を呈すると考えられ、透かし孔等は認められない。

第108図13～35・第109図36～56は、組合木棺の板材接合に用いられたと考えられる鉄釘で43点出土している。内22点は現位置で検出できず、玄室内埋土をフルイ作業により出土した。鉄釘はすべて、断面長方形または正方形の鉄棒の一端を打ち伸ばしてＬ字状に折り曲げた頭部を持つ形態である。完形品（13・14）で全長6.5・7.0cm、頭部先端を欠損しているが残存長7.4cmを測る個体（16）もある。

ほとんどの資料で表面に木質の付着が確認された。木質の付着状況は釘の全長に対して直交する方向に木目が付着するもの（A）、平行方向に木目が付着するもの（B）、胴部の上半に直行方向の木目、胴部下半に平行方向の木目が付着するもの（C）があり、このうち（A）タイプはさらに、頭部と胴部の直交方向の木目がすべて同じ向きであるもの（Aa）、頭部と胴部で直交方向の木目が上から見ると交差するもの（Ab）に分けることができる。その内訳は、鉄釘の頭部及び頭部付近が遺存していると思われる固体で（Aa）11点・（Ａb）１点・（B）１点・（C）６点、胴先端部が遺存している固体で（Aa）９点・（Ａb）１点・（B）９点・（C）３点であった。鉄釘の頭部が板の表面まで打



第111図　Ⅲ区１号横穴墓墓道出土遺物実測図（Ｓ＝１／３）

ち込まれていると仮定すると、木質の付着状況（Ab）・（C）タイプから棺材の厚さを2.4～2.6cmと推定することができる。

第110図57・58は水晶製の切子玉で、57は長さ1.9cm・幅1.4cm、58は長さ1.7cm・幅1.3cmを測る。このうち58は現位置で検出できず、玄室内埋土のフルイ作業により出土した。いずれも断面は六角形を呈し、穿孔は一方向から行っている。

Ⅲ区1号横穴墓出土鉄釘計測・観察表

図番号	全長[残存長](cm)	断面(cm)	木目類型	板材厚(cm)	出土位置	備考
108-13	6.5	0.7×0.6	C	2.6	前壁・玄室中央側棺台付近	完形品
108-14	7	0.6	C	2.5	奥壁・左壁側棺台付近	完形品
108-15	[6.3]	0.7×0.6	C	2.4	奥壁・左壁側棺台付近	頭部先端を欠損、ほぼ完形品
108-16	「7.4]	0.8×0.6	B		奥壁・左壁側棺台付近	頭部先端を欠損
108-17	[4.5]	0.7	C	2.4	奥壁付近	胴端部欠損
108-18	[4.1]	0.5	Ab	2.6	奥壁・左壁側棺台付近	胴部下半欠損
108-19	[2.8]	0.5×0.5	Aa		不明	胴部下半欠損
108-20	[2.6]	0.5	Aa		前壁・玄室中央側棺台付近	胴部下半欠損
108-21	[2.6]	0.6×0.5	C	2.4	不明	胴部下半欠損
108-22	[2.3]	0.5×0.5	Aa		不明	胴部下半欠損
108-23	[1.8]	0.7×0.6	Aa		不明	胴部下半欠損
108-24	[2.6]	0.6×0.5	Aa		不明	頭端部と胴部下半欠損
108-25	[2.3]	0.5×0.5	Aa		不明	頭端部と胴部下半欠損
108-26	[3.5]	0.5×0.5	Aa		奥壁・左壁側棺台付近	頭端部と胴部下半欠損
108-27	[3.0]	0.5×0.5	Aa		不明	頭端部と胴部下半欠損
108-28	[2.7]	0.7×0.5	Aa？		奥壁・左壁側棺台付近	頭端部と胴部下半欠損
108-29	[2.5]	0.6×0.6	C		不明	頭部と胴部下半欠損
108-30	[2.7]	0.5×0.5	Aa		不明	頭部と胴部下半欠損
108-31	[3.3]	0.9×0.6	Aa		前壁・玄室中央側棺台付近	頭部と胴部下半欠損
108-32	[2.7]	0.4	Aa		不明	頭部と胴部下半欠損
108-33	[2.2]	0.6×0.4	Aa		不明	頭端部と胴部下半欠損
108-34	[2.4]	0.7×0.5	Aa		不明	頭部と胴部下半欠損
108-35	[2.1]	0.5×0.3	Aa		不明	頭部と胴部下半欠損

図番号	全長[残存長](cm)	断面(cm)	木目類型	板材厚(cm)	出土位置	備考
109-36	[5.5]	0.7×0.4	B		奥壁・左壁側棺台付近	頭部欠損
109-37	[4.9]	0.8×0.6	B		4個の棺台の中央付近	頭部欠損
109-38a	[3.8]	0.6×0.5	C		前壁・左壁側棺台付近	頭部と胴部上半欠損
109-38b	[3.7]	0.6×0.5	B			頭部と胴部上半欠損
109-39	[4.2]	0.8×0.6	Aa		不明	頭部と胴部上半欠損
109-40	[4.1]	0.7×0.6	B		不明	頭部と胴部上半欠損
109-41	[3.9]	0.6×0.6	Aa		不明	頭部と胴部上半欠損
109-42	[3.8]	0.7×0.6	B		不明	頭部と胴部上半欠損
109-43	[3.9]	0.6×0.5	B		左前壁付近	頭部と胴部上半欠損
109-44	[3.9]	0.7×0.6	B		前壁・左壁側棺台付近	頭部と胴部上半欠損
109-45	[3.8]	0.5×0.5	C		不明	頭部と胴部上半欠損
109-46	[3.5]	0.5×0.5	C		不明	頭部と胴部上半欠損
109-47	[3.5]	0.7×0.7	Ab		前壁・玄室中央側棺台付近	頭部と胴部上半欠損
109-48	[3.3]	0.6×0.6	Aa		奥壁・玄室中央側棺台付近	頭部と胴部上半欠損
109-49	[3.3]	0.7×0.7	Aa		前壁・左壁側棺台付近	頭部と胴部上半欠損
109-50	[3.3]	0.4	Aa		前壁・玄室中央側棺台付近	頭部と胴部上半欠損
109-51	[3.2]	0.5×0.4	Aa		奥壁・左壁側棺台付近	頭部と胴部上半欠損
109-52	[3.2]	0.6×0.4	Aa		奥壁側	頭部と胴部上半欠損
109-53	[3.3]	0.6×0.5	B		奥壁・左壁側棺台付近	頭部と胴部上半欠損
109-54	[3.3]	0.8×0.4	Aa		不明	頭部と胴部上半欠損
109-55	[2.6]	0.7×0.6	B		不明	頭部と胴部上半欠損
109-56	[1.9]	0.3×0.3	Aa		不明	頭部と胴部上半欠損

＊　木目類型　Aa　釘の全長に対して、直交方向の木目が付着するもののうち、胴部上半と胴部下半の直交方向の木目がすべて同じ向きであるもの
Ab　釘の全長に対して、直交方向の木目が付着するもののうち、胴部上半と胴部下半の直交方向の木目が上から見ると交差するもの
B　釘の全長に対して、平行方向に木目が付着するもの
C　釘の全長に対して、胴部上半に直交方向の木目、胴部下半に平行方向の木目が付着するもの

第110図59は耳環で、銅芯鍍金製である。外側の大部分は鍍金が剥がれ、緑青が吹き出している。直径1.6㎝・短径1.5㎝、断面は楕円形で直径0.5㎝・短径0.3㎝を測る。

墓道からは須恵器２点、土師器１点が出土している。

60・61は須恵器である。60は高台がつく杯身である。稜のないボール状の杯部に、外側に向けて開く高台がつく。体部は口径12.0㎝・底径7.4㎝・器高4.5㎝を測る。61は長頸壺である。頸部は外反しながら開き、肩の張ったやや扁平な胴部の底に高台がつく。口径11.5㎝・頸部最小径4.5㎝・頸部長9.8㎝・胴部最大径16.6㎝・底径9.5㎝・器高21.1㎝を測る。これらの須恵器の時期は、杯身が大谷編年出雲6ｄ～７期、長頸壺が出雲７～８期と考えられる。

62は土師器の皿である。表面の風化が著しく、調整等は不明である。口径16.8㎝・器高2.2㎝を測る。

時　期

出土須恵器の様相から、大谷編年出雲６期に築造され、埋葬終了は出雲７～８期頃と推定される。

［Ⅲ区２号横穴墓］

位置・遺構（第103図・第112図）

Ⅲ区２号横穴墓は、標高約65mの調査区中央からやや南西側によった位置に造られている。未完成の横穴墓で、遺構は調査区内で1.6mを測り、調査区外に続いている。斜面を荒く階段状に掘った段階で、標高66m付近に固い岩脈（第103図のアミをかけた部分）にあたり掘削を中止している。この固い岩脈はⅢ区２号横穴墓の南西方向に約9.5m続いていることが確認でき、この間の横穴墓の掘削は認められなかった。

土層堆積状況（第112図）

遺構内の土層は比較的単純に堆積している。流入土もしくは埋土の明確な判断はできなかったが、床面に近いⅠ－4層が小礫を多量に含んだ層であることから埋土の可能性が考えられる。

出土遺物

出土遺物は認められなかった。

時　期

遺物が出土していないことから築造時期は不明であるが、Ⅲ区１号横穴墓や３号・４号横穴墓と築造レベルがほぼ同じであることから、上記横穴墓と同様な時期と推定される。

［Ⅲ区３号・４号横穴墓］

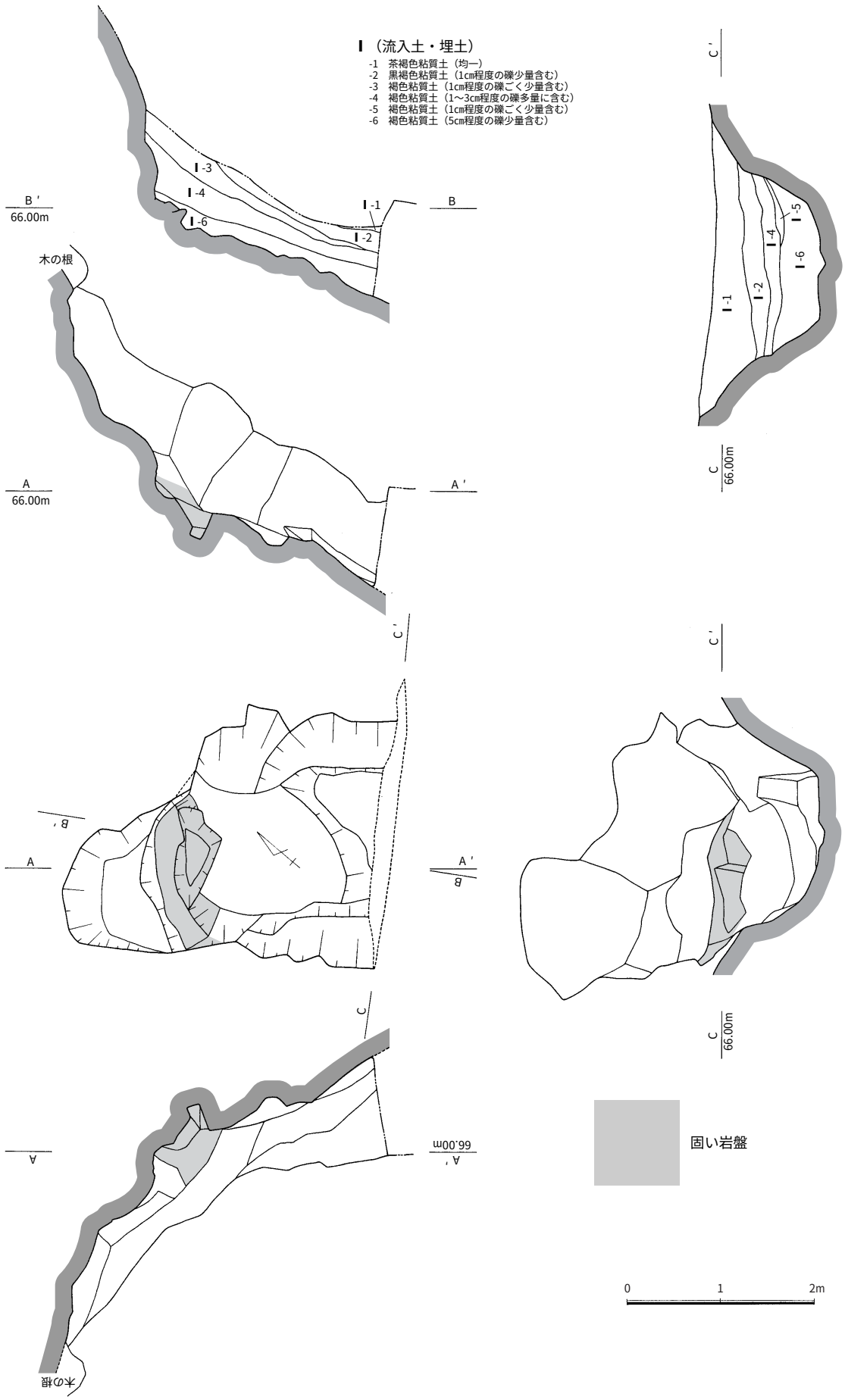
位　置（第113・114図）

Ⅲ区３号・４号横穴墓は、標高約65.8mの調査区中央のやや北東側によった位置に隣接して造られており、墓道を共有している。

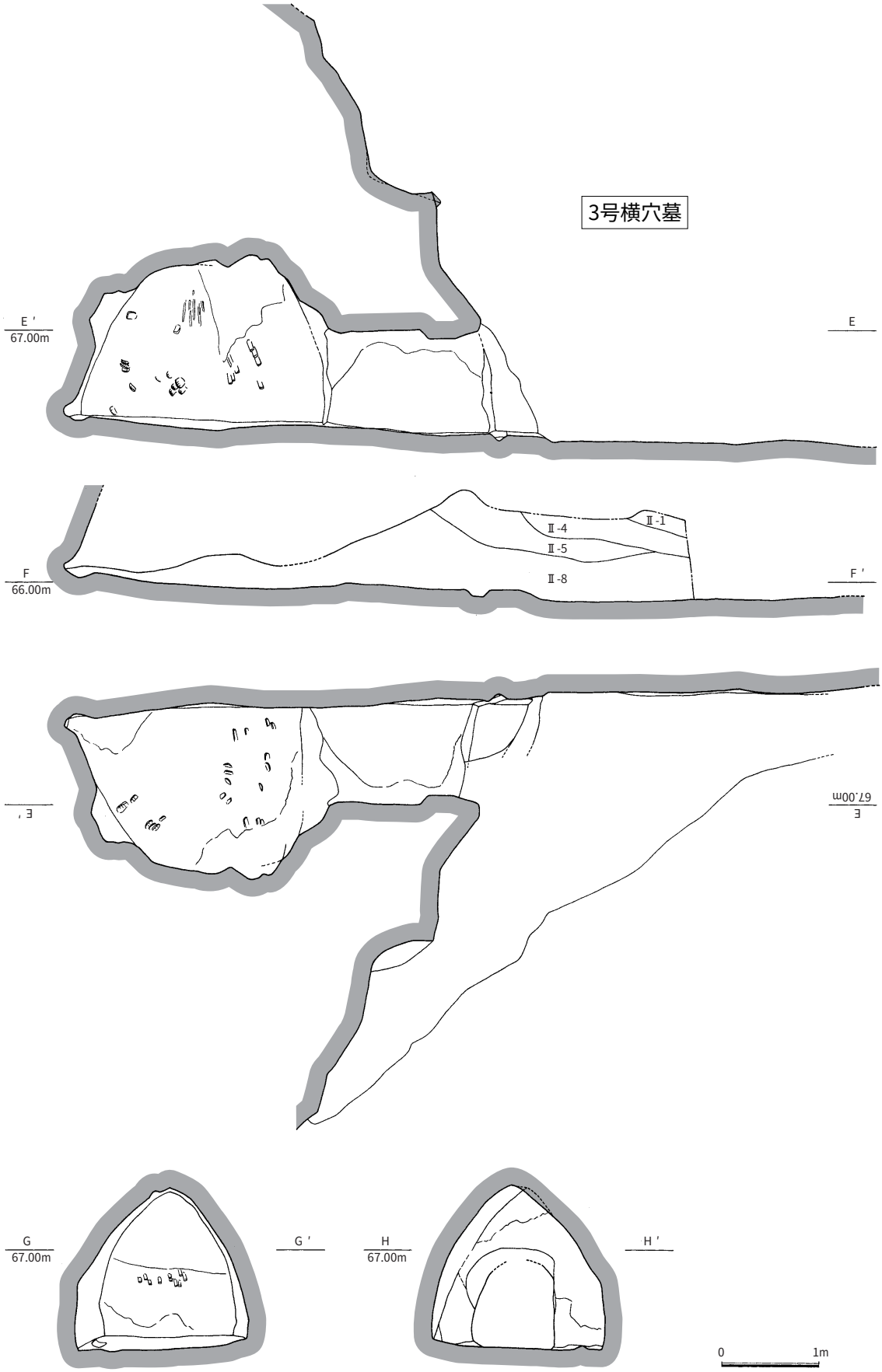
墓　道（第114・115図）

平面形は調査区内では長方形を呈し、幅約3.4m・長さ3.1m以上で、南東側は調査区外に続いている。墓道最奥部に３号・４号横穴墓が約0.9m離れた位置に開口している。床面はほぼ水平に近いが、わずかながら前方に向かって傾斜している。

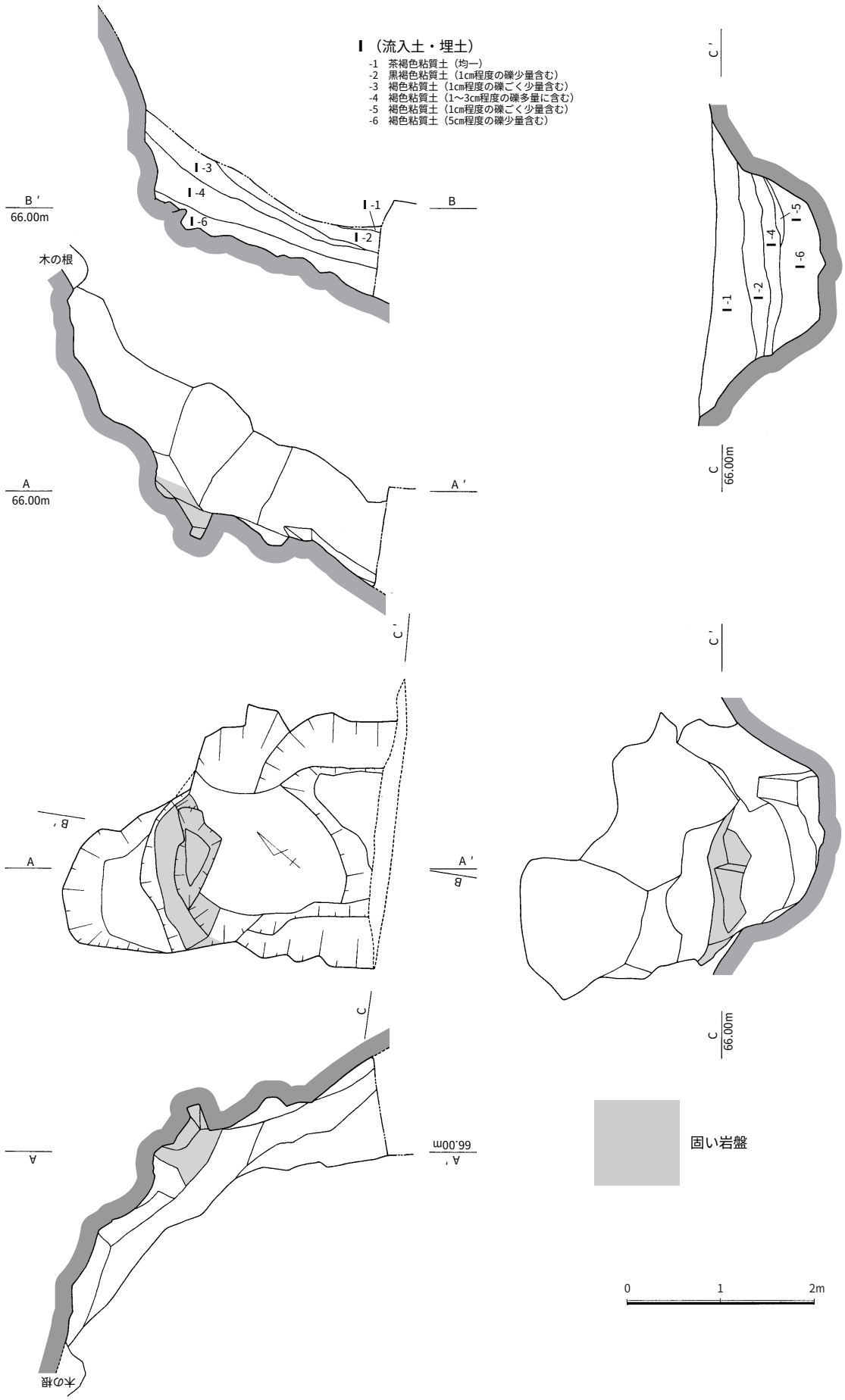
調査区内の床面から１間×２間（約2.2m×2.9m）の掘立柱建物跡を検出した。６穴の柱穴がほ



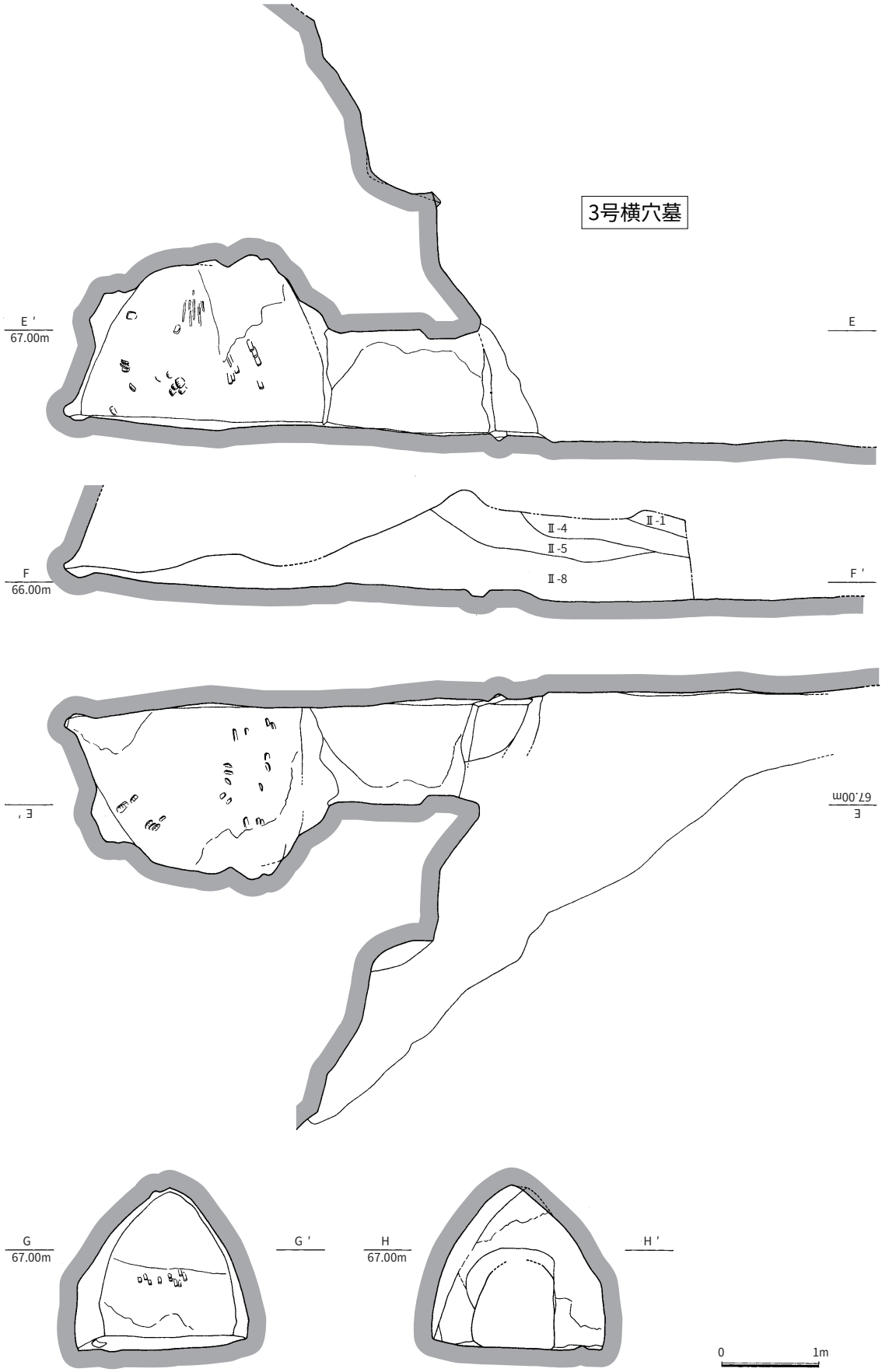
第112図　Ⅲ区２号横穴墓遺構実測図（Ｓ＝１／60）



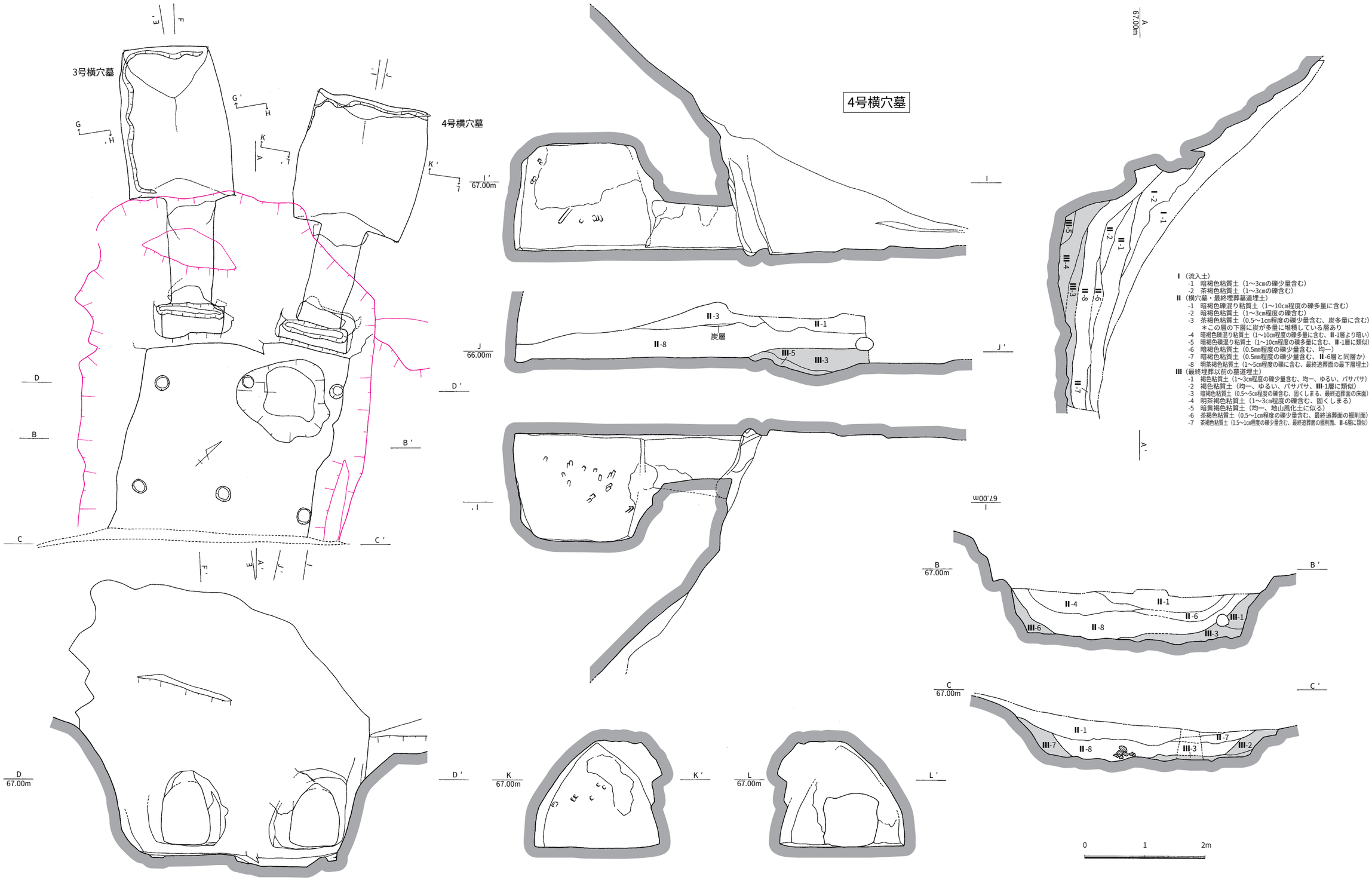
第113図　Ⅲ区３号・４号横穴墓遺構実測図（１）（Ｓ＝１／60）



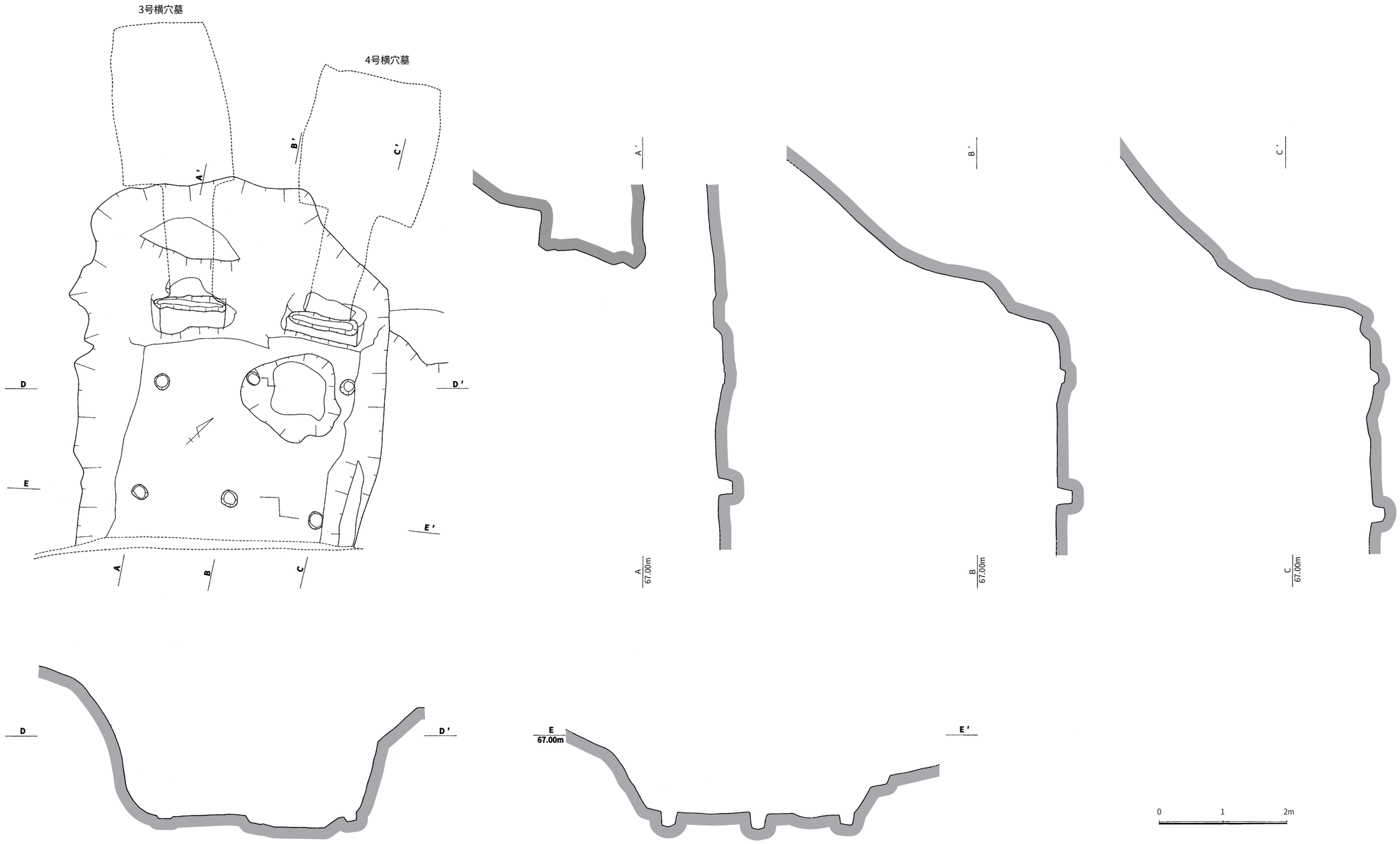
第112図　Ⅲ区２号横穴墓遺構実測図（Ｓ＝１／60）



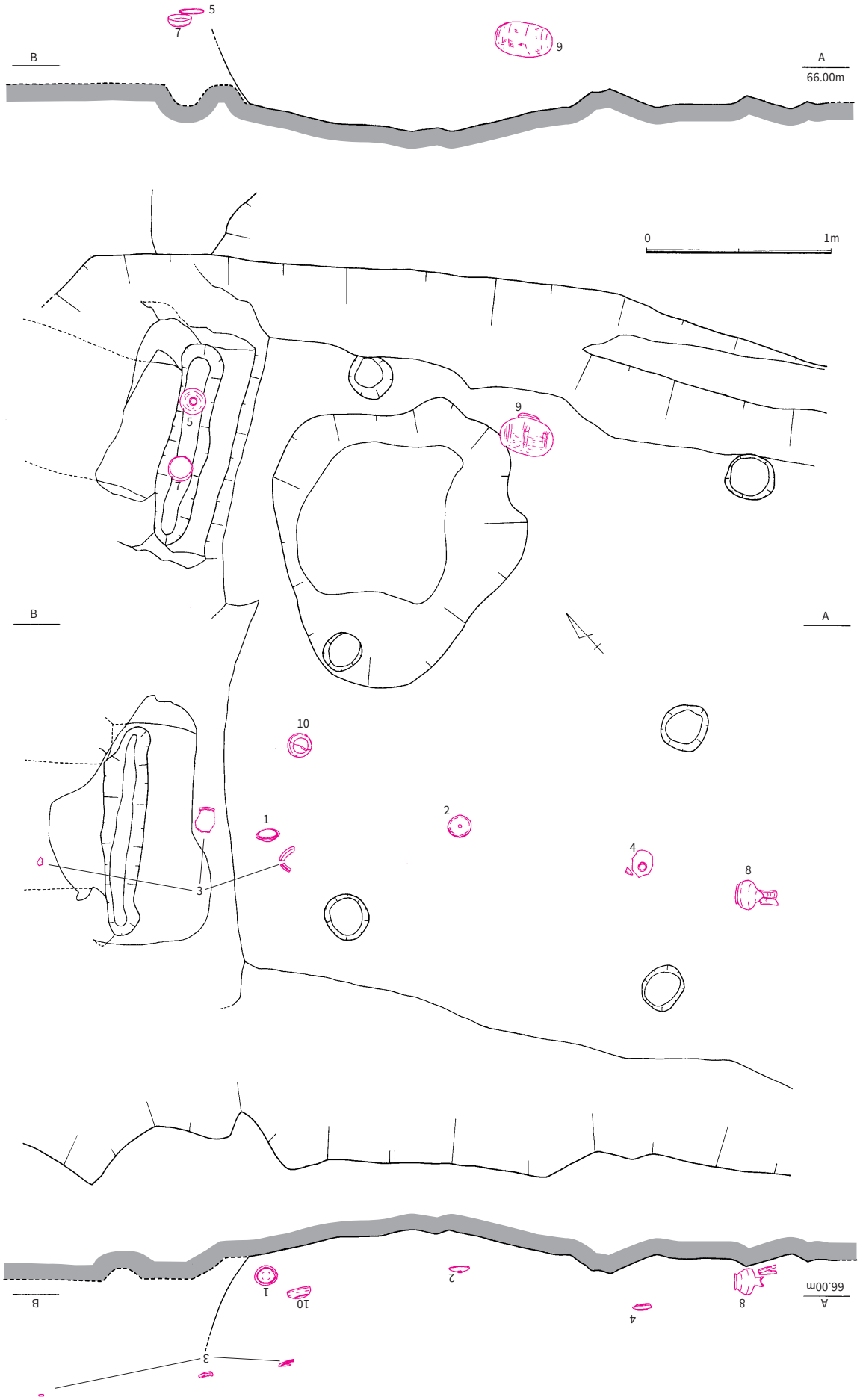
第113図　Ⅲ区３号・４号横穴墓遺構実測図（１）（Ｓ＝１／60）



第114図　Ⅲ区３号・４号横穴墓遺構実測図（２）（Ｓ＝１／60）



第115図　Ⅲ区３号・４号横穴墓　墓道内掘立柱建物跡実測図（Ｓ＝１／60）



第116図　**Ⅲ**区３号・４号横穴墓　墓道遺物出土状況（Ｓ＝１／30）

ぼ整然と並んでいるが、墓道の壁面の位置の関係か東隅に対応する柱穴はややずれた位置で検出している。柱間は、梁間は1.76m・2.10m、桁行はいずれも約1.4mを図る。柱穴の深さは、現状で桁行の閉塞部側は4～12cmと浅く、墓道先端側は20.0～20.6cmと深い。この掘立柱建物跡は、土層観察から最終埋葬時には使用されていない（土層堆積状況参照）。

３号横穴墓閉塞部の床面から高さ約2.8mの斜面には、幅約1.6m・奥行最大約0.6mの平坦面が確認される。また、４号横穴墓閉塞部付近の墓道右壁に隣接して、床面から高さ約2.0mの斜面に幅0.9m以上・最大幅0.8mの平坦面が確認されており、いずれの平坦面も墓道内の掘立柱建物に関係した施設（その平坦面に屋根材を渡している等）の可能性も考えられる。

土層堆積状況（第113・114図）

墓道は土砂により完全に埋まっていた。この土砂は大きく３群に分けることができる。Ⅰ層群は流入土、Ⅱ層群は横穴墓の最終追葬時における墓道埋土、Ⅲ層群は最終追葬以前の墓道埋土である。最終埋葬時の掘削は、３号横穴墓前の墓道は床面まで掘削されているのに対し、４号横穴墓前は掘立柱建物跡の柱穴を覆うように最終埋葬時以前の埋土が残されている。よって、墓道内の掘立柱建物は最終埋葬時には存在しなかったと思われる。土層観察から、最終埋葬時の墓道埋め戻し作業は３号横穴墓も４号横穴墓も同時に行なわれたと推定される。Ⅲ層群はいくつかの層に分類することができるが、最終追葬以前の追葬の回数は判然としなかった。

墓道遺物出土状況（第116図）

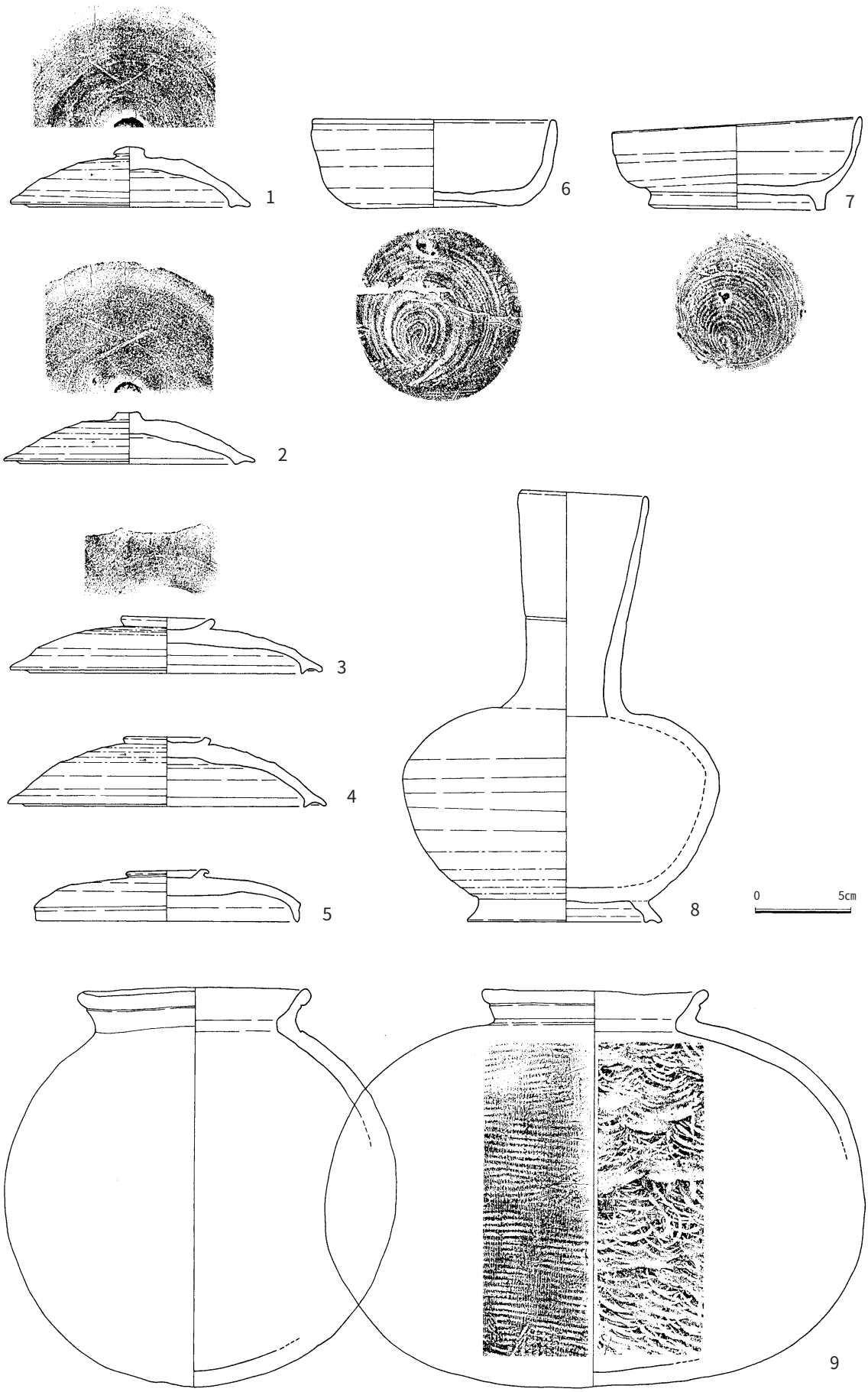
須恵器が９点出土しているが、いずれもⅡ層群（最終追葬埋土）中から出土している。蓋杯１組（第117図５・７）は、最終埋葬時に４号横穴墓の閉塞部に整然と並べて置かれており、最終閉塞時の何らかの祭祀に使われていたものと推定される。すなわち、これらの蓋杯は４号横穴墓の最終追葬の時期を現していると考えられる。横瓶（第117図９）も、最終埋葬時の掘削時の壁面沿って床面に置かれている状態で出土している。

墓道出土遺物（第117図）

墓道から須恵器９点・丹塗土師器１点（図示していない）が出土している。

１～５は杯蓋である。１・２はややつぶれた形状をした擬宝珠状のつまみをもち、口縁部にかえりを持っている。天井部は回転ヘラ削りを施し、いずれもつまみに近い場所に「×」状のヘラ記号が見られる。かえりは短く、外縁からわずかにのぞく程度である。１はつまみ径1.6cm・つまみ高0.5cm・口径10.6cm・最大径12.6cm・器高3.2cm、２はつまみ径1.7cm・つまみ高0.5cm・口径11.3cm・最大径13.2cm・器高2.7cmを図る。３・４は輪状つまみを持ち、口縁部にかえりを持っている。天井部には回転ヘラ削りを施し、３には外面のつまみに近い場所に「×」状のヘラ記号が見られる。３はつまみ径5.0cm・つまみ高0.5cm・口径14.2cm・最大径16.4cm・器高2.9cm、４はつまみ径4.6cm・つまみ高0.4cm・口径14.6cm・最大径16.7cm・器高3.6cmを測る。５は輪状つまみを持ち、かえりを持たず口縁部が下方につまみ出されたものである。天井部に回転ヘラ削りは見られず、すべて回転ナデ調整が施されている。つまみ径4.3cm・つまみ高0.3cm・口径13.7cm・最大径13.9cm・器高2.6cmを測る。

６・７は杯身である。６は高台を持たず、底部に回転糸切り痕が残る。口縁部は底部からやや内湾しながら立ち上がり、底部外面以外は回転ナデ調整である。口径12.8cm・器高4.6cmを図る。７は高台を持ち、底部に回転糸切り痕が残る。口縁部は内湾しながら立ち上がり、底部外面以外は回転ナデ調整である。口径13.0cm・器高4.1～4.9cmを図る。

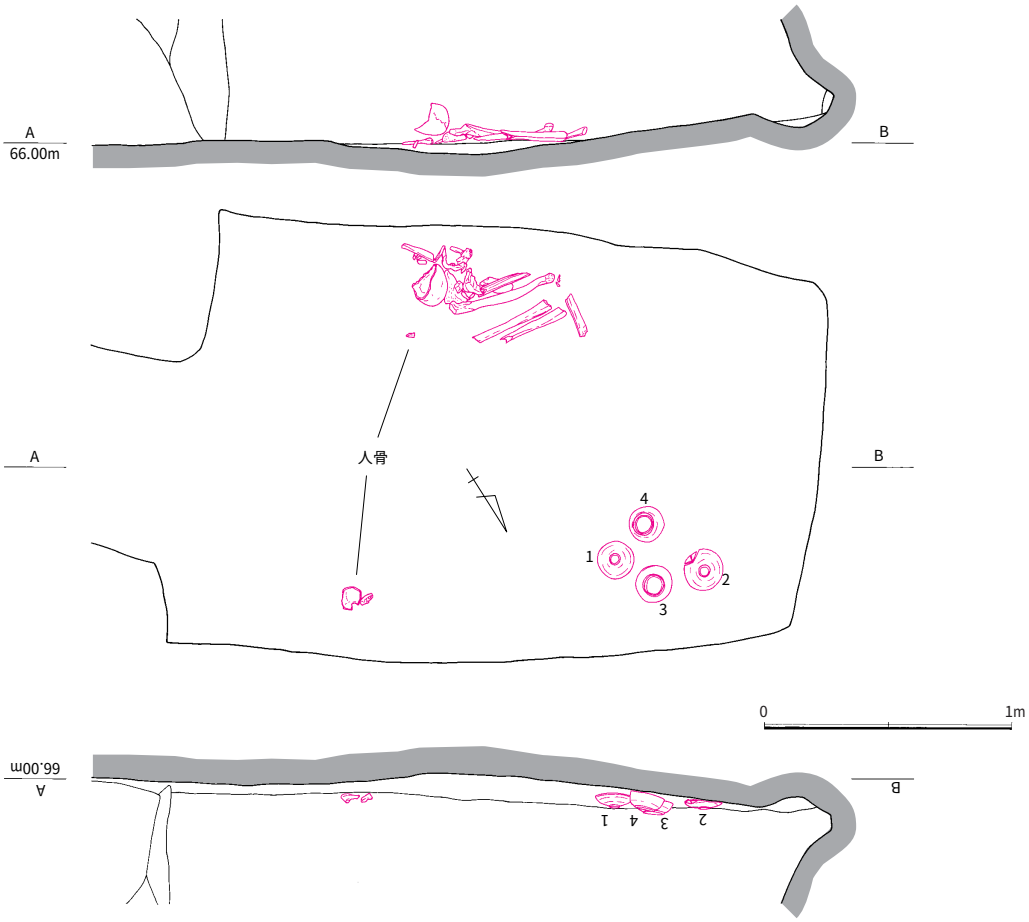


第117図　Ⅲ区３号・４号横穴墓　墓道出土遺物実測図（Ｓ＝１／３）

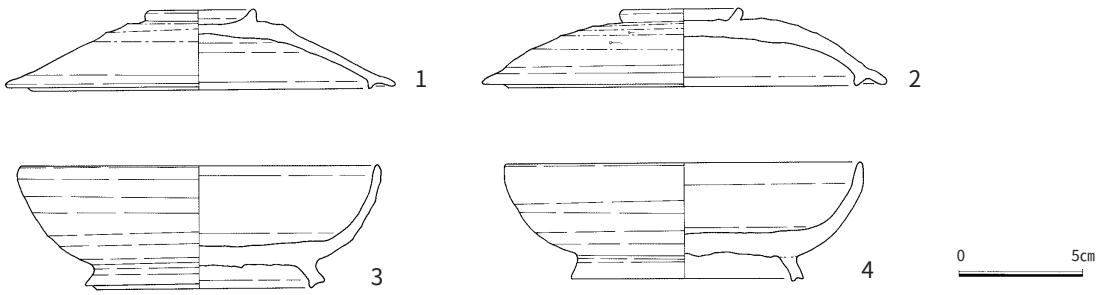
８は底部に高台が付く長頸瓶である。胴部の最大径はやや上方にあり、底部付近は回転ヘラ削り調整が施されている。口縁部はあまり開かず直線的に伸び、中程に１条の沈線が巡っている。口径6.5cm・口縁部長11.4cm・胴部最大径16.6cm・底径10.2cm・器高22.4cmを測る。

９は横瓶である。口縁は短く外反し、俵形の胴部外面は平行タタキののち一部カキメを施し、内面には同心円当て具痕が見られる。胴部側面の外面には同心円状に浅いカキ目が施され、内面の一端には成形時に粘土で蓋をした痕跡が残っている。口径11.5cm・胴部径20.0～28.3cm・器高20.9cmを測る。

これらの須恵器の時期は、杯蓋１・２は大谷編年出雲６ｃ～６ｄ期、杯蓋３・４は大谷編年出雲６ｄ～７期、杯蓋５は大谷編年出雲７期、杯身６・７は大谷編年出雲８期、長頸瓶８は大谷編年出雲６ａ～７期と考えられる。



第118図　Ⅲ区３号横穴墓玄室人骨・遺物出土状況（Ｓ＝１／30）



第119図　Ⅲ区３号横穴墓玄室出土遺物実測図（Ｓ＝１／３）

３号横穴墓閉塞部・玄門（第113図）

閉塞部は床面が墓道より5㎝程度１段高くなるもので、上部は崩落により欠損しているが、正面観はやや丸みを帯びた台形状を呈すると考えられる。前面には幅1.0m・深さ0.5m程度と短い羨道といってもよい程度の深い刳り込みが認められる。玄門部に接して床面には、閉塞装置を受ける施設であると考えられる、長さ20㎝・幅110㎝・深さ6㎝程の浅い溝が掘られている。閉塞石等は認められなかった。

玄門は長さ1.74m、幅は墓道側0.66m、玄室側0.82mと奥に向かって広がる形である。高さは天井が崩落しており正確な値は不明であるが、約1.0m程度と推定される。

３号横穴墓玄室（第113図）

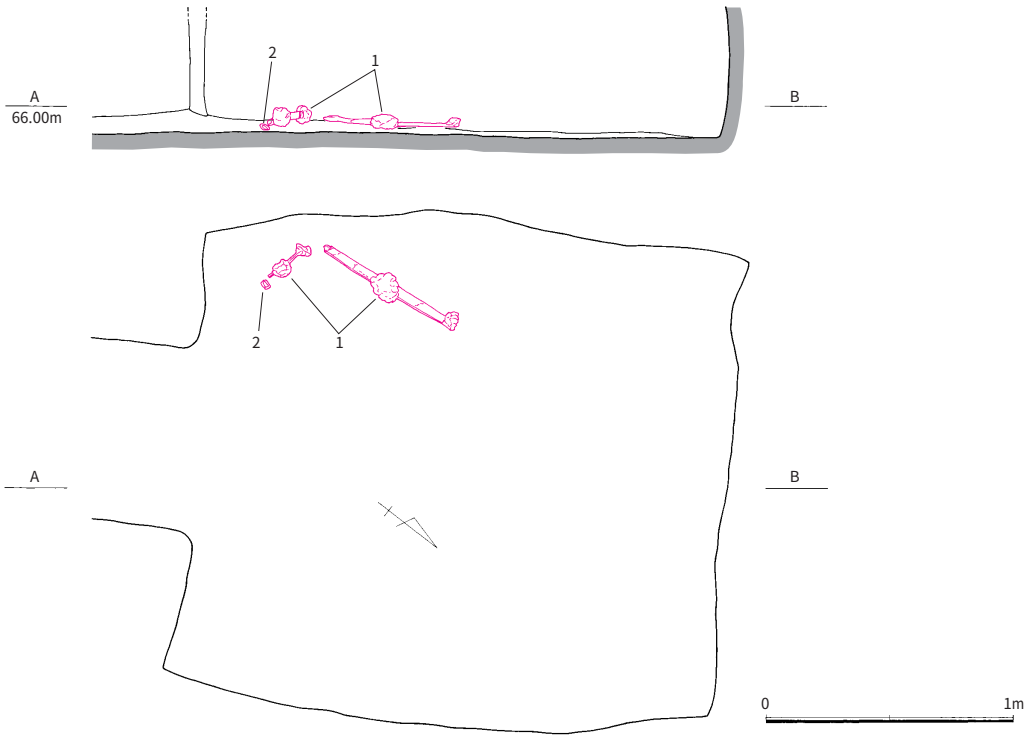
主軸をN52°Wにとり、奥行2.5m、幅が玄門側1.7m・奥壁側1.4mと奥が狭い台形に近い縦長の長方形を呈する。床面から天井部までの高さ約1.7mを測る。四壁が内傾しながら立ち上がり、天井部の軒を加工しない妻入テント形である。前壁を除く壁面には工具痕が認められる。奥壁の中程の高さに上方から下方に向けて幅3㎝程度工具痕が、左壁・右壁はいずれも主に壁面の境界に向けて上方から下方へ向けて幅5～12㎝程度の工具痕が観察される。また、右壁の上部には、壁面を平滑に仕上げる工具痕も認められた。

３号横穴墓玄室人骨・遺物出土状況（第118図）

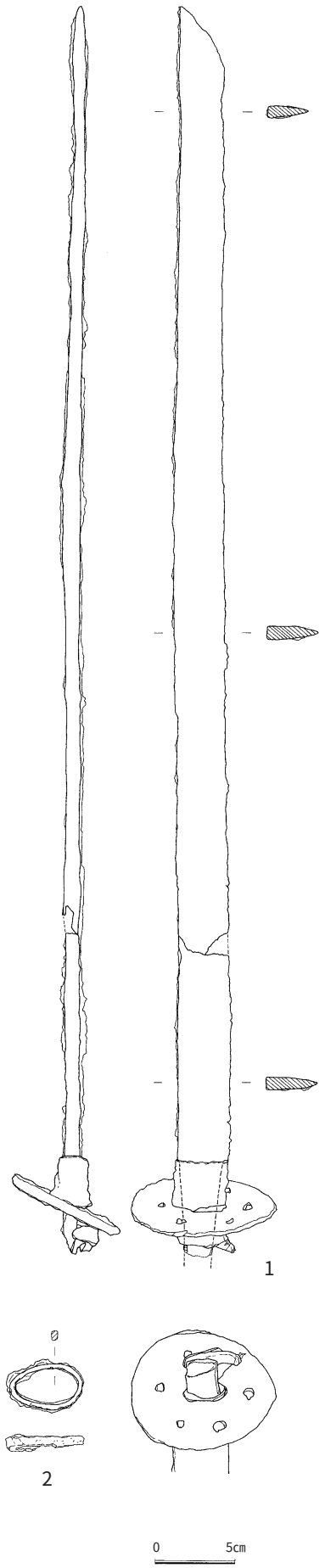
人骨・須恵器蓋坏４点が出土している。

検出した人骨の大部分は、玄室中ほどの左壁沿いに、やや床面から浮いた状態で頭蓋骨・四肢骨等が集積されていた。人骨は、右壁の前壁側にも一部認められた。

須恵器蓋坏２組は、いずれも右壁の奥壁側のほぼ床面と考えられるレベルから、並べられた状態で出土した。



第120図　Ⅲ区４号横穴墓玄室遺物出土状況（Ｓ＝１／30）



第121図　Ⅲ区４号横穴墓玄室
出土遺物実測図（Ｓ＝１／４）

３号横穴墓出土遺物（第119図）

３号横穴墓の玄室から須恵器蓋杯が４点出土している。１と３、２と４がセット関係になっていると思われる。

１・２は杯蓋である。いずれも天井部には回転ヘラ削りが施され、その中央に低平な輪状つまみが付いている。口縁部には、断面三角形のかえりを設けているもので、かえりは外縁からわずかに出ている。１はつまみ径4.2㎝・つまみ高0.5㎝・口径13.5㎝・最大径15.6㎝・器高3.2㎝、２はつまみ径4.6㎝・つまみ高0.5㎝・口径13.9㎝・最大径16.2㎝・器高3.1㎝を図る。

３・４は高台が付く杯身である。いずれも、口縁はゆるやかに湾曲しながら立ち上がり、器壁は前面回転ナデを施す。３は口径14.2㎝・底径8.6㎝・器高4.9㎝、４は口径14.2㎝・底径9.3㎝・器高4.7㎝を測る。

これらの須恵器の時期は、いずれも大谷編年出雲6ｄ～７期と考えられる。

４号横穴墓閉塞部・玄門（第114図）

閉塞部は３号横穴墓と同様に、床面が墓道より10㎝程度１段高くなるもので、上部は崩落により欠損しているが、正面観はやや丸みを帯びた台形状を呈すると考えられる。前面には幅1.1m・深さ0.3m程度の深い刳り込みが認められる。玄門部に接して床面には、閉塞装置を受ける施設であると考えられる長さ20㎝・幅110㎝・深さ10㎝程の浅い溝が掘られている。閉塞石等は認められなかった。

玄門は長さ1.66m、幅は墓道側0.70m、玄室側0.72mで、平面形は長方形を呈する。高さは天井が崩落しており正確な値は不明であるが、約0.9m程度と推定される。

４号横穴墓玄室（第114図）

主軸をN38°Wにとり、奥行約2.1m、幅が玄門側約1.8m・中程2.0m・奥壁側1.9mと奥がせまく中程がふくらんだ正方形に近い台形状を呈する。床面から天井部までの高さ約1.8mを測る。四壁が内傾しながら立ち上がり、天井部の軒を加工しない妻入テント形である。前壁を除く壁面には工具痕がわずかに認められる。奥壁の中程の高さに右上方から左下方に向けて幅6～8㎝程度工具痕が、左壁・右壁はいずれも主に壁面の境界に向けて上方から下方へ向けて幅5～6㎝程度の工具痕が観察された。

４号横穴墓人骨・玄室遺物出土状況（第120図）

細片化した人骨片と大刀１振が出土している。

人骨は玄室埋土中に、細片が多数含まれていた。ただ、3㎜以下の非常に細かな細片となっていることや非常に脆い状態であったこと等から、図化や取り上げることができなかった。

大刀は玄室左壁沿いの前壁側から、床面に近いレベルから２つに折れた状態で出土した。また、その付近からその大刀に伴うと考えられる責金具も出土している。

４号横穴墓出土遺物（第121図）

１は茎部先端が欠損している大刀で、残存長77.7㎝・刀身長71.9㎝・元幅3.2㎝・刀身の背の幅0.8㎝を測る。刀身にわずかながら木目痕が認められることから、木製の鞘に納められていたと考えられる。関の作りは刃・背両側につく両関で、関付近には長さ3.1㎝、直径3.2㎝・短径1.9㎝の鉄製の鎺が装着されている。鎺付近には、平面形が倒卵形で６箇所に透かしが認められる直径9.0㎝短径7.4㎝の鉄製鍔が装着されている。さらにその茎部先端側には、柄の責金具と考えられる半分欠損した楕円形の鉄製品が付着している。２は１の大刀に付属する、柄もしくは鞘の鉄製責金具と考えられる。楕円形を呈し、直径4.5㎝・短径2.8㎝・幅0.6㎝を測る。

時　期

墓道出土須恵器の様相から、大谷編年出雲６期に築造され、埋葬終了は最終埋葬時の埋め戻しの際の祭祀跡と推定される４号横穴墓の閉塞部に置かれていた蓋杯から出雲８期と推定される。

［Ⅲ区５号横穴墓］

位　置（第103図）

Ⅲ区５号横穴墓は、調査区の北東端に位置している。開口レベルは標高約61.7mで、南東方向に向けて開口する。玄門から玄室にかけて天井が完全に崩落しており、調査を行うには縦に深く掘っていかなければならない状況であった。

墓　道（第122図）

平面形は調査区内では長方形を呈し、幅2.4m・長さ1.7m以上で、南東側は調査区外に続いている。墓道最奥部のほぼ中心に閉塞部が造られている。床面はほぼ水平に近いが、わずかながら前方に向かって傾斜している。左右の壁面の残存状況は良好で、右壁は高さ1.8～2.4m、左壁は高さ1.3～2.0mの高さで、ほぼ垂直に造作されている。

土層堆積状況（第122図）

当横穴墓は土砂により完全に埋まっていた。この土砂は大きく３群に分けることができる。Ⅰ層群は流入土、Ⅱ層群は天井崩落土の間に流入した土、Ⅲ層群は地山である天井崩落土である。天井部分とみられる地山層が間層を挟まず玄室及び墓道の床面に接していることや、玄室内から１点遺物が出土していること、閉塞部近くに閉塞石と考えられる川原石（Ⅲ区１号横穴墓玄室内の木棺の棺台として使用された川原石の規模とも類似）５点出土している状況から、横穴墓築造後、間も無く天井が崩落したものと考えられる。

閉塞部・閉塞石・玄門（第122図）

閉塞部の上部は崩落により欠損しているが、正面観は長方形を呈すると考えられる。前面には幅約10～16㎝・深さ21～27㎝程度の浅い刳り込みが認められる。玄門に接して床面には、閉塞装置を受けるための施設と考えられる長さ16～18㎝・幅106㎝・深さ5㎝程の浅い溝が掘られている。

閉塞石と考えられる川原石が、墓道右壁沿いに４点・左壁沿いに１点検出されている。これらの

川原石は閉塞のために準備はされていたものと考えられるが、この横穴墓は築造後間も無く天井が崩落して使用不能になったと考えられるため、実際の閉塞には使用されなかったものと推測される。ただし、これらの川原石は１号横穴墓の玄室で検出した川原石に類似していることから、木棺の棺台として準備されたものとも考えられる。

玄門は長さ1.36m、幅は墓道側で0.70m・玄室側で0.85mと奥に向かって広がる形である。高さは天井が崩落しており不明である。閉塞部側の長さ約0.3mの範囲は、高さ5㎝程１段高くなっている。

玄　室（第122図）

主軸をN45°Wとり、幅1.88m・奥行2.20～2.46mと縦長の長方形を呈する。天井は完全に崩落しており、壁面も最も残りのよい部分で高さ58㎝である。玄室形態の詳細は不明であるが、平面形態やわずかながら四壁が内傾しながら立ち上がり部分が観察されることより、妻入テント形と推定される。

遺物出土状況（第123図）

玄室右壁沿いのやや奥壁側から須恵器長頸瓶１点が、横倒しで床面に接した状態で出土しているのみである。

出土遺物（第124図）

１は須恵器長頸瓶である。胴部はほぼ球形で、底部は外面には回転ヘラ削りを施す。口縁部は外方に直線的に開きながら立ち上がり、中程に１条の沈線が巡る。口径7.5㎝・口縁部長6.2㎝・胴部最大径12.5㎝・器高17.3㎝を測る。この須恵器の時期は、大谷編年出雲４～６期と考えられる。

時　期

出土須恵器の様相から大谷編年出雲４～６期に築造され、横穴墓築造後間も無く天井が崩落し、その後使用されなくなったものと推定される。

［その他遺構］

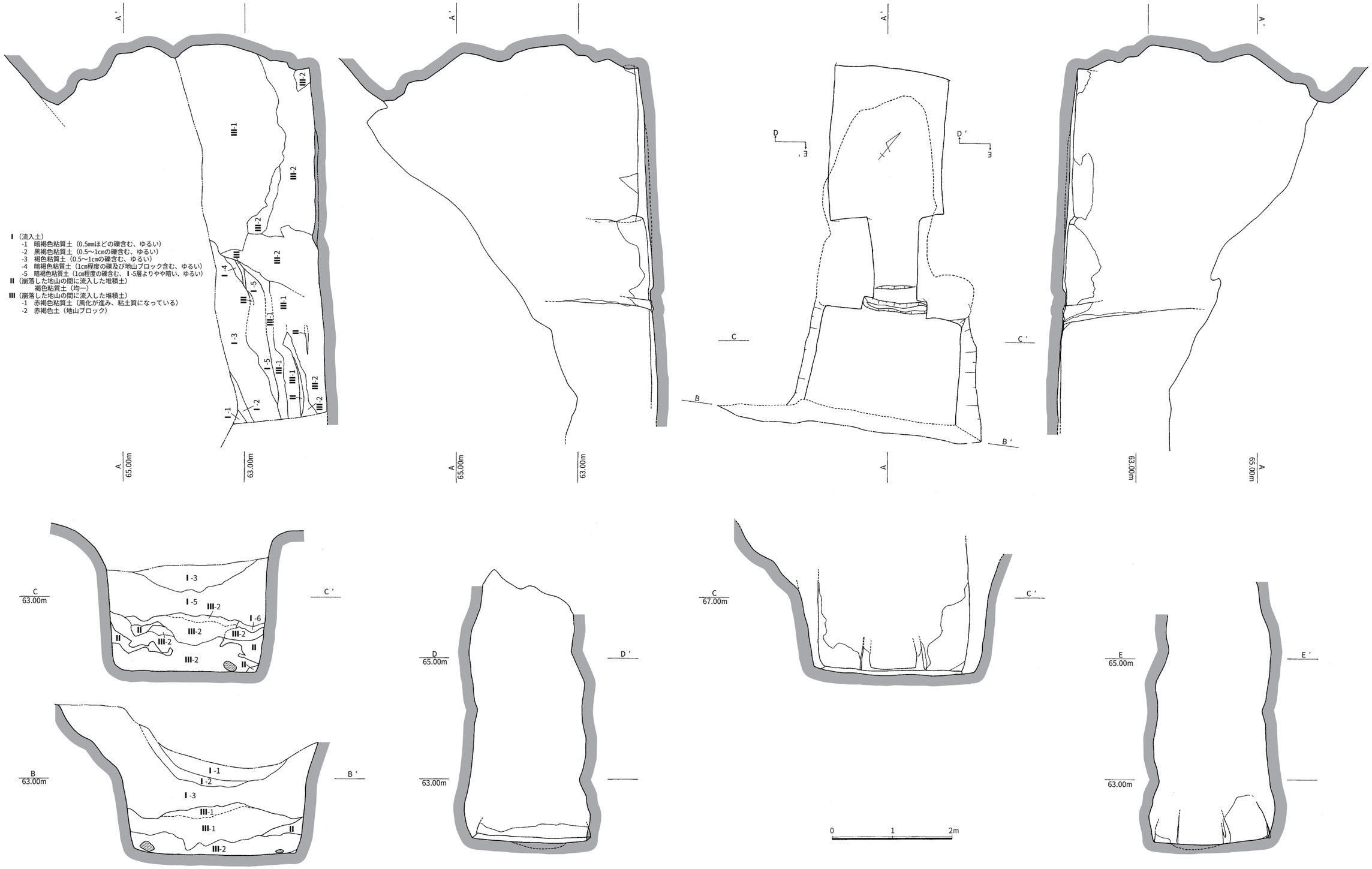
５号横穴墓に隣接する丘陵斜面から土壙を２基検出した。

SK01（第125図）

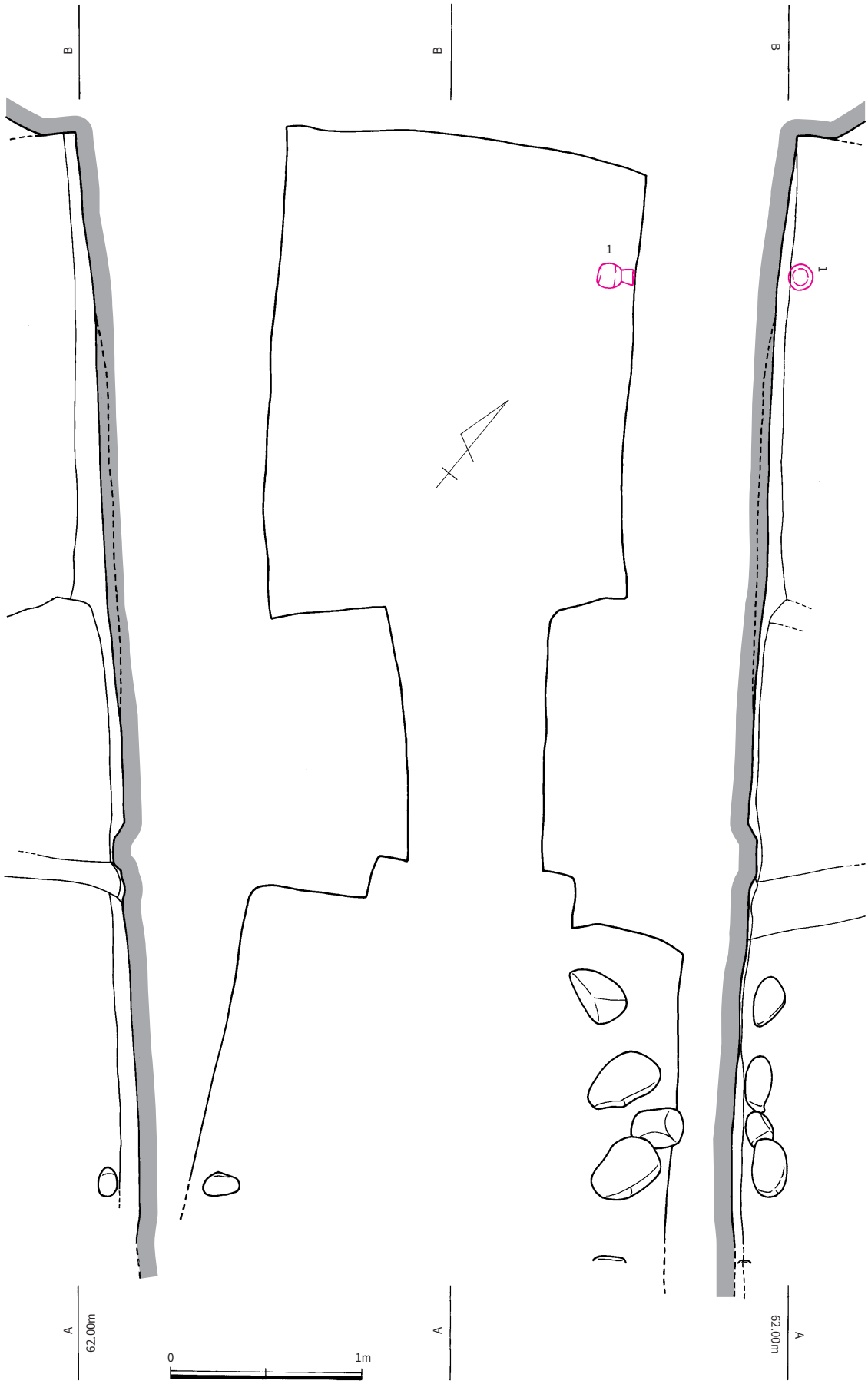
Ⅲ区５号横穴墓の北東側約1.0mの標高約64.4～64.9mの丘陵斜面で検出された土壙である。平面形は直径約1.2m・短径1.0mを測る楕円形で、西側の半周は２段掘となっている。深さは現状で1.0～1.5mと比較的深い。覆土は褐色粘質土の単層である。出土遺物はなく、時期・性格等は不明である。

SK02（第125図）

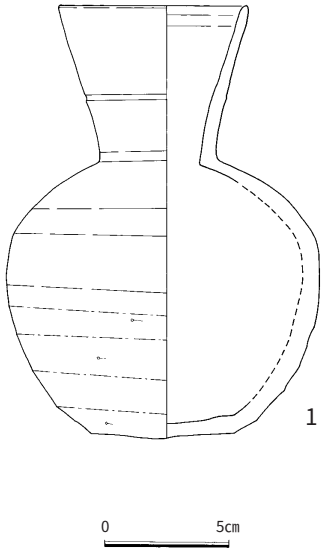
Ⅲ区５号横穴墓の南西側約1.0mの標高66.4～66.7mの丘陵斜面で検出された土壙である。検出した位置は、SK01よりやや上方である。平面形は直径1.0m・短径0.9mの楕円形を呈し、深さは現状で1.0～1.3mと比較的深い。覆土は暗褐色粘質土の単層である。出土遺物はなく、時期・性格等は不明である。



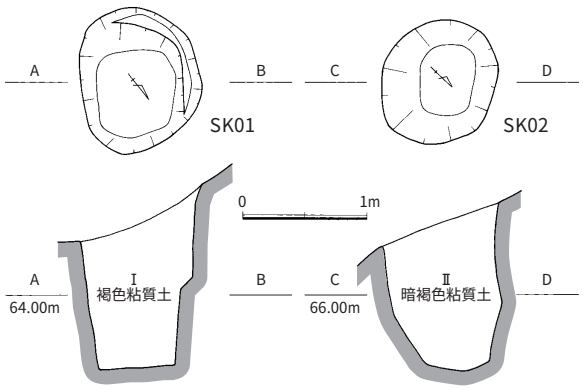
第122図　Ⅲ区５号横穴墓遺構実測図（Ｓ＝１／60）



第123図　Ⅲ区５号横穴墓遺物出土状況（Ｓ＝１／30）



第124図　Ⅲ区５号横穴墓玄室
出土遺物実測図（Ｓ＝１／３）



第125図　Ⅲ区SK01・SK02遺構実測図（Ｓ＝１／60）

（２）Ⅲ区古墳群

Ⅲ区古墳群は、北東方向に伸びる標高約78mの丘陵尾根上に位置する（第102・126図）。丘陵尾根全域を調査区としたが、南西寄りに古墳等を検出したのみで、北東側にも比較的幅が広い尾根が続いているが何ら遺構は検出されなかった。

［Ⅲ区１号墳］

位　置（第102・126図）

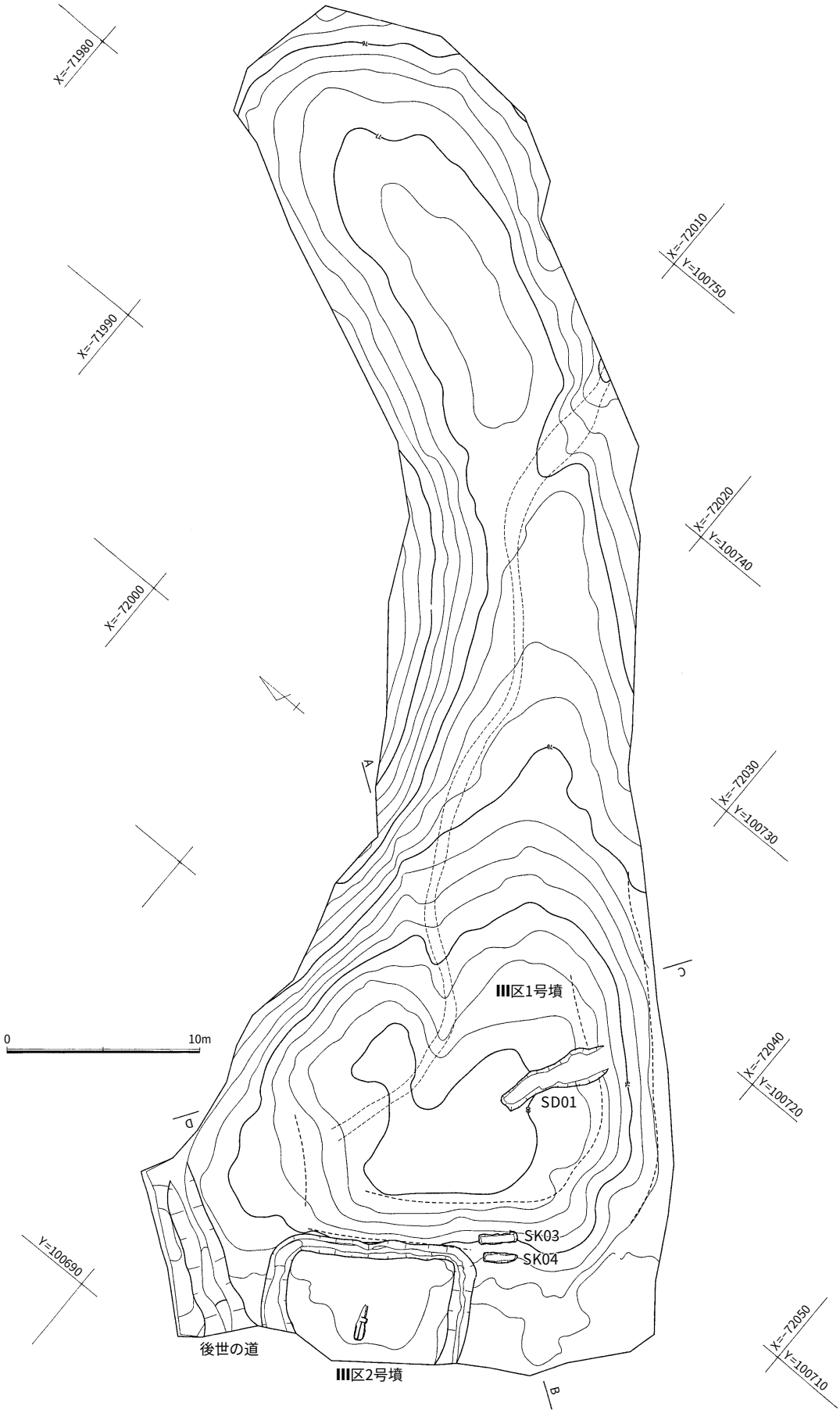
北東方向に伸びる丘陵の南西よりのピークに調査区最高所の標高約78mの丘陵尾根上に立地している。墳頂部から、やや遠方であるが北側に平野部を眺望することができる。

墳　丘（第126図）

比較的保存状態が良い南西辺や南東辺の観察から方形プランを呈する。調査前から明瞭な古墳として認識されていた。墳丘東コーナー付近は墳丘の流失が進み墳端は判然としない。墳丘北側コーナー付近の墳丘約１/４を分断するように切り通し状の後世の道が通じている。この後世の道を造作する際、掘削した土を道の北側に盛り上げていることから、現状では墳頂部の北コーナー付近が盛り上がっている。

墳丘の構築であるが、墳丘の南西側は地山が高くなっているため、現状での観察は地山整形のみである。墳丘の北東側は地山が低くなっており、この部分に盛土が施されている。墳丘東コーナーの墳端部が判然としないのは、この盛土の流失が原因と考えられる。現状で盛土の厚さは、北西辺で約30～40㎝・北東辺で約20㎝を測る。

規模は判然としないが南西辺で約18m、高さ約1.4mを測る。墳頂平坦面は南西辺で一辺約12mと、全体の規模と比較して非常に広い平坦面を有しているが、これは墳頂部が大きく削平を受けているためと推測される。



第126図　Ⅲ区古墳群調査後地形測量図（Ｓ＝１／300）

主体部

墳頂部からは南西側に性格不明の溝を１条検出したのみで、主体部等は検出することはできなかった。これは墳頂部が大きく削平を受けているためと考えられる。

SD01（第126・128図）

Ⅲ区１号墳の墳頂部南東辺で検出された溝状の遺構で、古墳の中心部のやや南東よりの場所から墳頂部南西辺に向けて続いている。長さ約5.9m・幅1.0～1.8m・深さ約0.3mを測る。遺物は出土しておらず、Ⅲ区1号墳に伴うものかどうかも含めて性格等は不明である。

［Ⅲ区２号墳］

位　置（第126図）

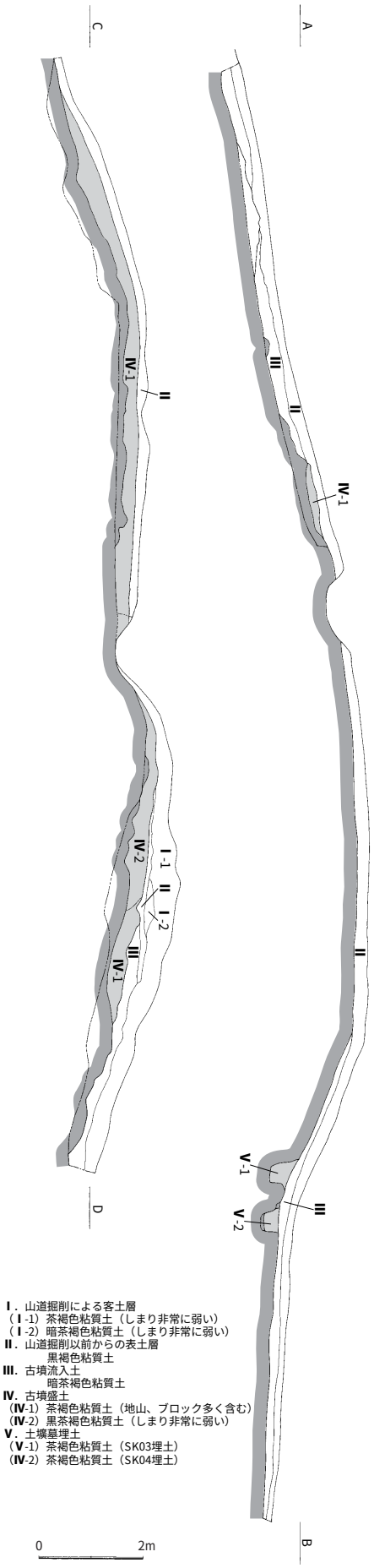
丘陵尾根筋の南西端に位置する。標高約79mの馬蹄形の谷を望む、やや谷の奥部に寄った場所に築かれている。北東側の眺望はⅢ区1号墳に阻まれており、東側の伯太川沿いの狭い谷が望めるのみである。

周　溝（第129図）

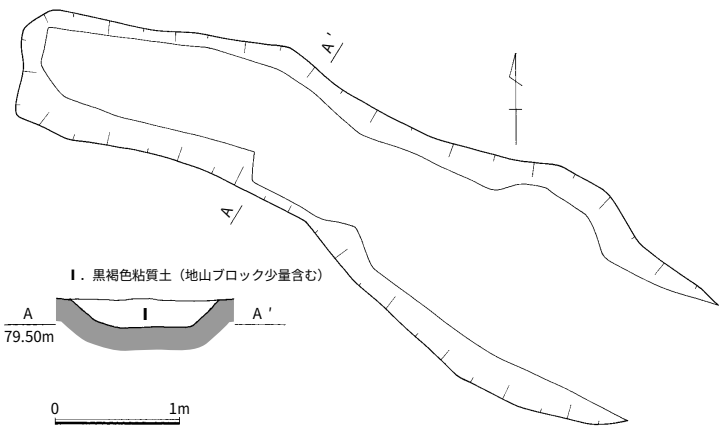
周溝は底面の幅20～50㎝、深さ30～40㎝を測り、墳丘の南西側を除く３辺の墳裾を「コ」の字状にめぐっている。周溝の長さは、北東辺約10.4m、北西辺で約5m、南東辺は6.8m以上を測る。周溝底は南東角が高くなっており、そこから北東辺から北西辺にかけてと南東辺の谷部に向けて緩やかな傾斜がつけられていた。

墳　丘（第129図）

低墳丘の３辺を「コ」の字状にめぐる周溝で区画した、方形プランを有している。調査前には古墳の認識は無く、



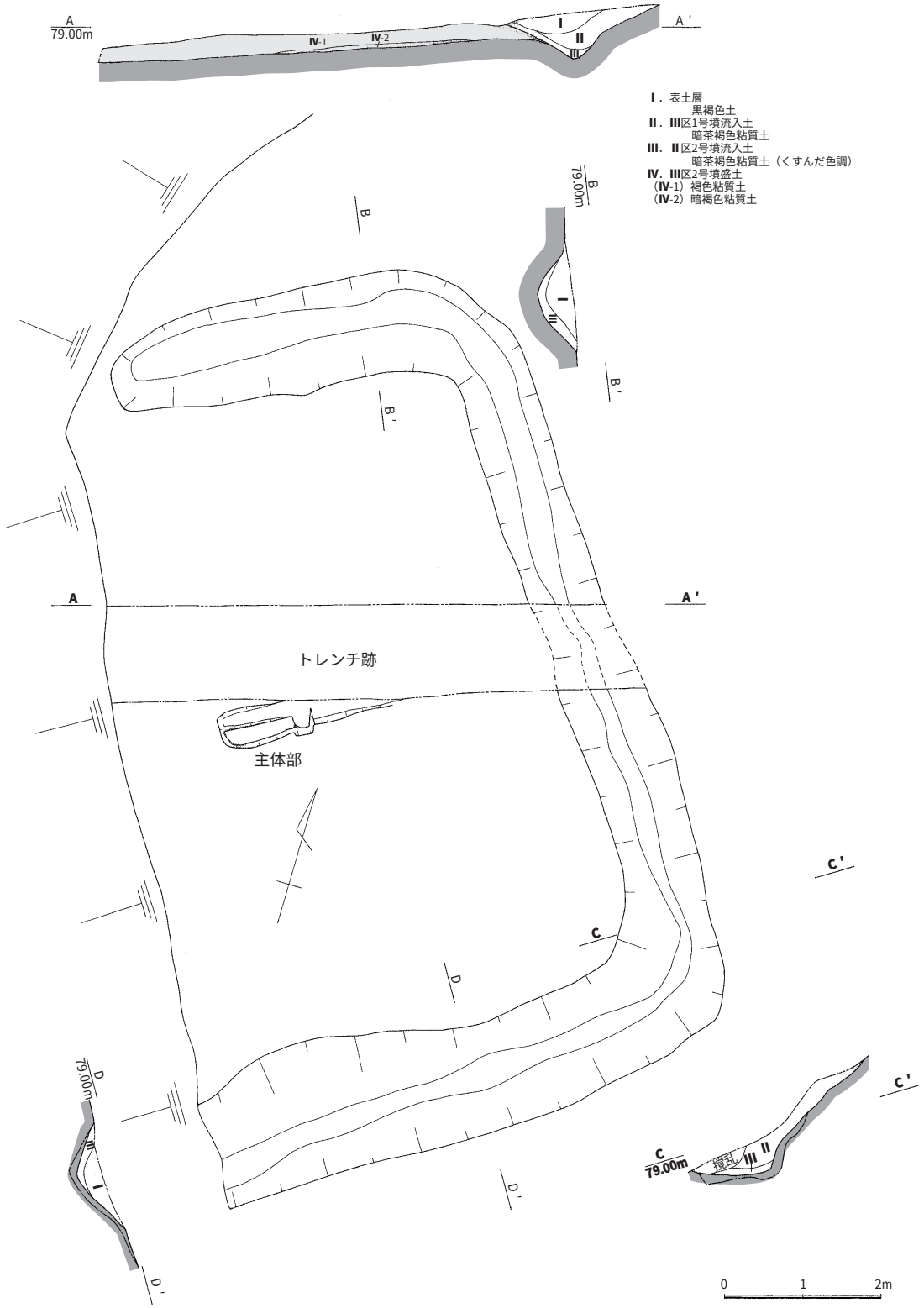
第127図　Ⅲ区１号墳土層断面図（Ｓ＝１／120）



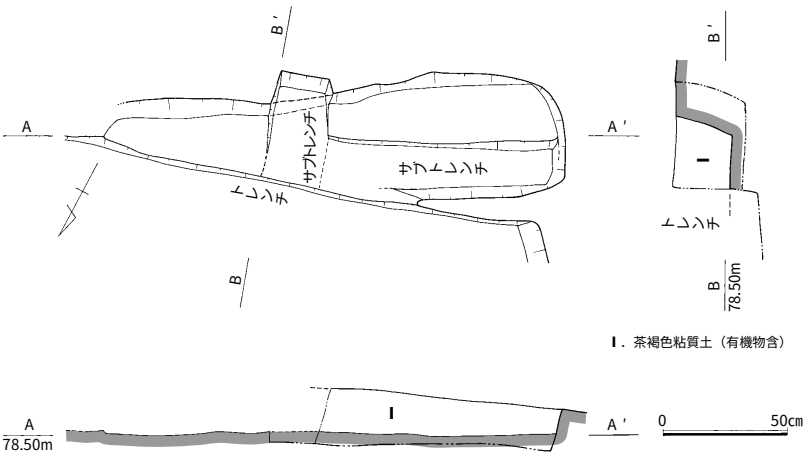
第128図　Ⅲ区SD01遺構実測図（Ｓ＝１／60）

墳丘状の高まりも全く認められなかった。規模は、墳裾（周溝底面の内周）で、北東辺で約9.0m・北西辺で約5.0m以上・南東辺で約6.4m以上、高さ約0.4mを測る。

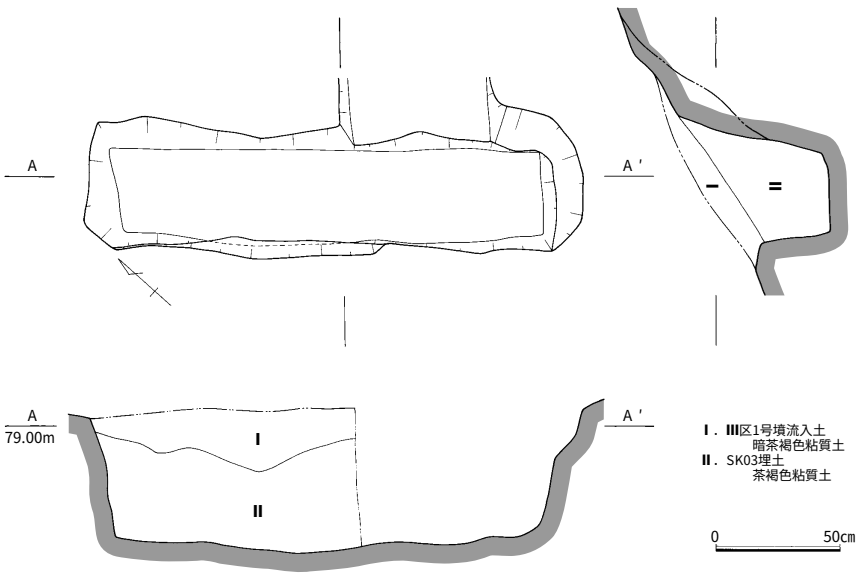
盛土は現状で厚さ約0.2mを測り、周溝内には墳丘からの流土も認められた。外表施設は認められなかった。



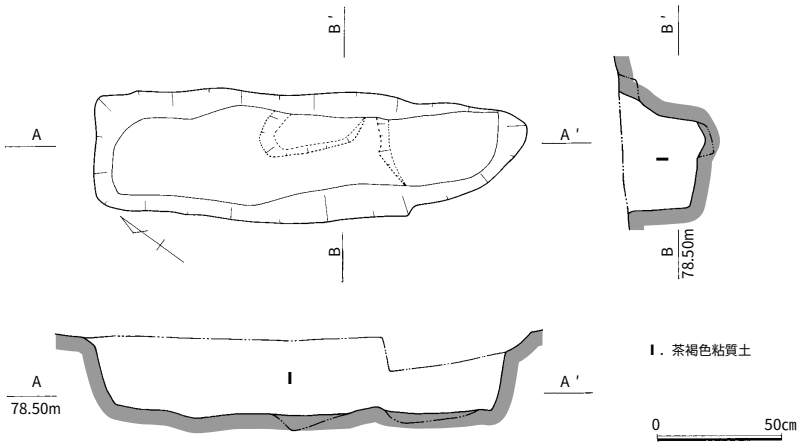
第129図　Ⅲ区２号墳遺構実測図（Ｓ＝１／80）



第130図　Ⅲ区２号墳主体部実測図（Ｓ＝１／30）



第131図　Ⅲ区SK03遺構実測図（Ｓ＝１／30）



第132図　Ⅲ区SK04遺構実測図（Ｓ＝１／30）

主体部（第130図）

墳丘のほぼ中央に位置し、墓壙の主軸方向はN63°Eを測る。トレンチの断面で確認されたもので、墳丘盛土から地山直上まで掘り込まれている。墓壙は素堀りの隅丸長方形プランのもので、北東側小口と北西辺の半分はトレンチ調査の際に掘り下げてしまい詳細は不明である。長さ約1.85m・幅0.5m・深さ0.1m前後を測る。覆土は有機物を含む茶褐色粘質土の単層である。遺物は検出されていない。

［その他の遺構］

１号墳南西辺墳裾付近で隣接した土壙墓を２基検出した。いずれも出土遺物はなく、時期等は不明である。

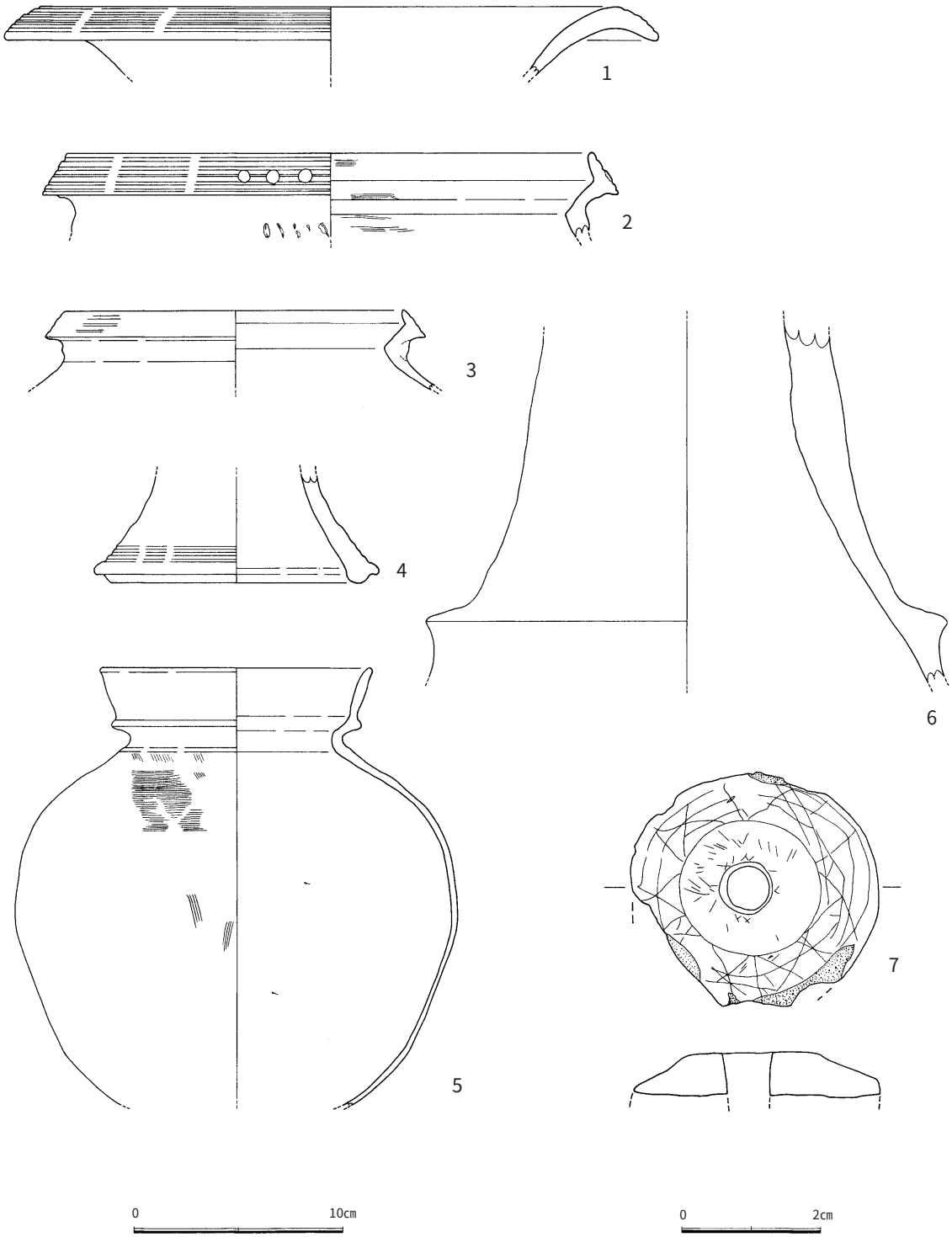
SK03（第131図）

Ⅲ区１号墳南西辺の墳裾と平行して築かれた土壙墓で、墓壙は素堀りの隅丸長方形プランを呈している。長軸をN45°Wに取り、長さ約2.0m・幅0.5m前後・深さ0.25～0.50mを測る。覆土は地山ブロックを含んだ

茶褐色粘質土の単層である。出土遺物はなく、造墓時期は不明である。

SK04（第132図）

SK03に隣接して検出された土壙墓で、墓壙は素掘りの隅丸長方形プランを呈している。長軸をN37°Wに取り、長さ約1.7m、幅は北西側の小口で約0.45m・南東辺の小口で約0.4m、深さ約0.3mを測る。覆土は茶褐色粘質土の単層である。出土遺物はなく、造墓時期は不明である。



第133図　Ⅲ区古墳群出土遺物実測図（Ｓ＝１／３、但し、７のみＳ＝１／１）

［遺構に伴わない遺物］

第133図はⅢ区古墳群から出土した遺物であるが、いずれも遺構に伴っていない。

１～５は弥生土器である。１は広口壺である。大きく外反する口縁端部に凹線を引いている。復元口径27.5㎝を測る。２・３は甕である。２は口縁端部が内傾しながら上下に肥厚し、外面に凹線文・円形浮文が施されている。復元口径は２が25.0㎝、３が16.1㎝を測る。４は高杯の脚部で、外面に凹線文が施され、端部は肥厚する。復元底径11.8㎝を測る。５は甕である。複合口縁は緩やかに外反し、稜は強く横方向に突出している。胴部最大径は上位にあり、器壁は薄い。復元口径は12.9㎝を測る。これらの弥生土器の時期は、１～４が弥生時代中期後半、５が後期末である。

６は器台と考えられる資料である。Ⅲ区１号墳の土層断面を観察するベルトが交差する付近の表土から出土したものである。脚端部は有段状を呈し、風化のため調整等は不明である。器壁は厚い。時期は弥生後期から古墳時代にかけてと推測されるが、詳細は不明である。

７は紡錘車形石製品である。６の器台片と同様な場所から出土したものである。石材は緑色凝灰岩製もしくは岩質のあまりよくない碧玉製で、周縁部及び底部は剥離している。このような材質の紡錘車は通常の集落跡からは出土せず、古墳の副葬品等祭祀関係から出土するという。形態は、上部からやや内湾しながら広がるように２段に作られている。その広がる部分には文様ともキズともとれる幾何学的な線刻が見受けられる。上径2.1㎝・最大径4.0㎝・厚さは現存で0.7㎝を測り、中央に貫通孔が穿たれている。貫通孔は上面で径0.8㎝・下面で0.7㎝を測り、穿孔は上面から行なわれているものと推察できる。

（註）

＊須恵器の編年観は下記の文献によった。

・大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌　第11集』島根考古学会　1994

・大谷晃二「出雲地方の須恵器編年表」『第７回山陰横穴墓調査検討会　出雲の横穴墓　その形式・変遷・地域性』山陰横穴墓研究会1997

＊紡錘車形石製品については、松江市立玉作資料館　勝部衛館長にご教示いただいた。

本遺跡出土の紡錘車形石製品の材質は、造山１号墳出土のものと類似している。

（参考文献）

・鹿島町教育委員会『奥才古墳群』1985

・島根県教育委員会『島根女子短期大学移転予定地内　奥山遺跡発掘調査報告書』1988

・島根県教育委員会『平ラⅡ遺跡　吉佐山根１号墳　穴神横穴墓群　一般国道９号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書10』1995

・牧本哲雄「大垰山横穴墓における横穴墓の掘削技術」『島根考古学会誌　第12集』島根考古学会　1995

・岡山大学考古学研究室『定北古墳』1995

・山陰横穴墓研究会『第７回山陰横穴墓調査検討会　出雲の横穴墓　その形式・変遷・地域性』1997

・島根県教育委員会『岩屋口北遺跡　臼コクリ遺跡（Ｆ区）　一般国道９号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書13』1997

第４節　Ⅳ区の調査

［１号墳］

遺　構（第135図）

調査区のある尾根の最高所に存在する。後世の開発により墳丘がかなり改変されているとみられたが、南側の墳裾ラインは残存していたため、そこから判断すると約15×13m、高さ約１mの方墳であったと推定される。墳丘上は削平もしくは土砂の流失のためか、表土直下はすぐ地山となっていたが、墳丘上からは主体部とみられるプランを６箇所検出した。

第１主体部

１号墳北部で検出した墓壙で、長さ約2.85m、幅約65㎝で、深さ約35㎝を測り、墓壙底面はやや船底形になっている。墓壙の形状からみて割竹形木棺であった可能性が高い。墓壙南西端には丸みをおびた板状の石材を４点検出し、石材は全て墓壙の端部に立てられていたような状態で出土しており、木棺の端を支えていたものとも考えられる。

内部には、底部付近に茶褐色の土が薄く堆積している他は、暗茶褐色土が堆積していた。

副葬品は鉄剣（第138図１）一振が出土した、鉄剣は墓壙西半部南壁に沿って切先を東側に向けた状態で置かれており、もともと棺内に副葬されていたものと見られる。

第２主体部

第１主体部の北側約２mの地点で検出した。主軸を北東－南西にとり、長軸約1.3m、短軸約40㎝、深さ約８㎝を測る。平面形は舟形を呈し、底部は平底である。墓壙内には副葬品はなかった。

第３主体部

１号墳墳丘の中央やや西寄りにおいて検出した墓壙で、平面形は舟形を呈し、墓壙底部は浅い舟底形を呈する。主軸を北西－南東方向にとり、長軸約4.5mで、短軸はトレンチ調査時に西壁面が破壊されたため正確でないが、約1.5m前後と推定される。深さ約18㎝を測る。底部には棺の痕跡などは確認されなかった。

副葬品は墓壙中央からやや南側において、土師器小型丸底壺の完形品（第140図１）１点が出土した。

第４主体部

墳頂部やや東寄りにおいて検出した。主軸を東－西にとり、長軸約1.9m、短軸約40㎝、深さ約５㎝を測る。平面形は舟形、底部はほぼ平底である。内部から副葬品は出土しなかった。

第５主体部

第３主体部北端部から北西へ30㎝の位置にある墓壙で、主軸をやや北西－南東にとる。墓壙西半部は撹乱により破壊されていたため、正確な規模はわからないが、現状から推定すると、長軸約1.4m、短軸約50㎝であったとみられる。深さは約50㎝を測る。図示しなかったが、底部より刀子の破片と思われる鉄器の小片が１点出土した。

第６主体部

第３主体部の西側にほぼ平行して存在する墓壙。主軸をやや北西－南東にとり、長軸約1.1m、短軸約35m、深さ約５㎝を測る。平面形は舟形を呈し、底部はほぼ平底である。内部から副葬品は

出土しなかった。

［２号墳］

遺　構（第142・143図）

１号墳の南側に隣接して存在する古墳。調査は工事予定地部分にかかる西側墳裾部のみにとどまっているため、全容は不明であるが、直径約10m、高さ約１mの円墳であるとみられる。

表土を剥ぎ取ったところ、墳端ラインを検出したため、サブトレンチを設定して、墳丘の状況を確認した。

その結果、２号墳は地山を平坦に加工した上に盛土をして墳丘を構築していることが確認できた。

盛土の厚さは調査区内では約65㎝で、粘性の強い茶褐色土や黒褐色土、橙褐色土などが互層状に突き固められていた。

今回の調査では、２号墳の時期を特定できる遺物は出土しなかったが、表土掘削時に墳裾から須恵器の甕片が１点出土したため、２号墳は古墳時代後期のものである可能性がある。

［３号墳］

遺　構（第144図）

１号墳の北に位置する。調査前の地形は比較的大きな平坦地が存在し、墳丘などは確認できなかたが、立地からみて、古墳の存在も想定して調査を行った。

調査区壁面に直交するように東西方向のベルト一箇所を設けて掘削を行ったところ、周溝とみられる幅約１m前後、深さ約45㎝を測る、円弧状の溝一基を検出したため、この遺構は古墳であると判断した

調査の結果、墳丘は後世に畑地として開墾されたらしく削平を受けており、周溝のみが残存している状況であることがわかった。周溝の規模・形状からみて、直径約10mの円墳であったとみられる。調査区内では主体部は検出されず、削平によって消滅したか、もしくは未調査部分に存在するものと思われる。耕作面の層からは寛永通宝一枚と酸化コバルトで絵付けされた染付磁器片などが出土していることから。近世末頃に開発されたものと考えられる。

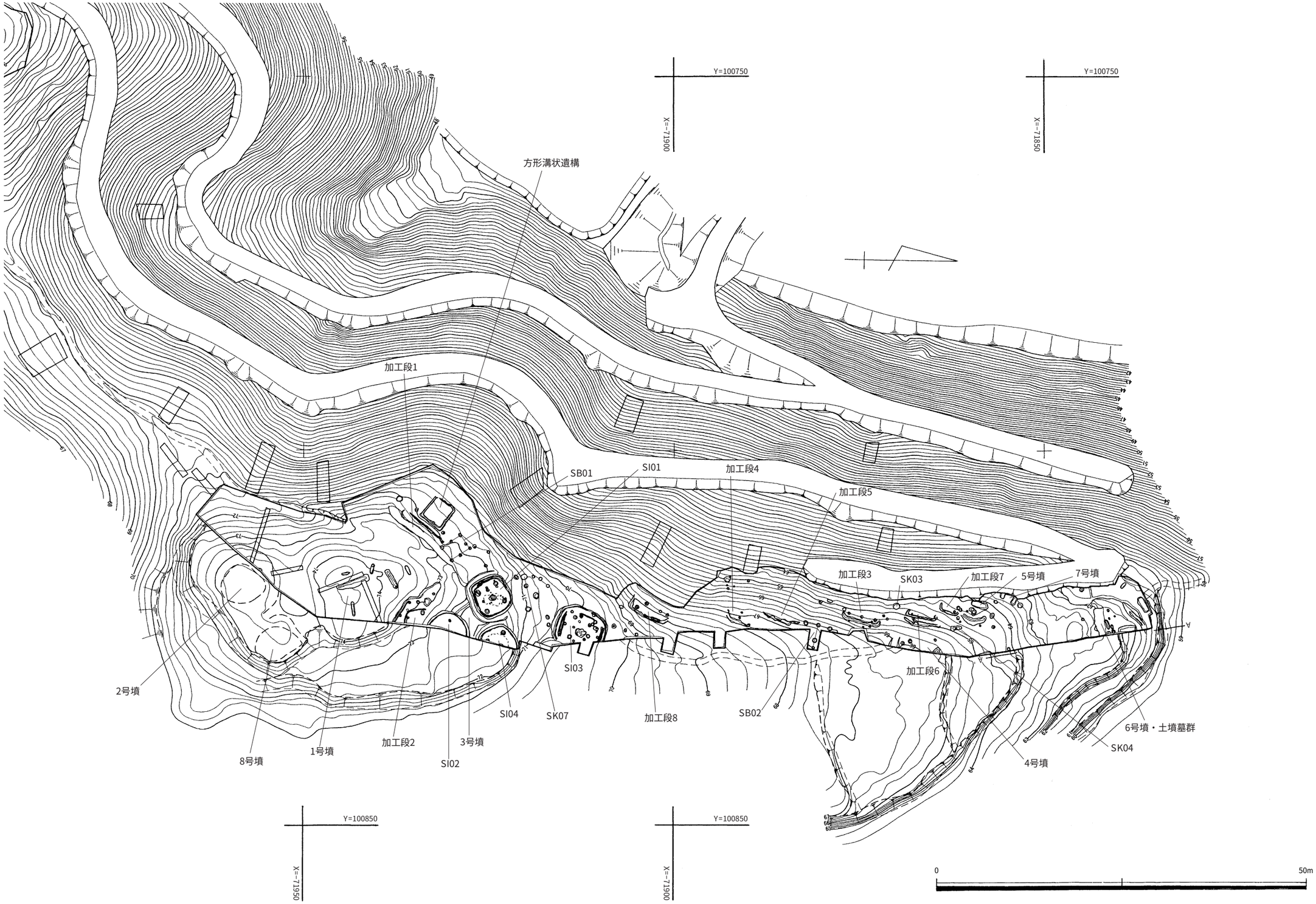
周溝内及び墳丘部からは弥生土器の破片が出土した他は、古墳に伴う遺物は出土しなかった。

［４号墳］

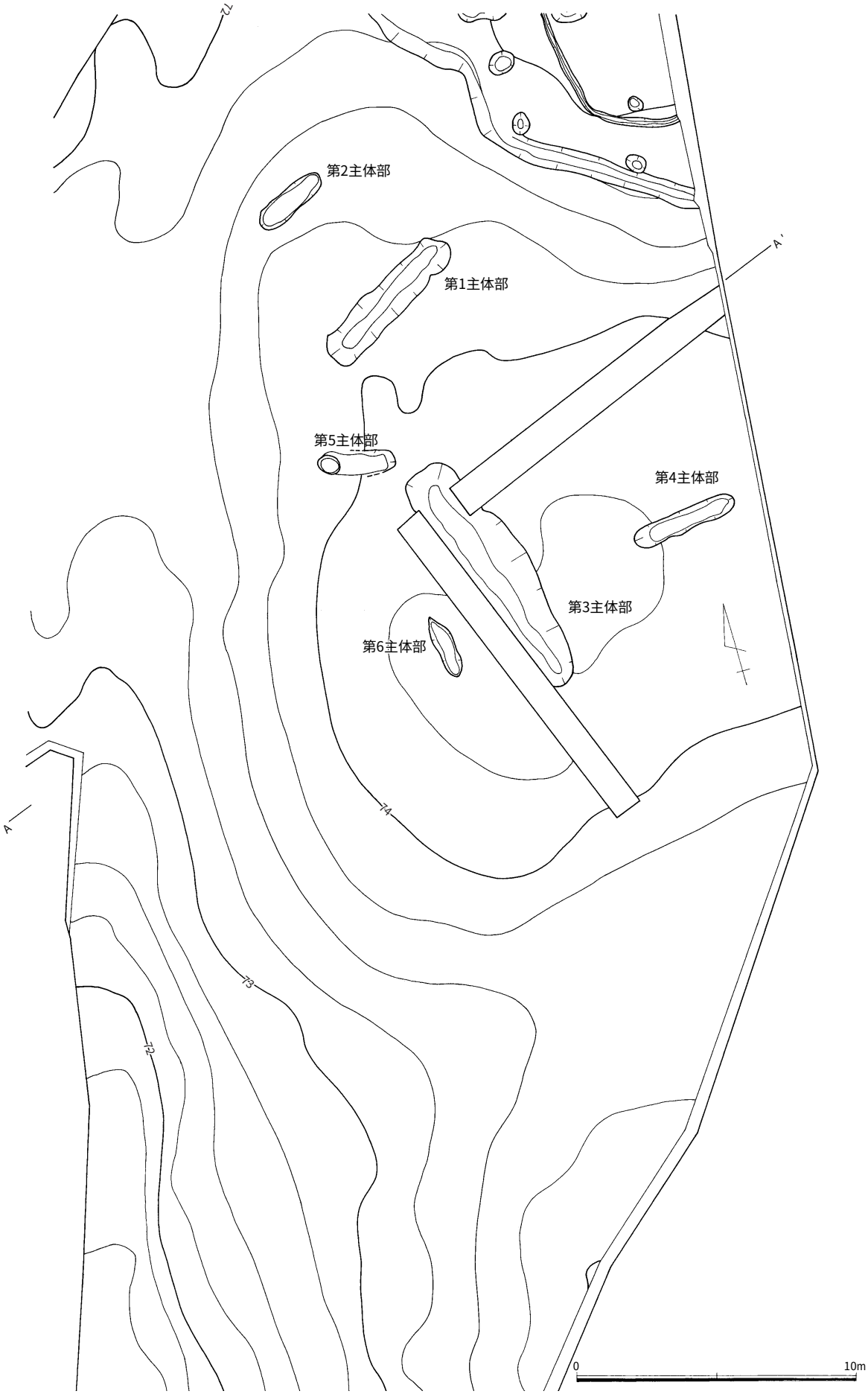
遺　構（第145図）

標高約66mに位置する。調査前は後世に造成されたとみられる大きな平坦面であったが、大部分は調査区外であり、調査は墳丘西側の墳裾部分のみであった。

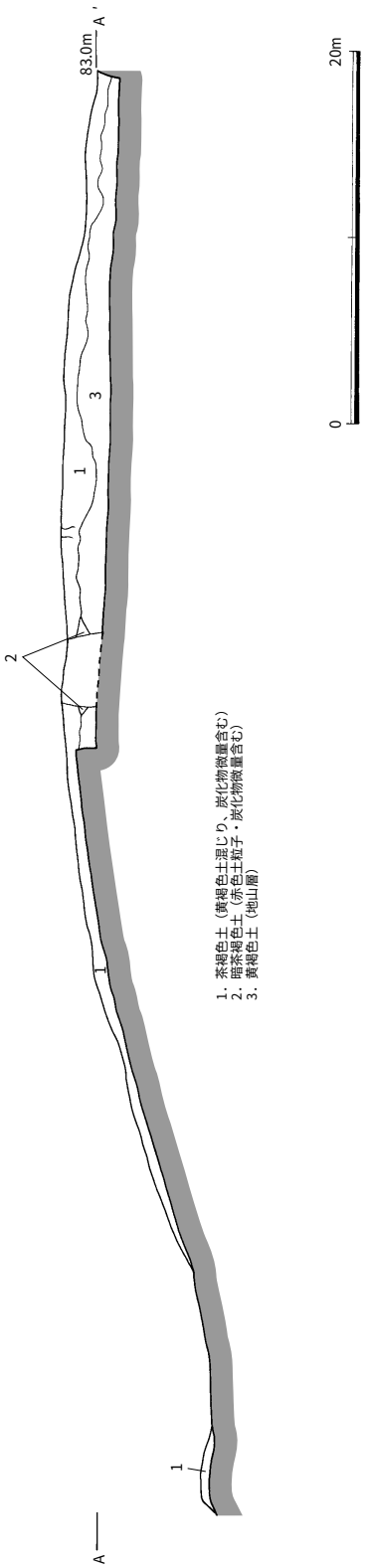
表土を除去したところ、また、岩盤質の赤褐色の地山面の上に黄褐色砂質土が円形状になっている部分がみられ、盛土である可能性を考えてサブトレンチを設定して調査を進めたが、黄褐色砂質土の単一層となっており、さらに掘り下げてみても層が変わらなかったため、黄褐色砂質土も地山層であると判断した。また、南部では周溝の一部ともみられる溝状遺構１基を検出した、溝状遺構は先端部のみであったため、古墳の規模や形状を特定するのは困難であるが、内からは弥生土器の破片数点が出土したのみで、直接古墳に伴うような遺物は出土しなかった。



第134図　**Ⅳ**区遺構全体図（Ｓ＝１／500）



第135図　**Ⅳ**区１号墳調査後地形測量図（Ｓ＝１／100）



第136図　**Ⅳ**区１号墳東西ベルト土層断面図
（Ｓ＝１／80）

これらのことから、４号墳は地山を加工して墳丘を造り出したものであった可能性がある。

なお、墳丘上の調査区壁面で土壙ＳＫ０１を検出したが、内部からは弥生土器の破片数点が出土したのみであり、本古墳に直接伴うものであるかはわからない。

［５号墳］

遺　構（第146・147図）

４号墳からやや北西に下った、標高約64mの位置で検出した古墳である。

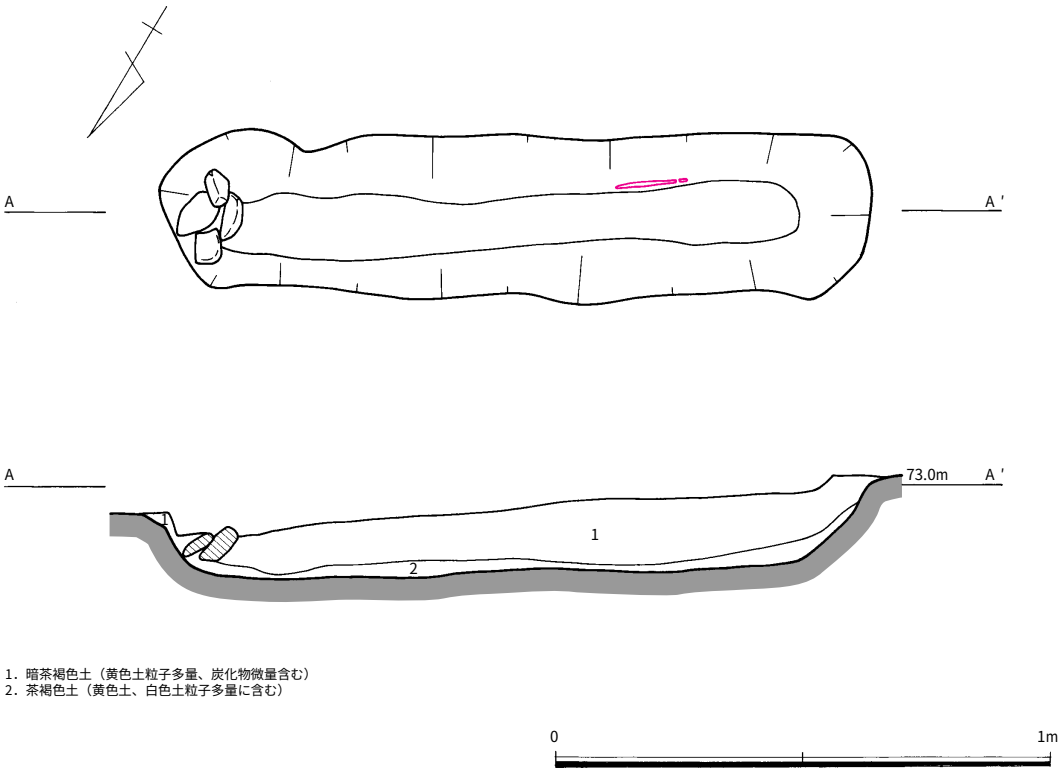
調査前の踏査では古墳と認識していなかったが、調査した結果、盛土は全て流失しており、周溝の一部と主体部一基がかろうじて残存している状況であることがわかった。

西半部分は、伐採した木材の運び出しのために、重機道を造成した際破壊されていた。そのため全体的な規模は不明であるが、周溝の形状と規模から推察するに、元は直径約６m程度の小円墳であったと考えられる。

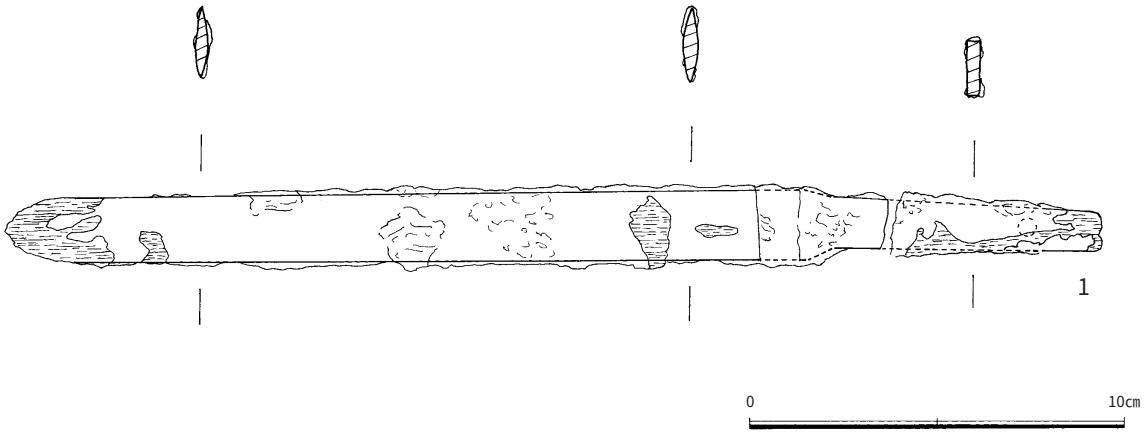
周溝は最大幅約90㎝、深さ約５㎝を測り、平面形は円弧状で、断面形は浅いレンズ状を呈する。主体部は墓壙底部付近のみ残存しており、主軸をやや北東－南西方向に取っており、長軸約2.3m、短軸約85㎝を測る。床面南端には、須恵器蓋坏１組がそれぞれ伏せて並べられており、枕として転用されたとみられる。また、墓壙中央やや東寄りでは鉄鏃２点が出土している。

５号墳主体部出土遺物（第149図１・２、150図３・４）

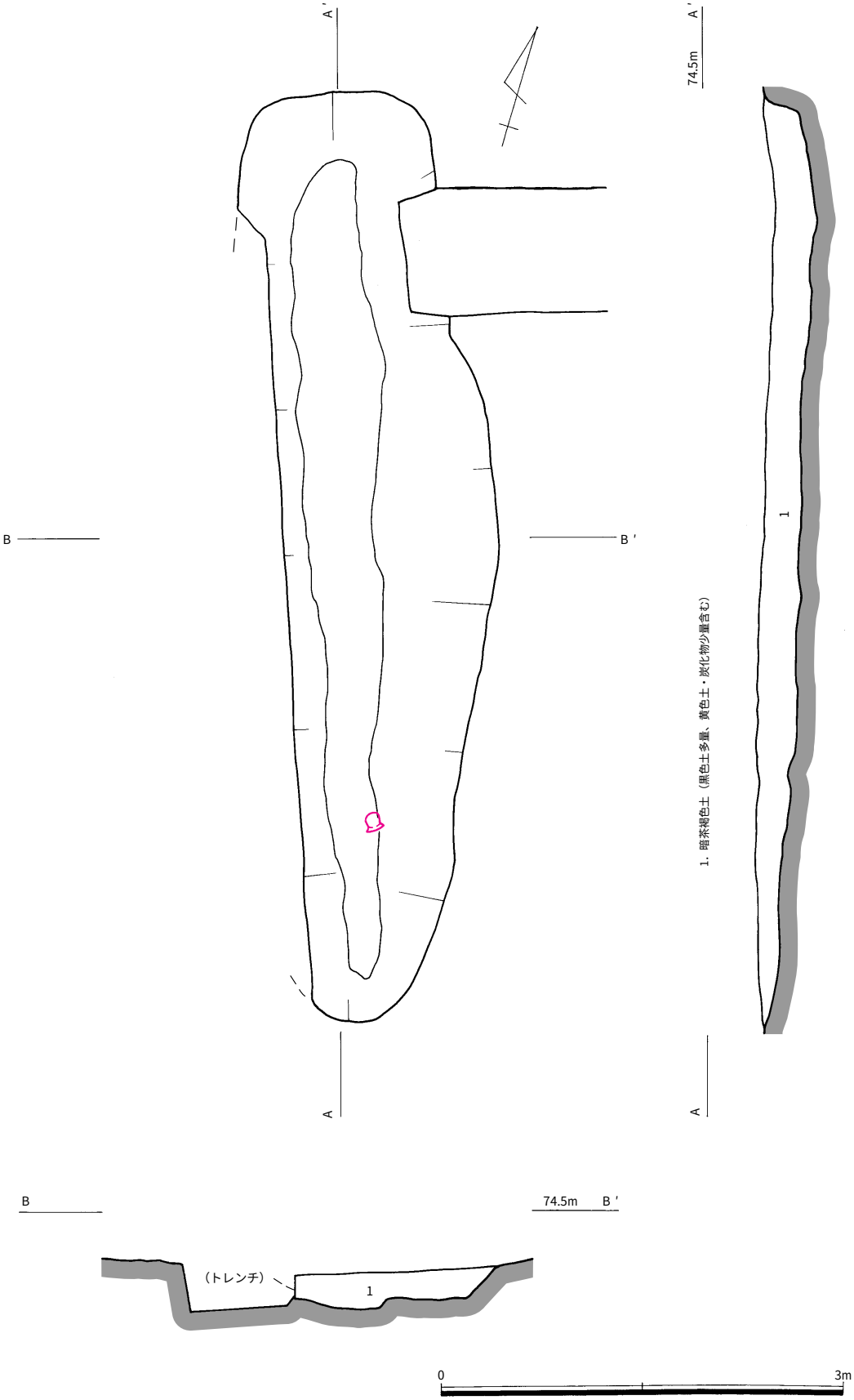
第149－1・2は鉄鏃である。149－1は柳葉式の長茎式鏃である。茎の先端を欠いているが、全長10.9㎝で、鏃身部は長さ2.1㎝、幅１㎝を測り、関部は直角である。茎部は幅５㎜、厚さ2㎜の長方形の断面を呈し、関部から7.9㎝のところで細くなっている。149－2も柳葉式の長茎式鏃で、鏃身部は長さ2.5㎝、幅1.2㎝を測り、



第137図　**Ⅳ**区１号墳第１主体部実測図（Ｓ＝１／30）



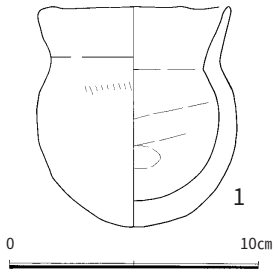
第138図　**Ⅳ**区１号墳第１主体部出土遺物実測図（Ｓ＝１／２）



第139図　**Ⅳ**区１号墳第３主体部実測図（Ｓ＝１／30）

関部は直角である。茎部は幅５㎜、厚さ３㎜の長方形の断面を呈する。149－2のものと思われる、図示した以外の茎部破片も出土しているが、破損が著しく接合できなかった。

150－3・4はセットとなる須恵器蓋坏である。150－3は蓋で、口径14.3㎝、器高5.1㎝で、口縁端部内側には沈線を、体部外面には２条の平行沈線を施す。内外面は回転ナデ調整が主体であるが、天井部は回転ヘラケズリを施している。150－4は坏身で、最大径は14.7㎝、口径12.4㎝、器高4.7㎝を測る。内外面は回転ナデ調整を施し、外面底部付近は回転ヘラケズリを施している。大谷編年出雲３期のものとみられる。



第140図　Ⅳ区１号墳第３主体部出土遺物実測図（Ｓ＝１／３）

［６号墳］

遺　構（第151・172図）

Ⅳ区最北端にある古墳である、尾根筋に幅約4.5m、深さ約60㎝の周溝を掘り、後述する弥生墳墓群の上に盛土を施して墳丘を形成している。墳頂部は後世に畑などを開墾した際にかなり削平されているとみられる。

調査の結果、一辺約10m程度の方墳と考えられ、墳丘の盛土は厚い所で約70㎝を測る。今回の調査では主体部が検出されなかったが、開墾の際に破壊されたか、今回調査区外であった東半部分に存在するのかもしれない。

また、この古墳に伴う遺物は出土しなかったため、古墳の時期は明らかにできなかった。

［７号墳］

遺　構（第148図）

５号墳の北西に隣接する。主軸を北西－南東にとる２基の墓壙が平行に並んでいた。各墓壙の西半部は、５号墳と同様に重機道によって破壊されている。墳丘や周溝が検出されなかったため、古墳か土壙墓かは判断しかねるが、もともとは５号墳のような小規模な古墳であったのかもしれない。

・第１主体部

残存部の長さ約82㎝、幅約62㎝、深さ約20㎝を測る、平面形は隅丸長方形を呈する墓壙である。底面東端やや北寄りには須恵器坏蓋１点（第150図5）が伏せられた形で置かれており、枕として使用されたとみられる。

墓壙内からは他の副葬品は出土しなかった。

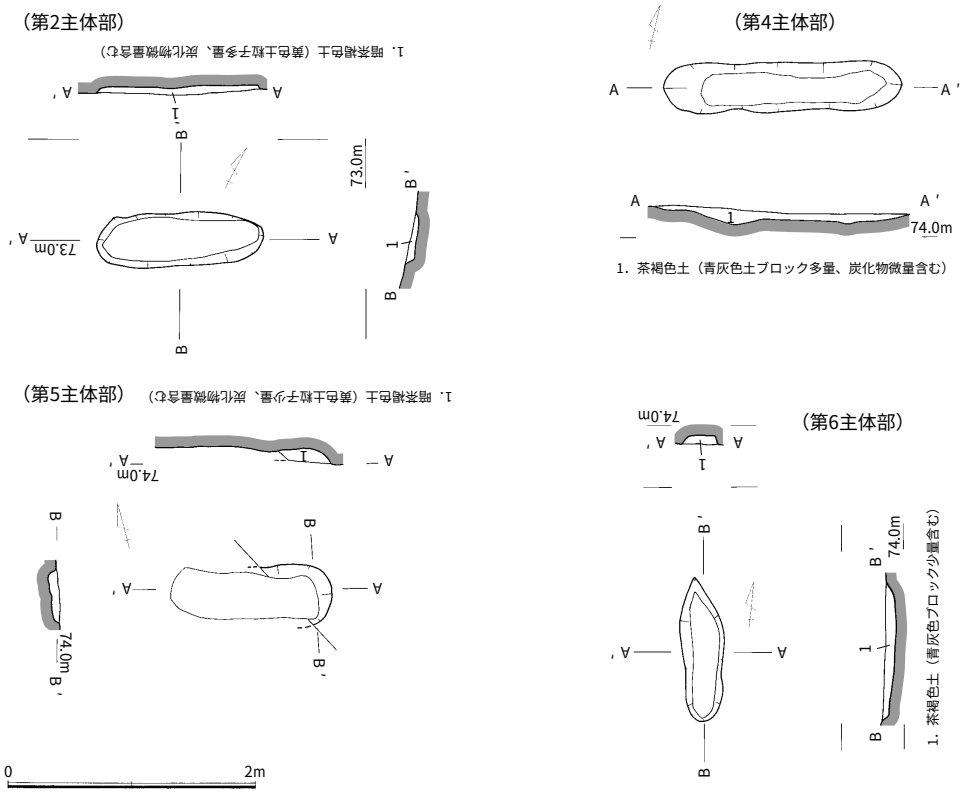
・第２主体部

第１主体部の北約１ｍにほぼ平行して存在する。残存部の長さ約1.2m、幅約67㎝、深さ約10㎝を測る、平面形は隅丸長方形を呈する墓壙である。墓壙内部から副葬品は出土しなかった。

遺　物（第150図５・６）

150－5は口径13.8㎝、器高4.6㎝を測る須恵器坏蓋である。天井部外面は回転ヘラケズリを施し、口縁部内面には浅い沈線を施す。時期は大谷編年出雲４期のものである。

150－6は古墳に直接伴わないものである。複合口縁の甕で、口径6.6㎝を測る。内面は頸部以下にヘラケズリを施す。出雲Ⅴ－４様式のものとみられる。



第141図　**Ⅳ**区１号墳第２、第４、第５、第６主体部実測図（Ｓ＝１／60）

［ＳＩ０１］

遺　構（第152・153図）

Ⅳ区の標高72m付近に存在する竪穴住居跡である。一辺約5.5mの隅丸方形を呈し、住居跡の縁辺には、幅約40～60㎝で、断面が浅いレンズ状を呈するテラスがコの字形に廻っている。

床面からは主柱穴４基と、小形の柱穴３基が検出され、その全てで柱痕が確認できた。

それによると柱は全て直径15㎝前後の丸材であったとみられ、主柱穴の柱痕の中心間の距離は約2.75m前後であった。主柱穴は直径約60㎝程度で、深さ約65～70㎝であった。Ｐ１のみ直径約80㎝と、他の主柱穴に比べて大きめであった。

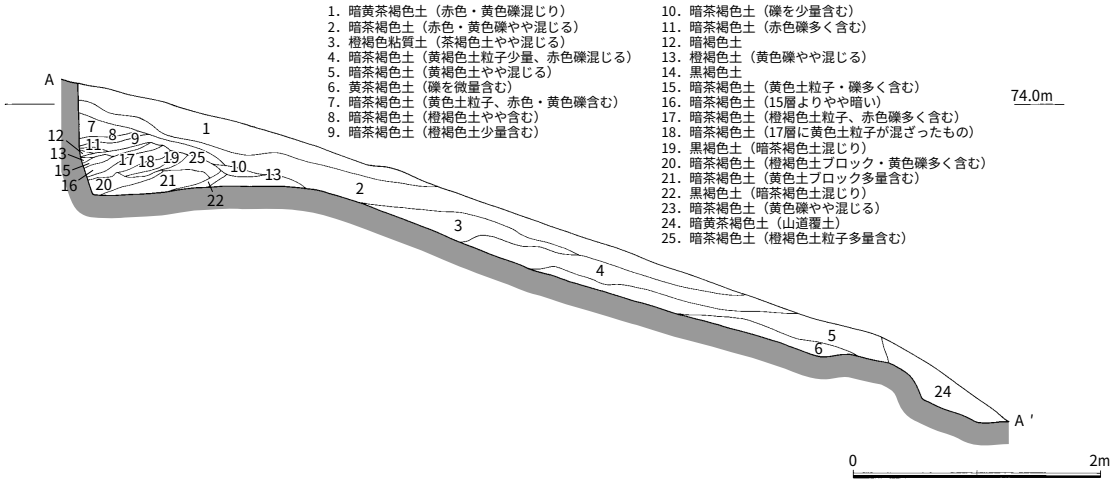
Ｐ１のプラン検出段階では、柱痕が柱穴の南寄りに一箇所しか確認されなかったが、柱穴の完掘段階になってはじめて、このピットは掘り直しが行われていたことを確認した。

Ｐ１とＰ２の中間には、小ピットＰ６、Ｐ７が存在するが、これも元はＰ７の位置にあった柱を、改築の際にＰ６の位置に据え直したものとみられる。

床面ほぼ中央には中央ピットを検出した、プラン及び断面観察でも柱痕は確認されなかったことから、このピットは柱穴ではなく何らかの作業用ピットであったと考えられる。中央ピット周辺には、焼土と炭化物の集中がみられた。

また、壁面沿いには、幅約10～15㎝、深さ約５㎝を測る壁体溝が掘られている。北東コーナー付近以外の壁体溝は２本平行して存在しており。このことからも建て替えられたことがわかる。

第142図　**Ⅳ**区２号墳実測図（Ｓ＝１／60）



第143図　**Ⅳ**区２号墳土層断面図（Ｓ＝１／60）

ＳＩ０１出土遺物（第156図１～６）

156－1と156－2は覆土中から出土した複合口縁の甕である。156－1は口径10.8㎝、口縁端部は細く引き上げる形態をとるもので、外面に凹線などはない。肩部には櫛書きによる波状文を施す。内面の頸部以下はヘラケズリを施している。Ｖ－４様式のものと思われる。

156－2は口径20.2㎝。口縁端部は薄く引き上げる形態をとるもので、内外面とも風化が激しいため調整は不明である。形態からみてＶ－４様式のものと思われる。

156－3はＳＩ０１覆土上面からの出土であるため、本遺構に伴う可能性が低いものである。複合口縁をもつ壺の破片で、口径15.8㎝、口縁は大きく外反する。草田６期に属するものと思われる。

156－4・5は同一個体とみられる高坏。口径は23.6㎝で、太さ４㎝ほどの脚が付く。坏部と脚部は、外面中央に約２㎜の深さの刺突痕がある円盤を充填して接合されている。Ｖ－４様式のものと見られる。

156－6は白色でやや軟質の石材で作られた砥石。両端を欠くが、現状での長さは10㎝、幅3.3㎝、厚さ2.4㎝を測り、断面形はやや歪んだ長方形を呈す。各面ともに擦痕が残っている。

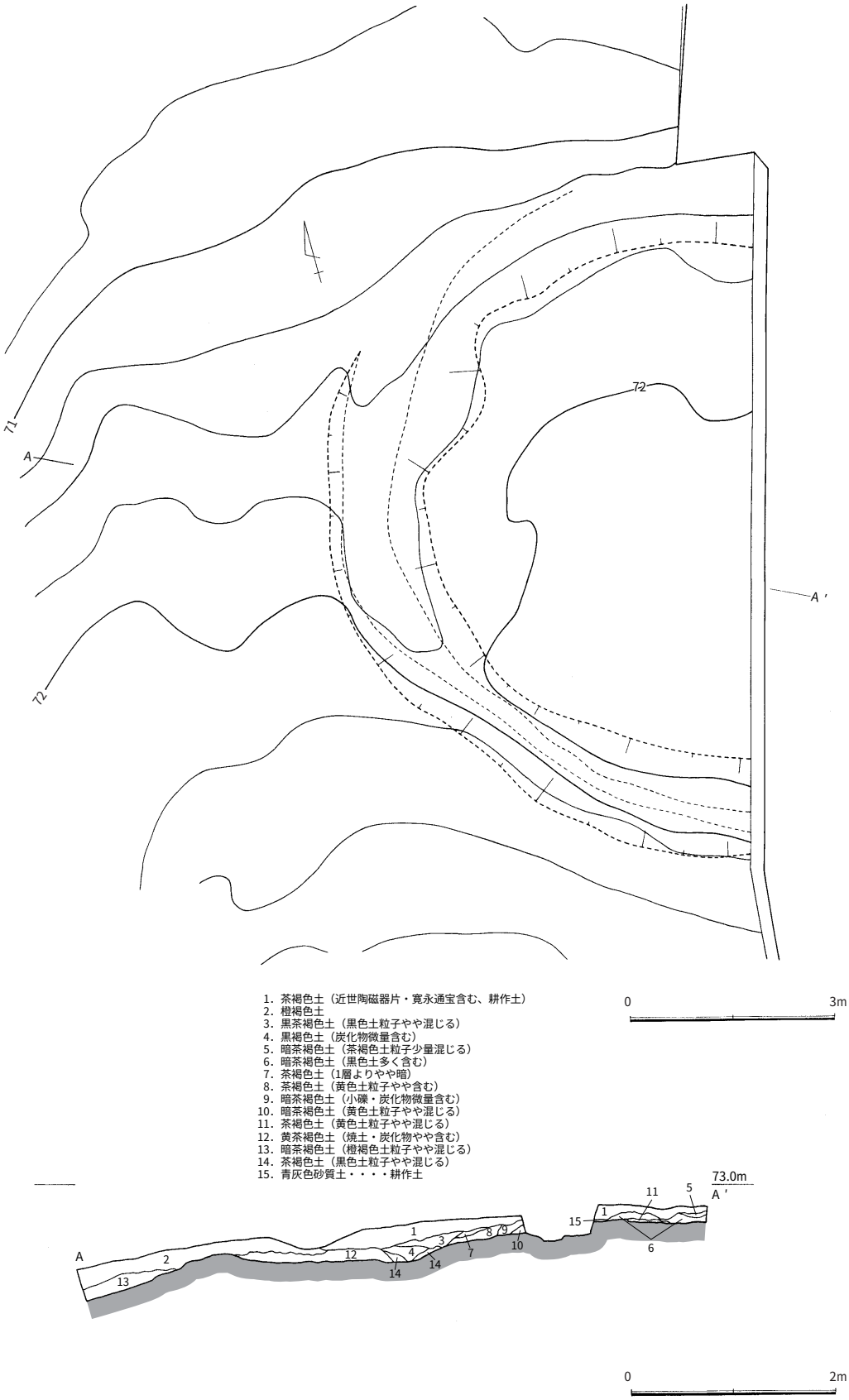
［ＳＩ０２・ＳＩ０４］

遺　構（第154図）

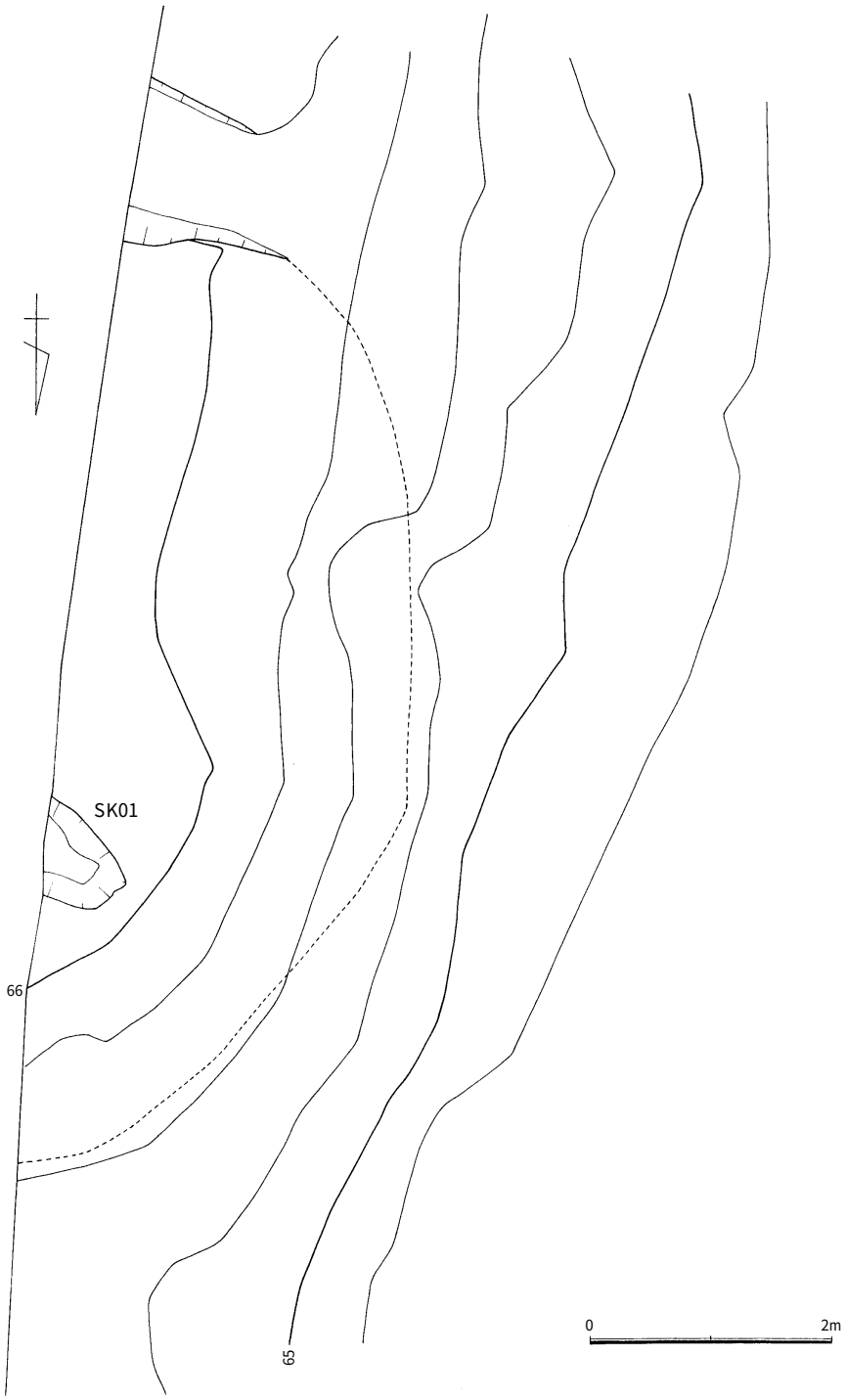
ＳＩ０２は、ＳＩ０１のやや南東に隣接する竪穴住居跡である。約半分が調査区外であるため、全容は不明であるが、調査を行った部分から推定して、一辺約５ｍ前後の隅丸方形を呈するものであると思われる。住居跡のほぼ中央には前述した３号墳の周溝が通っており、それによって西側コーナーの壁面が一部破壊されている。

住居の上端から床面までの深さは、南壁では約１ｍを測る。床面には西側コーナー付近で直径約38㎝、深さ約45㎝の柱穴１基を検出した。壁面沿いには幅約15㎝、深さ約５㎝の壁体溝が廻っている。

ＳＩ０４はＳＩ０２の北に隣接する竪穴住居跡である。この住居跡も約半分が調査区外であるため、全容は不明である。現状から推定して、一辺約５ｍの隅丸方形と思われる。住居の上端から床面までの深さは、南壁部分では約１ｍを測る。床面では南東コーナー及び北西コーナー付近の床面



第144図　**Ⅳ**区３号墳実測図（Ｓ＝１／90　土層はＳ＝１／60）



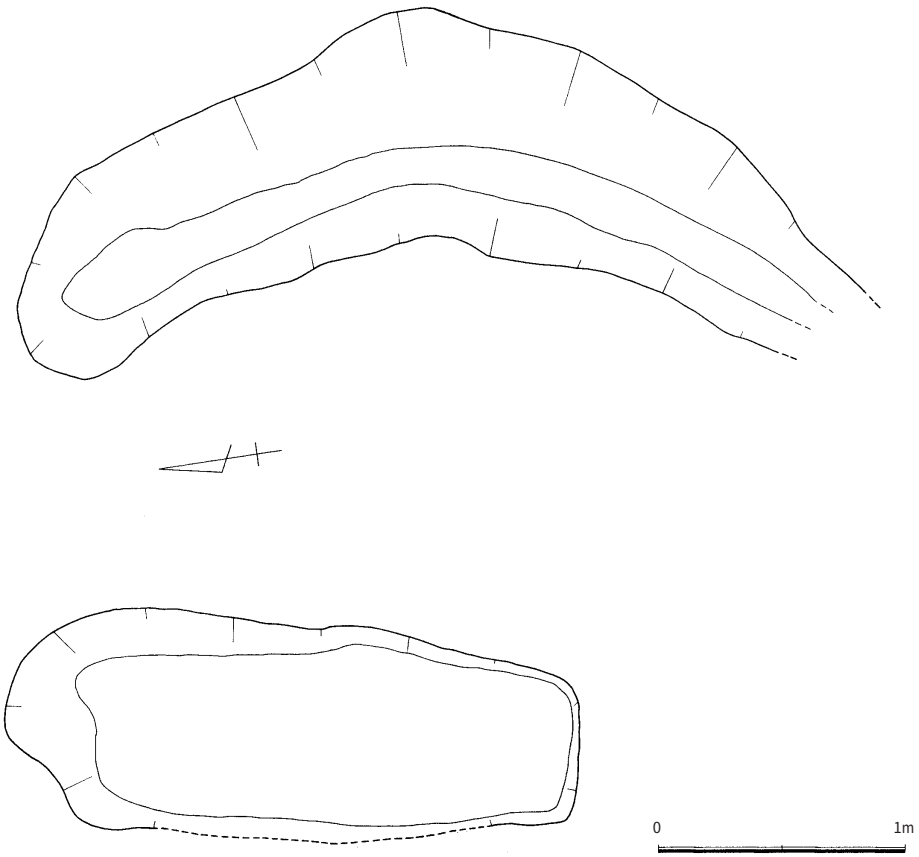
第145図　**Ⅳ**区４号墳実測図（Ｓ＝１／60）

で主柱穴を検出した。北西の柱穴は直径約60㎝、深さ約43㎝で、プラン検出時にはやや南東寄りで柱痕を確認した。南東の柱穴は半分以上が調査区外になっているが、直径約45㎝、深さ約50㎝を測る。柱痕も確認でき、それによると、柱痕の中心間の距離は約2.35m、柱の太さは約20㎝前後だったと考えられる。

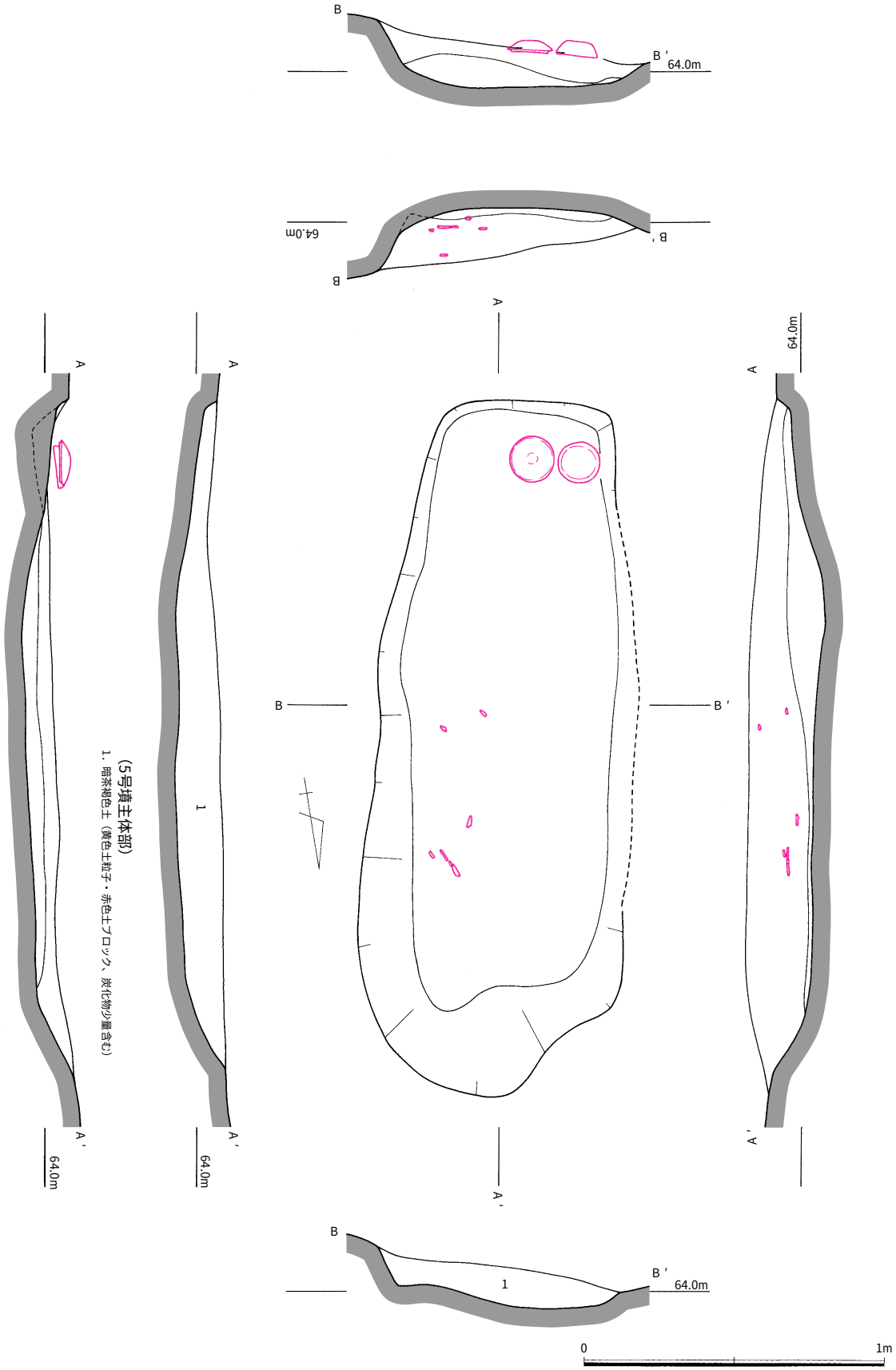
住居床面のほぼ中央には調査区壁面沿いに、中央ピットとみられる落ち込みを一部検出している。また、この中央ピットを中心として、床面には広範囲にわたって焼土と炭化物の分布が見られた。

住居跡の縁辺には、ＳＩ０１と同様に住居に沿って幅約35㎝のテラスが廻っている。プラン検出時の状況では、このテラスをＳＩ０１のテラスが切り込んで作られていることが確認できた。このことからＳＩ０４はＳＩ０１にやや先行して作られたものと考えられる。

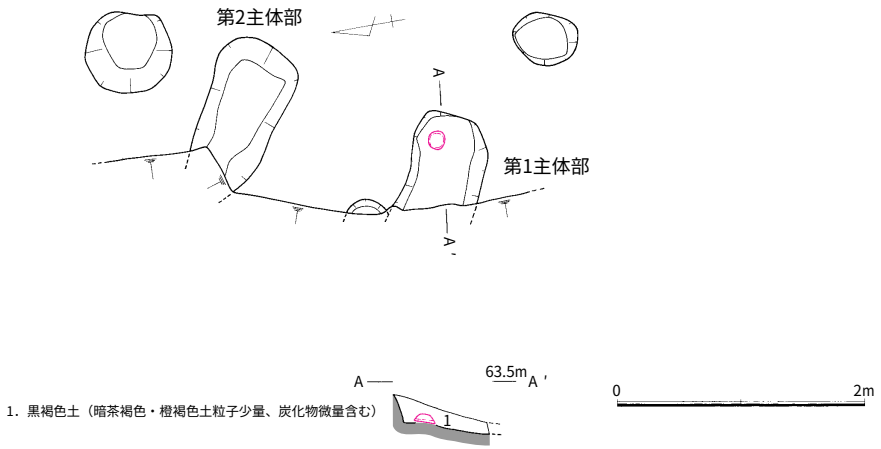
また、このテラスについて気になる点がひとつある。ＳＩ０４の土層を観察すると、テラス部分に堆積した層と住居内に堆積した層との間に、明らかな断絶が認められる点である。同様にテラスを持つＳＩ０１では、テラス上から自然な流れで住居内に土砂が堆積しているのに比べ、異質な印象を受ける。なぜこのような堆積になっているのか現時点では言及しかねるが、あるいはＳＩ０４も建て替え等が行われているのかもしれない。



第146図　**Ⅳ**区５号墳実測図（Ｓ＝１／30）



第147図　**Ⅳ**区５号墳主体部実測図（Ｓ＝１／20）



第148図　**Ⅳ**区７号墳実測図（Ｓ＝１／60）

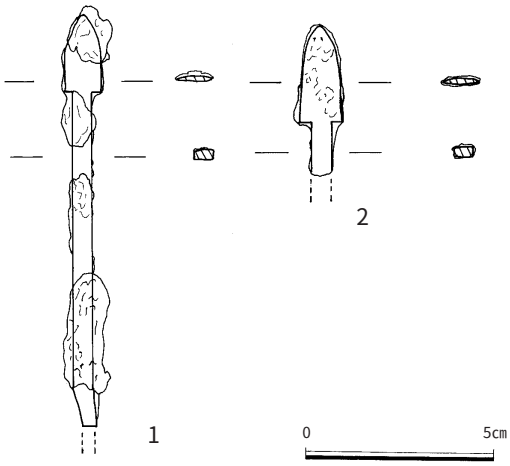
ＳＩ０２出土遺物（第156図７～14）、ＳＩ０４出土遺物（第157図11～14）

ここに述べる遺物で各住居跡に直接伴うと考えられるものは、ＳＩ０２が156－7、ＳＩ０４が157－14のみである。その他の遺物は全て、２つの住居の埋没後、その上面に堆積した黒褐色土中から出土したものである。

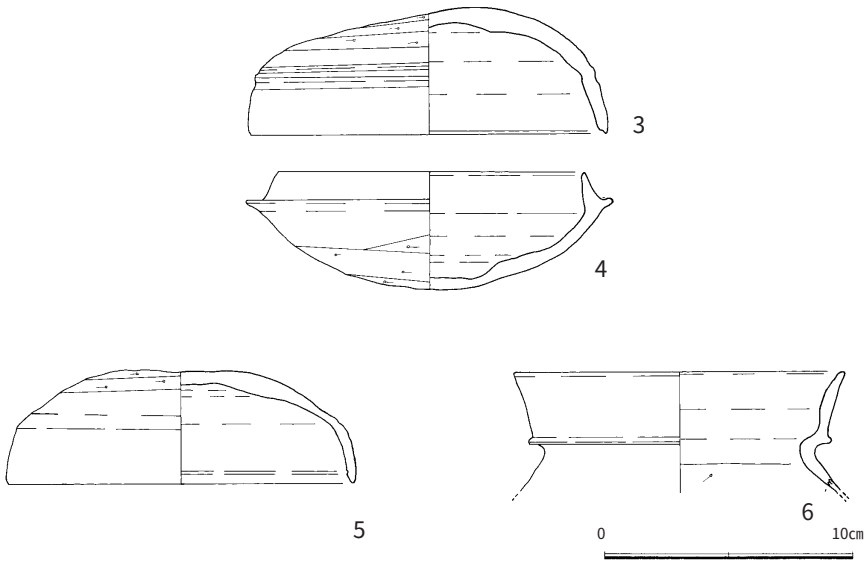
156－7は口径21.0cmを測る単純口縁の鉢である。胴部外面にはハケ目調整が施され、内面は頸部以下にヘラケズリを施している。出雲Ｖ－４様式とみられる。156－8は口径14.2cmを測る複合口縁の甕である。口縁端部はわずかに外方へ引き出され、外面肩部には櫛描き横線文が施され、内面は頸部以下にヘラケズリを施すものである。草田６期の範疇に含まれるものと思われる。

156－9は口径13.2cmを測る複合口縁の甕である。口縁端部は上方に引き出されたように細くなっている。出雲Ｖ－４様式の範疇に含まれるものと思われる。

156－10は口径11cmを測る単純口縁の小型甕か？内面頸部以下はヘラケズリ後にナデ調整を施したとみられる。156－11は口径20.4cmを測る単純口縁の鉢。口縁部は外方に屈曲するが、口縁端部はやや内傾する。器表面の色調は黒灰色で、風化のため判別しにくいが、ヘラミガキが施されていたとみられる。内面は頸部以下にヘラケズリが施されていたとみられる。156－12は口径15.2cmを測る高坏である。坏部が二ヶ所で屈曲するもので、表面は内外面とも朱が塗られている。胎土もよく精製されたものである。156－13は口径19.1cmを測る鼓形器台である。筒部は痕跡化し、その内面は稜線と化し、そこから下の調整はヘラケズリを施す。草田７期の範疇に含まれるものとみられる。156－14も口径18.4cmを測る鼓形器台である。器受部のみの破片であるため、時期は不明である。157－11は口径13.6cmを測る複合口縁の甕である。口縁部はやや厚めで、端部に平坦面を持つ。草田７期の範疇に含まれるものとみられる。157－12は口径18.2cmを測る複合口縁の壺である。頸部を大きく外反させ、口縁部はそこからやや内湾しながら上に向かって屈曲している。157－13は口径30.8cmを測る高坏である。風化が激しく調整は不明である。157－14はＳＩ０４の床面北西壁近くで出土した凹石である。平面形はわずかに卵形を呈するもので、長さ10.4cm、幅9.1cm、厚さは7.9cmを測る。裏表両方に直径約2.5cm程度の窪みをつけている。



第149図　**Ⅳ**区５号墳出土鉄器（Ｓ＝１／２）



第150図　**Ⅳ**区５号墳・７号墳出土土器（Ｓ＝１／３）

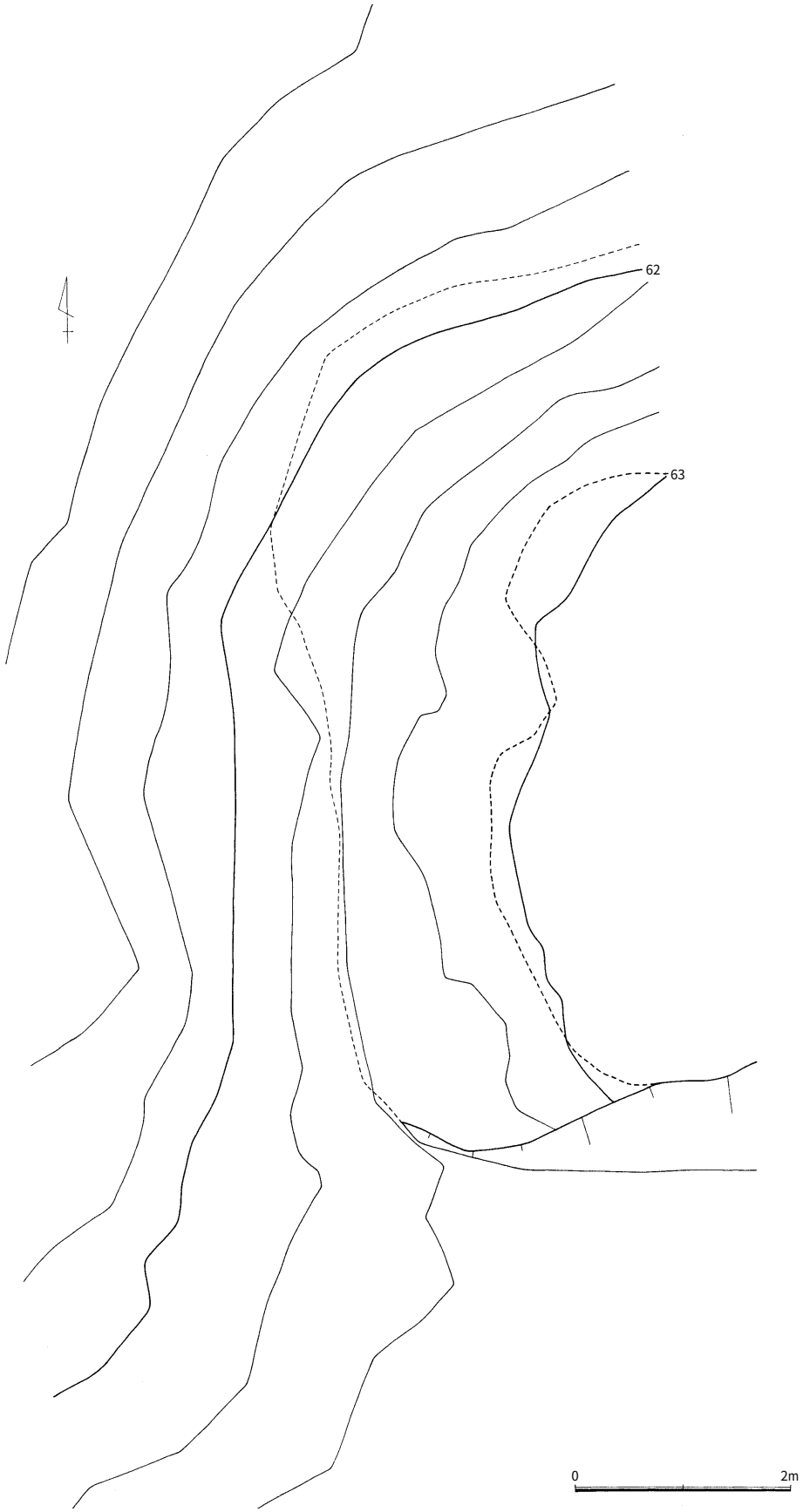
［ＳＩ０３］

遺　構（第155図）

ＳＩ０１から北へ約６ｍ下がった、標高70m付近に存在する竪穴住居跡である。東壁部分は調査区外であるため確認できていないが、平面形は隅丸長方形で、南北約7.3m、東西約６ｍの規模と推定される。この住居は最低２回は建て替えられたとみられ、壁体溝が壁面にあるもの以外にも床面に２本検出された。土層観察では、覆土中に壁面の立ち上がりがみられなかったので、この住居は当初は一辺５ｍ程の規模であったものが、徐々に外側に向けて拡張されていったものと考えられる。

床面上には多数の柱穴を検出したが、柱穴のセット関係は明確にできなかった。

床面のほぼ中央には、長軸約1.45m、短軸約1.1m、深さ約65㎝を測る、不整形の中央ピット１基



第151図　**Ⅳ**区６号墳調査後地形測量図（Ｓ＝１／60）

を検出した。また、中央ピットの南西約80㎝の床面上に、作業台とみられる扁平な石材１点を検出している。

ＳＩ０３出土遺物（第157図１～10）

本遺構では、覆土である黒褐色土内から床面にかけて、かなりの数の土器片が出土している。

157－1は口径15.2㎝を測る複合口縁の甕である。口縁端部にはわずかに外傾した平坦面を持ち、内面は頸部以下にヘラケズリを施している。草田６期または草田７期の範疇に含まれるとみられる。157－2は口径13.8㎝を測る複合口縁の甕である。口縁端部は上方に引き伸ばされたように細くなっている。出雲Ｖ－４様式の範疇に含まれるとみられる。157－3は口径14.4㎝を測る複合口縁の甕である。口縁端部はやや厚みがあり、口縁部外面の稜も突出が弱い。草田６期または草田７期の範疇に含まれるとみられる。157－4は口径15.2㎝を測る複合口縁の甕である。口縁部は外側にやや強く反り、口縁端部はわずかに平坦面を持つ。内面は頸部以下にヘラケズリを施す。草田６期または草田７期か？

157－5は口径17.2㎝を測る複合口縁の甕である。口縁部は幅広で、端部はわずかに外反している。出雲Ｖ－４様式の範疇に含まれるとみられる。157－6は口径13.6㎝を測る複合口縁の甕である。口縁端部はやや厚みがあり、口縁外面の稜も突出は弱めである。内面は頸部以下にヘラケズリを施す。草田６期または草田７期とみられる。157－7は、口径15㎝を測る単純口縁の甕である。口縁部は外方に強く屈曲し、端部は平坦面をもつ、内面は頸部以下にヘラケズリを施す。157－8は口径20.6㎝を測る複合口縁の壺である。口縁部は厚みがあり、大きく外反している。草田７期の範疇に含まれるとみられる。157－9は口径16.2㎝を測る。壺と思われる器種である。口縁部は上下に拡張され、厚みがある。口縁外面には波状文を施している。157－10は口径21.8㎝を測る高坏である。調整は縦方向にヘラミガキした後、その上からナデ調整を施している。

［加工段１］

遺　構（第134図）

１号墳の北西において、南北約15m、東西約５～８ｍを測る大型の加工段を検出した。加工段上には掘立柱建物や、布掘建物とみられる遺構の他、柱穴や溝を検出しており、遺構面上からは弥生時代後期の土器片が出土していることから、加工段はこの時期に造成されたものと考えられる。また、加工段１の南端部斜面からは、須恵器と土師器の破片が出土している。

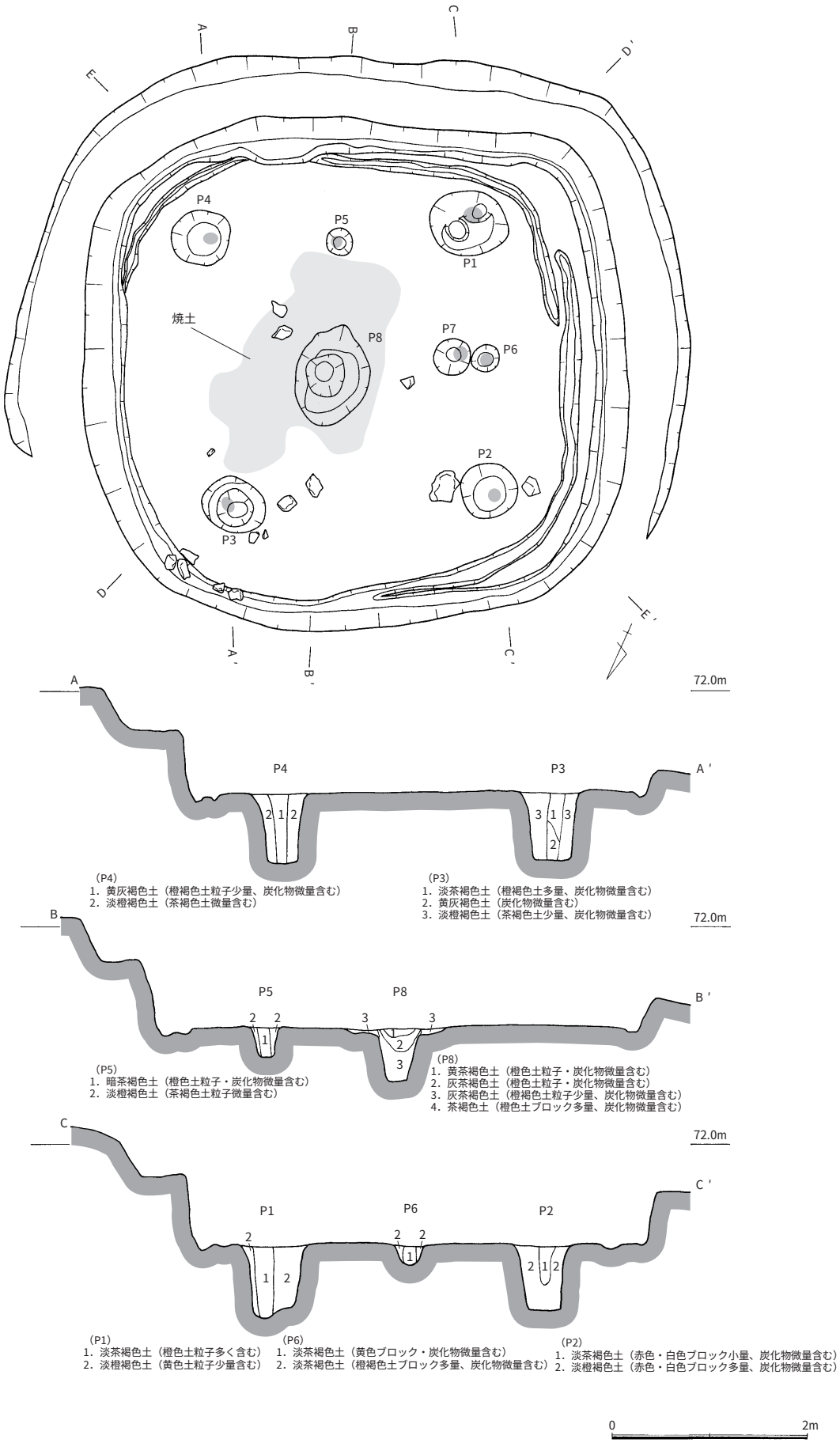
加工段１出土遺物（第164図４・５）

164－4・164－5は共に加工段南端の斜面から出土。164－4は口径25.8㎝を測る、単純口縁の土師器甕である。胴部は外面にハケメが残り、内面は頸部以下にヘラケズリを施す。164－5は底径9.2㎝を測る須恵器壺とみられるものである。内外面は回転ナデ調整が施され、外面底部付近のみ回転ヘラケズリ後に回転ナデ調整を施している。底部には高さ１㎝で、断面長方形の高台が付く。高台内は回転ヘラケズリ調整である。

［ＳＢ０１］

遺　構（第158図）

加工段１上で検出した、桁行２間、梁間１間の掘立柱建物跡である。主軸を北西－南東方向に取



第152図　**Ⅳ**区SI01実測図（１）（Ｓ＝１／60）

り、規模は桁行約３m、梁間約2.3mを測り、桁行の柱穴の間隔は約1.4～1.6m、梁間の柱穴の間隔は約2.3mを測る。柱穴の深さは南隅の柱穴のみ深さ約80㎝と深いが、他の柱穴は約45～60㎝である。

ＳＢ０１出土遺物（第164図１～３）

ＳＢ０１付近の遺構面上からは、多数の土器片が出土しているが、図示できるものは少ない。164－１は、口径13.2㎝を測る複合口縁の甕である。口縁端部は上方に薄く引き出したようになっている。出雲Ｖ－４様式の範疇に含まれるとみられる。164－2は口径13.6㎝を測る単純口縁の甕である。口縁部は頸部から鋭く屈曲し、端部はやや内湾する。内面は頸部以下にヘラケズリを施す。他地域からの搬入品であろうか？164－３は底径3.4㎝を測る壺または甕の底部である。外面にはタタキ成形の痕跡が明瞭に残る。近畿地方の庄内式土器の特徴を持つものである。

［方形溝状遺構］

遺　構（第159図）

加工段１の南西部、尾根がやや突出したところで検出した遺構である。一辺の長さ約3.5mの正方形プランを呈し、溝の深さは、南東部分は約30㎝あるが、北東と南西部分の溝では約20㎝を測る。断面形は逆台形である。北西側の溝は風化のためか約10㎝と浅めである。４辺とも溝の底面のレベルはほぼ同じである。この遺構は形態からみて布掘建物跡である可能性がある。この遺構からは遺物は出土していない。

方形溝状遺構の背後、加工段１の壁面前に長さ約６m、深さ約10㎝を測る浅い溝状遺構が存在し、それに沿うように柱穴が３基存在している。そのうち中央の柱穴は、方形溝状遺構によって一部壊されていることから、方形溝状遺構が構築される以前にも建物跡が存在したと考えられる。

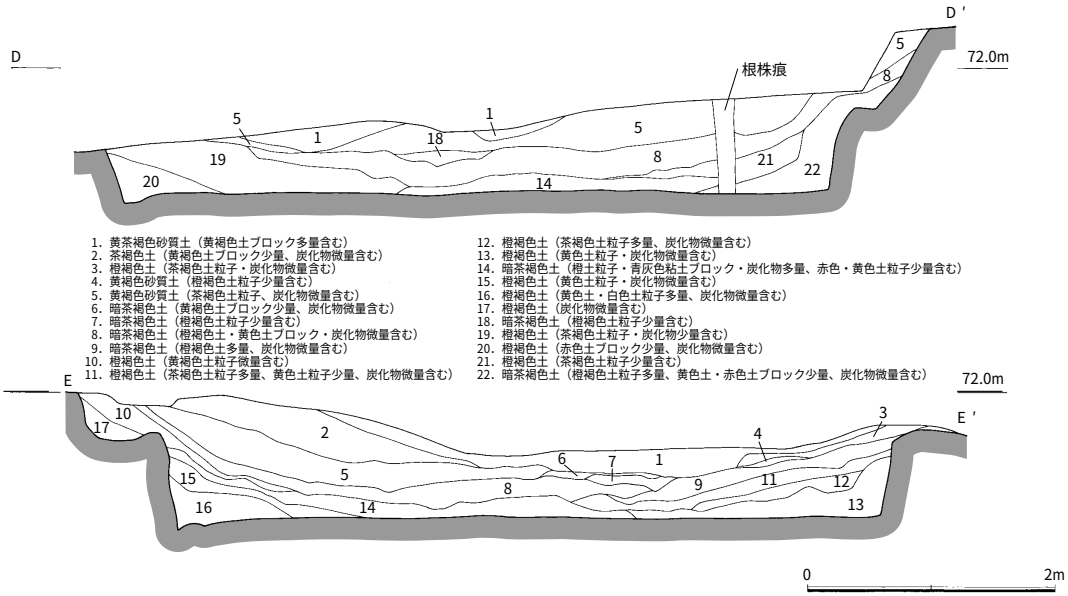
［加工段２］

遺　構（第160図）

１号墳の北側に位置する加工段遺構である。段の東側は調査区外であるため、全体の規模は不明であるが、調査を実施した部分の規模は、北西－南東ラインで約8.3m、を測る。北側部分は後世の開墾を受けて破壊されているため、現状では最大で約３m程度である。この加工段の壁面は真ん中あたりで急に屈曲していることから、加工段２は２基の加工段が切りあっているものと推測される。また、東半部分には壁面に沿って底面幅約10㎝の壁体溝が付属し、それに沿って直径約40㎝の柱穴２基が検出された。さらに床面にはもうひとつの隅丸方形状を呈する壁体溝状の細い溝が検出されたことから、竪穴住居跡も存在していた可能性がある。よって加工段２には合計３つの遺構が複合しているものと思われる。

加工段２出土遺物（第164図６・７）

164－６は加工段北西部からの出土した小型甕である。頸部から上を欠いており、時期の判別が困難であるが、底部が丸底であることからみて、草田７期の範疇かもしれない。器表面には数箇所に指頭圧痕が残り、内面は頸部以下にヘラケズリを施す。164－7は加工段南部壁体溝付近の床面から出土。口径20.8㎝、底径5.5㎝、器高5.8㎝を測る低脚坏である。大型の坏部を持つもので、特徴から草田６期の範疇に属するとみられる。風化が激しく調整は不明である。



第153図　**Ⅳ**区SI01実測図（２）（Ｓ＝１／60）

［加工段３］

遺　構（第161図）

標高65.5m地点の斜面で検出した加工段。西側部分は流失しており全体像は不明であるが、現状では長軸約5.15m、短軸約1.1mを測る。山側にコの字状の壁面を持ち壁面沿いには深さ約５㎝、底面の幅約20㎝の壁体溝を廻らす。床面には壁体溝に沿って直径約30～40㎝、深さ約30㎝の３基の柱穴が一列に並んでいる。

遺　物（第164図８）

164－8は覆土中から出土。口径14.4㎝を測る、複合口縁を持つ甕である。口縁端部はやや外方に折り曲げたようになっている。内面は頸部以下にヘラケズリを施す。特徴からみて、草田６期の範疇に属するものとみられる。

［加工段４］

遺　構（第162図）

Ⅳ区ほぼ中央付近の斜面、標高67m付近で検出した加工段である。遺構は崩壊が進み、壁体溝が残存しているのみであった。隣接するピット２基との関係は不明である。壁体溝は最大幅約50㎝、深さ約５㎝を測る。

加工段４出土遺物（第164図９・10）

本遺構に伴うものかは不明であるが、周辺から土器数点が出土している。164－9は口径17.8㎝を測る複合口縁の甕である。口縁端部はわずかに外方に折り曲げている。草田６期の範疇に属するものとみられる。164－10は上部と脚部を欠くが、胴部最大径は約13.7㎝を測る脚付の甕か壺である。脚部には幅の広い凹線文３条を施し、貫通しない円孔が１個ある。

［加工段５］

遺　構（第162図）

加工段４の北側、標高約66.75mに位置する。遺存状態は悪く、壁体溝のみが残存している。壁体溝は長さ5.1m、深さ約５㎝を測る。出土遺物はなかったため、時期等は不明である。

［加工段６］

遺　構（第162図）

４号墳の西側、標高約65mに位置する。遺存状態が悪く、壁体溝のみが残存している。遺構名は一つにしたが、実際は２または３つの加工段が重複しているとみられる。西の壁体溝は平面形はコの字状を呈し、長さ約4.3m、幅約25㎝、深さ約５㎝を測る。

東側の壁体溝は、長軸約５m、幅約30㎝深さ15㎝を測る。南部に向かって溝は幅広になり、最終的に２つに分岐している。このことにより、西の壁体溝は２時期の遺構が切りあっているとみられる。出土遺物もなかったため、時期等は不明である。

［加工段７］

遺　構（第162図）

５号墳の南に隣接する加工段である。遺存状態が悪く壁体溝のみ残存している。平面形はコの字型を呈し、長さ約2.7m、幅約40㎝、深さ約５㎝を測る。

北側コーナー内側に直径約25㎝の柱穴１基が存在するが、それ以外に本遺構に伴うとみられるものはなかった。出土遺物もなかったため、時期等は不明である。

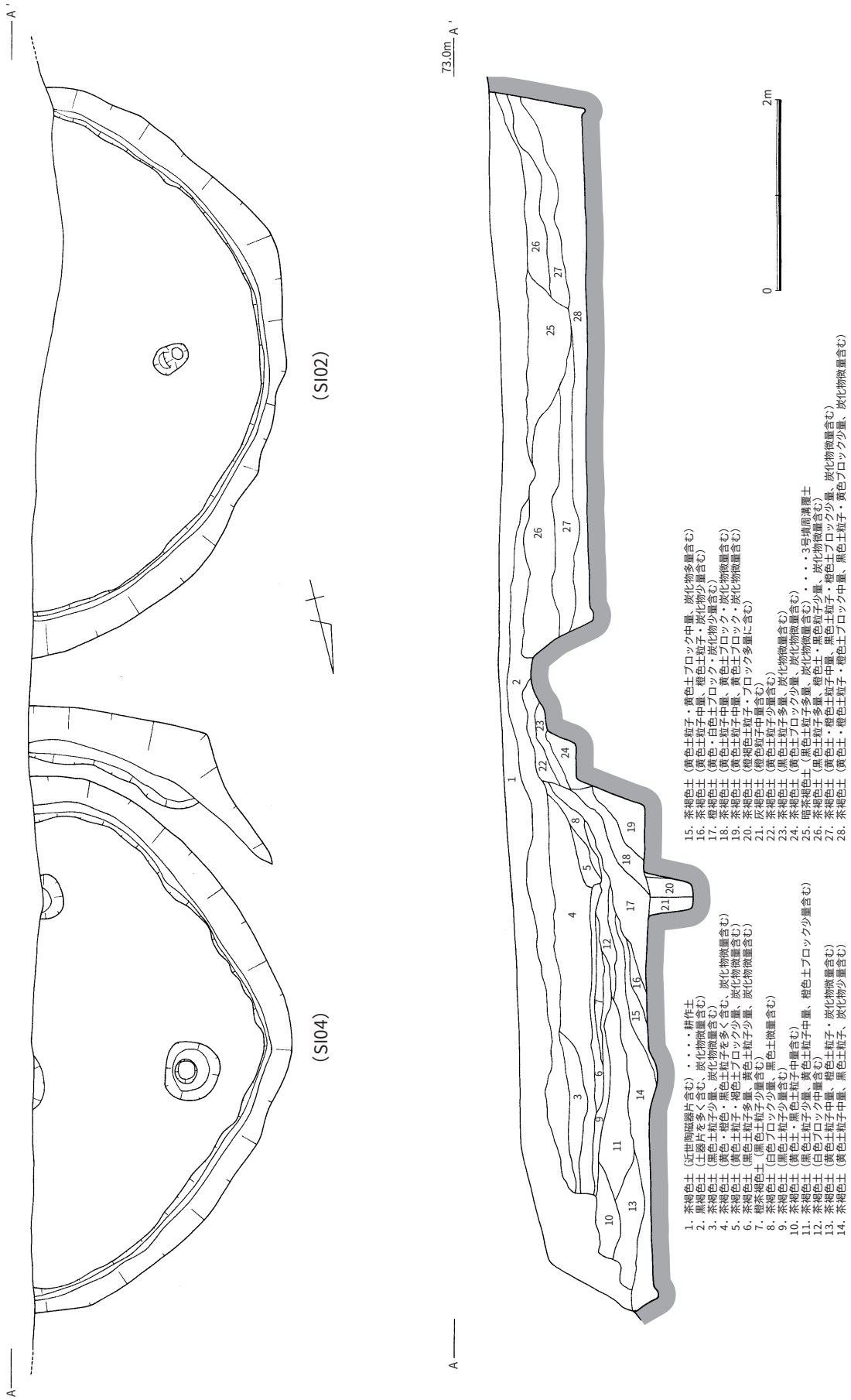
［加工段８］

遺　構（第163図）

ＳＩ０３の北側、標高68m付近に位置する。遺構の西半分は遺存していなかったが、現状での規模は、長軸約5.7m、短軸約1.5mを測り、壁面に沿って壁体溝がコの字に廻っている。床面付近では南側のコーナー付近で直径約50㎝の柱穴１基、加工段の西側で直径40～50㎝の柱穴３基を検出した。

加工段８出土遺物（第165図１～８）

本遺構では、覆土中から比較的多くの遺物が出土している。165－1は、口径15.8㎝を測る複合口縁の甕である。口縁端部はやや外方に折り曲げられ、外面には肩部に波状文が施文されている。内面は頸部以下にヘラケズリを施す。草田６期のものとみられる。165－2は、口径16.2㎝を測る複合口縁の甕である。口縁端部はやや外方に折り曲げ気味になっている。内面には頸部やや下からヘラケズリを施す。時期は草田６期のものとみられる。165－3は、口径18.8㎝を測る複合口縁の甕である。口縁端部は上方に引き上げられたような形態である。出雲Ｖ－４様式とみられる。165－4は、口径16.4㎝を測る複合口縁の甕である。口縁端部はやや厚みがある。内面は頸部以下にヘラケズリを施す。出雲Ｖ－４様式か？165－5は、口径15.8㎝を測る複合口縁の甕である。口縁端部は上方に引き上げられたような形態である。出雲Ｖ－４様式もしくは草田６期とみられる。165－6は、口径



第154図　**Ⅳ**区SI02、SI04実測図（Ｓ＝１／60）

13.2㎝を測る複合口縁の甕である。草田６期とみられる。165－7は、口径15.6㎝を測る単純口縁の甕である。口縁端部に面を持ち、頸部内面以下はヘラケズリを施す。近畿庄内式のものか？165－8は、口径24㎝を測る高坏である。坏部は中ほどまで内湾し、そこから口縁端部までは外反するものである。

［ＳＫ０３］

遺　構（第166図）

加工段６の南西で検出した袋状の土壙である。検出面では直径約80mの円形を呈し、検出面からの深さ約１m、東側の壁面はさらに約20㎝程度奥へ膨らんでおり、底部はほぼ水平で長径約90mを測る。

土壙の内部には黒褐色土を中心とした層が底部まで堆積していたが、それに混じって弥生時代中期の土器の大型の破片が数多く出土した、出土状況からみて、貯蔵穴として使用されなくなった際に壊れた土器をここに廃棄したものと考えられる。

ＳＫ０３出土遺物（第169図１、第170図１・２）

169－1は口径26.8㎝を測る広口壺である。口縁部は朝顔形に大きく開き、端部に平坦面を有する。端部外側にはヘラ状工具による刺突文を廻らせ、平坦面には２条の凹線文を施す。口縁内側には３条の波状文を廻らせている。器表面には頸部に５条の凹線文を施し、肩部から胴部最大径付近にかけて、櫛描による直線文と波状文が交互に描かれている。器表面の調整は内外面ともにハケ調整である。170－1も広口壺と思われる。頸部から上は欠損しているため、器高は不明である。胴部最大径は24㎝、底径は7.2㎝を測る。外面はハケ調整、内面は指ナデで調整されている。外面の肩部から胴部最大径の間には、櫛描による直線文と波状文が描かれている。170－2は壺または甕の底部である。底径は6.2㎝を測り、外面には縦方向にヘラミガキが施され、内面には指頭圧痕が残る。

ＳＫ０３から出土した土器はその形態的特徴から、出雲Ⅳ－１様式のものとみられる。

［ＳＫ０４］

遺　構（第167図）

４号墳の北西に存在する落とし穴とみられる土壙である。検出面での平面形は不正形な長楕円形を呈し、規模は長軸約1.5m、短軸約50㎝、床面までの深さ約1.4mを測る。床面の規模は長軸約95㎝、短軸約30㎝を測る。床面のほぼ中央に、直径約22㎝、深さ約24㎝のピットが掘られている。内部からは遺物は出土しなかった。

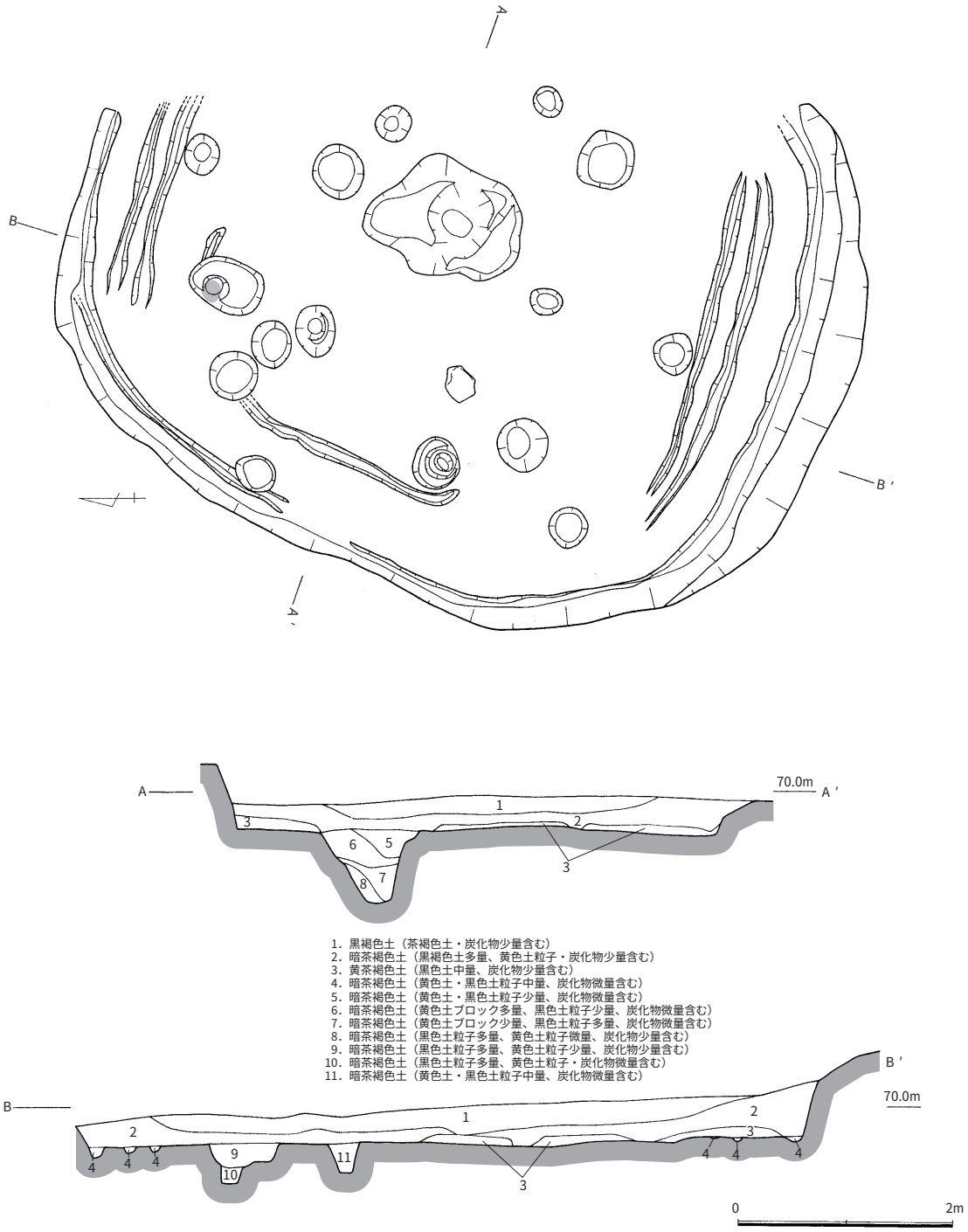
［ＳＫ０７］

遺　構（第168図）

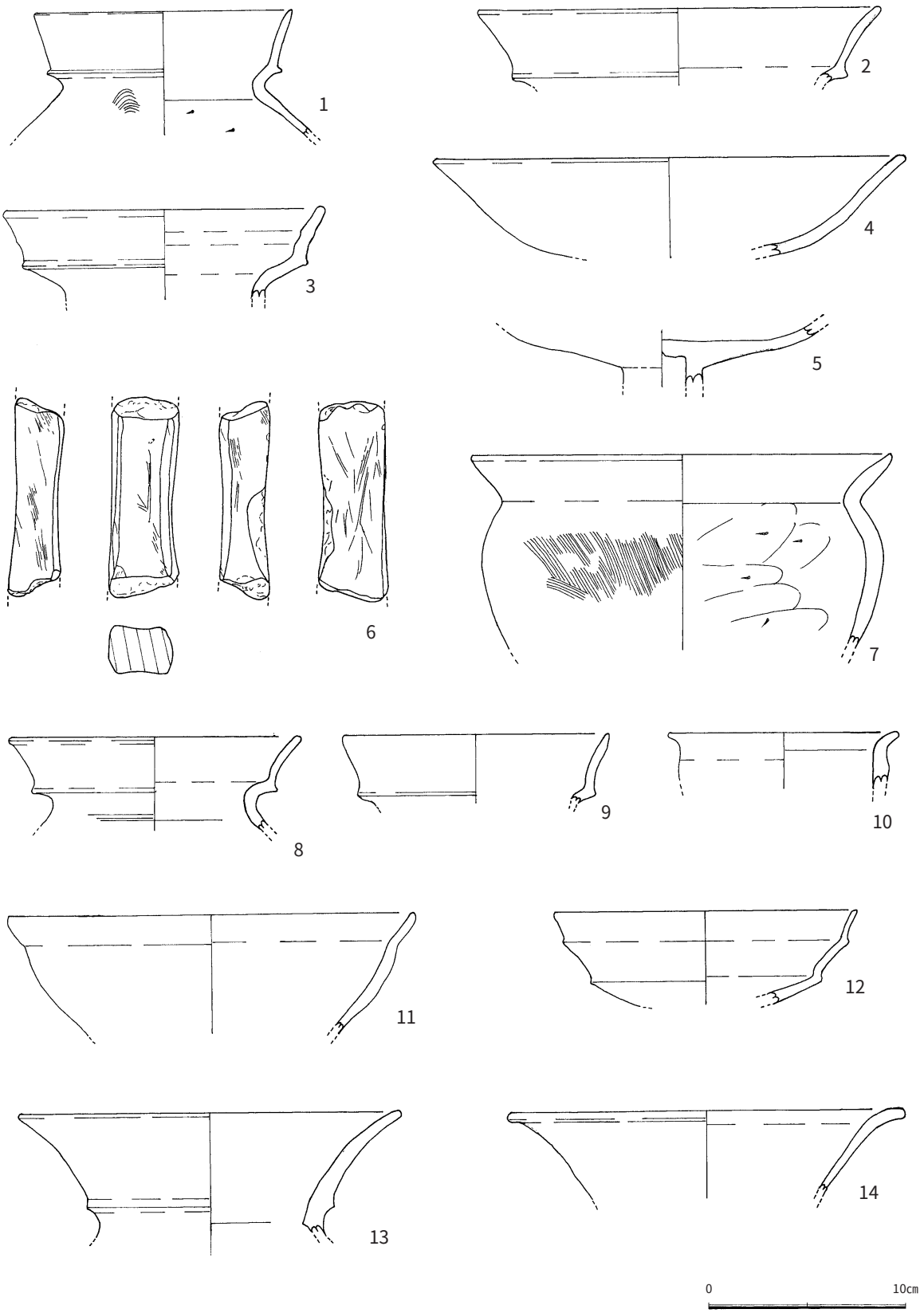
ＳＩ０１の北西で、検出した袋状の土壙である。検出面では長径約85㎝、短径約70㎝の楕円形を呈する。底面は直径約1.1mの円形で、検出面からの深さは約１mを測る。内部からは弥生時代後期末頃の土器が出土しており、この時期の遺構である可能性が考えられる。

ＳＫ０７出土遺物（第170図３・４）

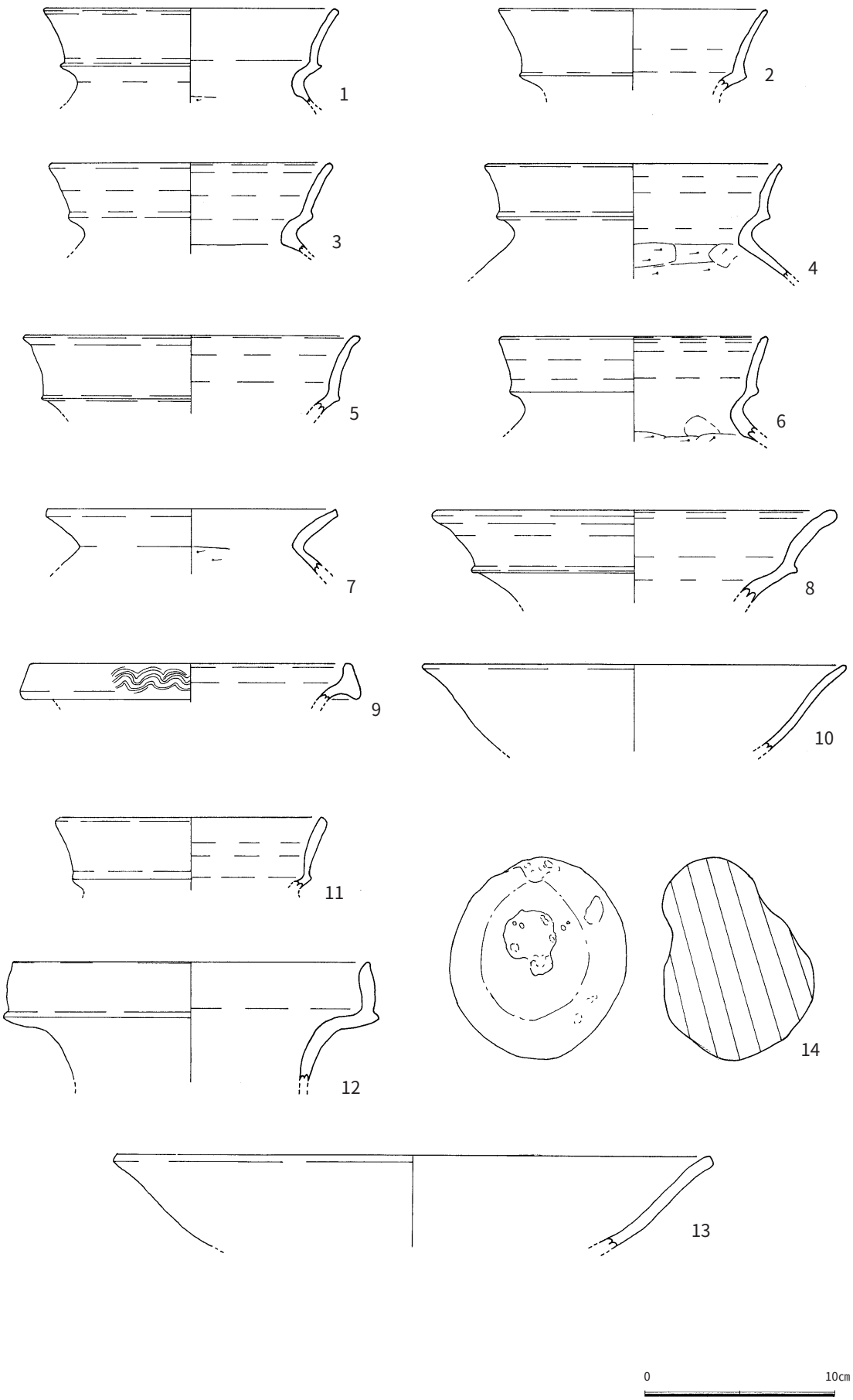
170－3は、口径15㎝を測る複合口縁の甕である。口縁端部はやや外方に折り曲げられ、外面肩部



第155図　**Ⅳ**区SI03実測図（Ｓ＝１／60）



第156図　**Ⅳ**区竪穴住居跡出土遺物実測図（１）（Ｓ＝１／３）



第157図　**Ⅳ**区竪穴住居跡出土遺物実測図（２）（Ｓ＝１／３）

には櫛描直線文が施される。内面は頸部以下にヘラケズリが施される。草田６期のものとみられる。

170－4は、口径19.2㎝を測る高坏である。坏部は下方は内湾し、途中からは外反して口縁端部に至る。風化が激しいが、内外面ともに朱を塗ったあとがみられる。

［弥生墳墓群］

遺　構（第171～173図）

６号墳の調査中に墳丘の盛土状況を確認するために調査区壁面に沿ってサブトレンチを設定し掘削を行ったところ、下層から弥生土器片が数点出土する部分があった、わずかにプランの端らしきものも確認できたため、立地条件などから、古墳の下に弥生時代の住居跡が存在すると想定していた。

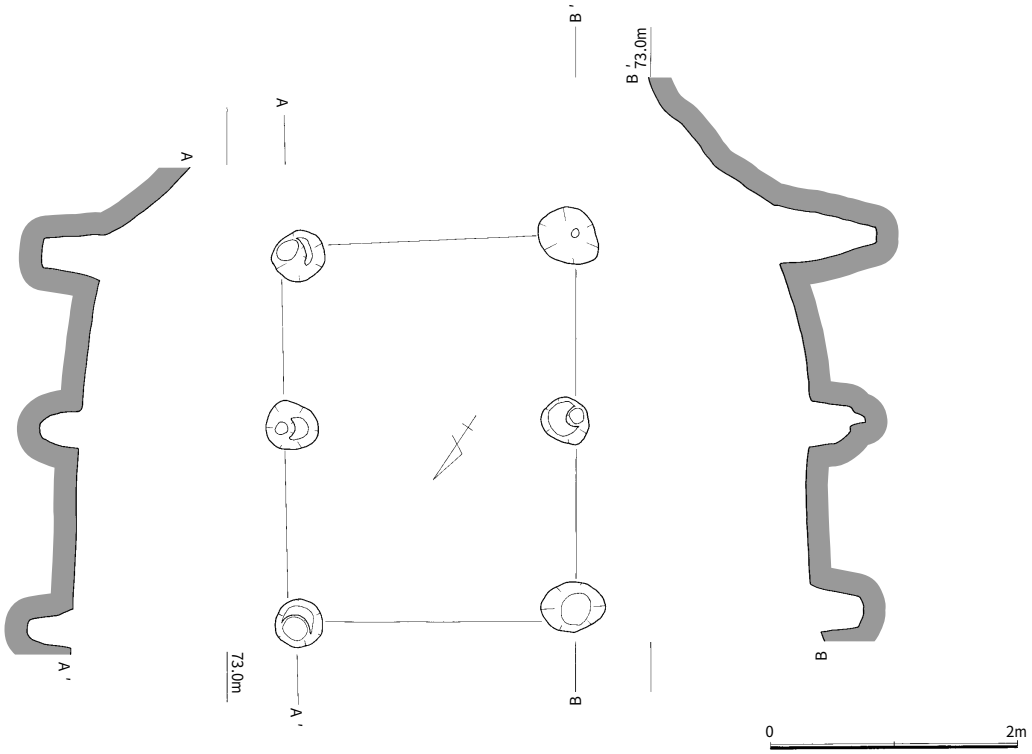
６号墳の墳丘調査を終えて盛土の除去作業を行っている際も、主にやや下層から弥生土器が出土していた。地山まで掘り終わりかけた頃、以前に住居跡であろうと想定したプランは、実は墓壙でであったことを確認した。そこで周辺を精査した結果、合計７基の墓壙プランを検出した。

・墓壙１（第173図）

Ⅳ区北端壁面沿いで検出。主軸を北東－南西方向にとり、長さ約2.2m、幅約80㎝、深さ約25㎝を測る。この部分は後世に段状に加工された際に削平を受けているとみられ、本来はもう少し深さがあったと見られる。墓壙の南西側は、北東側よりやや幅が広くなっていることから、頭位は南東方向であった可能性がある。副葬品などはなかった。

・墓壙２（第173図）

調査区壁面沿いで検出。サブトレンチ掘削時に検出したのはこの墓壙であった。主軸をほぼ南北にとり、長さ約2.4m、深さ約70㎝を測る。幅は東壁が調査区外であるため不明であるが、おそらく１m程度と推定される。遺物は墓壙のほぼ中央西壁上部において、弥生土器の坏形土器（174－1）



第158図　**Ⅳ**区第１加工段SB01実測図（Ｓ＝１／60）

１点と鼓形器台の小片（174－4と同形とみられる）１点が、墓壙内にわずかに落ち込んだ状態で出土しており、墓壙の上に供献されていたものと考えられる。

・墓壙３

東側半分以上が調査区外であるため、長さなど不明な点が多い。墓壙の主軸を北東－南西方向にとり、幅は約50㎝、深さは約20㎝を測る。副葬品などはなかった。

・墓壙４

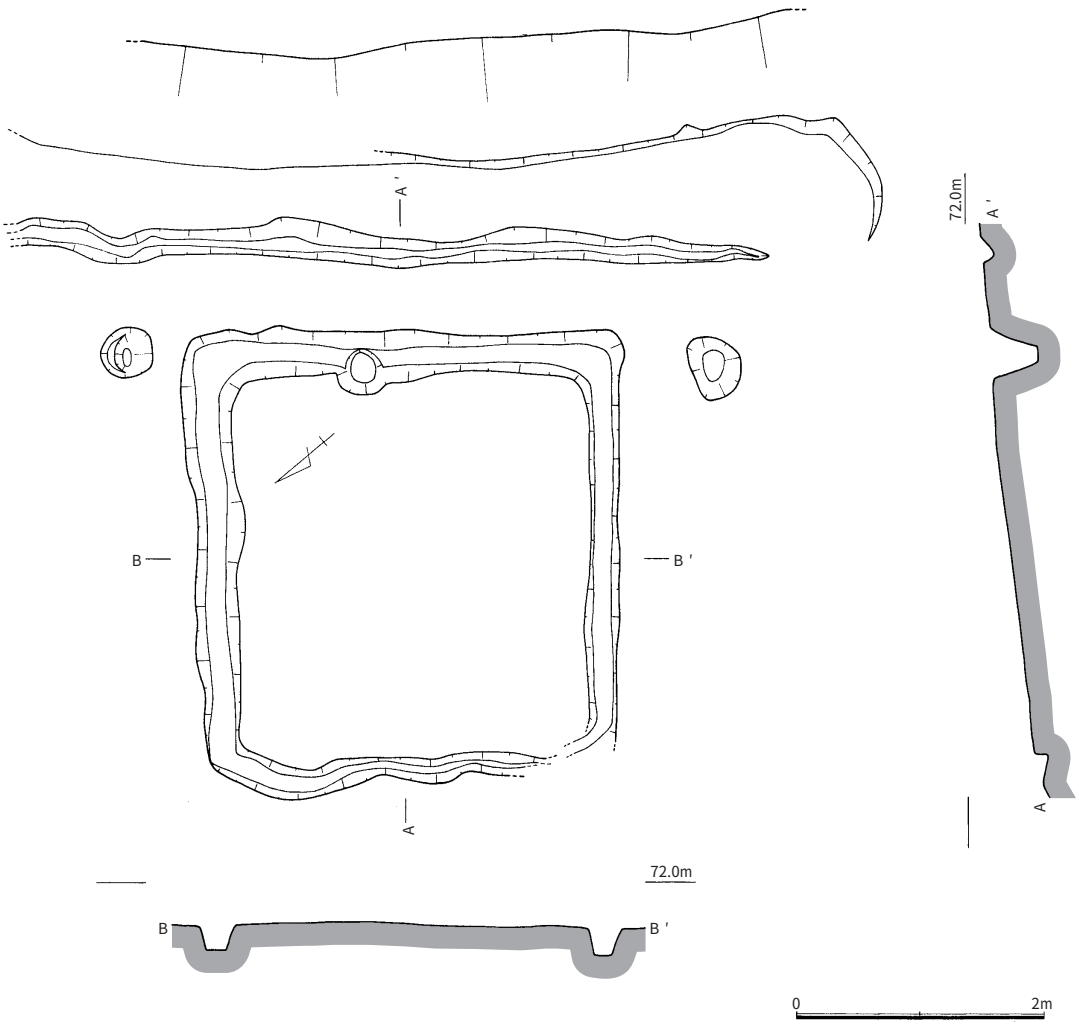
墓壙３の北隣にほぼ平行して存在する。この墓壙も東側部分のほとんどが調査区外であったため、長さは不明である。主軸を南西－北東にとり、検出部分の幅は約50㎝、深さは約25㎝を測る。壁面には４㎝程度の平坦面が廻っている。副葬品などはなかった。

・墓壙５

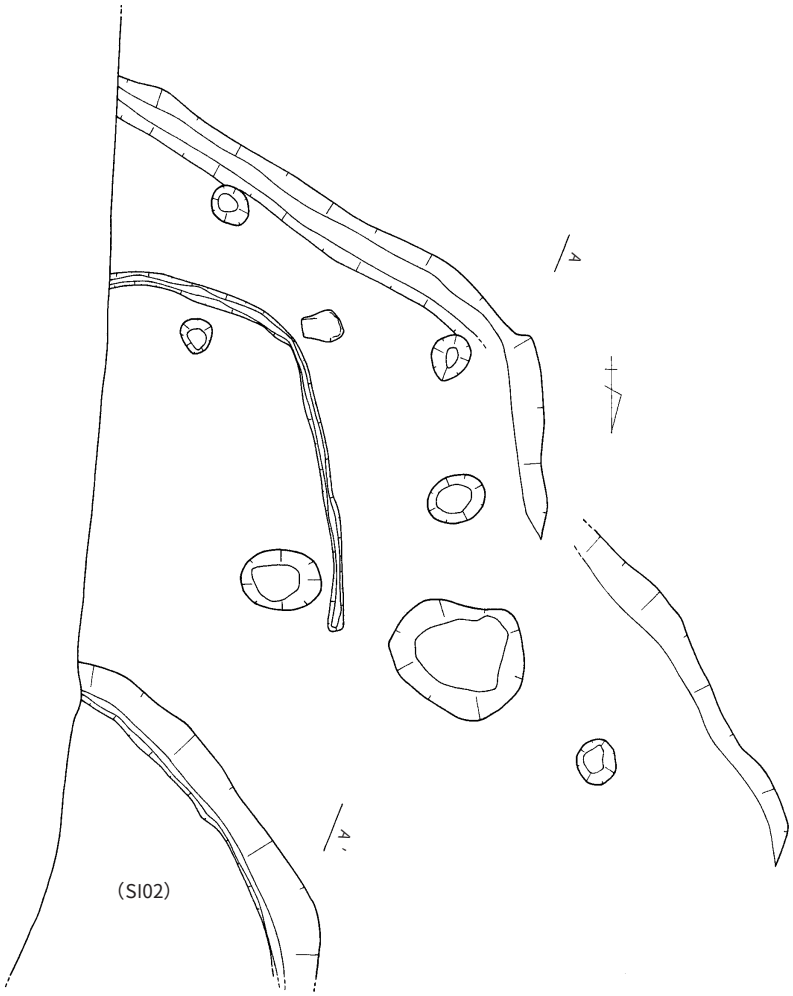
墓壙３の西側で検出した、舟形の平面形を呈する墓壙。主軸は南西－北東にとり、長さ約1.35m、幅約40㎝、深さ約30㎝を測る。副葬品などはなかった。

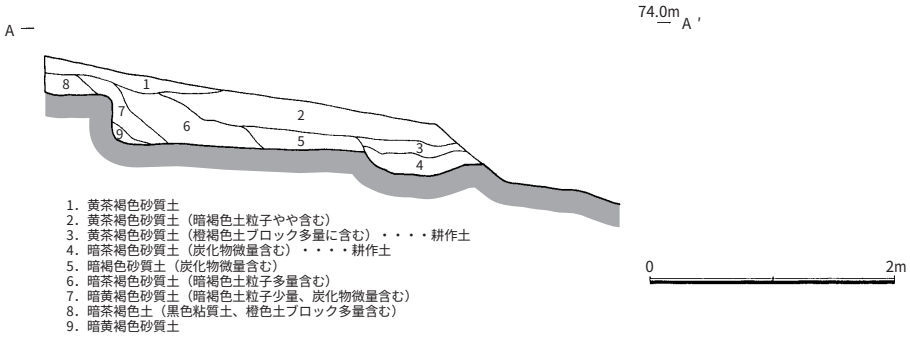
・墓壙６

墓壙４の西側で検出した、舟形の平面形を呈する小型の墓壙である。主軸を南西－北東にとり、長さは約65㎝、幅は約35㎝、深さは約18㎝を測る。副葬品などは出土しなかった。

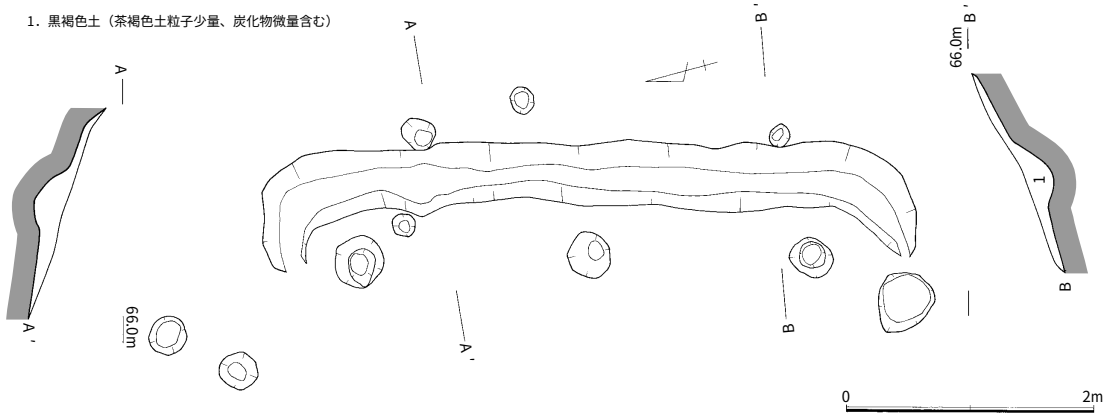


第159図　**Ⅳ**区第１加工段方形溝状遺構実測図（Ｓ＝１／60）





第160図　**Ⅳ**区加工段２実測図（Ｓ＝１／60）



第161図　**Ⅳ**区加工段３実測図（Ｓ＝１／60）

・墓壙７

墓壙１の南西約2.5mの位置で検出した、舟形の平面形を呈する小型の墓壙である。主軸を北西－南東にとり、長さは約95㎝、幅は約40㎝、深さは約５㎝を測る。墓壙１同様、上部を加工段によって削平されているとみられる。副葬品などは出土しなかった。

・墳墓の構築過程

調査区壁面の土層を観察した結果、墓壙群は上部に浅い盛土を施した墳丘墓であったと考えられた。墳丘墓は２時期あり、まず墓壙２・３・４などが構築された時期に上面に23・24層などが盛土され、墳丘とされたが、後になって新たに上面に20層を最下層とする墓壙（ＳＫ０８としておく）が掘られ、その上面に11～17層を盛土して墳丘が構築されたものと推定される。その後古墳時代にはさらにその上を削平して６号墳の盛土（５～９層、32～34層）がされたと考えられる。

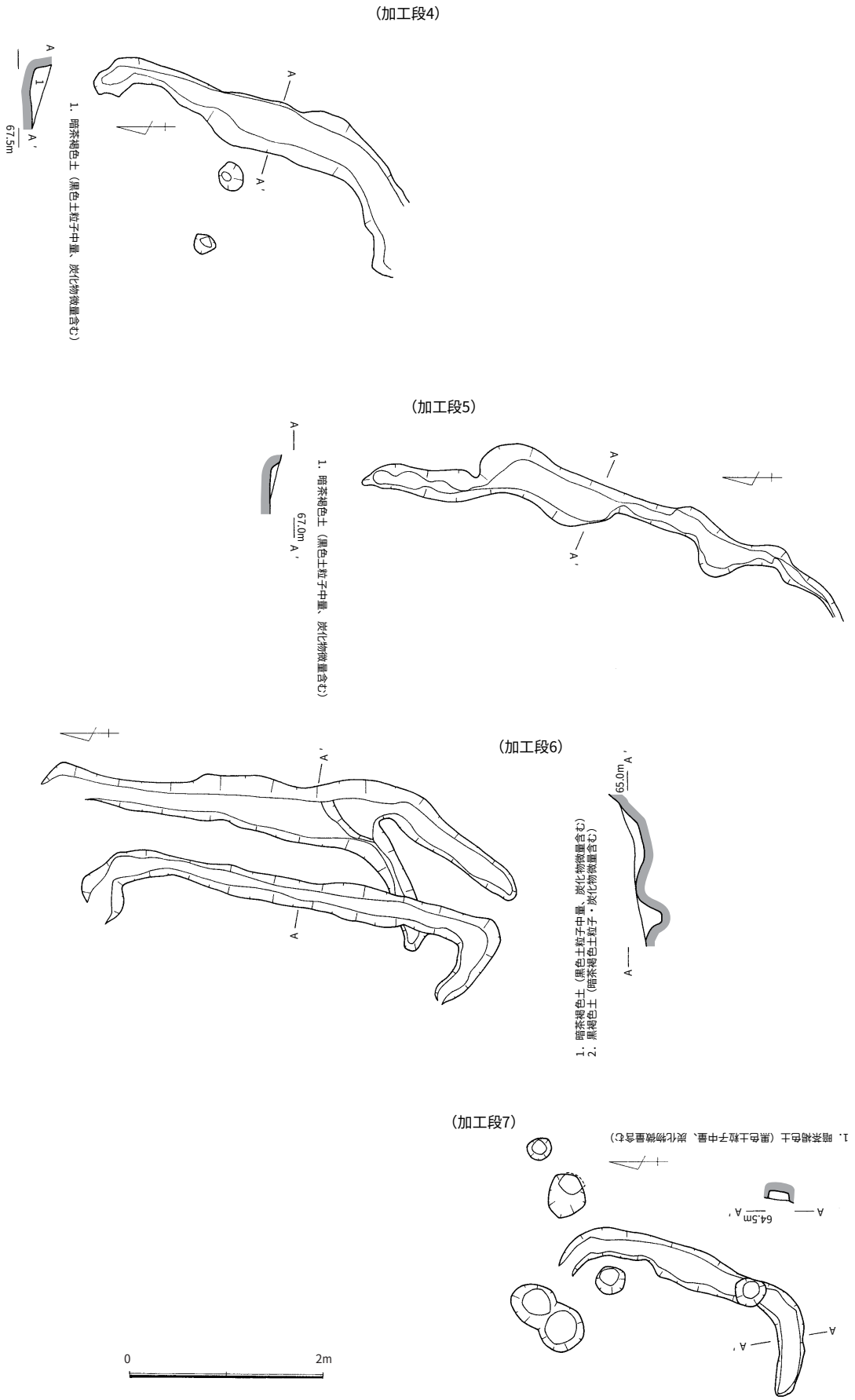
弥生墳墓群出土遺物（第174図）

174－1は墓壙２からの出土。口径10.1㎝、底径5.9㎝、器高4.7㎝弥生土器の坏形土器である。全体的に風化が激しく、調整は不明である。時期を決定するような特徴に欠けるが、出雲Ｖ－３様式の鼓形器台片を伴うため、同時期のものであると考える。174－２は、口径10.2㎝を測る複合口縁の甕である。外面には頸部にヘラによる刺突文が、肩部には櫛描きによるカーブの弱い波状文が施されている。内面は頸部以下にヘラケズリを施す。出雲Ｖ－３様式のものとみられる。174－3は、口径13.1㎝を測る複合口縁の甕である。口縁部外面には凹線が施されている。出雲Ｖ－３様式のものとみられる。174－4は鼓形器台である。口縁端部と筒部より下を欠いている。内外面に朱が塗布されていたとみられ、部分的に残存している。出雲Ｖ－３様式のものとみられる。

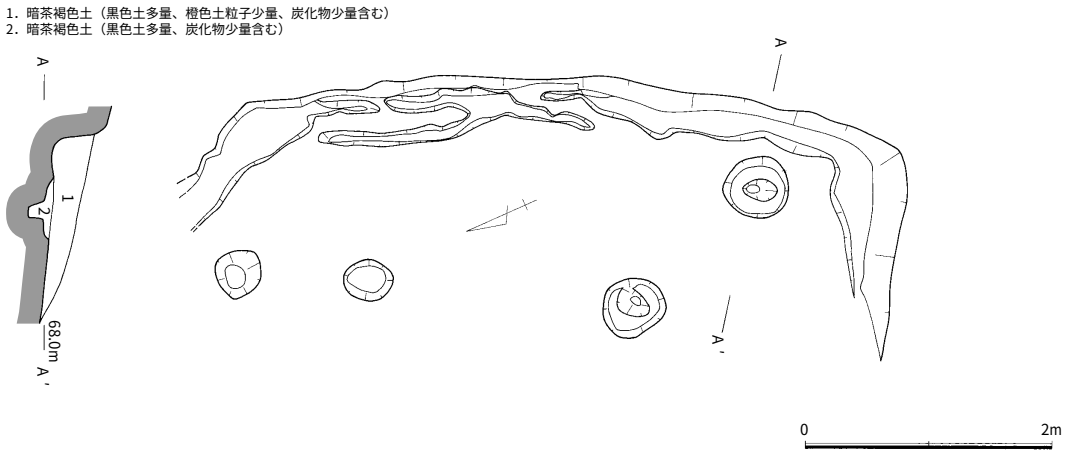
［遺構に伴わない遺物］（第175図）

175－1は３号墳付近から出土した、口径16㎝を測る複合口縁の甕である。口縁端部はやや外方に折り曲げたようになっている。内面は頸部以下にヘラケズリを施す。草田６期のものである。

175－2はＳＩ０３の北側斜面下から出土した複合口縁の壺で、口縁端部を欠くため口径は不明である。口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、頸部は縦方向のハケ調整がなされた後、ヨコナデが行われている。内面は頸部以下にヘラケズリを施す。175－3は３号墳西側で出土した、畿内系の器台の脚



第162図　**Ⅳ**区加工段４、５、６、７実測図（Ｓ＝１／60）



第163図　**Ⅳ**区加工段８実測図（Ｓ＝１／60）

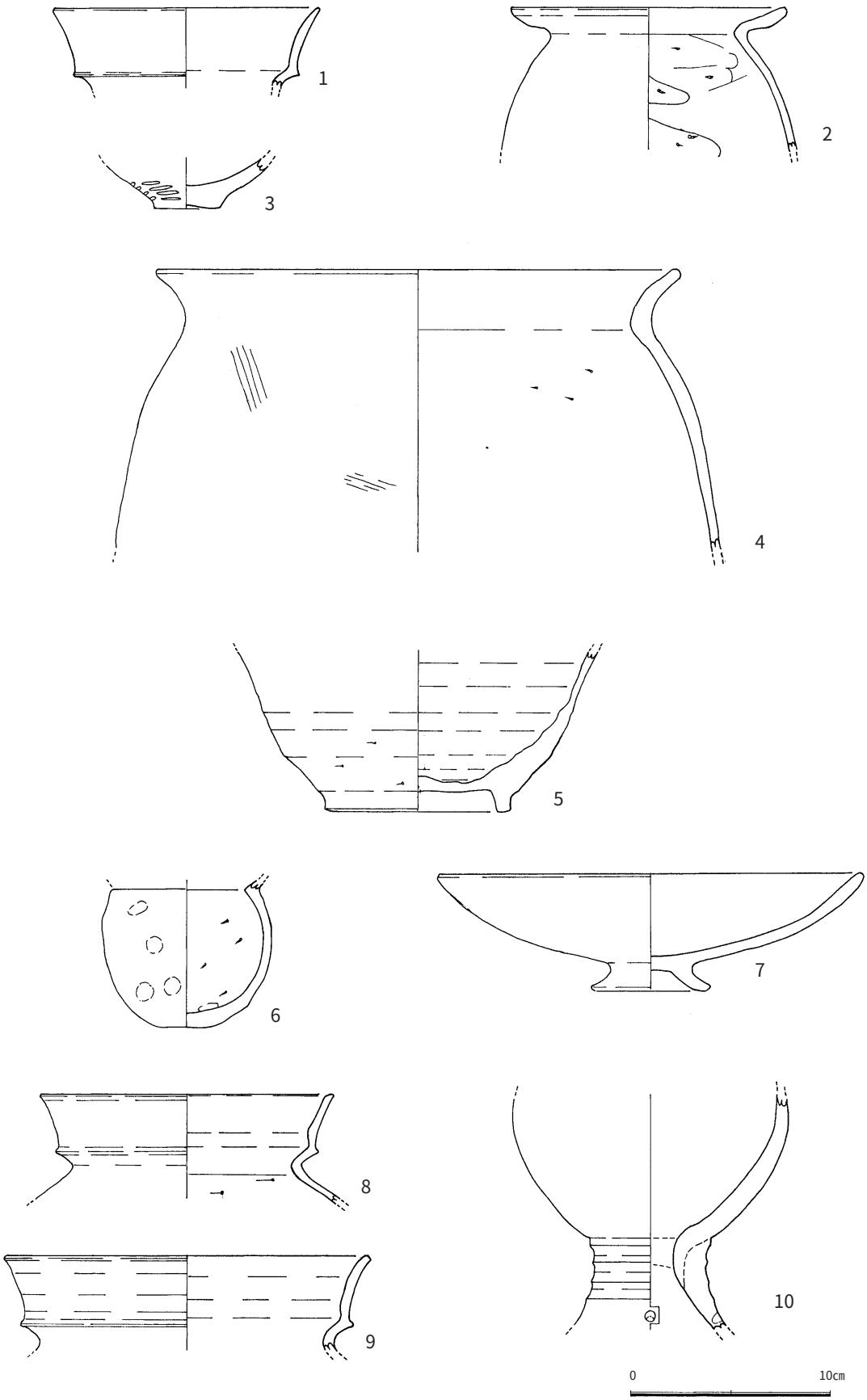
部である。外面には縦方向にハケメを施した後、ヘラミガキを施している。脚部中央に径1.3㎝前後とみられる円孔を持つ。175－4はＳＩ０３の北側斜面から出土した小型の甕とみられるもの。口縁端部を欠くため口径は不明。内面は頸部以下にヘラケズリを施す。175－5はＳＩ０３北側斜面出土。高坏の脚部で、脚の中程から下は大きく開く形状のものである。底径は12.2㎝を測る。脚の屈曲部やや下に、直径１㎝の円孔を四方に開けている。また、外面にのみ朱を塗っている。175－6は鼓形器台の筒部の破片である。筒部の直径は10.2㎝を測る。外面はナデ調整で、内面は器受部にヘラケズリの後ナデ調整を施し、筒部及び脚台部はヘラケズリまでで止めている。時期は草田６期か？

175－5はＳＩ０３北側斜面から出土した鼓形器台で、器受部は口径23㎝、高さ6.3㎝、筒部は長さ1.9㎝、径12㎝、を測る。内面は脚台部以下にヘラケズリを施す。草田６期のものと思われる。

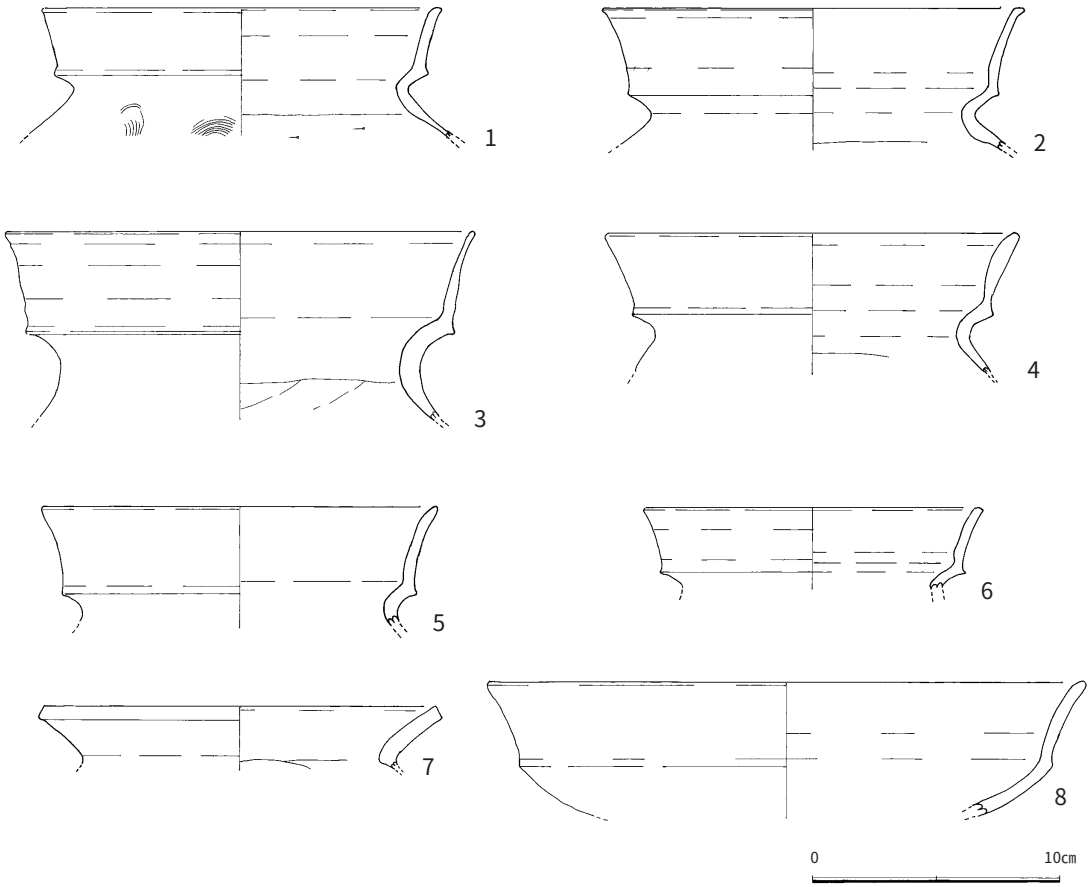
175－8は口径11.4㎝を測る高坏である。脚部には四方に円孔を穿つ。175－9と175－10は共にＳＫ０４プラン上面付近から出土したもので、胎土もよく似ているのでセットであった可能性がある。175－9は口径15.6㎝を測る複合口縁の甕である。外面には口縁部に擬凹線文を施し、肩部にはヘラ状工具による刺突文を施す。内面は頸部以下にヘラケズリを施す。175－10は鼓形器台である。器受部径16.2㎝、筒部の幅4.3㎝、脚台部径13.4㎝を測る器受部の端部外面と脚台部の端部外面には、凹線文が施されている。175－9と175－10は、その特徴から出雲Ｖ－２様式に含まれるものとみられる。

【参考文献】

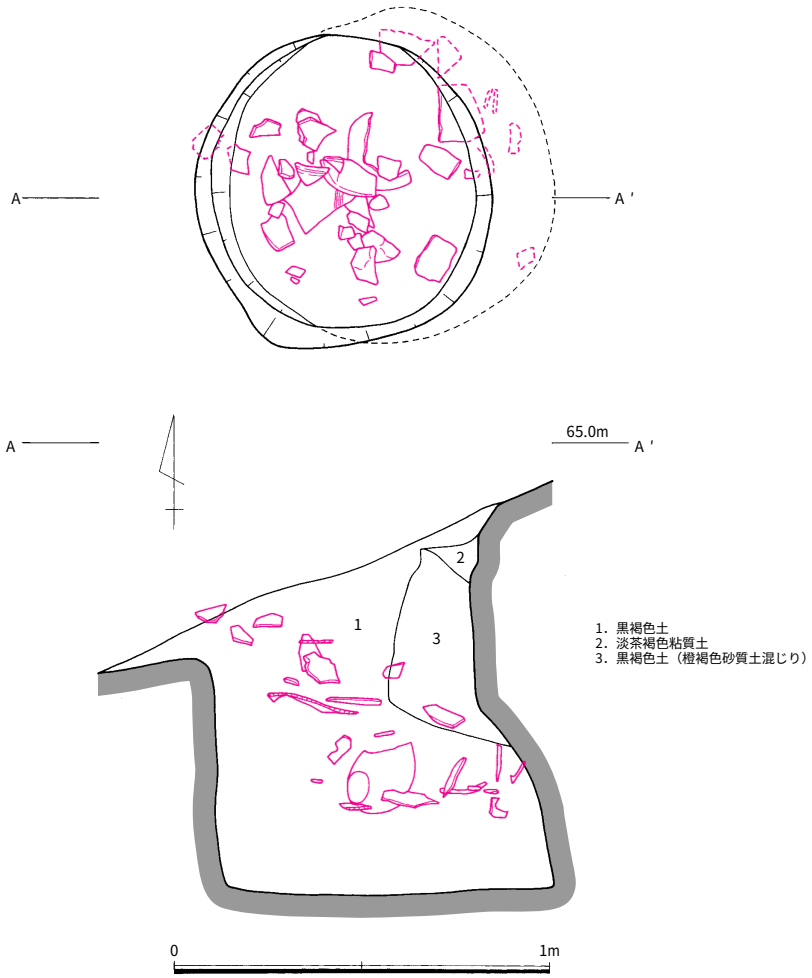
・原喜久子「島根県における古墳時代の鉄鏃について」『島根考古学会誌 第10集』島根考古学会　1993
・大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌 第11集』島根考古学会　1994
・松本岩雄「出雲・隠岐地域」『弥生土器の様式と編年（山陽・山陰編）』木耳社　1992
・松山智弘「小谷式再検討－出雲平野における新資料から－」『島根考古学会誌 第17集』島根考古学会　2000
・松山智弘「出雲における古墳時代前半期の土器の様相」『島根考古学会誌 第８集』島根考古学会　1991
・鹿島町教育委員会『南講武草田遺跡』－講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書５－　1992



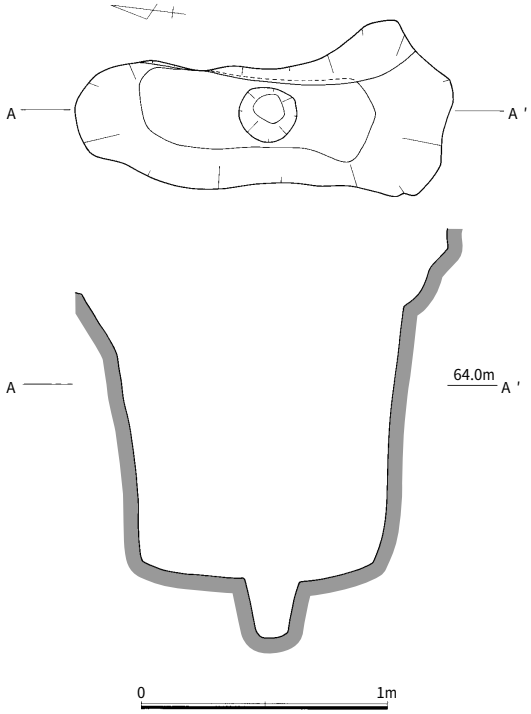
第164図　**Ⅳ**区加工段出土遺物実測図（１）（Ｓ＝１／３）



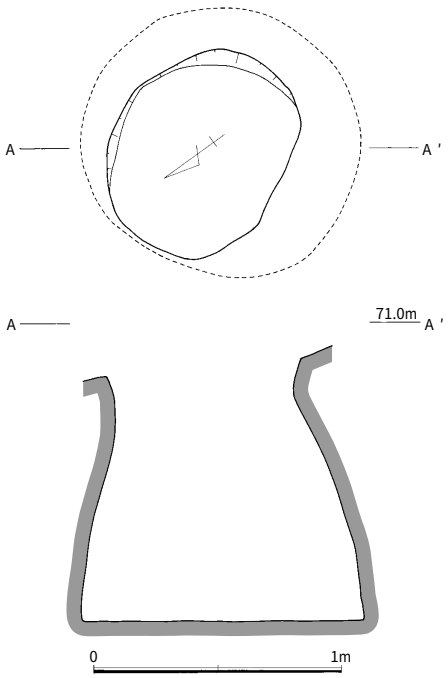
第165図　**Ⅳ**区加工段出土遺物実測図（２）（Ｓ＝１／３）



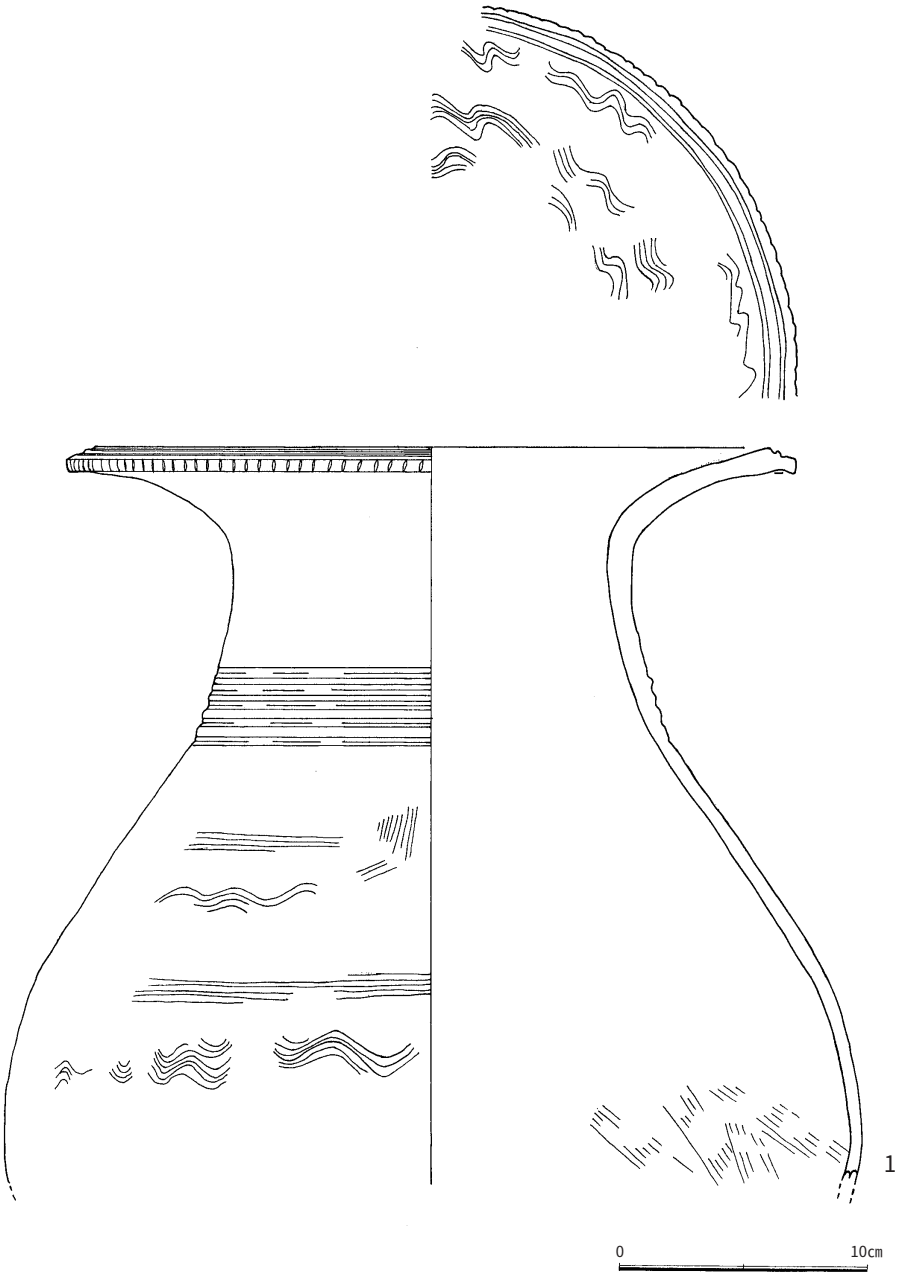
第166図　**Ⅳ**区SK03実測図（Ｓ＝１／20）



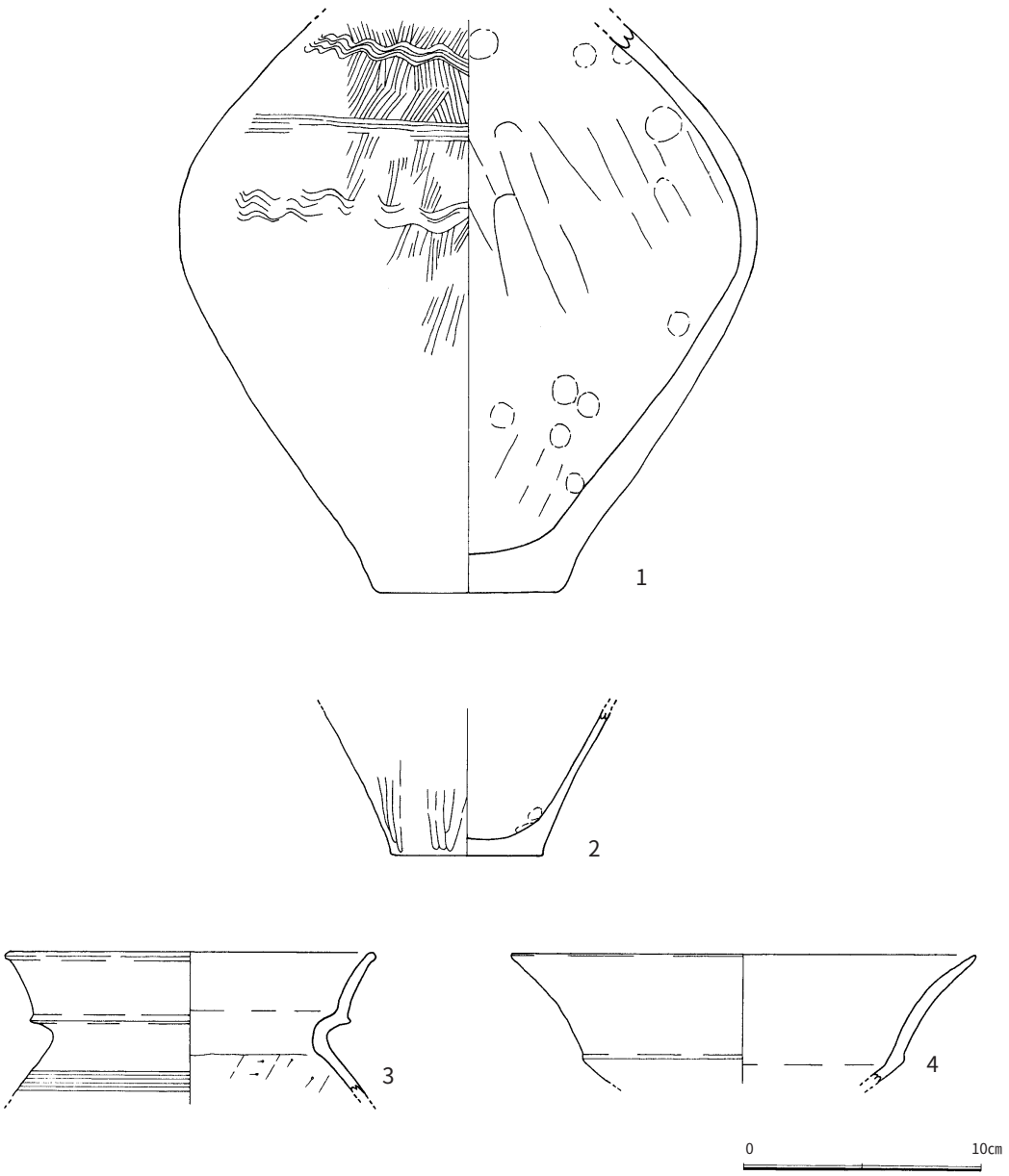
第167図　**Ⅳ**区SK04実測図（Ｓ＝１／30）



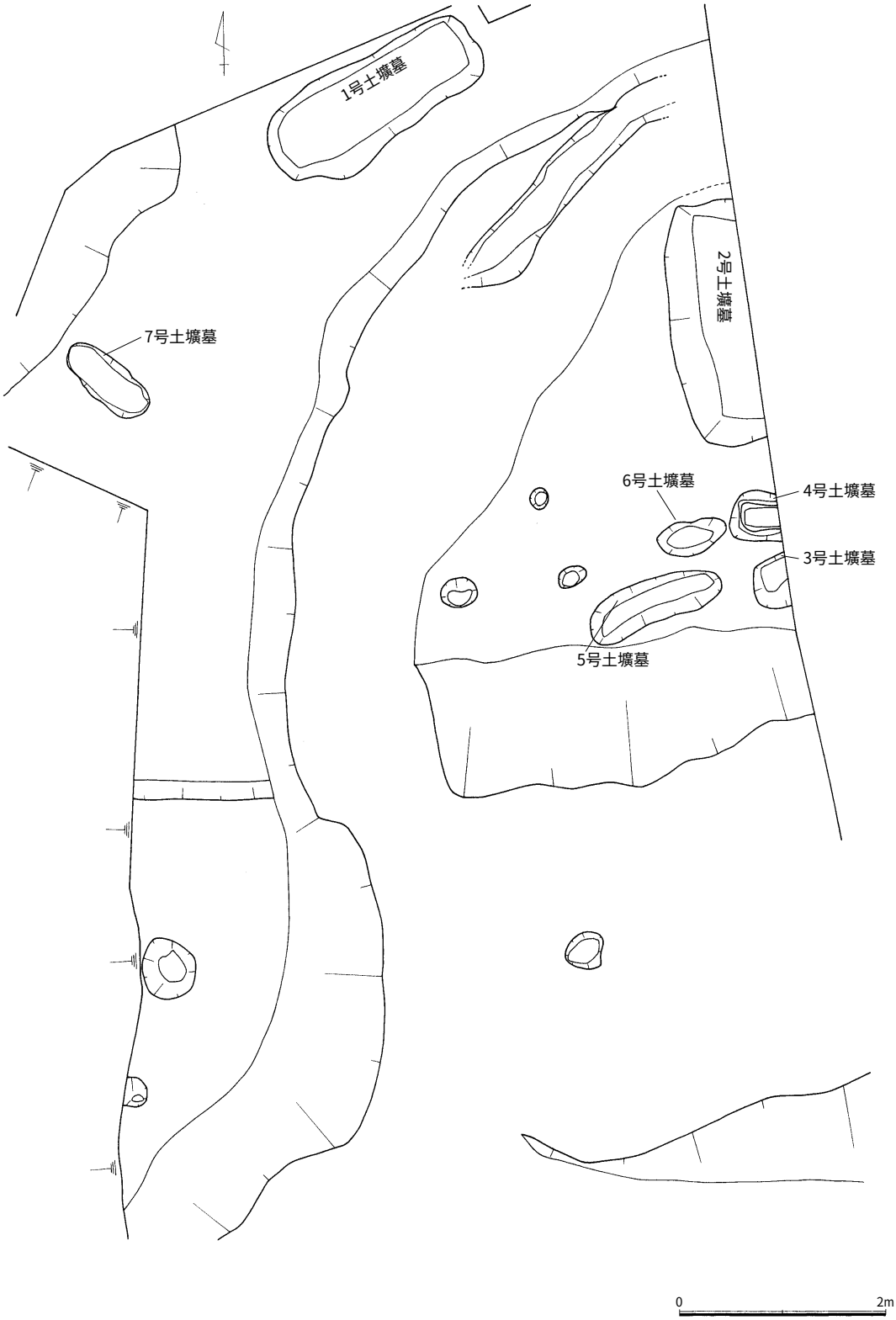
第168図　**Ⅳ**区SK07実測図（Ｓ＝１／30）



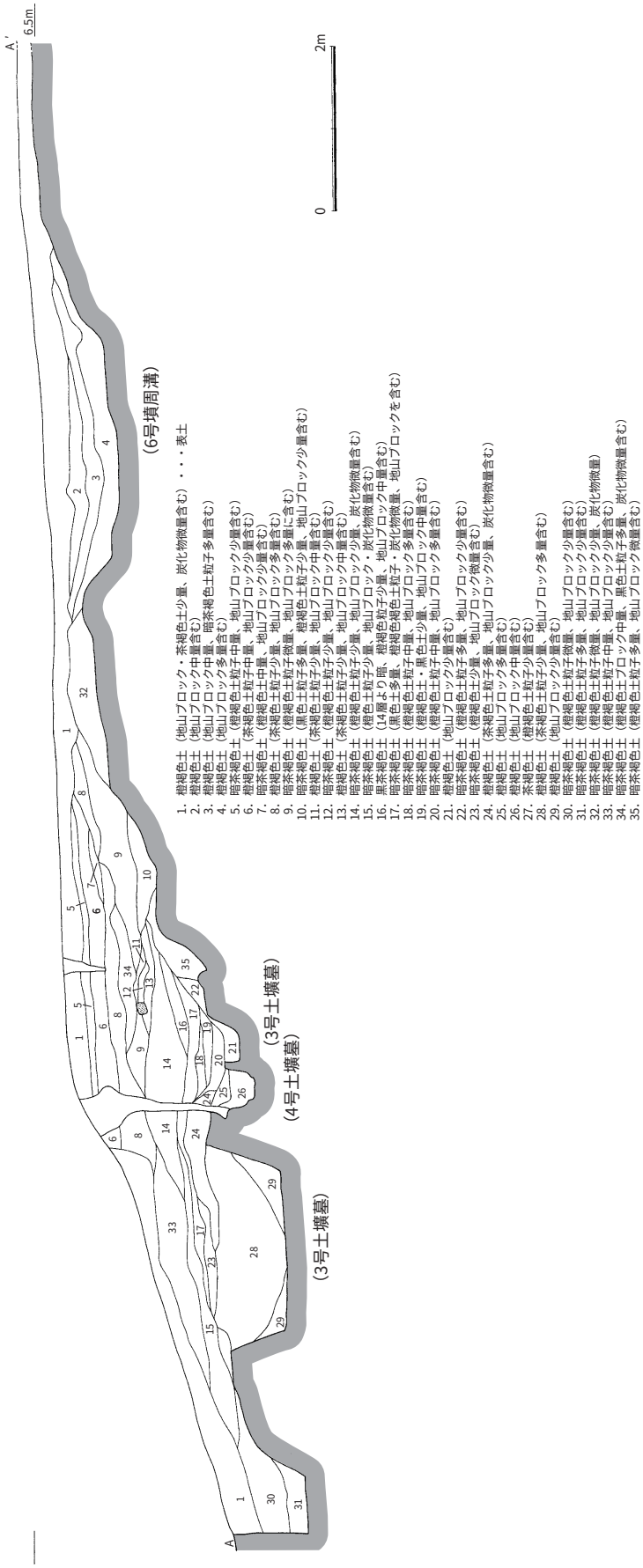
第169図　**Ⅳ**区SK03、SK07出土遺物実測図（１）（Ｓ＝１／３）



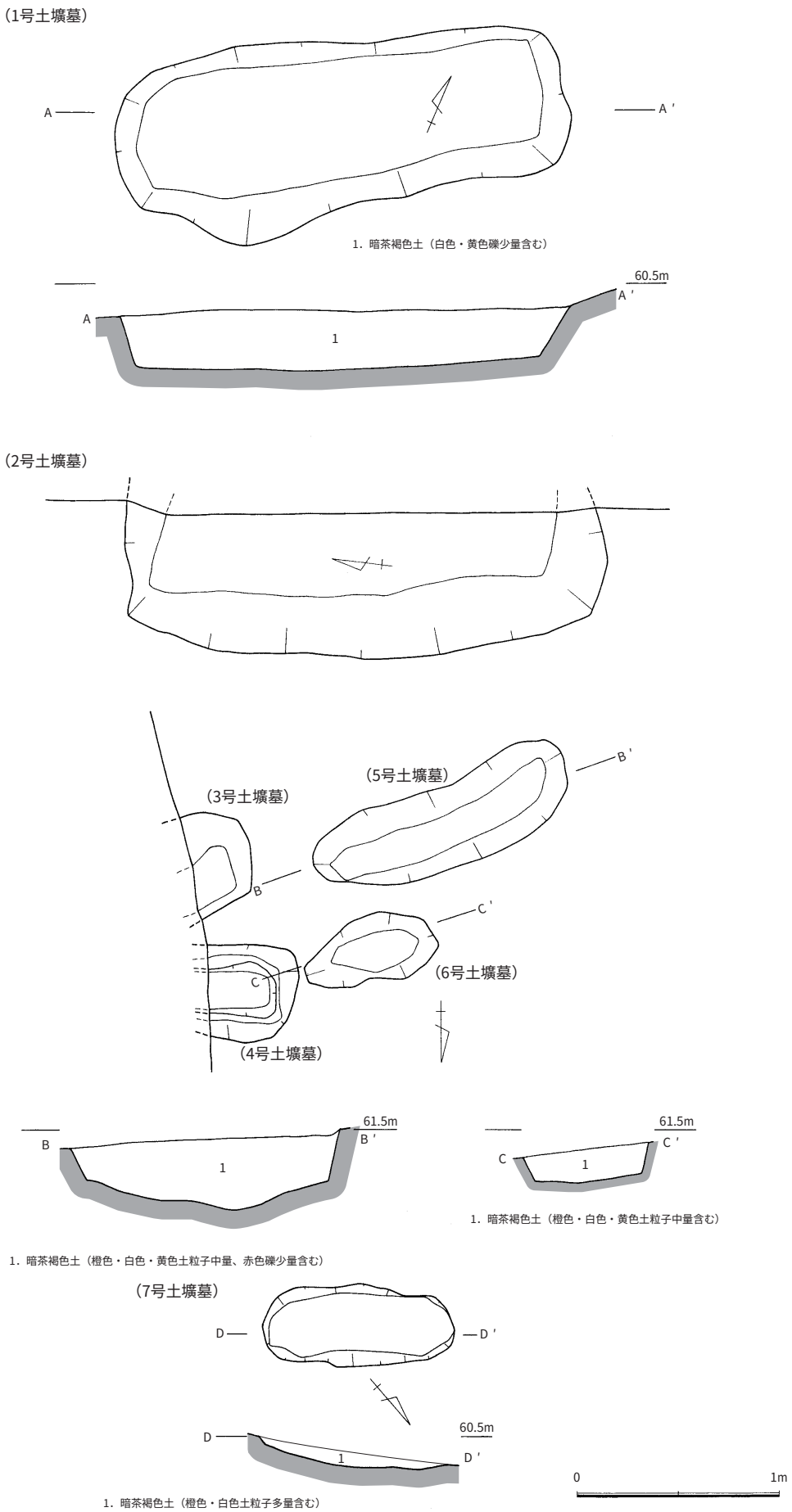
第170図　**Ⅳ**区SK03、SK07出土遺物実測図（２）（Ｓ＝１／３）



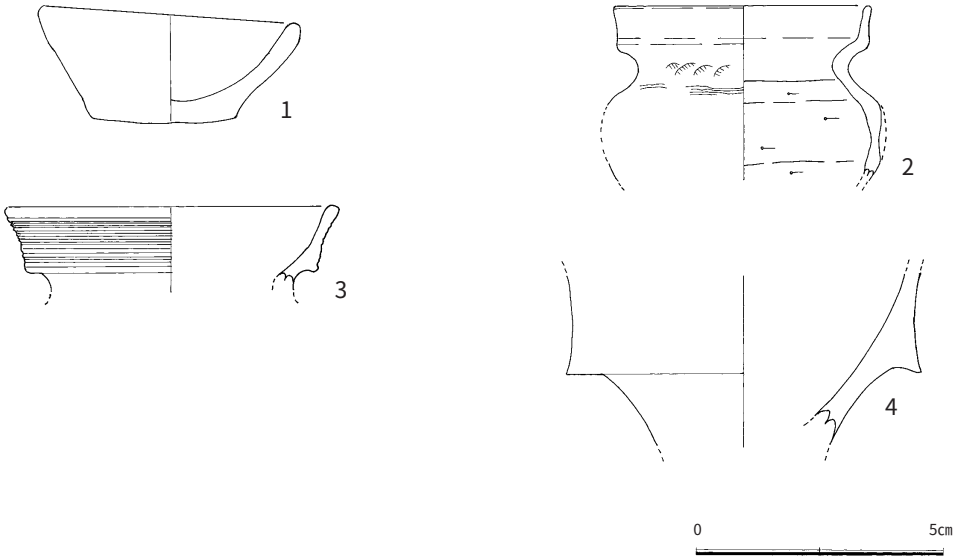
第171図　**Ⅳ**区土壙墓群全体図（Ｓ＝１／60）



第172図　**Ⅳ**区６号墳、土壙墓群土層断面図（Ｓ＝１／80）（位置は第134図に示す）

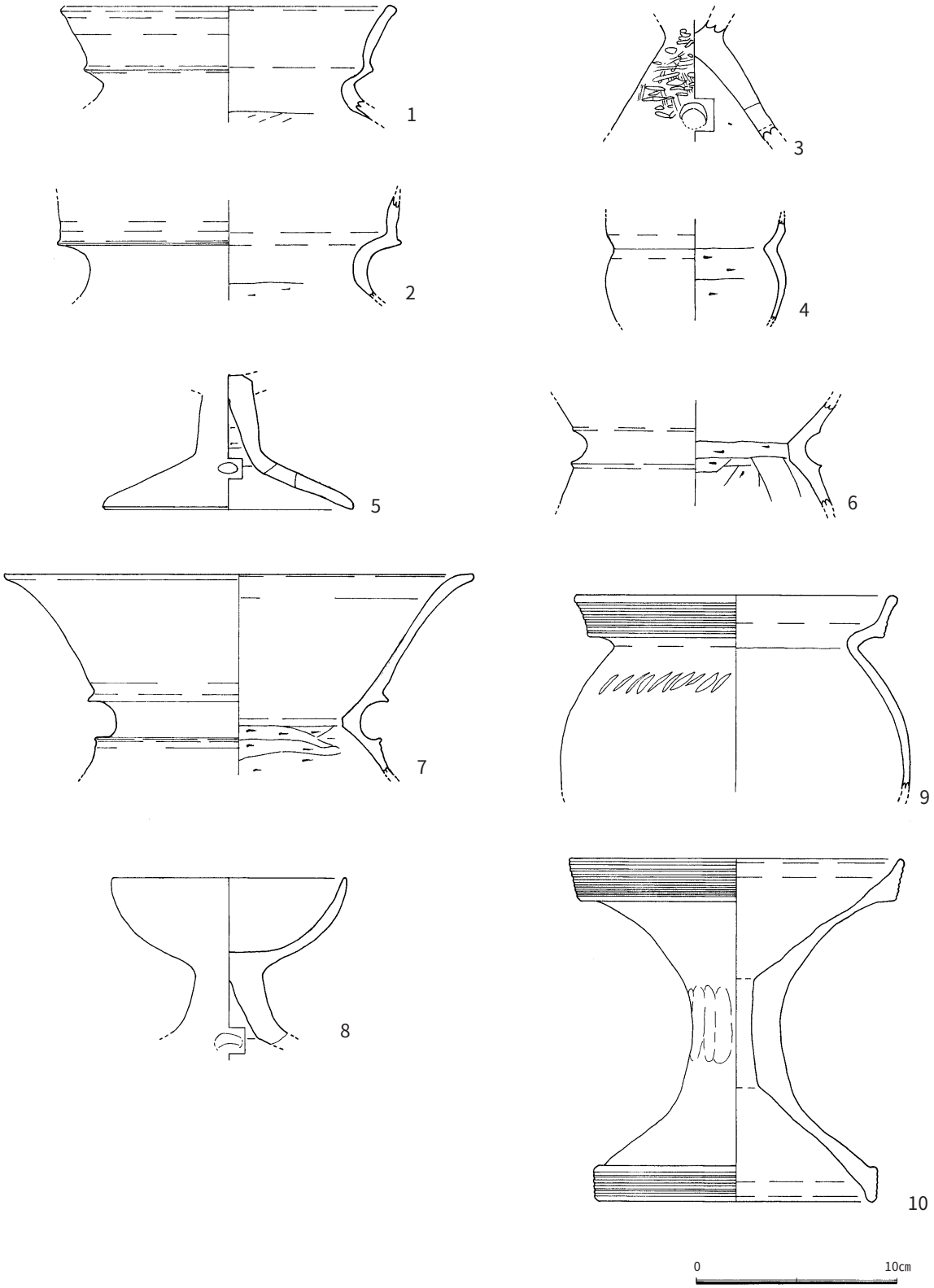


第173図　**Ⅳ**区土壙墓群墓壙実測図（Ｓ＝１／30）



第174図　**Ⅳ**区土壙墓群出土遺物実測図（Ｓ＝１／３）

Ⅳ区現地説明会風景



第175図　**Ⅳ**区出土遺物実測図（Ｓ＝１／３）

第５節　まとめ

（１）弥生時代の遺構

弥生時代の遺構であるもの、もしくは弥生時代の遺構である可能性があるものとしては、竪穴住居跡22棟のほか、掘立柱建物跡や布掘建物跡、その他建物跡とみられる加工段、さらに、袋状土壙や墳墓群を検出している。しかし、これらの遺構の中には、出土遺物が少量であったり、もしくは全く遺物の出土しなかったものもあり、遺構の時期を確定することが難しいものも多かった。

ここでは、遺構の年代決定の指標となる土器の出土した遺構を中心にして、その年代と立地について述べていきたいと思う。

１．出土土器にみる遺構の年代

［出雲**Ⅳ**－１様式］

この時期の遺構としては、袋状の土壙である、Ⅳ区ＳＫ０３のみが検出されている。

ＳＫ０３は袋状の土壙であり、このことから食糧などを貯蔵するための穴であったとみられるが、この時期の住居跡などは検出していない。ＳＫ０３は斜面部で検出したが、この付近の尾根頂部は今回調査範囲から外れていたため調査を行っておらず、この部分に同時期の住居跡が存在する可能性もある。

［出雲**Ⅳ**－２様式］

弥生時代中期末頃にあたる。この時期のものとしては、Ⅰ区ではＳＩ０４・ＳＩ０８が、Ⅱ区ではＳＩ０８とＳＩ０４がある。

竪穴住居跡は円形または隅丸方形のプランを呈するもので、円形のものは直径約７ｍ前後、隅丸方形のものは一辺約５ｍ前後のものである。

［出雲**Ⅴ**－１・**Ⅴ**－２様式］

弥生時代後期前葉にあたり、この内Ⅴ－２様式の土器は、いわゆる九重式と呼ばれる土器を使用する時期である。この時期の遺構としては、Ⅰ区ＳＩ０３、Ⅱ区ＳＩ０１、ＳＩ０２、ＳＩ０３を検出している。

この時期からⅣ様式期にみられた円形住居は姿を消し、従来の隅丸方形プランの住居に加えて、Ⅰ区ＳＩ０３やⅡ区ＳＩ０３のような、多角形の平面プランを呈する住居が現れ始める。

［出雲**Ⅴ**－３様式］

弥生時代後期後葉、いわゆる的場式土器の時期である。この時期の遺構としては、Ⅰ区ではＳＩ０５が、Ⅱ区ではＳＩ０６が、Ⅳ区では弥生墳墓群がある。この時期の住居は直径約９ｍの大型の円形プランのものと、直径約５ｍの隅丸方形プランのものが存在している。

［出雲**Ⅴ**－４様式］

弥生時代後期末にあたる。この時期はいわゆる鍵尾式土器の時期である。

この時期の遺構はⅠ区ＳＩ０２とⅣ区ＳＩ０１・ＳＩ０２・ＳＢ０１が存在する。Ⅰ区ＳＩ０２は、直径約７ｍの多角形プランの竪穴住居、Ⅳ区ＳＩ０１・ＳＩ０２は、一辺約５ｍの隅丸方形プランの竪穴住居である。また、掘立柱建物跡であるⅣ区ＳＢ０１は近畿地方の庄内式とみられる土

器片を伴っている。

［草田６・７期］

弥生時代終末～古墳時代初頭にあたる。草田６期は従来の大木権現山式に、草田７期は小谷式にあたる。この時期の遺構としては、Ⅳ区ＳＩ０３と加工段２、加工段３、加工段８が存在する。

２．弥生時代集落の立地について

永昌寺の谷遺跡で検出された弥生時代の建物跡は、Ⅳ区においてⅣ－１様式の土器を伴う袋状土壙ＳＫ０３が確認されているため、尾根頂部の未調査部分にこの時期の集落が存在する可能性も否定できないが、概ね出雲Ⅳ－２様式の時期から古墳時代初頭の草田７期にわたるものであることは先に述べてきたとおりである。

このうちⅠ区及びⅡ区の集落は、山麓の伯太川付近からの比高差が約60m、Ⅳ区の集落は約40mを測り、かなりの高所に立地している。

高地において弥生時代の住居跡が確認された例は、安来道路の建設に伴って調査された陽徳遺跡や、尾道・松江線建設に伴って調査された野津原Ⅱ遺跡をはじめとして、比較的多くの事例が知られているが。いずれも弥生時代後期の住居跡である。

永昌寺の谷遺跡からは、Ⅰ区およびⅡ区において、弥生時代中期末の出雲Ⅳ－２様式の住居跡が４棟確認されたことが注目される。

島根県東部地域においては、弥生時代中期の住居跡の確認例はそう多くなく、さらにこのような高所において中期の住居跡が確認された例はまだない。今回この時期から高所に集落が営まれていることが確認されたことは、地域における集落形態の変遷を探る上において一つの手がかりになると考えられる。

このような高い丘陵上に存在する集落は、以前から高地性集落と呼ばれ、中国の歴史書である、『魏志倭人伝』の中の記述にみられる、いわゆる「倭国大乱」に関わる、周辺地域での軍事的緊張が高まったことにより、防御のため高所に集落を形成したのではないかとも考えられてきた。

本遺跡に暮らしていた弥生人たちが、そのような緊張状態に置かれていたのかどうかは不明であるが、いずれにしても、なぜこのような一見不便そうな場所に生活していたのかは、弥生時代の社会背景やライフスタイルを解明していく上での課題である。

３．弥生墳墓群について

弥生時代の墳墓群とみられる遺構をⅣ区北端部で確認した。この墳墓群は土層観察の結果、墓壙上に浅い盛土を施した、小規模な墳丘墓であった可能性がある。貼石などは施されていない。

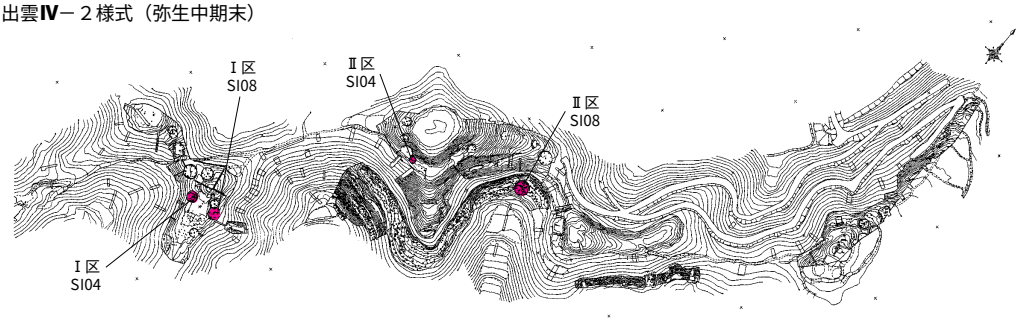
出土遺物は墓壙２からⅤ－３様式とみられる土器が出土しているが、墳墓群一帯において出土した他の土器片も概ねこの時期のものである。

この墳墓群は６号墳の盛土の下に埋没しており、６号墳の盛土の除去作業中に墓壙２を確認したことで初めて気がついたため、墳丘墓の盛土を精査せずに掘り上げてしまったことが悔やまれる。

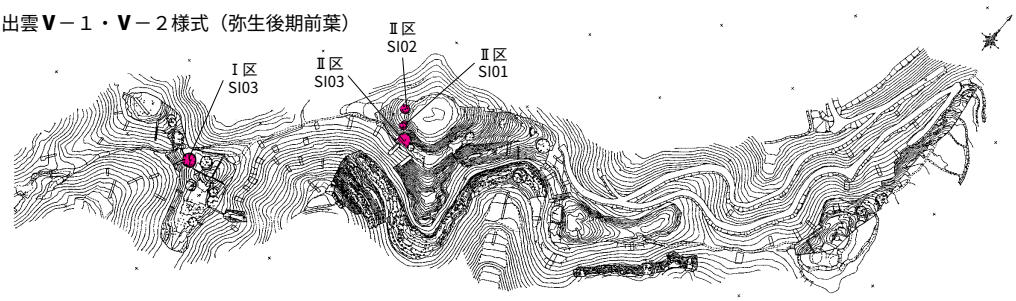
Ⅴ－３様式の時期の墳丘墓としては、四隅突出型墳丘墓が作られる傾向があるが、この墳丘墓は、貼石を持たないことや、地山の加工状況から四隅突出形墳丘墓とは考えにくい。

弥生時代の墓の規模や形式の差異は、被葬者の社会的階層を示すとも言われており、そこから考

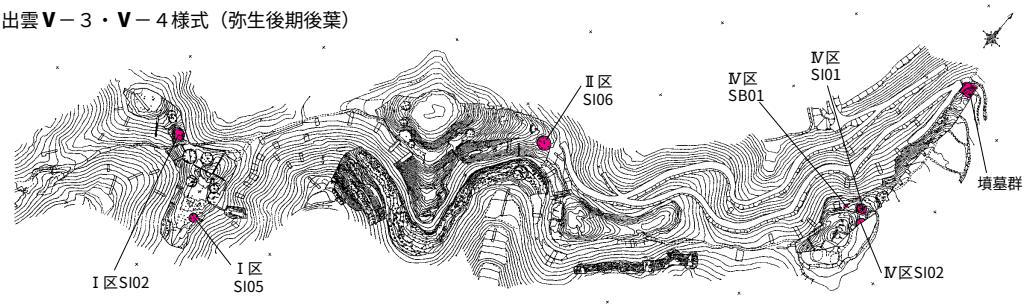
出雲**Ⅳ**－２様式（弥生中期末）



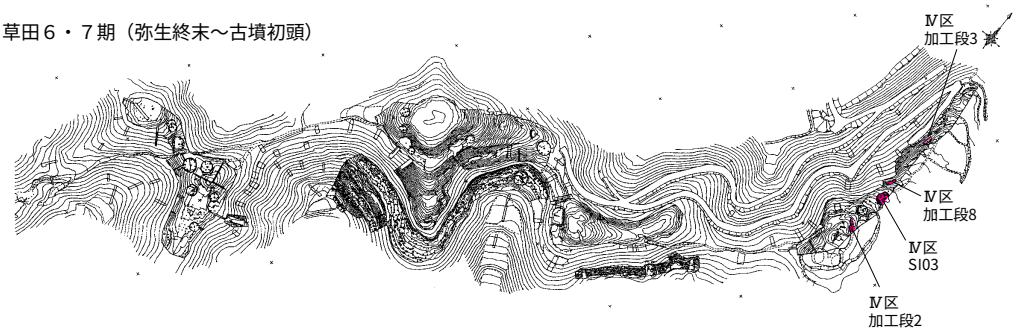
出雲**Ⅴ**－１・**Ⅴ**－２様式（弥生後期前葉）



出雲**Ⅴ**－３・**Ⅴ**－４様式（弥生後期後葉）



草田６・７期（弥生終末～古墳初頭）



第176図　永昌寺の谷遺跡弥生時代集落変遷図

えるとこの墳墓群は四隅突出型墳丘墓や、規模の大きな墳丘墓に葬られる人々よりは、下の階層の人々の墓地であるのかもしれない。

永昌寺の谷遺跡においては、墳墓群と同時期の住居跡、Ⅰ区ＳＩ０５とⅡ区ＳＩ０６が見つかっており、もしかするとここに生活していた人々はこの墳墓群になんらかの関係があるのかもしれない。

【参考文献】

・松本岩雄「出雲・隠岐地域」『弥生土器の様式と編年（山陽・山陰編）』木耳社　1992
・松山智弘「小谷式再検討－出雲平野における新資料から－」『島根考古学会誌 第17集』島根考古学会　2000
・松山智弘「出雲における古墳時代前半期の土器の様相」『島根考古学会誌 第８集』島根考古学会　1991
・鹿島町教育委員会『南講武草田遺跡』－講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書５－　1992
・日本道路公団中国支社・島根県教育委員会『勝負廻Ⅰ遺跡・白石大谷Ⅱ遺跡・シトギ免遺跡・野津原Ⅱ遺跡・山守免遺跡・石地蔵遺跡』－中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書２－　2000
・建設省松江国道工事事務所・島根県教育委員会『陽徳遺跡・平ラⅠ遺跡』－一般国道９号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書11－　1995
・松井　潔「因幡・伯耆・出雲の墓制」『季刊考古学第67号』雄山閣　1999

（２）古墳・横穴墓

［古墳群］

今回の調査で古墳は、方墳５基・円墳６基の計11基検出した。

（古墳の分布）　古墳の分布は、谷の奥部にあたるⅠ区～Ⅲ区と比較して、眼下に現在の母里の街並が広がっている平野部を望む丘陵上に所在するⅣ区の密度が高い。このⅣ区の古墳群は、他の調査区と比較して尾根筋に寄り添う様に密集して築かれており、特に丘陵先端部に位置するⅣ区５号墳・７号墳は尾根の稜線よりかなり偏った位置に築かれている。

周辺の古墳群として、Ⅱ区の丘陵ピークと尾根続きで本遺跡と谷を挟んで北西側の丘陵尾根上に所在する御笠古墳群がある。同古墳群は円墳15基からなり、Ⅳ区と同様に現在の母里の街並を眼下に望む丘陵尾根上に立地している。永昌寺の谷遺跡古墳群と比較して、古墳の密集度が高く、また規模の大きい古墳が多い。御笠古墳群の様相と永昌寺の谷遺跡の古墳群の分布と考えあわせると、古墳の築造場所として、伯太川沿いの平野部が広がっている現在の母里の街並を見下ろせる場所を重視していたものと考えられる。

（墳丘規模）　調査区内で10mを越す規模を持つ古墳は、Ⅲ区１号墳（方墳、一辺18m）、Ⅳ区１号墳（方墳、15×13m）である。立地は、それぞれの調査区の丘陵のピークをなす尾根中央部に築かれている。このうちⅢ区１号墳は平野部から南北に入る谷の奥部にあたる場所に築かれているが、同古墳が谷の主軸の延長上の丘陵に築かれていることから平野部を眺望することができる。このように、古墳の規模だけでなく、立地条件から見ても他の古墳に対して優位性を保っていることが窺える。その他の古墳の規模はすべて10m以下であり、山側に周溝を持つ山寄せの古墳が多い。

（築造時期）　築造時期が判明している古墳のなかで、最初に築造されたと考えられるのはⅣ区１号墳である。調査区内で６基の主体部が検出され、なかには墓壙底が船底状を呈している主体部もあり、木棺が使用されていると考えられている。第１主体部から鉄剣、第３主体部から土師器小型丸底壺が出土している。築造時期は、５世紀後半から６世紀初頭にかけて（松山編年Ⅲ～Ⅳ期）と推定される。次に築造されるのは、６世紀後半頃の築造と考えられるⅣ区５号墳・７号墳で、いずれも墓壙内に須恵器蓋杯が副葬されている。築造順序は５号墳（大谷編年出雲３期）→７号墳（同出雲４期）である。その他、Ⅳ区２号墳墳裾から須恵器甕片が出土しており、古墳時代後期の築造と推定される。

［横穴墓群］

今回の調査で横穴墓は、Ⅰ区とⅢ区から未完成の１基を含めて６基検出している。

（横穴墓の分布）　調査区内で検出した横穴墓は、谷部に面している丘陵西側には見られず、すべて平野部を流れる伯太川を望む丘陵頂部から約7～13m下がった東側斜面に穿たれている。

このなかで天井部の地山が落盤したものが２基所在したが、丘陵頂部からの比高がⅠ区１号横穴墓で約7m・Ⅲ区５号横穴墓で約8mと、いずれも丘陵頂部とあまり比高差がない場所に築かれた横穴墓で起きている。

（玄室の形態）　玄室の平面プランは、１区１号横穴墓が正方形に近い前壁と比較して奥壁の幅

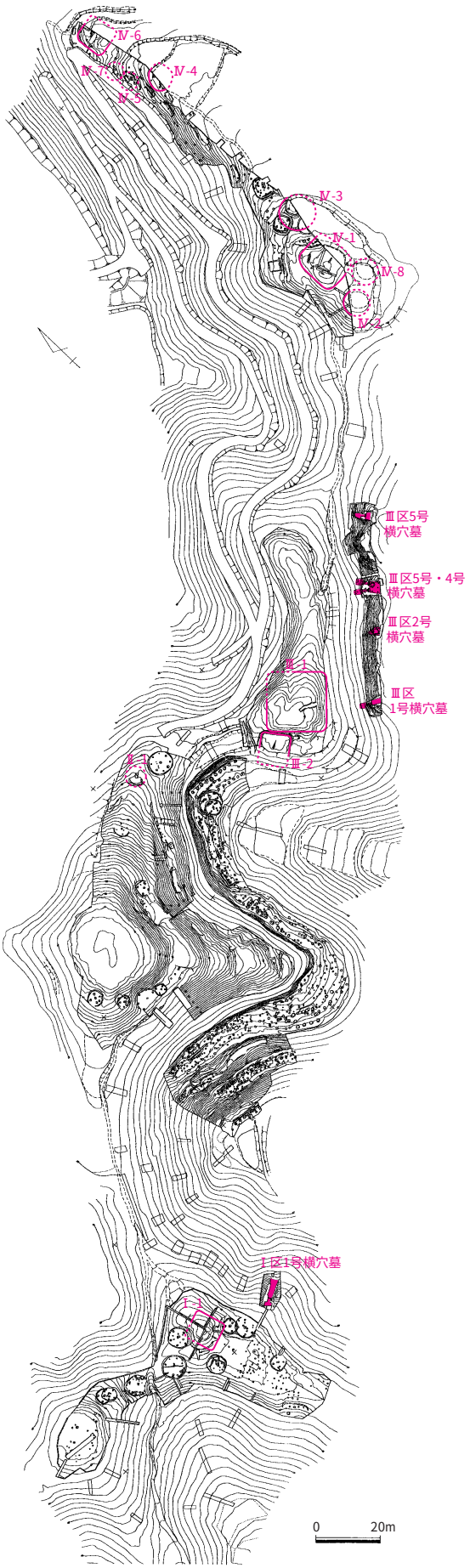
が広い横長プラン、Ⅲ区１号・３号・４号横穴墓が長方形の前壁と比較して奥壁の幅が狭い縦長プラン、Ⅲ区５号横穴墓が長方形の奥壁と前壁の幅がほぼ同じである縦長プランである。このうち天井部が残り、玄室の形態が確実に判明しているものがⅢ区１号・３号・４号横穴墓で、四壁が内傾しながら立ち上がり、天井部の軒を加工しない妻入テント形である。Ⅲ区５号横穴墓は天井が崩落しているが、その平面形態やわずかながら四壁が内傾しながら立ち上がり部分が観察されることより、妻入テント形と推定される。

（築造時期）　築造時期が確定できる横穴墓（Ⅲ区１号・３号・４号横穴墓）はいずれも大谷編年出雲６期の築造である。出雲地方東部での横穴墓築造の盛行は出雲４期からであるが、出雲６期はその最終段階にあたる。この出雲６期は飛鳥編年飛鳥Ⅱ期、Ⅲ期に並行すると考えられており、実年代でいうと７世紀中葉頃と推察される。次に横穴墓の使用期間であるが、出土須恵器からⅢ区１号横穴墓は出雲７～８期、３号・４号横穴墓からは出雲８期まで使用している。このうち、Ⅲ区４号横穴墓閉塞部から出土した須恵器蓋杯は、確実に出雲８期の資料であり高広編年でいうⅢＢ期にあたることから、最後の追葬時期は実年代でいうと７世紀末～８世紀前葉となる。墓道を共有し最終埋葬時に同時に埋め戻されたⅢ区３号・４号横穴墓の使用期間は、おおよそ半世紀使用されていたことになる。

Ⅲ区５号横穴墓は直口壺１点のみ出土しており、この型式の須恵器の時期幅が大谷編年出雲４～６期となっている。Ⅰ区１号横穴墓及びⅢ区２号横穴墓からは遺物が出土しておらず、築造時期は不詳である。

（墓道内掘立柱建物跡）　Ⅲ区３号・４号横穴墓の共有墓道から掘立柱建物跡が検出された。島根県内で初めて確認されたもので、管見では中国地方でも岡山県新見市神郷所在の大迫Ａ群１号横穴墓で確認された１例のみである[1]。

この大迫Ａ群１号横穴墓は、TK217型式後半に築



第177図　永昌寺の谷遺跡古墳時代遺構配置図
（Ｓ＝１／2,000）

造され、玄門の前に長さ3.6m・入口幅2.3m・奥幅1.0mの墓道が掘られ、その墓道に1間×1間（約1.5×1.6m）の掘立柱建物跡に伴うと考えられる４基の柱穴が検出されている。その４箇所の柱穴のうち３箇所の柱穴は、墓道の床面でなく両壁面内に穿たれており、屋根が架かっているとすれば墓道全体を覆っているものと推定される。これは、同横穴墓の玄室の板石敷きが在地の横穴式石室と共通するものであることや石組羨道に見えるよう玄門入口に石を積上げていること等(2)と併せて考慮すると、この墓道に築かれた掘立柱建物跡は同横穴墓が横穴式石室を模倣する一要素として捉えることができるのではないであろうか。

永昌寺の谷遺跡　古墳一覧表

	遺構名		墳形・規模		埋葬施設	副葬品等	時期	備考
1	Ⅰ区	１号墳	方墳	一辺約10m・高さ約1.0m	未検出	無し	不明	
2	Ⅱ区	１号墳	円墳	径約8m・高さ約0.5m、周溝	第１主体部	無し	不明	
3	Ⅲ区	１号墳	方墳	一辺18m・高さ1.4m	未検出	無し	不明	墳頂表土中より石製紡錘車、器台？片出土
4		２号墳	方墳	9.0×6.4m以上・高さ約0.4m、周溝	土壙１	無し	不明	
5	Ⅳ区	１号墳	方墳	15×13m・高さ約1.0m、周溝	土壙６（墓壙底が船底になっており、木棺の可能性あり	第1主体部：鉄剣、第3主体部：土師器丸底壺	松山Ⅲ～Ⅳ期	墳丘約3/4調査
6		２号墳	円墳	径約10m・高さ約1.0m、周溝	未検出	墳裾から須恵器甕片	古墳時代後期か？	墳丘約1/6調査
7		３号墳	円墳	径約10m・高さ約0.7m、周溝	未検出	無し	不明	墳丘約1/3調査
8		４号墳	円墳	径約8m・高さ約0.5m、周溝	未検出	無し	不明	墳丘約1/6調査
9		５号墳	円墳	径約6m・高さ約0.5m、周溝	土壙１	須恵器蓋杯1組、鉄鏃2	出雲3期	
10		６号墳	方墳	一辺約8m・高さ約1.5m、周溝	未検出	無し	不明	墳丘約1/3調査
11		７号墳		墳丘流失	土壙２	須恵器杯蓋	出雲4期	
12		（参考）８号墳	円墳	径約7m・高さ約0.5m、周溝				調査区外、残丘の可能性有り

永昌寺の谷遺跡　横穴墓一覧表

	遺構名		玄室形態	玄室出土	墓道出土	時期	備考
1	Ⅰ区	1号横穴墓	平入？	無し	無し	不明	玄室の約1/2調査
2	Ⅲ区	1号横穴墓	妻入テント形	須恵器杯蓋2・杯身2・壺蓋1・高杯1・腺1・長頸瓶1、大刀2、鉄釘43、耳環1、切子玉2、人骨	須恵器杯身1・長頸壺1、土師器皿1	出雲6・7期	木棺
3		2号横穴墓		無し	無し	不明	未完成横穴墓
4		3号横穴墓	妻入テント形	須恵器杯蓋2・杯身2、人骨	須恵器杯蓋・杯身・長頸壺１・横瓶１、土師器１	出雲6・8期	3号・4号横穴墓共有墓道から掘立柱建物跡検出
5		4号横穴墓	妻入テント形	大刀１、人骨			
6		5号横穴墓	妻入テント形？	須恵器直口壺１	無し	出雲4～6期	掘削後、まもなく天井崩落

＊　時期は、松山智弘「出雲における古墳時代前半期の土器の様相　大東式の再検討」『島根考古学会誌　第８集』1991、大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌　第11集』1995による。

本遺跡Ⅲ区３号・４号横穴墓の墓道（幅約3.4m）から検出した掘立柱建物跡は、１間×２間（約2.2m×2.9m）で６穴の柱穴がほぼ整然と並んでいる。調査区外は不明であるが、屋根が架かっているとすれば閉塞部寄りの墓道を覆っているものと推定される。また、Ⅲ区３号横穴墓の閉塞部上とⅢ区４号横穴墓の閉塞部北東側にテラスが認められ[3]、この建物跡と何らかの関連した遺構と推定された。この掘立柱建物跡の時期は、最終埋葬時（大谷編年出雲８期）には使用されなくなっていることから大谷編年出雲６～７期にかけてと推測される。

本遺跡を上記の大迫Ａ群１号横穴墓の例を比較すると、築造時期や墓道を屋根が覆う点は類似しているが、本遺跡は積極的に横穴式石室の模倣を志向しておらず、大迫Ａ群１号横穴墓の例にはあてはまらないと判断した。本遺跡の掘立柱建物跡を用いてどのような埋葬儀礼が執り行われていたのか、現時点では不明であり類例の増加を待って改めて検討したい。

（鉄　釘）　Ⅲ区１号横穴墓の玄室から鉄釘が43点出土しており、棺台と想定される川原石の存在や鉄釘に付着している木目痕より木棺の使用が想定された。ここで、本遺跡出土の鉄釘の位置付けを試みてみたい。208頁に出雲地方の鉄釘が出土した古墳・横穴墓を管見の限りで示した。出雲地方では36箇所から出土している。横穴式石室からの出土例は少なく、そのほとんどが横穴墓からの出土である。

鉄釘の形態であるが、確認できるものは断面長方形及び正方形の鉄棒の一端を打ち伸ばしてＬ字状に折り曲げた頭部を持つ形態をもつ個体が圧倒的に多く、鋲とも推定される胴部をＬ字状に曲げる形態も少数確認される。長さは、４㎝から12㎝程度とバラエティに富んでおり、１つの遺跡で大小２種類の大きさを使用している例も報告されている。

鉄釘に木目が付着している固体も多く認められ、１固体での木目痕の違いから板材の厚さを推定することができ、その厚さは上塩谷横穴墓群28支群１号横穴墓（１点・5.5㎝？）と奥山横穴墓群A-1号横穴墓（１点・1.6㎝）を除くと、2.0～3.0㎝の間（25点）に集中している。

鉄釘の使用目的であるが、その出土をもって木棺の存在を推定している報告が多い。このなかで、向山１号墳、奥山遺跡Ａ－１号横穴では具体的な使用例が推定されている。向山1号墳の前庭部から出土した鉄釘４本は現位置を保っており、調査者は木の容器か台のようなものに使われたと推定している[4]。奥山遺跡Ａ－１号横穴では出土した鉄釘に付着する木目から組合木棺の構造を推定している。それによれば鉄釘約20本余りの使用で木棺を接合していると推定している[5]。鉄釘の使用目的は、追葬時の玄室内の副葬品の片付けや調査の精度[6]にも関わり一概には言えないが、その出土本数が多いものは木棺材の接合、出土点数が少ないものは副葬品を安置する木の容器や台の接合に使用した可能性も考えられる。

出雲地方で鉄釘の使用は大谷編年出雲４期が初現である。ただ、出土点数の少ない遺跡（出土点数５点以下）や、横穴墓の中に石棺を内蔵していることから追葬時の木棺の接合に使用した、もしくは木棺以外の接合に用いたと考えられる遺跡が多い。そのなかで木棺の接合に使用した可能性が高いと考えられる遺跡として、社日古墳10号横穴墓が挙げられる。玄室から木目が付着している鉄釘が12点出土し、玄室左壁に沿って棺台と推定される人頭大の自然石を６個整然と配置していることから、玄室内に木棺が安置された可能性が高い。出雲５期、６期になると鉄釘の出土点数の多い遺跡数が増加し、本格的に木棺の接合に鉄釘が使用されるものと推定される。

畿内の周辺や岡山県での木棺の接合に用いられた鉄釘の出現は５世紀後半で、６世紀前半から後

出雲地方・鉄釘が出土した古墳・横穴墓

	場所	遺跡名	遺構名	出土位置	個数	釘の長さ（cm）	木目痕のタイプ（点数）				棺材の厚さ（cm）	時期（大谷編年）					備考
							完形及びほぼ完形	頭部のみ遺存	胴部のみ遺存	胴端部のみ遺存		4	5	6	7	8	
1	安来市	永昌寺の谷遺跡	Ⅲ区１号横穴墓	玄室	43点	6.5・7.0（残存長7.4の固体有）	B1、C3	A12、C2、D1	A4	A10、B12	2.4、2.4、2.5、2.6			○	○		玄室左壁に沿って、棺台と考えられる人頭大の川原石を4個配置
2	安来市	岩屋口北遺跡	4号横穴墓	玄室	4点（2本分か）			A2		B2			○	○			墓道共有の3号横穴墓からは出雲7期の須恵器出土
3	安来市	臼コクリ遺跡	S-2号横穴墓	玄室	8点	6.0	B1	B1		A3、B3		○	○	○	○		石棺有
4	安来市	臼コクリ遺跡	S-3号横穴墓	玄室	5点	5.6、6.0	A1,C1		D1	A2	2.8	○		○			石棺有
5	安来市	臼コクリ遺跡	N-9号横穴墓	玄室	1点	（残存長8.6cm）	D1					○	○				
6	東出雲町	島田遺跡	第1号横穴墓	玄室、玄門	6点	（推定6cm前後）								○	○		石棺、石床有
7	東出雲町	島田池遺跡	1区3-B号横穴墓	玄室、玄門	10点	9.0、9.2、9.4、9.6、10.4、11.8	A9			A1			○	○			須恵器床上からは出土していない。
8	東出雲町	島田池遺跡	6区2号横穴墓	墓道	1点								○				鉄釘？、削り出し仕切り
9	東出雲町	渋山池古墳群	3号横穴墓	玄室	1点							○	○				鉄釘？、玄室内に板状の割石６
10	松江市	連行遺跡	１４号横穴墓		2点	8.1	A1			B1			○	○		○	石棺有
11	松江市	向山古墳群	１号墳	前庭部	4点	6.4	A2			A2		○					木の容器か台のようなものに使われたと推定、石棺有
12	松江市	社日古墳	10号横穴墓	玄室	12点			A1	A2、C1	C3		○					玄室左壁に沿って、棺台と考えられる人頭大の自然石を6個整然と配置
13	松江市	十王免横穴墓	4号横穴墓	玄室の左造り付けの棺台上を中心に散乱	約25本＋その他若干の小残欠	5.0、7.4、7.6	C4				2.1、2.6、2.6			○	○		実測図掲載は4本のみ
14	松江市	十王免横穴墓	18号横穴墓		2点										○		
15	松江市	十王免横穴墓	20号横穴墓		2点								○				石棺有？
16	松江市	十王免横穴墓	28号横穴墓		3点								○	○			
17	松江市	奥山横穴墓群	A-1号横穴墓	玄室左側床面	22点	4.6、6.2、6.2、6.9、7.0、7.0、7.1、7.2、7.6、7.7、8.4、8.6、10.1、10.2	A7、C12	A1		A1、B1	1.6、2.0、2.1、2.2、2.5、2.6、2.6、2.6、2.8、2.8、3.0、3.0			○	○		組合木棺の棺構造を推定
18	松江市	菅沢谷横穴墓群	B-5号横穴墓	玄室	4点	6.8、7.6	C1	A1			2.2			○			玄室内に棺台と推定される平たい石が列状に並ぶ
19	出雲市	上塩谷横穴墓群	6支群4号横穴墓														屍床
20	出雲市	上塩谷横穴墓群	２１支群4号横穴墓	前庭部	1点	（残存長8.3cm）								○			
21	出雲市	上塩谷横穴墓群	２２支群1号横穴墓		1点								○	○			
22	出雲市	上塩谷横穴墓群	２２支群3号横穴墓	玄室、玄門、墓道	5点								○	○			
23	出雲市	上塩谷横穴墓群	２２支群9号横穴墓	玄門他	7点	4.3	A1	A1	A1	A1				○			
24	出雲市	上塩谷横穴墓群	２２支群13号横穴墓	羨道	2点			A1	C1					○			
25	出雲市	上塩谷横穴墓群	２２支群14号横穴墓	玄室	4点	5	C1				2.0			○			
26	出雲市	上塩谷横穴墓群	２２支群18号横穴墓	玄室	16点	7.9								○			屍床
27	出雲市	上塩谷横穴墓群	２３支群5号横穴墓	玄室	4点	10.5、11.8	C3				2,7		○	○			かすがい？屍床
28	出雲市	上塩谷横穴墓群	２８支群1号横穴墓	玄室	30点			A1,C2	A9、B1、C2	A1	5.5(2.8,2.8,2.6以上の3枚の可能性あり)			○			屍床
29	出雲市	上塩谷横穴墓群	２８支群2号横穴墓	玄室	24点	8.4、8.6、10.0	A1		A3、B2					○			
30	出雲市	上塩谷横穴墓群	33支群3号横穴墓	玄室	16点	7.5、7.6、9.1、9.8	A5、C2	A2	B1	A1、B1	2.9			○			
31	出雲市	上塩谷横穴墓群	33支群4号横穴墓	玄室	6点			A2		A1			○	○			
32	出雲市	上塩谷横穴墓群	37支群1号横穴墓	玄室	1点												須恵器の出土無し
33	出雲市	三田谷古墳群	３号墳	石室内外	46点									○			
34	出雲市	光明寺古墳群	４号墳	石室外	20点	（7.3cm）											鉄鏃も混じっている可能性あり
35	出雲市	放れ山横穴墓群	１号横穴墓	玄室	41点	7.4、7.5	C1	A2、C1	A8、B2、C1	B3、C1	2.8			○			かすがい？も有
36	奥出雲町	比久尼原横穴墓群	４号横穴墓	玄室、玄門	12点	6.0、7.4、7.4、7.6、8.0	A3、C3			B2	2.5		○				

＊［木目痕］　木質の付着状況は釘の全長に対して、A)直行する方向に木目が付着するもの、B)平行方向に木目が付着するもの、C)胴部の上半に直行方向の木目・下半に平行方向の木目が付着するもの、D)木目痕がないもの。Aタイプは頭部と胴部で直交方向の木目が交差するタイプの２種類に分類できるが、実測図からは判断できない資料が多いことからすべてAタイプとした。

＊［時期］　大谷晃二「川雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌　第11集』島根考古学会　1994

半にかけて普及するという。これは横穴式石室の普及と相関関係が指摘されている。６世紀末から７世紀初頭にかけて鉄釘の急激な小型化が進み、前代のものと比べて全長10㎝前後、厚さ0.7㎝前後と長さ厚さ共小型のものとなる。これは棺材が薄くなる現象と相関関係を有すると推定されている。これは前代以来の安置される場所において組み立てられる組合式木棺の伝統、要素を残した重厚のものから、追葬などの横穴式石室の埋葬儀礼による「棺」という形態をもって運びこまれる棺形式に変化したためと推定されている。この変化は各古墳・各地域を越えてかなり斉一的な傾向を示すという(7)。出雲地方での組合式木棺の接合に鉄釘が使用されるのは、この「棺」の形態が変化した時期に初現・盛行すると考えられる。

よって、Ⅲ区１号横穴墓から出土した鉄釘は、出雲地方において鉄釘を用いて接合した組合式木棺の使用が盛行する時期のもので、それにより接合した組合木棺は畿内をはじめとする周辺地域と同様に、その場で組み合わせる形態のものから、「棺」という形態をもって運びこまれる形式に変化した時期のものであると推定される。

＊本文中の出土遺物の編年観および併行関係は以下の文献によった。

・田辺昭三『陶邑古窯跡群Ⅰ』平安学園考古学クラブ　1966
・西弘海「土器の時期区分と型式変化」『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』奈良国立文化財研究所　1978
・田辺昭三『須恵器大成』角川書店　1981
・島根県教育委員会『高広遺跡発掘調査報告書　和田団地造成工事に伴う発掘調査』1984
・松山智弘「出雲における古墳時代前半期の土器の様相　大東式の再検討」『島根考古学会誌　第８集』島根考古学会　1991
・大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌　第11集』島根考古学会　1994
・大谷晃二「出雲地方の須恵器編年表」『第7回山陰横穴墓調査検討会　出雲の横穴墓　その形式・変遷・地域性』山陰横穴墓研究会1997
・菱田哲郎「近畿地方西部・山陰・山陽」『古代の土器研究会第5回シンポジウム　古代の土器研究　律令的土器様式の西・東５　７世紀の土器』古代の土器研究会　1997
・相原嘉之「Ⅰ大和　飛鳥・藤原地域の土器」『古代の土器5-1　７世紀の土器（近畿東部・東海編）』古代の土器研究会編　1997

＜註＞

（１）大谷晃二氏教示。
神郷町教育委員会『大迫横穴墓群A1号横穴墓』1990

（２）大谷晃二「山陽地域の横穴墓の諸問題」『古代吉備　第14集』古代吉備研究会委員会　1992

（３）同様なテラスは高広遺跡Ⅰ区1号横穴墓でも検出されている。
島根県教育委員会『高広遺跡発掘調査報告書　和田団地造成工事に伴う発掘調査』1984

（４）向山１号墳の前庭部の調査において　鉄釘の出土位置は不整な四辺形をなし、調査者は木の容器か台のようなものが存在していたと推定している。
松江市教育委員会『松江市文化財調査報告書第77集　向山古墳群発掘調査報告書』1998

（５）鉄釘に付着した木理方向から３種に分けて、それを過不足なく用いて、長手板２・妻板２・底板１・蓋板１の計６枚を組み合わせた木棺に復元している。
島根県教育委員会『島根女子短期大学移転予定地内　奥山遺跡発掘調査報告書』1988

（６）横穴墓玄室の調査は、ライトで照らしているとはいえ薄暗い中での調査であり、玄室内の堆積土中の小礫と大きさや色調がよく似ている鉄釘片は見落とされやすい。本遺跡の調査でも、43点中22点がフルイ作業により出土している。

（７）田中彩太「古墳時代木棺に使用された緊結金具」『考古学研究　第25巻第２号（通巻98号）』考古学研究　1978

＜参考文献＞

・山陰横穴墓研究会『第７回山陰横穴墓調査検討会　出雲の横穴墓　その形式・変遷・地域性』1997

・島根県教育委員会『岩屋口北遺跡　臼コクリ遺跡（Ｆ区）　一般国道９号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書13』1997

・島根県教育委員会『臼コクリ遺跡　大原遺跡　一般国道９号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ｖ』1994

・島根県教育委員会『岸尾遺跡・島田遺跡　一般国道９号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書　西地区Ｖ』1997

・島根県教育委員会『島田池遺跡　鷭貫遺跡　一般国道９号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書　西地区Ⅶ』1997

・島根県教育委員会『渋山池古墳群　一般国道９号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書　西地区　』1997

・島根県教育委員会『馬場遺跡・杉ヶ撓遺跡・客山墳墓群・連行遺跡　国道431号バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ』2002

・島根県教育委員『社日古墳　一般国道９号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書12』2000

・島根大学考古学研究会『菅田考古第10号　十王免横穴墓群発掘調査報告書』1968

・松江市教育委員会　（財）松江市教育文化振興事業団『菅沢谷横穴墓群　（財）松江市教育文化振興事業団文化財調査報告書　第３集』1994

・島根県教育委員会『上塩谷横穴墓群第20・21支群　斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』1995

・島根県教育委員会『上沢Ⅱ遺跡、狐廻谷古墳、大井谷城跡、上塩谷横穴墓群（第Ⅶ･12･22･23･33･35･36･37支群）斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ』1998

・出雲市教育委員会『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ　上塩谷横穴墓群第17･18･19･38支群大井谷Ⅲ遺跡　石切場跡1･2　三田谷３号墳』2000

・島根県教育委員会『上塩谷横穴墓群第28支群　斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ』1999

・島根県教育委員会『古志本郷遺跡Ⅳ・放れ山横穴墓群・只谷間府・上沢Ⅲ遺跡（分析編）　斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書14』2002

・出雲市教育委員会『光明寺3号墓・4号墳　斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』2000

・仁多町教育委員会『比久尼原横穴墓群緊急発掘調査報告』1986

（３）律令期以降の遺構

永昌寺の谷遺跡Ⅱ区下からは７世紀～９世紀にかけての多くの遺物・遺構が出土しており、鍛冶遺構や形象硯などの遺物も含まれる。この時期にこの場所でまとまった形での集落が存在しており、人々が生活を営んでいた様子がうかがえる。ここではⅡ区下のこれらの遺構・遺物を中心としながらこの遺跡内の様子を概観し、まとめに代えたいと思う。

１．出土遺物と遺跡の時期について

Ⅱ区下から出土した須恵器の多くは、大谷編年[1]出雲５期以降のものである。５期の特徴を持つものは全体に数が少なく、６期以降のものが多数を占める。このため、Ⅱ区下の遺構群の展開は、６期以降本格的となるということができよう。また、安来市内で土器編年が行われている高広遺跡[2]の資料に照らすと高広Ⅱ～Ⅳ期のものが中心となる。高広Ⅱ期は７世紀初頭が始期とされており、Ⅳ期は８世紀末から９世紀前半代が想定されている。こうしたことから、この場所に営まれていた集落は７世紀～９世紀代のものが中心であるということができる。この時期、Ⅲ区では、横穴墓が築かれており、この集落と並存している。直接の関係性についてははっきりしないが、立地等を考えると、この集落の墓域であった可能性が高い。

遺物の種類についても土師器甕、土製支脚、須恵器皿などの日常生活での使用が想定できるものから、後述する硯やヘラ書き文字の入る土器など公的機関を連想するもの、手捏ね土器などの祭祀関係の遺物、また鍛冶遺構の存在など多面的な性格を持った遺構群であるということができると思う。ただし、多くの遺物を一括資料として取り上げてしまい、また大半の遺物の出土場所も第３平坦面の埋土中ということもあり、それぞれの遺構がそのような推移を持って展開するのか明らかにできないことは、筆者の力不足を痛感する点である。しかし、遺構の検出状況や数少ない遺物が出土した遺構から言える、いくつかのことがあるためその点について記しておきたいと思う。

まず、ＳＢ０２のピット内から出土した、土師質土器（第75図－６）についてである。Ⅱ区下から出土した遺物の中では最も新しい様相のもので、10～11世紀まで下がる可能性を持つものである。ＳＢ０１～０３の建物跡はいずれも、ピット掘削前から明らかに３間×２間の建物として検出できた。検出面が分かりやすいものであったということもあるが、他のピットがほとんどないということも一因である。その他の部分ではひとつの面で多くの建て替えを行っている様子がピットの切り合いなどで伺えるが、この部分についてはそうした痕跡がほとんど見られなかった。出土遺物とあわせこの部分はⅡ区下での最終到達点でこれらの建物が、時代を異にして単独で立地していた可能性すらある。検出状況と１点の出土品のみからであるため、確実なものではないが遺構群の推移を考える上では興味深い点ではないかと考えられる。

また、ＳＢ０４の周辺から出土している、形象硯（第76図－１）についてである。この遺物は形象硯の中でも八花硯の類例と思われる。平城京・長岡京での出土例などでは、８つの花弁状の陵を持つものであるがここでは11の花弁を持つ。山陰地方で形象硯の出土例は多くなく、少なくともこの形の硯は出土例を知見しないが、同時期に現れると考えられている風字硯について大井窯跡群・山津窯跡[3]からの出土例があり、あるいは地元製のものであるかもしれない。

この形態の硯が出現するのは、平城京末～長岡京期であるとされており[4]、８世紀半ば以降の

ものであろう。こうした形の硯は、官衙や貴族の邸宅などの限られた場所でしか出土しておらず、限定された使用層が想定されている[4]。形態を模し地元窯で作成したものか、搬入品であるかは定かでないが、この形態の硯を使っていた人物はある程度の地位を持つ人であるということができるのではないか。そして、出土地点が、Ⅱ区下では最大級のピット規模をもつ建物ＳＢ０４の周辺から出土している点も興味深い点である。遺物と遺構の直接の関連性は定かではないが、建物の規模・規格から、この建物がある時期この遺構群の中心的な建物であった可能性を持つことは十分考えられる。この建物の使用者と遺物とが関係のあるものであるとすると、この建物の性格についても推測することができるのではないだろうか。

２．鍛冶遺構と集落の性格について

本遺跡も含む雲伯国境周辺では、この時期、製鉄関係の遺構・遺物が多く確認されている。具体的には、出雲側で島田南遺跡[5]、五反田遺跡[6]、岩屋口遺跡[7]、徳見津遺跡[8]などである。伯耆側では陰田・新山地区において大規模な加工段群により掘立柱建物を中心とする集落で製鉄・鍛冶遺構が確認されている[9]。いずれも７世紀初～９世紀ごろのもので立地・時期・規模など共通する部分も多い。

出雲側の各遺跡はいずれも一般国道９号バイパス、通称・安来道路にともなって調査された事例で中海沿岸部の雲伯国境地域である。これに対して、本遺跡は出雲国風土記の「手間の剡」比定地[10]である安田関の周辺から南西約６㎞に位置し、また東に直進すると約２㎞で伯耆国に入ることのできる、内陸部における雲伯国境地域に当たる。これまでの調査成果からこの地域はマクロ的な視点で捉えた場合、鉄生産拠点である可能性が指摘されている[11]が、沿岸部だけでなくこうした内陸部を含めた一帯が鉄生産地帯を形成している可能性を示すものとなった。Ⅱ区下の鍛冶遺構は、出土鉄滓が鍛冶滓であったことから小鍛冶に伴うものと考えられるが、この雲伯国境地帯を鉄生産拠点であると捉えたとき、その生産体制の中でどの部分を担っていたのかはよく分からない。少なくとも鉄製品の生産部分にかかわるであろうが、単に村鍛冶的な性格を持つ遺構である可能性もないわけではなく、この点については今後の調査研究の進展に期待したい。

Ⅱ区下の遺構群は上記の鍛冶遺構を持つということだけでなく、立地・時期・規模・遺物等を含めた内容等、上記の雲伯国境地域の各遺跡によく似た様相を持つ。丘陵斜面に加工段を設け掘立柱建物によって集落を形成している点などほぼ共通する部分であるが、この加工段の規模において若干の差異が見える。Ⅱ区下の総延長100mを超える第１平坦面に見るような大規模な加工段の作り方をする遺跡は周辺でも最大のものだが、加工段の規模や構成の点だけで見れば、出雲側よりむしろ伯耆側の各遺跡に類似点を見ることができる。陰田広畑遺跡[12]などは40mを越える２つの加工段を中心に９つのテラスからなる大規模な集落跡で時期、立地、出土遺物など共通点が多い。特にこの遺跡から出土した「里宅」と読める墨書土器の存在から、律令体制化の里長の居住した施設を含んでいると考えられている。このほか陰田隠れ家谷遺跡[13]、陰田宮の谷遺跡[14]など比較的大規模な加工段を連続させる集落跡を見ることができる。これに対して出雲側の各遺跡は、比較的小規模な加工段で完結している。地形的な制約や建物の規模など考慮する要素は多分にあり、加工段の規模や作り方が単純に集落の性格を示すものではないとは思うが、立地条件や集落規模、形象硯などの特殊な遺物やヘラ書き土器など公的機関を連想する遺物などのことと考え合わせると、この集

落も陰田広畑遺跡などと同様な在地の有力者の住居を中心とし、鉄生産などの付属施設をともなう集落と言うことができるのではないか。いずれにしても、雲伯国境付近にこうした遺跡が点在し、前述の鉄製産拠点としてとらえることができる点など考え合わせると本遺跡の調査結果は、興味深いものと言うことができよう。

３．ヘラ書き土器について

Ⅱ区下の遺物には多くのヘラ記号を刻んだもの、ヘラ書き文字を記したものが多く出土している。ヘラ書き土器の中で、文字がはっきりと判読できるものは「東」「田下」「木」の３点である。そのほかにも判読不明な文字や印章のように見えるものまで含めると６点が出土している。

500点を越すヘラ書き土器の出土した玉湯町・蛇喰遺跡(15)ではヘラ書き土器は玉の生産管理に用いられていた可能性が指摘されている。これは、「白田」「由」「林」など地名を想定させるヘラ書きが多く記されているためである。また、こうした、地名を想定する文字以外にも、出雲国庁跡(16)、松江・福富Ⅰ遺跡(17)からは「社邊」のヘラ書きのある土器が出土している。「陶器」産地であった嶋根郡大領の社部臣との関連が考えられ、須恵器の流通を考える上での貴重な資料となっている。

本遺跡の「東」「田下」「木」と読める文字も地名もしくは場所を示すものと考えることが妥当であろう。出雲地方の各遺跡からは「田」の文字を含むヘラ書き土器の出土は多く、「林」などの「木」との関連をうかがわせる遺物も出土しているが、「東」の文字は初見である。また、あたかも印章のように見えるヘラ書き土器（第96図－２）の存在も特筆すべきものである。須恵器の大鉢の破片上に半分だけ残っているため全容は分からないが、角印のような縁取りに同じ文字を二つ重ねたように見えるこのヘラ書きは、出雲内で他の類例を見ない。ヘラ書きというより刻まれた状況を観察すると刻印とでも言うべきもので、おそらくスタンプ状の器具によるものではないかと考えられる。産地を意味するもの、所有者を意味するもの、施設名を意味するものなどいろいろな可能性は考えられるが、文字が判読できないこと、すべての部分が残っていないことから判然としない部分が多く、この刻印が何を意味しているのかは、今後の調査課題としておきたい。

註）
(1) 大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集　1994
(2) 島根県教育委員会「高広遺跡発掘調査報告書」1984
(3) 松江市教育委員会・(財)松江市教育文化振興事業団「大井窯跡群　山津窯跡・山津遺跡発掘調査報告書」2006
(4) 松田留美「長岡京出土の陶硯」『年報　都城８』(財)向日市埋蔵文化財センター　1997
独立行政法人文化財研究所　奈良文化財研究所「古代の官衙遺跡　Ⅱ遺物・遺構編」2004
(5) 島根県教育委員会「一般国道９号・安来道路建設予定地内発掘調査報告書Ⅲ　島田南遺跡」　1992
(6) 島根県教育委員会「一般国道９号・安来道路建設予定地内発掘調査報告書16　山ノ神遺跡・五反田遺跡」1998
(7) 島根県教育委員会「一般国道９号・安来道路建設予定地内発掘調査報告書８　岩屋口南遺跡」1995
(8) 島根県教育委員会「一般国道９号･安来道路建設予定地内発掘調査報告書12　徳見津遺跡･目廻遺跡･陽徳寺遺跡」1996
(9) (財)米子市教育文化事業団「萱原・奥陰田Ⅰ」1994
(財)米子市教育文化事業団「萱原・奥陰田Ⅱ」1998
(10) 加藤義成『修訂　出雲国風土記参究』1981
(11) (5)～(9)の各報告書の中で、製鉄遺構の密集するこの地域が鉄生産の拠点となりうることについて触れられている。
(12) (財)米子市教育文化事業団「萱原・奥陰田Ⅱ」1998
(13) (12)に同じ
(14) (12)に同じ
(15) 玉湯町教育委員会「蛇喰遺跡」1999
(16) 松江市教育委員会「出雲国庁発掘調査概報」1971
(17) 島根県教育委員会「一般国道９号（松江道路西地区）建設予定地内発掘調査報告２　福富Ⅰ遺跡・屋形１号墳」

第４章　高倉遺跡の調査

第１節　調査概要

高倉遺跡は、北東へ突き出た標高約100mの丘陵上に位置する。当初はトレンチ３本を設定し、試掘調査を行ったところ、丘陵北側頂部より、土師器片１点を確認した。これにより、この丘陵上になんらかの遺構が存在するものと考え、発掘調査を行うことになった。

調査の結果、調査区内より焼土坑３基、間歩状遺構1基を検出した。

［間歩状遺構］（第179図）

間歩状遺構は、幅は平均約50㎝、高さは平均約65㎝で、調査した部分の全長は約10mを測る。

入り口は南西斜面にあると見られ、この遺構は北東方向にさらに続いているようであるが、壁面の崩落の危険など安全上の問題から、これ以上の調査は不可能と判断し、終点を確認しておらず、解明に至っていない。

穴の天井部はおおむねアーチ状を呈しているが、遺構の大半は、天井部分の崩落により元の形状を留めておらず、内部には外部からの流入土が充満していた。また、遺構南西端から約１mの部分には、直径約1.6mの床面に浅い溝を廻らせた、ドーム状の空間が造られている。天井部の大半は崩落しているが、壁面のカーブから推定して、中心部で床面よりの高さは1.1m位と推定される。出土遺物は無く、性格や時期は不明である。

［ＳＫ０１］（第180図）

ＳＫ０１は、調査区北西斜面に掘り込まれた土壙である。直径約1.4m～1.7mの楕円形を呈し、底部は丸底で、深さは約60㎝を測る。土壙の側壁は被熱と煤煙により黒く変色している。

遺物は土壙底部付近から、高台付き土師質土器坏の破片とみられるものが１点出土している。（第181図－２）高台先端部と坏部を欠いているため、全体の形状・大きさなどは不明であるが、色調は黄褐色を呈し、坏部内面は煤を付着させ、ミガキ調整を施しており、いわゆる内黒タイプの黒色土器とみられる。

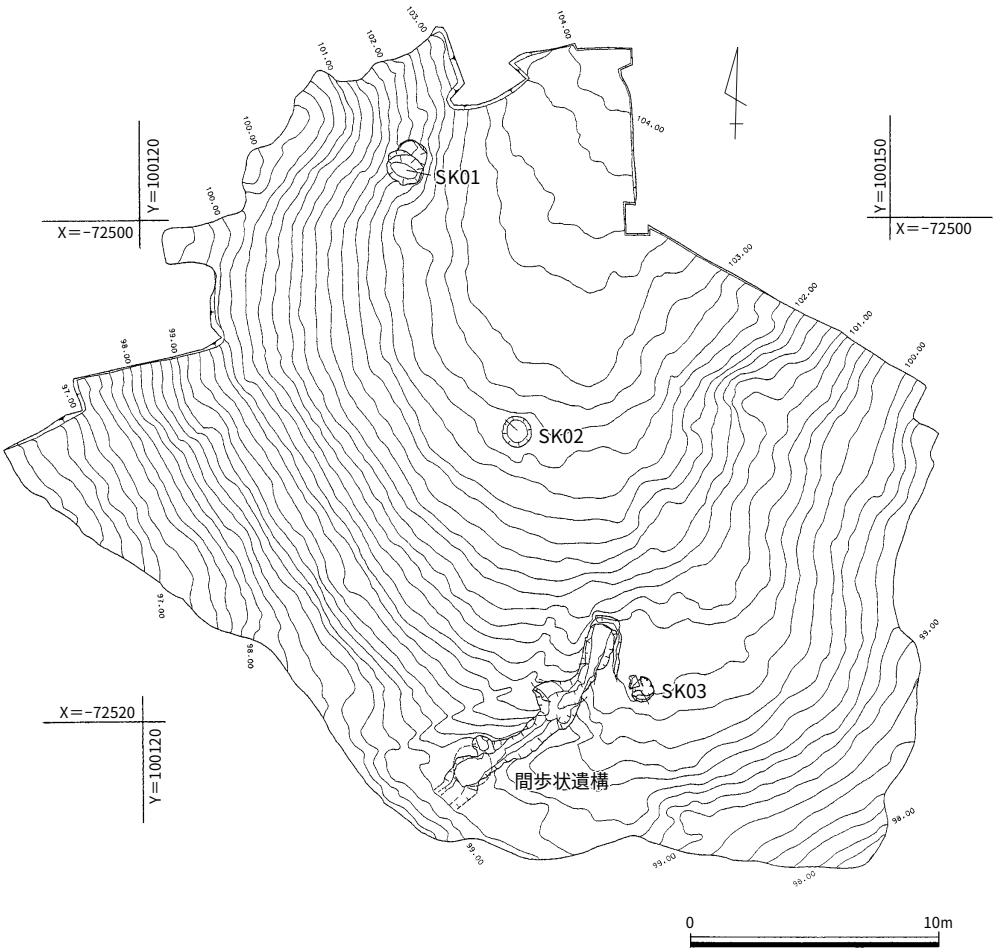
また、この遺構の約３m下側斜面からは、炭化物混じり灰褐色土の上から、土師質土器底部（第181図－１）が出土している。表面は風化が激しいため、調整などは不明である。

［ＳＫ０２］（第180図）

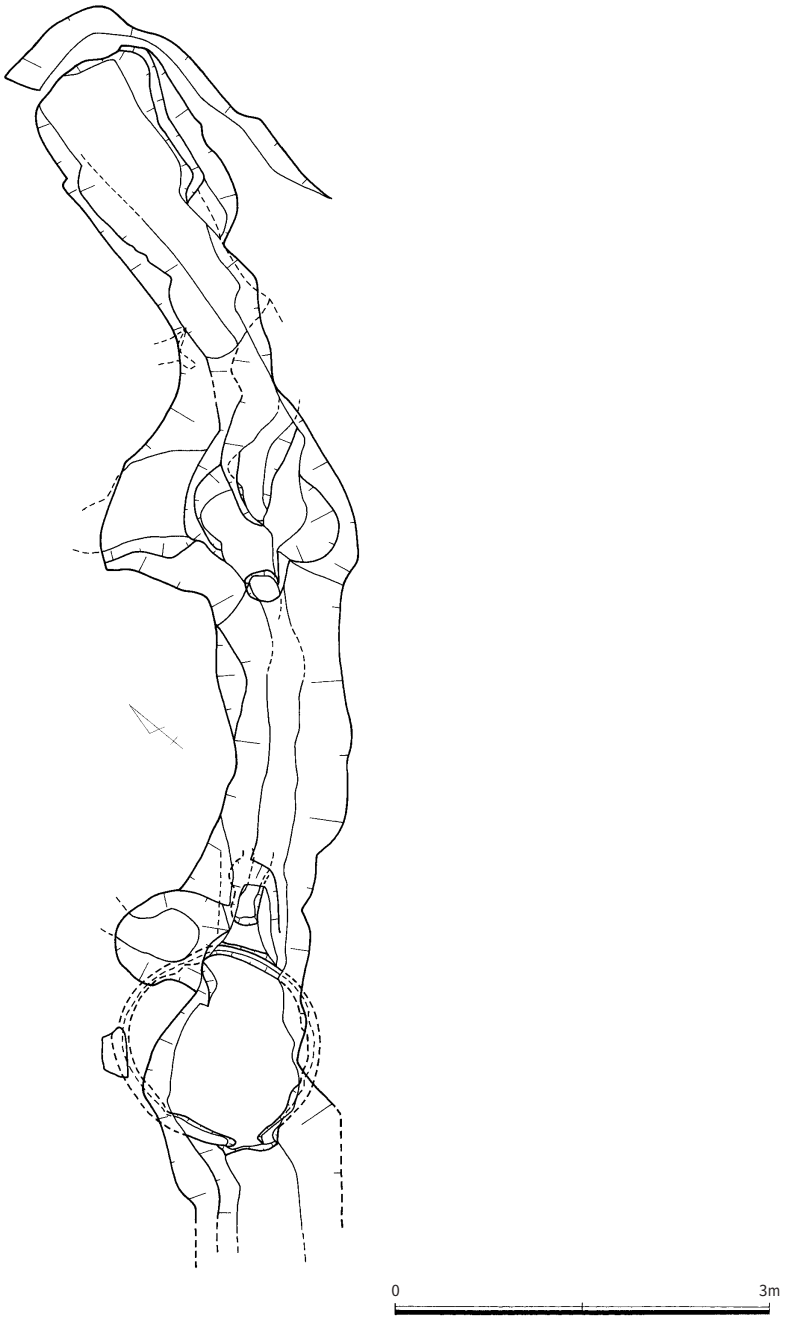
ＳＫ０２は、標高約103mの調査区南側斜面に存在する土壙である。直径約1.2mの円形を呈し、深さは約50㎝を測り、断面形はレンズ状を呈す。壁面は、被熱により赤褐色に変色しており、内部には炭化物の堆積がみられる。出土遺物は皆無であったため、遺構の年代は不明である。

［ＳＫ０３］（第180図）

ＳＫ０３は、標高約101mの調査区南側斜面に存在する土壙である。直径約90㎝の円形を呈し、



第178図　高倉遺跡遺構全体図（Ｓ＝１／300）



第179図　高倉遺跡間歩状遺構実測図（Ｓ＝１／60）

深さは約35㎝を測り、断面形はレンズ状を呈す。側壁及び底部は被熱により暗赤褐色に変色しており、土壙内に炭化物の堆積がみられる。また土壙の一部は木の根により撹乱を受けている。出土遺物は無かったため遺構の性格、時期は不明である。

第２節　まとめ

本遺跡からは間歩状遺構１基と、焼土壙３基を検出したが、いずれも遺跡の性格を判断することはできなかった。

遺構の時期については、断定できるものは少ないが、焼土坑については、ＳＫ０１から黒色土器が出土したことからみて、概ね平安時代頃のものではないかと考えられる。

島根県内で黒色土器が出土した例は、現在までにごく数例に限られるが、高倉遺跡の例に類似したものとしては、昭和50年度に調査が行われた、安来市早田町大坪古墳群の例がある。ここでは大坪３号墳北西の平坦部において、長径83㎝、短径75㎝、深さ約20㎝の不正円形の土壙があり、内部には焼土層と炭化物層が見られ、その上面から黒色土器を含む土師質土器の碗や坏が37個体分出土している。土壙の性格は不明であるが、遺構の年代は10世紀代のものであると考えられている。

安来市内でも、10世紀～12世紀頃の遺物を伴う土壙及び焼土壙は、高い山上に存在する遺跡において複数検出される例が知られており、このような土壙の性格について、今後とも検討していく必要があろう。

次に、間歩状遺構については、性格・時期ともに不明と言わざるを得ないが、過去に行われた調査では、似たような事例が数例、安来市及び松江市周辺でも確認され、坑道状遺構という名前で報告されている。それらの共通する特徴としては、

①　動物の巣穴状に狭小な横穴が伸びていること

②　丘陵の最高所に存在すること。

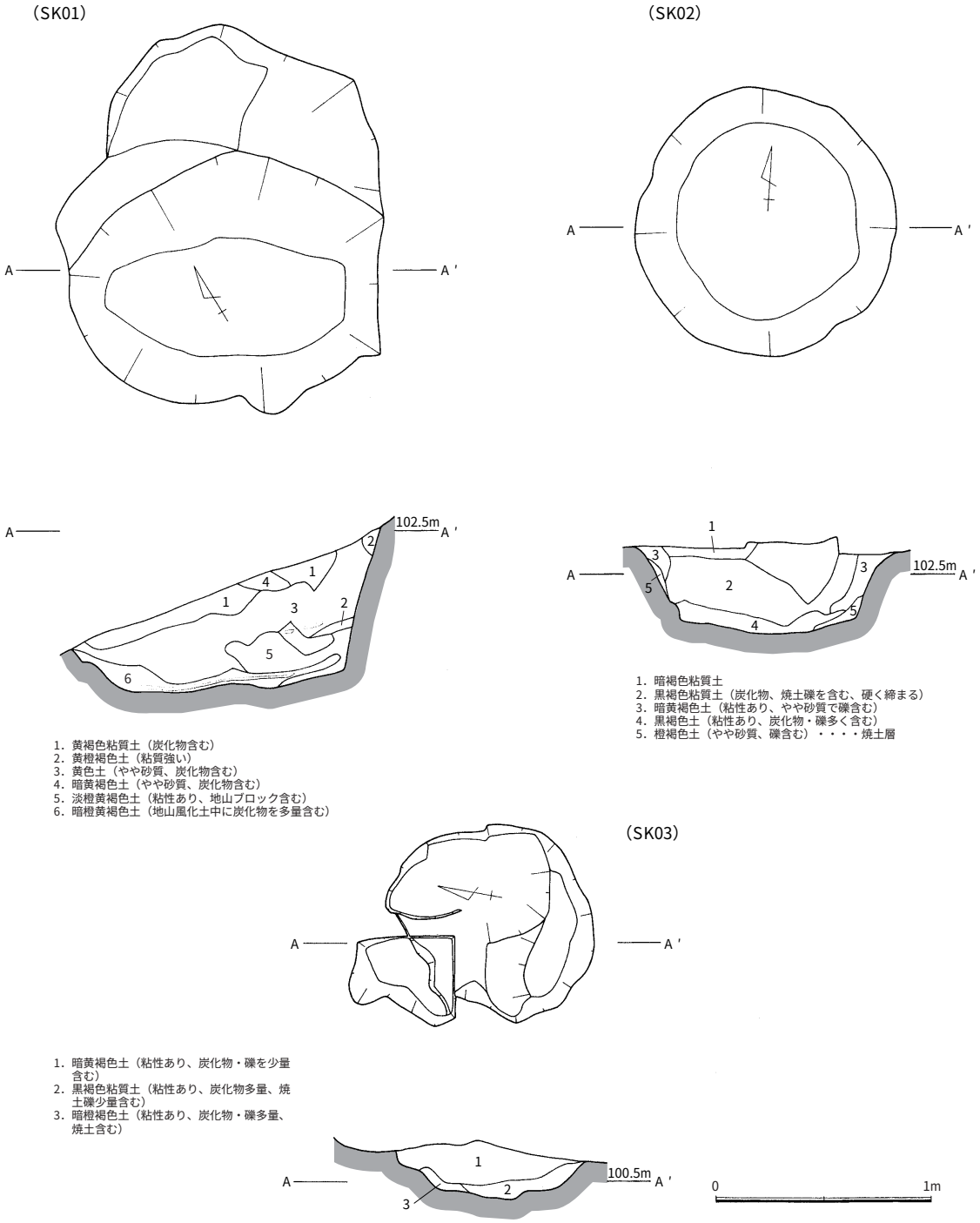
などが挙げられており、動物の巣穴説などがあるものの、遺構の時期や性格を解明するには至っていない。

安来市吉佐町山ノ神遺跡の例では、遺構に伴うものかは不明であるが、坑道状遺構の落ち込み内部から縄文土器の深鉢が出土している。高倉遺跡の間歩状遺構周辺においても、縄文時代とみられる黒曜石の剥片や石鏃（第181図－３）が出土しており、注意する必要があると思われる。

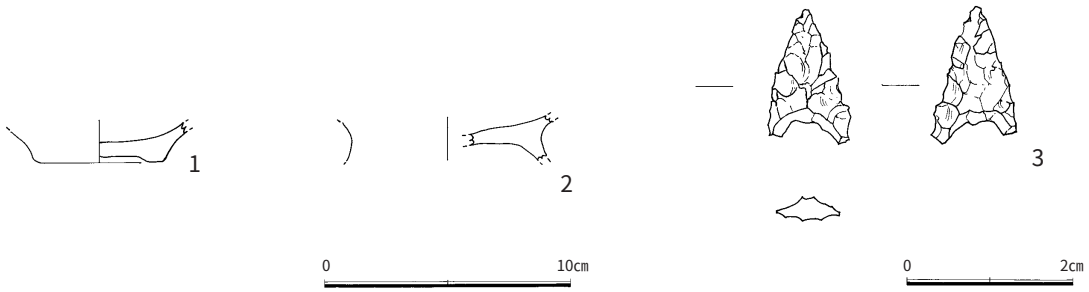
今後、明確に時期のわかる事例が発見されれば、本遺跡についても解明の糸口となるであろう。

【参考文献】

・島根県教育委員会「大坪古墳群」『国道９号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』1976
・森　隆「黒色土器」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編　真陽社　1995
・建設省松江国道工事事務所・島根県教育委員会『陽徳遺跡・平ラⅠ遺跡』1995
・建設省松江国道工事事務所・島根県教育委員会「山ノ神遺跡」『山ノ神遺跡・五反田遺跡　一般国道９号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書16』1998



第180図　高倉遺跡検出土壙実測図（Ｓ＝１／30）



第181図　高倉遺跡出土遺物実測図（Ｓ＝１／３　３はＳ＝１／１）

第５章　自然科学分析

永昌寺の谷遺跡（Ⅱ区）鉄関連出土品の分析調査

安来市体育文化振興財団・和鋼博物館
三奈木義博

永昌寺の谷遺跡（Ⅱ区）は弥生時代中期～後期にかけての集落跡が見つかっています。Ⅱ区丘陵斜面部分の調査では、弥生時代後期の集落跡と飛鳥～平安時代の鉄を加工し鉄の道具を作る鍛冶集落跡が見つかっています。

この集落跡やその周辺から鍛冶炉の底に溜まった鉄滓や不定形の鉄器や欠損品、砥石などが出土している。今回は出土した鉄滓や鉄器（鉄関連遺物）について調査を行いましたので報告します。

１．出土品明細および調査方法

１‐１．調査試料

表１に出土品調査試料の明細一覧表を示す。この内容は連絡あったデータをそのまま使用して示す。すべて鉄滓ということになっている。

１‐２．調査項目および方法

各試料の調査項目は、外観観察（外観写真）、化学分析、顕微鏡観察（ミクロ組織）、ＳＥＭ－ＥＤＸにより調査を行った。外観観察とミクロ組織は全数調査し、化学分析と組織を特定するＳＥＭ－ＥＤＸは試料外観等より選別して行った。

（１）外観観察（外観写真）

試料の外観写真を撮影するとともに目視観察を行った。あわせて、磁石による磁性の状況について検討した。

（２）化学成分分析

調査試料の化学成分分析は鉄鋼に関するＪＩＳ分析法に準じて次の方法で実施した。

全鉄分(T･Fe)、金属鉄(M･Fe)、酸化第一鉄(FeO)：容量法。

二酸化珪素(SiO_2)、酸化アルミニウム(Al_2O_3)、酸化カルシウム(CaO)、酸化マグネシウム(MgO)、酸化マンガン(MnO)、二酸化チタン(TiO_2)、五酸化燐(P_2O_5)、酸化バナジウム(V_2O_5)、酸化ナトリウム(Na_2O)、酸化カリウム(K_2O)：誘導結合プラズマ発光分光分析(ICP法)。

（３）顕微鏡組織（ミクロ組織）

出土試料から観察試料としての小片を切出して樹脂に埋め込み、エメリー研磨紙の＃150、＃240、＃320、＃600、＃1000と順を追って研磨し、最終はダイヤモンドの３μ～１μで仕上げてから金属組織および鉱物相を観察した。

（４）ＳＥＭ－ＥＤＸ定性分析

顕微鏡組織観察試料にカーボン蒸着を施した後、走査型電子顕微鏡（SEM）により電子線

を照射し、発生する２次電子、反射電子を検出し、表面組織形態の観察を行い、併せて電子線を照射した微小部（特定鉱物相）から発生する特性Ｘ線をエネルギー分散型Ｘ線検出器（EDX）で検出して定性元素分析を行い鉱物相の組成を同定した。

３．調査結果

３．１　外観写真

写真１－１～１－６に試料外観写真を示す。最初に撮影した方をＡ面、その反対面をＢ面とし、面はランダムに決め撮影した。

３．２　外観目視観察および着磁性

外観目視観察状況を表２に示す。鉄滓としてはほとんど同じような状況であるが、ＥＳＪ－８、１５と１７は全体が茶色で粘土色が強く、若干異なる。

磁性についてはＥＳＪ－９、１４と１６が強く、他のものは大体弱い磁性を示したが、磁性のないものが２点あった。

３．３　化学分析

表３に鉄滓の化学分析結果を示す。鉄滓の成分としてＥＳＪ－１と５はSiO_2量が低く、ＥＳＪ－２はSiO_2量が鍛冶滓としては高く鉄分が低い。

化学成分より、鉄滓がどういう生まれのものかを検討してみる。図１に試料の全鉄分（T・Fe）と造滓成分（SiO_2＋Al_2O_3＋CaO＋MgO＋Na_2O＋K_2O）の関係を示す。これを文献[1)]の後述の参考図１と比較するとすべてが低チタニア系の原料が使われていたことが解かる。また、図２に全鉄分（T・Fe）とTiO_2の関係をしめす。これを参考図２と比較して考えると１点が若干外れるが、ほぼ砂鉄系鍛錬鍛冶滓と推定される。外れた１点はＥＳＪ－２で参考図２より、炉壁付着滓のようなものと考えられる。

表４に鉄器の化学成分を示す。当初は鉄滓として試料を受けたが、顕微鏡試料調整段階で鉄滓でなく、鉄器様の組織を示したので、鉄器としての分析を行った。ＥＳＪ－８は中炭素量を示し、鍛冶が行われたものではないかと推定される。ＥＳＪ－９は高炭素量で銑の素材と考えられる。

３．４　顕微鏡組織

写真２－１と２に出土試料の顕微鏡組織を示す。鉄滓のほとんどは白色粒状のウスタイトと灰色長柱状のファイヤライト主体の組織がガラス基質が見られる。

各試料は次のような特徴を持つ。

・ＥＳＪ－１は白色のウスタイトと灰色のファイヤライトの結晶が見られる。
・ＥＳＪ－２はガラス基質の中に小さな粒状のウスタイト様の結晶が見られる。
・ＥＳＪ－５はＥＳＪ－１と同じく白色のウスタイトと灰色のファイヤライトの結晶が見られる。さらに６角状結晶のウルボスピネルが見られる。
・ＥＳＪ－８は鉄滓組織ではなく、ガラス基質の中に白色の鉄と灰色のウルボスピネルが見られる。
・ＥＳＪ－９も鉄滓組織でなく、ネット状の炭化物と銹化鉄（ゲーサイト）の組織と考えられる。

３．５　ＳＥＭ観察およびＥＤＸ分析

調査試料のＳＥＭ観察とＥＤＸ分析結果を写真３－１～３－５に示す。

これらを基に構成を検討すると次のように推定される。

・ＥＳＪ－１

（1）はファイヤライト（$2FeO \cdot SiO_2$）、（2）はハーシナイト（$FeO \cdot Al_2O_3$；通常ウスタイトの中に析出する）（3）はウスタイト（FeO）と考えられる。鉄滓である。

・ＥＳＪ－２

（1）はハーシナイト（$FeO \cdot Al_2O_3$；通常ウスタイトの中に析出する）、（2）はSiO_2－Al_2O_3系ガラス基質と考えられる。鉄滓である。

・ＥＳＪ－５

（1）はウスタイト、（2）はAl_2O_3を固溶したウルボスピネル、（3）はファイヤライト、（4）はSiO_2－Al_2O_3系ガラス基質と考えられる。鉄滓である。

・ＥＳＪ－８

（1）は鉄（Fe）、（2）と（3）はAl_2O_3を固溶したウルボスピネル、（4）は鉄の中にSiO_2－Al_2O_3系ガラス質があると考えられる。鉄器である。

・ESＪ－９

（1）は銹化鉄（ゲーサイト；FeOOH）、（2）はハーシナイト、（3）は鉄の中にSiO_2－Al_2O_3系ガラス質があると考えられる。鉄器である。

３．６　まとめ

今回の調査試料は当初、すべて鉄滓ということであったのが、鉄器（素材かもしれない）も含まれていた。鉄滓については、小川らは鉄滓を分析評価的に分類しており[1]さらに試料数を増やして整理しており[2]、この造滓成分－Ｔ・Feの関係、さらにTiO_2－Ｔ・Feの関係から砂鉄系鍛冶滓と鉱石系製錬滓を分類していて、これをを参考図に示している。今回の鉄滓の分析結果をこれに挿入してみると図１、２から、ＥＳＪ－１、２と５の鉄滓は砂鉄系鍛錬鍛冶滓であった。成分的にもTiO_2が低く、真砂砂鉄が使用された可能性が高いと考えられる。

ＥＳＪ－８，９は顕微鏡組織より、鉄滓ではなく鉄器（素材か半製品かは不明）であった。特にＥＳＪ－９は炭化物のネットが見られ銑素材の可能性が高い。

４．参考文献

1）小川太一：2002/1「分析側から見た鉄関連遺物発屈調査への期待」『鉄の歴史－その技術と文化フォーラム』論文集、日本鉄鋼協会、鉄関連遺物分析評価研究会

2）岡原他（川鉄テクノリサーチ）：2003/3「古志本郷遺跡Ｖ」『第９章　古志本郷遺跡官衙遺構に伴う鍛冶関連遺物の分析・調査』

表1.　永昌寺の谷遺跡出土調査試料

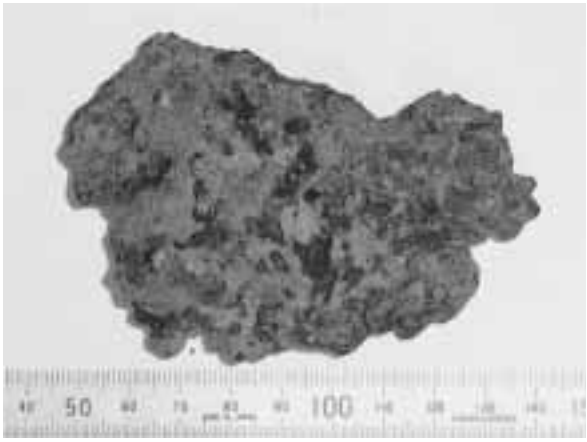
資料番号	調査年度	調査区	遺構	層位	種類	法量(cm/g)				備考
						長軸	短軸	厚さ	重さ	
ESJ-1	H18	Ⅱ区	V-1	―	鉄滓	10.7	9.5	20.8	355	碗型滓か？
ESJ-2	H18	Ⅱ区	―	―	鉄滓	10.2	7.8	7.2	343	取上番号2248
ESJ-3	H18	Ⅱ区	ピット214	ピット内	鉄滓	9.1	6.8	3.1	209	
ESJ-4	H18	Ⅱ区	Q-2	―	鉄滓	―	―	―	168	碗型滓か？
ESJ-5	H18	Ⅱ区	S-1	―	鉄滓	9.7	8.5	3.3	261	碗型滓か？
ESJ-6	H18	Ⅱ区	S-1	―	鉄滓	6.3	4.4	3.1	144	同一個体
ESJ-7	H18	Ⅱ区	S-1	―	鉄滓	4.8	6.3	4.4	181	
ESJ-8	H18	Ⅱ区	ピット369	ピット内	鉄滓	7.6	4.7	1.8	60	
ESJ-9	H18	Ⅱ区	―	―	鉄滓	―	―	―	107	取上番号2247、一括
ESJ-10	H18	Ⅱ区	―	―	鉄滓	―	―	―	94	取上番号2033、一括
ESJ-11	H18	Ⅱ区	W-1	―	鉄滓	―	―	―	198	一括
ESJ-12	H18	Ⅱ区	R-1トレンチ53東	―	鉄滓	―	―	―	347	一括
ESJ-13	H18	Ⅱ区	V-9	―	鉄滓	7.6	6.2	2.6	241	小片含む
ESJ-14	H18	Ⅱ区	ピット214	ピット内	鉄滓	7.3	4.5	1.7	108	
ESJ-15	H18	Ⅱ区	W-3	―	鉄滓	6.1	4.4	2.8	100	
ESJ-16	H18	Ⅱ区	W-2	―	鉄滓	―	―	―	74	2点一括
ESJ-17	H18	Ⅱ区	R-10下トレンチ	―	鉄滓	―	―	―	286	一括、製品含

ESJ-1 （A面）

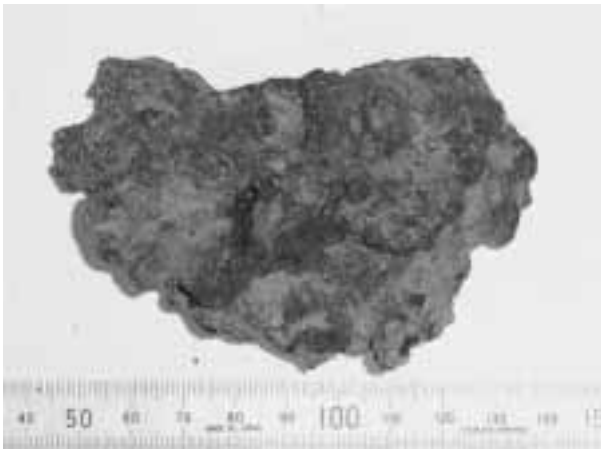
ESJ-1 （B面）

ESJ-2 （A面）

ESJ-2 （B面）



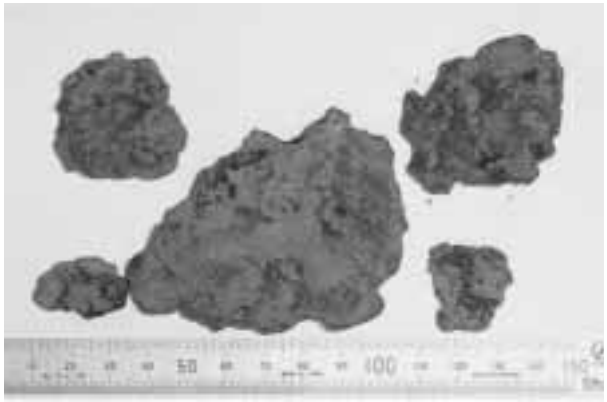
ESJ-3 （A面）



ESJ-3 （B面）

写真　1−1.　　調査試料の外観写真（1）

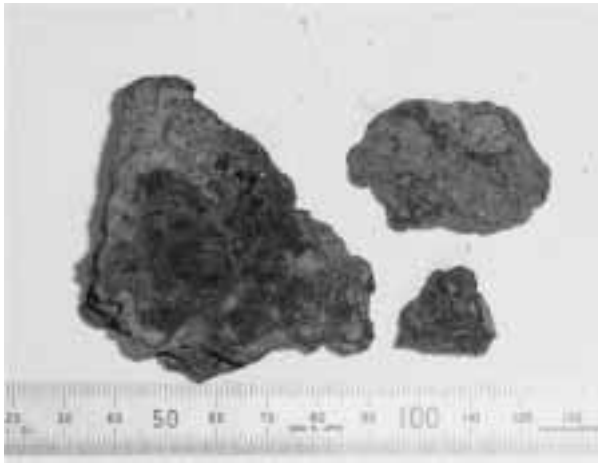
ESJ-4　（A面）



ESJ-4　（B面）

ESJ-4　（A面）

ESJ-4　（B面）



ESJ-5　（A面）

ESJ-5　（B面）

写真　1－2.　　調査試料の外観写真（2）

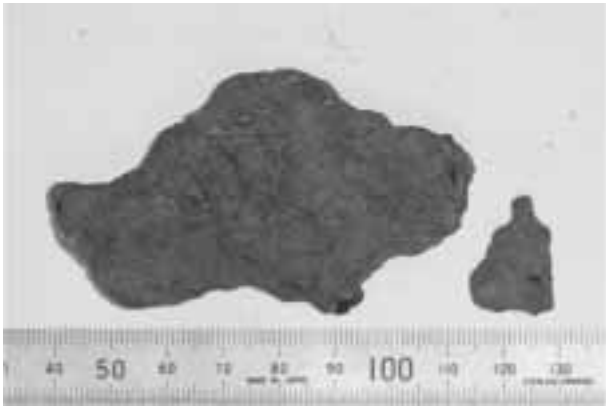
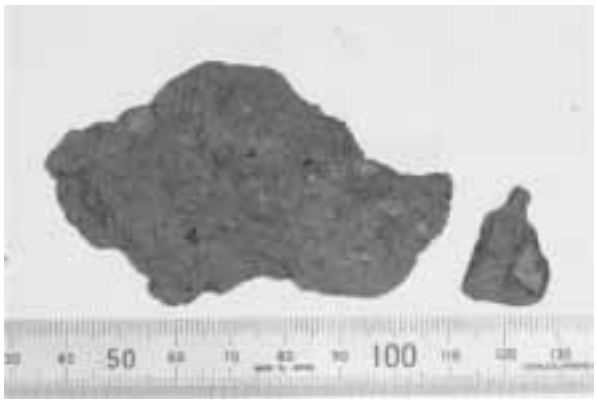
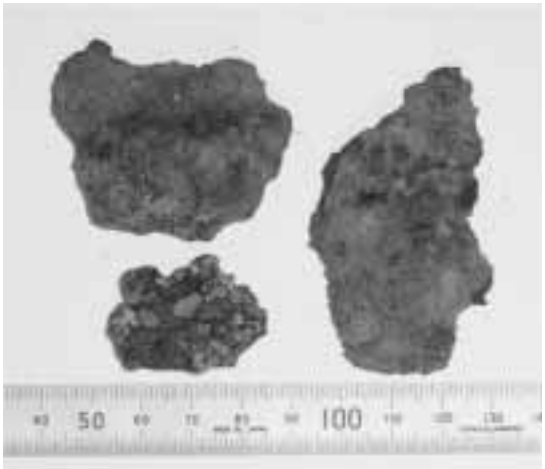
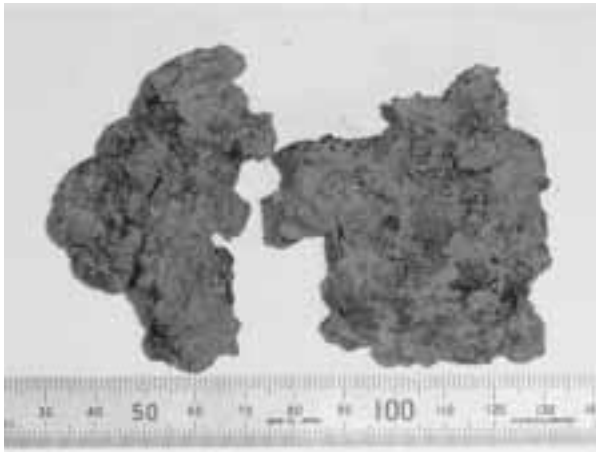
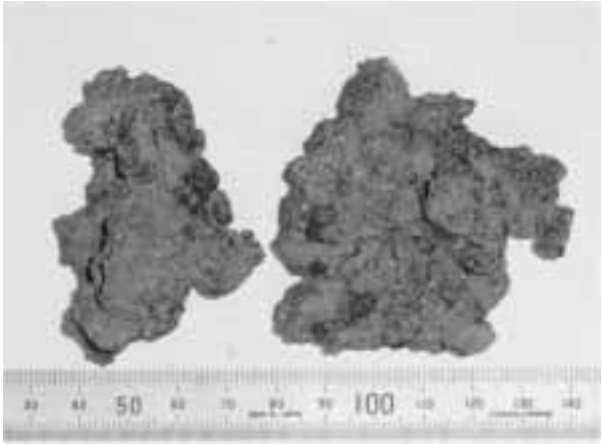
ESJ-7 （A面）	ESJ-7 （B面）
	
ESJ-8 （A面）	ESJ-8 （B面）
	
ESJ-9 （A面）	ESJ-9 （B面）

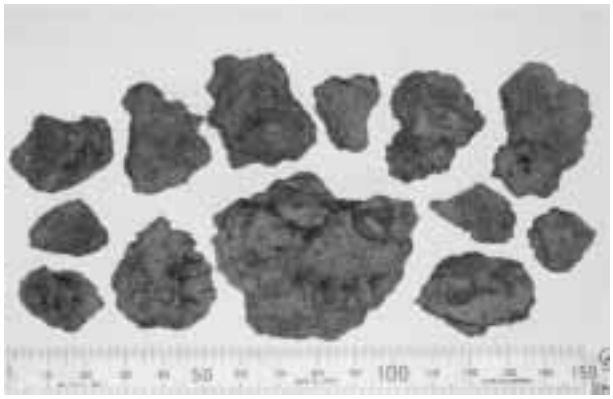
写真　1－3.　　調査試料の外観写真（3）



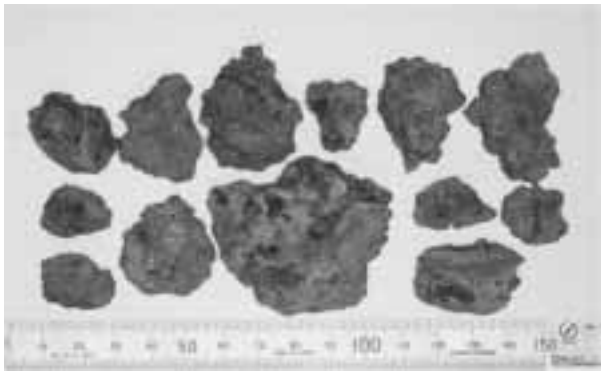
ESJ-10　（A面）



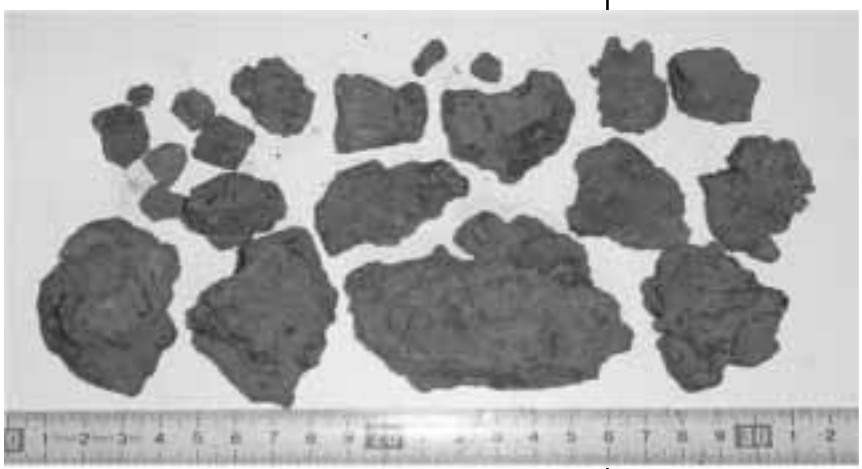
ESJ-10　（B面）



ESJ-11　（A面）



ESJ-11　（B面）



ESJ-12　（A面）

写真　1－4.　　調査試料の外観写真（4）

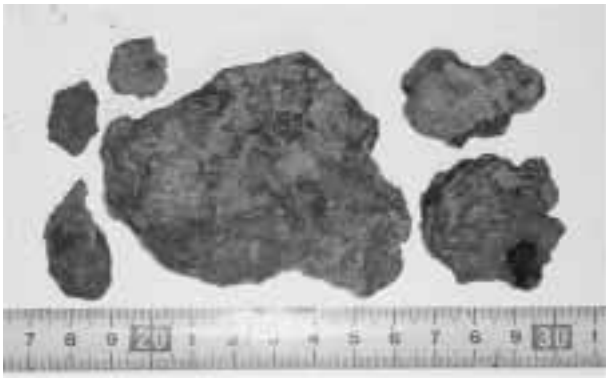
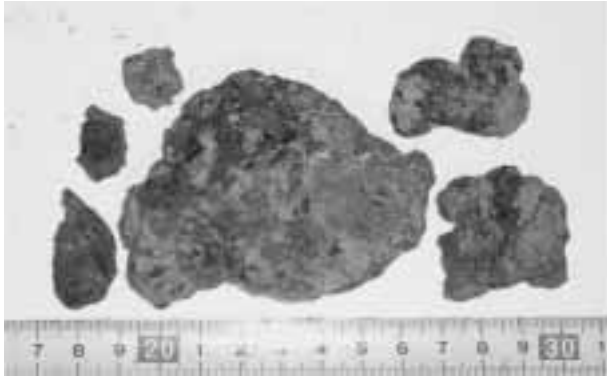
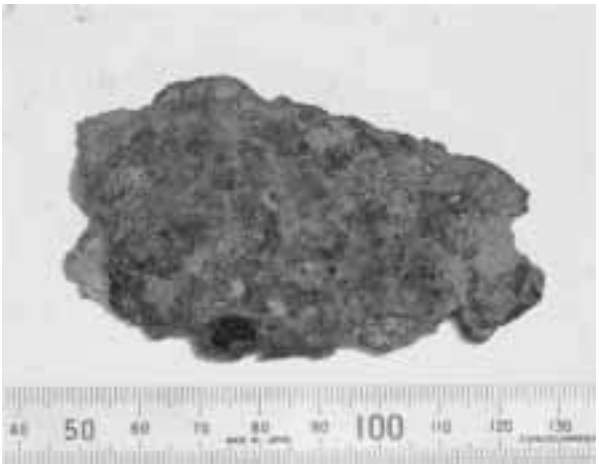
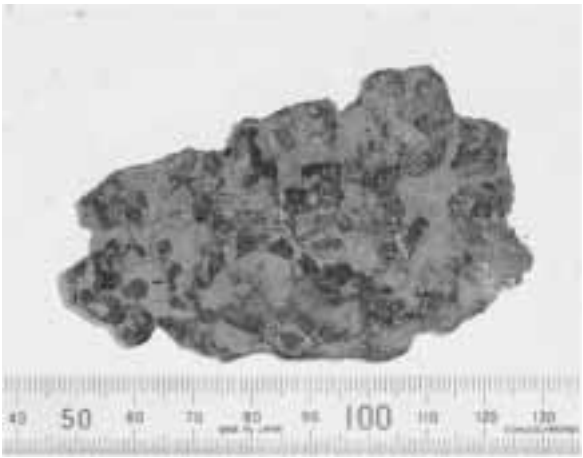
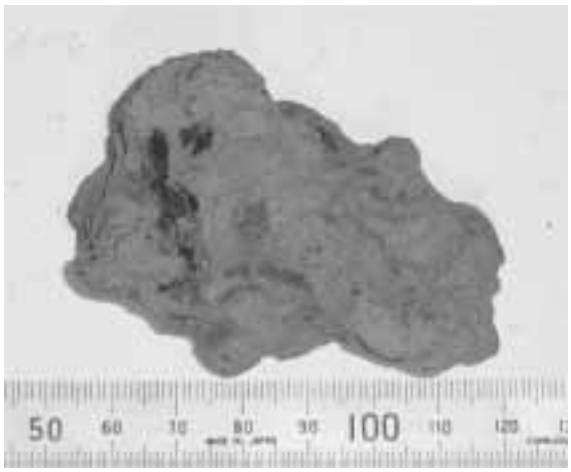
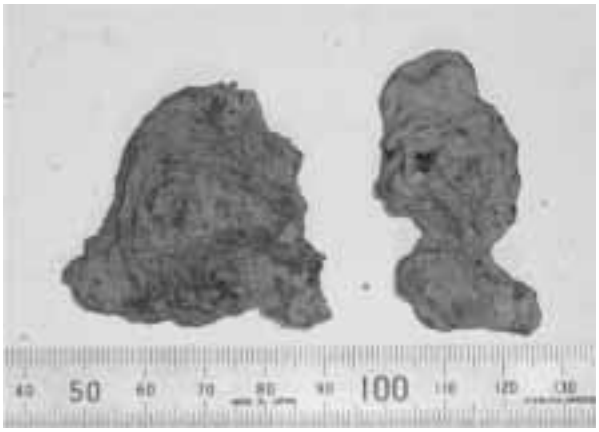
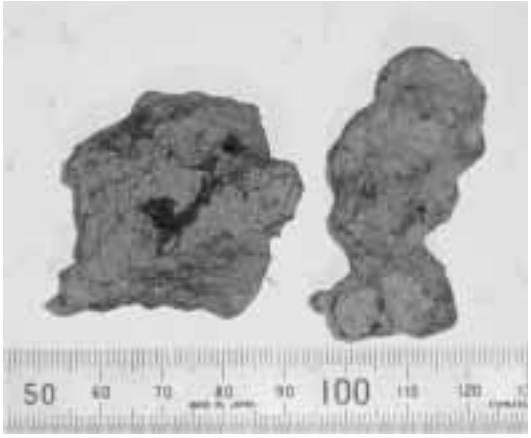
	
ESJ-13 （A面）	ESJ-13 （B面）
	
ESJ-14 （A面）	ESJ-14 （B面）
	
ESJ-15 （A面）	ESJ-15 （B面）

写真　1－5.　　調査試料の外観写真（5）



ESJ-16　（A面）



ESJ-16　（B面）

ESJ-17　（A面）

写真　1－6.　　調査試料の外観写真（6）

表2.　永昌寺の谷遺跡出土調査試料の外観目視および着磁性

資料番号	調査年度	調査区	遺構	層位	種類	法量(cm/g)				外観・色調	磁性
						長軸	短軸	厚さ	重さ		
ESJ-1	H18年	Ⅱ区	V-1	―	鉄滓	10.7	9.5	20.8	355	黒色(ガラス化)に茶色の粘土付着、片面に穴多数	極弱
ESJ-2	H18年	Ⅱ区	―	―	鉄滓	10.2	7.8	7.2	343	黒色(ガラス化)に茶色の粘土付着、全面に穴多数	弱
ESJ-3	H18年	Ⅱ区	ピット214	ピット内	鉄滓	9.1	6.8	3.1	209	黒色(ガラス化)に茶色の粘土付着	弱
ESJ-4	H18年	Ⅱ区	Q-2	―	鉄滓	―	―	―	168	黒色(ガラス化)に茶色の粘土付着	弱
ESJ-5	H18年	Ⅱ区	S-1	―	鉄滓	9.7	8.5	3.3	261	黒色(ガラス化)に茶色の粘土付着	極弱
ESJ-6	H18年	Ⅱ区	S-1	―	鉄滓	6.3	4.4	3.1	144	黒色(ガラス化)に茶色の粘土付着	極弱
ESJ-7	H18年	Ⅱ区	S-1	―	鉄滓	4.8	6.3	4.4	181	黒色(ガラス化)に茶色の粘土付着、片面に穴多数	極弱
ESJ-8	H18年	Ⅱ区	ピット369	ピット内	鉄滓	7.6	4.7	1.8	60	茶色	弱
ESJ-9	H18年	Ⅱ区	―	―	鉄滓	―	―	―	107	黒色(ガラス化)に茶色の粘土付着	強
ESJ-10	H18年	Ⅱ区	―	―	鉄滓	―	―	―	94	黒色(ガラス化)に茶色の粘土付着	無
ESJ-11	H18年	Ⅱ区	W-1	―	鉄滓	―	―	―	198	黒色(ガラス化)に茶色の粘土付着	極弱
ESJ-12	H18年	Ⅱ区	R-1トレンチ53東	―	鉄滓	―	―	―	347	黒色(ガラス化)に茶色の粘土付着	極弱
ESJ-13	H18年	Ⅱ区	V-9	―	鉄滓	7.6	6.2	2.6	241	黒色(ガラス化)に茶色の粘土付着	弱
ESJ-14	H18年	Ⅱ区	ピット214	ピット内	鉄滓	7.3	4.5	1.7	108	黒色(ガラス化)に茶色の粘土付着	強
ESJ-15	H18年	Ⅱ区	W-3	―	鉄滓	6.1	4.4	2.8	100	茶色	弱
ESJ-16	H18年	Ⅱ区	W-2	―	鉄滓	―	―	―	74	黒色(ガラス化)に茶色の粘土付着	強
ESJ-17	H18年	Ⅱ区	R-10下トレンチ	―	鉄滓	―	―	―	286	茶色	無

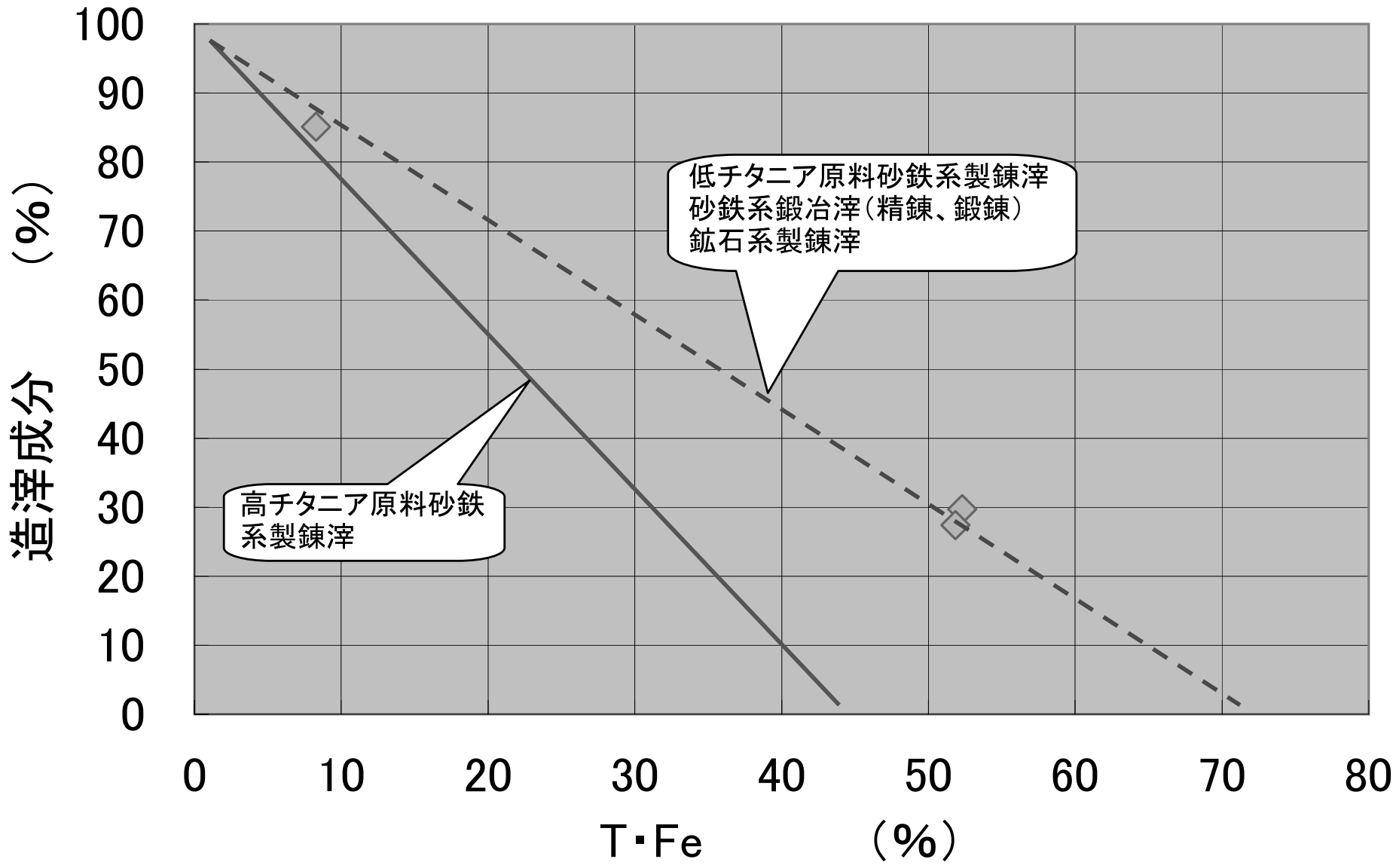
表3.　永昌寺の谷遺跡出土品（鉄滓）の化学分析結果

No.	試料名称	組成　（%）														
		SiO2	MnO	P2O5	CaO	MgO	V2O5	Al2O3	Na2O	K2O	TiO2	FeO	Fe2O3	T・Fe	C	S
ESJ-1	鉄滓	19.65	0.05	0.07	0.50	0.35	0.01	8.62	0.19	0.43	0.35	50.06	19.18	52.31	0.0280	0.064
ESJ-2	鉄滓	58.73	0.15	0.12	1.23	1.06	0.03	21.55	0.80	1.72	1.37	0.75	11.01	8.28	0.0080	0.0015
ESJ-5	鉄滓	18.34	0.11	0.09	1.21	0.83	0.06	5.77	0.39	0.88	1.55	53.42	14.79	51.84	0.0374	0.036

表4.　永昌寺の谷遺跡出土品（鉄器）の化学分析結果

No.	試料名称	組成　（%）									
		C	Si	Mn	P	S	V	Al	Ti	Ca	Mg
ESJ-8	鉄器	0.42	8.39	0.03	0.07	0.135	0.03	6.27	0.46	0.26	0.27
ESJ-9	鉄器	1.138	0.84	<0.01	0.03	0.152	<0.01	0.45	0.02	0.01	<0.01

図1. 出土鉄滓類の全鉄（T･Fe）量と造滓成分量との関係



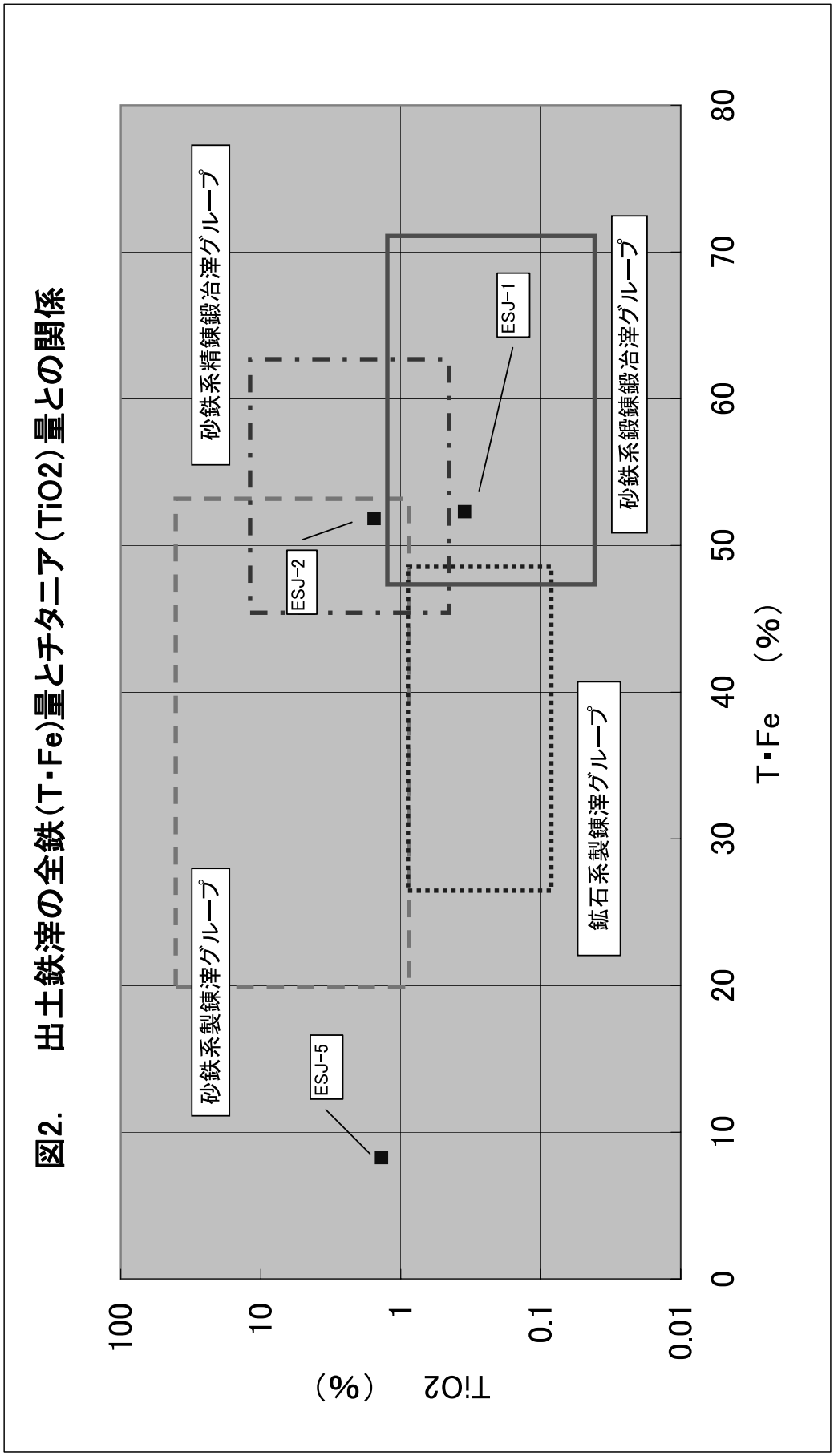


図2.　出土鉄滓の全鉄（T・Fe）量とチタニア（TiO2）量との関係

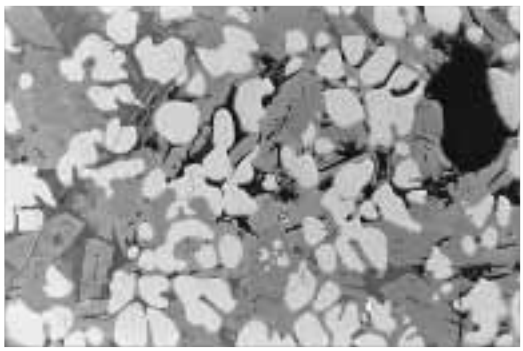
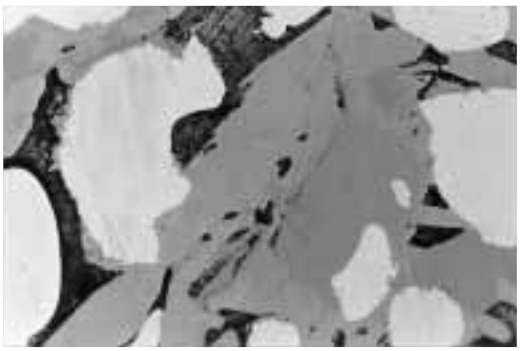
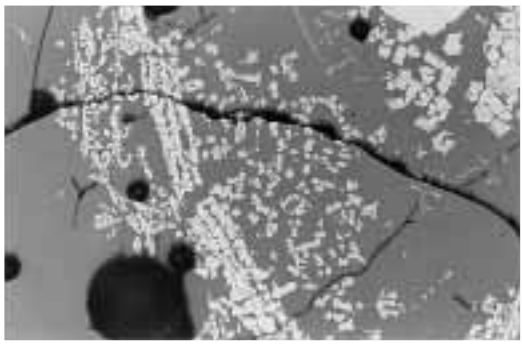
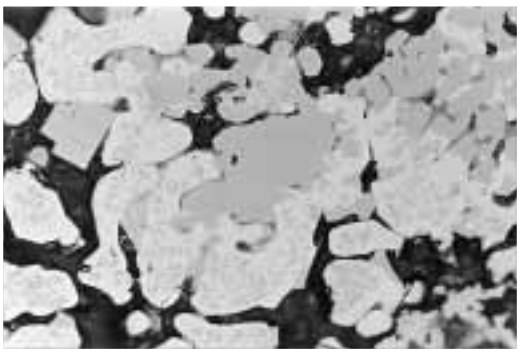
試料	X 100	X 400
ESJ-1		
ESJ-2		
ESJ-5		
ESJ-8		

写真　2－1　永昌寺遺跡出土鉄滓の顕微鏡組織（1）

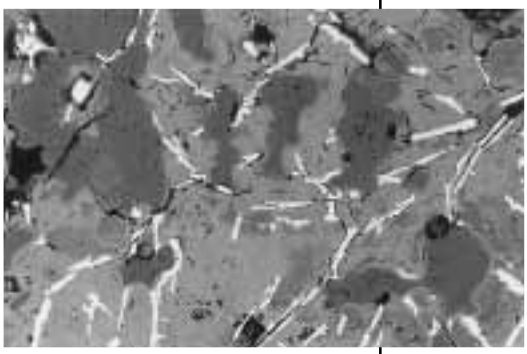
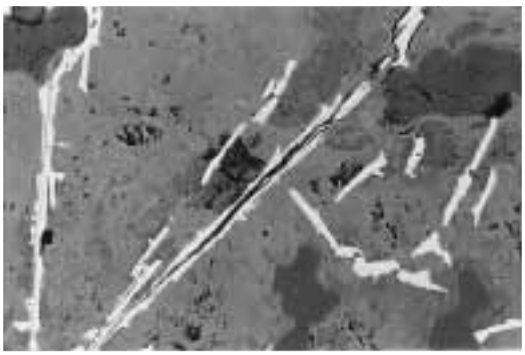
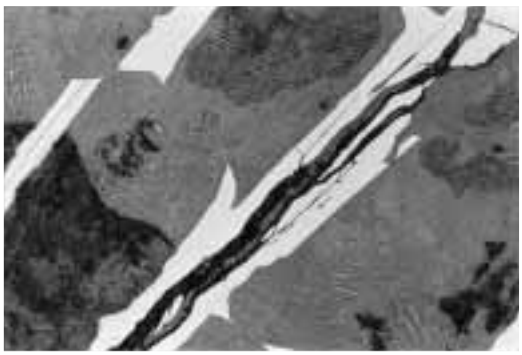
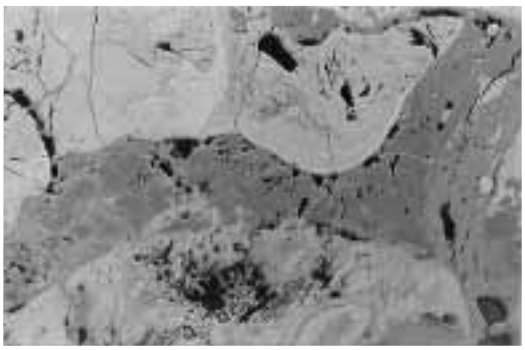
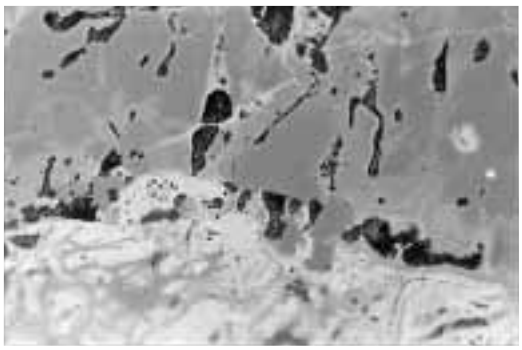
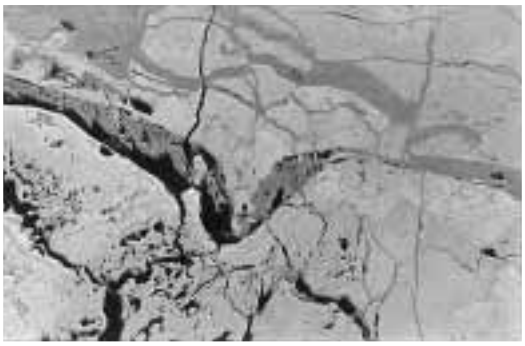
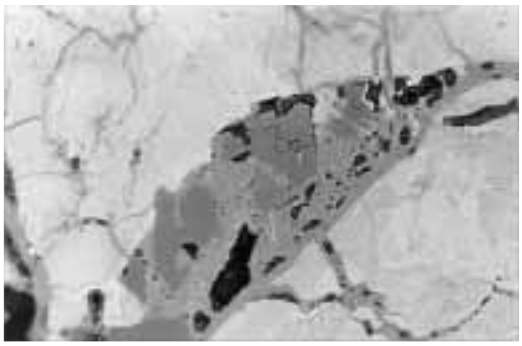
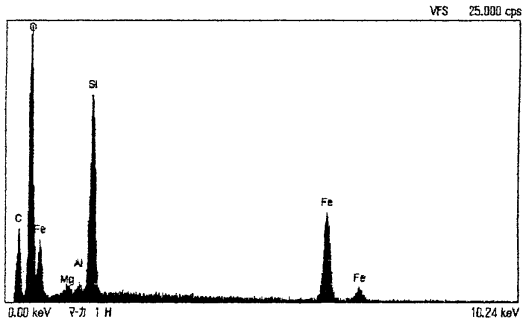
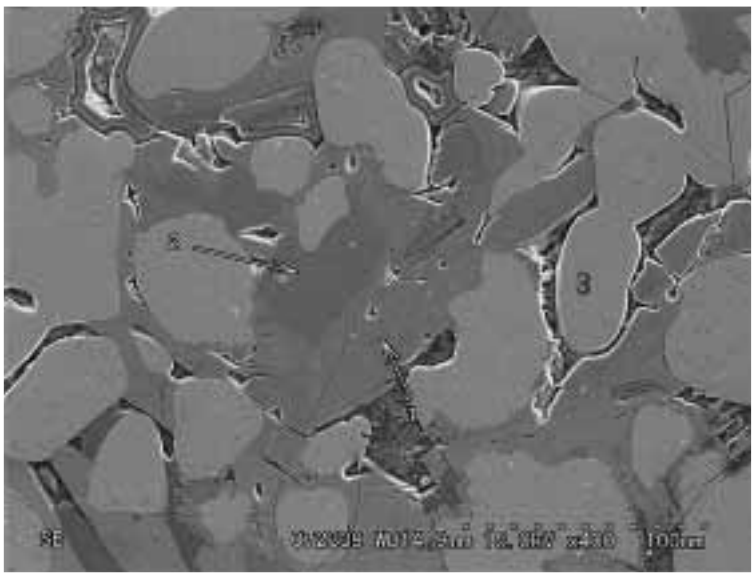
試料	X 100	X 400
ESJ-9 ①		X50
ESJ-9 ①		
ESJ-9 ②		
ESJ-9 ③		

写真　2－2　永昌寺遺跡出土鉄滓の顕微鏡組織（2）

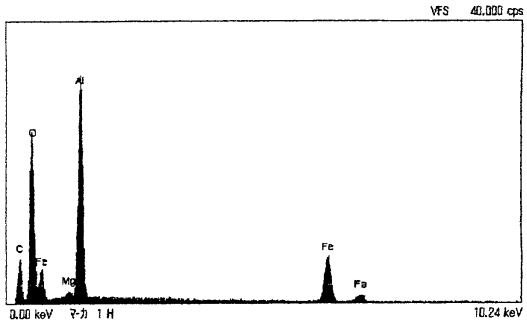
X100



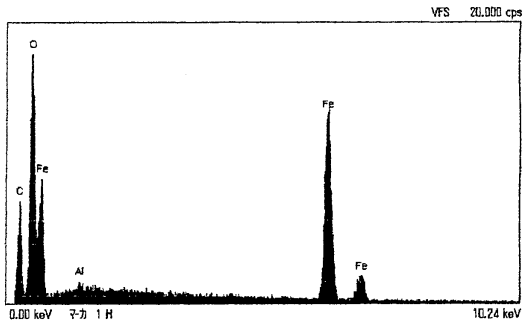
EDX 分析　1



X400

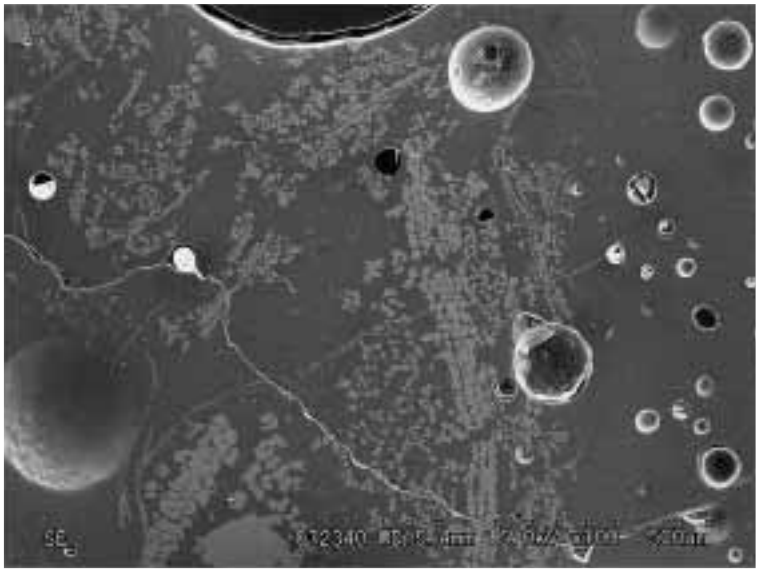


EDX 分析　2

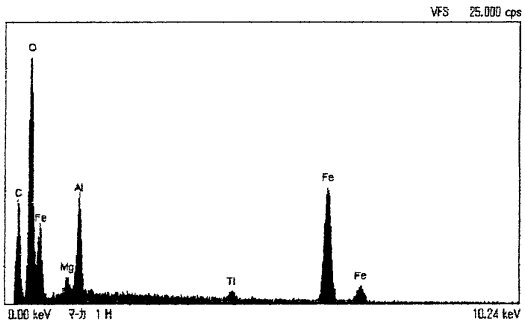


EDX 分析　3

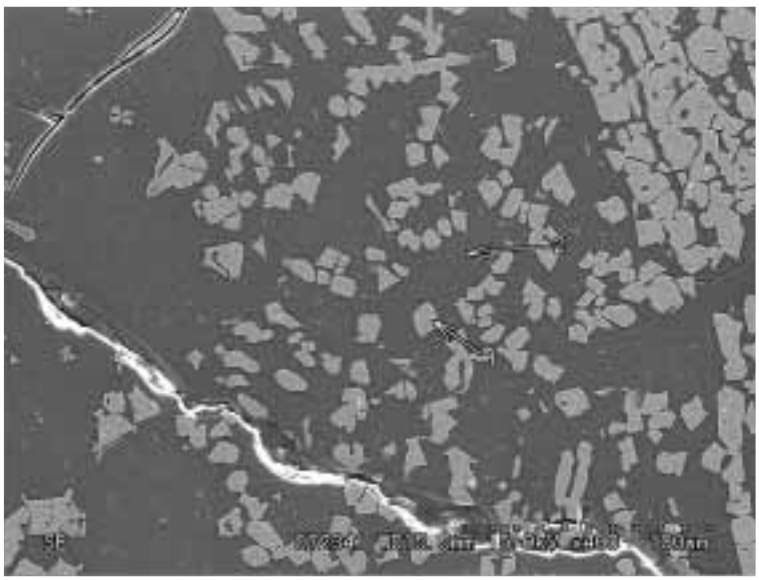
写真 3－1.　ESJ - 1(鉄滓)の SEM 像と EDX 微小部分析



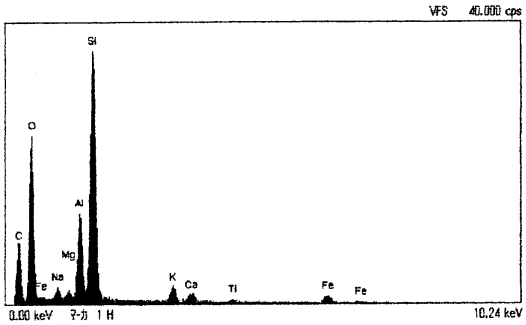
X100



EDX 分析　1

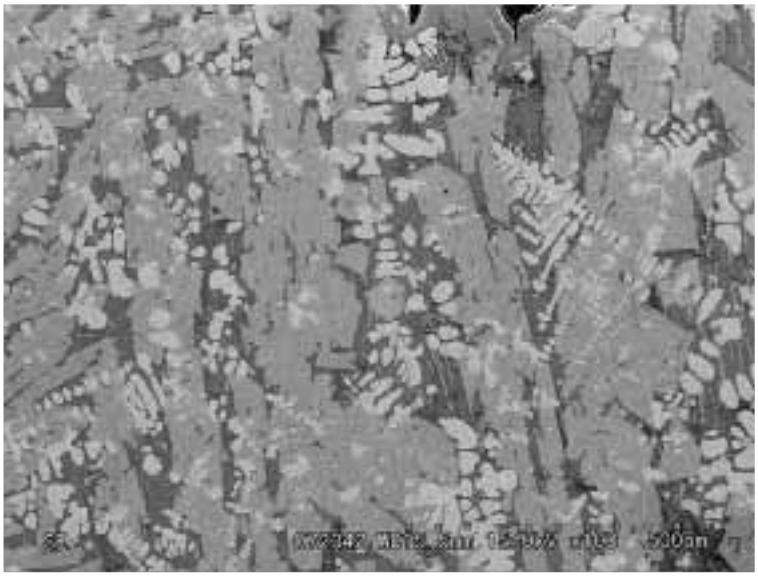


X400

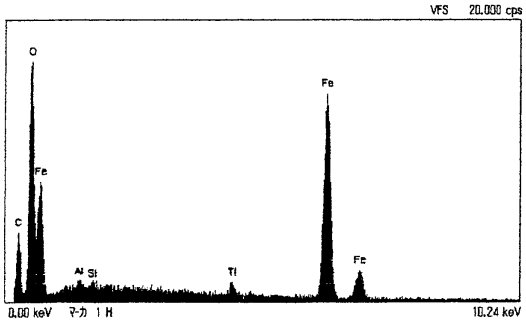


EDX 分析　2

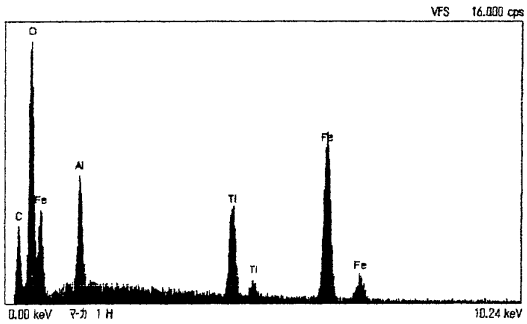
写真 3－2.　ESJ - 2(鉄滓)の SEM 像と EDX 微小部分析



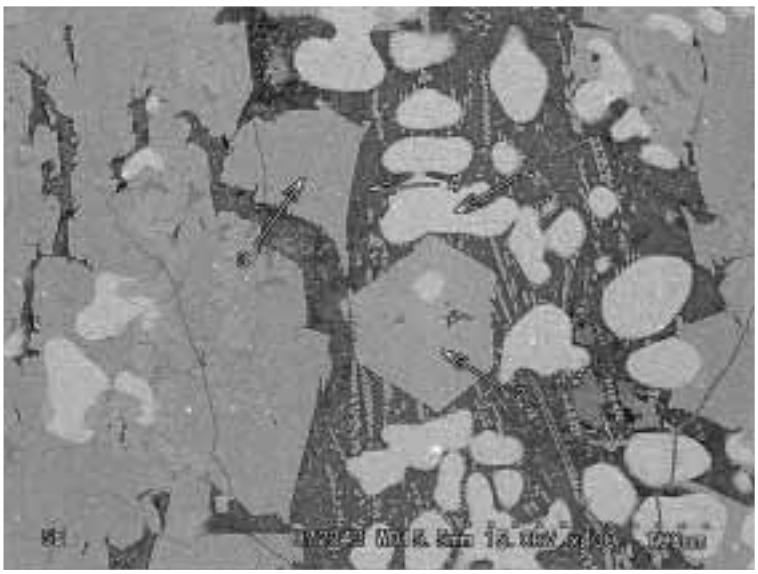
X100



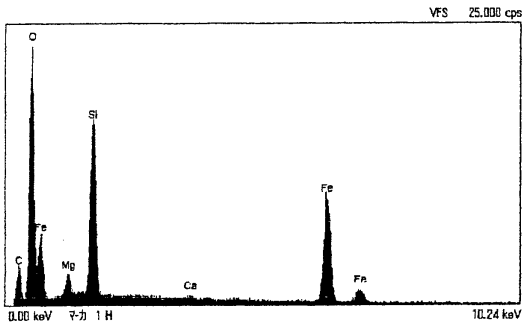
EDX 分析　1



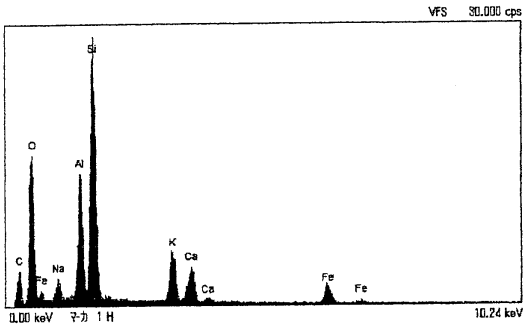
EDX 分析　2



X400

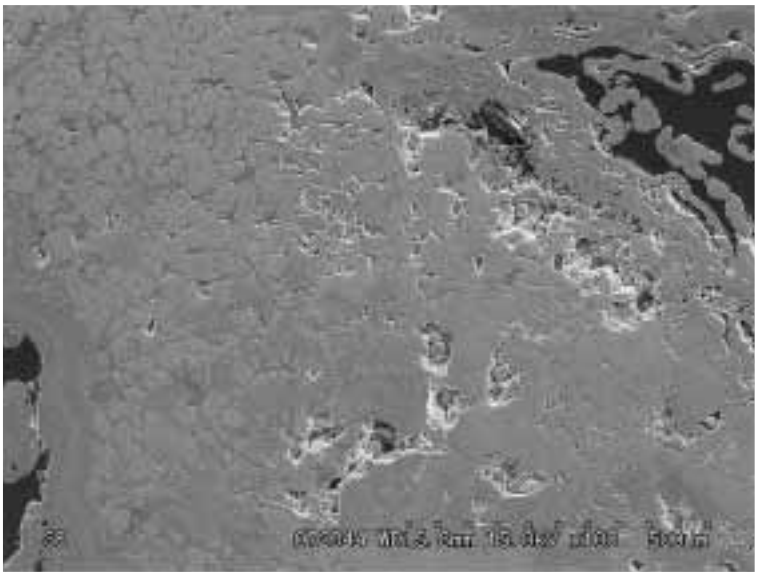


EDX 分析　3

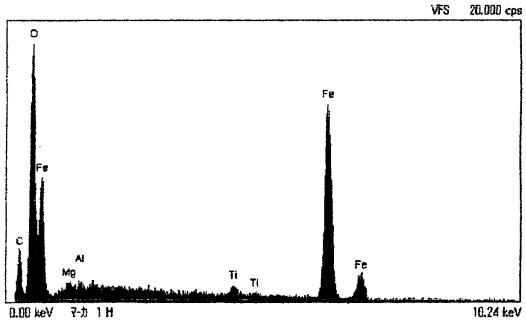


EDX 分析　4

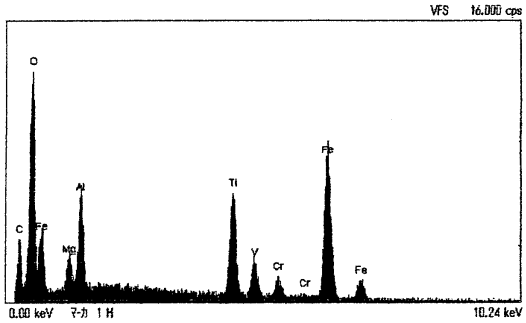
写真 3－3.　ESJ - 5(鉄滓)の SEM 像と EDX 微小部分析



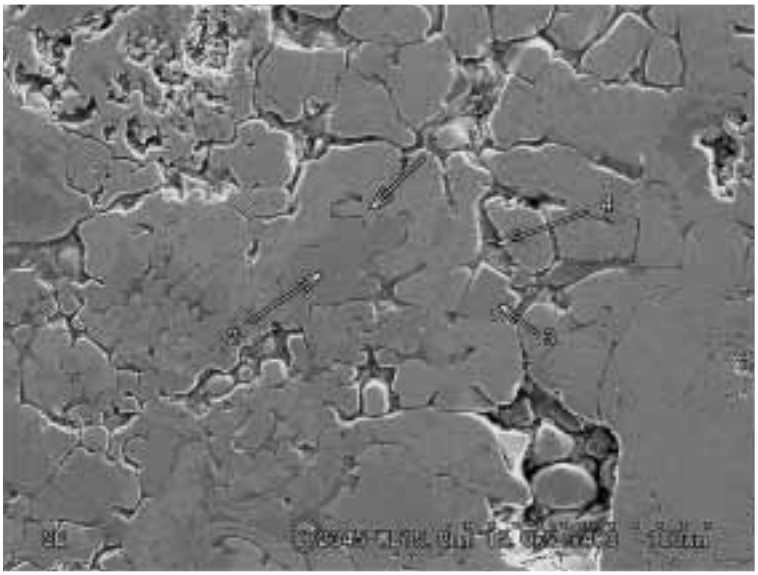
X100



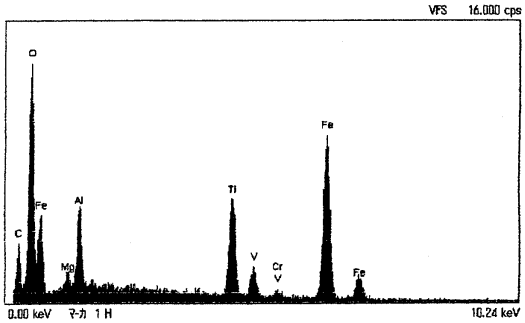
EDX 分析　1



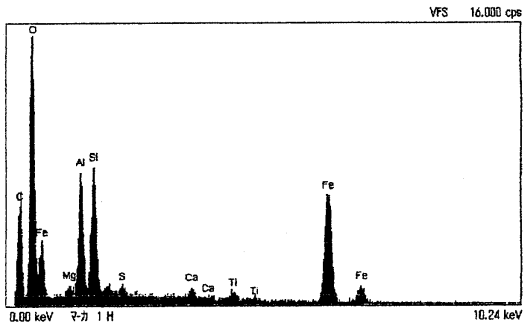
EDX 分析　2



X400

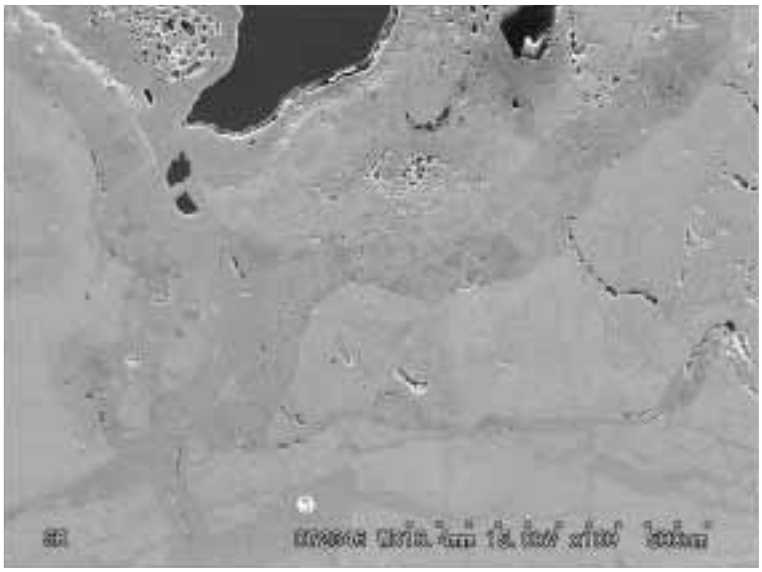


EDX 分析　3

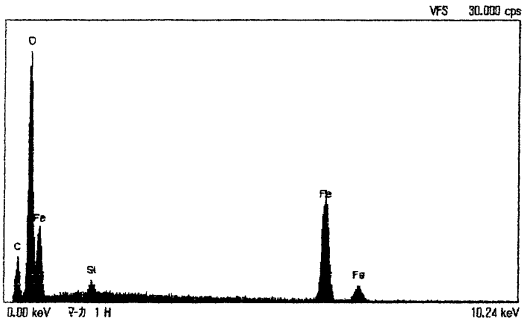


EDX 分析　4

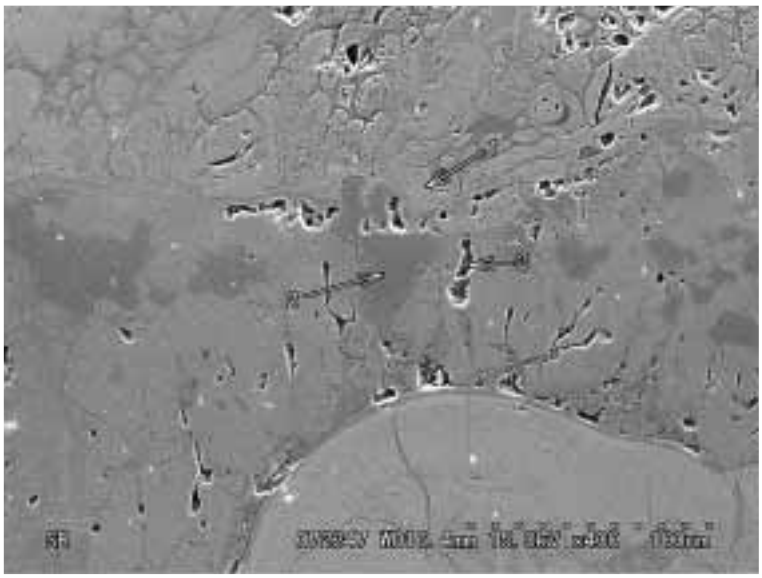
写真 3－4.　ESJ - 8(鉄滓)の SEM 像と EDX 微小部分析



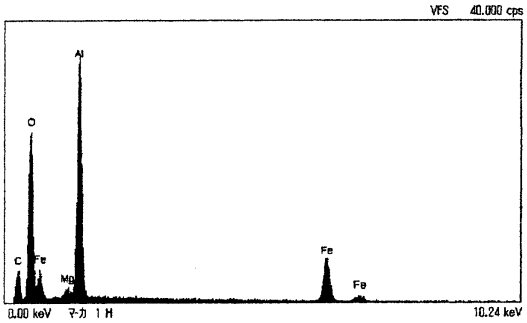
X100



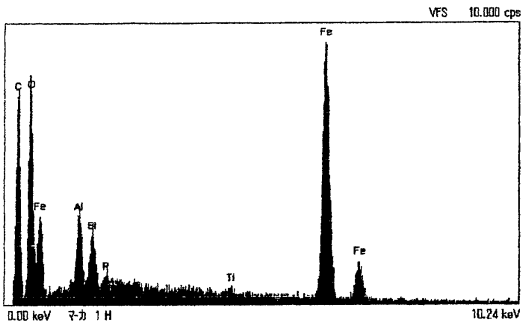
EDX 分析　1



X400

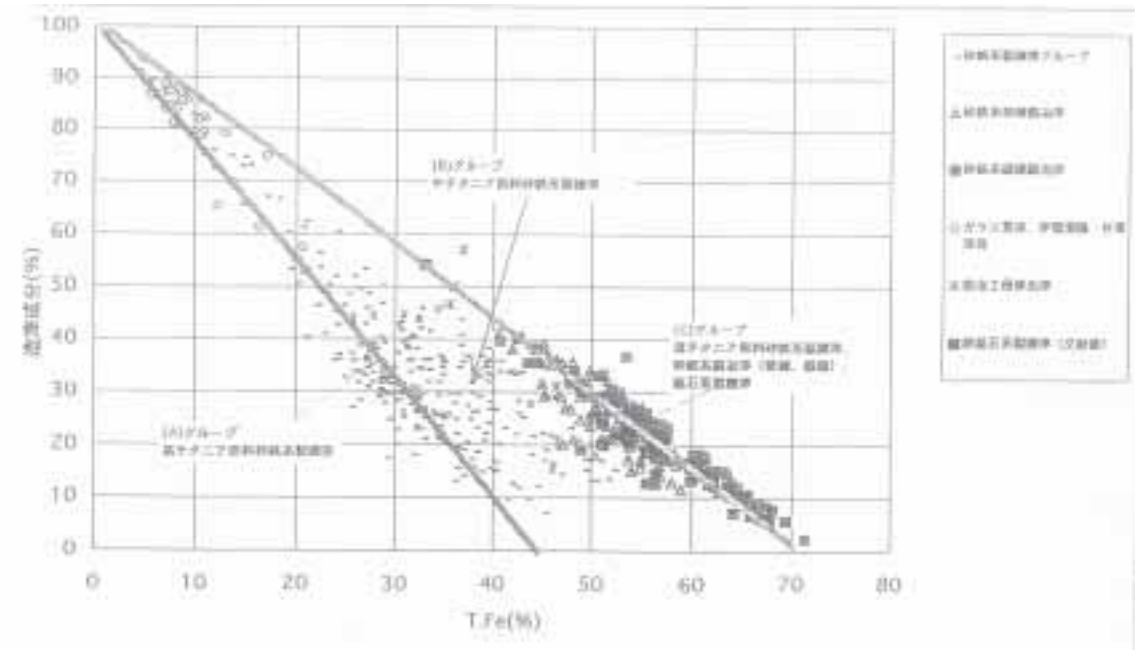


EDX 分析　2



EDX 分析　3

写真 3－5.　ESJ - 9(鉄滓)の SEM 像と EDX 微小部分析



参考図１．　　出土鉄滓類の全鉄量(T・Fe)と造滓成分量との関係図

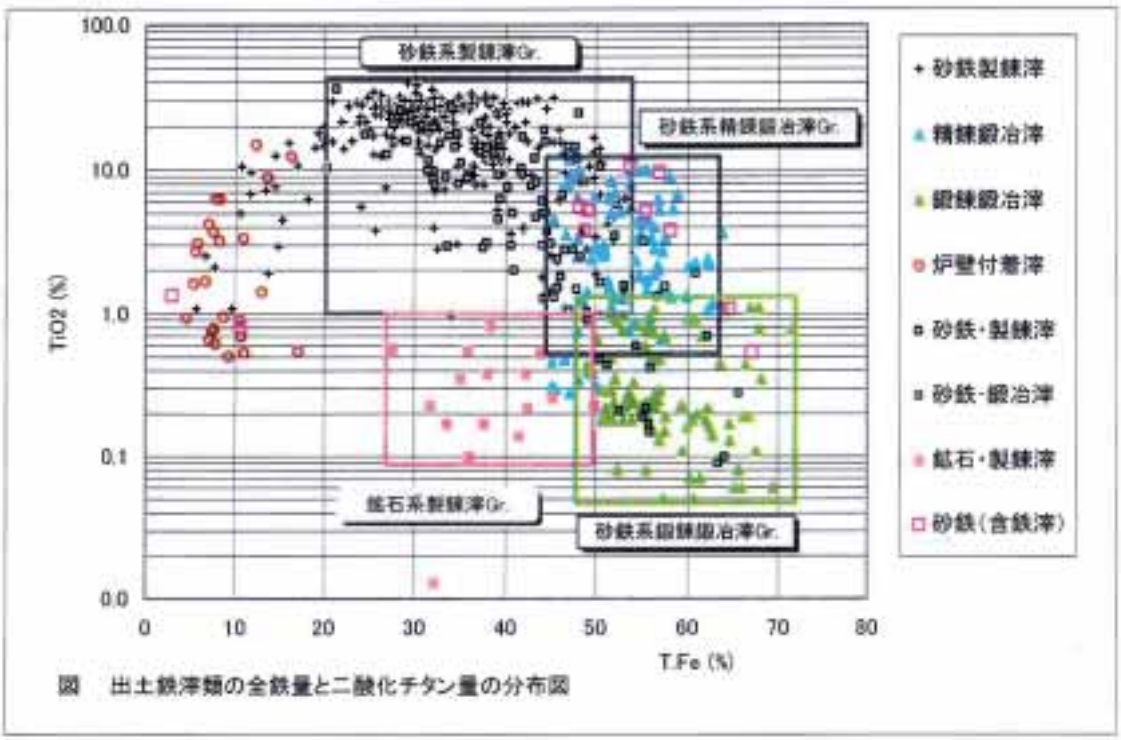


図　出土鉄滓類の全鉄量と二酸化チタン量の分布図

参考図２．　出土鉄滓類の全鉄量と二酸化チタン量の分布図

写　真　図　版

数字は図面の番号に対応

永昌寺の谷遺跡
Ⅰ区　SI01-1
土層断面（南西から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅰ区　SI01-1
完掘状況（西から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅰ区　SI01-2
（西から）

写真図版２

永昌寺の谷遺跡
Ⅰ区　SI01-1、SI01-2
完掘状況（南西から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅰ区　SI02
完掘状況（東から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅰ区　SI03
東西ベルト土層断面（南から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅰ区　SI03
南北ベルト土層断面（東から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅰ区　SI03
完掘状況（南西から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅰ区　SI04
東西ベルト土層断面
（南東から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅰ区　SI04
南北ベルト土層断面
（南西から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅰ区　SI04-1
完掘状況（北から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅰ区　SI04-2
完掘状況（西から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅰ区　SI05
南北ベルト南半（南西から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅰ区　SI05
南北ベルト北半（北西から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅰ区　SI05
完掘状況（東から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅰ区　SI06
東西ベルト土層断面（南から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅰ区　SI06
完掘状況（西から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅰ区　SI07
東西ベルト土層断面（南から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅰ区　SI07
完掘状況（西から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅰ区　SI08
南北ベルト土層断面
（北東から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅰ区　SI08
完掘状況（東から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅰ区　加工段１
検出状況（南西から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅰ区　加工段１
完掘状況（南西から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅰ区　掘立柱建物跡群
（南から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅰ区　北西部
尾根上平坦面とピット群
（北西から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅰ区　１号墳、住居群
（西から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅰ区　横穴墓
（北東から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅰ区　横穴墓
墓道先端部土層（北から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅰ区　横穴墓
墓道部土層（北西から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅰ区　横穴墓
墓道部横断土層（北東から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅰ区　横穴墓
墓道から玄門・玄室を見る
（北東から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅰ区　横穴墓
玄室内土層断面（北から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅰ区　横穴墓
玄室右壁（南東から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅰ区　横穴墓
玄室左壁（北西から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅰ区　横穴墓
玄室奥壁及び屍床検出状況
（北東から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅰ区　横穴墓
墓道前焼土壙（北西から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅰ区　土橋状遺構
（北西から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅰ区　土橋状遺構
（南東から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅰ区　土橋状遺構
土層断面（南から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅱ区全景（空撮）

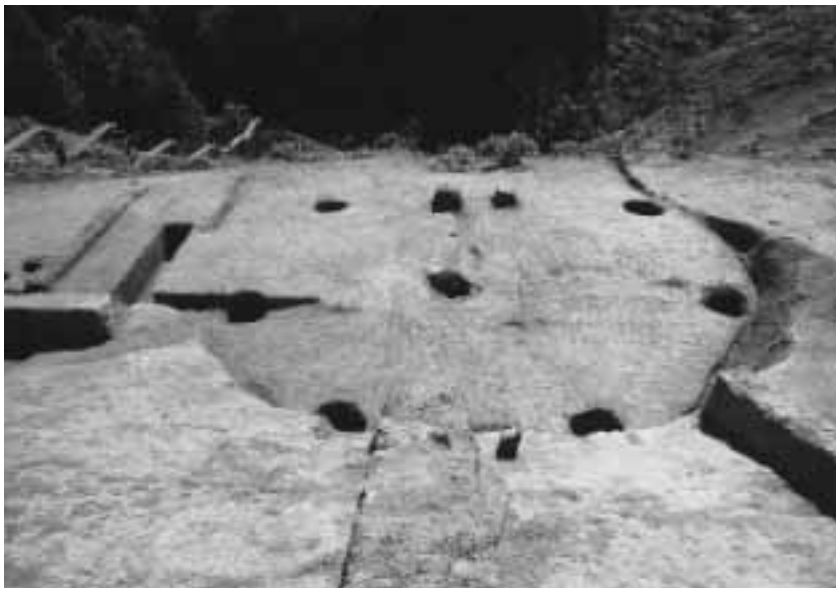
永昌寺の谷遺跡
Ⅱ区上　SI01
完掘状況（南から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅱ区上　SI01内
土壙完掘状況（南から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅱ区上　SI01及び土壙
完掘状況（南から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅱ区上　SI02
ピット検出状況（東から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅱ区上　SI03・04
完掘状況（北から）



永昌寺の谷遺跡
Ⅱ区上　SI03
完掘状況（北から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅱ区上　SI04
完掘状況（北から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅱ区上　SI05
完掘状況（北西から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅱ区上　SI05～加工段１
完掘状況（北東から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅱ区上　SI06
セクション土層（西から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅱ区上　SI06
完掘状況（東から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅱ区上　SI07完掘状況
（南から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅱ区上　加工段３～４
完掘状況（東から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅱ区上　加工段４
完掘状況（西から）

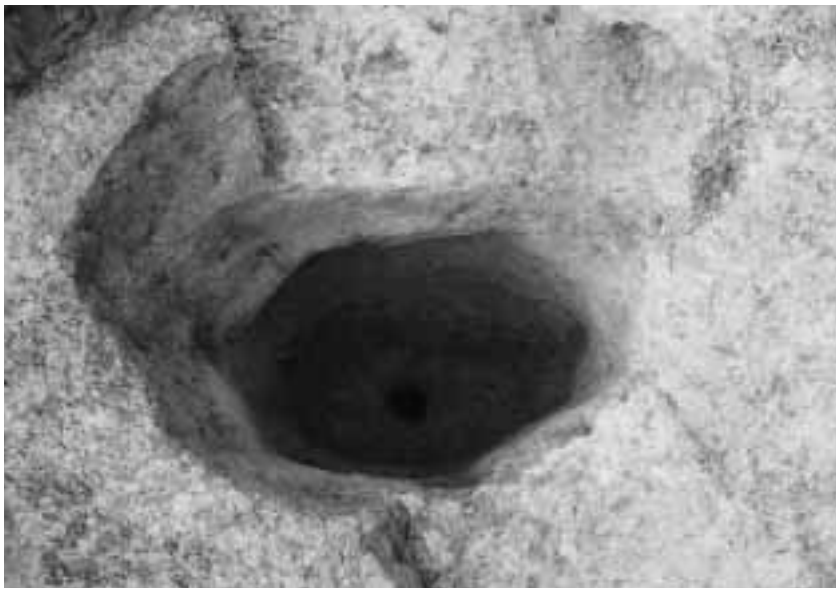
永昌寺の谷遺跡
Ⅱ区上　加工段３
完掘状況（南西から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅱ区上　１号墳周辺
完掘状況（北西から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅱ区上　１号墳
完掘状況（北西から）

永昌寺の谷遺跡

Ⅱ区上　SK02土層



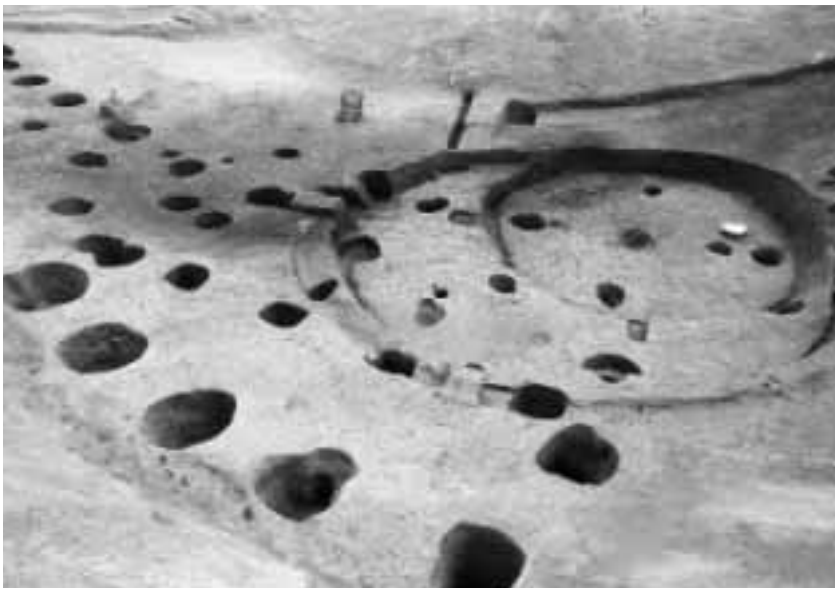
永昌寺の谷遺跡

Ⅱ区上　SK03完掘状況

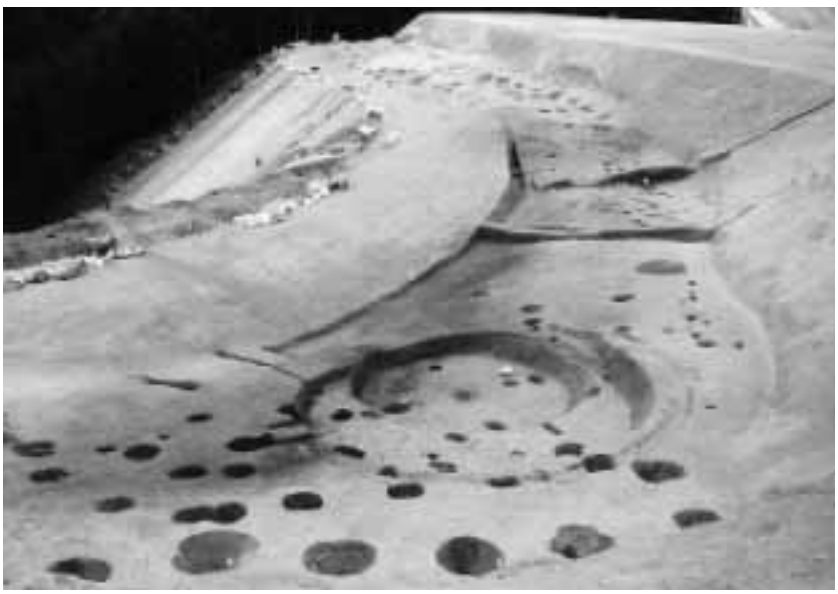
永昌寺の谷遺跡

Ⅱ区上　SK01完掘状況

永昌寺の谷遺跡
Ⅱ区下
SB01～03及びSI08・09
検出状況（北から）



永昌寺の谷遺跡
Ⅱ区下　SI08・09
完掘状況（北東から）



永昌寺の谷遺跡
Ⅱ区下　第１平坦面
北側完掘状況（北から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅱ区下　第１平坦面
SB15周辺（北から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅱ区下　第１平坦面
SB13・14周辺（北東から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅱ区下　SB04周辺（東から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅱ区下　SB05・06周辺
（東から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅱ区下　SB10周辺（東から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅱ区下　鍛冶炉
検出状況（南から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅱ区下　２－１加工段
完掘状況（北東から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅱ区下　２－１～３加工段
完掘状況（東から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅱ区下　第２平坦面～第３平坦面
完掘状況（南西から）

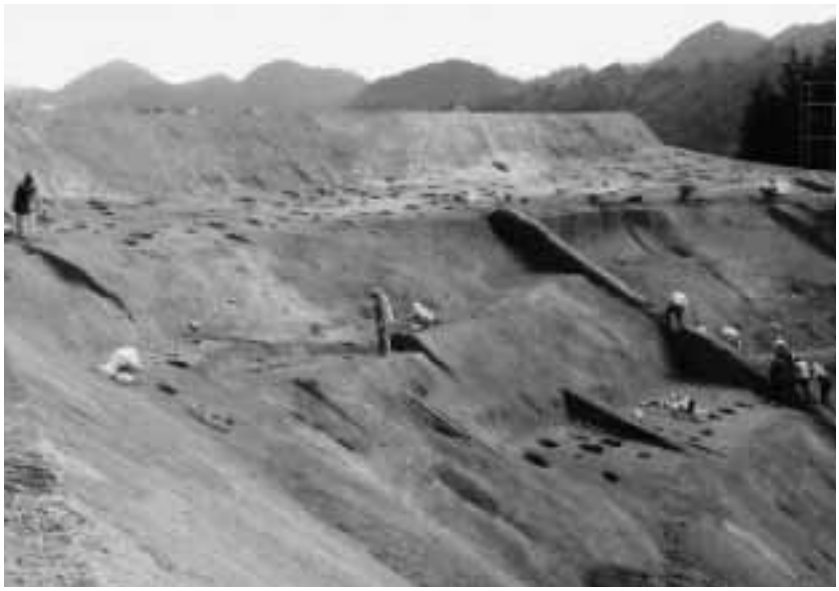
永昌寺の谷遺跡
Ⅱ区下　第２平坦面
土層断面（西から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅱ区下　第３平坦面
３－２加工段周辺（東から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅱ区下　第３平坦面
３－１～３加工段（南東から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅱ区下　第４平坦面
ピット検出状況（西から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅱ区下　第４平坦面
SX01検出状況（南から）



永昌寺の谷遺跡
Ⅱ区下　第１～第３平坦面
（作業風景）

永昌寺の谷遺跡
Ⅲ区　空撮

永昌寺の谷遺跡
Ⅲ区　１号横穴墓
検出状況（南東から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅲ区　１号横穴墓
墓道縦断土層（南東から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅲ区　１号横穴墓
墓道最終追葬面（東から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅲ区　１号横穴墓
最終追葬時
閉塞石検出状況（南東から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅲ区　１号横穴墓
玄室調査前状況（南東から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅲ区　１号横穴墓
玄室内縦断土層（南東から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅲ区　１号横穴墓
玄室遺物・人骨出土状況
（玄門から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅲ区　１号横穴墓
玄室遺物・人骨出土状況
（左壁沿）

永昌寺の谷遺跡
Ⅲ区　１号横穴墓
玄室遺物・人骨出土状況
（前壁沿）

永昌寺の谷遺跡
Ⅲ区　１号横穴墓
玄室遺物・人骨出土状況
（奥壁・右壁沿）

永昌寺の谷遺跡
Ⅲ区　１号横穴墓
玄室遺物・人骨出土状況
（奥壁・左壁沿）

永昌寺の谷遺跡
Ⅲ区　１号横穴墓
玄室棺台（東から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅲ区　１号横穴墓
玄室棺台（北から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅲ区　１号横穴墓
玄室棺台（北東から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅲ区　１号横穴墓
完掘状況（東から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅲ区　１号横穴墓
完掘状況（南から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅲ区　１号横穴墓
閉塞部（南東から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅲ区　１号横穴墓
閉塞部（南東から）

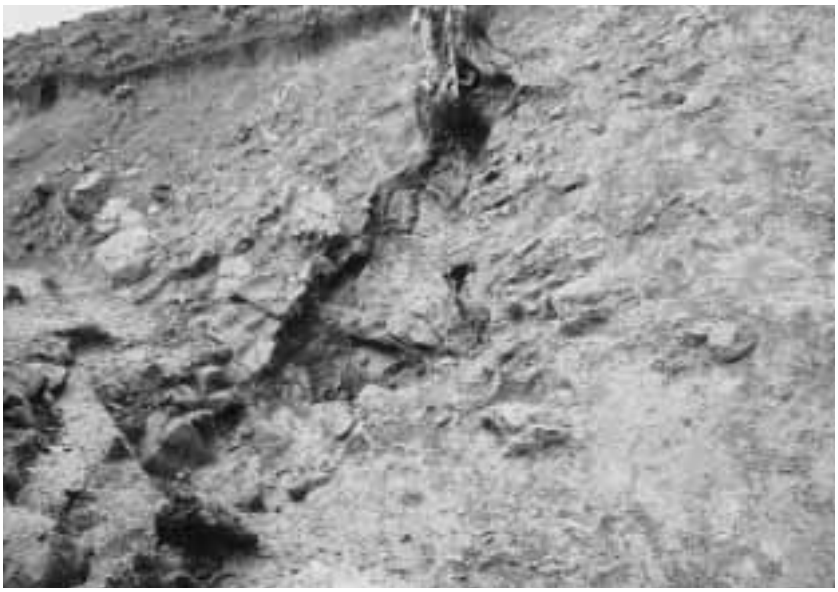
永昌寺の谷遺跡
Ⅲ区　１号横穴墓
玄室右壁・奥壁

永昌寺の谷遺跡
Ⅲ区　１号横穴墓
玄室前壁・玄門

永昌寺の谷遺跡
Ⅲ区　２号横穴墓
検出状況（東から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅲ区　２号横穴墓
縦断土層（東から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅲ区　２号横穴墓
完掘状況（北西から）



永昌寺の谷遺跡
Ⅲ区　２号横穴墓
完掘状況（東から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅲ区　２号横穴墓
完掘状況（南から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅲ区　２号横穴墓
完掘状況（南東から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅲ区　３号・４号横穴墓
検出状況（南から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅲ区　３号・４号横穴墓
墓道縦断横断土層（北東から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅲ区　３号・４号横穴墓
墓道横断土層（南東から）

永昌寺の谷遺跡
III区　３号・４号横穴墓
完掘状況（南東から）

永昌寺の谷遺跡
III区　３号・４号横穴墓
完掘状況（南から）

永昌寺の谷遺跡
III区　３号・４号横穴墓
墓道内掘立柱建物跡（南から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅲ区　３号・４号横穴墓
墓道内掘立柱建物跡
（南西から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅲ区　３号・４号横穴墓
墓道内掘立柱建物跡（西から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅲ区　３号・４号横穴墓
墓道内掘立柱建物跡
（北西から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅲ区　３号・４号横穴墓
墓道遺物出土状況（北東から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅲ区　３号横穴墓
閉塞部遺物出土状況（南から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅲ区　４号横穴墓
閉塞部遺物出土状況
（南東から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅲ区　３号横穴墓
縦断土層（南から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅲ区　３号横穴墓
玄室内調査前状況（南東から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅲ区　３号横穴墓
玄室調査前状況
（人骨、北東から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅲ区　３号横穴墓
玄室調査前状況
（遺物、南東から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅲ区　３号横穴墓
玄室内縦断土層
（南東から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅲ区　３号横穴墓
玄室人骨出土状況
（北東から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅲ区　３号横穴墓
玄室遺物出土状況（南東から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅲ区　３号横穴墓
閉塞部（南から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅲ区　３号横穴墓
閉塞部（東から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅲ区　３号横穴墓
閉塞部（南東から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅲ区　３号横穴墓
玄室奥壁（南東から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅲ区　３号横穴墓
玄室前壁（北西から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅲ区　４号横穴墓
縦断土層（南から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅲ区　４号横穴墓
閉塞部遺物出土状況
（南東から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅲ区　４号横穴墓
玄室調査前状況（南東から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅲ区　４号横穴墓
玄室内縦断土層

永昌寺の谷遺跡
Ⅲ区　４号横穴墓
玄室遺物出土状況（北東から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅲ区　４号横穴墓
玄室遺物出土状況（東から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅲ区　４号横穴墓
閉塞部（南から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅲ区　４号横穴墓
閉塞部（南東から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅲ区　４号横穴墓
閉塞部（東から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅲ区　４号横穴墓
閉塞部（南東から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅲ区　４号横穴墓
玄室奥壁（南東から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅲ区　４号横穴墓
玄室前壁・玄門（北から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅲ区　５号横穴墓・SK01
検出状況（南から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅲ区　５号横穴墓
縦・横断土層（東から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅲ区　５号横穴墓
墓道横断土層（南東から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅲ区　５号横穴墓
遺物出土状況（南東から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅲ区　５号横穴墓
遺物出土状況（南から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅲ区　５号横穴墓
閉塞石検出状況（南東から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅲ区　５号横穴墓
閉塞石検出状況（南西から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅲ区　５号横穴墓
完掘状況（南東から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅲ区　５号横穴墓
完掘状況（南から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅲ区　５号横穴墓
閉塞部（南東から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅲ区　５号横穴墓
玄室奥壁（北東から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅲ区　５号横穴墓
玄室前壁・玄門（北西から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅲ区　５号横穴墓
玄門右壁（北西から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅲ区　SK01
検出状況（南東から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅲ区　SK01
完掘状況（南東から）

永昌寺の谷遺跡
III区　SK02
検出状況（南から）

永昌寺の谷遺跡
III区　SK02
完掘状況（南西から）

永昌寺の谷遺跡
III区　５号横穴墓
SK01、02　調査風景

永昌寺の谷遺跡
Ⅲ区　古墳群
空撮（南西から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅲ区　古墳群
（南西から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅲ区　古墳群
２号墳（南西から）

永昌寺の谷遺跡
IV区　１号墳
第１主体部　検出状況
（北東から）

永昌寺の谷遺跡
IV区　１号墳
第１主体部　石材検出状況
（北東から）

永昌寺の谷遺跡
IV区　１号墳
第１主体部　鉄剣出土状況
（西から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅳ区　１号墳
第２主体部（南西から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅳ区　１号墳
第３主体部検出状況（北から）

永昌寺の谷遺跡
Ⅳ区　１号墳
第３主体部　東西セクション
土層（南東から）

永昌寺の谷遺跡
IV区　１号墳
第３主体部　南北セクション
土層北半（南西から）

永昌寺の谷遺跡
IV区　１号墳
第３主体部　南北セクション
土層南半（北東から）

永昌寺の谷遺跡
IV区　１号墳
第３主体部土器出土状況
（南東から）

永昌寺の谷遺跡
IV区　２号墳
墳丘検出状況（北から）

永昌寺の谷遺跡
IV区　２号墳
墳丘盛土断面（北東から）

永昌寺の谷遺跡
IV区　３号墳
完掘状況（南から）

永昌寺の谷遺跡
IV区　３号墳
周溝断面（南から）

永昌寺の谷遺跡
IV区　４号墳
検出状況（北から）

永昌寺の谷遺跡
IV区　５号墳
主体部遺物出土状況
（北東から）

永昌寺の谷遺跡
IV区　５号墳
主体部須恵器出土状況
（東から）

永昌寺の谷遺跡
IV区　５号墳
主体部鉄鏃出土状況（東から）

永昌寺の谷遺跡
IV区　５号墳
完掘状況（北東から）

永昌寺の谷遺跡
IV区　７号墳
第１主体部土層（北東から）

永昌寺の谷遺跡
IV区　７号墳
第１主体部（西から）

永昌寺の谷遺跡
IV区　７号墳
第２主体部（西から）

永昌寺の谷遺跡
IV区　SI01
南北ベルト土層（西から）

永昌寺の谷遺跡
IV区　SI01
床面焼土検出状況（南から）

永昌寺の谷遺跡
IV区　SI01
床面ピット、壁体溝検出状況
（南から）

永昌寺の谷遺跡
IV区　SI01
完掘状況（北西から）

永昌寺の谷遺跡
IV区　SI02
土層（北西から）

永昌寺の谷遺跡
IV区　SI02
完掘状況（南西から）

永昌寺の谷遺跡
IV区　SI03
東西ベルト土層（南から）

永昌寺の谷遺跡
IV区　SI03
完掘状況（南から）

永昌寺の谷遺跡
IV区　SI04
土層及び床面焼土検出状況

永昌寺の谷遺跡
IV区　SI04
凹石出土状況（北東から）

永昌寺の谷遺跡
IV区　SI04
完掘状況（北東から）

永昌寺の谷遺跡
IV区　加工段１
SB01（南から）

永昌寺の谷遺跡
IV区　加工段１
方形溝状遺構（北西から）

永昌寺の谷遺跡
IV区　加工段１
方形溝状遺構（南東から）

永昌寺の谷遺跡
IV区　加工段１
方形溝状遺構東辺土層
（南西から）

永昌寺の谷遺跡
IV区　加工段２
（北西から）

永昌寺の谷遺跡
IV区　加工段２
壁面土器出土状況（北東から）

永昌寺の谷遺跡
IV区　加工段３
（北から）

永昌寺の谷遺跡
IV区　加工段４
（南西から）

永昌寺の谷遺跡
IV区　加工段５
（北西から）

永昌寺の谷遺跡
IV区　加工段６
（南から）

永昌寺の谷遺跡
IV区　加工段７
（北から）

永昌寺の谷遺跡
IV区　加工段８
（北東から）

永昌寺の谷遺跡
IV区　SB02
（東から）

永昌寺の谷遺跡
IV区　土壙墓群
（南から）

永昌寺の谷遺跡
IV区　土壙墓群
SK01（東から）

永昌寺の谷遺跡
IV区　土壙墓群
SK02（北から）

永昌寺の谷遺跡
IV区　土壙墓群
SK02土器出土状況（北から）

永昌寺の谷遺跡
IV区　土壙墓群
SK03・SK04（西から）

永昌寺の谷遺跡
IV区　土壙墓群
SK05（北から）

永昌寺の谷遺跡
IV区　土壙墓群
SK06（北から）

永昌寺の谷遺跡
IV区　土壙墓群
SK07（北東から）

永昌寺の谷遺跡
IV区　SK03
土器出土状況

永昌寺の谷遺跡
IV区　SK03
弥生土器底部出土状況

永昌寺の谷遺跡
IV区　SK03
完掘状況

永昌寺の谷遺跡
IV区　SK04（西から）

高倉遺跡
調査前遠景（南から）

高倉遺跡
間歩状遺構（北東から）

高倉遺跡
間歩状遺構
南半部（南西から）

高倉遺跡
間歩状遺構　ドーム状空間
（南西から）

高倉遺跡
間歩状遺構　ドーム状空間
（北西から）

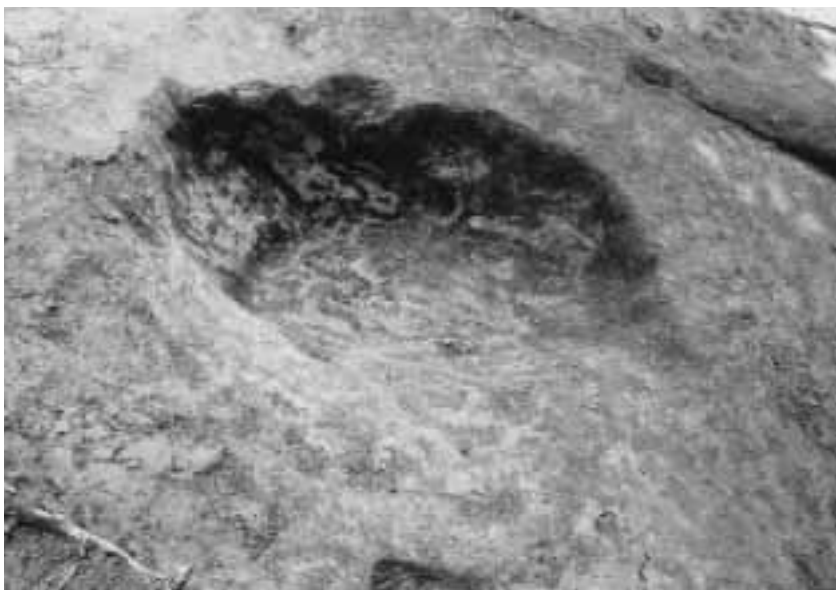
高倉遺跡
調査風景（南西から）

高倉遺跡

SK01検出状況（南から）

高倉遺跡

SK01土層断面（南から）



高倉遺跡

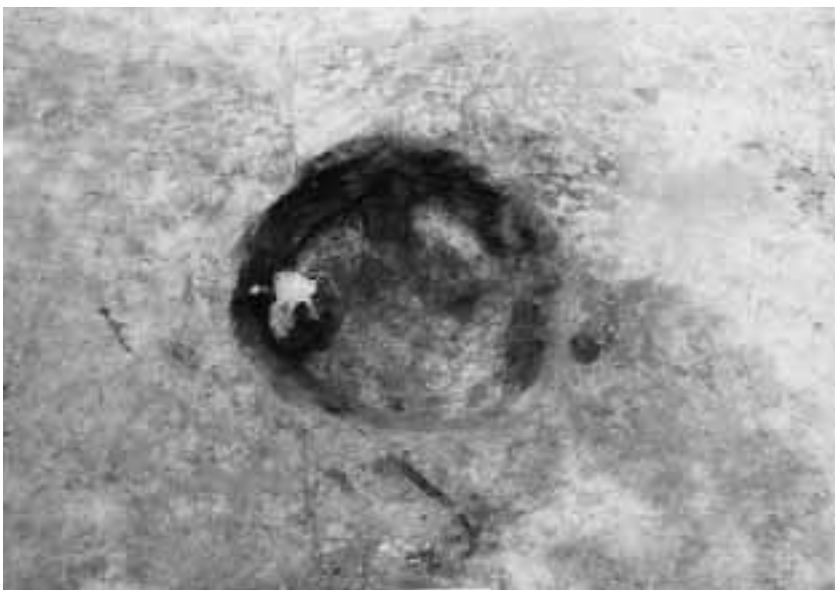
SK01完掘状況（北から）

高倉遺跡

SK02検出状況（南西から）

高倉遺跡

SK02土層断面（南東から）



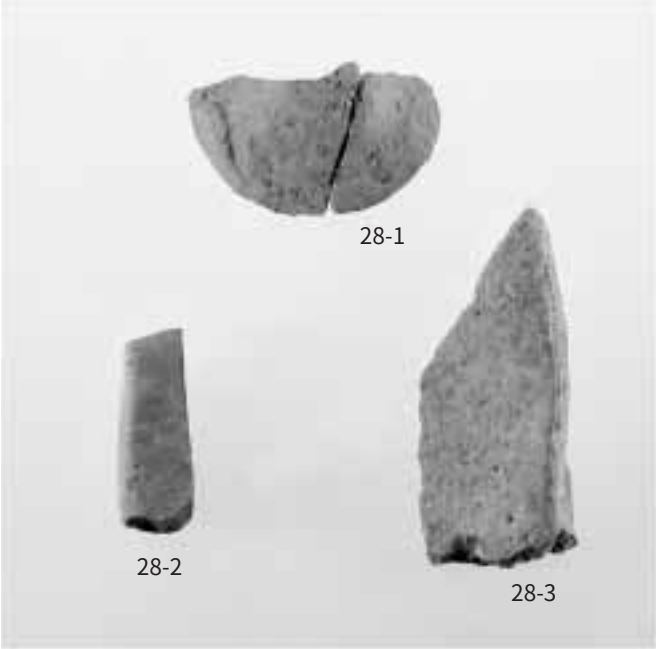
高倉遺跡

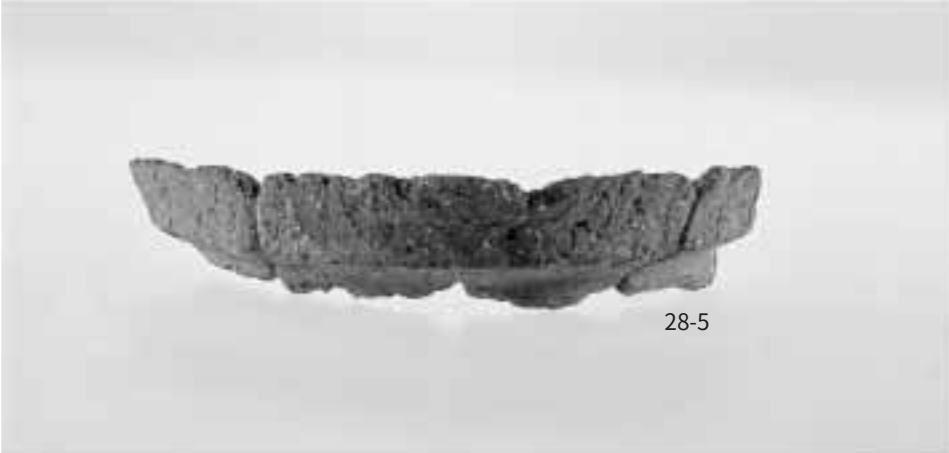
SK02完掘状況（南西から）

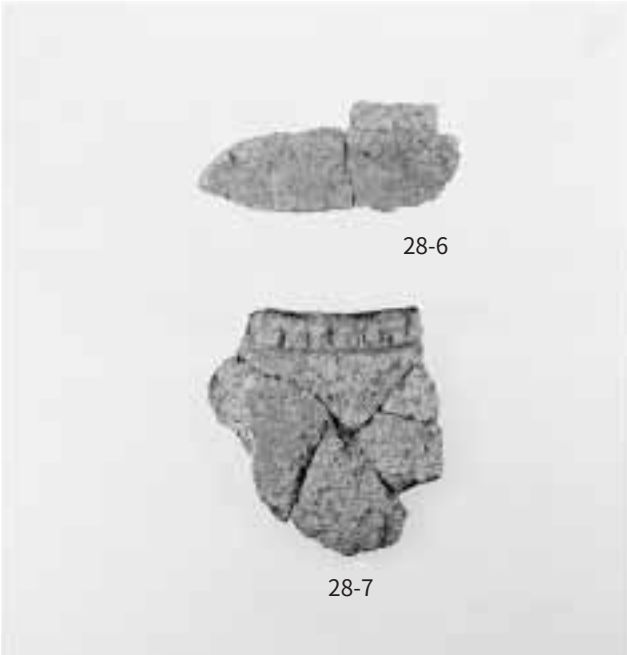
高倉遺跡
SK03土層断面（西から）

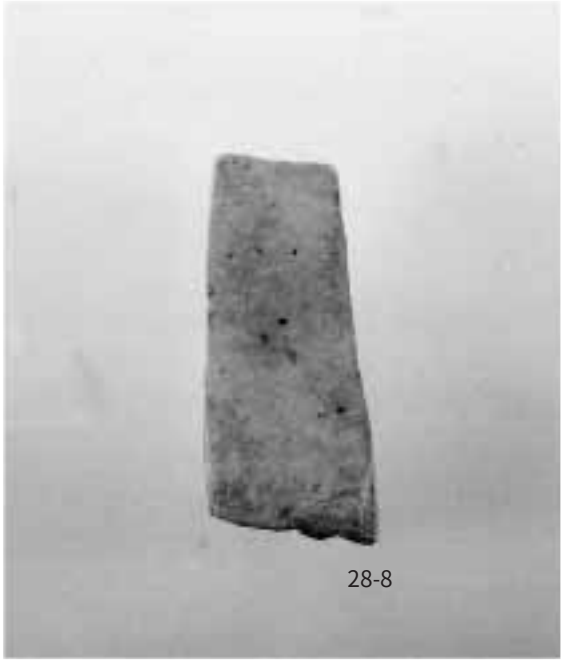
高倉遺跡
SK03土層断面（西から）

高倉遺跡
SK03完掘状況（北から）

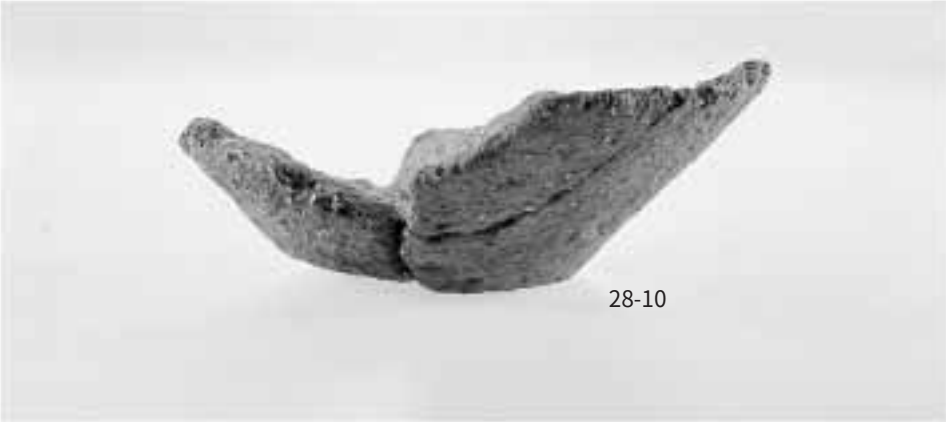


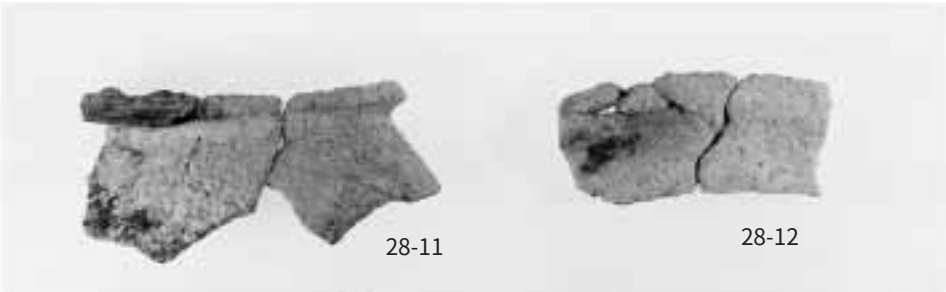






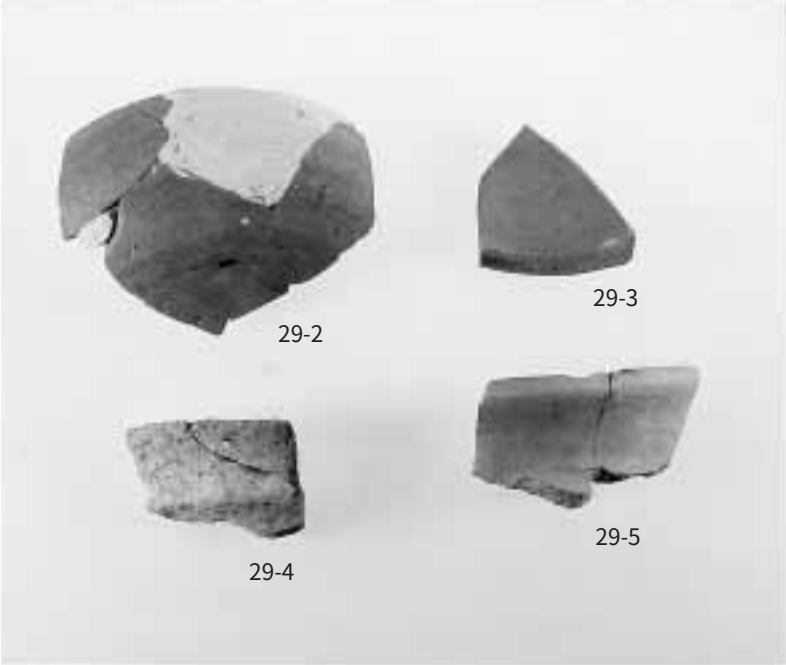
Ⅰ区出土遺物





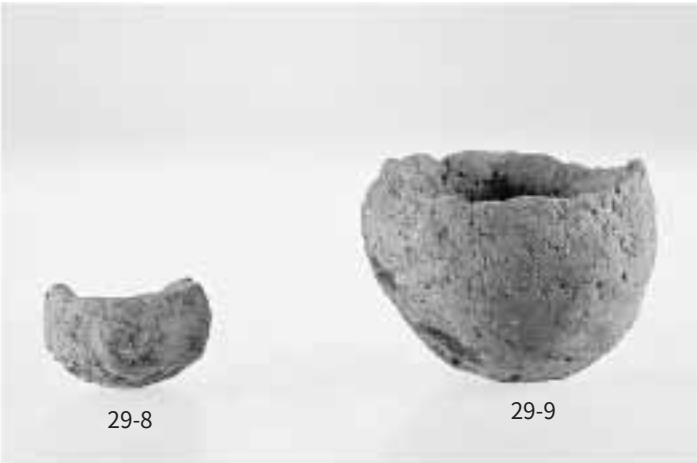
Ⅰ区出土遺物

29-1


29-2
29-3
29-4
29-5

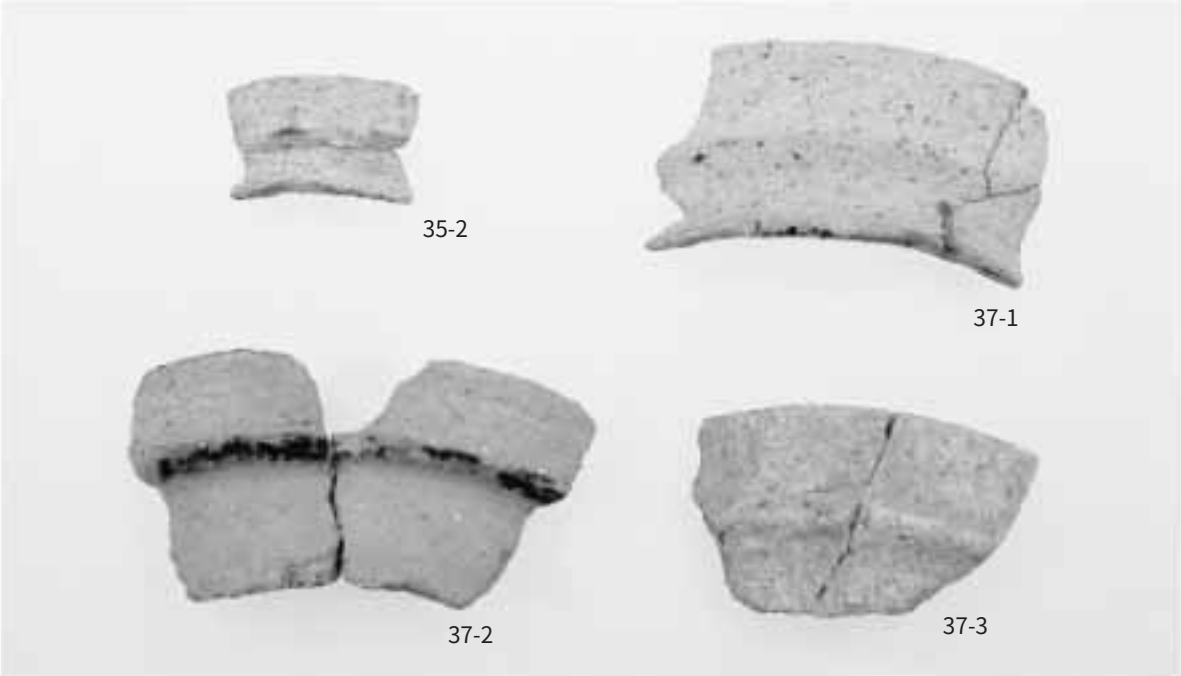
29-6

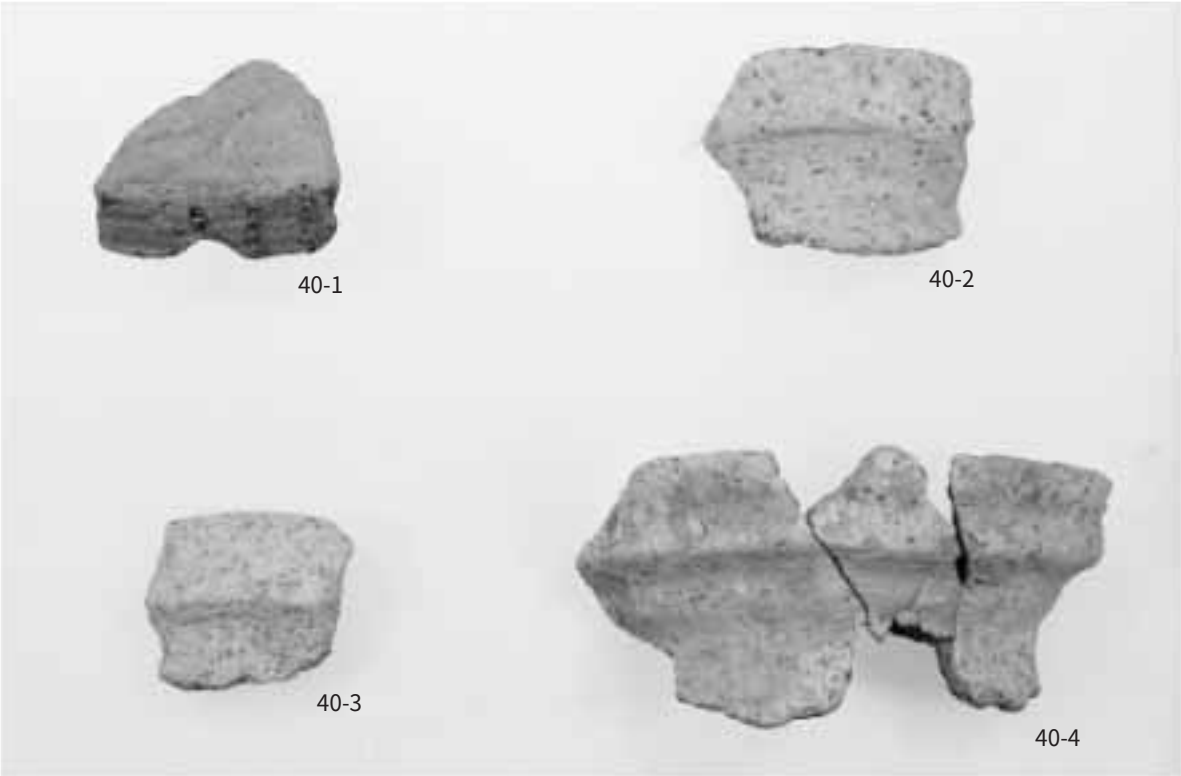
29-7


29-8
29-9

29-10

Ⅰ区出土遺物





Ⅱ区上SI01・02、Ⅱ区SI03出土遺物

41-1

41-1

41-2

41-3

41-4

41-5

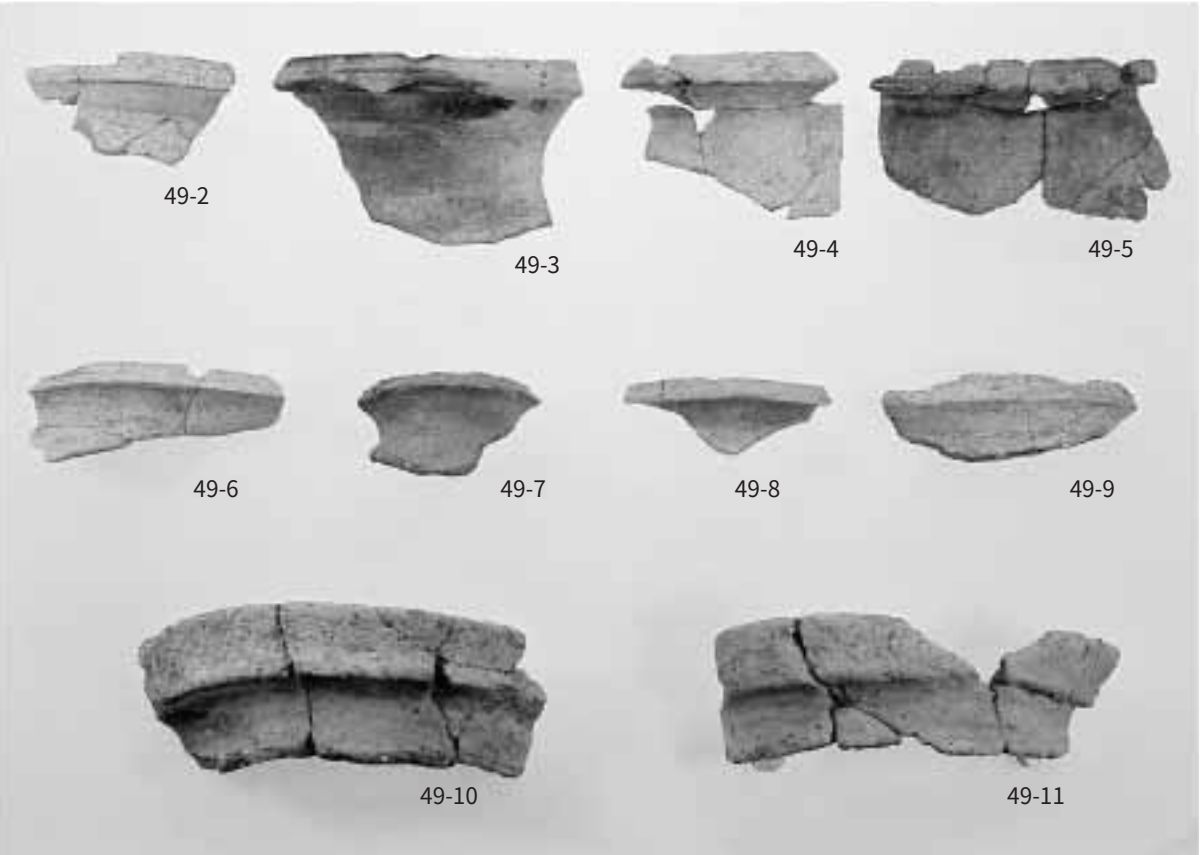
41-6

41-7

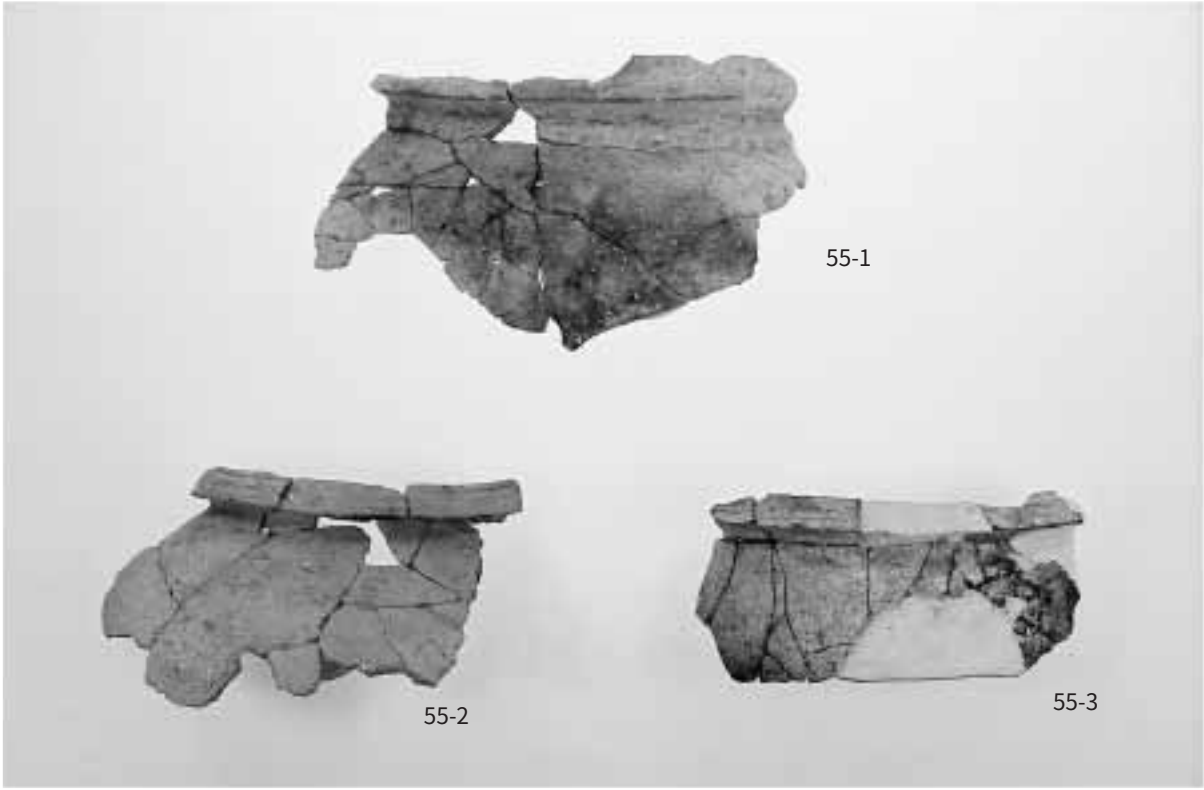
41-8

II区SI04出土遺物

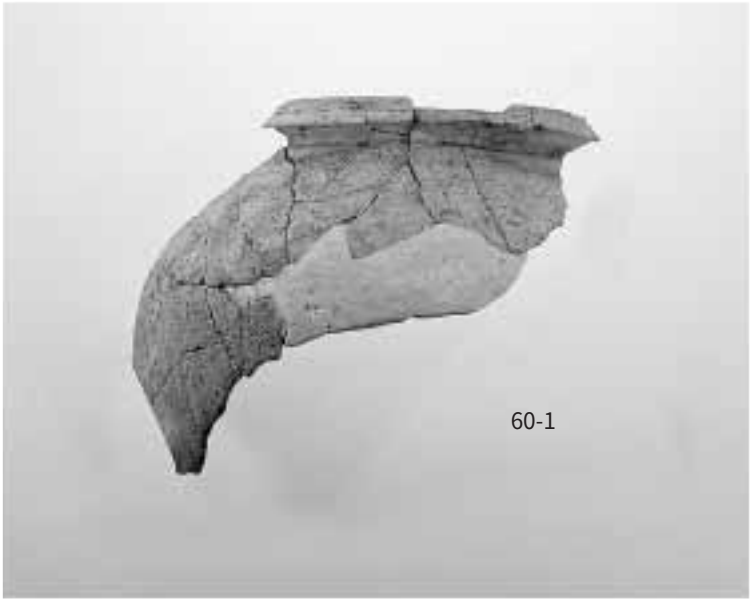
II区SI05・06出土遺物



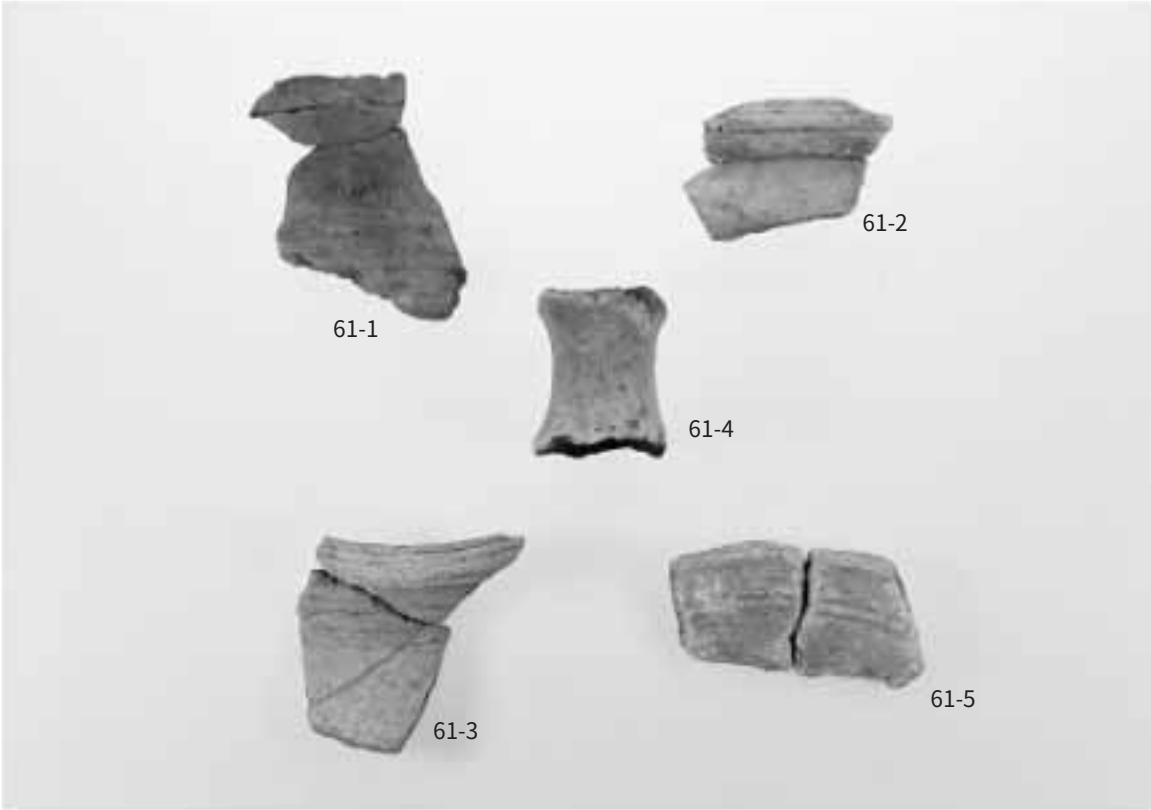
II区加工段４出土遺物



II区上遺構外出土遺物



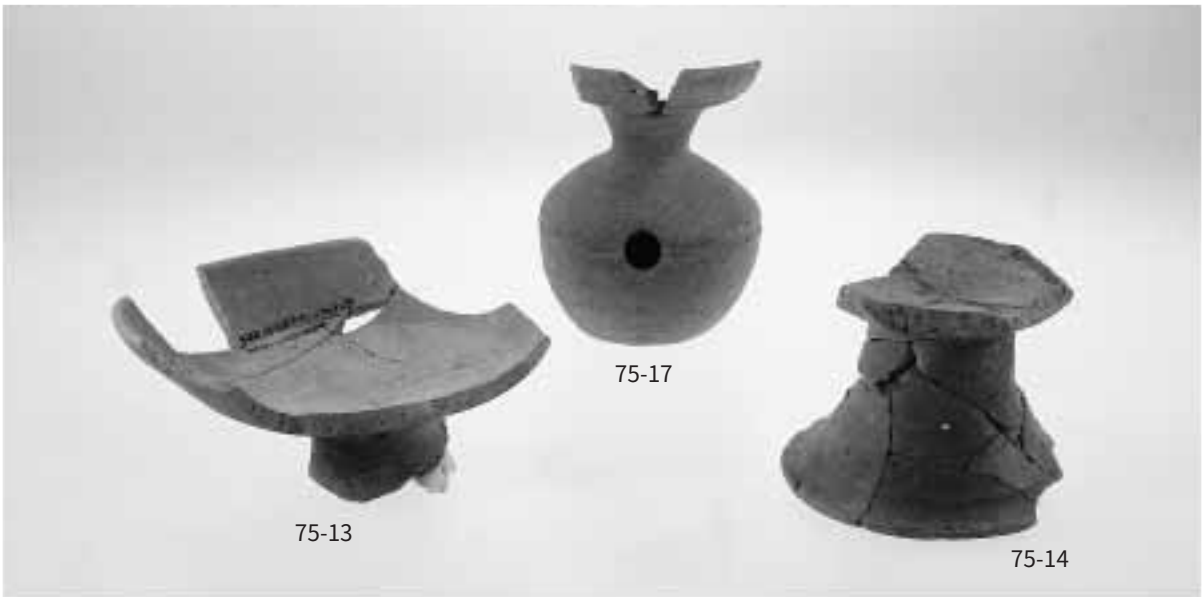
SI08出土遺物



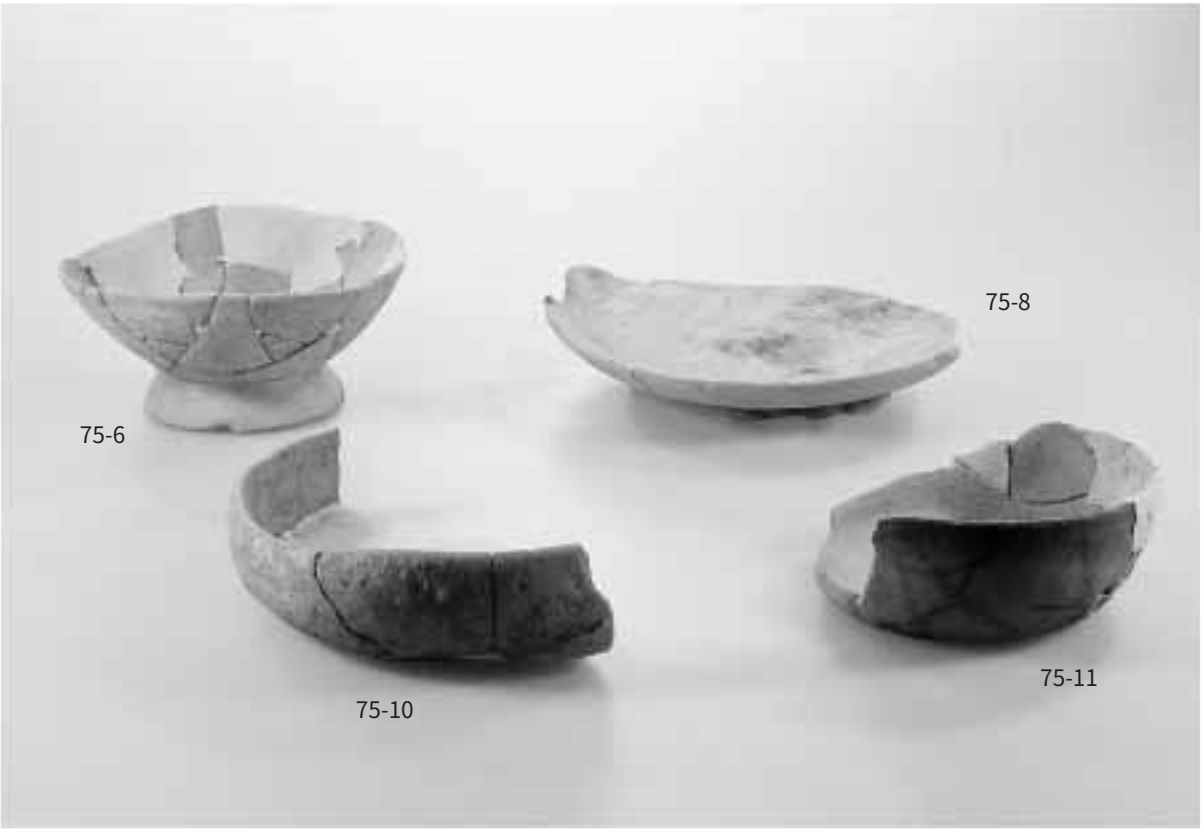
II区下SI08周辺出土遺物

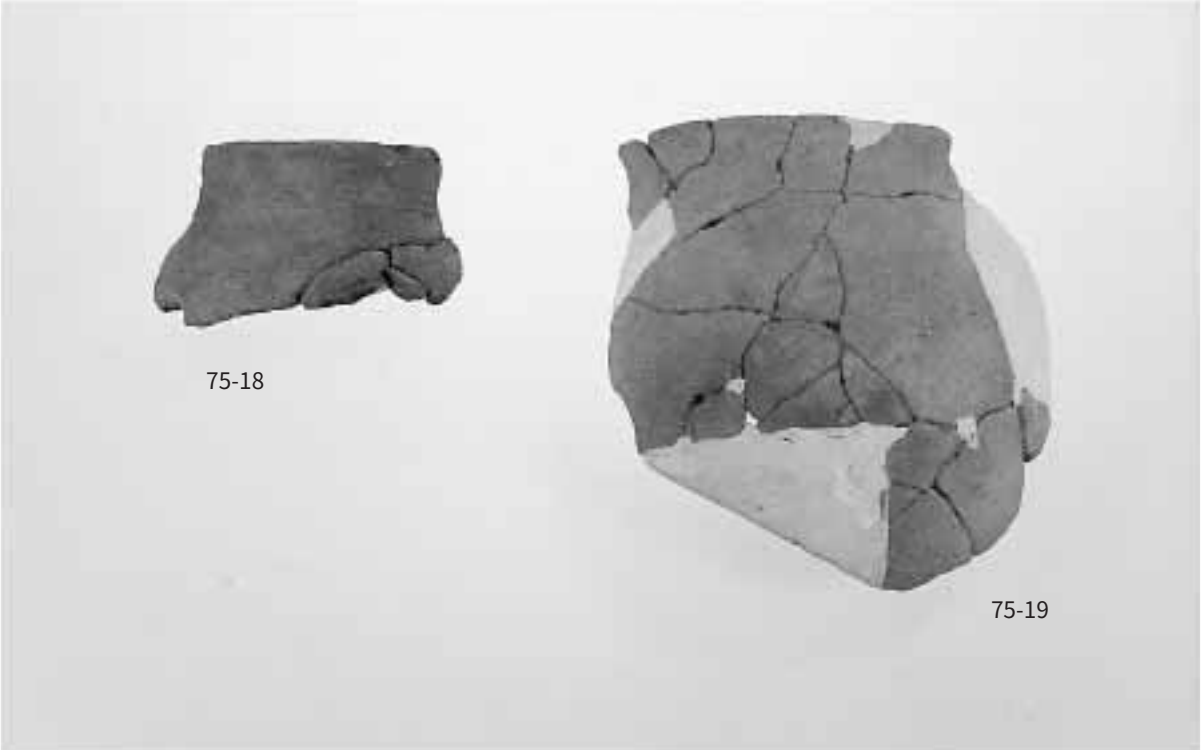
II区下第１平坦面出土遺物

75-15

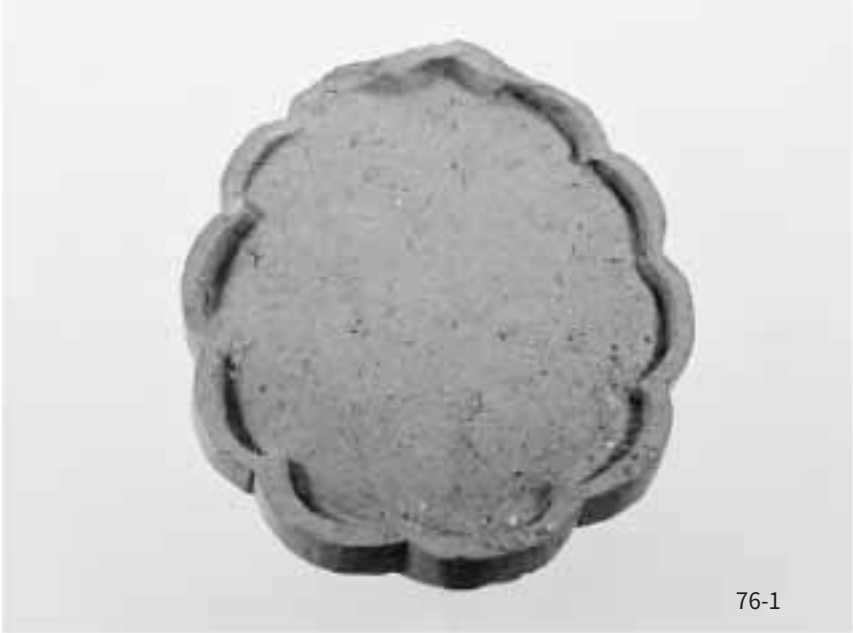


II区下第１平坦面出土遺物





II区下第１平坦面出土遺物



II区下第１平坦面出土遺物

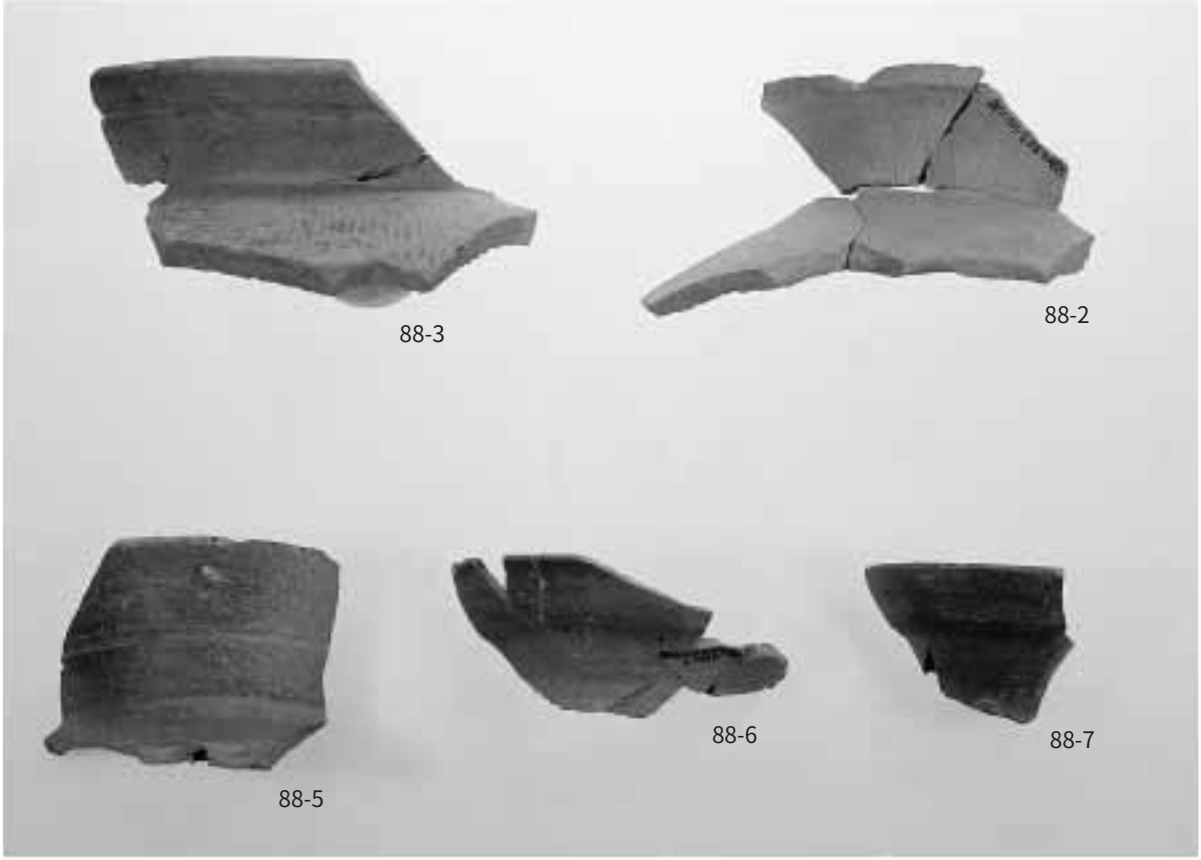
II区下第１平坦面出土遺物

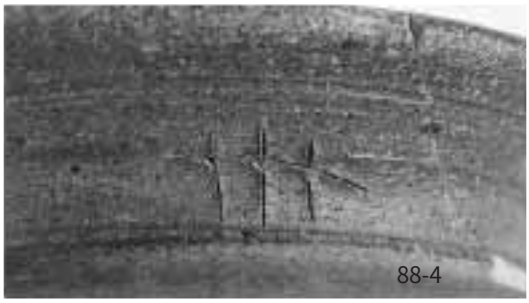
II区下第１平坦面出土遺物

II区下第４平坦面出土遺物

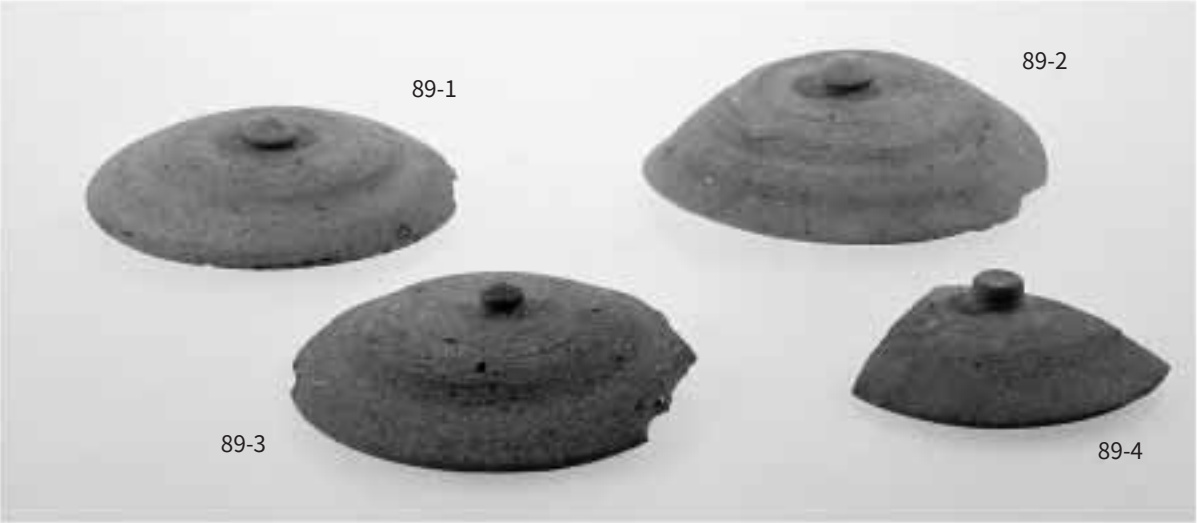
Ⅱ区下第２平坦面出土遺物

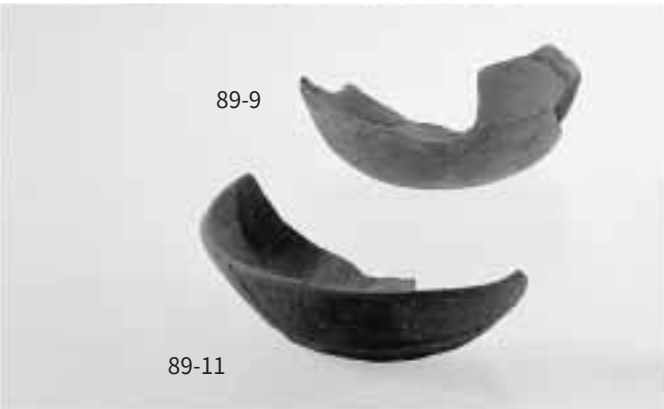
Ⅱ区下第３平坦面出土遺物

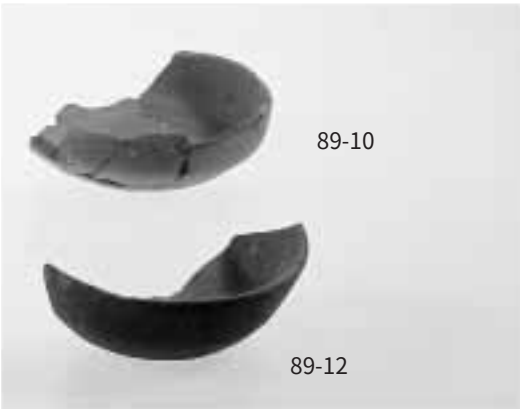




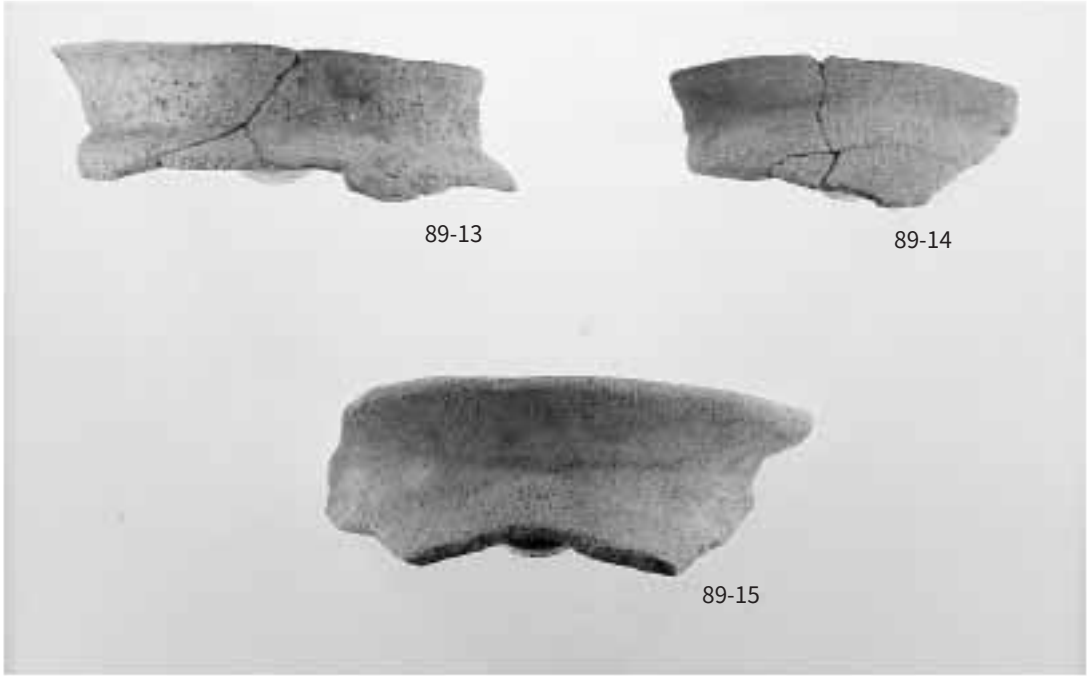
II区下第３平坦面出土遺物



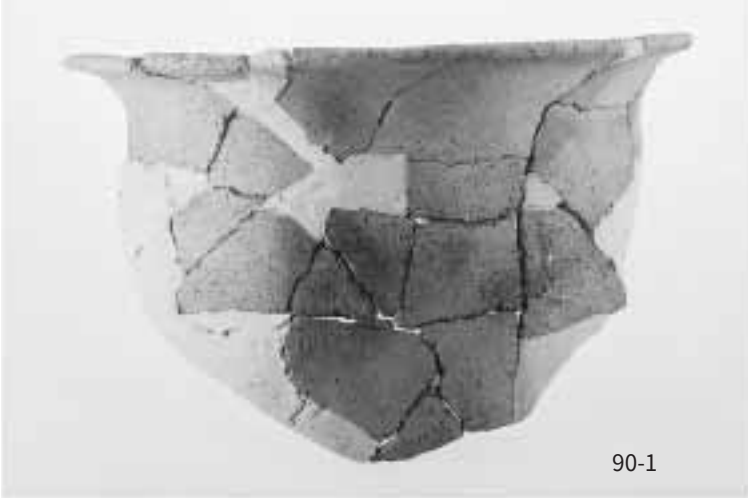


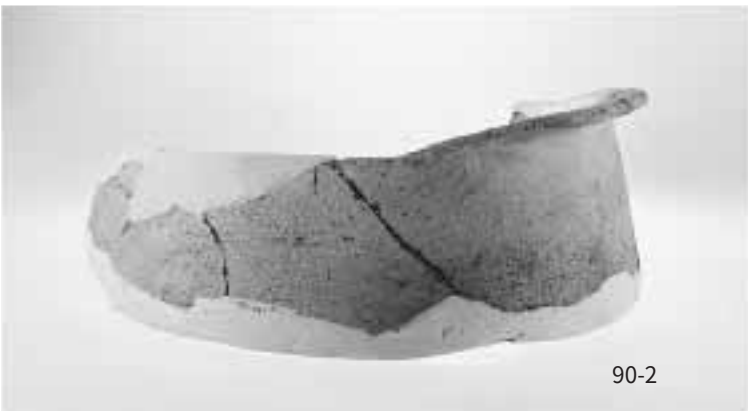


Ⅱ区下第３平坦面出土遺物

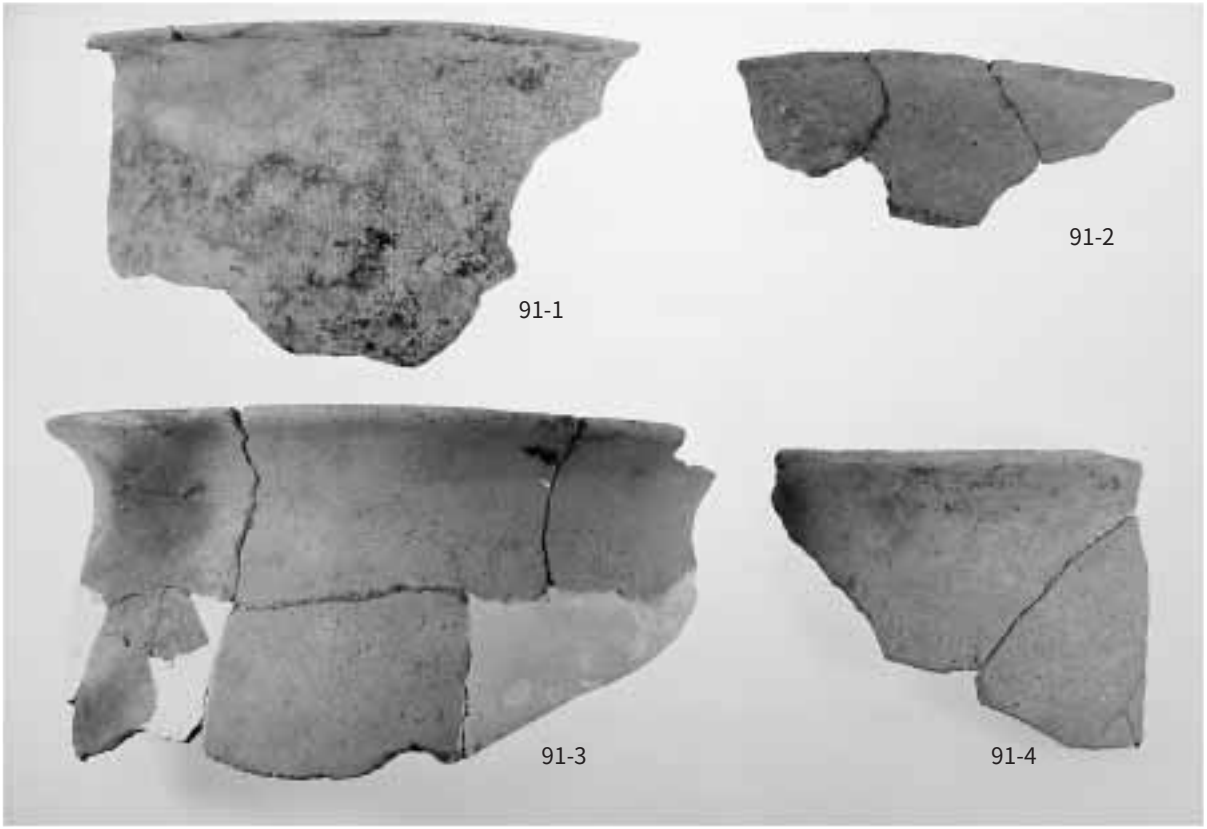


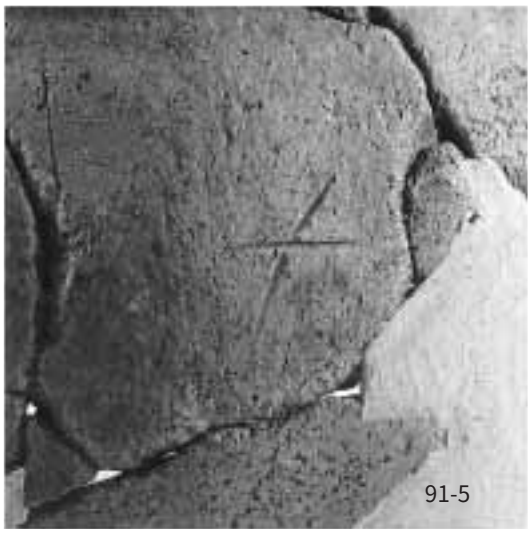
II区下第３平坦面出土遺物



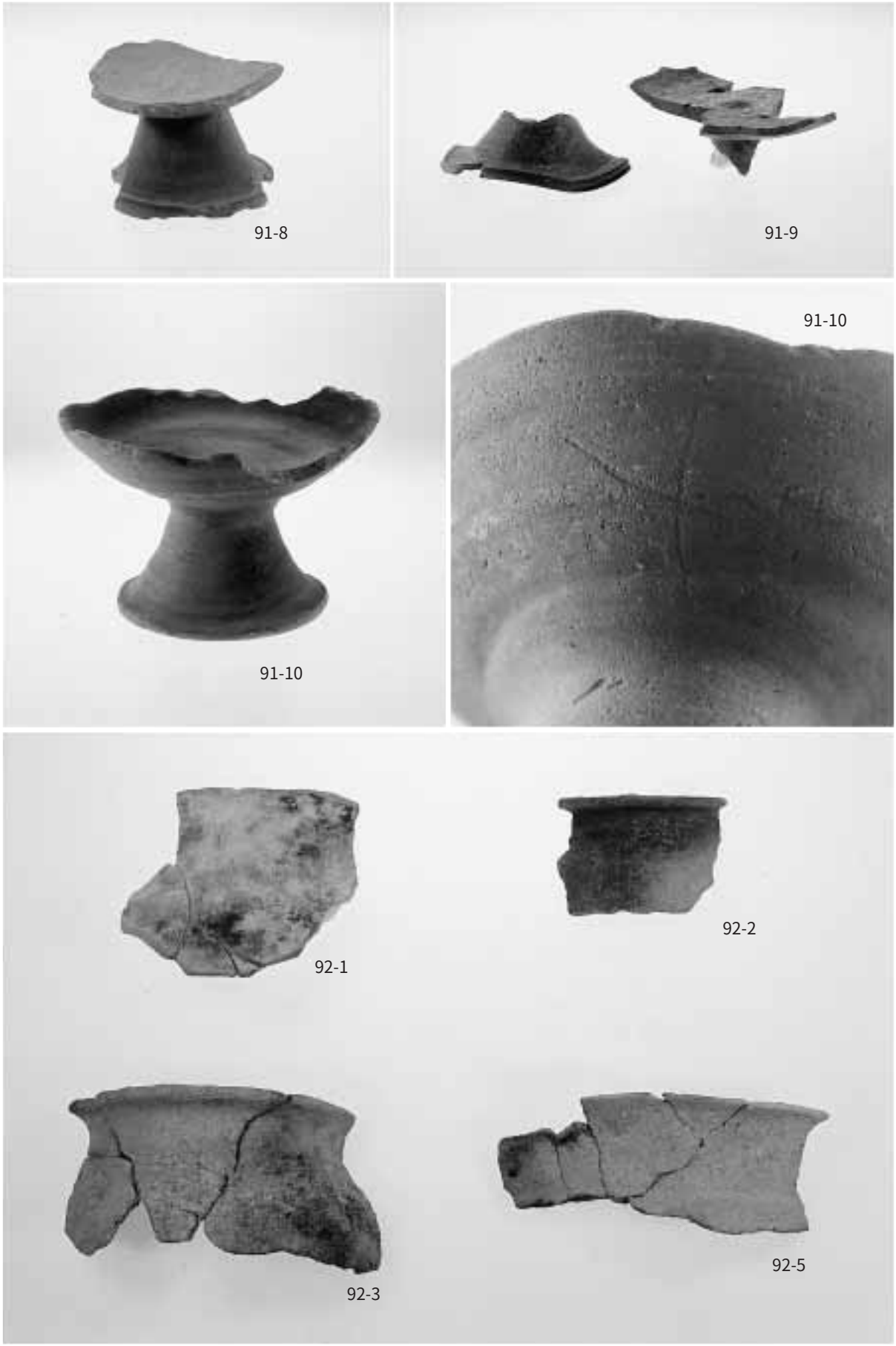


II区下第３平坦面出土遺物



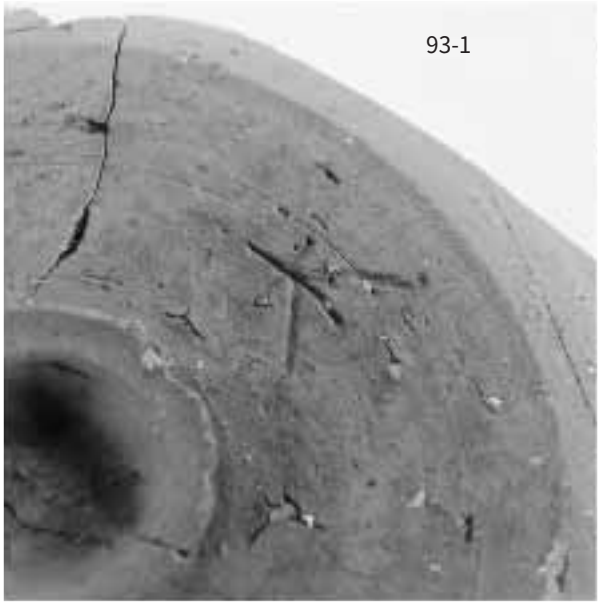


II区下第３平坦面出土遺物

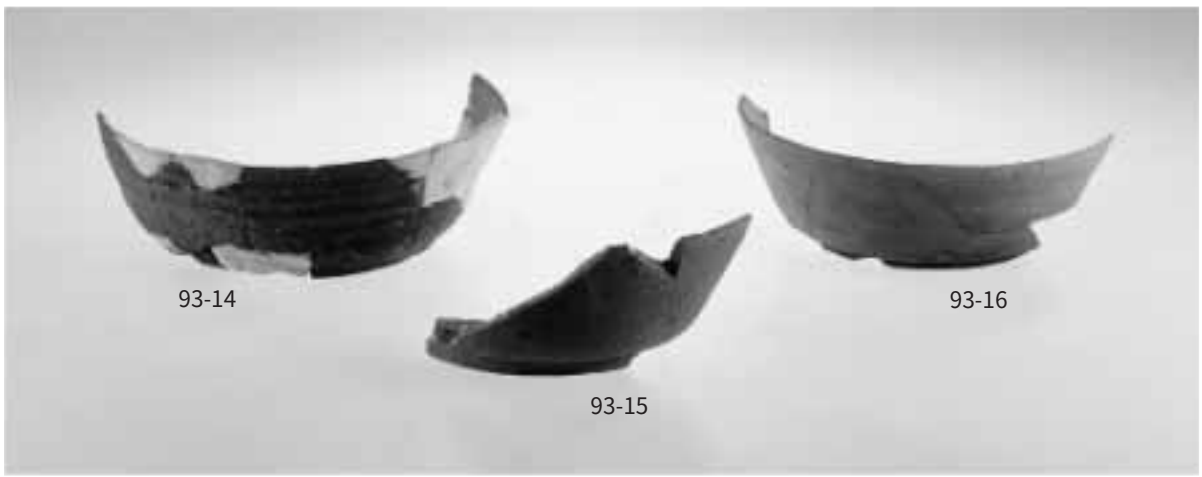


Ⅱ区下第３平坦面出土遺物

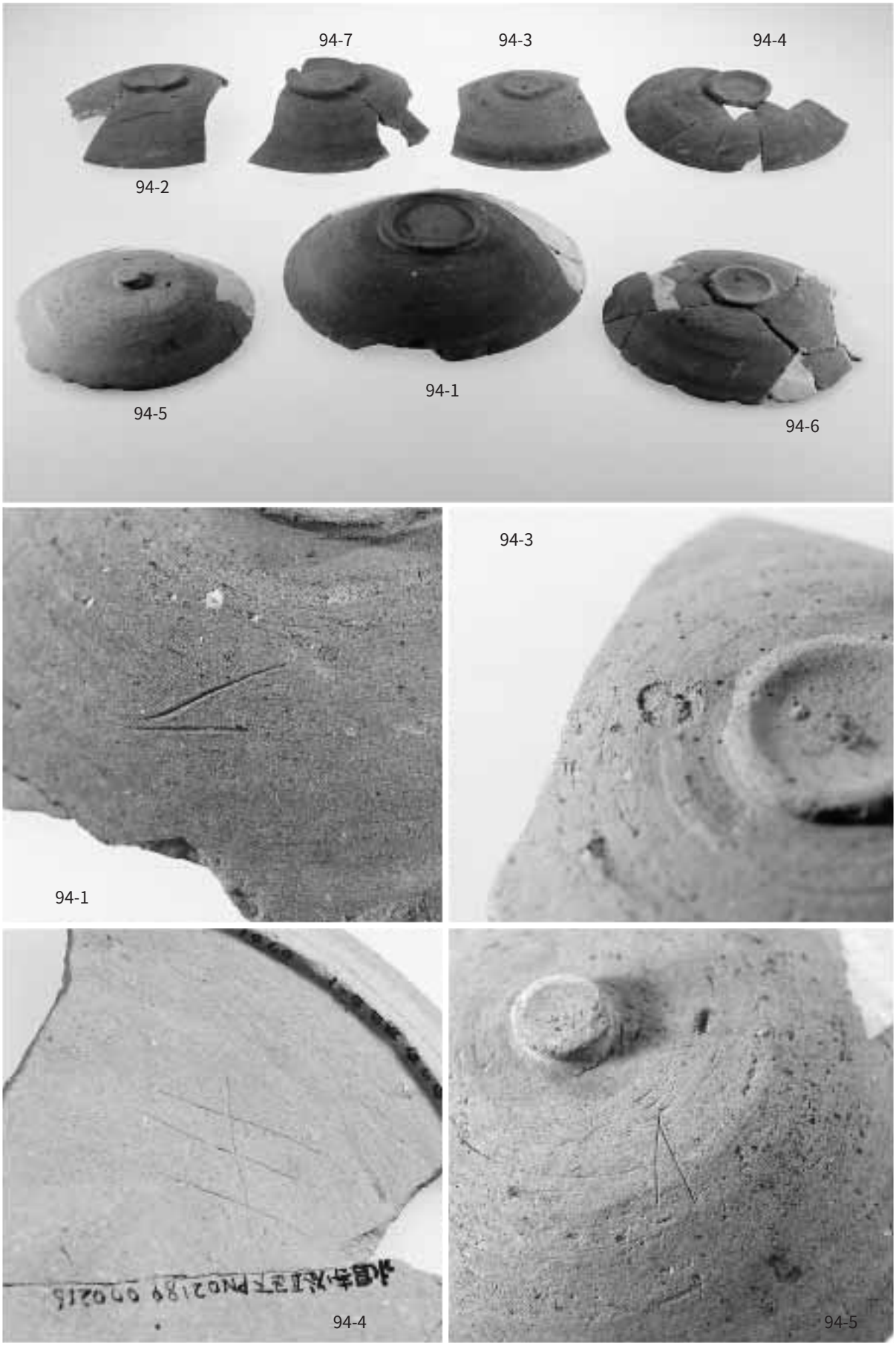
II区下第３平坦面出土遺物



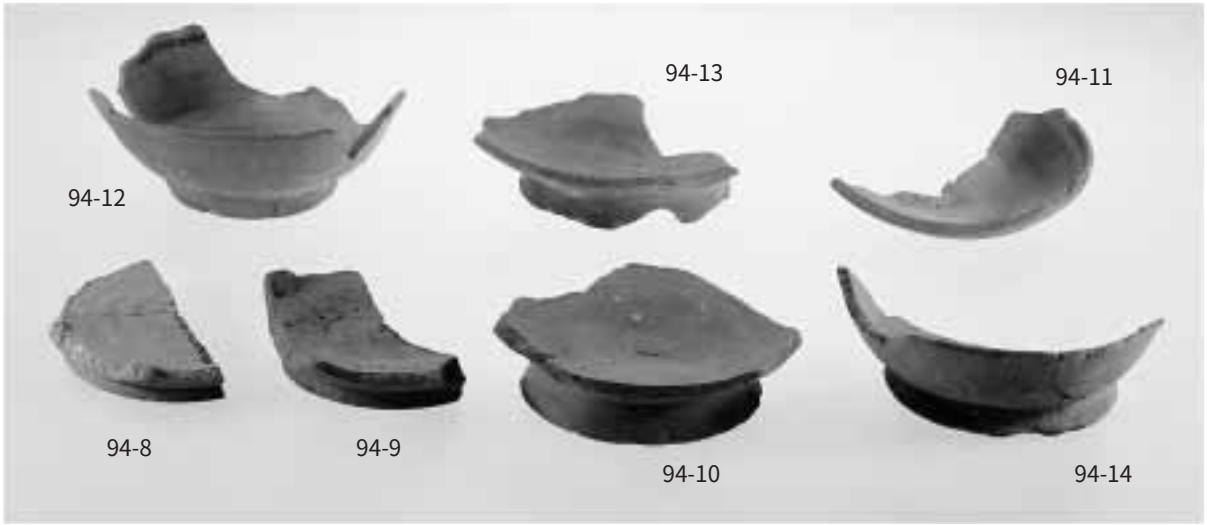
Ⅱ区下第３平坦面出土遺物

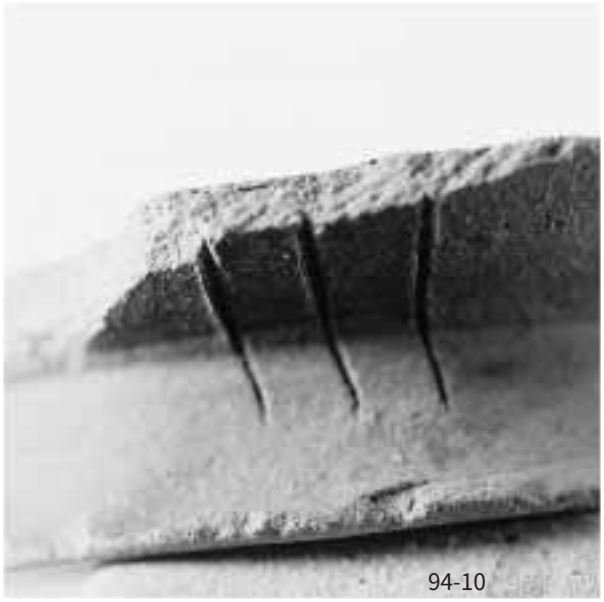


II区下第３平坦面出土遺物

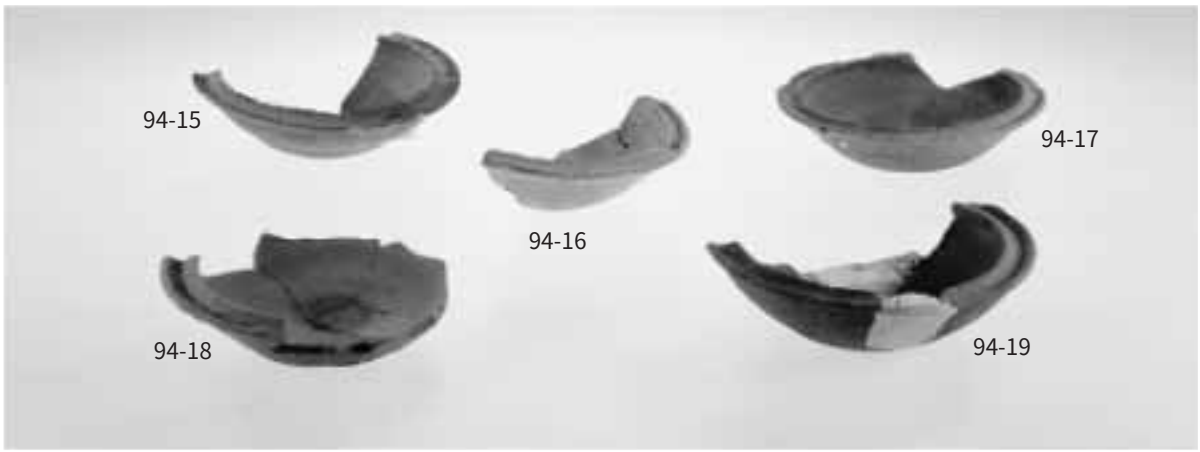


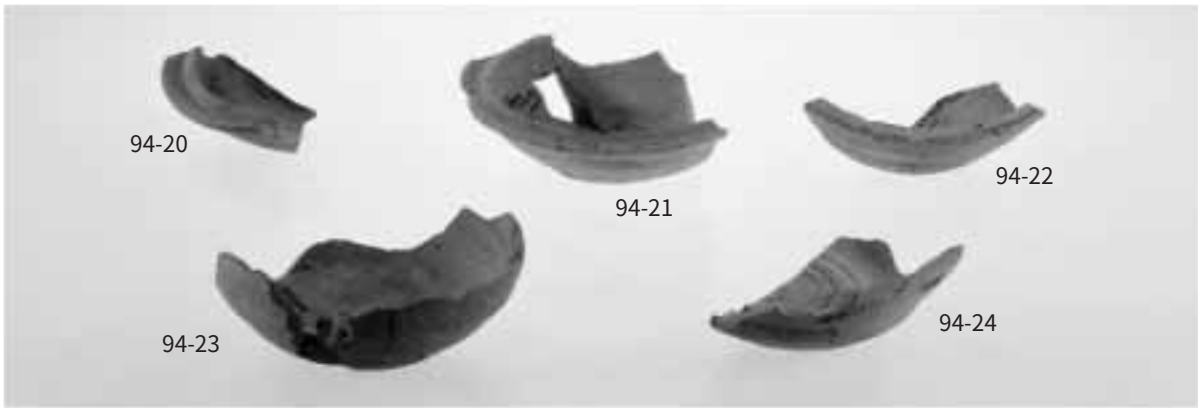
II区下第３平坦面出土遺物



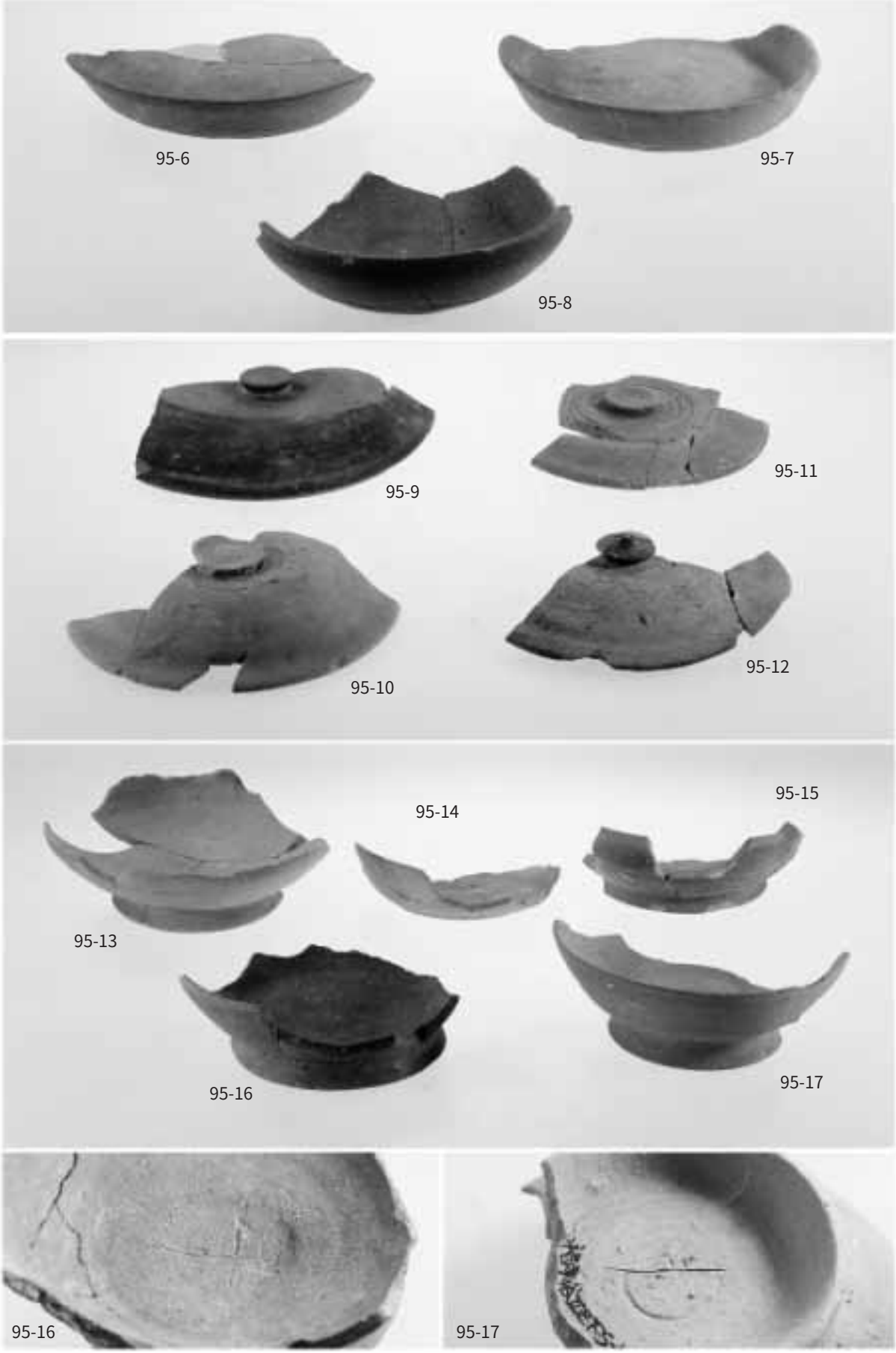


II区下第３平坦面出土遺物

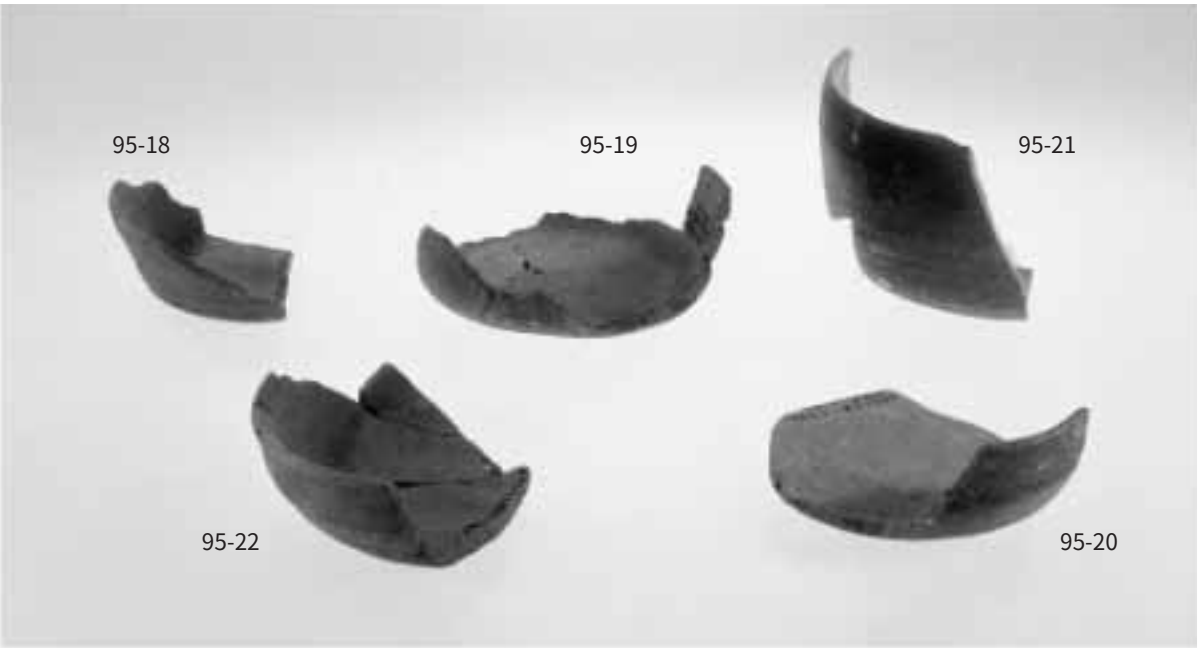


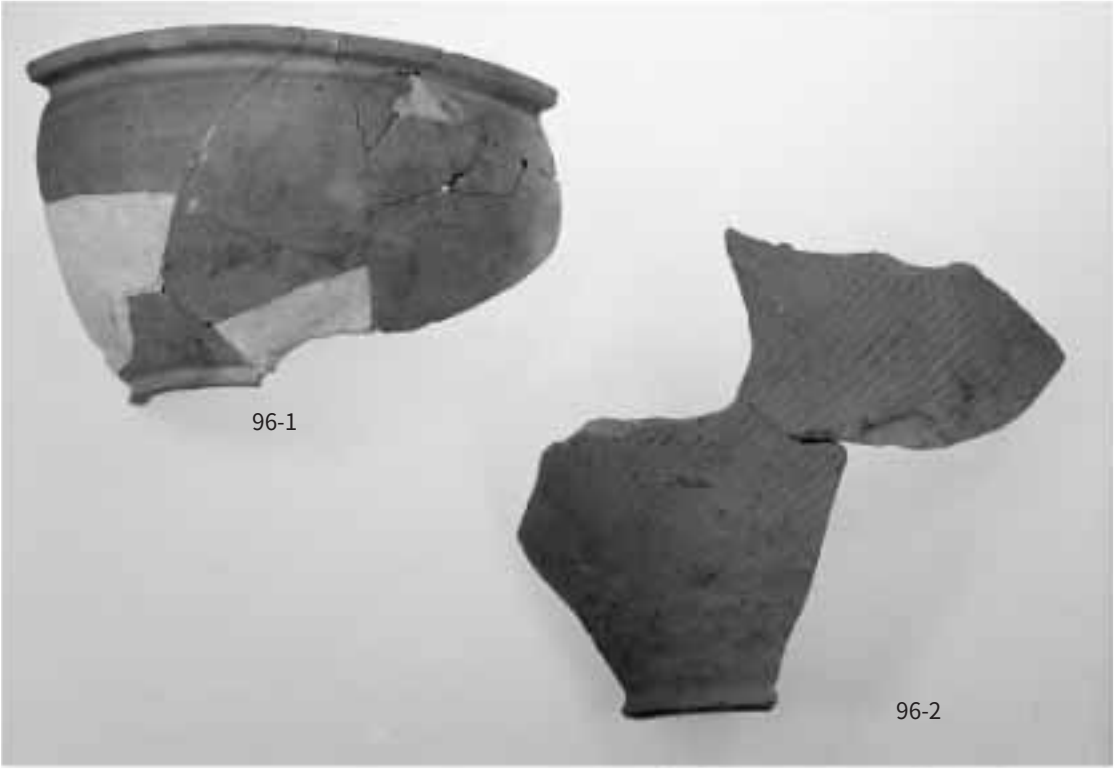


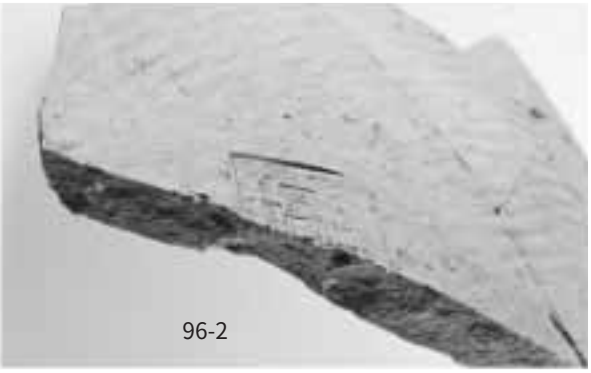
II区下第３平坦面出土遺物



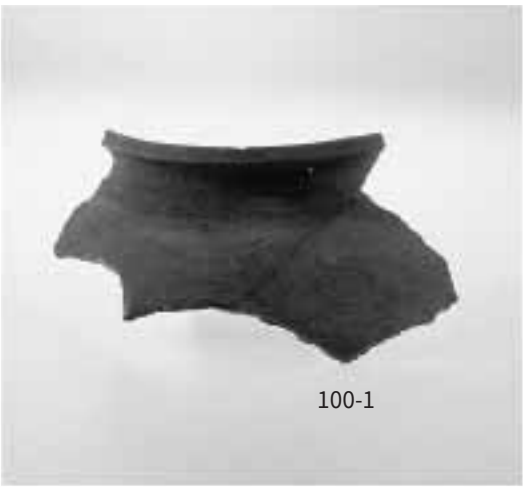
II区下第３平坦面出土遺物

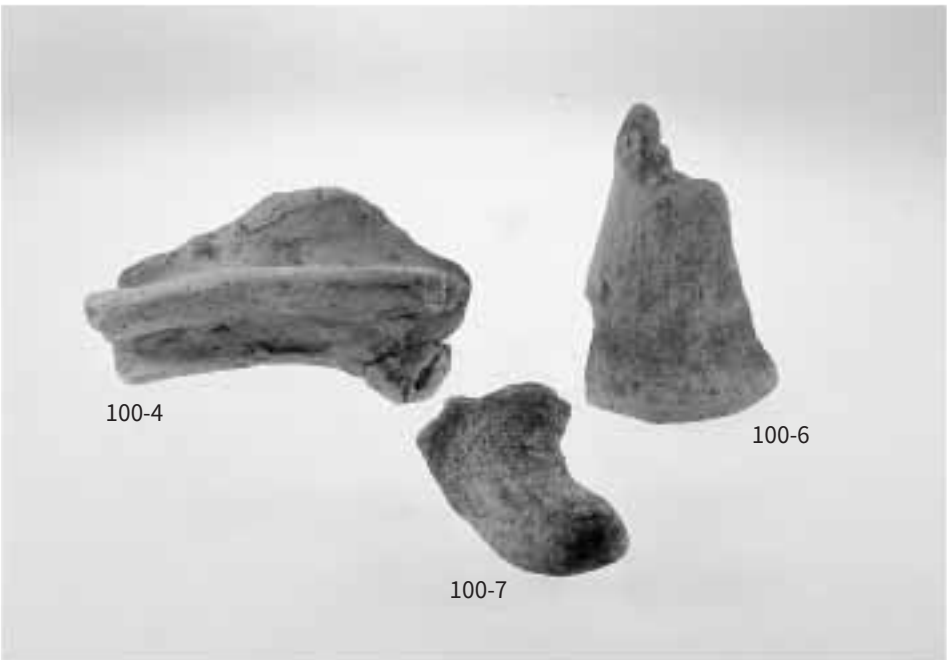






Ⅱ区下第３平坦面出土遺物





II区下第４平坦面出土遺物

106-1

106-2

106-3

106-4

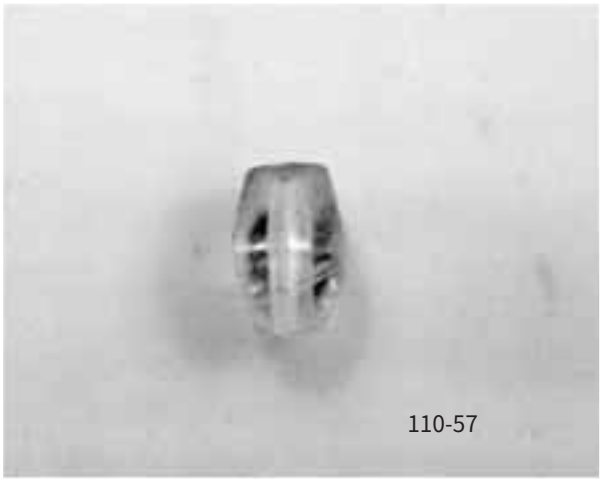
106-5

106-6

106-7

106-8

III区１号横穴墓玄室出土遺物



Ⅲ区１号横穴墓玄室出土遺物

III区１号横穴墓玄室出土遺物

108-25

108-26

108-27

108-28

108-29

108-30

108-31

108-32

108-33

108-34

108-35

109-36

109-37

109-38

109-39

Ⅲ区１号横穴墓玄室出土遺物

109-40

109-41

109-42

109-43

109-44

109-45

109-46

109-47

109-48

109-49

109-50

109-51

109-52

109-53

109-54

109-55

III区１号横穴墓玄室出土遺物

III区１号横穴墓玄室出土遺物

III区１号横穴墓墓道出土遺物

III区３号横穴墓玄室出土遺物

Ⅲ区４号横穴墓玄室出土遺物

Ⅲ区３号・４号横穴墓墓道出土遺物

117-2

117-2

117-3

117-4

117-5

117-8

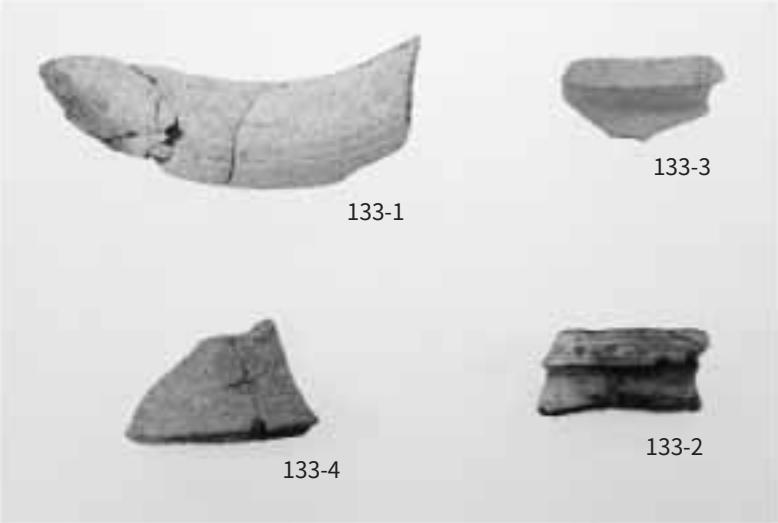
117-6

117-7

117-9

III区３号・４号横穴墓墓道出土遺物

Ⅲ区５号横穴墓玄室出土遺物



Ⅲ区古墳群出土遺物

138-1

149-1

140-1

IV区出土遺物

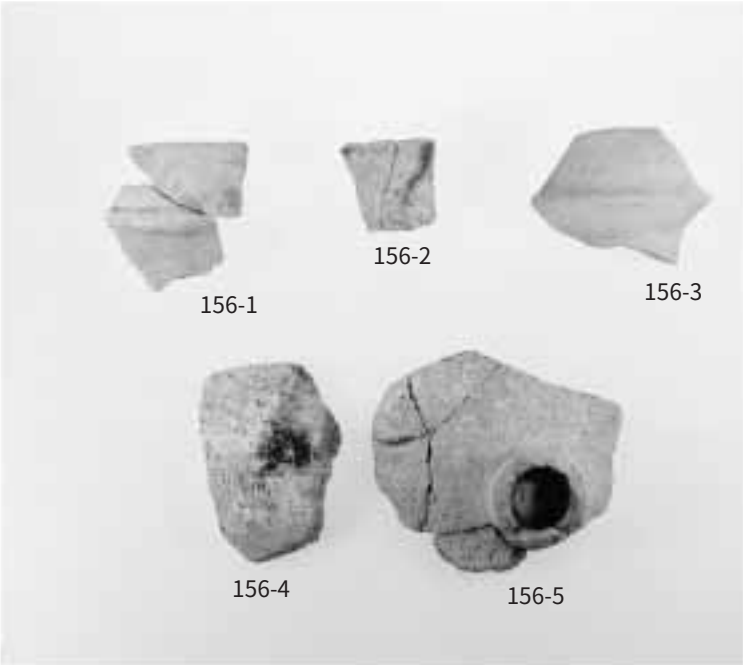
150-3

150-4

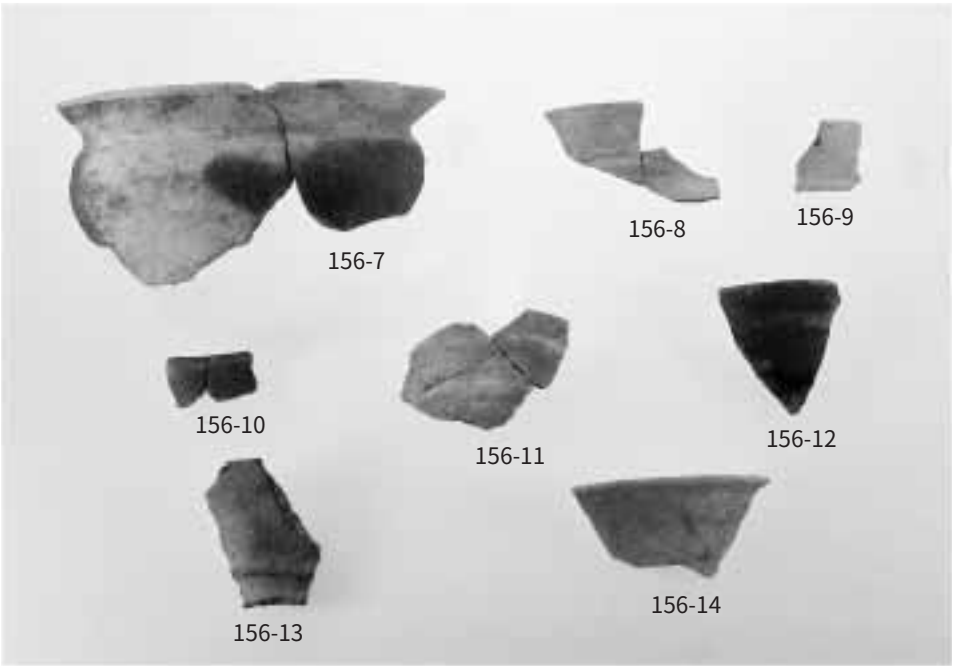
150-5

150-6

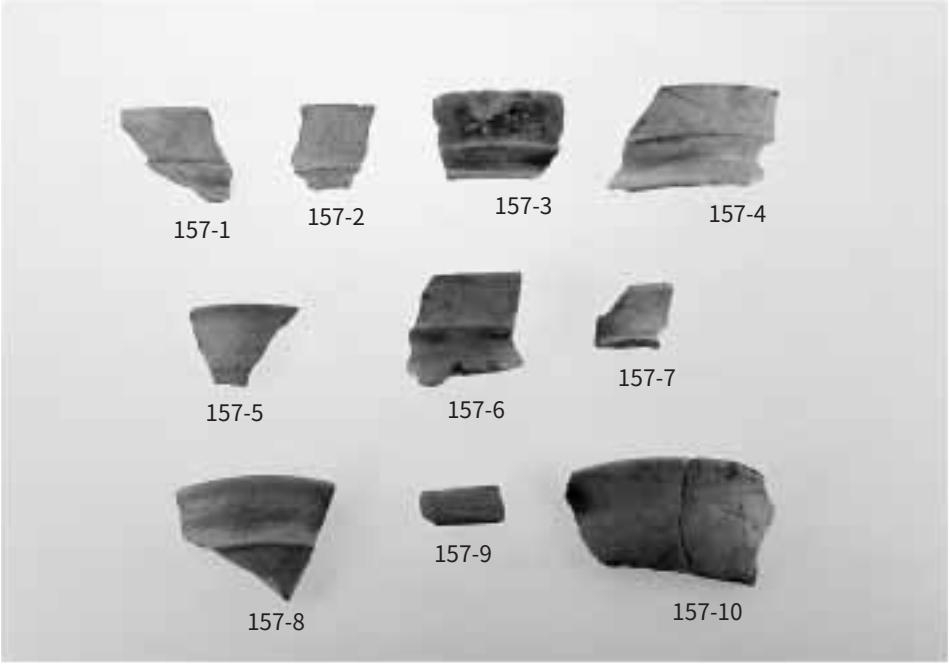
Ⅳ区出土遺物


156-1
156-2
156-3
156-4
156-5

156-6


156-7
156-8
156-9
156-10
156-11
156-12
156-13
156-14

IV区出土遺物


157-1
157-2
157-3
157-4
157-5
157-6
157-7
157-8
157-9
157-10

157-11
157-12
157-13

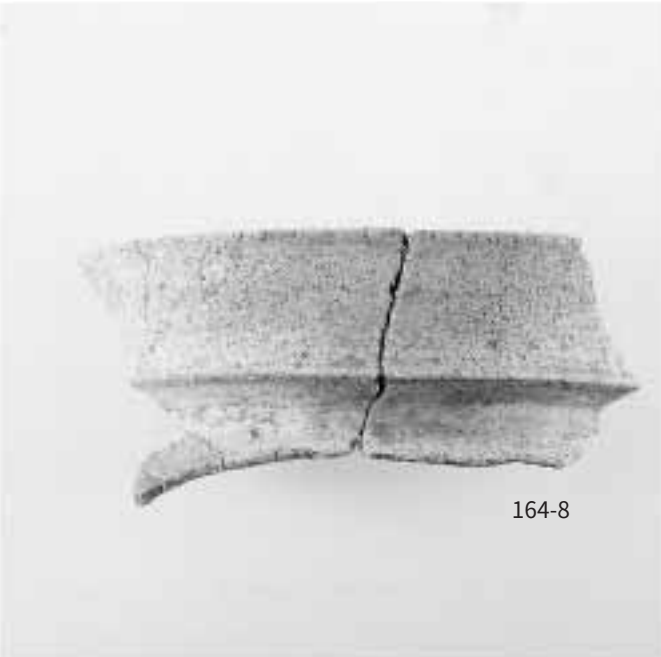
157-14

Ⅳ区出土遺物

164-6

164-9

164-7

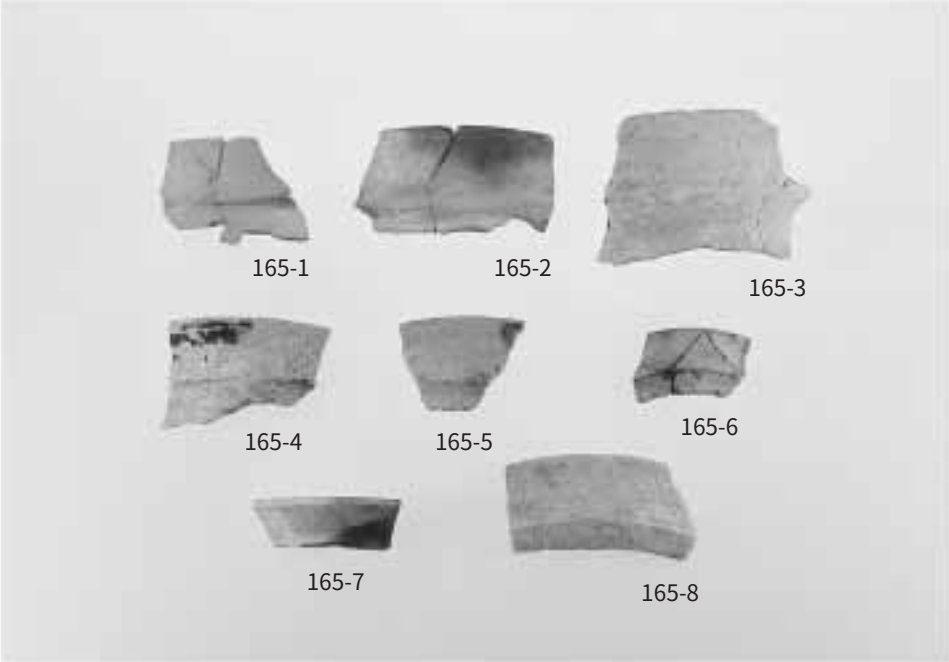


164-8

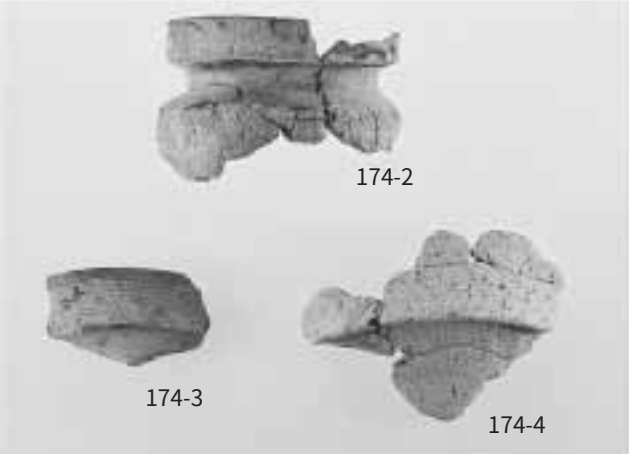
164-10

IV区出土遺物

Ⅳ区出土遺物


165-1
165-2
165-3
165-4
165-5
165-6
165-7
165-8

174-1

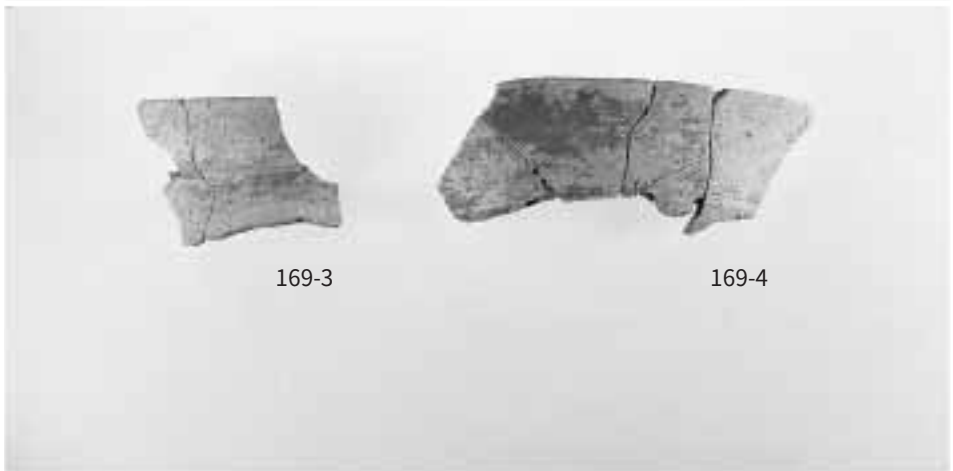

174-2
174-3
174-4

169-1

IV区出土遺物

169-1

169-2



169-3　169-4

Ⅳ区出土遺物

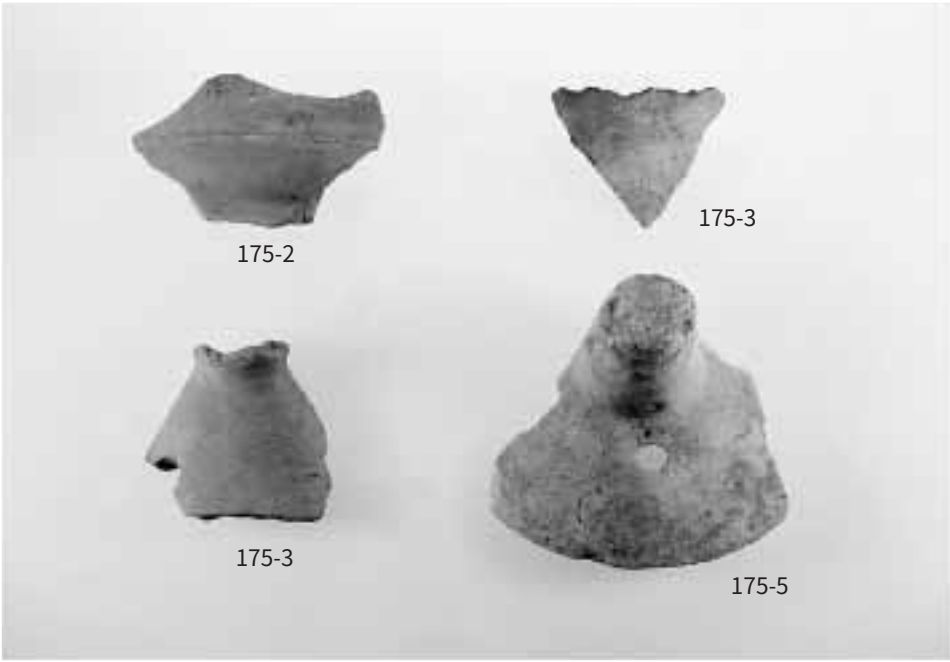
175-7

175-8

175-9

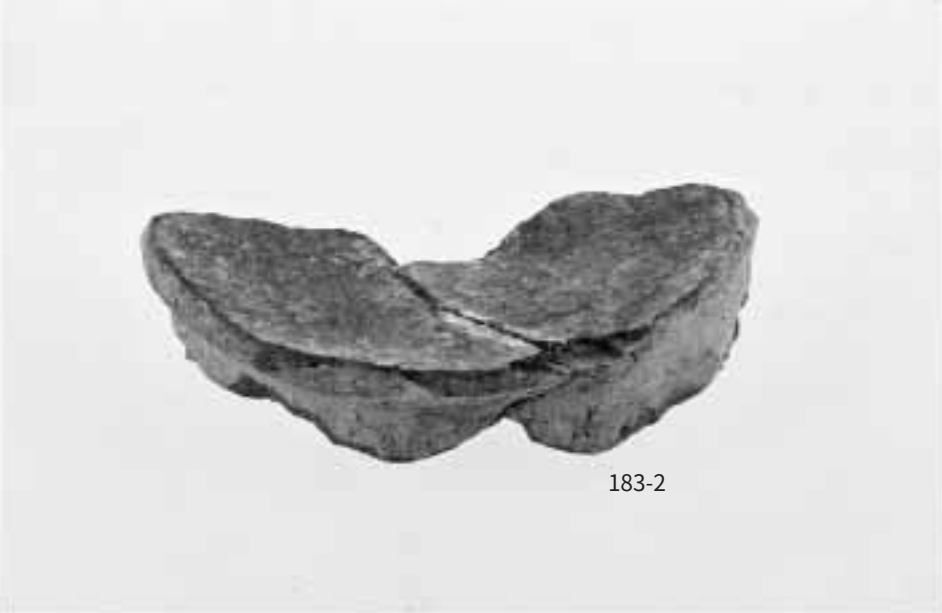
175-10

IV区出土遺物



Ⅳ区出土遺物

183-1



183-2

183-3

高倉遺跡出土遺物

報告書抄録

ふりがな	えいしょうじのたにいせき たかくらいせき
書名	永昌寺の谷遺跡 高倉遺跡
副書名	広域営農団地農道整備事業(安能地区)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	大塚 充・舟木 聡・水口 晶郎
編集機関	安来市教育委員会
所在地	〒692-0207 島根県安来市伯太町東母里580番地 TEL 0854-23-3316
発行年月日	西暦2008年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
永昌寺の谷遺跡	島根県安来市伯太町西母里	32206	B200	35°20′42″	133°16′22″	200308～200703	9,900	農道整備事業
高倉遺跡	島根県安来市伯太町西母里	32206	B202	35°20′30″	133°15′55″	200302～200307	770	農道整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
永昌寺の谷遺跡	集落跡	弥生時代	竪穴住居跡	弥生土器	弥生時代中期～後期
			掘立柱建物跡		
		飛鳥時代～平安時代	掘立柱建物跡	須恵器硯、ヘラ描き土器	
			鍛冶工房跡	椀型滓	
	墳墓	弥生時代	墳丘墓・土壙墓	弥生土器	弥生時代後期
	古墳	古墳時代	古墳	鉄剣、土師器、須恵器	古墳時代中期～後期
	横穴墓	古墳時代～飛鳥時代	横穴墓	大刀・鉄釘・須恵器	墓道から掘立柱建物跡を検出
高倉遺跡	土壙	平安時代	焼土壙	黒色土器	10世紀代？
	その他	不明	間歩状横穴遺構		

永昌寺の谷遺跡　高倉遺跡
広域営農団地農道整備事業（安能地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成20（2008）年３月発行

発　　行　　島根県松江県土整備事務所
　　安 来 市 教 育 委 員 会

印　　刷　　有限会社　太陽平版